
白蒼月紅譚～二つ月のある世界（種シリーズ?）

汐井サラサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白蒼月紅譚（二つ月のある世界（種シリーズ？））

【Nコード】

N3387L

【作者名】

汐井サラサ

【あらすじ】

異世界トリップ物です。

※ 微妙に逆ハーちっくなので女性向けだと思います。（パス請求制でR18あり）

落ちてしまった異世界に。

夜空には白い月と青い月、二つ月の浮かぶ、剣と魔法と素養の世界。

右も左も分からないおまけに言葉も通じない！ 真白が出会った

第一村人は非の打ち所がない美青年なのに、猫耳尻尾付きの変質者。しかし、他に頼る当てもなくて仕方なく頼ってみたら変な種は飲まされるし借金は背負わされる。真白のどたばた異世界生活の始まりです。

★本編完結。番外編をちよいちよい更新しています★

※ 現在大幅改稿中。話数等、ちよつとズレテル時があるかもしれませんが、ご了承ください。

第零話：登場人物紹介（前書き）

主要メンバー紹介です。

今のところ出会った順番になっています。

第零話：登場人物紹介

■ やまなし ましろ
月見里 真白…

近所の公立高校に通う二年生。世話焼きで面倒見が良いつもりだがいつも結局は周りに面倒を見てもらっているようなタイプ。

周りに敵は居ないと思っていたし友人に恵まれていたと思っていたのに予想以上に薄っぺらな関係に落ち込む。

過去に恋人の浮気現場を目撃するという事件があり、男運はなしと決定している。

■ ブラック（通称：闇猫）…

シル・メシアに落ちてきて最初にであう青年。種屋の店主。

黒目黒髪的美青年だが頭には猫耳、後ろには尻尾が付いている。

口調は丁寧だが、いつも飄々としていて気まぐれ。何を考えているのかよく分からない。

■ カナイ…

初対面時の第一印象は基本的に無愛想。地味。などが定番。

背も高く運動能力も高そうだが、実はインドア派。本に囲まれていることが多くそれだけで幸せ。

でも意外と人脈が広く、一部に熱烈的なファンもおりモテるらしい…。

図書館の薬師階級の中級階位。

■ エミル…

思わず王子様を連想させる容貌。

すらりと高い長身に長い手足、整って美しい中性的な顔に穏やかな物腰。

少々天然。頭も良く薬学には長けているものの説明が苦手で空回

りしていることが多々。

図書館、薬師階級、上級階位。

■ アルファ..

可愛らしくころころ変わる表情は見ているものを和ませる。

金髪に碧い瞳は真白に天使を連想させる。

図書館の薬師階級、初級階位に属するものの、勉強は苦手。

アウトドア関係が得意で野外活動が大好き。

カナイとは馬が合っているのかあっていないのかどうしても黙っていられず、ついつい口喧嘩に発展する傾向あり。

第一話：コスプレ好きな美青年？（1）

白い月 青い月 二つ月

自分にとって有り得ないものが、本当に有り得ないのかどうかなんて

きっと誰にも分からない。

私の目になっている世界なんて箱庭のようなものだ。

——ズザザザ……ッ

飲まれたと思ったら次は変な浮遊感に襲われて私は落ちた。

突然クリアになった視界は、目が痛くなるほどの青空を映し、次の瞬間には闇に変わった。

実際『闇』というのは間違いで、自分が木の上に落ちて、そのまま根元まで落下しているということに行き着くまでに、そう時間は掛からなかったが止まらない。

私は次々と迫ってくる葉っぱと枝の攻撃から身を護るために、きゅつと目を閉じた。

——……地面に直撃したら痛いよね。

と、どこか冷静に覚悟を決めていたが一向にその痛みは襲ってこない。

ぐんっ！ と、何かに引っかかったような振動はあったのに、痛くない。それどころか何だか暖かくて、柔らかい？ 恐る恐る目を

開けると、目の前に人の顔があつて

「ひっ！」

と、息を呑んだ。

私は、慌ててその人物を突き放したが、相手はそれを許さず、がっちりと私の肩を抱いたままだ。

「ちょ、ちょ、はな、離してくれと、たす、かる」

私の言葉に対峙した人物は、笑顔を崩さないまま首を傾げた。ややして何かに行き着いたのか、私に下を見るようにと空いた手を下へ向けた。

「っ！！」

私の両足は、所在なさげにぶらぶらと空をかいていた。

まだ地面に到着していなかったようだ。

途中の枝に腰掛けていたこの人に捕まえてもらったらしい——正確には抱きかかえられているが——自分の足場のなさに、私はさっきまで突き放そうとしていた人物に慌ててしがみ付く。

私が暴れるのをやめたのを確認してか、枝の上に腰を下ろしていたのに、その人は私を抱きかかえたまま、ひょいと枝の上に立つと猫のように身軽に地面へと飛び降りた。

くっ！　と息を呑み再び身構えた私の予想に反して、ストッと軽やかな足音と共に地面に降りるとそっと私も地面へと降ろしてくれた。

つつ……っと、慌てて距離を取ると、近過ぎて良く分からなかったが目の中の人物は黒尽くめ。

若干、見たことのないような服の感じもするけど基本的なつくりは変わらないのか、違いはよくわからない。中世的な時代感のするスーツだ。

すらりと高い長身に、しなやかな長い手足。

モデル体形な上に、顔も芸能人並みに美しく整って見える彼には、その格好も良く似合って見えるけど、私にはどうしても見逃せないものがあつた。

ゆるりと胸の前で腕を組み、私と同じように、相手を品定めするように見詰めているその人物——多分、雄だと思うけど——長めの黒髪の間に見えるのは同色の耳だ。

猫耳だ。

その背後でゆらりゆらりと揺れているのは、尻尾だ。

見た目は凄くカッコいいのに惜しい。

明らかに変質者だ。

私は、じりつと後退して逃げ出そうとしたら掴まった。しっかりと手首を掴まれて逃げられない。

「すみませんっ！落ちてきたことは謝りますから、後生ですーっ離してー」

ぶんぶんっ！と、手を振って抵抗するものの、猫だけど雄だ。

男性というべきか迷った末、か弱い女の子の腕を平気で掴んだので動物決定。雄だ。

ジタバタする私に猫耳男は何かいっているがさっぱり分からない。

まあ、にゃーにゃーいっているのではないのは分かるのだけど。何語だろう？ 普通の外国語なら、意味は分からなくても何語かくらいは分かりそうなものの、私の浅学ではさっぱり理解出来ない。というか、単に猫語は分からないということに他ならないと思う。

彼は私に全く言葉が通じていないことを、暫らく掛けて悟ったのか、ふうと嘆息して私の腕を掴んだまま歩き始めた。

「ちょ、誘拐っ？！ 私はどこにもいかないわよっ！ 離しなさいよ！ はーなーせー！ 猫耳男」

暴れたが猫耳男は気にするでもなく、すたすたと足を進める。

「ちょっと顔が良いからって、なんでも思い通りになると思わないでよーっ！ 私は、家に帰りたいだけなの！」

聞いているのかと怒鳴っても、私の言葉ももしかして通じていないのか。猫男は無反応だ。

さっきから見える景色は私の全く知らないところだ。

のどかな田舎町というか……田舎だ。

途中まで舗装されていなかったけど、急に足元がしっかりしたと思ったらレンガ道だ。

メルヘンだ。ここはメルヘン街道か？

暫らく歩みを進めていると、町や村というよりも、もっと小さな集落と呼ばれるに相応しい場所に辿り着いた。

建物がやけに童話とかに出てくる家っぽい、丸太造りのファンシーな物が多い。軒先にはガーデニングとかしてある家が多く可愛い場所だ。

猫男は目的の家に着いたのか、一番奥のさっきまでのメルヘンタツチとは程遠い、石造りの屋敷に足を踏み入れる。

ぎいっと物々しく扉が開き、猫男が足を踏み入れると家の中がぽっと明るくなった。電気とは違うような不思議な明かりだ。

もう既に、抵抗するのは無駄だと思った私は、どうせ夢だからと彼の歩みに続いていた。

中央の階段を上がり一番奥の部屋の扉を開くとそこは書斎だった。一見普通の書斎に見えるけど？ 違うのかな。

部屋に入ると、彼はやっと私の腕を解放した。

そして、窓際にあった机の引き出しを漁って一つの鍵を取り出すと、本棚に向かいその一箇所に鍵を差し込みがちゃりと回す。

「わ、隠し棚？」

鍵の開放と共に、天井まで届くような本棚は静かにスライドし、新たな棚を出現させる。掛かっていたカーテンを取り除くと、そこにはたくさんの瓶が並んでいた。

男は鼻歌交じりに、指でたくさんの瓶をなぞっていくと、その途中で目的のものを見つけたのか一つ取り出す。瓶の中を軽く振って

小豆くらいの大きさの粒を手にして瓶は棚に戻した。

そしてそれを持って、私の元まで戻ってくると、手の中のものを突き出してくる。軽く自分の口元を押さえて「あーん」としているところを見ると

――…もしかしくなくても

「飲めと？」

私に飲めといっているのか。

この得体の知れないものを。

いくら夢でも私はそこまで無防備にはなれない。

盛大に首を左右に振って拒否した私に、男はぽんつと手を打った。ジェスチャーは万能だ。言葉は通じなくても、意思疎通は出来たようだ。ほっとしたのも束の間、納得した彼は、おもむろに水差しを取り出して空いたグラスに水を注いだ。

――…意思疎通出来てなかった。

「いや、水がないと薬が飲めないとかそういうのじゃなくて、いや、それよかどっからだしたの？ それ」

ああもう、突っ込むところが多すぎて……。

はあ、と溜息を落として俯いた顔を上げ、もう一度文句をいおうと口を開いたら放り込まれた。

その何かを。

笑顔で。

直ぐに吐き出そうとすると、ぐいっと引き寄せられ口を塞がれ無理矢理押し込まれる。

「……っ、は、ん」

—— ……ゴクン

飲んでしまった。

小さな頃から知らない人から貰ったものは、食べたり、飲んだり、してはいけないといわれてきたのに……飲まされた。

飲まされて……

殴った。

「こんのっ馬鹿猫っ！」

「あ痛い」

私の右ストレートは、綺麗に決まったと思ったのに、大したダメージはなかったようだ。

「あまり暴力に訴えるのは良くないと思いますよ、危険ですねえ。特に私に手を上げられるなんて、稀有な人材ですよ」

にこにこにこにこ……胡散臭さ炸裂。

「それに私は馬鹿ではないですよ、猫ですけど」

「馬鹿に決まってるでしょ！ 大馬鹿よ！ なんてことするのよ！」
「一人で種も飲めないようでしたので、親切に手伝って差し上げたんですよ」

にっこりそういつて微笑んだ猫に、私の頬は引きつった。

飲めないって、だからって、親切に手伝うって口で塞がなくても良いじゃない。

私はその瞬間がフラッシュバックしてきて、背筋がぞくぞくと寒くなった。無理に割り入ってきた舌はざらりとしていてまさに猫の舌。

嫌悪するべきなのに、妙に官能的だった。

考えれば考えるほど、私の顔はきつと青くなったり赤くなったりしているだろう。初めてだったのにっ。

「私は認めないわ」

あれがファーストキスだなんて。

くうっと拳を握り締めて断言した私に、対峙していた猫は小首を愛らしく傾げたあと「落ち着きました？」と的外れな対応をしたくれた。

「……落ち着いてないけど、ちょっと聞いても良い？」

いって大仰に手招きした。

第二話…コスプレ好きな美青年？（2）

猫は不思議そうな顔をしつつも、私の方へ顔を寄せてくれる。一目見た瞬間から気になって仕方がなかった。私は、恐る恐る手を伸ばすと、そおっと触れた。

「ふわふわ」

「耳です。触らないで下さい」

「暖かい。本物だ」

「だから、触らないで下さい」

私は彼の声を無視して、両手で彼の猫耳を確認した。くにん、くにん、すると、軟骨がある。リアルだ。いや、やっぱり本物という解釈があつてる？

引っ張ってみる。

痛い、と小さく漏らされたが、気にしない。もっと酷いことを私はされた。本当に頭にくつついてる。生えてる。血も通ってるように体温もある。

ふわふわでやわらかくて、気持ち良い。

本人も触るなという割りに、じわじわと耳が垂れてきている。

ほんっとーに猫みたいだ。

ということはもしかしくなくても、尻尾も本物なのかな？ 私は、ひとしきり耳を堪能したあと、ゆらゆらと彼の後ろで揺れていた尻尾を掴んだ。

ぴんっと緊張して一瞬硬くなった。

「尻尾だ」

こちらも短毛だけど、柔らかな毛に包まれていて、芯がこりこりとしている。針金とかそういうのではなさそうだ……きつと、多分。この手触り、感触、本物だ。

「あの、尻尾は勘弁してください。弱いので」
「……猫だ」

変質者だけど。

「今かなり失礼なことだと思いますでしたか？ 私は『種屋』のブラックです。まあ、名など何とでも好きに呼んで下さい」

「猫男」

「ブラックと呼んで下さい」

好きに呼べといっておきながら、許容範囲もあるらしい。

私は、近寄らなければ害のなさそうなブラックの笑顔に、何となく和んでしまった。きつと、猫耳と尻尾に癒し効果があるに違いない。

こんなの夢だろうし、どうせ夢なら覚めるくらいまでは楽しんで
も良いかもしれない。

「さて、お名前をお聞きしても宜しいですか？ レディ」

「月見里真白」

「ヤマナシマシロ」

「今、しましろっていったよね。ま・し・ろ」

「ええっと、マシロですね。分かりました」

自分の聞き間違いはスルーして、ブラックはにこにこ頷いた。

それにしても、私一体いつから猫語が理解出来るようになったんだろう？ ついさっきまでちんぷんかんぷんだったのに、今は普通に会話が成り立っている。

「種です」

「はい？」

「マシロは先ほど種を飲んだでしょう？ あれは言語の種です。因みに、猫語ではなくこの世界共通のシル・メシア語です」

思い浮かんだ疑問を私は口に出していただろうか？ と、首を捻る。その様子にブラックはこともないように「そういう顔をしていました」と微笑む。

しかしこれは夢だ。

夢の中なのだから、きっと何でもありなのだと、自分を納得させて私は一人頷くと話を再開させる。

「私、そのシル・メシアなんて国知らないんだけど、どの辺？ 外国だよねえ。いや、でも外国だからって猫は二足歩行しないし喋らないか……いや、根本的に猫なの？ 人間なの？」

「マシロは私に興味津々なんですネ。なんだか恥ずかしいです」

ほんのり頬染めて恥ずかしいって、あんたの格好の方がよっぽど恥ずかしいと思うけど、何というか緊張感に欠ける人物だと思う。

あれ、でもさっきブラックはこの世界共通といったような気がする。

もしかして、世界が違うのか。何だか規模の大きな夢だ。

「マシロは落ちてきました。昼寝中の私の頭上に」

もしかして根に持っているのだろうか。

「……すみませんでした」

「いえいえ、構いませんよ。こんな落し物を拾うことになるとは思いませんでしたから。さて、今マシロの問題は、どこから落ちてきたのかという事ですか？ それとも、ここがどこかという事でしょうか？ もしくは、私のことでしょうか？」

最後なら嬉しいですよ。と、微笑んだブラックを無視して私は少し唸った。

これは夢なのだから、私が異世界人でも何でもありだろう。だとしたら折角だし、この夢世界のことを教えてもらえると良いかな？

「んじゃあ、ここがどこでどんな世界なのかってのを教えて」

「普通ですね？」

ほんの少し不満そうにブラックはそういったが、直ぐに元の調子に戻る。そして、どこからか取り出したのか、手にした杖をくるりと回して、机へ戻るところりとその上を杖で叩いた。

すると、綺麗に片付いていた机上に大きな紙？ 羊皮紙というものかもしれない——見慣れない質感のものだ——が広げられていてブラックは「こちらへ」と声を掛ける。

私は素直にその声に従って机の傍へ足を進めた。

「さっきの水といい、ステッキといい、この……地図？　いい、どこから出してるの？　夢だから突っ込まないけど、魔法使い設定とか？」

「魔法使い？　違いますよ。私は『種屋』です。魔術師でも、騎士でも、薬師でもありません。あー、いえ、でも正確には少し違いますが、この際それは良いでしょう。私のことなどマシロは然して興味もないようすし」

拗ねたのかな？　でも魔術師や騎士が存在する世界なんだ。

私にしては凄くファンタジーな夢だな。

やれやれ、と私が嘆息するとブラックは「椅子も勧めず、すみません」といつて優雅に手を振った。

その所作に合わせるように私の傍にアンティーク調の可愛らしい椅子がぽんと姿を現した。

これを魔法といわずに、何と説明するんだろう？

私は促されるままそこに腰を下ろし地図を覗き込んだ。地図の様子も私たちの世界のそれとは異なる。

RPGとかで使われていそうな物だ。

物珍しそうに見入っていた私の隣にブラックはそっと立つと持っていた杖で、こつつと地図の東側を示した。辺境の町と書かれている。

「ここが、今私たちの居るところです。このまま南下していくと都があります。この世界で一番大きくそして栄えている場所です」

つつーと紙の上を下っていくブラックの杖の先を見詰めると、ひととき大きく描かれている街に辿り着いた。

『王都』と記載されている。

その王都の中では三つの建物が大きく描かれていて、一つは『王宮』もう一つは『大聖堂』最後は……『図書館』だ。

王宮や大聖堂は分かるけど、それとほぼ同格に扱われている図書館ってどんなところだ。

「世のものは皆、素養を持って生まれています。七歳の時、それらを啓示され例外を覗いては、各学園に属することになります」

私が気にしていた建物三つを順番に、こつ、こつ、と、叩きながらブラックは話を続けてくれる。

「まずは王宮。こちらは騎士のような武の素養を持つものが就学します。大聖堂は術師のように術への素養を持つものが就学し、最後の図書館は薬師や土師、智の素養を持つものが就学することになっています」

ここまで分かりますか？ と顔を覗き込まれて、私は反射的にブラックから離れるとこくこくと頷いた。

そんな私にブラックはにっこりと笑みを深めると「マシロの素養も、見出さなくてはいいけませんね」と付け加えた。

「いや、別に私は夢から覚めれば良いだけだから」

夢の中でまで学校に通う必要はないよう気がする。

ブラックは、私の言葉を反復するように「夢……？」と呟いて、何事か納得したのか、なるほど。と、頷いた。そして、もう一度杖

を机の上で振ると地図の上に、だらだらーっと、細長い羊皮紙が広げられた。

「もし、マシロが夢だと思うのでしたら、それも構わないと思います。ですが、きつと長い夢を見ることになると思いますよ。その間、貴方はこの世界に属するわけですから、やはりこちらのルールに従ったほうが得策。夢は楽しまなくては」

妖しく微笑んだブラックに私は、眉を寄せたがさつきからこれだけ夢の中で大騒ぎしているというのに向に覚める気配はない。確かにブラックのいうように長くなるのかもしれない。

私は小さく嘆息して「そうかも」と頷いた。

「納得していただいたところで、どちらの種を用意致しましょう？」
「種？」

「はい、私は種屋ですから、マシロのご要望通りの種をご用意致します」

「種ってさつき飲まれたやつだけじゃないの？」

「違いますよ。種はその素養の数だけ存在し、掛け合わせ次第で無限の可能性を引き出すことが出来ます。そして、先ほどから貴方の素養も探らせていただいているのですが、さっぱり見えません。お名前の通り白紙なのでしょう。名は体を現すとも申しますし。ですから種の馴染みも良いでしょう。さあ、選んでください、貴方自身がこれから進むべき道筋を」

第三話：天然素材の王子様（1）

私は結局『薬師の種』を飲んだ。

星の数ほどある素養の種の中から、何も知らない私が何かを選択するなんて、土台無理な話。元の世界に戻る手段、夢から覚める方法を探す、ということを目的にするなら

「そうですねえ、図書館にはこの世界の全てが記載されていると聞きますから、貴方の助けとなる本もあるかもしれません。図書館の中は一般に公開されているものも多数ありますが、生徒にしか閲覧できないものも多い」

だから、手掛かりを探すには、その生徒になるのが手っ取り早いかも知れないといわれたのだ。

それにしても、あの黒猫。今思い出しても腹が立つ。

猫屋敷で一夜を過ごした私は今、屋敷を出て町の外で捕まえた辻馬車に乗っていた。

ブラックが用意してくれた部屋は、ブラックを追い出すことに成功したあとはいたって普通だ。

夢の中で眠るという矛盾もこの際気にしなければ特に問題ない。

朝には新しい服も用意してくれていた。学校帰りだったこともあり、制服だったのだけど、それでは目立つだろうと準備したらしい。普通のワンピースっぱいがあまり見たことのない柄物。

でもまあ、そんなに抵抗なく着れそうだ。袖を通すとサイズがぴったりだったので、ちょっと気持ち悪かった。

「私も都まで付き添って差し上げたいのですが、恐らくお一人の方がことは上手く運ぶでしょう。道に迷わないように、貴方は緑の煉瓦道を進んでください。途中で辻馬車に出会いますから、歩くには辛い距離です。それに乗ると良いと思います。そして、これは当面の生活費です。学校は基本的に寮制ですが、日用品などを揃えるにも必要でしょう」

可愛らしい巾着を受け取ると、ずしりと重たい。ちらりと覗くと紙幣はないのか、金貨銀貨銅貨が入っているように見えた。

「……ありがとう」

「いいえ、気になさらないで下さい。あ、そうそう。これを忘れてはいけませんでした」

ポケットにそれをしまつて顔を上げると、ブラックは同じ笑顔のまま私に羊皮紙を手渡し、どこからともなく羽ペンを取り出すと私に持たせた。

小首を傾げて羊皮紙の文字に目を通すと……。

「借用証?!」

—— …… あんなの詐欺だ。悪徳商法だ。

勝手に種を飲ませておいて、勝手に生活費まで工面しておいて、お金を取るなんてっ! 私はポケット中の控えをぐしゃりと握りつぶした。

ごんごんと揺られる馬車の客は、私の他に二人だけだ。

一人は私と年代か、少し上くらいの制服っぽいものを着ているから学生と思われる男だ。途中から乗り込んだときに目が合ったから、愛想笑いをしてやったのに無視されたので感じが悪い。

もう一人は美女だ。

長いブロンドを綺麗に巻いて、絵に描いたような美人だけど、こんな乗合馬車に乗ってるくらいだから標準なのかもしれない。

そうするとこの世界は基準が物凄い上だ。

ブラックも男前だったし、愛想のない目の前の男だって派手さはないが整っている。因みに、唯一の救いは同席している二人の頭に猫耳がないことだ。

あれは、標準装備ではないんだな。良かった。とても良かった。

今更、怒っても騒いでも飲んでしまったものを吐き出すことも出来ない。

それに飲まなくては、言葉も通じなくて不便だったということに変わりはないから、どっちにしても私は借金をしてでも、あの黒猫に頼らないわけにはいかなかったわけだから、仕方ない。

夢の中で眠って、また朝を迎えている。

その事が私の中で妙な不安に繋がっていた。

馬車から見上げた空は今日も晴天だ。

青い空には二つの月が青白く残っている。夜には白い月と青い月が煌々と夜を照らしていた。

凄く不思議だったのにブラックには「貴方の世界では一つしか月がないんですか？ 寂しい夜空ですね」と笑われてしまった。

私の世界とこちらの世界は似ているようで似ていないのだろう。

＊ ＊ ＊

そろそろお尻が痛くなってきた頃、眺めていた景色は変わり、都に入ったことが分かった。

都は、とても多くの人で賑わっていて、建物も私の世界とは異なるものの、辺境の町よりずっと立派だ。人通りの多い場所で辻馬車は止まり、ここで終点だと告げられた。

二人が降りたあと、私もそれに続いて降りてブラックから借りたお財布を眺めて少し首を傾げる。

辻馬車っていくらなんだろう？

通貨の単位も、物価も分からない。決めかねた私は、一枚金貨を取り上げて「これで足りる？」と御者に尋ねた。御者は少し驚いたような顔をして、私と金貨を交互に見たあと、にこにこ私に手を伸ばした。

「払い過ぎだ」

御者が私の手に触れる前に、横から割ってきた大きな手が金貨を掴んでいた手ごと包み込み、押し下げる。続けて、口が開いたままになっていた私の財布から、銅貨を三枚抜き出して金貨の代わりに御者に手渡した。

もの惜しげな御者に「充分だろう？」と男が念を押すと「へい、毎度」と苦い笑みを溢して、手綱を弾いた。ぱかぱかと軽快な音を響かせて、馬車はその場を去っていく。

「ありがとう」

とりあえず御礼をと思って振り返ると、同乗していた愛想のない男だった。男は、にこりともせずになささとその場を立ち去ってしまった。ほんっとーに愛想のない男だ。

私は、気を取り直して、とりあえず図書館を目指すため、足元を見た。

猫屋敷から、ずっと私に行き先を示す緑の煉瓦は続いている。私はその示す通りの道を歩んだ。

「これが、図書館……？」

私の知っている図書館はもっとこじんまりとした感じた。

首が痛くなるほど見上げて先っぽが見えない。サグラダファミリアみたいな様式の建物だ。

私は仰々しい扉の前に立って大きく深呼吸した。

ポケットを探ると、ブラックに渡された封筒を確かめる。よく分からないが、受付でこれを見せれば良いといわれたのだ。

今のところ、不審人物ではあるが、私が頼るのはブラックしかない。彼のいう通りに従うしかなかった。

ぎいっと物々しい音を立てて開いた扉を潜ると中は薄暗かった。

外があまりにも明るかったせいもあるが、視界を確保するために、私は数回瞬きをしてきよきよと中の様子を窺った。

「お嬢さん、受付はこちらだよ。学生証を見せて」

突如掛けられた声に、私は肩を跳ね上げてそちらを振り向くと、黒縁眼鏡に無精ひげのおじさんが手招きしていた。

私は招かれるまま彼の前まで来ると、渡された封筒を取り出して卓上に載せる。

「あの、私、入学希望なんですけど」

「へえ、こんな中途半端な時期に新入生。珍しいね。しかもよりもよって薬師かい？ お嬢さんが」

封筒を開きながら、おじさんは軽口を叩き取り出した紙を眺めた。そして、その表情から笑顔が消えると真剣な面持ちで私を見上げてくる。

「お嬢さん、闇猫のところから来たのかい？ しかも、種を飲んでまでここに」

僅かに愁いを帯びるおじさんの声に小首を傾げつつも、私は素直に頷いた。

そして、次の瞬間、目の前のカウンターに腰掛けていたおじさんは、豪快な涙を流し立ち上がると私の両手を強く握り締めていた。

「そうかつ！ 若いのに苦勞しているんな。わざわざ好き好んで、大借金して薬師の種なんぞ飲むような女の子はいない。よしよし、待ってな。今、おじさんが面倒見の良い奴探してきてやるから」

腕がちぎれるかと思うくらいの勢いで、両腕をぶんぶんと上下に振られ、その反動が治まらないうちにおじさんは私の手を解放し踵を返した。

薬師ってそんなに特殊な素養なのだろうか？ 確かに借金はした

けど、私の苦労はまだここではしていない。

涙輝くおじさんが、ややして戻ってくると連れてきたのは王子様だった。

細身な長身。目鼻立ちのはっきりとした綺麗な顔立ちに水面を映したような綺麗な髪。

「君が新人生？」

声も聖堂の鐘をついたように耳に残る魅力的なものだった。

思わず見惚れてぼんやりしていると、私の真正面まで歩み寄っていた王子様は腰を緩く屈めて私の顔を覗き込む。そして「緊張しなくて良いよ」と優しく微笑み掛けてくれた。

私は近すぎる距離に後退さったが、それをふらついたと思ったのか慌てて手を掴まえられてしまった。

「本当に大丈夫？ 顔が赤いけど、長旅で疲れたのかな」

「おう、きつとそうだ。その子は、ええつとマシロだ。なんせ闇猫のところから来たってんだから、怖い思いもしたんだろうよ。早く寮監のところへ連れて行ってやんなよ」

おじさんも、王子様も、私の話を聞くつもりはないらしい。

おじさんの話に王子様も「そうだね、可哀想に」と頷き、こっちだよと手を引いてくれる。

引いてもらわなくても歩けるけど、ちょっぴり役得なのかな？

薄明かりの館内を突っ切って奥の扉を開くと視界はぐんっと拓け明るくなった。

扉の先に続いていたのは渡り廊下でその脇には美しい庭が広がっ

ている。

「自己紹介がまだだったよね。僕はエミリオ。上級階位クラス所属だよ。君はマシロだったよね。辺境からだったら迷わなかった？ 北西からの門から入ってくると、割りと分かり辛いんだよね、入り組んで。マシロは今までどこに所属していたの？ 女の子だから大聖堂に居たのかな？」

「え、あ、私は、その、どこにも……昨日来たばかりで、道は、緑のレンガを辿れば良いとブラックに教えてもらって……」

「緑のレンガ？ ああ、闇猫ならそのくらいの術もなんてことないか。それにしても本当にどこにも所属していなかったの？ 君みたいな子が？ それに來たってどこからだい？」

私の答えに、ぴたりと歩みを止めたエミリオさんは、私を振り返って矢継ぎ早に質問を投げ掛けてきた。

第四話…天然素材の王子様（2）

何だか彼の雰囲気気後れして答え損ねると、何か誤解があったのか、エミリオさんは短く謝罪してきた。

「何か気を悪くしたかな？　ごめんよ。その、君くらい身なりもちゃんとして綺麗な子なら、その、何ていうか、きつと親御さんがちゃんと適正素養の学園へ通わせていたと思ったんだ。あ、いや、そう、だよ。種を飲むような事情があったのだから、僕が踏み込むべきじゃないんだよね。本当、ごめんね。よく思慮が足りないってカナイに怒られるんだよね、本当、ごめん」

思い切り凹んだようだ。私はまだ何もいっていないし傷付いてもない。

何というか、この王子様一人で突っ走っている。

それに私を綺麗だと形容してしまう辺り、社交辞令としても美意識回路も故障中みたいだ。でも、見た目に反して、とても人好きのする性格っぽい。

「そんなに謝らなくて良いですよ。エミリオさん。私、その、ブラックがいうには、この世界とは違うところから落ちてきたみたいで……」

口にしたあとで自分こそ思慮が足りない、はっとした。
いきなり私は異世界人です。なんて口にする奇人。早々居ないだろう。

「エミルで良いよ。みんな、そう呼ぶから。それはそうと、違う世

界から落ちてきたというのは本当？ さっきから名前の挙がっているブラックって、もしかしくなくても闇猫のことだよな？」

確か彼はそう名乗っていたはずだ。と、ほんの少し悩むように眉を寄せたエミルは、うーんっと唸ったあと「まあ、いいか」と顔を上げた。洒落にならないくらい物事に動じない人らしい。

「あつれー？ エミル、駄目じゃん。寮に彼女なんて引っ張り込んできちゃ」

不意に上から降ってきた声に顔を上げると、二階辺りからこちらに手を振っている男の人が居る。からかうように笑っている彼に、エミルはこともあろうか

「内緒にしといて。僕だって寮則くらい破ることもあるよ」

とにこやかに答えて手を振ると「詳しい話はあとにして、行こう」と、そっと囁き私の手を再び引いた。

うわあ、マジでー！ と、上から聞こえた声に、私は否定も肯定も出来ない。そんな暇ない。軽く頭を下げてエミルに引っ張られその場を立ち去る。

反対側の扉を開くとまた同じような書庫が広がり広い廊下を進みながらエミルは歩みを緩めてまたも詫びた。

「ごめんね。図書館に入ってくる女の子って、本当に少ないんだよ。だから、まだ何も決まっていないうちに、奇異の目で見られるのは良くないかと思ったんだけど、その……もうちょっといい方があったよね。従兄弟とか妹とか……」

「気にしなくて良いです。ありがとうございます。気を遣ってくれ

て……でも、女の子が少ないって本当ですか？」

ブラックはそんなこと一言もいっていなかった。
確かに渋ってはいたが。

私の言葉にエミルは、ほんと胸を撫で下ろしたように微笑んだあと「あ、そうか」と一人納得した。

「君は違う世界から来たから、知らないんだよね？ 図書館に通う生徒は、基本的に女の子は少ないんだけど、その中でも薬師の素養を見出される女の子は本当に少ないんだ。僕が知っているのは中級階位に一人、初級階位に一人居たかな？ 君が入れば二人になるね？」

そんなに少ないのか。

それが十人中の一人なのか、百人中の一人なのかは、分からないが、男子校の中へ放り込まれたようなものだ、ということはよく分かった。

いや、私の突っ込みどころはそこじゃなくて

「あの、違う世界から来たっていう部分は信じてくれるんですか？」

「え？ 冗談なの？」

「いや、本当ですけど、その、そういう人もしかして多かったりするんですか？」

エミルが特別なのかどうなのか分からないが、直ぐに納得し過ぎな気がする。

疑われてもどうしようもないけど。エミルは、私の質問に首を傾けて、うーんっと唸ったあと

「どうかな？　僕は初めて会うけど。でも、そういうことがあるって話は聞いたことあるよ」

会えるなんて、凄い幸運だね？　と、重ねてにっこり微笑まれると、顔が熱くなってしまう。

「もう直ぐ、寮監のところへ着くけど、笑っちゃ駄目だよ？　軍艦みたいな髭をした人でね。初見で噴出さない人は滅多に居ないから」

口元に人差し指を当てて秘め事を話すようにそう囁いて、綺麗に微笑む。

本当に、王子様という形容がぴったりくるような綺麗な人だ。中身は微妙に天然が入っているようだけど。

「はい、ここが君の部屋。角部屋だから色々遠いけど、お向かいの僕の友人の部屋だし、隣りは僕の部屋……って、まだ笑ってるの？」
「だ、って、エミルが悪いんだよ。会う前に、あんなこというから」

私は目尻に浮かんだ涙を拭いつつ、痛む横腹を押さえた。寮監さん。

確かに、あだ名は軍艦だろう。みたいな髭じゃなくてほぼそのものだった。

あんなものの口元にぶら下げて重たくないのだろうか？

「そういえば君、荷物が無いよね。学用品は館内でも買えるけど、あ、でも、君、借金があるんだよね。当面の生活費もそこから工面するのかな？　だとしたらあまり使わない方が良いよね……」

うーんっと部屋の扉を開けたまま考え込んでしまったエミルに、何だか私は申し訳なくなってきた。

「良いよ。ありがとう、あとは自分で何とかするから」

ついエミルの気安さに、敬語も忘れてしまっていて「…します」と、いい直した私にエミルは人の良さそうな笑みを浮かべて「良いよ、そのままで」と口にしたあと、尚も唸った。

自分で何とかする、と、いった私の言葉はスルーしてしまったようだ。

「エミルが彼女を連れ込んで。って、いうから見に戻ったら……もしかして、入学者？」

首を捻ったままのエミルの肩越しに顔を覗かせてきたのは、まだ見忘れるには早い無愛想男だ。

あちらも私に見覚えがあったのか、あ、というような顔をして眉を寄せた。

そんな私たちの不穏な空気を全く読むことなく、エミルは、にこりと無愛想男を振り返って「そうなんだよ」と、頷いた上に丁度良かったと重ねた。

「この子、異界から来たんだって、闇猫のところに落ちたらしくて、それで日用品とか何にも身の回りのものがなくて、でも種を飲んじ

やったらしくて借金もあって、そういえば制服もないよね……」
「ん、分かったから、順番に話してくれ」

エミルは、説明が今一苦手らしい。
聞いていた私でも途中でストップを掛けたかった。ちっとも纏ま
っていない。

開いたままになっていたのは私の部屋だが、当然、私の部屋には
何もない。必要最小限のベッドとか机とかはあるみたいだけど、そ
れ以外何もない。

仕方ないので隣室だ、といっていたエミルが自分の部屋で話すこ
とを提案したが……無愛想男があっさり拒否して自室を開いた。

「僕なら一人部屋だし気にしないのに」
「俺が気にする。お前の部屋は異様だ」
「失礼だな。薬師の部屋なんてあんなもんだよ」

エミルの部屋に物凄く興味が湧いた。
でもエミルが一人部屋を強調するということは、この男は一人部
屋ではなく相部屋者が居るのだろう。

「大体、この先お前がこの女の面倒を見るつもりなら、アルファと
も顔を会わせておいた方が良いだろ」

ほら、入れよ。と、促されると中では、一人の金髪美少年が読書
中だった。

窓から差し込む陽光が、キラキラと髪に反射してとても綺麗だ。

「んー？ お帰りなさい。カナイさん、と、エミルさんも一緒に

「。あれ、何で女の子が一緒なんですか？」

斜めに傾けていた椅子のバランスが驚きに揺れたが、見事な動きで元の体制に戻る。そして、身軽にひよいと立ち上がった。

私の傍に立っている男性陣が巨人なのか、彼が小柄なのか、傍寄ると私より少し高い位置に頭があるだけだったので小柄なのだと判明。

仔犬のような無邪気な笑みを浮かべて、私の顔を覗き込んでくる。私に興味津々らしい。

ブラックのように尻尾があれば物凄く振ってそうだ。

「まあ、とりあえず、みんな入って。カナイさんはお帰りなさい。お茶でも淹れますねー」

「あ、僕はカモミールが良いな」

「はいはい、エミルさんはカモミール。カナイさんは、ご自分でブレンドした紅茶にブランデーですか？」

「ストレートで良い」

続けて貴方は？ と問い掛けられ、その近さに赤くなる顔を隠しつつ「何でも」と答えた。そのあと、どうしたものかと逡巡していた私に、エミルが二人を紹介してくれた。

「彼は、カナイで中級階位の生徒。お茶を淹れてくれるのがアルファルフア、みんな、アルファって呼んでるからそれで良いと思うよ。君と同じ初級階位だね」

「カナイさんは、地味で無愛想ですけどモテますから、手を出されないように気をつけてくださいね」

にこにこ小さなキッチンセットで、ぱたぱたやっていたアルフ

アの頭に、机に開きっぱなしになっていた本がふわりと飛んで来て落ちた。

角からだ。

あれは痛い。あううつと僅かに腰を折って頭を抱えたアルファが気の毒だ。

「そして、彼女はマシロ。明日から、初級階位に参加すると思う。異世界人なんだって、凄いよね」

「それはそうと闇猫がどうかいてなかったか？」

カナイ、今、私が異世界人だって部分簡単にスルーしたよね。

その気持ちは分かるけど。くそー、ブラックには食い付くくせに。失礼な奴だ。私はとりあえず、アルファが傍に来たところで話を始めた。

私の分かっていることなんてちよつとだけど、多分エミルが話をするよりは的を得ているだろう。

第五話：動物耳は基本装備？（1）

「マシロさんは、本当に異世界の方なんですネ」

さんは良いよ。と、アルファに付け加えると簡単にマシロちゃん
といいなおしてくれた。

ここの世界では、こういうことが頻繁ではないとはいえ、絶対無
いということではないようだ。みんな受け入れるのが早すぎる。

疑っていないし、私の頭がオカシイのではないかと思っている素
振りもない。

いくら私の夢とはいえご都合主義も良いところだ。

「それで、マシロは帰りたいのか？」

静かにそう訪ねてきたカナイに、私は首を傾げながらも「もちろ
ん」と頷いた。

「夢なら早く覚めて欲しいし、違うなら早く帰りたい」

「世界に弾かれたのに、か？」

何でもないことのようにさらりと口にしたカナイを「ちよつと、
カナイっ！」と、エミルが慌てた様子で制し、アルファは肩を跳ね
させた。

私が、世界に弾かれたってどういうことだろう？ ブラックは私
のことを落し物だといった。

あんまり考えなかったけどなんだかそれって……

「別にこれは夢で、私は、要らない子なんかじゃない」

声が震えてしまっていた。

あの場所に私は要らない。

私なんて居なくても世界は変わらなくて、みんな何の問題もなく廻っていく。

でも、私が住んでいたのはあの場所で、あそこには家族が居て…
友達が居て…友達…。

『良い子ぶってさー、結局真白の腹は真っ黒だったってことでしょー?』

大好きだったユキとサチの笑い声が頭の中で反響する。

私のせいじゃないと割り切って、あの男が馬鹿だったんだと、だからユキにちゃんと説明しようと思ったのに、私は嫌われてしまった。

「……シロ、マシロ。泣かないで、大丈夫だから。マシロはちゃんと戻るよ」

気遣わしげなエミルの声が聞こえる。

泣く……私は泣いてなんかないと思ったのに、頬に触れた指先は濡れてしまった。

ハンカチを差し出してくれていたエミルの手から、それを抜き取って慌てて顔を拭う。あまりよく知りもしない相手に弱いところを見せてしまうなんて不覚だ。

私は、そんなに可愛らしい女じゃない。

そうだ、二人がいうように私は腹黒くて嫌な奴だ。

「ごめん。夢の中で泣いちゃうなんてどうかしてる。人前で泣くなんてどうかしてるよね。驚かせてごめん。えっと、本当、私、明日に備えなきゃ！」

がたりっと派手な音をたてて立ち上がると、私はアルファが淹れてくれていた紅茶を一息に呷った。

「必要なものとか揃えなきゃね。えっと、さっき貰った資料にあるかな？ 三人ともありがとね。私買い物に行かなくちゃ」

「マシロ、落ち着いて」

「大丈夫っ！ 落ち着いてるよ。私は落ち着いてる」

「大丈夫だから」

落ち着いて。と、繰り返すエミルに苛立たしく答えると、エミルは、短く溜息を溢し立ち上がって私の腕を引いた。

強く引かれたから、そのまま彼の胸にぶつかると空いた手でそっと頭を撫でられる。大きな手がゆっくりと「大丈夫だから」と、いいながら何度も私の頭を撫で付けていく。

「いきなり知らないところに来たんだ。言葉すら通じないところで不安を感じないわけない。恐怖を感じないわけないよ。でも、大丈夫。一人では無理かも知れないけど、僕らが手を貸すから、君の望むようになるように手を貸すよ」

大きくて、優しい手が、心地良くてじんわりと暖かくなり荒立った心が風ぎいていく。

耳に届いてくる規則正しいエミルの心音に気持ちが落ち着いてくると嫌な子の私には一つの疑問が浮かぶ。

「どうして、優しくしてくれるの？ 私は何も持っていない。何もお礼できない。私に手を貸したって貴方たちの得にはならないでしょう？」

私は最もな質問を投げたと思うのに、エミルの心音は微塵も乱れることなく穏やかなままで言葉を紡ぐ。

「そうかな？ マシロはちゃんと『ありがとう』っていえるじゃない。それで充分だと思うよ？それに、女の子が困っているのに放っておくのは男のすることじゃないよ」

ね？ と傍の二人に問い掛けたのだろう。カナイの盛大な溜息が聞こえた。

「エミルがそういうなら、それに従わないわけにいかないだろう？」
「やっぱり、王子はそういう役回りが似合いますよね」

そうかなあ……と、緊張感の欠片もない声でアルファに答えたエミルを、スルーすべきか一瞬迷ったがやはり聞き逃せない！

「王子って？」

エミルの腕の中から抜け出して、顔を上げた私にエミルはさっきと全く代わらない穏やかな笑みのまま「そうなんだよね」と頷いた。

王子って王さまの子どもって意味だよね。

ここには確か王宮もあったはずだから、そこのお子様ってことになるのかな？ 私の第一印象も捨てたもんじゃない。

「でも、王子っていつでも僕は王位継承権からかなり遠くて十六番目」

「十三番目だ」

「ああ、そうそう、十三番目。だからあまり関係ないんだよ？　ほらこうやって好きなことやってるしね。付き合わせているカナイやアルファには申し訳ないなと思ってるけど、普通だよ？」

驚きに呆けていた私に、ことりとカップをテーブルに戻したカナイは「それはそうと」と立ち上がった。

「本人もいつていたように、買出しに行くなら早くしないと市が閉まるぞ？　それから、借金ってどのくらいあるんだ？」

「あ、僕も気になります。種ってどのくらいの金額するんですか？」

いわれて私は、手元にある借用書の控えを出すと、カナイに手渡した。

カナイは「あんまホイホイ他人に見せるなよ」といいつつしっかり受け取って開くと、両脇からエミルとアルファが覗き込んだ。

「で、お前は払う気なのか？　どうせ元の世界に帰るなら、踏み倒すのも手だと俺は思うけど」

アルファが借用書の内容を読み上げているのを聞きながら、カナイはあっさりと鬼のようなことを口走っていた。私は「払うに決まってるじゃない」と胸を張ったものの、踏み倒すという選択は思いつきもしなかった。

——……ちーん……。

三人とも固まった。

アルファがその額を読み上げることもなく全員固まった。最初に口を開いたのはカナイだ。

「よし。踏み倒せ。お前は元の世界に帰った方が良い」

いい切った。ええーつと眉を寄せた私にエミルが重々しく口を開く。

「僕も踏み倒すようなことは駄目だと思うし、僕は、あまり正常な金銭感覚を持ってないけど……その、何というか」

「普通の職業じゃ、一生働いても返せる額じゃないよ。マシロちゃん。無理無駄無意味」

アルファがあっさり纏めた。がつがつと毒舌を上乗せする。天使の容貌をお持ちだけに、ダイレクトに心に響く。

「そ、そんなに高額なの？」

私の一言に、カナイは私が御者に金貨を払おうとしていたことを思い出したのか、はあ、とワザとらしい溜息を吐き首を振った。

「借金は踏み倒すとしても、闇猫との契約だからな、それが元の世界に戻ったからって破棄されるかってことだよな」

踏み倒すのは決定事項なのだろうか？

「この文面から察するに、お前身体のどこかに紋章とか印のような

ものを刻まれなかったか？」

問われて私は、反射的に左胸の上辺りをぎゅっと握り締めていた。私が、書類にサインをした瞬間。彼の手元に戻った羊皮紙は、緑の炎に捲かれ塵となった。それと同時に、この左胸の上に、微かな痛みを覚えるとエンドレスのマークを十字に重ねたような蔦の印が刻まれていた。

全額返済なるか、自分のものになればすぐに消えるから、といわれたから特に気にしなかったのだけれど……借金もちゃんと返すつもりだったし。

「あるんだな？」

こくんつと頷いた私に、カナイは溜息を重ね、何事か考えているようだ。アルファがそつと私の隣に来て耳打ちしてくれる。

「カナイさんはそういうの専門だから安心して良いですよ」

にこにこ人懐っこい笑顔を添えられてほっとしたのも束の間。

「面倒臭え。よし、面倒だから後回しだ。買出しに行こう」

あっさり切り上げた。

それはもう本当にあっさりばっさり切り上げた。私は、思い切り脱力したのに二人は何事もなかったように同意した。

「じゃあ、エミルとアルファはエリスさんそこへ行つて、こいつの

こと相談して服とか譲ってもらって来いよ。あ、異世界ってことは伏せてな。それから、学用品の類だけど、天秤とかはエミルが前に使っていたのがあるだろうから、それを発掘して手入れすれば使えるだろうし、制服はあとで頼めば良いから……残るは日用品だな」

——…発掘って何ですか？

私はテキパキと分担を決めているカナイを他所に、さっきからエミルの部屋が気になって仕方なかった。また後で、と手を振った二人に手を振り返して、残った私はどうするつもりか訪ねたら

「まずは日用雑貨を買って、そのあと、ギルドに登録に行くぞ」
「ギルド？」

完結に答えられてさっさと歩き始めたカナイを追い掛けつつ問い返す。

「何でも屋みたいなものだ。民間から依頼を集めて登録者に請け負わせ謝礼を支払う。あんまり借金返済の足しにはならないと思うが、生活費の足しくらいにはなるだろう？」

バイト斡旋みたいなものかな？

一応働いて返す意気込みを見せたら、エミルとアルファは感心していたがカナイは呆れていた。でも現実的な状況において、協力的で役立つのはカナイなのかもしれない。

図書館を出て暫らく歩くと、馬車の通りのない道に出た。両脇にびっちらと色々な商品を並べる露天が軒を連ね多くの人でごった返している。

一度だけ「迷子になるなよ」と念を押され頷くととっと人の波に混じってしまった。その後姿を追いつけるので精一杯だ。

カナイは買い物慣れしているのかかなり手際が良かった。

ひよいひよいと、露天のおじさんやおばさんにまとめて商品を出させて、ガツンとまけさせる。何というかまだ物価の感覚は分からないが、かなりまけさせているように思う。

第六話：動物耳は基本装備？（2）

「逸れた」

当たり前だ。

これだけ人が居て、慣れていない人間に着いて来い。というのが、無理なんだ。エミルみたいに手くらい繋いでくれれば迷わなくて済んだのに。

いや、繋ぎたいわけではないけど、あの無愛想男とは……。

その内、私が居ないことに気がついて、探してくれるだろうと踏んだ私は、基本混み合っているのは夕飯時のためか食材を並べている辺りだ。それを抜ければ、それほど歩くに困ることはない。

「あ、可愛い」

私はアクセサリや宝石箱、小物の類が並ぶ屋台に目をつけて、キラキラ輝いていたり、凝った装飾がしてあったりする物をまじまじと見詰めた。

カナイが選ぶものは、基本的にシンプルなものが多かったが、特に文句もなかったのもそのままにしたものの、少しはこういった可愛らしい物も欲しい。

—— ……借金まみれの私には、過ぎた贅沢なのかなあ？

「どれか気に入ったのがあるかい？」

声を掛けられ顔を上げると店主と目が合う。

オレンジ色の猫耳がついてる……きっと珍しくないんだな。気さくそうに声を掛けてくれるまだ若い店主に私は首を振った。

「気に入らない？ 全部オレが作ったんだけど？ お嬢さんはどういうのが好みなの？ 聞かせてくれたら今度作ってきてあげるさ」
「いえ、そうじゃなくて、どれも可愛いと思います。でも、ごめんなさい、私お金持ってなくて」

「じゃあ、後ろの不機嫌そうな、彼に買ってもらえば良いじゃない？」

にこにこ愛想良くそういわれて振り返ると、丁度、カナイが追いついて来たところらしい。

難しそうな顔をしていたので、開口一番怒られるかと思ったけど私の予想に反して「何か欲しいのか？」と、私が眺めていた小物に目を落とした。

「あ、いや……ううん。行こうか？」

首を振った私に、カナイは眉を寄せると今度は店主に「どれだ？」と訪ねると店主はアレとソレっすねと指差した。

確かに私が珍しいなーと思ってみていた鏡と櫛だ。

微妙に装飾過多な気もするが、派手になりすぎていないところが凄いいなと感心したのだ。カナイはふーんと相槌を打って、それ以外の商品にも視線を走らせた。

「お！ あれ魔法石じゃないか？ 魔法石の加工も出来るのか？
腕が良いんだな」

カナイって見た目に寄らず人付き合いが良いのか、店主と簡単に打ち解けてしまった。

そして「じゃあ、それも一緒に幾らだ？」とあっさり口にしたカナイは、店主が提示した金額をさっさと支払って商品を受け取るとそのまま私の腕に乗せた。

「え、カナイこれ」

見間違いじゃなければ、お金を出したのは私が預けていた財布からではなかったような気がする。

それに値段の交渉も一切無しだった。
今まで散々まけさせていたくせに。

次いくぞ。と、踵を返したカナイを小走りに追いかける。足が速いんだよっ！

「受け取れないよ」

「お前俺にそれを使えと？」

「……いや、それはちよつと気持ち悪い」

「だろ？ 素直に受け取っておけ。さっき泣かせた侘びだ。別に俺は間違えたことはいっていないと思うが、お前を泣かせたのは事実だ」

意外と律儀な奴だ。

そのあとギルドの事務所に出向いて登録をしてもらった。
本当は学生証がいるらしいのだけど、カナイが親しいのか「ま、いいか」で済まされた。

かなりアバウトだ。

「テト！ 凄いよっ！ カナイが彼女を連れてきたよ」
「本当だね、テラ。明日は槍でも降るかな？」

ギルドはウサギ耳の双子が切り盛りしていた。

やっぱり動物耳には突っ込んではいけないのか特に珍しいわけじゃないんだろう。

物凄い珍しいけど。重ねて物凄い可愛いけど。

ギルドにはランクがあって、それによって受けられる依頼が決まるらしい。私は、スキルも何もないのでEランク。

一番下だから物凄い簡単な依頼しか受けることが出来ないし、必然的に謝礼も少ない。しかしまあ、ゼロよりでした。

「マシロか、うん。覚えたよ。何せカナイが連れてきた子だからね！」

「困ってるんだね！ 任せてよっ！ 優先的に仕事回してあげるから！」

二人ほぼ同時に口を開くため、奇跡のサウンドを耳にしているよ

うだ。

長く聞いていると、酔いそうだ。

エミルとアルファの収穫も大量で、暫らく着る物に困ることはなさそうだ。

エリスさんというのは、道具屋の店主さんらしく、清楚で可憐な雰囲気 of 淑女で趣味は料理と裁縫らしい。どこまで完璧なんだろう。

絵に描いたような女性像に私は少々引いた。

一通りの買い物済ませると、すっかり日は暮れていて、また一日終わってしまった。

殺風景だった部屋の中も、一通りの生活用品も揃ったし特に困ることもなさそうだ。

寮とはいえ、充実しているのかミニキッチンにユニットバスも付いていた。

聞いたところによると、大浴場もあるけど女の子が極めて少ないせいで、混浴状態だから入っても良いけど入っているのを見たことないということだった。

うん。私も入ることはないだろう。

ごろりとベッドに横になりぼんやりと天井を見上げる。

この世界のあまりのリアルさに、もう私自身、夢なのか、現実なのか、良く分からなくなっていた。因みに基本中の基本。頬を抓るという行動はとって見たが痛かった。

半日移動して、半日買い物やら慣れないことでばたばたして、今日もぐったりだ。直ぐに襲ってくる睡魔と闘いつつ、私はぼんやりと帰るべき場所のことを思った。

私は、普通科高校に通っていた極普通の学生だ。

家族は五人で、上に優しい兄と、下に口うるさい小姑のような弟がいた。

家族仲も特に悪くはないと思う。成績だって、普通くらいだと思うし……友人関係も上手く築いていたと思っていた……けれど、これは失敗していたようだ。

今、思い起こしても胸が苦しくなる。

私はただ、ユキの恋愛相談に乗ってあげただけだった。

力になってあげたかったただけなのに、二人を繋ぐつもりが、あの馬鹿が告白してきたのは私だった。

全くそんな気はなかった私は、初恋の相手に散々な思いをさせられたせいもあって、恋愛なんてごめんだと思っていたから直ぐに断った。

でも、ユキにどう伝えて良いか迷っているうちに、彼女の耳に入ってしまったのだろう。

私は裏切り者になった。

つうつと意識せず涙が目尻から零れた。

いつもなら三人で、わいわい喋りながら帰っていた帰り道を、私は一人で歩いていた。このまま帰宅すればお兄ちゃんが心配し、郁

斗が笑い飛ばすだろう。

そんな情景が脳裏に浮かび、私は真っ直ぐ帰る気にはなれなかった。だから、近くのお宮にあるブランコに腰を下ろし、ぼんやりと茜色の空を仰いでいた。

こつんと足先に何かがぶつかったのに気が付いて下を見ると、ビニールボールがぼんぼん……と転がっていくのが目に止まった。

近所の子どもが遊んでいるんだろうと、ブランコから降りて私はそれを追い掛けた。

丁度、ご神木の根っこに挟まったからそれを拾い上げようとして膝を折って……あれ？ そのあとどうしたっけ？ そのあとの記憶が曖昧だ。気が付いたら落ちてた。

—— ……コツンコツン。

考え事をしていたら本格的にうとうとしていた。ぼんやりと辺りを窺うと当たり前前だけど誰も居ない。

首を捻ると、もう一度コツンコツンと音が聞こえ、窓を叩く音に目を覚ました。私は身体を起こしてアンティーク調の可愛らしい備え付けの机の奥にある窓に手を伸ばす。

ここは一階だから、不審者とかだったら嫌だなと思い、カーテンをそっと開けて覗くと猫だ。黒猫だったから、即座にブラックを連想したが、あれは人間に猫耳と尻尾が付いていた。

これは猫だ。四足だし。

私が僅かに窓を開くと猫はするりと身軽に室内に入ってきた。

「迷子？」

ここって動物大丈夫なのかな？ 部外者は進入禁止みたいだったけど、まあ、猫は人じゃないからと余所見した隙に猫は人になっていた。

「ブラック？」

「万事順調みたいです。ね。良かった」

あまり要領が良さそうではなかったので、心配したのですが……と、失礼なことを口走ってベッドの隅に腰掛けていた私の隣に腰を降ろす。

反射的に距離をとると、にこにここと微笑んだあと、ふと瞳を細めて私の顔に手を伸ばし頬に触れる。

「泣いていたんですか？」

やはり私がいないと寂しい？ と、続けたブラックに、今度は頬に触れていた手を引っ剥がして私が眉を顰める番だ。

「そんなわけないでしょ。ていうか、猫だったよねさっきまで」

「私は種屋ですから。なんでも出来ますよ」

いやそこは猫だからでしょう？ それともブラックは特別製なのだろうか？

そんなことを思案していた私を他所に、ブラックは、私との距離を勝手に縮めていた。私には、それ以上逃げ場がないので身を強張らせることくらいしか出来なくて、緊張に喉がなるとブラックが涼しげな笑みを溢した。

「そのくらい、全てのことに警戒した方が良いです。でも、私のことは警戒しなくても大丈夫ですよ。貴方は大切なお客様。お貸したお金は踏み倒しても結構ですが」

とんつとブラックの綺麗な指先が私に刻まれた紋章の上に触れる。

「貴方は私のものですから」

すうつと瞳を細めてブラックが私の首筋にそつと口付ける。

抵抗したいのに身じろぎ一つ出来ない。とくんつとくんつと心臓の音がいやに大きく聞こえる。

―― ……コンコン

「マシロちゃん、起きてますかあ？ 寝てますよねえ、寝ましょうよお」

抵抗できないもどかしさに、きゅつと瞳を閉じると同時に、今度はきちんと扉の方からノックが聞こえた。叩いたのはアルファらしい、ぼんやりした声で外からぶつぶつとぼやいている。

その音に、はっ！ と、我に返った私は、ブラックをどんつと突き放して、扉に駆け寄り鍵を開けるとそつと肩で押し開いた。

「起きてました？ カナイさんが……マシロちゃんの部屋に何か入ったって僕を起こすんですよー。不審者あ？ 侵入者あ？ 何か困ってないですか？」

ごしごしと子どもみたいに目を擦りながら口にするアルファに、微笑ましくなりつつも何でそんなことまで分かるんだろうと首を傾げた。

「マシロちゃんは女の子ですし、ここは一階だし無用心でしょー。カナ伊さんが何か合ってからじゃ遅いからって外に簡単な結界を張ってたらしくて、さっきそれが揺れたって五月蠅いんですよお」

隠れてたらいいないから、一応チェックしますね。

と、私が少ししか開いていなかった扉に手を掛けてあっさりと開ききった。私は困らないが、ブラックは困るのではと思ったたら、私の部屋はものけのけからになっていた。

第七話…ある意味これはモツダイエツト?! (1)

翌朝「マーシーロちゃん。がっこいこー」という、小学生並みのアルファの声に誘われて、私は部屋を出た。

朝からアルファは元気だ。

カナイは、見た目どおり低血圧なのか、微妙に不機嫌顔をしている。

朝も昼も夜も関係ないように麗しいのはエミルだけらしく「おはよう」と穏やかな声を掛けられ、私にもこりと挨拶を交わす。

「可愛い髪留めだね? どうしたの?」

そういつてエミルは、そっと私の髪に手を伸ばし、昨日カナイに貰った髪留めに触れる。

石かガラスかは分からないが、赤く透き通った素材を蝶の形に細工したものだ。とても綺麗で気に入ったし、カナイから出来る限り身に着けておくようにいわれたので、素直に実行した。

「昨日カナイに貰ったんだよ」

別に隠すほどのことでもないから、素直に答えたのに、カナイには、瞬時に怒り出しそうな顔をされた。

エミルは、笑顔のまま「そっか良かったね」と私の頭を撫でていたけど、アルファは「へー、あのカナイさんが、女の子にプレゼントですかー?」と、カナイを冷やかすように小突いていた。

子どもみたいだ。

それに素直に反応するカナイも同レベルだと思う。

「そういえば、エミルから初級階位にも女の子がいるって聞いたけど、どんな子？」

でも、やっぱり貰ったのも嬉しかったし、それなりに感謝しているので助け舟を出してあげる。そう問い掛けた私に、アルファは「女の子ー？」と可愛らしく首を傾げる。

そして、やや思案したあと、ぽんっ！ と、手を打つ。

「エミルさん。あれは女の子じゃなくて、女の子の格好をした男ですよ」

「え？ そうなの？ 僕、実際に見たことないけど、そんな話を聞いたなと思ったのに」

「見たら直ぐに分かります。僕も班が違うのであまり縁はないですけど」

私は二人の会話を聞きながら、そうすると本当に初級階位での女子は自分だけかと肩を落とした。

異性に囲まれる逆ハーレムも悪くはないが、やはり私としては同性の級友も欲しいところだった。

「中級階位には居たよね？」

「ん？ あー、居るな。きつついのが……アレに染まるのはよしの方が良い」

うんざりといった風に口にしたカナイに私は首を傾げた。

寮棟から出たところで、アルファとカナイにくっついて行こうとしたら、私の手をエミルがすっと取って軽く引いた。

どうかしたのか？ と、見上げるとにっこりいつもの笑みを浮かべて「マシロはこっち」と促す。

それに気が付いたアルファは「あとでね」とにこやかに手を振って去っていく。

「マシロは、まだ入学手続きを踏んで無いから職員室だよ。素養があるのは、見る人が見れば分かることだからそれほど長くは掛からないと思うけど」

「あ、じゃあ、場所だけ教えてくれたら私一人でいくから大丈夫だよ。エミルだって授業があるんでしょ？」

みんなには、昨日からお世話になりっぱなしだ。

自分で出来ることくらい自分で何とかしなければ！ と、思った私に、エミルは刹那きよとんと目を丸めたあと、くすくすと笑って首を振った。

「駄目だよ。僕は、君の面倒を見ると決めたんだから。僕は、付いていかなくちや」

「え、でも」

「そういうルールなの。新入生の面倒は上級階位の誰かが請け負って見ることになるんだよ。誰が誰を見るかは自由だけど、マシロが嫌でないなら僕に任せて欲しいんだ」

因みに、アルファとカナイ……他にも居るんだけどね、僕が面倒見ているんだよ。

と、にこにここと付け加えたが、どう鼻屑目に見ても、面倒見てもらっている感じだと私は軽く噴出してしまった。

そんな私の反応にエミルは首を傾げたが、特に言及することもなく、納得したならそれで良いかと足を進めた。

職員室と呼ばれたところは雑然としていた。

並んだ机の殆どは、本と何かの瓶に埋もれ、どこで作業をしているのだろうか？　と思わずには居られない。

数人の職員が顔を上げて、入室してきた私たちを見たが、立ち上がったのは一人だけだった。

この場にそぐわず、長い萌黄色の髪を後ろで緩く束ね、涼しそうな面持ちにはモノクルを宛がった立ち姿も美しい人だ。

歩み寄るエミルと私を手招きすると、そのまま別室へと案内した。

「今日は学長居ないからね。勝手に使っても良いですよ。ここが一番広く使えますし」

それは片付ければ済むことではないか？　と、思ったものの口には出せず、隣りの職員室とは全く違い整然とした学長室に置かれていた応接セットに腰を降ろすよう勧められ、私はエミルに促され腰を降ろした。

「ええっと、紹介状は」

いわれて私は、昨日受付で提示したままだったことに気が付いて焦った。

でも、隣りに立っていたエミルが直ぐに「持っています」と答えて、ずっと机上に広げた。

暫らく、それを眺めていた教員は、興味深そうに「はーん」と、頷くと今度はまじまじと私を見詰めた。翡翠色の瞳は、私の何を見ているのだろうか。

「カーティスがね、女の子が入学してきて君に任せたといっていたから、大丈夫だと思って様子を見に行かなかったんだけど、こんな面白そうな子なら私も初日からお近づきになっておきたかったですねえ」

首を傾げた私に「カーティスさんは受付に居たおじさんだよ」とエミルが付け加える。

「ああ、ごめん。自己紹介がまだでした。私はラウ＝ウィル、生徒は大抵ラウと呼ぶから、君も同じで構わないよ。敬称は教諭でも教授でも先生でもさんでも様でも、君なら呼び捨ててもらっても良いですよー」

「ええっと、ラウ先生で……」

いまいち彼のテンションに付いていけない。

私は、恐る恐るそう答えるとラウ先生はホンの少し残念そうに「まあ良いか」と頷いた。

そして、さっきまで手にしていた紹介状を懷に仕舞いこむと、変わりに一冊の手帳を取り出し立ち上がると背にしていた学長の机を漁った。

「どこにあるのかなあ……インク瓶とペンは……と」

「卓上にありますよ」

その眼鏡は飾りですか？ と、いいなくなるほど、明後日などころを探していたラウ先生に痺れをきらせた。

仕方なく、机の隅を指差して伝える。

ああ、本当だ。と嬉々としてそれらを手にすると、元の席に戻ってきて最初のページを開くと「ここにサインして」と私に渡した。

「学長の印は、さっき私が勝手に押したし必要書類も適当に提出し
といたから、これで終わり。まずは初級階位で様子を見てもらって、
手に余るようなら進級試験も臨時に行うから安心して良いですか
ら。私も興味本位でからかいに行くので、そのときは相手して下さ
い」

本音が駄々漏れだ。

「……あれ、これはどこの文字？」

私が書いたサインを確認して首を捻った。

つい、いつもの癖で、普通に日本語でサインしてしまっていた。
焦った私に対し、エミルは特に何か問題があるようでもなくあっ
さり「癖字です」いい切った。

それは通じないのでは?! と、おろおろした私をラウ先生はち
らりと見たものの、変わらず笑顔のまま「そっかそっか」と頷いて
しまう。

「でもこれは身分証にも使うから、癖のない字で書いておいた方が
良いね。あとで書き直しておくの良いですよ。エミルが付き合っ
てくれると思うけど、絵姿貼って仕上げといてね。刻印はそれが終わ
ったからね。その他、質問事項はエミルに聞いてください。彼らなら
大抵のことは知っていますから」

今、何気なく『ら』と複数形になっていた。

エミル単体では、あまり役に立たないのは周知の事実らしい。私
はあははと笑いながら分かりました。と頷いた。

失礼しました。と、職員室をあとに陽光差し込む廊下を歩きながら、私は少し凹んでいた。

ぽつと「ごめんね」と謝罪した私に、エミルはその意味が分からずに首を傾げて問い返してくる。

「私、ここの文字書けなかったみたい。だからごめんね」

まさか、癖字を信じてないよね？ ラウ先生。と、続けた私にエミルはくすくすと笑いつつそうだよねえと頷いた。

「でもラウ博士は信用に足る人物だから、別に問題ないよ。僕らが出来れば伏せておきたい。と、思った意図もきつと汲んでくれたと思う。それに、今のところ日常生活に支障はないし、大丈夫。まだ種が馴染んでいないだけだよ。通常より速い速度で身に付くと思う。教えてあげるから気にすることじゃない」

エミルがのんびりと、穏やかにそういつてくると、本当に大したことではないような気がしてくる。

でも自分の失敗は失敗。

私は曖昧に微笑んで「ありがとう」と答えた。

「それから、その、エミル……私、自分で歩けるから大丈夫だよ」

じ……つと繋がれたままの手を見詰めてそう付け加えた私に、エミルは「そうだよね」と、同意しながらも一向に離す気はないらしい。

私が、だからと重ねようとしたがそれは遭えなく遮られる。

「マシロが嫌じゃないならこのままで良いよね？　この方が安心安全だし、急にどこか消えたりしないでしょ」

因みに、突然此方に落ちて来はしたがまだ消えたことはない。

第八話…ある意味これはモツダイエツト?! (2)

私は、きゅつと繋いだ手に力を込めて、毒なくそういいきったエミルに苦笑して「別に良いよ」というしかなく「恥ずかしいけど」と、付け加えたのはスルーされた。

「そんなことより、マシロ。君の世界ではどうだったか分からないけれど、こちらではあまり氏は名乗らない方が良い。サインもそうだよ」

「ああ、ごめん。気が付かなくて……でも、どうして? 同じ名前の人が居たら面倒じゃない?」

きよとんと問い返した私に、エミルは軽く首を振った。

「同名で嫌なら、どちらかが名乗りを変えれば良いだけだよ。下手に呪術とか掛けられるよりずっと良いからね」

剣と魔法が実在する世界は私が思っているよりも恐ろしいところらしい。

このあと私は、どうして薬師に女の子が極端に少ないのか身を持つて知ることとなる。

「マシロちゃんお昼食べないの?」

「……アルファ……あんなことやったあとに、よく食欲があるよねえ。私は、駄目」

食事は学食があるから基本的にそこで取るのだと、昨日聞いたものの……。

私はお行儀悪くテーブルに突っ伏していた。

一部始終見ていたエミルとアルファは楽しそうに人のくたびれっぷりを眺め、カナイは予想の範疇だったのか特にノーコメントだった。

「見慣れるまで僕が変わってあげるっていったのに、マシロは頑張り屋さんだよね」

「ただの意地っ張りだろう？」

失礼なっ！ 優しいエミルの言葉をあっさり切り捨てたカナイに、毒づきたかったがその元気もない。

あんな臓物だらけの授業なんてあって堪るか。

でも、今日が特別なのかと思ったら大抵こんなものだと、にこやかにアルファに答えてもらった。

挫折しそうだ。

かなり凄い速さで挫けそうだ。

だって、三時間ほどカエルの内臓を弄っていた。心臓・肝臓。腎臓に腸。睾丸に至るまで分けた。

そのあと、漬ける物は漬けて……それ以外は、乾燥させたあと粉末にする作業まであるらしい。今日はカエルだったけど、日によってモノは違うらしいが……やっтерことは基本そんなものだと言われ泣きそうだった。

そうして作られたものは、市場に出回ることもあるらしいが、基本的に上の階位クラスの生徒の調剤に使われるとか。

「何も食べないのは身体に良くないよ？　僕、チョコレート持つてるけどあげようか？」

女の子って甘いもの好きだね？　僕も好きだけど。

と、付け加えたエミルにげんなりと私が顔を上げると、向いに座っていたアルファが「初めて土気色って顔色を見たよ」と笑いやがった。

「それ、ちゃんと外で買ったんだろうな？」

「えー、やだなあ、僕がマシロに何か盛るわけじゃないじゃないか。真正銘、ちゃんと表通りのクリムラで買ったよー」

可愛らしい包みに包まれたお菓子を手渡され受け取ると、カナイが念を押すように確認した。

私じゃなかったら何か盛るのだろうか。

いや、明らかに盛ると明言しているような気がする。

「あとで食べるよ」

本当に食欲がない。ある意味モツダイエツトだ。

そして、このカリキュラムは基本的に授業らしい授業は午前中だけらしい。

午後はフィールドワークという名の自由時間。

図書館というだけあって資料は山ほどあるから自己学習が殆どらしい。

質問や、疑問があれば、職員もしくは、担当している上級階位の生徒に訪ね、解決し理解を深めていく。というのだけど、単に投げ

出されているだけのような気がするのは私だけで、これがここでは普通なのかな？

「今日の午後は、特に何もしないんだよね」

「そうだねえ、特に課題もないし僕は少し出かけるつもりです」

「僕はこの間のレポートを纏めるつもりだけど、マシロに何か質問があれば付き合うよ？ 別に急ぐことないから」

相変わらずな感じでそういつてくれたエミルに、私はお礼をいつて、首を振った。

「出来れば夕方、字を教えて欲しいけど……それまでは何かないかギルドに行ってみるよ」

力なく微笑んでそういった私に、エミルは心配そうな顔をしてくれたけど「マシロがそう決めたのなら」と頷いてくれた。

「それはそうと、私、あんな生臭いことやってたから変な臭いしなかな？ 自分じゃ分からないよ」

生ものっぽい臭いが染み付いているような気がする。

決して血の臭いじゃない。

そういつて腕の辺りで鼻を鳴らした私に、エミルはすつと近寄ると耳元ですんつと鼻を利かせた。

「大丈夫だよ。良い香りがする。女の子って甘くて柔らかい香りがあるんだね」

のんびり口にしたエミルに、他意はないと思うけど、思うけどっ！

「近いからっ！ 恥ずかしいっ」

ぐぐっと押し戻して、私は「行って来ます」と半ば逃げるようにその場を立ち去った。

「マシロは恥ずかしがり屋さんだよね？」

「いや、フツーだろ」

わたわたと食堂をあにとすると、廊下でぐいっと腕を引かれ物陰に引き込まれた。

—— …… 誘拐っ！ 強姦っ？ 何？

と、慌てた私の耳に聞こえたのは鈴の鳴るような可愛い声。

「こんにちは」

数回瞬きしてその姿を確かめると女の子だ。

豊かな赤毛を二つに縛って、フリフリのリボンが付いている。フランス人形みたいな顔立ちの美少女だった。

「貴方ね、初級階位に入った女の子って」

にっこり優雅な笑みだ。

彼女が微笑んだだけで辺り一面お花畑に早変わり。私には出来ない芸当だ。

でも、引っ張り込んだ力はかなり凄いものだったのに、この子じ

やなかったのかな？ 周りには人影は無いけど……。

「あたしはアリシア。中級階位に居るのだけれど……」

呆けていた私をキラキラの瞳が見詰めている。名乗るのも忘れて見惚れていた。

「えっと、私はマシロです。初めまして、宜しく、お願いします」
「敬語は結構よ。ここではたった二人きりの女の子ですもの仲良くしてね」

にこにこお花畑に襲われつつ、私はアリシアと握手を交わした。
それでは、失礼しようかと思っただけまだ引き止められて、まじまじと見詰められる。どうにも居心地が悪くて「どうしたの？」と尋ねると、きっぱりいい放たれた。

「地味ね、貴方」

すみません。本当にすみません。花も何も背負ってなくて。

「もうっ！ 女の子はそんなことでは駄目よ。もっと可愛らしく、綺麗に。所作は愛らしく。そうすれば、あたしのように生ものの解剖なんてやらなくても、中級階位に上がれるのに」

アリシアの話の内容がいまいち分からず「え？」と問い返すとアリシアは女の私が見ても愛らしい所作で「だからね」と話を続けてくれる。

「あのようなこと、ここには男性が星の数ほどいらっしやるのですからやらせておけば良いのよ。皆さんにやっていただけで、一番出

来の宜しいものをいただければ大丈夫」

「え、でも」

「貴方だってあのような作業が趣味の方というわけではないのしょう？」

「ええ、まあ」

「だったら、やってもらいなさい。貴方でも女の子なのですから、困っているように見せれば誰かが助けてくれるわ。エミル様も付いていらっしゃるでしょ？ にっこり微笑んで“お願い”すれば大丈夫よ」

そして、にっこり聖女の笑みで「それでも使えない男はクズよ」といい放った。

—— ……こ、この聖女様は黒い。

私は軽く眩暈を覚えながらも「善処します」とアリシアに解放してもらった。

カナイが染まるなどいていた意味がほんの少し分かった。大丈夫、染まりたくても染まれないから。

私に花を出す特技は無いわ。

第九話：医務室にはやっぱり白衣の天使（1）

それからの私は、夢だよね？ 夢なのに、大忙しだった。

リアルでも、こんな生活は送っていない。

基本的に、両親は共働きだけど、五月蠅い弟と優しい兄に構われて、のほほんと毎日平穩に生活していたのだ。

なのにここに来てからというものの、一生働いても、普通返せないという借金を背負い、午前中は慣れない解剖作業。時折行われる、薬草採取。午後は、ギルドでバイトのようなことをやり——基本的に店番とか皿洗いとかお届け物配達とか——本当に雑用ばかりだけど、夜は夜でエミルに付き合ってもらって文字の書き取りを習う。

これはほぼマスターした。

その上に、早く生もの解体作業から逃れたくて進級試験への対策も行っていた。

そんな生活が二週間くらい続いたある日。私は力尽き掛けていた。

「ありがとねー、マシロちゃん。これ余ったから持って帰りな」

「助かる！ もうこの時間じゃ食堂閉まってるし、どうしようかと思ってたの、ありがとう」

今日は、表通りの『クリムラ』というお菓子屋さんで店番だった。閉店まで居たから、その日の残り物のマフィンを幾つか紙袋に入れてくれた。そして私に気前よく渡してくれる。

私はそれを受け取って、もう暗くなってしまった表通りを急ぎ足で進む。

私には良く分からないが、ファンタジー世界だ。

電気はない。

でも街灯はあって、前にカナイに質問したら、あれは『魔法石』
というもので明るくなっているらしい。

何故、魔法石で明るくなるのかまで説明してくれたが良く分からなかった。だから表通りは、空は闇が支配していても足元が覚束ないほど暗闇にはならない。でも、薄暗いことには変わりなくて、自然と足早になるのに、今日は……

—— ……何だか、身体が重たい。

もうあと十分もすれば図書館に着くと思うのに、物凄くその距離が遠い。

私は、途中にある広場の一角で腰を降ろした。

お腹が空き過ぎて眩暈がするというわけでもないだろう。

ベンチに深く腰掛けて一休み。でも座っているのも気持ちが悪くような気がする。船に揺られているように、ゆらーり、ゆらーりしている。

ぼんやりしていると足元に何か小動物の気配を感じた。

—— ……猫だ。

そういえば、最近ブラックの顔を見ていないような気がする。

「お腹空いてるの？ 私、猫飼ったことないから分からないけど……マフィン食べるかな？」

ガサガサと膝に置いた紙袋から、可愛いカップに納まったケーキを少し千切って差し出してみた。

猫はいぶかしげに臭いを嗅いだあと、ぱくりと頬張って、まだ足りないのかぺろり……と、私の指先を舐めた……猫、だよねえ？

「美味しいです」

「ああ……ブラック」

暗いから全部黒猫に見えるんだと思ったら、本当に黒猫で本当にブラックだった。

前回同様。何の予兆もなく人型に戻ったブラックは、肩触れ合う距離に腰を降ろしていた。

人の指を口に含んだまま舌を動かされると、物凄くくすぐったいというか厭らしい感じがする。

でもそれを跳ね除けるだけの力がない。

「調子悪そうですね？」

「ん、平気。少し休憩してただけだから」

「私がいうのも違うような気がします、まだEランクの貴方がギルドで頑張ったところで、返済金額には遠く及ばないと思いますよ？　少し休んだ方が」

本当に、お前がいうことじゃないな。と、思いつつも口にする元気はない。

確かに、私もうすうす感じているけど……でも、何もしないということが出来ない貧乏性なのだ。

ふるふると頭を振ると立ち上がった。

ブラックとその話をしていても埒が明かない。しっかりと地面を踏んだつもりなのに揺れている。

「大丈夫ですか？ 足元が怪しい、過労ですよ。少し熱もあるみたいですし……」

「帰るだけだから平気だよ。私、カーティスさんに閉館時間見逃してもらってるし、寮監さんにも門限に目を瞑ってもらってるの。だから、ちゃんと帰らなきゃ」

エミルも、きっと今日の分の資料とか準備して待っていてくれるはずだ。

大丈夫だと念を押して、ブラックと別れ歩き出す。

大丈夫、もう直ぐ図書館だ。

背後でブラックの溜息が聞こえたような気がするが、私は無視した。そのせいか追い掛けては来ない。ほっとしたような残念なような複雑な気分だ。

「あれ？ 君、うちの学校の子じゃない。今日はお目付け役が一緒じゃないんだ。ああ、仕事の帰り？ だったらオレに付き合わない？ 遊びに行こう」

誰だろう？ あと百メートルくらいで到着するというのに、目指す先から出て来たのだろう生徒に掴った。

私に、一生懸命話し掛けてくれるけど、私の頭の中までしっかり届かない。

声が反響して五月蠅い。

無視していると癪に障ったのだろう、ぐいっと乱暴に腕を掴れ、殆ど持ち上げられるように引っ張り上げられる。

「いた、い」

痛みに眉を寄せ唸るように声を出すと、目の前がチカチカする。
眩暈と痛みに、ぎゅっと目を閉じると鈍い音と共に腕が解放され
肩を支えられる。

うつすら瞳を持ち上げると、視界の隅にブラックの綺麗な横顔が
映る。

「って何しやがるんだよ！」

「私は、乱暴は嫌いです。ですが、私のものに手を出すようでした
ら、貴方……命が惜しくはないのですね？」

底冷えするような冷たい声。

いつものブラックの声じゃない。

私は、現状を確認したくて目を開けたのに、それはならず……
短い悲鳴が数回耳に届いたところで意識が途絶えた。

次に目を覚ますと、知らないところだった。

天井が似ているから図書館だと思うけど、どこだろう？　ぱちぱ
ちと瞬きをしていると視界の隅に入った人影が木々が葉を揺らすよ
うに、穏やかで耳に心地良い声を掛けてくる。

「医務室ですよー。マシロさん」

「初めまして、こんばんは」

「はい、初めまして。私は校医のエルリオンといいますよ。大丈夫ですか？」

何か会話が変だ。この世界には変人しか居ないのかな。私の夢らしいよ。本当。

「って、何で私ここに居るんですか？」

がばりつと慌てて起き上がったら眩暈がした。気をつけてください。と、背中を支えてくれているのがエルリオン先生、校医さんか……これまた綺麗な人だなあ。

何というか、今更だけどこの世界の人は色鮮やかな方が多い。

エルリオン先生は、サラサラキラキラのプラチナブロンドが部屋の明かりに反射して輝いて見える。白衣のせいもあって白い印象の人だ。

「どうしてかと問われれば、そうですねえ、アルファくんが運んでくれたからです。行き倒れていたらしいですよ？ 過労ですねえ。若い子が倒れる原因じゃない。無理すぎ」

こつんと綺麗な指先でこめかみを弾かれた。

「色々事情もあると思いますが、とりあえず、コレを飲んで休むこと」

水の入ったコップと粉薬を手渡された。

「何が入ってるか聞いても良いですか？」

「知らない方が良い事もたくさんあります」

聞くのはやめた。

はあ、と溜息を吐いて薬を水で流し込み一息吐くと、私のほかに患者が居るのに気が付いた。

包帯でぐるぐるで人相すら分からない。

「あの、あの人は」

「ああ、あちらは広場で倒れていたのを、親切な街の方が拾ってき
てくださったんです。誰かと喧嘩でもしたんでしょう。時々あるん
ですよ。マシロさんが気にされるようなことではないですよ。生
きてますから大丈夫。手加減してもらったんでしょう」

ちよつとした喧嘩くらいで、あの姿になるなんて……派手な喧嘩
になったら死人が出てもおかしくないということだろうか？ 本当
に何かと物騒な世界だ。

私は、直ぐに倒れる前に声を掛けてきた生徒と、ブラックの言葉
を思い出したが、ちらともう一度だけ包帯人間を見て首を振ると、
あれは違うと思い込むことにした。

そんな私を心配そうに覗き込んでくるエルリオン先生に、大丈夫
だと苦笑すると、足元の重さに気が付いた。

「――…猫」

ぽつりと漏らした私の言葉に、エルリオン先生は「ああ」と頷い
て私の足元を見た。

ブラックが身体を丸くして眠っている。着いてきたんだ。

「あ、もしかしてここ動物駄目ですか？」

「別にちゃんとお世話出来るなら、構いませんよ。多分、飼ってる子も居ると思います」

エルリオン先生の言葉に胸を撫で下ろし、私は彼の静止も聞かずに部屋に帰ることにした。

ここで寝ていても、部屋で寝ていても、結局は一緒だと思う。

エルリオン先生の話では、エミルがかなり責任を感じてしまっているらしい。

私の自己管理能力のなさから来たことなのに申し訳ない。

私は、丸くなっていたブラックを抱き上げて腕に抱えるとお礼をいって医務室を出た。がらがらと引き違い戸をぴたりと閉めたところで首を捻る。

—— ……どこだ、ここ？

そんな私の心の声を聞いたのか、腕の中に居たブラックは、ひょいと廊下に降りて先導するように前を歩いてくれた。

自室に戻る途中、ふと足を止めたものの、今日はもう遅い。話は明日にしよう、と、エミルの部屋の前を素通りし、お向かいの二人へも声を掛けるのは遠慮した。

第十話：医務室にはやっぱり白衣の天使（2）

自分の部屋だけど忍び込むように戻ると、ブラックはすんなり元の姿に戻った。猫のままで居れば少しは可愛いのに。

「飼ってくれるんですか？」

「飼いません。私に貴方を養うだけの甲斐性があるわけないでしょ。ちゃんと帰ってね……と、いつても今から辺境まで戻れないよね。猫の姿なら泊って良いよ。ベッドの隅からこっちに来ないでよねっ！」

「マシロって少し人が良すぎませんか？」

お風呂場への扉の影で、こそこそ着替えていた私の努力を無駄にするように、ブラックが歩み寄ってきて扉により掛かり声を掛ける。ブラックに背を向けて、あっちへ行け！ といったが、予想通り無視された。

私は短く嘆息して、仕方なく着替えをすばやく済ませることにする。

どうせ相手は猫だ。猫。猫。猫だ。

「ねえ、マシロ？」

猫だと思い込もうとしている私の努力を、あっさり無視して、ブラックは背後から私を抱きこんでしまう。

「まだ体が熱い」

と、囁く声が首筋に掛かり心臓が跳ねる。

私は赤い顔を見られないように逸らして、離れろと僅かに抵抗するがやはり無駄だ。

「折角、貴方は人に恵まれたかと思ったのに、私の買い被り過ぎでした」

「……どういう意味よ」

心底残念そうに、そう呟くブラックに私は声を低める。

その反応がブラックには面白くなかったのか、回した腕に力が入り首筋に擦り寄ってくる。猫耳がふわふわしてくすぐったい。

「貴方がこんなになるまで止めなかった。私が傍に居れば、こんな思いさせません」

あんたが居なかったら、私は借金まみれになることもなかった。その辺のことは、ブラックの頭にはないのだろうか？

「私がみんなの忠告を無視したんだよ」

「無視させたんです」

「は？」

「彼らなら、貴方が何といおうと貴方を止めることも出来たと思います。それをしなかったのは、彼らの怠慢です」

ブラックの話は無茶苦茶だ。

まるで子どもがダダをこねているようで、私は肩を落とした。

「ブラック、良いからちよつと離れて」

無理にもがくと、ブラックは渋々腕を解いてくれた。

私は服を直して脱いだものを洗濯籠に放り入れて部屋へと戻る。

「ブラックは私に嫌われないの？ 好かれないの？」

私の問い掛けに、ブラックは可愛らしく首を傾げた。そして、暫らく黙って「そうですねえ」と口を開くと直ぐにまた私との間合いを縮める。

ゆらり、ゆらり……と、揺れている尻尾が私の視界の隅に移った。

—— …… 好戦的だ。

「どちらでも構いません。嫌われていても、憎まれていても、好まれば良いと思いますが、そんなに酔狂ではないでしょう？」

そつと伸ばされた大きな手が私の頬を撫で、そのままゆっくりと下がると私の左胸を衝く。

ちりつと刻まれた紋章が熱を持ったような気がする。強く衝かれたわけでもないのに、ぐらりと身体の揺れた私をブラックはこともなく支えて言葉を繋ぐ。

「いずれ貴方は私のものになる。嫌われていようと、好かれていようと、結局は何も変わりません」

頬寄せられて耳元で紡がれる台詞は恐ろしいほど冷たく、一方的なものなのに……私はなぜだか切なくなった。彼は孤独を内包している。それを垣間見たような気がした。

「ですが、愛されたいと思ってしまうのは……」

そんなことを考えていたため、ぽつりと付け加えた声が聞き取れず、聞き返すとゆっくり首を横に振り、何でもないです。と、口を

嚙んだ。そして、ブラックは、私の耳朵を甘噛みして舌を這わせる
と、暴れた私の抵抗に素直に離れてころりと笑っていた。

私の心は、まだ彼の切なさが拭いきれなかったが、彼自身がそれ
をなかったことにしているようだったので、それに合わせる努力を
した。

「兎に角。彼らの監督不行き届きです。彼らの責任に他ならない」
「友達を悪くいわないで！」
「友達？」

ブラックの重ねた軽口に眉をひそめた。そんな私にブラックはも
っと不機嫌そうに問い返したが、暫らく私を見つめたあと、諦めた
ように嘆息して「マシロは人が良いんです」と首を振った。

そして、続けて真摯な瞳になると私の名を呼んだ。何事かとその
瞳を覗き込むと囚われる。

彼の瞳は黒曜石のように、深く、蒼く、暗い。

この色鮮やかな世界に反して、彼だけはとても少ない色で構成さ
れているような気がする。妙な異質感を持っている。

異世界人である私に、ほんの少し似ているのかもしれない。

「利用出来るものは何でも利用すべきです。彼らはその利用価値が
ある。もちろん、私のことも利用していただいて結構です。心を許
し過ぎるべきではない」

「うるさいなっ！」

どんな高尚な弁をたれるのかと思ったら、くだらない話だった。

怒りを露わにした私に、ブラックは悲しそうに微笑むと「では、私は帰ります」と私が止める間もなく踵を返し、すっと猫に戻って窓から出て行ってしまった。

ぱたぱたと隙間風に揺れるカーテンが、むなしく音を響かせる。ブラックの瞳に、何故か僅かに感じてしまった罪悪感を拭うように息を吐き出すと、コンコンと気遣わしげなノックが聞こえた。

驚いて肩を跳ね上げると声の主はエミルだ。

私が、大きな声を出したから部屋に戻っていることに気がついたのだろう。

扉に歩み寄って開錠しようとする「開けなくて良いよ」と制された。

「もう遅いから遠慮するよ。マシロの声が聞きたかっただけなんだ。もう、大丈夫？」

「平気だよ。エミル、大丈夫だから……その、責任とか感じないでね？」

何か自分からいうのは自惚れ過ぎな気がするが、エルリオン先生の話や、声を押し殺しているとはいえ、エミルの覇気のない声を聞けば自然と分かってしまう。

エミルは、僅かに黙したあと、きつといつもの笑みを少し困らせたような感じで

「うん。ありがとう。マシロはゆっくり休むんだよ」

また明日。と締めくくると足音が隣の部屋へと消えていった。

私ってば、こんな異世界でも友達を困らせてしまっている。私が

誰かの役に立つことなんて、やっぱりないのかもしれない。
そんな自己嫌悪に陥って、ベッドに潜り込んだ。

翌朝一番で

「大馬鹿者」

カナイに嫌味をいわれた。

「マシロちゃん、食堂から消化に良いもの作ってもらってきたよー」

アルファの優しさが沁みる。と思ったら消化に良いというよりは、
アルファの好きなものだ。

ここに居座るつもりか。

「マシロちゃんが食べたいって、いったっていうと何でも作って
くれるんだ」

「アルファっていつでも自分の欲求に素直だよね」

ベッドに座ったまま、テーブルにどこか置かれていく料理を眺
めつつ悪態を吐いたのに、アルファはにこにここと機嫌良く「うん」
と頷いた。

毎回思うけどアルファの食欲は、体系に比例していない。うらや
ましい限りだ。

「エミルさんも食べますよね。朝も殆ど食べてないし」

マシロちゃんキッチン借りるね。紅茶淹れるよ。と、私が頷くよ

り早く動いている。

今日のアルファのテンションの高さは、きっとエミルに気を遣ったことだろうと、ふと気がつくと微笑ましくて、なんだか暖かな気持ちになる。

そしてアルファに気を遣わせている当人は、ぼんやりと宙を見つめていた。

「エミル、ほんっとーに大丈夫だから、そんなに凹まないで」

「ああ、ごめん。病人に心配させるのは駄目だね。うん。僕は凹んでるわけじゃないよ。ただ、反省点があったと後悔してたんだ」

世間一般ではそれを凹んでいるというんだと思う。

エミルは王宮育ちだから、時々浮世離れしているところがある。そうかー、と乾いた笑いを浮かべた私にカナイが「食べるなら食べてさっさと寝てろ」と頭を小突いた。

あんにエミルは放って置けといっているのだろう。

にしても、一人部屋にこんなに人が集まるとちょっと狭いと思う。アルファがひざの上に持ってきてくれたトレイのリゾットを少しだけ口にして横になった。

変な眺めだ。

女の子が一人病氣——過労だけ——で、寝込んでいるのだから気を遣いたいなら一人にしてくれるべきだと思う。

はあ、と溜息を吐いた私の傍に居たカナイが、ちらりと私を見て鼻で笑った。

「見張ってないと出掛ける馬鹿が居るからな」

なるほど、私は見張られているのか。

そこまで無謀ではないのだけど、ギルドに行っても迷惑が掛かるだけだろうし。

でもまだ短い付き合いなのに、心配してくれる気持ちは有難い。私は、ほんのり熱くなる体温を熱のせいにして布団を被った。

薬のお陰もあってか、直ぐに睡魔に襲われる。

―― ……ジャラジャラ

真白の机に腰掛けて突っ伏していたエミリオは、卓上に載っていた瓶を揺すっていた。

中には真白がギルドで受け取った謝礼が入っている。

殆どが銅貨だ。

倒れるまで頑張ったというのに、溜まっているのはたったのこれだけ。エミリオは、はあと溜息を吐いて誰にいうともなしに口を開く。

「これじゃ、結果が伴っていないよね」

ジャラジャラと、瓶を揺するのをやめて今度はぼんやりとそれを眺める。

ほんの少し開けた窓から柔らかな風が吹き込んでエミリオの前髪を揺らしていく。

「……マシロ、本当にお金を返す気なのかな？」

「そうだろう？　そうでないならこの様は何だ？」

テーブルに突っ伏して、昼寝を始めてしまったアルファルフアの腕を邪魔臭そうに本で寄せたカナイは、静かに本のページを捲りながらエミリオの話に付き合った。

「僕、マシロに手を貸そうかな」

「そうになると必然的に俺たちもそうなるんだな」

「カナイは嫌？」

机から頭を上げたエミリオは、カナイを振り返って問い掛けた。
カナイはやや黙したあと、頭を掻いて盛大な溜息を落とす。

「別に構わないが、外は危険だ。それよりもまずはこいつを送り返すことを考えるべきじゃないのか？」

「ああ、そうだね。マシロ……帰るのかな？」

ぽつりと呟いたエミリオから、カナイは顔を背ける。そして、ベッドの中で爆睡中の真白をちらりと見て「さあな」と首を振った。

第十一話：白い月青い月二つ月（1）

丸一日部屋に籠って寝ているだけをする、その翌日には気分爽快だった。

これだったら元の生活に戻れるだろう。

私はいつもと同じ時間に起き出して、制服に袖を通す。

午前中はいつも通りの授業を受けて、午後からはまた出掛けようと思ったらカナイに捕まった。

「もう大丈夫だから！」

「大丈夫かどうかじゃなくて、お前大事なことを忘れてないか？」

ずるずると図書館の中を引きずられ、私は生徒が調べ物をするために設けられた個室のうちの一つに放り込まれた。

中には既にエミルが座っていて、机の上に山と詰まれた本のページを捲っていた。

アルファは机の隅に足を引っ掛けて、ゆらゆらと退屈そうに揺れている。その足をカナイが払い落とすと、抜群の運動神経でバランスを取り直し、足を床に下ろした。

「フィールドワーク？」

「近いかな？」

私の質問に、ぱたんと本を閉じたエミルがにこりと微笑んで答えてくれる。昨日の様子とは変わって、いつも通りのエミルに戻っている。

—— ……良かった。

その様子に、ほっと胸を撫で下ろす。そんな心境を感じ取ってくれたのか、ふわりと笑みを深めて軽く頷いてくれたエミルに身体が火照る。どんな表情^{かお}をしても、絵になる人だ。

「つついカナイに任せっきりにしていたんだけどね？ そろそろ、僕らも向き合った方が良さと思うんだ」

そして、別の本を手にとって、ぱらぱらと捲りつつそういったエミルに、私は「何を？」と、首を傾げた。

「お前、帰る気ないのか？」

そんな私にカナイの呆れたような声が掛かる。

そういえばそうだった。

私には『元の世界に戻る』ということが一番だったのに、思わず背負った借金に目が回って後回しになってしまっていた。

心のどこかでは、まあ、夢ならそのうち誰かが起こしてくれるだろう。という、密かな期待もあったのだけど。

「僕は、マシロちゃんにはこのまま居てもらえば良いじゃないですかって、二人にいったんです。帰らなくても良いですよ？ マシロちゃん、ここでも生活していけますよー」

うん、臍物から解放されたらね。

「そういえば忘れてたけど、私、ここなら何か帰る方法が見つかるんじゃないかと思って、薬師の種を飲んだんだった」

ぶーっと頬を膨らませたアルファの向かいに腰を下ろしつつ、そういつた私にカナイは目にも明らかに呆れたようだ。

エミルは、優しく微笑んで「忙しかったからね」と取り成してくれた。そんなエミルに「そうなんだよね」と頷いて私も手近にあった本を手取る。

ところどころに紙が挟んである。

これは何？ と、私が首を傾げるとエミルが説明してくれた。

「君が外で頑張っている間に、カナイがある程度引っ張ってきてくれたんだよ。異世界の話っぽいことが書いてある、本と、記事を、ね？」

「カナイさんはこういう地味な作業が得意ですからね。見た目によらず頭脳派だし」

アルファってカナイのこと嫌いなのかな？ 時々言葉がきつい。いや、それともアルファの持ち味だろうか？

「あーあ、帰る方法なんて見つからなきゃいいのにー」

素直に項垂れて、やる気全くなしのアルファなのに特に嫌な気にならないのは、彼の気質のせいだろう。

なんだか基本的に恨みを買わないタイプだ。

なのに、我慢ならなくなったのかカナイの拳骨が落ちた。わざとらしく机につぶれたアルファを見下ろして、カナイは眉間にふっかい皺を刻む。

「こいつが帰らなかったら、最終的に闇猫に堕ちるのを待つだけだ」
それでも良いのか？ と、念を押されアルファは、腕の間からちらりと私を盗み見て「わかってますよー」とぼやいた。

「僕だって、マシロちゃんが闇猫の契約に堕ちるのなんて嫌だから、ちゃんと手を貸しますよ」

「アルファ、ご、ごめんね、なんか……」

あんまり嫌そうに口にするものだから、私までなんだかすまない気持ちになってきた。

しかし、謝罪した私に対してアルファは、にこりとお日様のような笑顔を向けて「僕、闇猫嫌いなんです」ときっぱりいい放つ。

「それに、マシロちゃんは大好きだから帰って欲しくなかっただけ。闇猫との契約が解けないって、カナイさんがサジ投げるなら、頑張っ

って帰れるように協力します」
「俺はさじ投げたわけじゃねえ！ もしもの時のため……というか、こいつは元の世界に元の生活があるんだから、どっちにしたって帰るのが道理ってもんだろう？」

元の世界に元の生活……か、当たり前のことなのに凄く昔の話に聞こえる。

こっちで気がついてから、本当忙しすぎた。

「はー……ブラックは可愛いんだけどね」

—— ……猫の時は。

ぽつりと口に出したところで、ギャーギャー揉めていたカナイとアルファも黙り、真面目に本を開いていたエミルまで顔を上げて私を見ていた。

私は何か問題発言をしただろうか？

「ブラックって、闇猫のことだろ？」

「可愛いんですか？ どこが？」

「え、だから、こう、耳の根元辺りをわしわし撫でると耳がふにゃーって垂れるとことか？ ま、まあ、可愛いかどうかはおいておいて、別にそんなに悪い感じじゃないけど？ 私と話しているときは……ちよつと距離は近いけど」

「闇猫に触れられるほど傍寄れるんですか？」

ぼそぼそと付け加えた私の肩を、いつの間にか傍寄っていたアルファが掴んで激しく揺すった。

「ここに来てからも会ってるんですかっ？！ 闇猫とっ！ 図書館でっ？！」

「え、あ、うん。時々来るから」

「本当に何もされてないですか？ 痛いこととか！ 怖いこととか！」

あわわ……。

がくがくがくと揺すられて頭の中がマーブルになりそうだ。「アルファ」と静かにエミルに名前を呼ばれ、アルファは、はっ！ と、我に返ると「ご、ごめんなさい」と詫びて掴んでいた肩を離れた。

「大丈夫だよ、本当。様子を見に来てくれてるだけだと思うし、心

配してくれてるんじゃないかな」

「……お前、馬鹿だな」

馬鹿だろ？ と、重ねたカナイに私は素直に不機嫌になる。

再び口を開こうとしたカナイを「カナイ」と静かな声で制し、エミルが穏やかに口を開く。

「あのね、マシロ。ここはね基本的に部外者は進入禁止なんだよ。だから、ここに入るためにはちゃんと許可が要るんだ。まあ、闇猫はいろいろと規格外だから……」

いいつつもエミルは苦い顔をする。

エミルがそんな表情を見せることは珍しいと思う。

基本的に春の暖かさを連想させる感じの人だから。いつでも穏やかなのがエミルで、負の感情を含んだような、要素とは無縁の気がしていた。

私は、あとの言葉が続かないエミルに首を傾げたが、直ぐに冷静さを取り戻したカナイによって当初の作業に戻った。

「エミル、これ何の話？」

無言でみんな本のページを捲っていた。

私は、他の分厚い百科事典のようなものたちとは全く違う、一冊の絵本を発見しページを開いた。

この世界の文字は大抵分かるようになってるのに、かなり難読だ。エミルは私の手元を覗き込んで「ああ」と頷いた。

「これはね二つ月の話だよ。童話だね」

「童話が何でこんなところにあるの？ それに私読めない」

「この本は原書だね。今は使われていないとても古い時代の文字なんだよ。カナイ、これ持ち出し禁止じゃなかったの？」

「本は読むためにあるんだ、大事に閉まっておいたって意味ねーよ」

尤もらしいことを口に出しているが、それはカナイの勝手ない分だろう。

カナイさんは本の虫ですからねえ。と、アルファがのんびり纏めた。

それに、この場合。エミルがカナイたちの監督も努めている。だとしたら、彼が厳罰とか受けることになるんじゃないかと思う。

それなのに、当のエミルはそんなことは気にしていないのか、特別声を荒げることもなく「バレないようにやっただよね？」とだけ念を押しカナイが頷くと、じゃあ良いや。と納得した。

「確かそれって、二つ月が一つに重なり赤い月になると、奇跡が起こるって話でしたよね？」

「物凄いはしょってる」

カナイが、仕方ないなと腰を上げると、私の手の中から本を抜き取り、すっと通った鼻筋に宛がっていた眼鏡を中指でくっつと押し上げる。

本を読むときは眼鏡を掛けるらしいけど、あまりに似合うというかツボに入るというか、兎に角、気に入らなかったもので、老眼鏡みたいだといったらかなり怒られた。

カナイは、かなりカルシウム足りてない系だ。
直ぐ怒る。

そんな明後日なことを考えていた私の心を読んだのか、ぎろりと睨み付ける。

「聞きます。聞いています。読んでください、カナイさん」

低頭平身の心でお願いしてみる。

別に頭は下げないけどね。

カナイは呆れたようだが、短く咳払いして話し始めてくれた。

「今は昔、白い月、青い月、二つ月の浮かぶシル・メシアの夜――。白い月には『美しいとき』が永遠に続く世界が広がっていて、白い月から使いとして送られてきた美しい少女がシル・メシアに、その美しいときを分け与えていました」

きょとんと聞いていた私に、カナイは少し頬を赤らめて「童話だ、童話っ」と念を押して話を続けた。

「それを羨む、力のみが溢れ、荒廃した世界が広がる青い月の民は、毎日シル・メシアを見下ろして暮らしています。」

そのとき、一人の少年がシル・メシアに降り立ち、白い月からの美しいときを奪おうとしたのです。

横暴な青い月の少年に、シル・メシアの民は苦しみ、美しいときを広めていた白い月の少女は心を痛めました。

そして、シル・メシアの民を救うため、青い月の少年を聖地へと幽閉しました……

そのときに力を使い果たした白い月の少女は、少年を幽閉した地で永い眠りにつき、シル・メシアからは美しいときが奪われてしまいます。

永く続いていた美しいときを失ったシル・メシアの人々は悲しみ、聖地ごと、誰も踏み入ることの出来ないようにしてしまいました。

人一人、動物一匹、やってこない土地で、自分と同じ地で長く眠る少女を見守るように……同じく長いときを過ごしていた少年は、いつしか少女に恋をしていました。

少年は、もう一度だけ、少女の美しい瞳と笑顔が見たくて、毎夜変わらず闇夜に浮かぶ二つの月に祈りました」

「結局どうなるの？」

つい先を急いだ私に、カナイは仕方ないなというように嘆息して、アルファと同じように話をはしってくれた。

「まあ、結局は二つ月が少年の願いを聞き入れて、二つの月が重なったとき、少年の封印と少女の眠りが解かれるんだ」

「そして二人は幸せに暮らしたの？」

ふーん、と繋いだ私にカナイは「そんなわけないだろ？」と肩を竦めた。

おかしい。童話なんて基本的に最後は何故か結ばれてハッピーエンドだ。

「二人はそれぞれに罰を受けるために、月に帰るんだよ」

くすくすと笑いながら話に入ってきてくれたエミルに、私は素直に、何で罰なの？ と問い返した。

「少女は、美しいときを途絶えさせた罪。少年は、干渉でなくてはならないシル・メシアへ干渉した罪」

「えー、なんか納得いかない。あ、でも二つ月が重なったら奇跡が

起きるんじゃないの？」

「うん。再び二つ月が重なったとき、シル・メシアには永く美しいときが戻ってくるっていわれているんだよ」

「月は血のように赤い色をするらしいけどな」

のほほんと口にしたアルファの言葉に、鼻先で笑ったカナイはそう重ねた。

「ふーん……何か良く分からない話だねえ。まあ、童話とか昔話っていうのはそんな感じかな？　で、それが私と関係あるの？」

ここにカナイが持ってきていたということは何かしら関連があるからだろう。

私の問い掛けにカナイは、ほんの少しだけ唸った。

「これは、まあ、童話だ。けどこの原書には、もう少し別な見解が書かれているんだ。まだ周期ははっきりしていないが、天文学者にいわせれば二つ月は本当に少しずつ近づいているらしい」

「そういえば最近近いよね、月」

本当に今更、というように口にしたエミルに、カナイは苦笑した。しかし、そのくらいこの国の人が月に無関心だということなのだろう。

カナイは、特に指摘はしなかった。

「近づいた月が重なったとき、赤色に変わるの、別の世界への扉が開くからじゃないかといわれているんだ」

「何だ！　じゃあ、マシロちゃんはそのときに帰れば良いんだよ」

ぽんっ！　と、手を打ってそう口にしたアルファに、カナイは「

「どうやって？」と突っ込む。

指摘されたアルファは、空を飛ぶとか、梯子をかけるとか……何とか答えを返そうとしているが無理っぽい。

いつものカナイの溜息が聞こえる。

「術師でも、月まで飛ぶなんて無理だ。本当に月が出入り口になるなら、もっと他に何かそこへアプローチするものがあるはずだ」

「それで、この本の山になるわけか」

積まれた本の上に腕を乗せてそういったエミルに、カナイは頷いた。

第十二話：白い月青い月二つ月（2）

その夜、私は寮の中央にある庭園の一角から、今日話題に上がった月を仰いでいた。

森林浴が出来そうなほど、背が高く枝葉を伸ばす木々の間から見える、白い月に青い月寄り添うように浮かんでいる二つの月。

本当に神秘的で美しい色だと思うけれど、大体月が二つある時点でおかしい。

それに、白と青は重なっても絶対に赤にはならない。

ファンタジーという言葉だけでは済まされないような気がする。

それにしても

「ブラックって嫌われてるよね」

はー、と溜息を吐く。

あの様子では三人ともブラックのことを快く思っていないようだ。私だって、そりゃ、無理矢理飲まれた種の代金なんてものを背負わされてしまったけど、でもやっぱり、今の私には必要なことだったわけだし恨むのは筋違いだ。

—— ……まあ、最初にいつてくれている、罰は当たらないと思うけど。

「月、好きなんですネ」

「珍しいだけだよ」

もう驚かなくなった。

いつの間にか傍に居たブラックの方を見るでもなく私は答える。

「今日ね、二つ月の童話を聞いたの」

「ああ、白い月の少女と、青い月の少年の話ですね」

やはりこの世界では有名な話らしい。

「悲恋だよねー」

しみじみと口にした私に、ブラックは「そうですか？」と答える。
私は、その答えが意外でブラックの方を見ると、彼の方が私の見解を不思議に思っているようで、愛らしく耳を下げ、首を傾げている。

――…アニマルセラピー……。

思わず腕を伸ばす。それに応えるように、少しだけ頭を下げてくれたブラックの頭を、ふわふわと撫でる。

「二人は結ばれなかったんでしょ？」

「結ばれないと悲恋だなんて、短絡的過ぎませんか？」

ブラックに指摘され私は眉を寄せた。

確かにそういわれたらそうかも知れないけど、大抵の場合好きな人とは結ばれたいと願うものだし、それが叶わなければ、やはりそれは悲恋ではないのだろうか？

ブラックは、彼の頭を撫でていた私の手を取ると、自分の指先と私の手を絡めつつ「マシロの手は小さいですね」と零し眺めて話

を続ける。

「少年の願いは少女が目覚め微笑むこと。別に、自分に恋をして欲しい。とは、思っていないんですよ。少女は目覚めた瞬間、少年と目が合ったんです。そのとき、まだ夢見心地であった少女は、酷く不安そうな顔をしていた少年に、穏やかな笑みを浮かべたんです。少年の願いは叶った」

「でも、お互い月に帰ると罰を受けたんでしょう？ その少女にとっては凄く理不尽だわ」

「そうですね。ですが、少女は自らが手を下す必要はなかったんです。その選択をすることが出来なかった少女は、やはり罰に値するのだと思いますよ」

—— …… ブラックの言葉は冷たい。

触れている指先にはちゃんと体温が合って、血が通っているのに、それすらも凍えさせてしまうほど、暗いもので覆われている。

「マシロは暖かいですね。指先も、頬も、とても温かく心地良い」

空いた手がそっと私の頬を包み、深い闇を映した瞳が私を覗き込んでくる。

鼻先が触れる距離で微笑まれ、意図せず目を閉じてしまった。

「ストップ！」

流されるところだった。
危ない。

私は唇に彼の吐息が掛かり触れる瞬間、突っぱねた。

突っぱねられた本人は、耳まで赤くなってしまった私を見てくすくすと楽しそうに笑っている。そして、気分を害して、怒鳴ろうとした私の台詞を片手で遮る。

何よ？ と、ぶっきらぼうに眉を寄せた私に、ブラックは、すと猫の姿に戻り私のひざに擦り寄ってきた。

そ、そんなことでご機嫌取ろうっていつでも駄目だからね！

駄目だからっ！ 駄目だけど……可愛い……。

ごろごろとのどを鳴らし、擦り寄る姿は猫以外の何者でもない。私は犬派だけど、ここに来て猫派に鞍替えしそうだ。

はあ、と嘆息し、そ……っと、その頭を撫でたところで「何してるんだ？」と声が掛かった。

振り返るとカナイだ。

いつも通り大量の本を抱えている。

私のためというよりも基本的に本が好きなのだ。虫といわれるだけはある。

そんなことを考えて、答え損ねていた私に眉を寄せカナイは歩み寄ってきた。

そして、私の膝の上に猫を認めて、口元を緩めた。

こいつもしかして動物好きなのか？

私の予想は当たっていたらしく、ベンチの隅に本を置くと、珍しいな。と、手を伸ばした。もちろん、相手はブラックだから、彼に撫でられるのは本意ではないだろう。

「っ！」

噛み付いた。

じわりと血が滲み、私は慌ててポケットを探ったが、女の子らしくハンカチとか直ぐに出てこなかった。カナイはそんな私を気にすることなく、ぱくりと口に含んで血を舐め取ってしまうと、すどんと隣に腰を下ろす。

「あまり夜に部屋から出ない方が良い」

「心配してくれるんだ？」

茶化した私にカナイは、至極真面目に当たり前だと答える。

そんな顔されたら意識しなくても頬が熱持ってしまう。

「エミルが、お前に手を貸すと決めたんだから、俺もそれを支援する」

「カナイとアルファってエミルの近衛だったりするの？ だから忠誠的なものを誓ってたり？」

王子様の近衛兵がたった二人というのは少ないような気がするが、そうだとしたらカナイとアルファのエミル最前線は分かるような気がする。

カナイは私の質問にやや迷ったあと、そうだなと頷いた。

「エミルが聞いたら友人だと怒るだろうが、俺はあいつに恩がある。だから俺の優先順位はあいつが一番だ。残念ながらお前は二番手だ」

「別に良いけど、私が二番で良いんだ？ アルファとかは？」

「あいつは良いんだよ。自分の身は自分で何とか出来る。俺よりはそういうのには長けてると思うしな」

ガタイが良いのはカナイの方だと思うけど。

そう思った私の考えは分かったようだが、カナイは特に触れなかった。そして元の話に戻すように「で？」と、問い返してくる。何の話だったっけ？ 私は逡巡したあと、ああと頷いた。

「月を見てたんだよ。部屋からじゃあんまり良く見えないから」

「月なら屋上庭園の方が良く見える」

そんなところがあるのか。

私の複雑な表情を読み取ったのか、カナイは「たまには図書館や寮内を探索してみるのも良い」と付け加えてくれた。

何だか宥められているような気がする。

今日のカナイはほんの少しだけ優しい。

やや沈黙してぼんやりと木々の間から覗く月を見上げていたが、その沈黙を最初に破ったのはカナイだ。

「お前の世界は、どんな感じなんだ？ この世界をお前はと思う？」

何か凄い哲学的な質問だ。

「ええっと、うん。私の住んでるところは特に変わり映えしないよ。ああ、でもこことは違うけど……ここは、何ていうか色鮮やかだよ。ね。エミルやラウ先生の髪の色なんて私の世界じゃ有り得ない」

カナイはそうでもないけど。と、続けた私にカナイは眉を寄せて「俺は地味だからな」とぼやいた。

確かにエミルやアルファに比べたら外見的なものは地味だけど、十分に男前だ。多分、モデルとかやったらかなり流行りそうだ。いわないけど。

「じゃあ、お前の世界も素養が全てなのか？」

いわれてその意味についてしばらく考えたが、素養とか、資質とか、そういうのはやっぱり同じように持っている。でも必ずしも、それに従っているわけじゃないと思う。

ふるふると首を左右に振った私を見てカナイは「そっか」と、頷くと空を見上げる。

「この世界は素養が全てだ。俺は二度闇猫に会ったことがある」

その言葉に私は驚いて膝の上のブラックに視線を落としたが、気持ち良さそうに眠ってしまっていた。緊張感も警戒心もないらしい。

「一度目は俺が七つのとき。辺境の町にある種屋に足を運んだ。種を飲みたかったんだ。俺の家は商家で、俺はその長男だ。でも、商才はなかった。ここで素養を見るのは七つの時だ。まだ七つの子どもにあれほど落胆した親の顔はキツイ。俺に備わった、俺には必要のない素養なんて認めたくなかった」

別に私の方を見ることもなく、ぽつぽつと話をするカナイに、私はなんとなく相槌を打つ。

「だから、種を？」

「ああ。でも、門前払いだ。種は貴重品だし、種屋の気次第で価格も変動する。お前はかなり吹っ掛けられてると思うが、それにサインしてしまっただからお前にも非がある」

横暴だ。

あの時は直ぐに覚める夢だと思っていたんだ。

「あいつは珍しいものが好きだ。そういう意味では、お前も十分珍しいから執着されてるのかもな」

物凄く不愉快な話だ。私は珍獣じゃない。

いつて軽く声を上げて笑ったカナイに私は不機嫌極まりない気分になった。

「俺も、俺も……、あいつにとっては珍しかったらしい。『君の素養を消すのは惜しい。種を飲もうと、飲むまいと、家は君を必要としませんよ』家など捨てろといわれた」

七歳の子どもにいう台詞じゃない。

複雑な気持ちで私は寝ているブラックのひげを引っ張った。

ふぎゃつと短い悲鳴を上げて前足で必死に顔を掻いている。

可愛い。

「俺は泣く泣く家を出て寮に入った。もう二度とあの屋敷には戻らないだろうってことは分かった。だから泣いた」

「戻らないって、自分の家なんだから素養なんてなくなたって帰る場所でしょう？」

カナイの言葉に私はようやく声を上げた。

私の台詞に、カナイは今まで見たことないくらい優しく、慈愛を含んだような笑みを見せて首を振る。

「お前の世界は幸せなんだな？ この世界では、己が持って生まれた素養を必要とする場所が家だ。生まれた家や家族じゃない」

そのとき、機嫌が悪くなったのか立ち上がったブラックは、ひょいと私の膝から飛び降りて庭園の奥へと足を進めた。

私は「ブラック」と呼び止めたが、こちらを見もせずにとっと闇に消えていく。

隣でカナイが「不吉な名前をつけてやるなよ」と苦笑していた。猫耳がみんな猫になるわけじゃないんだな。

「お前はやっぱり元の世界に帰った方が良い」

「初めて会ったときは、帰る必要ない。みたいなこと言ってたくせに」

可愛げなくぼやいた私にカナイは苦い顔をした。はー、と溜息を吐きつつ前髪を掻き回す。

「仕方ないだろ？ 異なる世界からの訪問者は落し物だ。何の弾みかは分からないが世界から外れたものだといわれている。落し物が、わざわざ自分の足で、元の持ち主のところへ戻ろうなんて考えないじゃないか」

それでみんな、私に同情して好意的に接してくれるのだろうか。帰る家も、世界もない、孤立してしまった私に。

思わず凹んでしまった私にカナイは気が付くこともなく「でも……」と話を続ける。

「お前を見ると、きっと唯の迷信だな。世界がわざわざ一人を必要か必要でないかと、分け隔てるわけない。それにそうだとすると、きっと逆だ。この世界にお前が必要だと思われたのかもしれない」

カナイの言葉に、え？ と顔を上げると「無能そうだけどな、お前」と笑われる。相変わらず失礼な奴だ。

「だけど、もしそうだとしても、お前の住んでるところは平和ボケしそうなほど平和なところなんだろ？ そんなところからわざわざこんな世界に鞍替えする必要はない。家族も居るだろうしな」

最後に付け加えられた言葉に私も頷く。

この世界も、それほど私にとっては悪くない。

でも、私には両親も居て兄弟も居る。私が居なくなれば、それこそ血眼になって探すだろうし、心配して心を折るだろう。

気持ちを新たにした私の頭を、カナイがよしよしと撫でていく。なんで今夜はこんなに優しいのかと感動しそうになったら、膝の上にはんつと重たい本を数冊載せられた。

「お前も半分運べ。アルファがいうように、俺は肉体労働に向いてないんだ、本は重いからな」

—— ……明らかにカナイが持った方が少ないっ！

額の青筋を押さえて、私は仕方なく本運びを手伝ってやった。

第十三話…王子様は案外スパルタです

この世界には雨なんてないんだろうか？

ずっと晴天が続いている。

そして本日も例外なく晴れ。

お日様が眩しい。

夜になると、白く青く輝く二つ月も、うつすらと青空の奥にその姿を潜めている。この空のどこを探しても、自分が暮らしていた世界がないというのはいまだに不思議な感じがする。

今日は珍しく授業らしい授業だ。

教卓には先生が居て、黒板に忙しくなくチョークを走らせている。こうやって普通に授業があるときは、エミルは自分の階位クラスに戻るらしくその姿はない。

堂々と居眠りをして、やる気全くなしのアルファの小脇を突いて起こす。可愛らしく目を擦って「何？」とその目が問い返している。

「聞いてなくて良いの？」

「良いよ、僕この授業三回目。それに僕、薬師の素養なんてないし、聞いてても無駄」

ひらひらと片手を振って答えてくれる。三回目、ということは何年もアルファは初級階位に居るということだろうか？

「実技になったら起こして、マシロちゃんを手伝ってあげますから」

と続けて再び頭を腕の中へ沈めてしまった。

今回は、血止めの薬の話だった。

前回は、化膿止めだったと思う。

その前は、傷口の縫合に使う糸を結う方法だった。

よっぽど怪我をする頻度が高いところなのだろうか？

そして、授業が終わってアルファと二人で食堂へ来ると、カナイとエミルが先に到着していた。

にこやかに手招きしてくれるエミルに誘われて、私たちは同じ席に腰を下ろす。席について初めて、私はいつも見ない顔が同席していることに気がついた。

「あれ？ 珍しいね、シゼ」

アルファは知り合いのようだと挨拶を交わす。

シゼと呼ばれた少年は、明らかに少年という年代だ。

十歳前後じゃないだろうか？ 肩口で綺麗に切り揃えられた髪が、彼が、くんと顎を上げる動きに合わせてさらりと揺れる。

—— ……綺麗な子だな。

だけど、明らかに私は好まれていない感じで、敵意むき出しに思えるのは気のせいかな？

「ええっと、私は」

「マシロ……さんですよ。薬師階級で知らない人は居ませんよ」

「あーあっと、そうなんだ？ 宜しくね」

「宜しくしません」

実も蓋もない。

ここに来て初めて、これほどまでにはっきりと敵意を剥き出しにされた。

困って目を泳がせると、その様子を穏やかに見ていたエミルが助け舟を出してくれた。

「この子は、シルゼハイト。十二歳になるんだっけ？ この歳で薬師の中級階位に居るんだよ。カナイのクラスメイトで、僕が見ている一人だよ。最近、マシロに構いっぱなしだったから拗ねちゃって可愛いよね」

「拗ねてませんっ！」

うん。拗ねるようなタイプじゃないね。

明らかに私に、一言物申したくて同席している感じだ。

のほほんとしているエミルには、この険悪な空気に気が付かないのだろうか？ 私と、シゼが、それ以上の会話をすることもなく、殆どいつも通りの食事が続けられる。

唯、一時たりとも私から目を逸らさないシゼの視線が痛い。

痛すぎるから、食事を途中で諦めて「いいいたいことがあったら、いったほうが良いよ」と顔を上げた。

カナイが拙そうな顔をして、こちらをちらりと見た気がする。隣のアルファからは興味津々の気色が伺えた。

エミルは、オートミールの味付けがいまいち気に入らないらしい。

この人が一番自由人だ。

「では、いわせて頂きますが。大体貴方も貴方です。エミル様がお優しいのを良いことに付け込んで、何から何まで面倒を見させたり、ギルドでも、高々Eランクで小銭稼ぎに精を出しているようですが、学生の本分は学業でしょう？ それを勝手に疎かにしておきながら、エミル様の夜の時間まで奪って、どこの誰とも素性も知れない貴方が」

「シゼ、僕、今日のこれあまり好きじゃないな。食べておいてよ。君は小さいから沢山食べた方が良いでしょう」

アルファみたいに。とにつこり自分のお皿をシゼのトレイに載せる。シゼは話の腰を折られて「え」と僅かに驚いたようではあったけど、押し返すこともせず「はい……」と受け取った。

—— …… 空気読め、エミル。

と私がそう思ったのも束の間。エミルは静かに言葉を続けた。

「それから、彼女が僕を選んだんじゃないよ。僕が、彼女を選んだんだ。彼女が僕に世話を掛けているんじゃない。僕が、世話を焼いているに過ぎない」

まあ、最初はカーティスさんに泣いて頼まれたんだけど。

頼まれた僕は実に運が良いと思うよ？ と、にこにこ付け加え、私を見て「ね？」と同意を求められる。

そんな風にいわれると恥ずかしい。

かあつと頬が赤くなるのを隠すように、私は自分のトレイに視線を落とした。

「でも、こんな得体の知れない女。種まで飲んでここに入り込んできたと聞きます。王家の手先かもしれないじゃないですか！」

「それはない」

三人綺麗にハモった。

私のことだけど、きっと私は蚊帳の外だ。話が見えない。

なっ！ と、シゼが息を吞んで顔を真っ赤にする。子ども相手に三人が声を合わせるのはちょっと可哀想だ。

「ど、どうしてそんなことがいえるんですか！ この人は……この人、は……」

—— ……人を指差してはいけないよ少年。

私を指差して、次の言葉を捜すシゼに、私は首を傾げる。暫らく睨んだあと、シゼは、派手な溜息について立ち上がり掛けていた腰を下ろした。

「……普通です」

失礼だな。その何が悪いんだ。

「ぶっ、くく。だよねえ、マシロちゃんは普通ですよ。誰かを魅了するほど美人でもないし、取り入るほど口も上手くないし、どっちかといえば不器用で一人で何でも出来るって突っ張って、結局何も出来なくて」

くつくつと笑いながらそう繋ぐアルファの小脇を衝いた。
ごめんごめんと謝っているが、あははという笑いが消えない。間違えていないし、前例があるだけに私も強くは否定出来ない。

「兎に角ですっ！ どっちにしても、こんな時期に転がり込んでくるなんて、そのことだけでも普通ではありません！ それじゃまるで月から堕ちてきた、みた、い……」

自分で口にしつつシゼは、改めて私をまじまじと見たあと「堕ちてきたんですか？」と問い掛けてきた。

私は、肯定も否定も出来ずに首を傾げると……シゼは、自分でいったことが有り得ないことか、的外れだと思ったのか「そうですね、そんなことあるはずない」とぶつぶついいつつ、刹那、顔を伏せた。

「僕は、貴方みたいな人嫌いです。何も出来ないくせに、何も知らないくせに、知ろうともしない、一時の腰掛程度の関係で……精々将来の足しにでもなるよう彼らに媚をうってあげば良い」「シゼ！」

彼の暴言はいつものことだとばかりに、好きなようにいわせているように見えた三人が、同時に低い声を出した。

うっと思を呑んだシゼと同じように私の身体も強張る。

「今のは彼女に失礼だよ。シゼ、謝って」

静かに嗜めるエミルに、私は「良いよ」と口にしたかったが、隣のアルファにそっと止められた。

でも、シゼは泣きそうな顔をしている。
きゅっと引き結んだ口元が僅かに震えている気がした。

マシロは誰にも恥じるようなことをしていない黙っている。と、
カナイにも小声で念を押された。

確かにそれはそうだけど、それに、この三人が私に媚をうられた
からといって、なびくとはとても思わない。

「シゼ」

「……すみませんでした」

息苦しくなるような重たい空気の中で、ようやく謝罪してくれた
シゼに私はほっと息を吐いた。

これで解放されるはずだと思ったのに、エミルは許さず「マシロ
に」と重ねる。

—— ……もう良いよ。もう良いから。

といたくてもいえない。

王子様は結構スパルタだ。

「マシロ、さん。すみませんでした」

「良いよ、気にしないで。ホント、誰も気にしないで」

お疲れさま、シゼ。という気持ちの方が強かった。

シゼは真っ赤な顔で、逡巡したあと「失礼します」といい退席し
てしまった。確かに今はもう居辛いよね？ 苦笑した私にエミルも
謝罪を加える。

「僕からもごめんね？　普段はもつと良い子で可愛い子なんだけど」

エミルの言葉にアルファとカナイは「いつもあんな感じだ」と小さな声で付け加えた。

私も、そうだろうなと思う。きっとエミルの前だけでは、良い子で可愛い子なんだろうな。

「ううん。本当に気にしないで、シゼの反応は普通だよ。ひょっこり出てきた私に嫌悪感を持つのは仕方ないから」

あはは……と乾いた笑いを零した。

それからこれからあとのことを聞かれて、私はギルドに顔を出すつもりだと答えた。

最近、ちっとも顔を出していなかったから、二人とも多少くらい心配しているかもしれない。調べ物もあるから、暫らくはあまり手伝えないことも伝えたいし。

ウサギ耳にも癒されたい。

「それなら、ついでにこれを持って行って、俺とアルファとエミルの登録もして来いよ」

少し厚みの出来た封筒をカナイに渡されて、私は「何？」と首を傾げる。名前が挙がったほか二人の方も見たがにこにことされただけだ。

「俺らの学生証。持って行って登録するようにいえば、あいつらなら意味が分かると思うから、聞きたいことはあいつらから説明して

もらえ」

今、聞きたいのにという、私の不満も分かってか、カナイは「さっさと行けよ」と手を振った。

こいつの方が、シゼよりよっぽど失礼だ。ぶすつとしたまま、食事の終わったトレイを持って返却すると食堂をあとにした。

第十四話：こうなると何が目出度いのか分からない

「なんだこれ……」

自由閲覧可能な棟まで出てきて私は尻込みした。

いつもならカーティスさんに軽く挨拶して、通り過ぎるだけのこところなのに人でごった返している。

カーティスさんが見えない。

しかし、ここまでできたら出入り口はそこだけだ。引き返して寮棟から出るというのもありだけど、私が思索している間に、私は一人の美女に掴った。

「貴方！ そう、貴方よ！ その制服、図書館の学生ではなくて？」

—— ……うわー…なくて？

だなんて話し方、初めて聞いたよ。

どうしよう、逃げ出した方が良くのかな、でも凄い用事でもないし。

仕方なく頷いた私に、彼女はやっぱり！ と、喜色を浮かべて駆け寄ってきた。くるっくるの美しい巻き毛が揺れる。

「珍しいですわね？ 図書館の学生に女性がいらっしやるなんて。でも、ここでお会い出来て宜しかったですわ。貴方、カナイ様をご存知かしら？」

「カナイ様？ って、どのカナイ？」

いや、一人しか知らないけど、様付けされるような人物ではないような気がする。

その私の反応に対峙した美女は、まああつ！ と、甲高い声を上げる。

うう、怖いよお。

「カナイ様といえば、お一人しかいらっしやいませんわ！」

だよねえ……。ぐっと拳を握り締めた彼女に私は肩を落とした。

「お前らまた来たのか……。去年来るなつつただろ」

ぐいっと、私を引っ張って彼女から引き離すと間に割って入ったのは、ご指名の『カナイ様』だ。

わっと集まっていた女の子たちの歓声があがる。

もしかしくなくても全員カナイ目当て。

—— ……この男の何処が良いんだ？

「お前は関係ないんだから、さっさと通り過ぎろ。行け」

人の群れを回り込むように背中を押され、話題の中心になるカナイが来たお陰でさっきまでとは嘘のようにあっさり外へ出ることが出来た。

それにしても、関係ないとは失礼だ。

刹那、むっとして眉を寄せたが、改めて考えると確かに……関係

ないか。

私は、溜息一つ零したあと「まあ、良いや」と当初の目的どおりギルド事務所へと向かった。図書館の外へ出たのは久しぶりかも知れない。足取りも自然と軽くなる。

「うわーっ！ 本当に本当？ あの三人がギルドに登録するって？」
「凄い、凄いよ。マシロ。君って偉大だ！」

カナイにいわれた通りに学生証を提示してそう伝えた私に、テラとテトは目を輝かせてウサギ耳をぴこぴこと振るわせた。

可愛い。

私は二人のテンションよりもウサギ耳に釘付けだ。

「そうなの？ それは、えっと、あの三人が凄いの？ それとも、もしかして私が凄いといいたいのか？」

「両方だよ」

声を揃えて満面の笑みを浮かべる。

さっぱり意味が分からないが私はとりあえず説明を促した。

「要するに、カナイたちは、君とパーティを組むといってるんだと思うよ」

「パーティっていうのは、一人じゃなくって複数で一つの依頼をこなす事をいうんだ。マシロみたいにEランクの子は、この方法が稼ぐには手っ取り早い。ギルドランクは、パーティメンバーの内の一歩高い位置に合わせられるからね」

「このメンバーならSランクの依頼もこなせるよ。ま、滅多にないけど」

「いっとくけど、Sランクの報奨金は半端じゃないよ」

ま、滅多にないけど。

重ねた二人は、にこにこそれじゃあ折角だから何か依頼を受けていく？ と続けてくれた。

私は、予定通り、丁重にお断りしようと思ったのに、盛り上がりきった二人は、全く聞く耳を持っていないようだ。長い耳はどうもお飾りだ。

「そうだね。カナイは久しぶりだし、あとの二人は初参加だから」

「簡単なのが良いよね」

「あ、あれが良いんじゃない？ テラ」

「そうだね、これが良いね。テト」

そして私は、配達の依頼を受けてしまった。

灯台まで灯火を運んで欲しいらしい。

三日以内に運べば良いということだし、貰った地図を見ても、そんなに遠いところではなさそうだ。これなら私一人でも何とか出来ると思う。

カナイは女の子たちの相手で忙しそうだし、アルファは面倒ごとは嫌いそうだ。

エミルは薬作ってる方が好きだと思うから、やはり滅多なことで迷惑を掛けるべきではないだろう。

うんっと、一人頷いたところで「あら、貴方」と、聞き覚えのあ

る声に引き止められた。声の主を探せばやはり先ほどの巻き毛美女だ。

「先ほどは助かりましたわ」

「私は何もしてないよ」

にこやかに、お礼をいわれて些か恐縮する。

本当に私は何もしていないし、あれはカナイが勝手に出て来たのだ。なのに彼女は優雅に首を振り「そんなことはありませんわよ」と微笑んだ。天使の微笑だ。

「去年のお誕生日のときは、出てきていただけのままで、凄く大変でしたの。ですが本日は直ぐに来ていただけましたし」

「それは偶然」

「違いますわよ。貴方ご用事があったのでしょうか？ わたくしに捕まってしまった貴方を見兼ねたのだと思いますわ」

それは買い被り過ぎだと思うけど。

私は、それ以上否定するのも肯定するのもやめた。

「そういえば、誕生日って誰の？」

「カナイ様ですわ」

だよね。

あれだけカナイを出せといっておきながら、他の人の誕生日であるはずはない。

それから私は、暫らくお嬢様の雑談に付き合わされ、やっと開放されると、ふむっと首を捻った。いくら世界が違うとはいえ、きつと誕生日は年に一回だよ。

だとしたら、やっぱり私も何か用意してあげようかな。

いつもお世話になってるし、一応、色々と協力的だし、なんだかんだいいつつカナイが一番私のために動かされているような気がする。

「カナイ！」

人払いが一段落したのか、図書館の入り口の階段に腰掛けて項垂れていたカナイを発見し、私は駆け寄った。カナイは、気だるそうに顔をあげて、声の主が私なのを確認すると再び顔を膝の間に埋める。

—— ……こいつ……。

「最初にアルファがいった通り、モテモテなんだね？」

「嫌味いうために声掛けたならさっさと寮へ戻れ」

おお、これはかなり不機嫌だ。

いつも大抵は機嫌が悪そうな感じだが、本当は無関心なだけで機嫌が悪いわけではない、と、分かるようになっていたが、今日は機嫌が悪い。

まあ、誕生日にかこつけてあんなにどやどや押し掛けられたら、疲れるのも分からなくもない。

一生私には縁のない光景だと思うけど。

「んな、ぶーたれてないで。顔上げなよ」

よっこいせ、と、カナイの前にしゃがみ込んで、さっき買って来たばかりの箱を差し出した。

カナイは怪訝そうに私と箱を順番に見た。

「誕生日おめでとう。知らなかったから、出来合いで悪いけど、ケーキ買ってきたよ。おばちゃんに無理いつて仕上げ作業はさせてもらったの」

私のちまちましたお仕事もたまには役に立つ。クリムラは私のお得意様だ。

「あと、これ学生証。失くしたらいけないから先に返しとくね」

箱の上に預かった封筒も乗せてカナイに受け取らせた。

カナイは呆れたような顔をしたが、何とか気分は上昇してきたのか素直に「ありがとな」と返してもらった。

何だかカナイに素直にされると恥ずかしい。

私は赤くなる顔を隠すように立ち上がった。

図書館に戻る気配のない私を不思議に思ったのか、何処へ行くのか問い掛けられた。

「うん。ちょっとギルドで配達をお願いされたから、それを持って行って来るよ。遅くなるといけないから、ケーキは四人で食べておいてね」

「四人？」

「シゼも一緒に、だよ。あ、私の分も置いてくれると嬉しいかも。全部食べても今日は許してあげるからね」

ひらひらと手を振りつつそういった私に、カナイは「はいはい」と、適当に返事を返して立ち上がり、図書館へと戻って行った。

さて、この地図によると町を出て、南東に下れば良いんだよね。門限までに戻れると良いな。

第十五話：甘い毒（1）

「うっそー！」

私は走った。

これまでの人生経験上最速だ。最速だけど鈍足だ。
私は直ぐに追い詰められた。

追い剥ぎとか、人攫いとか変質者とかその類なら想像付く。想像付くけど！ 今、現在進行形で、じりじりと巨木を背にした私との間合いを詰めているのは、多分、分かりやすく表現するなら魔物だ。

最初は犬かと思い、その後は狼かなー？ とか思ったらどれも外れていた。

濃紺色の毛に暗闇に浮かぶ四つの紅い目。何頭居るのか分からないけど、そんな動物見たことない。敵意明らかに唸っている。

私はここで、ゲームオーバーになるのだろうか？

夢なら覚める瞬間だろう。

でも覚めなかったらどうしよう。

食いつかれたらきつと痛いよね。

痛いとかで済めばいいけど、死んじゃうのかな？

死んじやったら、やっぱりもう家には帰れないよね。

私を囲んでいた一頭が、がっと地面を搔いて飛び出してきた。私は目を閉じることも出来ず身体を硬くして息を呑んだ。

頬を風が撫で、私の視界を闇が遮る。

—— ……キャウン！

私の目には一閃しか見えなかった。

でも、私を囲んでいた猛獣は吹っ飛び数匹はその場で灰となり風に撒かれ、残りは悲鳴のような泣き声を上げて走り去っていった。

私は見慣れたその姿に力が抜け、へなへなとその場に座り込む。情けないかな、腰が、抜けてしまった。

「ブラック」

「—— ……はい」

力なく地面にお尻を突いた私が掠れる声で名を呼べば、場に全くそぐわない静かな柔らかい声で返事が聞こえる。でも、その声に胸を撫で下ろす。

知っている声、知っている姿。

私は……助かった。

「大丈夫ですか？」

そんな私の前に、膝を折って顔を覗き込むと、そ……っと私の頬に触れる。

暗闇の中でも、私が蒼白になって震えているのは分かるのだろう。ぴたんぴたんっと地面を叩いていたブラックの尻尾が萎えてしまった。私以上に不安そうな瞳に、しょげてしまっている猫耳。優しく、でも恐々と頬を滑る指先。

私の不安や恐怖と、彼の感じているそれは違うものだと分かっているものの、ふ……と呼吸を取り戻すことが出来る。

「今の、何？」

「オーガですよ。この辺りには多いんです。夜行性ですから夜になると余計に……」

ブラックは戸惑いがちに私の問いに答えてくれる。

オーガ……？

夜行性の魔物。ということだろうか？ しかも、確実に肉食だと思われる。そうじゃなきゃ、襲われたり、しない、よね。

「私、死んじゃうかと思った。夢の中で死んだらどうなるんだろう、とか、痛いのかな、とか……私、そんなことばかり考えて」
「マシロ」

声が震える。

心臓が頭の中にあるぐらいどくと強く脈打って五月蠅い。震える身体を抱きしめても、全く震えが止まるような気がしない。溢れてくる恐怖に涙が浮かぶ。

目の前のブラックが、何か口にくれているような気がするが耳に届かない。

唯、唯、心臓の音が五月蠅い。

「泣かないでください。大丈夫。悪夢は去りました。大丈夫」

ふわりと視界が遮られて、柔らかい声が降ってくる。

ややしてブラックの腕の中だと気がついたが、今は突き放す余裕がない。

木々がざわめく音がする。

それらに混ざって聞こえてくる動物たちの鳴き声に意図せず身体が強張り、それに気が付いたブラックは、腕の力を強めてしっかりと抱き締めてくれる。いつもなら、離れろと暴れるところだけれど、今は、ほっと胸を撫で下ろした。

「落ち着きました？」

どのくらいそうして貰っていたんだろう？ 私には分からないけれど、ブラックの問い掛けに頷くと、腕の力が緩んで確認するように、また顔を覗き込んでくる。

あまり泣き顔は見られたくなくて俯いて顔を拭うと、ふふっと微笑まれた。

「それで、どうして貴方は今、ここで、一人なんですか？ 王子たちは何をやっているんです？」

本当に役に立たない。と、吐き捨てたブラックは怒りを露わにしていた。

「みんなは悪くないよ」

「また、お『友達』を庇うんですか？」

私の言葉が癪に障ったようだ。益々不機嫌そうにブラックが眉をひそめる。

「そうじゃなくて、本当に私が勝手に依頼を受けて、勝手に町を出たんだよ」

苦笑してそういった私に、ブラックは、ゆっくりと「マシロ、聞いてください」幼い子を諭すように語り掛けてくる。

「利用するのは良いと思います。ですが、信頼し過ぎるのは良くありません」

「私は彼らを利用したりしないし、信用出来る人たちだと思う」

私の言葉にブラックはゆっくりと首を振る。

「では、信用出来る人たちが、何故、貴方に外は危険だと伝えてくれなかったのです？」

「それ、は……」

みんなのことは好き。信頼している。

良くしてもらっているし、大切にしてもらっていると思う。

だからこそ、私も迷惑をかけたくなかったし、わがままをいって困らせるようなこともしたくなかった。

「何故、今貴方の傍に居ないのですか？」

「だか、ら……」

だから……だから、一人で出た。

王都の門は、常に開かれている。いつだって、出入りは自由で、だから、外が危険だなんて微塵も思わなかった。

私は何も知らなくて、何も知らされていなくて……どうして、知らないの？

不安の種がぽつりぽつりと私の中に撒かれていく。

「貴方は私が守ります。いつかのように、今日のように……」
「ブラック？」

「契約に従い、私とともに在ってください。貴方の背負う重荷は何もなくなります」

撒かれた種は、ブラックの声で栄養を得たように、私の中で育ち、内側から支配していく。

恐怖で麻痺してしまった頭の中に、ブラックの甘さは麻薬のように私を虜にする。

「私が貴方を、守ります ——」

私……わたし、は……

第十六話：甘い毒（2）

—— ……ズンッ

一瞬地面が揺れたような気がした。

でも、それはすぐに現実だと目の前に叩きつけられる。顔を上げれば、ブラックの背後で、どんっ！ と土柱が幾本も上がり濛々と土煙を巻き上げた。

何？！ と驚きに、ブラックの腕をきゅっと掴むと、ブラックがふっと笑ったのが分かった。そして、そっと頬寄せて「じっとして下さいね」と耳打ちされる。

くすぐったくて肩を竦めた私の遮られた視界が晴れるより先に、聞き慣れた声が怒鳴る。

「闇猫！」

キラリと月の光を浴びて一閃が煌いた。

—— ……私の頭上で……。

ず、ずずつと鈍い音を立てて、私が背もたれにしていた木が倒れた。ずんつと地面に大木が倒れると地面が震えた。

「危ないですね。いきなり大剣を振るうなんて、マシロに当たったからどうするんですか？」

狙われたのはブラックだ。

その当人は、身軽に私から離れて次の瞬間には傍の木の枝で楽し

げに笑っていた。

「黙れ！」

普段からは、想像も付かないような声で怒鳴ったのは、アルファだ。

アルファは、身の丈ほどある大きな剣を鬼神の如く揮う。

大きな一振りごとに、犠牲になるのは木だ。

狙われているはずのブラックは、簡単に立ち位置を変え、一向にアルファに捉えることは出来ない。

「マシロ、立てる？」

アルファに気を取られていたら、そう声を掛けられた。

振り向くとエミルが心配そうな顔で私を見つめていた。私が、大丈夫だと頷くと、ほっとしたように微笑んで、少し離れたところに居たカナイに「大丈夫だって」と手を振る。

「それから、何か持っていない？」

「何かって何？ えっと、灯台に届けるランタンは……あ、あった。これはあるし、手紙も……あれ？ ない」

私は、ギルドから出たところで出会った、巻き毛美少女モリスンに預かった手紙がないことに気が付き慌てて立ち上がると制服のポケット全てを漁った。

「探し物はこれじゃないですか？」

突然、私の背後に戻ってきたブラックは、あっさりと私を背後から抱きこむ。

そして、ひらひらと目の前で私がモリスンから預かった封筒を見せる。私は小さく嘆息して「返して」と、何とか自由になるところまで手を持ち上げて返却を求めたが、ブラックは人の耳元で「嫌です」と囁く。

くすぐったくて肩を竦めると、いつもと変わらず楽しそうにくすぐすと笑う。

先ほどまで、鬼の形相でブラックに襲い掛かっていたアルファは、私たちの傍に歩み寄って来てブラックを射殺しそうな目で見ている。

「マシロには返しませんが」

駆けつけてくれたのだろう三人に、まるで見せ付けるように、ブラックは私から離れないしエミルも苦い表情を崩さない。

「じゃあ、俺に返せよ。それは俺の責任だ」

まったく、そんなに近くに居たら狙えないだろ。

と、簡単に怖そうなことを口にするのはカナイだ。面倒臭そうに歩み寄ってきたカナイは、すっと手を伸ばす。

「折角、もう少しでマシロが決心してくれそうだったのに、本当に残念です」

確かに空気に飲まれそうになっていたのは認めるけど、それと今のこの状況が同じ土俵の上にあるとは思えない。

「仕事が増えるのも面倒ですし、貴方がそれほどまでに裁きたいと

おっしやるならどうぞ」

ブラックが手の中にあった封筒を弾くと、手にしようとした私の手をすり抜けてカナイの手元に収まった。カナイは、こともあるのか勝手に封筒を開けて中身を確認すると、何の手品かあっさりと燃やしてしまう。

止める間もなかったが、文句の一つも口にしようとして口を開いた。私が文句を口にするより先に、あまり聴きなれない声が私の台詞を遮った。

「マシロを解放していただけますか？」

凍りつきそうな冷たい瞳でブラックを見据えてエミルはゆつくりと口にする。エミルの声だとは最初気がつかなかった。

その迫力に私の方が身を縮めるのに、ブラックは飄々とした態度を変えることなく、背後で見えないが笑っているのだろう。

「名残惜しいですが、これ以上マシロが怯えては可哀想です。また、暫らくは貴方方に任せるとしますよ」

近いうちに会いましょう。と、耳元で囁いたブラックは、私のこめかみに口付けて、冷たい唇が離れると同時に拘束が解け、ブラックの姿も消えた。

―― …… 神出鬼没な奴だ。

よろりと数歩よろけた私を、エミルが、ふわりと抱き込むように受け止めてくれる。「大丈夫？」と尋ねてくれつつ、ごしごしと私のこめかみを拭った。

「大丈夫だけど、その……痛い、エミル」

じわりと熱持つほど擦られて、眉を寄せた私に、エミルはやつと気が付いたのか短く詫びた。

「それから、その、アルファ、物騒なものしまつて」

「僕の愛刀なんだけど、良いですよ。マシロちゃんが怖がるなら今はしまいます」

さっきまでの殺気は一切感じさせず、にこりといってどこから出したのか鞘を手にすると、するすると納めていく。

ちんつと柄が鳴ったところで、大剣はその巨大なりを縮め……普段アルファがベルトに下げているキーホルダーになった。

―― ……あれ、唯の飾りじゃなくて武器だったんだ。

「あんまりばさばさ大木を伐採するなよな。ほつといったら駄目かな、駄目だよな。ったくアホアルファ」

ぶつぶつ聞こえると思ったらカナイだ。

傍でさっきアルファが切り倒してしまった木に向かっている。

カナイが手を掲げると、木の根元から光が集まり傍に落ちていた幹を引き寄せると元の位置に戻り、その光が消える頃には元通りになっていた。

「何なら、即成長葉使う？ 少なから持つてるけど」

「……それ使ったら切り倒された幹を何とかしないといけなくなる

から今回は遠慮する」

今夜はここで野営だね。

というエミルの言葉で野宿決定らしい。

私は、オーガから逃げる間にすっかり道を外れていて、見つけるのに苦労したらしいが、そのオーガが鬼のようにこの周りに集まって居たため、思ったより早く発見出来たようだ。

「でも、最初に襲われたあとは何もなかったけど……」

「闇猫が居たからね。結界が張ってあったんだよ。それでその周りにオーガが集まっていたわけ。まあ、結界のお陰でカナイも安心して大技使えたんだけど」

エミルに、説明されて私はあの巨大な土柱と爆発を思い出す。抱えた膝に顔を埋めるとエミルが傍で「遅くなって本当にごめんね」と、もう何度目かという謝罪を口にしてくれる。

悪いのは私なのに、カナイ以外は責めない。カナイには拳骨を貰った。お小言も貰った。

今もぶつぶついつている。それにしても

「エミル……あの、私もう大丈夫だよ」

「僕が大丈夫じゃないから、もう少しこのままで良いかな？」

そんな風にいわれたら嫌とはいえない。

いえないけど、座り込んだ私を抱きこんでくれている状況はちょっと、いや、たくさん恥ずかしい。

「はい、羊歯を拾って来ましたよー。お水も確保して来ましたし、カナイさん、火。火出して」

「俺を火種みたいになうな」

「火種ですよ。早く！ お腹空いたし食事にしなう」

ばらばらと私たちの前に羊歯を積んだアルファは、早く早くとカナイにせっつき、カナイは渋々という風にそこへ手を伸ばした。

それとほぼ同時に、ぼっ！ と、火の手が上がり羊歯に燃え移る。

「あの、今更なんだけど……二人とも薬師だよね？」

私の問い掛けに、アルファとカナイは顔を見合せて首を傾げたあと、何か納得したのか「ああ」とお互いに頷いた。

「いってなかったけ？ 僕は、騎士階級で大剣使いなんですよ」

「俺は大聖堂出の魔術師だ」

「因みにカナイさんは最上級階位マスタートークラスだから超エリートです」

知らなかった。

知らなかったよ。

呆氣に取られつつも微妙に納得する。

だからアルファもカナイも薬師としては伸びないと分かっていたんだ。

もともと素養がないから。

いわれて見ればアルファは自分で何度もそういつていた。

「何か僕だけ秘密がないね」

寂しいっ！ と、いつてぎゅううつと強く抱きしめられ声が潰れる。

いや、もう。エミルは、王子様でした。って、だけで最初から驚かせてもらったから十分なんだけど、そんなこと聞いてくれないよね。

「さっきから気になってたんですけど！ エミルさん、マシロちゃんに近い！」

もっと早く突っ込んでよ。

近いとか、近くない、って話じゃなくて、アルファもズルイーじやなくて離れるようにいつてください。

「僕も」

乗っかるなーっ！ 調子に乗ったアルファに正面から抱きつかれ、サンドウィッチ状態になってしまう。

潰れた蛙のような声を上げた私に、エミルとアルファの笑い声が聞こえる。因みにカナイの冷静な溜息も耳に届いた。

じたばたと暴れる私にエミルがそつと囁く。

「もう、怖くないよね？」

え？ と、問い返そうとした私の声は聞こえなかったのか、くすくすと笑いながら、ようやくとアルファを引っ剥がして、自分も私

から距離を取ってくれた。

望んで解放されたはずなのに、何だか肌寒い気がする。

「ココアくらいなら淹れられるよ。飲むよね、マシロちゃん。あ、それからこれ毛布です。こんな季節でも、夜は少し肌寒いから着たほうが良いよ」

アルファが下げていた小さな鞆からは魔法というか……未来の猫型ロボットのポケットのように何でもかんでも出てくる。

きよとんとしていた私に、エミルがアルファから受け取った毛布を肩に掛けてくれた。

第十七話…氷の微笑

ほわほわと暖かな湯気を上げるココアを両手で包み込み、ぱちぱちと燃える羊歯を見つめているとキャンプみたいだ。

テントはないけど。

ぼんやりとそんなことを考えていると、エミルがふと私の名前を呼んだ。私が顔を上げるといつもの声で問い掛けてくる。

「僕、氏は名乗らない方が良いつて伝えそびれていたかな？」

いつもの声だ、いつもの声だけど……目が笑ってない。

少し？　たくさん？　その量はわからないが、私は彼の琴線に触れたらしい。

私は恐る恐る「聞きました」と答える。すると、だよねと返してくれる。

静かに私の続きを待っているようだけど、私が名前を知らせたのは、ブラックと、ラウ先生と……モリスンだ。

「えっと、その、ですねえ……モリスンが名前を聞くから教えたら『あら、どちらのマシロさんかしら？　わたくしとお会いしたことありませんの？』って聞かれて、ヤマナシだけど、多分、会ったことないと思うよって……伝えて、それでそのあとは、何処へ行くところなのか聞かれたから、灯台に行く話をしたら『ちょうど宜しかったですわ。わたくし今からギルドへ依頼を受けていただきに向かうところでしたの。灯台守の方にお手紙を……お願い出来るかしら？』っていわれて、さっきカナイが勝手に燃やした封筒を受け取ったんだけど、その、えっと、どの辺が駄目？」

私の話に、カナイは頭を抱えエミルは眉を寄せて微笑んだ。唯一、アルファがモリスン女史の物真似が似ているとうけていた。

「全部駄目だ全部！ お前おかしいだろ？ 何でこっちに來たばかりのお前を知ってるかもーなんていう奴が居るんだよ。それにいつが自分でギルドへ依頼なんかするもんか、顎で使える連中が山ほど居るんだ。お前の、その咄嗟に嘘がつかないところも、直ぐに他人を信用するところも、美德なのかも知れないがここでは危険だ」

カナイに、ぽんぽんぽんぽん言葉を重ねられ、軽く凹む。

そんな私を見兼ねてくれたのか、エミルが「カナイ」と止めてくれた。エミルに止められたカナイは、小さく咳払いしたあと「兎に角、だ」と続ける。

「今回は俺が七割くらいは悪かった。あとの三割はお前の独断が悪い……悪いと、思う。けど、悪かったよ」

苦い顔をしたまま、頭を下げたカナイに面食らう。
首を傾げた私にアルファが楽しそうに口を開いた。

「カナイさんが、ファンの子にきちんと対応してないからこんなことになったんですよ。モリスン女史については、マシロちゃんにそんなに非はないよ。だって、カナイさんがマシロちゃんは特別一つて態度を取ったのが悪いんだから」

「取ってねーよっ！」

「取ってなくても、そう取られたのなら同じだと思うよ」

話が見えない。

「モリスン女史だって、まさかマシロちゃんが本当の名前を名乗っ

てるなんて思わなくて、ちょっとした気晴らしに呪詛ったんじゃないかなあ？」

気晴らしに呪詛ったー？ いやそんなもの、気晴らしにするようなものじゃないと思う。

どんどん難しい顔をする私にカナイは再度詫びた。
別にカナイを責めるつもりはないけど

――…何というか怖い世界だ。

「獣を呼び寄せるように仕掛けられてたんだ、あの封書の中身は」

そういえば、ちょっと書き足すからといって何事か書き足していた。

私の名前を足して完成させていたのか？ やれやれと肩を落とした。現実世界でも夢の中でも私はどうやら男絡みで厄介ことになることが多いらしい。

女冥利に尽きるのかな？ 間違った情報だし全く嬉しくない。
みんなの話では、さっきのような獣が襲ってくるのが、絶対にならないとはいえないが、あんなに大量に集まってくることはまずないらしく、あの封筒のせいだったらしい。

私は唯の気晴らしで死に掛けたのだろうか。
これからはもっとたくさん気をつけよう。

「……アルファ？」

「ん？ ああ、やっぱり眠れない？」

火を絶やさないようにしてくれたのか、もしくは、さっきのオーガがまた襲ってこないように見張ってくれていたのかは分からないが、火の傍でぼんやりとしているアルファを見つけた。

身体を起こすと、身体のあちこちが痛む。

確かにこんな経験したことないし、こんなところで朝まで爆睡は無理だ。

もう少し傍においでよ。というアルファの言葉に従い、私は毛布に包まったまま、アルファの隣に腰を下ろした。

「火の番？」

「うん、そんなところです」

あとの言葉が続かない私の心配に気が付いたのか、アルファは「オーガは来ませんよ」と笑いながら口にした。

でも、あれだけの数が居たのだから、戻って来てもおかしくはないと思う。

どうしていい切れるのか分からない私に、アルファは説明を加えてくれる。

「来るけど、ここまでは来ないという意味。マシロちゃん、あれ見える？」

アルファが、焚き火を弄っていた枝で指した方を見ると、紅い光がちらちらと点滅している。

獣の瞳かと思って思わずアルファの袖を掴んでしまった。そんな私に、アルファはほんの少し驚いたようだったけど、ふふっと笑っ

て話を続けてくれた。

「大丈夫。あれは境界石。それが、あそこであっちとこっちと……あります。それを繋いだ内側には何も入ってはこられませんよ」

「そ、そうなんだ」

「うん。そう。石はエミルさんが作ったものだし、それを結んだのはカナイさんだからこれを超えてこられるとしたら……不本意だけど闇猫くらいです」

苦しそうにそう締めくくったアルファに、私は刹那迷った。でも、どうしても聞きたかった。

「アルファは、アルファはどうしてブラックが嫌いなの？」

私の質問が余ほどのを外したものだっただろう。

アルファは、まじまじと私の顔を覗き込んで不思議そうな顔をしていた。

紺碧の色をした瞳に焚き火の色が移って不思議な色で揺れている。

「マシロちゃんは好きですか？ 貴方に嘘を吹き込んで、そして問題をより一層ややこしくした張本人なのに」

「嘘……は、多分吐いてないと思う」

「なるほど」

好きか嫌いかと問われれば私は何と答えるのだろうか？ 私は、答えかねて唸ったが、アルファは特に私からの明確な答えが欲しいわけではないらしい。

私が答えを出す前に話を続けた。

「闇猫は、嫌悪の対象になるか、崇拜される対象になるか、二つに一つです。その間は有り得ない。僕らはたまたま三人とも闇猫を快く思っていない。でも、それとは逆に、崇拜している集団が居ることも本当です。まあ、そのうち彼の首は僕が取りますから、マシロちゃんは心配しなくて良いですよ」

にこりと、いつもの可愛らしい笑顔でそう締めくくる。

そんなアルファの、どこらへんに私は安心したら良いのだろう。

私は、ブラックにも死んで欲しくなんてないし、アルファにだってそんな重荷を背負って欲しくはない。

そう思うのに、そこまでアルファを思い詰めさせる原因が一体どこにあるんだろう？ でも、きっともうその話を今してくれるつもりはアルファにはない。

「そういえば、マシロちゃんが危ないって教えてくれたのシゼです」

突然、話が飛んだのにも驚いたけど、拳がった名前にも驚いた。私のことをあんなに嫌っている風だったのに、わざわざ助けになるようなことをするとは思えなかった。

「シゼは、自分の良心に従ったんです。唯、異質に扱われるから少し捻くれてて、可愛げがないだけです。シゼを見ていると、昔の自分を見てる気がします」

天使のような容姿で、ちょっぴり毒が有るけど明るいアルファの言葉とは思えず、私は首を傾げた。アルファは焚き火の炎を見つめながら、ぼつぼつと話してくれる。

「僕の家は、騎士を多く輩出している家系なんです。僕もその例に漏れずその素養に恵まれて、シゼの歳には最上級階位を取るところでした。薬師階級は良いです。まだ陰湿なものに目を瞑れば生死を彷徨うこともないし」

アルファは、次にくべるのだろう羊歯で、炎をぐりぐりと掻きながら続ける。

「僕は全てが敵でしたよ。どんなに素養があって、どんなに実力が伴ってきていても、僕はまだ子どもで、僕はしょっちゅうなぶり者にされてた。感覚が麻痺してて、辛いとも、痛いとも、思わなかったけど、孤独だった。僕は一度だけ、人を駄目にしちゃって、そうしないと殺されると、本気であの時は思ったから」

特に何か特別な感情を込めることなく、アルファは淡々と話をしてくれる。

本当に、私に話してくれているのかすら不安になるくらい、声に抑揚もなく単調だ。

自分がどれほど重く暗く……冷たい話をしているのか、分かっているのか、いないのか、それすら私には分からない。

「それから、僕に剣を向ける者は居なくなっただけで、声を掛けて来る人も居なくなっただけ。ま、僕は天賦の才を持つといわれていた子どもですから、卒業して職に付くのも早かったです。学園を出てしまえば、むやみに剣を揮うものも居ないし。僕の実力を見誤る愚かな者も居ない。シゼは、幸せだと思います。図書館中の者が、もし敵にまわり、彼を阻害したとしても、エミルさんは離れたりしない、カナイさんもきっと」

もし、マシロちゃんががこのまま居てくれたら、マシロちゃんもお人よしだから、シゼをその狭小な背に庇うんでしょね。と、続けて音もなく笑う。それが無性に悲しくて私は泣きそうになって

「アルファでもそうだし、アルファだってそうでしょ？」

と口にしたのにアルファはそれには答えなかった。

「……ていうか僕なんでこんな昔の話をしてるんだか。ごめんね、マシロちゃん。退屈な話です。何か、あーんな可愛くないシゼでも、一緒についてってくれる子が居るんだなーと思ったら不意に思い出しちゃって……あの時の僕にも」

いい掛けてアルファは「やめます。僕は今楽しいから」と笑った。

それからアルファは、私に寝るようにいって交代だからとカナイに羊歯を投げた。

ごすつと、命中。

負けじとカナイも投げ返したもんだから辺りは羊歯が散らかる。

カナイは大人気ない。

私は、とぼっちりを食わないように、そそそーと静かに寝ているエミルの隣で丸くなった。

第十八話…将来有望ツンデレ系

「ただいまー！」

私は帰るなりベッドに飛び込んだ。

ふわふわだー。良かったー。

凄く長い旅をしてきたような気がする。

実際には、あの翌日には灯台に到着し、帰りは途中の村で宿を取った。

灯台までの道のりがかなり過酷になってしまったのは、私の土地勘のなさに他ならない。ちゃんとしたルートを通れば、小さな村もあったし、野宿の経験なんてしなくて済んだのに。

「あー、足がパンパン」

こっちの方が問題だ。

よく考えなくても私は帰宅部だし、そんなに自慢できるような体力も持ち合わせていない。

みんなは、私に合わせてゆっくりと歩いてくれているようだったが、私にしたら結構なスピードだったし着いていくだけで精一杯だった。

―― ……コンコン

ごろごろごろつとベッドの上で暴れていると、気遣わしげなノックが聞こえた。

慌てて飛び起きると、扉を開けっ放しにしていた。戸口には、困

ったような笑みを湛えたエミルが立っている。

私は、赤い顔をどうすることも出来ずに「どうしたの？」と歩み寄った。

「足が痛むんじゃないかと思ったから、薬を持ってきてあげたんだけど」

意外に元氣そうだね。と、上品に笑いつつ、私に軟膏が入った薬入れを手渡してくれた。

ずしりと重い純銀製だろう。

銀は毒性のものと変色するらしく、よく用いられるとかこの間教えてもらった。

「軽い筋肉痛とかなら、一晩くらいで治っちゃうから試して見て」

にこにこそう付け加えてくれたエミルに頷いたところで

「だーかーらっ！ 無理だろっ！」

お向かいの部屋からカナイの怒声が響いた。

私たちは何事かと顔を見合わせたあと「行く？」 「行かないと止まらないよね」と申し合わせて、扉を叩いた。

ノックなんて多分聞こえないと思うけど、申し訳程度にしてから、私はエミルに危ないからと彼の影に隠されてエミルが「何事？」と扉を開いた。

二人は部屋の中央で揉めていた。

「えーっ！ カナイさん。本気なんですっ！ 本気でマシロちゃんが買ってくれたケーキ捨てちゃうんですっ！」

「悪いと思うよ！　悪いと思うけど、ここに出しっぱなしで出ちゃったんだからもう駄目だろっ！　どれくらい経ってると思うってるんだよ！」

どうやら言い争いの原因は、私が先日カナイに上げた誕生日ケーキらしい。

日数的には三日だが、テーブルに出しっぱなしにしていたものだ。確かにヤバイ感じだろう。私も破棄に賛成だ。

「えーっ！　マシロちゃんがななしのお金で買ってくれたのにーっ！」

ごめんね、貧乏で。

「分かってるっていつてるだろっ！」

ホント、ごめんね。貧乏で。

「あー……ええっと、良いよ。うん。というか、捨てた方が良くない私と思うよ。うん」

とりあえず仲裁に入ってみた。

扉が開いたことにもカナイは気がついていなかったようだ。軽く肩を跳ねさせた。

アルファは、にこりといらっしゃーい、と、手を振ってくれる。じわじわと振り返ったカナイに「早く捨てなよ」と苦笑するとカナイは長く唸って。

「分かった、分かったよ。畜生っ。食えば良いんだろ。食えば」

「カナイさん、カッコイイ」

「や、やめときなよ、カナイ」

止める私の声は聞こえないようだ。

フォローしたつもりだったが、私の言葉は彼を変な方向へ後押ししてしまったようだ。

涙目で食べなくちゃいけないくらいなら、食べてもらわない方が良くらいだと思うし、明らかにアルファの嫌がらせだと思うのにカナイはどうして気が付かないのだろう。

やれやれと嘆息した私の隣で様子を伺っていたエミルも、仕方がないなという風にくすくすと笑っていた。

「エミル、笑ってないで胃薬持ってきてけよ」

「はいはい、よく効くのを用意してあげるよ」

何だか、平和だなあ。

薬のお陰か酷い筋肉痛に悩まされることもなく、私は元の――と
いうのは少々不本意だが――生活に戻った。

午前中の授業を終え、自由になる時間になると、エミルの部屋を訪れた私は、ノックしようと上げた手をカナイに掴まれた。

何？ と、顔を上げると今はやめておけということらしい。

エミルはあれでいて薬学マニアだ。

怪しい薬を作るのが大好きらしい。しょっちゅう爆発騒ぎとか異

臭騒ぎとか、人体実験騒動が起きているとかいないとか。

調剤中のエミルには極力触れない方が無難だと教えてもらった。

「今日は、何作ってるの？」

「んー、何ていったってたっけ、確かー……結界石を応用して、集中豪雨を降らせるための試薬とかいってたような気がする」

「それって薬？」

「俺に聞くな。エミルの薬の範囲がどこまでかなんて、俺には分からない」

何か聞いていると発明といわれる方がぴんと来る気がするけど、本人には『薬』という拘りがあるらしい。

エミルは、比較的温和だし怒らせなければ大丈夫だと思ったんだけど、エミルが駄目ならカナイ……ちらりと、隣を見上げると眉をひそめられた。

却下。

やめておこう。

他に私が親しく出来そうな人といえば、もう残り少ない。

「ねえ、シゼは普段何やってるの？」

「シゼ？ あいつならウさんの研究室と一緒に籠ってるか、本棚のどこかの影に居るだろ。小っこいから後者なら探すのが大変だけど、用？」

「用ってほどじゃないけど、ちょっとお近づきになろうかなーと思って、この間のお礼もいってないし……探してこよ。調べ物は、カナイに任せた」

とんつとカナイの胸を叩いて私は廊下を駆け出した。

早くいえば逃げた。

私もアルファほどではないが、日がな一日、本を読んで過ごせるほど読書家ではない。

カナイから離れたところで歩みを緩める。

中庭から陽光が、廊下にもきらきらと注いできているのに瞳を細める。

ここは色々と物騒だが綺麗だ。

私が住んでいたところだって、それほど都会ではないから山も川もあって、そこそこ自然豊かな美しい土地だとは思う。思うけれどここそのそれとは微妙に違う。

ここのは全ては、ただそこに在るわけではなくて、在るべくして在る？　　というか、生命力に溢れている。

生死を分けるようなことが頻繁に起こり、今、生きていることを活かさなければいけない世界。でも活かす場所は自分で選び取ることは出来ない、不自由な世界。

誰が何を求めてこの世界を形作ったのだろうか？

「マシロ、さん？」

私は中庭を見つめて足を止めてしまっていたようだ。

後ろから掛かった気遣わしげな声に振り返ると、私の探し人シゼが不思議そうに私を見つめていた。

「そんなところではーっとしていたら病気だと思われますよ」

毒づいて。

「別にぼさっとしていたわけじゃ、いや、確かにちよっとは呆けてたけどそうじゃなくて、私はシゼを探してたんだよ」

私の言葉が意外だったのだろう「僕を？」と可愛らしく首を傾げた。

それから私はかなり強引にシゼを図書館の外へと連れ出した。

ここの生徒の殆どは引きこもりがちだ。

折角こんなに良い天気なのに、折角こんなに綺麗な街に住んでいるのに、勿体無い。

「散歩って、散歩でしたら寮内でも十分に可能です。どうしてもわざわざ外に出るんですか？」

放してください、一人で歩けますから。と、引きずるために取っていた手を振り解かれ私は苦笑した。

「この間のお礼をまだしていなかったから、ギルドに立ち寄るついで」

お礼？ と、首を傾げる仕草が、澄ましているときとは違って、子どもっぽく歳相応に見えた。

シゼの動きに合わせて、さらさらと流れるすみれ色の髪がとても綺麗だ。

本当に住んでいる人まで色鮮やかで、私自身はとても異色に感じる。

「私が考えなしに氏を名乗ってるのに出くわしたとき、みんなに伝えてくれたんでしょ？ 私それで助かったし」

厳密には、直接助けてくれたのはブラックだけど、この際、細かいところはどうでも良いだろう。

「べ、別に僕は」

「良心に従ってくれたんだよね？」

アルファがそういったよ。と、繋ぐと「そ、そうです」と顔を真っ赤にして首を縦に振った。エミルがシゼを本当は良い子だといっていた意味が分かる。

—— ……可愛いな。

第十九話…少年とパフェ

ギルド事務所の扉を開くと、カランコロンといつものベルが迎えてくれる。

そして、二人も相変わらずカウンターからこちらを見つけると、ひょこんっと立ち上がった。

「マシローっいらっしやーい」

「待ってたんだよ」

「あれー？ シルゼハイトも一緒だ珍しい」
「珍しいね」

順番に口を開くテラとテトに私は歩み寄ったが、シルゼはドアの傍から動かなかった。

まあ、ここに用事があるのは私だけだし、シルゼは確実に人見知りっ子だと思う。この二人には付いていけないだろう。

「二人ともシルゼのこと知ってるの？」

もちろんだよっ！ と、二人揃って答えていただいた。ウサギ耳が同時にひょこひょこ動いて癒される。

「ギルドといえば、情報屋も兼ねているようなものだよ」

「ここにはいろんな話が流れて来るんだよ」

なるほどー、と、二人の話に相槌を打ったあと、私を待っていたという理由を聞くと、二通の依頼書を持ち出してきた。

あんまり大っぴらに出来ないんだけど、という台詞の割りにテトは普通の声量で普通に話している。

―― ……どの程度の重要度なんだろう？

「一つは、パーティ関係ないんだけど、きっとエミルが気に入るんじゃないかなー？ って依頼」

「もう一つは、この近くの農村なんだけど、その麦畑をオーガが荒らすらしいんだ。それを一掃して欲しいらしいよ」

私は『オーガ』という単語に僅かに強張った。半歩ほど下がってしまうと、こつんと誰かにぶつかった。謝罪しようと振り返ると、いつの間にか隣に来ていたシゼが依頼書を覗き込んでいる。

ちらりと戸惑っている私を見て「アルファさん一人で十分だと思いますよ」といつてくれるのは、きっと気を遣ってくれたのだろう。大丈夫だよ、と、笑った私にシゼは短く嘆息した。

「でも、どうして二つも」

私の素朴疑問に答えてくれたのは意外にもシゼだった。

「同時に進行させた方が効率が良いと思いますよ。こちらのご希望の薬を作るには、アモンガレンに生えているアルク草が必要です……」

「アモンガレンっていうのは、この農村も含めた辺りをいうんだよ」

「アルク草は枯れたら意味がないからね」

「……お二人とも詳しいですね？」

きっと知らなくて当然の内容なのだろう。

シゼが訝しげに二人を見たが、テラとテトはご機嫌に頷いて楽しさ百倍だ。そして私は知っていないといけなかったのだろう、こちらとこちらも見たシゼが、はあと溜息を吐く。

ごめんねー、本当に！

「もっちゃんさっ！」

「登録者をルール違反者にするわけにはいかないからね！」

「でも僕らが分かるのは材料だけ」

「分量とか調剤法とかは君たちの専門だろう？」

本当に綺麗に台詞分けして口を開く、双子マジックにいつもながら感心する。

二人の言葉にシゼは「なるほど」と、頷いていた。何か納得するところがあったのだろう。

「だから、ギルド管理者は代々獣族なんですね」

「そうだよー」

「そうそう」

「僕らは優秀だからー」

是非ともそこのところ詳しく聞きたいところだが、今は飲み込んだ。

あとでゆっくり聞こう。

馬鹿にされそうだけど私は異界人なんだ。

仕方ない。

「それじゃ、この二件相談してみるけど地図とかは？」

私の質問に、テラとテトはにっこりと微笑んで「駄目でーす」

「ダメダメでーす」と重ねた。

何が駄目なんだ。

眉を寄せた私に、テラとテトは声を揃えた。

「カナイからマシロには地図を渡しては駄目だとキツく止められてまーす」

「ああ、そう……」

前科があるのでそれ以上は食い下がれない。

私は二通の依頼書をもってギルド事務所をあとにした。

これで用事は終わり、早く図書館に帰ろうとするシゼを引き止めて、私はあらかじめ見つけていたカフェに入る。

オープンテラスが素敵で、中央公園にも面していて、とても快適そうだと仕事関係で寄ったときに思っていたのだ。

でも、一人で……というのは、時間も、お金も、勿体無いような気がした。

ここに来て私はえらく貧乏性になったものだ。

何故、こんなところに連れ込まれるのか分からない。という風に、不満顔がなくならないシゼを無視して、私は特等席にシゼを座らせた。

オープンテラスだけど、傍にある背の高い木がちょうど良い木陰を作り出してくれていて、凄く気持ちが良いと思う。

「マシロさん」

「んー？ 何？ お礼だよお礼。好きな選んで良いよ。もちろん、私のおごりだから。ええっとー、私はジェラートにしようかなあ。

パフェも美味しいらしいよー、ワッフルも美味しそう」

私はメニューから顔を上げなかったが、シゼが呆れたような顔をしていることは分かった。小さく嘆息したあと深く椅子に腰掛けな

おす。

怒って帰るようなことはしないようで、正直ほっとした。

パフェが可愛い、凄い似合う。

私が勝手に注文したパフェにかなり不満だったようだが、目の前に置かれたパフェを物珍しそうに眺める姿は子どもらしい。

私はちよつとだけお姉さんなので、一応ジェラートで我慢した。本当はパフェも捨てがたかった。

スプーンに掬って一口。

口の中でひんやりと溶けて、不思議なフルーツの甘さと酸味が広がる。

食べてるメニューは基本的に変わらないが、時折、こちらは材料が見たこともないようなものであることがある。

これもその一つだろう。不味くはない。

「それで、僕に何か聞きたいことがあるんですか？」

どこから食べるのか迷っていたのだろうシゼは、取り合えず刺さっていたクラッカーを引き抜きつつ聞いてきた。

—— ……流石天才児。鋭いな。

「このこと色々教えてもらおうと思って」

「このこと？ 都のことですか？」

「それもあるけどシル・メシアのこととか、私を王家の手先とかいったこととか、さっきも話に出てた獣族がどうか」

私の質問は、シゼの時間を止めてしまった。澄ました表情が崩れてきょとんと目を丸くしている。

何かいけないことを口にしただろうか？

「えっと、ですね。王家の話は聞かなかったことにして下さい。僕からお話できるような内容は特にありませんから……それから、獣族は先ほどのギルド管理者や種屋の主人のような方たちをいいます。一目瞭然だと思います」

虚を衝かれつつも説明してくれるシゼに、私はうんうんと頷いた。

「獣族の方たちは、僕らのような人よりも優秀だといわれています。その理由としては素養の偏りが少ないことです。彼らは僕らとは違い、素養がある一定値で均等になっていることが多いんです。だから世に精通していて特殊な職業に就くことが多いんです。その一定値が、一番高いランクにあるのが種屋の主人です。皆は闇猫と呼んでいますね」

こくこくと頷いた私に、シゼは少し迷ったようだがほんの少し声のトーンを落とすと、パフェをちよつと避けて私の方へ顔を近づけた。

内緒話をするように私も少し身を乗り出す。

「貴方、異世界の方なんですか？」

「そうだよ」

エミルたちはあまり広めない方が良いと判断しているので、特に私も、吹聴して回るようなことはしない。でも、私にとっては内緒でも、なんでもなかったことだけど、シゼには衝撃的だったらしい。

弾かれるように後ろに身を引いて、危うくグラスをひっくり返すところだった。

大丈夫？ と、問い返すと、顔を真っ赤にして「平気です」と、椅子に座りなおす。やっぱり普通の男の子だと思う。

「それからさ、そのブラックの話だけど。あー、ええっと、シゼはどう思ってるの？」

「へ……あ、ああ。僕は別に、嫌うほどの感情も、崇拜するほどの感情も、持っていませんが」

良かった。

シゼは私と同じく中立らしい。

シゼの表情から、どうやら私が異世界人ということの方が気になるようだけど、私はブラックのことがもう少し聞きたいので話を半ば無理矢理戻した。

第二十話：神出鬼没☆危険人物

「崇拝って、何？」

きっと私がしている質問は、この世界の人にとっては極当たり前の知識として、身についているもので知っていて当然なのだろう。でも、もうシゼは不思議そうな顔をすることもなく、丁寧に答えてくれた。

「二つ月の話は知っていますか？」

私とその問いに頷き、掻い摘んで話すと良く出来ました、という風にシゼは笑って頷いた。

「そこに出てくる、青い月のことなのですが『蒼月信仰』というのがありまして、その方たちは力の象徴である青い月を神と崇めていて、この世界の礎である素養を司る種屋、現在はそのブラックを神使いとしているんです。ご神体みたいなものですね」

「生き神様とかそんなの？」

「そうですね」

頷いてシゼは、ぱくりとクリームを頬張った。

私は「そっか」と、頷くと溶けていくジェラートを見詰めて小さく溜息を零した。

ブラックは住む世界の全てから特別視されてしまっていて、だから常に孤独なのだろうか。

「ところで、種屋って何をするとところなの？ 種を売ってるのは知

ってるけど」

あれだけあの三人が苦い顔をするのだ、まさかそれだけが仕事というわけではないだろう。

シゼは美味しそうに食べていた手を休めて、私を見たあと何かいい掛けて黙した。

「美味しいですね」

私が掬った一口は、私の口には収まらず、高く掲げられいつの間にか隣に立っていたブラックの口に引き込まれていた。

こいつの神出鬼没さは重々承知しているが、もう少し考えて欲しいものだ。

「マシロは、私のことが知りたいんですね？　それならそういつてくだされば、何でも教えて差し上げますよ」

今、マシロとキスをしたらこの味がするんですね。と、恥ずかしくなるようなことを口にするブラックはいつもと全く変わらない。けれど私と向かい合っていたシゼの顔色はよろしくなかった。

「私は今、この子とデート中なの。改めてよ」

早く帰れ、と、いいなかったしったつもりなのに、ブラックは、そうなんですか？　といってシゼを見下ろし、くすりと口角を引き上げた。

「マシロはやはり人徳があるんですね。並みの者では、貴方に傍寄ることも出来ないのでしょうか？」

はあ？ と、ブラックの台詞に凄んだ私にブラックは「いえいえ、こちらの話です」と勝手に締めくくって、再びシゼを見詰めて今度は口を開く。

「すみませんが、私はマシロと話があるんです。退席していただけますか？」

声色も、声量も、特に強いものではない。しかし、相手にノーとはいわせないような威圧感を感じさせる言葉に、シゼはきゅっと口を引き結んだ。

私は黙って居られなくて、がたりと席を立ちブラックに意見する。

「今日はあんたと話すことはないわ。ブラックが席を外して」

「えー。マシロ酷いです。私はこんなに貴方に恋焦がれて会いに来たというのに」

うん。口から出任せなのは良く分かる。こいつの言葉に心は籠っていない。

「大丈夫、少年は帰りたいそうですよ」

—— ……なんだとこの野郎。

ブラックの身勝手さに、再び私は噛み付こうと思ったら……先に、俯いていたシゼがかたんっ、と、静かに立ち上がった。

帰るなんていわないよね？ 私が誘ったのにこんな風に不愉快にさせて、傷付けて帰すことになるのは嫌だ。

そんな私の不安を知ってか知らずか、シゼはしっかりとブラック

の目を見て口を開く。

「僕は帰りません。僕が、マシロさん連れて図書館を出たんです。僕が、連れて戻る必要があります」

ブラックの視線に一步も引くことなく、毅然とそういい放ったシゼはちよつと格好良い。ブラックはそれを面白そうに「ふーん」と見詰めたあと

「貴方はとても惜しい逸材だと思いますが」

すつとどこからともなく杖を出しその先をシゼに向ける。

シゼはブラックから片時も目を離そうとしない。

でも身体の横に下ろされた拳が微かに震えている。

私にはブラックが何をしようとしているのか分からない、分からないけど、取り合えず

―― …… バキッ

殴った。

私は蚊帳の外だったのだろう。

思ったよりまともに入ったと思う。拳がじんじんしている。

ブラックは、簡単に「あ、痛っ」といってシゼに向けていた杖で身体を支え、殴られた頬を押さえると困ったような顔で私を見ている。

困っているのはこっちだ。

「レディが、そんなにぼこぼこ人を殴ってはいけませんよ？ それとも、そういう趣味ですか？ 私はどちらかといえばSなんです、マシロの希望とあれば」

何の希望だっ！ もう一度手を振り上げた私の拳をブラックは簡単に捕らえると「ほら、赤くなってる」と撫で「可哀想に」と付け足してそっと口付けた。

「ブラック！」

悲鳴のような声を上げた私に、ブラックは楽しそうに笑って謝るが、きつと悪いとは思っていないだろう。

「仕方ない。今日は諦めて帰りましょうか」

すつ、と、私の腰を引き左胸に手を当てると耳元で囁いて消えた。ブラックの触れたところが、じんじんと疼き不安が溢れそうになる。

『貴方は私のもの。忘れないでください』

「あれ？ 少し会わないうちに随分仲良くなったんだね？」

寮棟に戻るとエミルが迎えてくれた。

調剤は終了したのだろうか？ そして、掛けられた言葉に首を傾げると、シゼが慌てたように私の手を振り払った。

繋いでいた手を抱え込んで俯くとシゼは耳まで真っ赤になっている。

帰り道、シゼは余ほど気を張っていたのだろう、ふらふらだった。だから手を繋いで帰ってきたのだ。

「どこへ行ってきたの？　僕は鬼のようなカナイから逃げるのに忙しくて…」

――…また、何か失敗したんだね。エミル。

そして、当然のように被害を被ったのはカナイなのだろう。

今日は外見的变化がなければ良いけど。

お疲れ様と苦笑したあと、私とシゼはちらりと見合わせてギルドとカフェのことだけ掻い摘んで話した。

帰り道、シゼに口止めされたのだ。

余計な心配を掛けないためにも、必要なことだと、私にも一応は分かるのでシゼの言葉に納得もした。

『闇猫のこと、エミル様たちには黙っておきましょう』

『え？』

『その方が良い。そして貴方も無闇に彼の感情を撫でるようなことはしない方が良いです。貴方はどうやら、彼の特別のようですが、それでも何があるか分からない。もう、あんな無茶しないでください』

そういつてくれたシゼの気持ちは嬉しかったが、多分、私はまた同じ状況になったらブラックを殴ると思う。

私たちの話に「そう、良かったね」とエミルは笑ってくれたけど、微妙にしどろもどろだったことに気が付いていないわけない、でも追求はしないで居てくれる。

―― ……エミルは優しい。

もし、このことでこのあと何か事件があったとしてもきっと彼は何とかしてくれると思う。

エミルには、きっとそういう人望とか人徳とかの素養もあって、だからみんな彼に惹かれるんだろう。

「あいつら、絶対エミルが加わったからこんな依頼受けやがったんだな」

エミルに小言をいうのを諦めて、いつもの場所で本を開いていたカナイに依頼書を見せると、開口一番の台詞だった。

エミルも直ぐに分かったらしく、くすくすと笑って「そうだね」と頷いている。

アルファは、暫らくもう一枚の依頼書を見て頷いていた。

シゼはまたラウ先生のところへ行ってしまった。

彼の年齢では、まだギルドには登録出来ないらしく、ほんの少し拗ねていたらしい。

余ほどエミルと一緒に居たかったのだろうと可哀想に思うと、カナイにお前って鈍いっていわれないかと聞かれた。

いわれるけどいわれたことがないことにした。

「じゃあマシロちゃん。僕と一緒にこの依頼をこなしに行きましょう」

自分からアルファが行きたがるとは正直思わなかったから、私は虚を衝かれて、え？ と、問い返していた。

アルファは、そんな私の心が見えたのか、ひどいなー、と、大げさに眉を寄せて肩を落とす。慌てて謝るところりと態度を元に戻して話し始めた。

「この依頼だって僕が居るから受けたんじゃないですかね？ どのくらいの数が居るのかは知らないですけど、カナ伊さんじゃ麦畑ごと焼き払いかねないし」

いわれたカナ伊は眉を寄せたが、反抗しないということは、そうする自覚があるんだね、カナ伊。

「丸々一日あれば終わると思うし、その間にもう一つの薬を作つてれば戻ったときに仕上げられる。万々歳です」

「私役に立つかどうか」

「マシロちゃんは僕の話し相手です」

うん、期待されてないってことだね。

第二十一話：新米隊長護衛対象は王子です

翌朝、生憎の雨模様だった。

こちらに来て初めての雨。

大粒の雫がばらばらとレンガ道を濡らしている。

アルファは朝から不機嫌だった。

本当は徒歩で行くつもりだったのだけど、通り雨とはいえこの天気だ。経費は掛かるが馬車を呼ぶことにした。

図書館の前で馬車を待つ間、エミルとカナイも見送りに来てくれた。

「分かってる、ちゃんとこなすよ」

「無茶するなよ」

「カナイは五月蠅い。僕は子どもじゃない、いつつけくらい守れる」

ぶっすーっ、と、明らかにご機嫌最悪な様子のアルファは、発する言葉一つ取っても吐き捨てているような感じだ。

そして、話し掛けているカナイの方を見ることもなく、絶え間なく落ちてくる雫を苦々しく見詰めていた。その様子に、はあと肩を竦めたカナイはこちらを振り返って私を見ると、もう一度だけアルファをちらりと見て

「マシロは残れ」

予想外のことを口にした。私は「はあ？」と眉を寄せる。

「行くに決まってるじゃない。大丈夫だよ、馬車も来るし……アル

ファの邪魔にならないようにしとくから」

ぶーぶーっと文句をいった私にカナイは困ったように、そうじゃなくてなと話を続けようとしたが、アルファに遮られた。

「マシロは連れて行くよ。本人も行くっていつてるんだし」

「だけど、お前」

「連れて行く」

いい切ったアルファにカナイは「あー、もう！」と苛立たしげに頭を掻き、好きにしろとそっぽを向いてしまった。

一体どうしたんだろう？ と、首を傾げると腕を引かれ、見上げるとずっと黙って様子を見ていたエミルだった。

エミルもアルファを複雑そうな面持ちで見つめつつ、僅かに腰を折って私に囁く。

「アルファのこと頼むね」

私は、みんなが思っている通り、今回も何の役にもたたないと思う。

なのに私に頼むようなことって何だろう。

私はエミルの意図が分からなくて、曖昧に頷いたがエミルはにっこりと微笑んで「マシロなら大丈夫」と頭を撫でられた。

くすぐったくて肩を竦めるが、何が大丈夫なんだろう？ 問い返すよりも先に私はアルファに「行くよ」と腕を引かれた。

御者が雨の中ドアを開けて待っていてくれる。

私は妙に心配そうな二人に「行って来ます」と手を振って乗り込んだ。

馬の蹄が雨を弾く音も軽快で、たまにはこういうのも良いかな？
と、思ったものの図書館を出てからずっとだんまりなアルファを
ちらりと盗み見た。

アルファはまだ外を睨み付けて難しい顔をしている。

「雨は好きじゃない」

ぽつり、と、小さな声で呟いたアルファに問い返すと、何でもな
いと繰り返してはくれなかった。

昨日のみんなの話では依頼主の居る村までは、私の足でも半日掛
からないくらいだといわれた。

馬車ならもっと早いだろう。

取り合えず到着したら依頼主に話を聞いて、夜まで待つ。夜にな
らないと恐らくオーガは集まってこないだろうということだったか
ら。

「あの日もこんな風に突然雨が降ってきて、雨季以外にこんな風に
雨が降ることは、とても稀有なことだから、みんな凄く驚いていた」

ぽつぽつと、多分、私に話してくれているのだろう話に私は頷い
た。

ずっとだんまりを貫かれるより、どんな話でも話してくれてい
る方が良い。

でも、その声にも口調にもいつものアルファの様子は伺えない。

「僕は、闇猫に護衛対象者を殺されたことがある」

無意識か腰に下がっている愛刀をぎゅっと握って私を振り返ると、アルファは射抜くような瞳で私を見ていた。

アルファの言葉の内容以上に、その眼光が私の心を抉っていく。ブラックが人を殺めていてそれがアルファの関係者で……。

私の視線が揺らいだのを見て、アルファは嘆息するとまた窓の外へと視線を戻す。

「あいつは基本的に飛び道具を使う。銃とかその類だ。なのに、あいつはわざわざ僕の間合いに入ってきて護衛対象者を撃った。たった一発、どん……それだけだ。あの時の銃声が、今でもこんな風に雨が降る日は頭に響く。何度も、何度も……僕の中で護衛対象者は撃ち殺され、闇猫の余裕の笑みが蘇る。僕の間合いに入ってきて、僕の剣戟を片手で制して」

ぎゅううっと握る拳の節が白くなり、微かに震えている。

「アルファ」

私はいたたまれなくて、その手を両手で取った。アルファは「何？」と不機嫌そうに振り返るが、手を振り解こうとはしない。

「大丈夫？」

アルファは、不機嫌そうだしどちらかといえば怒りを含んでいるようなのに、その理由だって明らかだ。それなのに私には何故か泣いているように見えた。

しかし、私の問い掛けは的を外していたのだろう、アルファは、ふといつもの表情に戻って数回瞬きをした。

「どうして？」

「え、あ、ごめん。何かアルファが泣いてるような気がして、だから」

「僕は泣いてないよ。自分の無能さを悔いることがあっても泣いたりなんてしない。泣くことは許されない」

いって自分の足元を睨み付けて、下唇をぎゅっと噛み締めた。アルファはやっぱ泣いているような気がする。

「大切な人だったんだよね」

ぽつつと私の零した言葉にアルファは、再び顔を上げて目を丸くする。

私の問い掛けは的を外しまくりなのだろうか？ アルファは、私の問いに対して暫らく思案したようだが、結局、首を横に振った。

「僕は別に……彼に特別な感情は持っていない唯の護衛対象者だ」

対象者は王子だったから、国にしてみれば大きな損害だと思うけど。と、あっさりと口にしたアルファに今度は私が驚く番だ。

この国には、王子様がそこらへんにごろごろしているのだろうか？ あ、でもエミルだって王位継承権十三位っていったんだから、少なく見積もっても十三人は兄弟が居るってことだよね。

凄子沢山だ。

驚いた私に、アルファはふっと口元を緩めて「変な顔」と笑った。

「初めて隊長として任された任だった。最年少記録を軽く更新して僕も家族もとても鼻が高かった。王子にも気に入られていたと思うけど、カイラスだったかな？ セリウスだったかなあ？ 名前も思い出せない……唯、そんな僕から一瞬にして全てを奪おうとした闇猫は殺したいほど憎い」

折角、いつものように笑ってくれたのに、アルファはまた表情を曇らせた。

「マシロと居れば奴が自分から寄ってくるだろう？ 僕に殺られるために」

だから、僕はマシロとずっと一緒に居たい。

包み込んだままの私の手に、アルファは空いた手を重ねてぎゅっと力を込めて見つめる。

愛の告白じみた言葉を紡ぐくせに、その瞳には狂気がちらついている。

そして、自分では憎しみしか口にしないのに、寂しさとか、切なさとか、ブラックと同じような孤独が見え隠れしているような気がして私は眉を寄せた。

「アルファ、泣かないで」

「だから、泣いてないよ、マシロ」

「泣いてるよ、アルファは、泣いてると思う。私はこの世界のことを殆ど知らないからブラックのことは元より、みんなのことを理解するのは難しいかも知れないし、多分住む世界が違いすぎるから分かってあげられないことの方が多いと思う。でも、でもね。私は、アルファは憎んでいるだけじゃなくて、護ってあげられなかったこ

とが、悲しかったんだと思うよ。だって、アルファは優しいし、楽しくて、明るくて、私にたくさん元気をくれるもの」

この世界はやっぱりちょっと変わっていて、私の世界なんかよりずっと過酷だ。

だから安穩と生活してきた私には、アルファの気持ちも、ブラックの気持ちも、分かってあげることが出来ないと思う。

―― ……でも、分かりたいと思う。

「マシロちゃんは……馬鹿だね？」

「いうに事欠いてそれ？」

人が真剣に向かい合ったというのに、たった一言で纏められて私は眉をひそめた。

そんな私に、アルファはいつものようにころころと楽しそうに笑った。そして、ひとしきり笑ったあと、目じりに浮かんだ涙を拭きつつ「ありがとう」と繋いだ。

きょとんとした私の頭をアルファはくしゃくしゃと撫でる。
力加減があまりなくて潰されそうだ。

「確かに、マシロちゃんがいのように、闇猫には八つ当たりかもうす。僕は、間合いにまで入らせて対象者を護れなかった自分が許せない。未熟で、愚かな自分が嫌いで、だからその腹いせの対象に闇猫を置いたんです。でも、きっと闇猫の首をとっても、僕は雨を好きにはならないです」

そういうことですね。と、笑ってくれたアルファのそういうこと

が良く分からなかったが、危なっかしいので、首を取るとか軽々しく口にして欲しくないけど、種屋って私が思っている以上に怖い職業みたいだ。

まあ、とりあえずは、アルファはいつものアルファに戻ってくれて良かった。

ほんと胸を撫で下ろしたら、窓から陽光が差し込んでくる。本当に通り雨だったみたいだ、直ぐに空は晴れ渡ってしまった。

「マシロちゃん、見て見て虹です！」

ばしばしと人の背中を叩いて、外を指差したアルファはすつくと腰を上げ扉を開くと身を乗り出した。

「おじさん、もう歩くから良いよ。降ろして」

ええー、村まで乗っていいこうよー！ と、思った私の心は無視みたいだ。

第二十二話：オーガ退治傍観中

それからあとのアルファは、普段通りを通り越して、それ以上に機嫌が良さそうだった。

アルファに雨は鬼門。という事柄を、私は心のメモに書き留めて頷いた。

依頼主の家を探していたアルファは、どうやら見つけたらしく大きく手を振って、大声で名前を呼んでくれている。恥ずかしいからやめてください。

その夜は月が明るかった。

昼中、一雨来たせいかもしれない。星もいつもよりひととき輝いて見える。

見渡す限りは麦畑だ。まだ黄金色の穂をつけているわけではないが、その頃なら壮大な景色になっているだろう。

私は「そこらへんに座ってて」といわれたため、畑を囲む柵に腰を下ろしていた。

村長さんが確認したオーガの数は七体。

それほど驚く数ではないらしいけど、素人が相手をするには多いだろうということだった。これまでも何度かオーガの被害にはあったが最近頻繁すぎる。

どこかの偉い学者さんが、月が近づいていることに関係しているんじゃないか、とか、いつていたという話も小耳に挟んだ。

アルファは、いくつかぶら下げていた剣の中から、この間の大剣

から三周りほど小さな両刃刀を選び足取り軽く麦畑に入っていたところだ。

最近には本にばかり囲まれていて運動不足だったから、丁度良い、と、笑顔まで見せていた。

私は重たい気持ちでその背中を見つめていた。

私たちが待機し始めてそれほど時間は経っていない。

ざあ……っと、麦畑を走る風が頬を撫でた瞬間、アルファが揮う剣が月の光を反射してきらりと光った。

―― ……一、二、三……

と、アルファが数を数えているのが聞こえる。
私には、時折剣の軌跡が光るのしか分からない。アルファは本当に強いのだろう。

私は、その姿と確実に数を増やしていく声に胸を撫で下ろしていた。

「マシロちゃん！ そっちに一匹逃げたー」

気を抜いていたところに、アルファの声が聞こえた。

私は慌てて背筋を正すと辺りを見渡す。ざわざわっとまだ若い麦が揺れる、その間から赤い光が四つ漏れてきた。

「ひっ」

―― ……逃げなくちゃ。

そう思ったのに、自分が今何処に居るのかをすっかり忘れていた。不安定な足場を無視して立ち上がってしまった私は、柵から思い切り派手に落ちた。

全身に鈍い痛みが走り、顔をしかめる。でも今はそんな時じゃない。慌てて腰を上げようとして足に鋭い痛みを感じた。

「い、っう……！」

直ぐ傍でオーガの唸り声が聞こえる気がする。

—— ……助けてっ！

声にはならなかった。

きゅ……っと、固く瞳を閉じて、身体を硬くする。襲ってくるだろう衝撃に息を呑み、呼吸を止める。

あの赤い目が。

鋭い爪が、寧猛な牙が……

どんっどんっどと心臓が頭の中にあるようだ。

膝頭に擦り付けた額から、暑くもないはずなのに冷たい汗がぽつりと落ちる。

—— ……来るっ！

そう思ったのに、襲ってくる痛みや衝撃が来ない……いつ、いつ、いつ、来るのか……そう考えただけで身体が益々萎縮する。

もう一度固く閉じた瞼を持ち上げることが出来たのは、頭上からアルファの底抜けに明るい声が聞こえたときだ。

「マシロちゃん泥だらけー」

あまりにあっけらかんとしているアルファに私は瞳を瞬かせた。

「た、すかった？」

「え、何？ マシロちゃん、立てます？ 僕が一緒なんだから大丈夫ですよ」

にこりとそういわれて確かにそうだと頭では納得し、伸ばされた手に掴ろうと腕を身体から離れたところで私は慌てて引っ込めた。

―― ……身体が震えている。

私が、なかなか手を伸ばさないので不思議に思ったアルファは首を傾げる。「どうしたの？」と可愛らしく声を掛け、私の前にしゃがみこんだ。

私の顔を覗き込みながら尚問い掛ける。

「どこか打ち所が悪かったですか？」

「へ、へいき、へーき、いま……た、つ、から」

笑ったつもりなのに顔の筋肉が強張って笑顔が作れない。

かちかちと歯が上手くかみ合わなくて、言葉もまともに出てこない。そこで初めて私の異常に気が付いたアルファは、慌てて私の手を強く握った。

「マシロちゃん！」

「……え？」

「大丈夫、大丈夫だから落ち着いて」

「うん、けほっ……うん。へー……き、」

「ごめん、本当にごめん」

強く、強く、握って必死に謝罪してくる。

別にアルファは悪いことなんてしていない。柵から落ちたのは私の責任で、今、震えが止まらないのはどうしてか分からないけど、でも、アルファのせいじゃないことくらいは分かる。

だから、大丈夫だと、謝らなくて良いと、私は伝えたいのに声にならない。

せめて立ち上がって、大丈夫なところくらい見せないと！ と、思っ
て身体を動かすと右足がずきりと痛んで思わず顔をしかめた。

暗闇と泥でよく分からないが、出血を伴っているような痛みではないと思う。

きっと捻挫とか、そんなのだ。

だからもうちょっと我慢して動かせば……。

「駄目！」

アルファの強い口調に、私はびくりと肩を跳ねさせた。アルファはそんな私に短く詫びて、言葉を重ねる。

「駄目です。きっと柵から落ちたときに、どこか捻ったんだ。無理に動かさない方が良いです。僕が背負いますから、村のお医者様に起きてもらいましょう？」

私は盛大に首を振った。

恥ずかしいというのもあったけど、それよりも、私は昼間の雨で

ぬかるんでいる畑に落ちてしまつて泥だらけだ。アルファまで泥んこになつてしまう。

「マシロちゃん？」

「汚れ、ちやうから」

大分声が戻つてきた。

搾り出した私の言葉にアルファは一瞬目を丸くしてそのあと凄く優しい瞳で微笑んだ。

とんつと心臓が跳ねる。

「詰まらないこと考えなくて良いです。さあ、早く」

私はアルファに負け、背負われて村長さんの家まで戻った。小さな村で、宿らしい宿もないからと村長さんが部屋を提供してくれたのだ。

「軽い捻挫ですね。一週間もすれば良くなると思いますよ。でもあまり足に負担を掛けないようにしてあげてくださいね」

湯浴みと着替えが済んだら、これを塗って休んでください。と、まとめて夜中呼び出されたにも関わらず穏やかな村医者は私の部屋をあとにした。

落ち着かな気になっていたアルファは、医者診察が終わると胸を撫で下ろしたようだ。

でも、私以上に落ち込んだ様子に変わりはなかった。

「お風呂一人で入れます？ 転んだりしないでね。僕、何か着替えを貰ってきます」

「え、良いよ」

「え？ 裸で寝るにはまだ寒いですよ」

いや、そうじゃなくて。

こんな時間に家の人たちを叩き起こしたのも失礼だと思うのに、さらに失礼を重ねるのは……そんな私の気持ちなど分らず、アルファは、不思議そうに首を傾げたあと部屋を出て行った。

翌朝、片足を引きずって隣のアルファの部屋を覗いたらもう姿が見えなかった。

ちょうど階下から私の朝食をわざわざ運んでくれた奥さんが「あら？」と可愛らしい声を上げた。

「お連れの男の子なら、朝、早く出て行きましたよ。貴方には朝ごはんでも食べて待っていて貰って欲しいって」

ひよこひよここと、自室へと戻る私に手を貸してくれる奥さんに、軽くお礼をいってアルファがどこへ行ったのか聞いてみた。

「アルク草を採りに行くなって、いっていたよ。アルク草が生えている丘は、直ぐ近くだから直ぐに戻るよ。それまで、お嬢さんはしっかりお腹をいっぱいにして休んでいて。制服ももうそろそろ乾くからね」

でも、図書館の生徒さんがあんなに腕が立つとは思わなかったよ。と、からから笑った奥さんに私は曖昧な笑みを浮かべた。

私もアルク草を採りに行きたかった。

図鑑で調べたら凄く綺麗な草だった。たくさん生息してるならそれはそれは見物だろう。

私はベッドの隅っこに腰を下ろし、ベッドサイドに載せてくれたトレイからコップを持ち上げて口をつける。

暖かなスープだ。

じわりとお腹の底から温かさが広がっていくような気がする。落ち着いた私の様子を見て、軽く頷いた奥さんはゆっくり休むように念を押して部屋を出て行った。

私には休むくらいしか今ここでやることはない。

ぼんやりと窓から見える麦畑を見つめ、ふと足元へ視線を落とす。夕べお風呂上りにアルファが巻いてくれた包帯が目に入る。

軽く動かしてみるがやはりまだ痛む。

「凄く責任感じてたな……」

昨夜のアルファの様子を思い出して、ほうつと息を吐く。

奥さんの言葉通りほどなくしてアルファは戻ってきた。

手にしていたガラスケースには図鑑で見たアルク草が淡い光を湛えている。

凄く綺麗だ。

華奢な葉に茎、その上に広がる白く糸のような花びらは、アルク草の名の通り白鳥が羽を広げているようだ。

第二十三話：アルファの猛省

「お世話になりました」

「なーに、良いってことよ。お前さんたちこそありがとな、これで今年の収穫も安心だ」

帰りは都に野菜の納品に向かう荷馬車に載せてもらった。

山と積まれたジャガイモの間に腰を下ろし、時折、馬車を引くおじさんと言葉を交わす。

荷馬車の傍を歩いているアルファは、相変わらず上の空で、必要以上のことは話もせず図書館まで到着した。

私は、アルファに手を引かれ荷台から降りると空いた手をふって、おじさんの姿が見えなくなるまで見送った。

「抱こうか？ おぶろうか？」

「だ、大丈夫だよ。歩けるから」

真剣な表情で聞いてきたアルファに私は首を振る。本当にそんなに大げさな怪我じゃない。私の運動不足だってあったんだから、気に病むことないのに。

振った勢いで数歩よろめいた私を支えて、アルファは肩を落とすと、腕に掴まって。と、いつてゆっくり図書館へ続く階段を上った。

医務室へ行こうとしたアルファを思い留まらせて、自室へ続く廊下を歩いているとちょうど部屋から出てきたカナイに出くわした。

お帰り。と、口にしたあと、もちろん直ぐに私の異変に気が付かないわけもなく、どうした？ と、尋ねてくる。

口を開こうとしたアルファよりも早く私が説明する。

「柵から落ちたの！ 足が滑っちゃって、それで、捻挫」

全治一週間だって。と、いって苦笑した私にカナイは「馬鹿だな」と、答えると、ちらとだけアルファを見た。でも、特に何か追求するつもりはないらしく、医務室に行かないならエミルに見てもらおうように促してくれる。

私は彼らのこういうところが好きだ。

とても仲が良くて信頼しあっているし、互いを大事にしているのに、不必要な干渉は出来る限り行わない。

相手の判断に委ねる。

だからといって、それで失敗したとしても、お互いを責めたりはしないと思う。

そういう関係って、男の子たちだから出来ることなのだろうか？ 女の子同士では、とても無理な気がした。

荷物を部屋に放り込んで私たちは食堂へ移動した。

「うん、きっちり捻ってるね。腫れてるね」

椅子に腰掛けた私の足元で、解いた包帯を首に引っ掛けて私の足を膝に乗つけたエミルが、そつと足首を撫でる。

痛みに顔をしかめると「ごめんごめん」と、笑顔で見上げてくれる。

何だか凄い恥ずかしい構図な気がしてきた。

王子様をかしず傳かせて私は何をさせているのだろう。

「それにしても細い足だね。このまま力入れたら僕でも折れそう」
「そ、そんなことないし、もし、そうでも、お願い……折らないで下さい」

私の気も知らないで、そんなことを口にするエミルに脱力すると、くすくすと笑いつつそっと足を降ろす。

「この間上げた軟膏まだ残ってる？」

「ああ、あれ。今持ってるよ。たくさん歩くかなと思って」

エミルに問われて、私はポケットから例の薬入れを取り出しエミルに渡した。

エミルは、良かったと微笑み顔を上げる。

「アルファ、おばさんにいって桶にお湯を張ってもらってくれるかな？」

「あ、はい」

私たちの向かいに腰を下ろして、傷心中だったアルファは、エミルの言葉に慌てて腰をあげる。ぼんやりしていたのか、僅かに間を空けて「お湯っ、お湯ですね！」と踵を返した。

その様子を見送った私たちは顔を見合わせて苦笑する。

ややして戻ってきたアルファの手から、桶を受け取ったエミルは、軟膏を僅かに指にとってお湯に溶く。

ふわりと清涼感の有る香りが辺りに広がった。

ゆっくりとその香りを吸い込むと、胸の奥がすうっとして、清々しい気分になる。

そして桶を私の足元に置くと「ちょっと熱いかもしれないけど、ごめんね?」といったつつ私の足を取ってお湯に浸した。

続けてポケットから取り出したハンカチで、エミルは躊躇なく私の足にしっかりとお湯を掛ける。

「あ、あの、私自分で出来るよっ!」

「良いから怪我人は黙ってる」

慌てた私はあっさり一蹴される。

――…私はどれだけ王子様を傳かせてるんだ。

恥ずかしさに真っ赤になった私に、エミルが気が付いているかどうかは良く分からない。でも、きっぱりといい放ったエミルは、丁寧に私の足にお湯を掛けてくれる。

私が赤くなったり、青くなったりしているのを正面で見ていたカナイは、意地悪な笑みを浮かべている。

私の気持ちを察しているなら止めてくれ! と、思ったところでカナイがそうしてくれるとは思わない。

身体を捻って机に突っ伏すと短い溜息を吐く。

かなり恥ずかしいことに変わりはないが、ちよっぴり気持ちが良い。

十分に足が暖まったところで、固く絞ったハンカチでお湯を拭いたあと少量の軟膏を塗って足首に宛がうと首から提げていた包帯を取り丁寧に巻きつけて終了してくれた。

「はい、おしまい。多分、今日、明日中は無理でも、明後日には普

通に動けると思うよ」

エミルは、にっこりとそういってアルファが桶と一緒に持つてきていたタオルで手を拭いた。

じっとその様子をみていたアルファは、かたんっと立ち上がった。

「僕、ギルドに報告に行ってきます。カナイさん、マシロちゃんを部屋に送ってあげてください」

「ん、ああ。分かった」

アルファは用の済んだ桶やタオルを持って「これも片付けておきますね」とどこかぎこちない笑みを浮かべた。そのくらいなら私がついていこうになったが、そつとエミルに制される。したいようにさせてあげてということだろう。

私は、立ち去るアルファに気をつけてね、と、声を掛けるのが精一杯だった。

エミルもその後姿を見送ったあと

「じゃあ、僕もアルク草が枯れてしまわないうちに仕上げるよ」

と、踵を返す。

ありがとう。と、お礼を重ねた私に軽く振り返ると「大したことではないよ」と笑顔で手を振ってくれた。

残されたカナイと私は、暫らく沈黙したあと「さて」と立ち上がった。

予想通りの鈍い痛みに眉を寄せた私に、カナイはワザとらしく溜息を零す。

「アルファのことは気にするな。そのうち、いつも通りに戻る」

私を慰めているのかな？ と、思いつつ「そうだね」と頷く。
それから、と話を続けるカナイに顔を上げると、少し嬉しそうに見えるのは気のせいだろうか？ どうかしたのかと問い返すと、カナイはきよろきよろと辺りを確認したあと一人頷くと……にやり、と、口角を引き上げた。

「二つ月の話が信憑性を増してきてる」

「え？ で、でも、月が出入り口ってどうやって月に昇るの？」

なんだかかぐや姫みたいだ。

最初から問題になっている部分に触れると、カナイは短く唸ってそれなんだが……と話を続ける。

「他の物を媒体に出来ないかと、考えているんだ。例えば巨大な魔法石とか……」

「その魔法石とやらは、人工的に造れるものなの？」

「作れなくはない。理屈的には、な。お前、覚えているか？ 市で会った細工屋」

恐らくカナイが知っているのは、オレンジ色の猫耳青年のことだろう。私が頷くとカナイも頷いた。

「あれから色々話をしていたんだが」

カナイは見た目に反してアクティブな面を持っているらしい。たった一度面識を持っただけの相手に、その後の話も出来る人脈を築いていたなんて吃驚だ。

そこからあとの話は専門的過ぎて私には良く分からなかった。ただ、分かったことといえば。

「もう直ぐ戻る……」

かも知れないということだ。
帰りがかったはずだ。

夢なら早く覚めて欲しいと思っていたはずなのに……。

私はもう少しこの世界に居なくてはいけないような気がする。
私に何か出来るということはまずないのだけれど……。

カナイに階段の多い館内では、足が思うように動かない私は、邪魔だと部屋に押し込まれ、私はぼんやりとベッドに腰掛けていた。
ちらりと机の上に置いてある瓶が目に入る。
借金の足しにと頑張って稼いでいたものだ。
みんなの協力もあって、そこそこ溜まってきているように見える。
でもきつと全額返済には遠く及ばないだろう。

「みんな心配してるよね」

していないわけではない。

ユキやサチは分からないけど、少なくとも家族は心配してくれているはずだ。

お兄ちゃんの手料理が懐かしい。郁斗の小言も懐かしいかも知れない。

そんなことを考えると、妙に里心がつきそうだ。

第二十四話：ルールはどこにあるんだろ？

どこからか、甘い匂いがする。

ラ・フランスみたいな芳醇で甘い良い香り……。

―― ……コンコン

私は、一人で退屈だったのと遠出をした疲れで、眠ってしまっていたようだ。軽いノックの音で目を覚まし、ぼんやりとしているともう一度ノックが聞こえる。額の上に腕を押し付けて、眠気を飛ばそうと努力する。

こんなの、今も、一生懸命頑張ってくれているみんなに申し訳ない。

「マシロ？」

と、掛かる声に訪問者がエミルであることが分かる。私は、額に乗せた腕で、ごしごしと目を擦りつつ、はい、と、情けない声を上げた。

「開いてるよ」

そう続ければ「鍵を掛けておかないと無用心だよ」と、注意してくれつつ部屋へと入ってくる。

「ごめん、すぐ起きるから」

窓の外へ視線を泳がせると日が傾いていた。エミルの入室と共に

目覚め際、鼻についた香りが、すうっと部屋の中に流れ込んでくる。

あれ？ この匂いエミルからだったんだ。

そう思って身体を起こすと、既に、めちゃめちゃ近いところにエミルが居て、私は慌ててベッドの奥に下がった。

ずきりと痛みが走り。足の怪我を思い出した。

苦痛の色を浮かべるとエミルが「大丈夫？」と、ぎしりとベッドに手を付いて身を乗り出し、私の顔を覗き込んでくる。

「ちょ、近い。エミル近いから、離れて」

睫毛の本数まで数えられそうなくらい傍に寄られて、私はそれ以上下がないほど後退する。背中が壁に触れて、これ以上は逃げ場がない。

それなのに、そんな私のお願いは無視なのか、エミルは凄く近い距離で「聞いて欲しいことがあるんだ」と囁く。

「聞く！ 聞きますから！ 離れてください」

エミルは綺麗だ。

普通では有り得ない、空と同じ色をした髪は、赤い日の光を浴びて不思議な色を作り出している。

優しい瞳を縁取る睫毛も長く、ふわりと薄い色をしている。その奥にある湖面を思わせる瞳には、情けなく顔を真っ赤にした私が写っている。

あまりの近距離に息を詰め、ごくりと唾を飲み込んだ私にエミルは尚も詰め寄って紡いだ。

「帰らないで欲しいんだ」

私は、益々困惑する。

驚きに言葉をなくし、目を見開いた私に映るエミルの表情は、いつもより少し艶めいているような気がしなくもない。

そして、鼻につくこの甘い香り。

やはりエミルが纏っているものだ。

嫌なものではない、それどころかもっと傍で嗅いで居たくなる魅惑的な香りだ。エミルとの距離の近さと、この眩暈のしそうな甘い香りに頭の中が、ぼんやりとしてくる。そんな私に、エミルは話を続けた。

「きっと、もう直ぐ戻る方法も分かると思う。僕は、最初に君と約束したから、君が帰ると望むならそれに従うよ。でも、僕は帰って欲しくないと思ってる」

「エ、エミル？」

「帰って欲しくないんだ。どうしても帰らなくてはいけない理由は何？ マシロ……帰らないで、傍を離れないで……」

私の勝手な勘違いだと思うけど、何だか告白されているような気がする。

鼻先が触れ合う距離で、互いの吐息が交わる距離で、甘く紡がれる言の葉。私の心臓はそんなに図太くなくて、ときどきと激しく脈打ち、体温を一気に上昇させる。

そんな私にエミルは、蠱惑的な笑みを浮かべてそっと囁く。

「―― ……大丈夫、今はキスしかないから」

今はって何！

身体の両側にエミルが腕を突っ張っていて逃げ場はない。

ふうっと唇にエミルの吐息がかかり、私はきゅっと瞳を閉じた。顔を逸らすとか、大きな声を出すとか、必死になれば逃げる術はあったと思う。

でも、私は逃げなかった。

早鐘のような心音は益々高鳴って五月蠅くて、どこか気遣わしげに触れた唇が、それを刹那抑えてくれる。

啄ばむような愛らしい口付けを繰り返して、エミルの大きな手が私の頬を包むと、今度は長く重ねられる。

「逃げないの？」

「……逃げたい、かも……」

自分が逃げられない状況にしておきながら、そんなことを聞くのは酷いと思い、私も何とか頑張っただけで突っ張ってみた。

そんな私の台詞に、エミルは微かに、でも、いたく傷ついたような顔をして、長い睫毛を頬の上で震わせる。

そんな顔するなんてズルイ。

私が悪いみたいだ。

彼を傷付けてしまったような気がして高鳴った心臓がきゅっと痛む。

罪悪感で揺れた私の瞳に、エミルは慈愛に満ちた笑みを浮かべ、もう一度だけ、そ……っと唇に触れて……どさりと乗った。

「いったーい!!」

痛めた足にエミルの体重が、ずん……っ、と係り、その痛みに迷わず悲鳴を上げた。その悲鳴にエミルは、がばりっ! と、身体を起こし、部屋に居たのだろう、アルファが「どうしたの?」と、驚くべき速さで乗り込んできた。

遅れて「葉出来たのかー?」とカナイも入ってくる。

「エ・ミ・ルさん。これはどういう状況ですか?」

どこをどう取っても、私は襲われていたようにしか見えないだろう。

まあ、実際そうなのだから、私もなんと説明すれば良いか分からない。

こつこつと床を苛立たしげに踏んでいたアルファに、エミルは「ええーっとな」と申し訳なさそうに髪をかき上げる。

「とりあえず、マシロちゃんの上から退いて下さい」

「あ、ああ、そうだね」

ずりずりとベッドから降りたエミルに続いて、私もベッドからにじり出て隅っこに腰掛ける。

「要するに葉が出来たんだろ? ああ、俺が被験者にならなくて良かった」

ぴりぴりとしているアルファとは対照的に、極自然にそう口にしたカナイは、勝手に人の部屋の窓を開けて風を通す。

私には全く話が見えない。

苛々とするアルファに、赤い顔を隠すことも忘れて、きよとん…と、する私を順番に見てカナイは溜息を落とす。

「お前らアルク草についての知識ゼロか？」

私は前日に図鑑で下調べしたし、ゼロじゃない。

ゼロじゃないといたいけど、私が知っているのは、どんなところに生えていて、どんな見た目か、程度だ。

きっとそれでは、カナイのいう知識とは程遠いだろう。

眉を寄せた私とは対照的に、アルファは、知ってますよ。と、ぶーたれる。

「マシロ、ごめんね。一応完成したから、誰かに試飲をと思ったんだけど、あればっかりは無闇に飲ませるわけに行かなくて」

「だからって自分で飲むことないだろ。しかもマシロが居るときに」

しょぼん…と、と、してしまっているエミルに、カナイが多少困惑した声で突っ込み肩を落とす。

「アルク草の殆どは、精神に直接作用する媚薬系の薬に使われるんです。だから、今回の依頼もその類だった、のは分かりますけど！それがどうして、マシロちゃんの上に乗ってることになるんですか！」

アルファ。もっと齒に衣着せて話しよう。

物凄い卑猥なことをされていたような響きに聞こえるよ。

アルファの叫び声に、私を含めた三人が大きな溜息を吐いた。

扉を開けっ放しにしていたため、普段はなるべく係わらないようにしてくれているのだろう、他の生徒まで廊下でざわついていた。カナイはアルファに、声がデカイ！ と、怒ってから廊下へ顔を出し何でもない取り成して人払いをしてくれた。その後、あまり部屋に籠っているのは良策ではないと判断したのか、カナイは、飯でも食いに行こう。と、全員を私の部屋から追い出した。

もちろん私も。

さっきまでとは違い食堂は生徒で賑わっていた。

あまりみんなと同じ時間に食事を取ることをしなかったから、初めてではないが久しぶりな感じだ。

授業でもなんでも、ここは基本少人数制だから、クラスメイトといっても殆ど居ない。

その数少ないクラスメイトが、私の足を見て気に掛けてくれた。あまり気に掛けてもらうとアルファがまた気にしてもいけないからと、普通に歩こうと思ったが、まだ普通に動かせるほどには回復していなかった。

ふらついて一番手近なものに縋ると、エミルの腕だった。「大丈夫？」と聞いてくれたエミルに、私は反射的に身体を弾いてしまい、余計にバランスを崩し、危ないと支えられる。

うう。私、何やってるんだろう。

普段は遠巻きにしか見ない生徒の冷やかしも聞こえる。
これではエミルに申し訳ない。

「ほら、マシロちゃんはここに座って」

おろおろしていた私の両脇に手を突っ込んで、ひょいと持ち上げたアルファは、さっさと私を椅子に座らせる。

流石、騎士様だ。見た目に反して力がある。

四人とも到底食事をする雰囲気ではなかったが、ここに来てそれをしていないのは邪道だし邪魔だろう。
仕方ないのでチビチビと手をつける。

媚薬。

媚薬っていうのは、よく漫画とかでも出てくるよね。

確か、相手に恋慕の情を起こされるとか、そういう気分になせしてしまう薬。

それを飲んだということは、あのエミルの奇行はその作用ということで、気持ちはそのにないんだよね。そうだとしたら、私の初めてのキス——ブラックのは断じてカウントしない！——は、またしても流されただけだ。

私、男運ないのかもしれない。

「……初めてだったのに……」

ぶすっとキャロットソテーをフォークで刺した私は、無言で口を動かしていた三人の時間を止めてしまったようだ。

そして、次の瞬間には、ごほごほ……つとエミルが咽て派手に咳き込んだ。

隣に座っていたアルファは、私の両肩を掴みゆさゆさと揺する。

「な・に・を、されたんですか！」

「あわわ、されてない、されてないよっ！ 何も」

それ以外この状況でなんと答えろと？

—— ……私、やっぱり男運ない。

第二十五話：女の子は甘いもので出来ている

結局、あやふやなままだ。

あやふやなままだけど、あれは薬のせいで、でも薬のせいかも知れないけど、別に好きだとか愛してるとか直接的にいわれたわけじゃない。

何だか、そこが微妙に引っかかる。

いや、いわれたかったわけじゃない。

わけじゃないわけじゃないけど、そういう薬ならその手の言葉を並べそうだ。

あの顔で、あの声で、そんなこといわれた日には、好きにならな
いわけがないような気がする。だって、正真正銘の王子様だ。リアル
では私の周りに確実に存在しない人種だ。

エミルからは『帰って欲しくない』と告げられただけだ。

どうして、エミルは私に元の世界へ帰って欲しくないのだろう？
ここのことを殆ど知らない私に何の価値があるのだろうか？

そんなことが頭の中でぐるぐると渦巻いて、夜の帳が下りている
というのに、私はすっかり目が冴えてしまった。

ぎっと窓を開けると星は見えなかった。

こんな夜は珍しい。漆黒の闇は私に自然とブラックを連想させる。

そんなことを考えると、決まって本人が登場しそうだな？ と、
思ったところで申し訳なさそうな、どこか気遣わしげなノックの音

が聞こえた。

気が付けば好し。

気が付かれなくてもそれもまた好し。というくらい微かな音だ。

きっとこうして起きていなかったら気が付かない。

ノックの相手がブラックである可能性は極めて低い。あいつは私の都合など考えて出て来たりはしないだろうし、何より扉から普通に登場するようなことは限りなくゼロに近い。

私は、ひょこひょこ扉に近づいてノブに手を掛けた。

「あ、起きてた？」

かちやりとノブを回すと、そんなアルファの声が聞こえて私は扉を開いた。

扉を叩いたのはやはりアルファで、そっか起きてたのかと自分でノックしておきながら繰り返した。私は扉を開け放って「どうぞ？」と促したがアルファは首を振る。

「もう遅いし、女の子一人の部屋にずかずか入れないです。その、良かったら少し出ない？」

これまでなら、そんな小さなこと一番気にしなかったアルファの言葉に私は苦笑して、良いよと頷いた。

部屋着だけでは肌寒いので、椅子に掛けてあったストールを引っ張り、肩に羽織るとアルファの腕を借りて中庭まで出てきた。

部屋から見た外は、とても暗くて視界の確保にも困りそうだったのに中庭は仄かに明るい。

廊下から漏れてくる明かりの恩恵だと思う。

アルファは、ベンチに落ちた葉を払って私に座るように促してくれた。なんというか今日のアルファは紳士的だ。

エミルやブラックなら素でこういうことにまで気がつくけど、まさかアルファにまでそんな対応してもらえとは、意外だった。

私が、ありがとうと腰を下ろすと、アルファは軽く頷いてその隣に腰を下ろした。

微妙な沈黙が落ちる。

なんだ、この感じ。

「あ、あの、どうしたの、かな？」

居たたまれず先に口を開くとアルファは、びくんと肩を緊張させて「ああ、うん」と頷いて何か話し出そうとしてやめるといった感じを繰り返していた。

私はあまり我慢強い方ではないので、こうしてじっと沈黙に耐えるよりは……と「散歩でもする？」と切り出したのだが、アルファには、とんでもないっ！と、首を派手に振られた。

足を気にしてくれているのだということは直ぐに分かったが、捻挫くらい大したことないと思う。

そんなアルファに、ふうっと嘆息して私は再び空を仰ぐ。

そして、ようやくアルファは意を決したのか「あのね！」と声を張り上げた。ちよっぴり私が驚いてしまうと、アルファは慌てて音量を下げて「ごめん」と謝罪し話し始めた。

「あのね、僕……マシロちゃんに謝らないと」

「何？ 怪我のことならもう良いよ。何回もいうけど、これは私のミスだよ。私があんな不安定なところに腰掛けて、ぼんやりしてたからいけないだけでアルファに非はないでしょう？」

実際、依頼をこなしてくれたのはアルファだし。

私は本当に付いて行って唯迷惑を掛けたに過ぎない。感謝こそすれ、謝罪を受けるようなことは何一つない。

そんな私の言葉にアルファは「違うんです」と首を振った。

違う？ 何も違うないと思うけど、首を傾げた私に、アルファは申し訳なさそうな顔をしていた。

「僕のせいです。僕、ワザと一匹畑の手前で取り逃がしたんです」

突然のアルファの告白に、ぎゅっと心臓が苦しくなった。

わざとって……それは、つまり、私がオーガに襲われれば良いと思っただってこと？ 私が、あの爪の、あの牙の餌食になってしまっても構わないと思っただってこと？

きりきりと、胃の裏側あたりが傷む。

「―― ……ほんの、冗談のつもりで……」

「じょう、だん？」

声が少し擦れてしまった。そのことにアルファは気がつくことなく、すくっと立ち上がった。そして「本当にごめんっ！」と、重ねて膝でおでこが付くほど深々と頭を下げた。

どの部分が冗談なんだろう？ 冗談って……。

私が無力なのは、戦闘力が皆無なのは、周知の事実だ。虚勢を張ったり、私は立ち向かえるようなこと、いったつもりもそんな態度をとったつもりもない。

私に獣と対峙する力は能力はない。私は無力で、なんの役にも立てない、ただの人なのに……。

あんなのに襲われたらひとたまりもないのに、なのに。

私がアルファの謝罪も上の空で、そんなことばかりがぐるぐると脳内を駆け巡る。アルファの「マシロちゃん？」という心配そうな声で、私は、はたと我に返った。

「い、良いよ。気にしないで」

謝ってきた相手を許さないのは私の主義じゃない。

今日一日様子のおかしかったアルファを思い起こせば、きっと物凄く迷って、物凄く猛省して、そしてようやく口に出れたのだ。

それを認めないのは、受け入れてあげないのは、やっぱり駄目だ。

「どこに原因があったとしてもやっぱり転んじやったのは私の責任だし、アルファが気にしなくて良いよ」

口にしつつも心臓がどくどくいている。

アルファの顔をまっすぐ見ることが出来ずに自分の足元を見つめる。

こういう感覚は分かる。

私はちよっと泣きそうだ。

「ううん。僕が気がつくべきだったんです。マシロちゃんは、数日前にオーガの群れに襲われたばかりだったのに……ああいう反応には覚えがあります。訓練中、生死を彷徨うような怪我をした子は二度とそういう場に立てなかったり、常軌を逸してしまったり……ようするにトラウマになってるんです。マシロちゃんにだって、オーガに対するトラウマが出来てしまっても当然なのに」

もう一度、ごめんなさい。と、重ねたアルファに、私は「良いよ良いよ」と、片手を振ったが顔を上げられなかった。視界がゆらゆらと揺れて、瞬きをすれば瞳から涙が零れ落ちてしまいうさだ。顔を背けて、目頭を、ぐっと親指と人差し指で押さえる。お願い、引っ込んで……。

これまで、何かにトラウマなんて感じたことなんてなかった。

でも、アルファのいうように私はオーガが怖い。

見たり聞いたりとか外からの何かよりも内側から湧き上がってくる恐怖が勝り、身体が強張る。

今だって思い出ただけで、かちかちと歯が鳴ってしまう。

なんとか堪えようと思った。

気付かれないようにと思った。

でも、そこまでアルファは鈍くはなくて、私の隣に戻ってくると、そっと私の背に手を当ててゆっくりと擦ってくれる。

「大丈夫、大丈夫です。ここは図書館だから、何も怖いものは来ないよ。ごめんね。ごめんなさい……お願い、泣かないで、マシロちゃん……」

僅かに乱れる息を整えようと、大きく息を吸い深呼吸する。

「今まで、僕の周りの女の子って、その、なんていうか大抵の基準値より強い子が多かったから……普通の女の子って基準があまり掴めていなくて」

そう、だよな。

なんつっても武関係の素養の持ち主ばかりの女の子だもん。
私みたいに弱くもないし、何も出来ないわけじゃない。自分の身くらい自分で護れるだろうし。

「正直、エミルさんやカナイさんの態度はちよつと過保護すぎだと思っていたんです」

「あ、はは……それ、は、分かる。わた、しもそう思うから」

なんとかそう答えた私に、アルファは「ううん」と首を振った。

「過保護すぎるくらいじゃないといけなかったんです。マシロちゃんはこの世界のことを何も知らなくて、不安や心配事の塊で……出会った僕らのことだけが頼りなのに。僕らを信用するしかないのに、そんな僕らが、ううん、僕が、君を不安にさせるのはやっぱり違う」

もう一度小さく、違うと重ねて、僕は騎士なのに……と、零した。
そして続けられる言葉は聞き捨てならなかった。

「だから最初に、カナイさんとエミルさんが相談して、外の危険は君に伏せておく。というのだって当然で」

「え?。」

さりと口にしたアルファに、私が問い返すとアルファが不思議そうに首を傾げた。

ブラックに囁かれた、私にみんなが警告しないのは何故か、私の危険を放置していたのは何故か……考えないようにしていたけれど、その不安はいつでも芽吹きそうな状態で私の中で留まっていた。

アルファは、私の驚きの理由がどこにあるのか分からないように、戸惑いながら繰り返し説明する。

「えっと、だから帰るのが目的なんだし、この街は広いですから、特に都の外に出るような用事は無いだろうと。だから、その存在に怯えないといけないようなこと、知らない方がマシロちゃんのためだからと……」

ぽつぽつと思い出し考えながらアルファは続ける。

「だから、パーティのことだって、カナ伊さんが手は出すなっついてたんです。僕らが手を出さない限り、ギルド依頼だって雑用くらいしかないでしょ？ エミルさんは、マシロちゃんが『助けて』っていうまでだからね！ っっていうてましたけど」

「私のため？」

ぽつつと確認するように口にした私に、アルファは力強く頷いた。

「そうですよ。女の子なんだし出来れば怖い思いなんてしたくないですよ。僕にはぴんつとこなかったんですけど」

そういつてアルファは膝の上に握られていた私の手を取ってぎゅっと握った。

涙目の私が顔を上げると、アルファは夜空をやんわりと照らす月のように穏やかに微笑んでくれていた。

なんというか、やはり彼は天使を連想させる。

「早く、元の世界に戻れると良いね。元の世界には、オーガみたい
に危険な動物が居たりしないんですね？ 家族も友達も、きっと
マシロちゃんを護ってくれる」

怖いものなんてないんですね？ と、微笑んだアルファは、ほんの少しだけ寂しそうに見えたといった私の自惚れすぎだろうか。

見下ろした月（前書き）

※ エミル視点。未読でも本編に大して影響ありません ※

見下ろした月

「あいつすっかり懐いてるな」

何に不貞腐れているのか、カナイが余りにも苦々しく口にするから、僕は笑ってしまった。

中庭が見下ろせるポーチを陣取って、マシロとアルファの様子を盗み見るなんてお行儀の良いことじゃないのは分かっている。

分かっているけれど、人懐っこく見せてアルファは難しい。その口から発せられる棘で、マシロが傷つけられては可哀想だ。

それに……アルファ自身、今回のことにとっても落ち込んでいた。あんな様子のアルファは久しぶりに見た。それだけ、マシロがアルファにとって、心動かされる存在なのだろう。

「アルファは難しい子なんだけどね」

珍しく月のない夜だ。

ここ数日月ばかり見上げてきた。

手が届くとは到底思えない。

思えないけれど、カナイの案には賛成だ。

それに、やってみるだけの価値があると思った。でも、王宮は簡単に聖域を開放しないし、僕の話を受け入れもしない。こういうとき立場が弱いと苛々する。

僕はその感情を押し殺すように、別の話を振った。

「依頼薬の内容いわないでいてくれて、ありがとう」

「別に、あいつらが無知なだけだ。アルファは全く薬学に興味がないし、マシロはそこまで追いついていないというか……頭は良いと思うんだけどな。種のお陰で」

あんなものを、一般常識と思えるのは、カナイくらいなものだ。

カナイは世の全てを知りたいと思ってでも居るように、あらゆる知識を欲している節がある。それが、到底自身の素養だけでは追いつかないと知っていても、やらずには居られない。

何かに急ぎ立てられているようだ。そんな様子のカナイに、興味対象の問題じゃないかな？ と僕は笑った。

階下のアルファは、マシロと仲睦まじく談笑している。それをぼんやりと眺めていると、暫らく黙り込んでいたカナイが「でさ」と話を続ける。

「俺、前から一度聞いてみたかったんだ」

「んー？ 何」

改めて口にするカナイに僕は視線を投げた。戸惑い気味に僕を見て、小さく溜息。何がいたんだろう？ 暫し口を閉ざしてしまふカナイに首を傾げれば話を始めた。

「お前、さ、あいつのこと本気で異世界人なんて、信じてるのか？」

「さあ、どうかな？ 分らない。そうだと良いなと思うよ。だって、マシロは僕らを知らない。信じられる？ この世界にあって、僕らのことを知らないんだ。そんなに、有名になったつもりはないけれど……僕らの何も知らないでいる人間が、シル・メシアに居る

とは思えない」

そう、思えない。

良くも悪くも僕らは有名人だ。

あえて正面から揶揄してくるようなものはいないが、裏のない好意もない。

でも、マシロは他の生徒にするのと同じように、話しかけ微笑んでくれる。身分を知ってもその意味を知らない。

僕らであることしか、知らないんだ。

それはとても貴重だ。

カナイは僕を珍しいものでも見るように見てから、あー……と、ほんの少しい洩り、それでもやっぱり切り出した。

「試薬を何で自分で飲んだりしたんだ？」

そんな、カナイに、悪戯心が湧いて、もしかして、飲みたかった？ とくすくす笑ったら、そんなわけあるか！ と頬を染めた。知られたくない本心は誰にでもあるはずだ。

それは僕だって同じはずで、それが自分でも気がつかないようなものだったなら、尚更だ。それでも僕は試薬に手を出した。本当に

……

「どうしてかな？ 君やアルファに飲ませるのは戸惑われたんだ。マシロに何をいうかちょっと怖かった。どうしてそう思ったのか、よく分からないけど。あの薬を飲むと嘔吐を吐けなくなるから」

人は嘘をつくし、僕も嘘を吐く。

仕方がないといってしまふのはどうだろう？　嘘が吐けない自分は何を紡ぎ出すか、正直興味もあった。

「お前さ、もしかしくなくてもあいつのこと好きだったり？」

「ん？　好きだよ。もちろん」

不意に問い掛けてきたカナイに、あっさり答える。あっさり答えたあと、ふと、カナイの指す『好き』……好意の意味に気がついて「……あ、ああ、そういう好き？」と重ねる。

僕は、もうその場所には居なくなった——恐らく部屋に戻ったのだろう——マシロの姿を思い浮かべるように、眼下を見下ろした。

「どうだろう？」

明確な答えが分からない。

もちろん好きだけど、その種類を問われると少し戸惑う。

間近に迫ったマシロの瞳はとても綺麗で、そこに映る自分はとてもちっぽけだった。自信もなく余裕もない自分を見透かされているようで、心をつらえられてしまった。

それがとても恐くて、気がついたら口付けていた。

「どうだろう？　程度でお前何かしたんだ？　あいつに」

したことを思い出させるように繰り返され、そのときのこと脳裏に鮮明に蘇ってくる。そう、口付けてしまっていた。

マシロの唇は、とても、柔らかくて、暖かくて、甘くて……美味

しい。

あんな風に誰かに口付けをしたのははじめてだ。

どきどきと胸が高鳴り、かあっと熱が上がってくる。僕、もしかなくとも、女性に、物凄い失礼なことを……薬を使ってって、相手が汚い。

へなへなど、その場に座り込み頭を抱えた。頭天边から湯気でも出そうなほど熱い。

ううっ。

カナイからの白い視線も痛い。

「どど、どうしようっ。カナイ。やっぱり、謝らないと駄目？ 駄目だよ、うわっ。そうだ、マシロ初めてだっていった。見上げてくるマシロがあんまり可愛いから、正直いうともうちよつと良いカナと思っちゃった。駄目だよ」

「うわー、王子様サイテー、ケダモノー……」

よっこいせ、と僕の傍にしゃがみ込んでわざわざ耳元で囁く。

カナイにしては珍しい嫌がらせだ。

恨みがましくカナイを睨み付けると、カナイは「泣くなよ」と笑った。泣いてないよ。

「……ってアルファならいうな。と、思っただけだ。まあ、本人もあんまり気にしてないみたいだし、そんな気にしなくても良いんじゃないね？」

「なんかそれも嫌かも」

「どうしろっていうんだよ」

呆れて肩を竦めたカナイに僕は力なく、そうだよ。と呟いた。

矛盾している。

気にされすぎてこのままグシヤクするのは嫌だ。

でも、スルーされてしまうのも嫌だと思う。

この気持ちと、このどきどき、とても変だ……。

膝に額を擦り付けて大きく深呼吸を下あと、顎を乗せる。隣に立っていたカナイは月のない空をぼんやりと仰いでいた。

「マシロはさ、やっぱり白い月の少女なのかな？」

自然と口を吐いて出た。異世界人イコール白いもしくは青い月の住人だと考えるのは、この世界では当然ともいえる図式だと思う。

思うけど、目の前に居る自称異世界人は、どう見ても温室育ちの一般人にしか見えない。僕には素養を見る目はないし、星を詠む素養もない。だから、彼女が持っているものは分からない。

でも、この世界のように淀んでいない思考は、彼女が生きていた世界が美しいものであったことを現しているようで、確かにマシロの世界は美しいときを刻んでいたように思う。

「美しいときって、なんだろうな？」

そんな僕の心中を察したのか偶然同じことを考えていたのか、ぽつりと溢したカナイの言葉に僕は答えることなく、押し黙った。

長い年月の中で誰もはじき出すことの出来なかった答えを導き出

すことは容易じゃない。

何か定義でもあればと、理系脳しか持ち合わせていないカナイは思うだろう。

僕は、どうだろう。

マシロに関しては、疑うよりも、信じたほうが得心が行く。それに何より、彼女自身、隙がありすぎる。そして、マシロに触れるときの僅かな緊張はとても心地良くて癖になりそうだ。自分から、触れてみたいと思うのは彼女が初めてだ……。

白い月、青い月、二つ月

世界に伝わる、二つ月の童話に関しては、全容以外は曖昧で不確かなものでしかない。今、自分たちとめぐり合っただけの少女に重ねるには、時期尚早、かも、しれない。

でも、僕はもう、彼女に対してのこの気持ちに名前を与えてしまいかもしれない。

それだけでも、僕が行動する理由には十分すぎるから。

第二十六話：愛してみたいし愛されたい

—— ……暇だな。

私は午前の授業のあとは、自室待機をいつけられた。

エミルのいった通り、もうそれほど痛みはないが普通に歩いたり走ったり出来るまでには、もう少し掛かる。

カナイが、もし帰れなかったときのためにと、薬草学の本を持ってきていた。

勉強しているということだと思うけど、不吉なことをいわないで欲しい。

唯でさえ、今現在、私は迷惑真っ只中だ。

「浮気です。信じられません。私以外に身体を許すなんて」

部屋に戻ってからずーつ、と、この調子でブラックに責め続けられている。

最初は、理由も説明したし、何であんたにそんなこといわれないといけないのか?! と、突っ込みもしたがいい加減疲れた。

もう好きなだけいえば良い。

なんとでもいえば良いじゃないか。

—— ……逆ギレだ。

「対象外に手を出すのは私の主義ではないですが、苛々するので消してきます」

「待て、待て待て……」

消すってなんだ。

無言で机に向かって本のページを捲っていた私の隣で、ぶつぶつ
いていたブラックスの台詞が聞き捨てならないものになって、私は
踵を返したブラックの服を掴んだ。

やっと私の興味が戻ったと思ったのか、はい、と嬉しそうに振り
返り尻尾を揺らす。

「何回もいうけど」

「分かってますよ。媚薬関連の薬の影響なんですよ。それなら、
私も媚薬でも作りましようか？ もう歯止めがなくなってしまいうく
らいの。ルール違反もこの際関係ないです」

関係あるよ、関係あるから怖いこといわないで。

「そーいう問題じゃなくて！ 大体、あんた私に好かれようと、嫌
われてようと、関係ないっていったじゃない。別に私が誰と何を
しようと」

「関係なくないですよ。もしかして、王子のこと好きなんですか？
ああ、もうやはり邪魔ですね。役に立つかと思ったので、好きに
させていたのに」

もう、本当、この暴走猫どうにかして欲しい。

前にも説明したような気がするが、第三者を役に立つか、立たな
いか、利用価値が有るか、無いか、で判断出来るほど人間関係は簡
単ではない。

それに、本人には聞き辛くまだ問い質せていないが、アルファの
話からすれば、目の前の猫耳男は人殺しだ。

でも、アルファからもそうだけど、こいつからも、いまいち誰かの生き死にに重さが感じられない。

私がまだ、大切な人を失ったりしたことがないから、分からないだけだろうか？

「ねえ、ブラック」

「え？ はい」

ずっと語気の荒かった私が、冷静さを取り戻したのに虚を衝かれたのか、ブラックの耳がぴこんと動く。緊張感が削がれる。というか、目を見て話したくても、目線が若干上になってしまうのは私の罪じゃない。

でも、駄目。今はちゃんと聞かなくちゃ。

こほんっと咳払いをして、ちらっと耳を見たあと、ダメダメと、ブラックと向き合って話し始める。

「人を殺めたりするのって、貴方たちのいうルール違反でしょ？」

「依頼内容によりますね」

予想外の答えだ。

迷いも無く疑問も無く、ブラックは真っ直ぐに答えてくれた。

でも依頼内容ってどういうことだろう？ 私の疑問に気が付いたのだろうブラックは、人差し指を口元に宛がって「企業秘密です」と微笑む。

「といっても、この世界で知らないのはマシロだけですけど」「だったら、知っても問題ないでしょ？」

つい言葉を重ねれば、ブラックは微笑んだまま「大有りですよ」と続ける。

「私は気が付いたんです。手に入れるという点では同じだと思いますが、やはり無理矢理というやり方はスマートではないですし、私も愛されるという経験をしてみたい」

「は？」

大きく話が逸れてきた感じがする。

私は、傍に立つブラックを見上げた。

「私が、もしも誰かを愛することがあるとすれば、貴方以外に有り得ません。同じように、この世界で私のことを愛してくれる可能性がある人物も、貴方しか居ないと思います」

「い、いつてる意味がよく分からない」

片時も瞳を逸らすことなく真っ直ぐ見つめてくるブラックは、無駄に美形なだけあって凄い洗脳力を持っているような気がする。

思わず赤くなる顔を隠し逃げるように、顔を逸らすのは私の方だ。

「逃げないで下さい」

そんな私をブラックは逃がさない。

「貴方しか、マシロしか私を愛してくれる人は居ないといっているんです」

「どう、して？」

片手を机の上につき、空いた手で逃げた私の顔を固定してしまう。

頬に触れている皇かな長い指が、時折頬を撫でていく。

私の疑問にブラックは笑みを深め「貴方は優しいですから」と腰を屈め、私の頬に擦り寄ってくる。

男の人なのに、乙女も羨む肌理細かな肌は、とても気持ち良いと思ったのに「マシロの肌は柔らかく気持ち良いですね」と先に口にして顔を上げると目を合わせて……もう一度、微笑んでくれるのはブラックだ。

こんなことをしてしまうと、なんというか本当の恋人同士みたいだ。

いや、それ以上のバカップルに思える。

「ブラック、私、ね」

「はい」

そう感じてしまったとき、急にブラックの気持ちを重く感じた。

いつもいつも口先三寸の相手だから、そんな風に感じることもなくて無かったのに、このところのブラックの言葉は、時折、きちんとした真っ直ぐな感情が籠っているような錯覚を起こす。

私はその気持ちを見ないようには、やはり悪いことなのか？ 今だって、私は、方法があれば今すぐにでも

「帰るつもりなんだよ」

当然のことなのに、どうしてそれを口にするのにこんなに胸が痛むんだろう。

ブラックは、何もいわないけど微かに唇を震わせたあと、瞳を閉じて首を振った。分かっているといっているのか、駄目だといっているのか分からない。

「ブラック？」

「……今日は、帰ります」

ずっと私から離れると、そういつて口角を引き上げる。

思わず「え？」と零してしまった私に、ブラックは感情の読めない笑みを湛えて「寂しいですか？ 私は貴方の何倍も寂しいですよ」と繋いだ。

「また会いに来ますから、それまで浮気しちゃ駄目ですよ」

杖をふりふりそれだけいつて、その姿は私の視界から消えた。

「だから浮気ってなんだよ」と、ぽつりと呟いた私に、返事は無い。

ぱたぱたと風がカーテンを揺らしていくと、さっきまで騒がしかったのが嘘のようだ。

それを寂しいか思ってしまったら、私はきつと負けだ。

「あれ、カナイだけ？」

一人の空間に耐えかねて、私はかなりの時間を掛けて、図書館の階段を昇ったり降りたりしていつもの個室へと辿り着いた。

こんなに遠かったんだ。

扉を開くと中で作業をしていたのは、カナイだけだった。

私の姿が予想外だったのか、カナイは何やってるんだ。と、慌てて立ち上がり手を貸してくれる。

別にそこまで重症ではないけど、まあ、お姫様対応も悪くない。いつもなら絶対そんなことに気を遣わないだろうこいつだから尚の事だ。

「アルファはサボってるのか昼から見えない。エミルは完成した薬をギルドに持って行ったのとちよつと調べ物をしに出てもらっている」

私を椅子に座らせつつ説明してくれる。

「ねえ、カナイ」

再びさっさと作業に戻ったカナイに、私は邪魔なのは分かっているが話し掛けた。

カナイは「んー？」と本から目を離すことなく口を開く。

「種屋って何屋？」

カナイ以外に適任者は居ないだろう。

アルファでは、冷静に話をするのは無理っぽいし、エミルでは知識は伴っていても説明が苦手だ。

―― ……シゼは、まだ子どもだ。

自分で話をしたことに責任を持たせるには、まだ早いと思う。

カナイは、顔を上げると眉を寄せて怪訝そうな表情を作り、私の真意を知りたそうな顔をしていたが、分かるわけないと気が付いたのか、はあと嘆息して本を閉じた。

「種屋は種を売っているところだ」

「いや、それは知ってるよ。私も飲んだし」

「だったら、それで良いだろう？ 他に何が知りたいんだ？」

カナイの台詞には、どうせこの世界とは関係のないよそ者のくせに、という意味合いが込められているような気がして私は少し不機嫌になった。

「王子様を撃ったっていった」

ぽつ、と口にした私にカナイは驚いたような顔をした。

「アルファの奴、お前にそんなことまで話をしたのか？」

「うん。最初から終わりまでというわけじゃないと思うけど、雨の日が嫌いな理由は聞いた。私には分からないけど、仕方ないのかも知れないと思う。でさ、王子様ってことはエミルの兄弟だよね…
…エミル、兄弟亡くしてるんだね」

これも私には分からない経験だけど、お兄ちゃんや郁斗がもしと考えただけで、心がずしんと鉛のように重くなり痛みを覚える。

「そんなことも知ってるなら、お前が自分で闇猫に聞けば良いだろ？」

「聞いたよ。聞いたけど、企業秘密ですっていわれた。私は蚊帳の外で居れば良いんだよね。カナイだってそう思ってるんでしょ」

我ながら子どもっぽいとは思ったがぶすつと不貞腐れた。

カナイはお兄ちゃん気質なのか、そういう態度には弱いようで、
ったく仕方ねえな、とぼやいて渋々といった様子だが話を始めてく
れる。

「お前だって、薬師の卵なんだから飲んだ薬の内容なんて知らない
方が良いことの方が多いのくらい、分かるだろ？」

そんな危険なもので出来ているのか種。

私はカナイの前置きにちょっと引いたが、私にだってそれくらい
の覚悟はある。

……あるつもりだ。

だから多少のことでは驚かない。

良いから話して、と促すともう一度だけ溜息を零し宛がっていた
眼鏡を外すと机の上に置いた。

第二十七話：種屋って何屋？

「まあ、闇猫はお前に嫌われたくないみたいだから、話しても良いか」

と、口にしたカナイは少し意地悪そうな顔をしていた。

人の嫌がることをさせるのは良くないけど、私の知りたいという気持ちの方が今日は勝った。だから、話を始めようとするカナイを止めたりはしない。

「とはいっても、俺が知っているのはこの世界の誰でも知っていることだけだ。種屋本人が背負うもののことまでは知らない」

それでも構わないのなら、と、念を押されて、私はこくん……と頷いた。

暫らくカナイは、頷いた私を見詰めていたが、諦める気がないことに得心がいったのか、はあと長く息を吐いたあと話しを始めた。

「お前の世界では人、いや、人が死ぬとどうなるんだ？」

「どうなるって、そりゃ、動かなくなるし？ 何て答えればいいのか？ 火葬して遺骨を埋葬する、でしょ？ 普通」

意味の分からない質問をしたカナイは「なるほど」と頷いて話を続けた。

「この世界では、人は死ぬと種になるんだ」
「は？」

「だから、人は死ぬと種になる。鼓動を止めた肉体からは、持ち主

の素養を含んだ種が出てくる」

人が死ぬと種になる……カナイの言葉がずしりと私の身体に圧し掛かる。

「わた、し……」

私はそれを飲んだ。

人の命を、人の死を飲み込んだ。

一気に体中の体温が下がった気がする。

「おい」

がたりと慌てた様子でカナイが立ち上がり私の肩を掴んだ。

え？ と顔を上げると大丈夫かと凄く真摯な態度で見下ろして顔を覗き込んでくる。

大丈夫？ 大丈夫なわけない。

わけないけど、知りたいといったのは私だ。

だから私は何を聞いても大丈夫、だ。

「マシロ？ おい。だからいったのに、少し外に出るか？」

「へーきだよ。でもカナイが気分転換したいなら付き合う」

鏡を見なくても分かる。私は今、蒼白な顔をしているだろう。身体の内から、すうっと冷えて胸の奥を冷たいと感じる。

それを分かっているのに、私の口から出てきた台詞は虚勢だった。そんな態度は馬鹿で、可愛くないなど、私自身思うのに、カナイは特に気にするでもなく「はいはい」と私の腕を取り引き上げた。

＊＊＊

「この世界では驚くことじゃないんだよね。人が種になることも…それを飲む人が居ることも」

屋上庭園に上がって、ベンチを一つ陣取る。

暖かな日差しが降り注ぐ場所で、やっと落ち着いてきた私が、零した言葉にカナイは「そうだな」と頷く。

屋上庭園に來ると空がとても近く感じる。

中庭同様、手入れの行き届いた木々には色鮮やかな小鳥たちが憩い囀っていて、癒し効果も抜群だ。

それにしても、ブラックの書齋に並んでいたあの瓶の中身が全て人の命で出来ているとしたら、ブラックは……。

「種屋はそれを回収し、売買することを許されている。悲しみにくれる遺族を前に生きた証であり遺品の一つであるはずの種を淡々と回収していく種屋を、闇猫と呼び、好ましく思わない奴が多いのは仕方ないことだろうか？」

でも、この世界の人は素養が全てだ。

その理屈からすれば、ブラックだってなりたくて種屋になったわけじゃない。

人の憎しみを受けて傷つかないわけないし、悲しくないわけない。

でも、彼は平然と立っている、憎しみも悲しみも怒りもその全て見ないようにしているのか、受け流しているのか、もしくは、もう、何も感じないほど傷ついてしまっているのか、私には分からない。

分からないけど、唯、彼の瞳の奥の色を、私が切なく思うのは、やはり間違っではないのだと思う。

「でも、それならブラックが直接手を下しているわけじゃ……」

「ん？ ああ、下すこともあるんだ。依頼があれば、な……まあ、奴の場合無くては割りとは頻りに消してみたいだけだな」

目を見開いてカナイを見詰めた私に、カナイは「俺を責めるなよ」と苦笑する。

「闇猫の手に掛かると、種しか残らないらしい」

依頼とか、誰かの死を願う人が居なくても、手を出してしまうというのにも、種しか残らないというのにも、思い返せば頷ける。

あの時は恐怖が勝って気に留めることも出来なかったが、オーガを一掃してくれたとき、オーガの肉体は塵と消えた。

暗かったから、あのときの詳細は分からない。でも、消えた。痛み苦しむ間もなく。

それから、シゼと一緒に居たとき、今、思えば射殺しそう空気をまとっていたことは確かだ。

私はそれに肝を冷やしたのだから。

「依頼なんて誰がするの。ルール違反なのに」

「色々だろ？ 個人の場合もあるし、国の場合もある。確かに殺人はルール違反だが、国は闇猫を見逃している」

国が認めた……というよりは求めたという方がしっくりするかも

知れない。

「どうして、そんなこと」

「人にも、獣よりもずっと危険で凶暴な奴も居るしな。ブラックは全てを修めるもの。下手に軍を動かすよりも、効率的で確実だ。それに何より、国は蒼月教徒を恐れている」

蒼月信仰って知ってるか？ と重ねられて私は頷いた。

それが意外だったのか、失礼にも驚いているカナイに、私はシゼに聞いたのだと付け加えると「ああ」と訳知り顔で納得したようだ。

「信仰ってのは厄介だ。過去の大規模な戦争の殆どは、蒼月教徒と王宮が絡んでいる。出来ることなら大人しくして欲しいだろう」

その辺りのことは私には経験もないし、想像できる範囲のことでもないからよく分からない。分かることといえば、ブラックは、世界から孤立させられている存在なのだろうということだ。

「孤独、なんだよねきっと」

「は？ 闇猫がか？」

ぐんっと高い空を仰いでそういった私に、カナイは声を裏返し呆れたようだ。

でも、カナイはさっきブラックのことを一度だけ名前で呼んだ。種屋ということだけではなく、カナイはちゃんと『個人』として人を見てくれる視野の広い奴だ。そんな人が居るということを、きっとブラックは知らないだろうし、カナイも自覚していない。

私の呟きに答えを導き出そうとしているのは分かるが、結局、何

も思い浮かばなかったのか簡潔に纏めた。

「何か良く分かんねーけど、お前って、馬鹿だよな」

「……それ、アルファにもいわれた」

「んじゃ、その内エミルにもいわれるな」

ちっ。否定しきれない予言に私は苦い思いをする。

「酷いな僕はそんなこといわないよ」

もう、上に居るってだけじゃ分かり難いよ。と、続けてエミルは歩み寄ってくる。ひょこりと顔を覗かせたエミルに私は大きく仰け反って距離をとってしまった。

お、お帰り。と、何とか口にすると、にっこり穏やかに「ただいま」と返してもらえる。

どきまぎしてしまうのは私だけなのだろうか？　だとしたら少し癪なので、私だって普通に振舞わねば！　そう思うのに、エミルが傍に立つとどきどきする。指先が触れてしまうんじゃないかという距離になると、緊張して身体が硬くなる。拒絶しているわけじゃないんだけど……過剰に反応してしまう。

「もう少ししたら、アルファがお茶持って上がってくれるから、おやつにしよう。出たついでにお菓子買って来たんだ」

マシロ、チョコ系が好きだったよね？　と、チョコレートマフィンを渡してくれた。

ありがとう。と、受け取るとまだ少し暖かい。

ふわふわだ。

その柔らかさと暖かさに、硬くしていた緊張が解れ、思わず顔が綻ぶ。ふと、視線を感じて顔を上げれば、どこか、何か嬉しそうなエミルと目が合って、慌てて赤くなる顔を隠すように逸らす。

駄目だ、心の準備が出来てないときに目が合うのは駄目だ。

「と、ところでさ、エミルって料理とかも出来るの？」

無理矢理話題を振った私に、摘み食いとアルファが来るのも待たずに、マフィンを一つ取り上げて頬張ったカナイを嗜めつつ「出来なくはないよ」と答えてくれる。

「料理って、薬を作るのに似てるよね。実際に薬膳料理とか薬草を直接使ったものもあるし」

「でも、エミルの作ったものは基本的に何か盛ってあるから気をつけろよ。美味いけどな」

「マシロには盛らないって前いわなかった？ 盛らないよ」

私じゃなければ盛るなら、カナイの台詞は間違っていないと思う。

はあ、と、溜息を零したところでアルファが駆け寄ってきた。

よく手にしていたポットやトレイから、お茶が零れてしまわなかったものだ。と感心する勢いだ。

どいて！ どいて！ と、座っていたカナイを押しつけて、入れ替わるように座ると、かちゃかちゃとお茶の準備をしながら「何の話だったんですか？」と尋ねるから、料理の話をしていたことを告げる。すると、ああと頷き

「僕、アウトドア系の料理なら得意です。今度、遠出するときには

披露しますよ」

はい、と、暖かな紅茶の入ったカップを渡してくれつつにっこりしてくれる。

初めて野営したときも、殆どアルファが仕切ってくれていた。

―― ……四次元ポーチで……。

「そういえば、さつきから黙ってるけどカナイはどうなの？」

「ああ、カナイさんは駄目駄目。手先も器用そうだし頭も良いけど、料理はからっきし駄目です。ほんっとーに不味いです」

それはもう呪いレベル。と、締めたアルファに口答えしないところを見ると、自他共に認める……という奴らしい。

カナイは、不機嫌そうにしながら紅茶を呷って「お前はどうかんだよ」と私に振る。

第二十八話：黒猫様S発言

「出来るよ、普通に」

「え」

エミルとアルファの声が重なった。

どういう意味だ。失礼すぎる。

確かに家では殆どお兄ちゃんが家事をやってくれていたけど、調理実習レベルだけど、食べられるものを作るハズなのに。じつとりと二人を順番に睨み付けると、二人は顔を見合わせて乾いた笑いを浮かべた。

「いや、マシロちゃんって、実習のとき材料刻むのも全部ぶつ切りだから」

「本当、よくあれで調剤して成功するなと感心してたから」

「ふーん……」

この二人は、私のことをそんな風に見ていたんだ。やはり物凄く失礼だ。

「でも、普通に作れるのも本当だからね！ 彼に食べさせたときだって、ちゃんと美味しいっていつてくれてたし、味見はしなかったけど美味しいんでしょ？」

ぶすっとそれだけいい放って、私はマフィンを口に運ぶ。ほわほわで美味しい。ちょっぴり融けかけのチョコって凄く不思議な食感だと思う。

もぐもぐと味わって紅茶を一口。

やけに外野が静かになった。どうしたんだろう？ と、三人を見ると少し固まっていた。

「何？」

私は、まだ、一つ目だしもう幾つ目？ というアルファじゃないんだから、手の中にまだ残っているもので彼の時間を止めているわけじゃないと思う。だったら、他に何かあるんだろう？ ことんと首を傾げれば、アルファが凄く真面目な顔で切り出し、みんなそれに続く。

「もしかして、だから帰りたいんですか？」

「物好きもいたもんだな」

「マシロ恋人居たの？」

―― ……なるほど、こいつらは三人とも失礼なことを考えていたのか。

初めてじゃ……と、小さな声で漏らしたエミルに私は頬が熱持った。

「恋人くらい居ます。というか、居ました……だけどね。そ、それから、別に付き合ってるから何かしてるわけじゃないでしょ！」

なんだ、そっか。と、目で見て明らかに胸を撫で下ろしたエミルに複雑な気分だ。

「えー、なんで別れたんですか？ 勿体無い。その男、馬鹿ですよ
ね」

ずずい……っ、と、身を乗り出してきたアルファに私は苦笑する。どっちが馬鹿だったかは分からない。それが恋愛というものだし、お互い初恋なら尚更だ。

「どっちが馬鹿かは分からないけど、確かに馬鹿な男だと思いたいと思う」

あくまで希望だけど、私一人が好きだったみたいな感じになっては悲しすぎる。

「聞いても良かったら、今後の参考にどうして別れたのか教えて欲しいな？」

にこりとそういったエミルに、なんの参考か分からないし、王子様の恋愛と、私のような一般市民の恋愛観は、ちよつと違うのではないだろうか？ それに何で二人とも男の子のくせにこんなに恋話に食いついてくるんだろう？

私は少しだけ迷ったが、別にもう昔のことだし、腹は立っても悲しいということは無い。問題ないだろう。

「どうして別れたかといえば、私は相手の浮気を許して上げられるほど、心の広い女じゃなかったってことだと思うけど」

「ええっ！ マシロちゃんが居るのに他の子に走ったの？ ほんつとーに馬鹿な男ですね」

ちよつと大げさにも思えるくらいに、派手にそういつてくれるアルファに苦笑する。

「ありがと、お世辞でも救われる。現場を見ていなかったら、私は

信じてたかも知れないけど、いやーもうバッチリ、他の子とのキスシーンとか目にしちゃったら、いい逃れ出来ないよね。私には手も出さなかったくせに練習がどうのこうのといってたけど」

そのときは本当に好きだったからどうしても許せなかった。

もう一年以上前の話だから、大丈夫。と、思っただけでも、改めて口にすると思いが蘇って眉を寄せる。

好きだった。指が触れるだけでときどきした。もっと触れたらどうなってしまうんだろうと、わくわくもしていた。だから、その期待と好奇が私の心に深い傷を造った。

「あー、それは酷いですね」

泣いてはいない。まだ、泣いてはいないけれど、その直前のように鼻の奥がつんとして目頭が熱くなる。それらをあっさり吹き飛ばすように、その場にあるはずのない声が聞こえた。

「私が貴方の世界に居たら、即消して差し上げますのに、その愚者が、まだその世界のどこかで呼吸しているのかと思うと虫唾が走ります。本当に残念です」

「またも、ぬっ！ と、私の背後から現れたブラックは、不吉なことをいって私が手に持っていたマフィンを頬張る。」

—— ……デジャヴか？

「それに、マシロから特別の権利を貰ってるのに、本当に、勿体無いことをする愚者が居たものです。私なら、キスだけでは物足りないので、あ……」

バキッ！

何となくそれ以上口を開かせたら、出版禁止用語とか羅列しそうだったから黙らせた。

私のグーパンチを避けることもなく、ブラックは頬に受ける。真剣に殴ったけど、いつも通り大したダメージではなさそうだ。少し頬が赤いかな？ 程度はあるけど。

しかし、ブラックの登場で熱心に私の話に耳を傾けていた三人から、さっと笑みが消えた。アルファに至っては腰の剣に手を添えている。直ぐにでも抜刀し戦闘になりそうだ。

「マシロの後ろから離れろ、闇猫」

低く唸るような声を出す。普段のアルファと違いすぎて背筋がひんやりと寒くなる。

それなのに、ブラックは微塵も雰囲気を変えることなく軽口をたたく。

「嫌ですよ。私は構いませんけど、マシロは貴方たちの一人でも、私が消したとなると、私を永遠に許してくれそうに在りませんし」

当たり前だ。

だから物騒なことを口にするな。

ブラックはこの間のシゼの件で、少しは学習してくれたようだ。

「それに、優秀な貴方たちでも私を捕らえることは出来ません。そして、若い騎士の貴方がその剣を抜こうと、また昔と同じように私に間合いに入られ屈辱を与えられるだけです」

万が一にも傷を負うのが私であつたとしても、マシロは悲しみますよ。と、淡々と話をするブラックの言葉に三人はちらとだけ私の方を見て、最初にカナイが嘆息した。

辺りに張った何かの糸が幾本か切れたような気がする。

もしかしたら、カナイが大技でも仕込もうとしていたのかも知れない。

「アルファ、手を放して。ちょうど良い機会だ、僕は彼に聞きたいことがある」

帯刀から手が離れないアルファの手を、エミルが背後からそつと取って、真つ直ぐにブラックを見据える。普段のエミルからは感じられない鋭い視線で私の方が怯んでしまう。

「マシロが怯えるので、怖い顔しないで下さい王子」

「セルシスの一件は、貴方の独断か、それとも誰かからの依頼か知りたい」

茶化したブラックに緩むことのない鋭い視線と低く腰を据えたエミルの声。ブラックはその真摯な問い質しにもゆるりと答える。

「守秘義務がありますから、私の仕事に関する内容はノーコメントです」

「よくいうぜ。歩く無法地帯のクセに、誰があんたにルールを引くんだよ」

はっと鼻先で笑ったのはカナイだ。

「私のルールは私が決めます。余計な仕事を増やさないためにも必

「要なことでしょう？」

くすくすと、笑いを零しつつ答えるブラックは、エミルたちの目にはどう映ったのか分からないが、私には必要以上の命を消したくないとも取れると思ったのだけど……それは私が彼をあまり知らないからだろうか？

「それに、王家の話はこうして王家から逃げ出している王子には必要の無い情報ではないですか？」

「ちょ、ブラック？」

明らかに挑発しているブラックの台詞に、私はストップを掛けたかったが、大きな耳をしているくせに聞こえないようだ。

「ですが、貴方は逃げ切れませんよ。王子は嫌でも王家に戻る。術師も、若い騎士も貴方が救ったかも知れません。しかし、貴方をその運命から救うものは誰も居ない。貴方の持つ素養が貴方を縛る」

ブラックの話は私には全く見えない。

でも、エミルはきゅっと唇を噛み締めて瞳を伏せた。アルファもカナイも逡巡してしまう。

「ブラック、もうやめて」

ブラックの上着の裾を引いて小さな声で囁いた。ブラックは私の耳元で「嫌です」と答え、すりっと頬を寄せ私の肩越しから話を続ける。

「ねえ、王子。その素養……不必要だというのなら、私に下さいませんか？」

甘い囁き。

え。と、驚きに顔を上げたエミルの表情から、私は咄嗟にそれは毒だと悟った。

それはカナイやアルファも同じだったらしくぴくんと肩を跳ねさせた。

「私が貴方のその素養、抜き取り種にして差し上げますよ。もちろん、謝礼も出しましょう」

いって、そうですね。とやや考えるそぶりを見せてちらりと私を見る。

「彼女にお貸ししている金額と、同額で如何ですか？」

「ふざけたこといわないで！」

怒鳴って手を振り上げた私の手首を、ブラックは簡単に掴まえて、にっこりと柔らかく微笑む。私は私で、思わず軸足に力を入れてしまったから眉をひそめると、ブラックはそっと私の身体を支えて座り直させてくれる。

「捻挫は癖になりますから、無理はしないで下さいね。私は、苦痛に耐えるマシロの顔も好きですが、助けてと、私に縋る悲哀に満ちた表情の方が好きです。出来ることなら早く音を上げてください」

—— ……このドSめ！

一瞬にして四人の心が重なったような気がする。
偏頭痛を覚えて、こめかみを押さえた私を案じていたブラックに、
エミルはこほんっと一つ咳払いをした。

「それで、君はマシロとの契約を破棄するんだね」

折角、話が逸れたと安堵していたところへ、再びエミル自身が、話題を引き戻してきた。それに慌てた様子でカナイが話に割って入る。

「お、おい。エミル、聞くな。闇猫の囁きは毒だ。一部の素養を抜き出すなんて芸当、出来るわけないだろう！ 素養は魂と連結しているんだ。そのくらい」

「分かってる、分かってるよ。カナイ」

ただ、聞いているだけだ。と、続けるけれど、その瞳は真剣そのもので……ただ聞くだけに留まるようには思えない。

「そうですね。契約に拘束力はなくなるでしょうね？ マシロは離れたがらないかも知れませんが」

「直ぐに離れます」

間髪居れずに答えた私に「えー、酷いー」と黄色い声を出す。

「あんなに、濃厚な口付けまでしたのに」

「してませんっ！ してませんからね！！ あんなの断じてキスじゃないわ！」

ふふふっと含み笑いをしたブラックに一言物申さないと気が済まない！ 今度は足元に気をつけて立ち上がり拳に力を込めた。

もしかしくなくても、こいつそれをいたくて、わざわざここまで手の込んだ嫌がらせをしたのか？ そんなに！ 私とエミルがキスしたのが気に入らないのか！ ふるふると怒りが溢れてくる。

「私への嫌がらせのために、みんなを巻き込まないでよっ！ 別に良いでしょ！ ほんっと、いつもいつもどこから覗いてるのよっ！ この、ストーカーっ！ 変態！ 変質者！」

私の罵声にブラックは、よよよと崩れるが私の両肩に腕を乗せるとにっこりと微笑んだ。

「マシロへの嫌がらせじゃないですよ、彼らへの嫌がらせです」

それじゃ、失礼しますね。と、一人爽やかに口にしたブラックは、ちゅっと私の頬に口付けると一陣の風とともに姿を消した。

恥ずかしいことを公言され、大きなダメージを受けるのは私であって、どう考えてもみんなへの嫌がらせには成りようがないだろうに、なんなのよあいつ。

「マシロちゃん、こっち向いて拭いてあげます」

刹那、沈黙が降りたのにアルファは、私の肩を掴んでくると自分の方へ向き直らせるとごしごしと頬を擦った。

だから、痛いってば。

眉をひそめた私に、もう少しだけ我慢してと続ける。剣を振り回すのを我慢してくれただけでも良しとしなくちゃね。そう思って、痛みに堪える。

「僕、少しだけ席外すよ。ごめんね」

「あ、おい、待てよエミル」

慌てて呼び止めたカナイに、エミルは困ったように微笑むと「心配しなくて大丈夫だから、少しだけ一人にさせて」とカナイを止めて一人で屋上庭園から降りていってしまった。

「エミル、大丈夫かな？」

「大丈夫ですよ。エミルさんは、そんなに弱くないし、僕も居ますし」

「お前が何の役に立つんだよ」

「えー、カナイさんの方が役に立つんですかし？ 今だってあっさり切られたくせにっ！」

「別に切られたわけじゃねえよ」

いつものようにきょんきょんと二人はいい争いを始めてしまった。

私はふうと溜息を零して、騒がしかったティータイムの片づけをした。残ったマフィン折角だからまたあとで食べよう。

―― ……私、こんなので本当に帰って良いのかな？

一山トレイに載せてベンチに深く座ると、二人の口喧嘩を聞きながら高く青い空を見上げた。

第二十九話…ストーカーをなめるなよ

「何やってるんだ？」

「んー、退屈なの」

いつもいつでも、真面目に勉強だか資料集めだかしてくれているカナイを私は邪魔していた。広い机の上に、山と積まれた本を押しつけて出来た僅かなスペースに突っ伏しカナイを見る。

「退屈なら、そっちの隅に山になってる本を棚に戻して来いよ」

「ああ、駄目。足が痛い」

嘘だ。

もう足は完全に治ったし、包帯もしていない。

カナイもそれは分かっているが、私のいい訳に「あ、そ」と特に興味を持つことも無く、自分の作業を続ける。単に追い出したかっただけだろう。それが出来ないなら別に居ても良いという事だ。

「むー、相手してよ。遊んでよ。暇すぎるー」

「……お前、俺が何やってるか分かってる？」

分かってるよ。本読んでるんだよね。ていうか私のためにやってくれてるんじゃない？ 半分以上は趣味だと思うけど。でも、物凄く暇なんだよ。私は。

「エミルも外出に付き合わせてくれなかったし、アルファは王宮に行くって言ってたし、あれまた後輩しごきに行くんだよね。凄い喜々としてた」

付いてきても良いといわれたがちよつと遠慮した。

今まで気が付かなかったが、アルファとカナイは定期的に卒業した学校に顔を出し、講師のようなことをしているらしい。カナイは、学費も生活費も自分で稼いでいるといていたので、その副業も収入源として使っているのだろう。

アルファのは、運動不足解消だ。

「エミルは、俺の用事で出てるんだ邪魔をするな」

「王子様を顎で使うのね」

「顎で使ってるのは俺じゃなくて、お前」

カナイは話を続けようとしたが、それを遮るものが私の視界を横切った。

『お約束の時間が迫ってます。時間です。時間です』

十センチ前後の洋服を着たウサギがひよこひよこ机上を跳ねて、それだけ告げるとぽんっ！と、消えた。カナイはそれを聞き終わると「もう、そんな時間か」と、ぶつぶついいながら、あてていた眼鏡を胸ポケットに仕舞い込み立ち上がる。

同じように立ち上がり興味津々で、今の何っ？という視線を投げた私に、カナイは面倒臭そうに溜息を吐く。それでも説明してくれるのがカナイだ。

「今のは傀儡くぐつ」

「傀儡くぐつって操り人形のこと？」

「ん、まあ、そんなところ」

「何でウサギなの？」

私の素朴疑問に、カナイは、ぱあっと頬を染める。なんだ？ 恥ずかしいところだったのだろうか。

「うるさい。ウサギには時間に厳しくて正確なイメージがあるだろ」

あるのか？ 私は首を捻ったがふと思い当たった。

不思議の国のアリスとか、ウサギが時計持って走ってた気がする。時間がないと騒ぎながら。こちらにも似たような童話があるのかな？ ま、そんなことよりも大半はカナイの趣味だと思うけど。

私が思うにカナイは、結構可愛いものが好きだと思う。前に猫にも優しかったし。

それ以上話を続けない私に、カナイは「もう良いだろう？」と口にして椅子に掛けてあった上着を羽織る。

「俺はこれから大聖堂で人と約束してある。お前は勉強でもして……られないよな」

物凄く嫌そうに私を見るが「一緒に来たいなら途中までなら良い」と許してくれた。

微妙に癪に障るが、カナイのこの物言いはいつものことだ。それに、退屈していると騒いでいた私の気持ちも汲んでくれたのだろう。

二つ返事で頷いて、私はカナイと一緒に図書館を出た。

街はいつも賑わっている。でもそれ以上にこのところ騒がしいよな気がする。

「あまり、きよろきよるするな。俺からも離れるな」

行きかう人々をのんびりと眺めていた私の手を乱暴に取ると、カナイはずんずんと大股で歩くから私は自然と小走りになる。

最近、みんな前以上に私に過保護な気がする。

一人で街に出ると叱られるし、一人でギルドの依頼を受けることも極力控えるようにいわれている。

確かに私一人で請け負えるような仕事では、その日のおやつ代くらいにしかならないからやってもやらなくても同じだと思う気持ちも分からなくないがほんの少し窮屈だ。

「ちょっと、ゆっくり歩いてよ。カナイ！」

「は？ 俺は普通に……」

息が上がり始めていた私にようやく気が付いたのか、カナイは小さな声で「悪い」と詫びて歩みを緩めた。

「何かあるのかな？」

「ん？ ああ、祭りがあるんだよ。この大通りはパレードにも使われるから、それに係わる連中で賑わっているんだ」

「お祭り？ 何か楽しそう」

「まあ、色々集まってくるからな。珍しいものも見られると思うが……まあ、大したものじゃない」

面倒臭そうにカナイは途中でその話を切り上げてしまった。私としてはもう少し聞きたかったが、多分話してくれない。

「結構遠いのね」

「ああ。図書館も、大聖堂も、王宮も、出来る限り互いの干渉を得

ないように離れているんだ。だから距離も結構ある。疲れてもここまで来たんだから、帰るとかいくなよ？ 面倒臭い。引き返す時間もないしな」

カナイって本当にデリカシーがないというか可愛くない。優しくない。

エミルだったら直ぐに「少し休んでいく？」とかいってくれるだろうし、アルファだって「おんぶしてあげましょうか？」とかいってくれるだろう。遠慮するけど。

ブラックだったら用事毎キャンセルしそうだ。

「カナイって、どうして女の子にモテるのか分からない」

「は？ 何だ、機嫌でも損ねたのか？ 帰りに甘いものでも買ってやるからしゃきしゃき歩け」

私は子どもか！ ……ほんつとーに、なんでこいつがモテるのか分からない。

それからまた暫らく歩いて、ようやく大聖堂の建物が見えた。図書館を初めて見上げた時もちょっと感動したが大聖堂も感動ものだった。荘厳な佇まいに気押される。

「お前はあっちの広場で待ってろ。確認してくるだけだから、そんなに時間は掛からないと思うが……厄介ごとに首は突っ込むな？」

中に入れるーと思ったのにカナイにあっさり腰を折られた。

私が頷くと同時に聖堂の鐘が辺りに鳴り響く。

広場に集まっていた鳩が、その音に驚いて一斉に空に羽ばたいていく。映画的一幕のようで圧倒される。

凄いね！ と、カナイに同意を求めようと思ったら、もう既にカナイの姿はなかった。ちえっ舌打ちすると、沿道の人々が集まり真っ白な馬が引く馬車が聖堂の前で停車する。

これはもしかしくなくても結婚式かも、と思い至った私は、興味本位でそれを見に歩み寄った。

ほうと長く息を吐いて、カナイと約束した広場の一角に腰掛けてぼんやりと待っていた。

手には花嫁さんに貰った――多分私たちの世界と同じなら――ドラジェだと思われる愛らしいお菓子が握られている。白いレースにピンクのリボン。女の子の夢みたいなお菓子だ。

花嫁さんは凄く綺麗で、凄く幸せそうだった。こういうときに印象に残るのは花嫁さんばかりで、お婿さんには申し訳ないけれどもあまり覚えていない。でも、あれだけ人を幸せそうな表情にしてあげられるのだからきっと素敵なんだろう。

「あら、貴方」

随分遠くまで来たから、こんなところに知り合いは居ない。そう思っ掛かった声に顔をあげると一度見たら忘れない顔だった。

「モリスン」

「ご記憶いただいて有難うございます。何故、このようなところを貴方のような方がふらふらしていらっしゃいますの？」

カナイのことが好き過ぎて、私にいい呪いを掛けてしまったお茶目さんだ。……ってお茶目で済むか！ 私はそのせいで死に掛け

た。

「ここは大聖堂の膝元。図書館でどのような手段を使い、皆様をばべらせていらっしゃるのか知りませんが……」

「私は別に！」

以前の丁寧な美しいものいいではなかった。

明らかにモリスンは私を見下げて罵っている。鈍い私にでも、そのくらいは直ぐに理解出来て、勢い任せに立ち上がると「まあ、怖い」と声を上げる。

私は、浅学だしあまりこういうときにいい返す言葉が思いつかない。何か、がつん！ と、相手の心に突き刺さるような言葉を掛けてやれば良いのにと自分で思うのに、真っ白だ。

「ご令嬢のお言葉とは思えませんね」

睨み付けるくらいしか出来ない私の肩にすっと手が掛かる。その声と姿に気が付いたモリスンは一気に血の気が引いたようだ。

「消しましょう。私のものを卑下するような、くだらない人間。居ないほうが良い」

「っ、種屋如きがわたくしに手を出せるとお思いですのっ！」

私の位置ではブラックの表情は伺えないが、モリスンの表情から察するに、とてつもなく冷酷な表情をしていることだろう。

「私に出来ないと思っているのでしたら、それこそ身のほどを……」

「もう良い、もう良いから」

気は進まないが目の前で人一人あっさり消されるのは嫌だ。

はいはい。と、ブラックにストップを掛けた私に、ブラックよりもモリスンの方が驚いているような気がする。

「ほら、モリスンも、もう行きなよ。私に係わりたくないんでしょ。それなら早く行くべきだよ」

モリスンはそういう私の顔と、ブラックの間を逡巡したあと、ぷいっと顔を逸らしてかつんと踵を鳴らし踵を返した。

気丈に振舞ってはいたが、足元が微妙におぼついていない。その後姿を見えなくなるまで見送って私は、はーと長く息を吐いた。

「どうして行かせたんですか？ 私は貴方に最初に仕掛けたときから、あんな人必要ないと思っていたのに」

「……物騒なことじゃないですよ。気に入らないだけで消してたらキリないでしょ」

「私は別に、世界に貴方と私だけになっても構いません。寧ろ大歓迎です」

私は構うの！ 勝手に歓迎するなっ！

怒る私にブラックは、分からないという姿勢は崩さなかったが、短く嘆息したあと、やんわりと微笑んだ。

「マシロは優しいですね。それとも甘いのでしょうか。でも、不思議と心地良い甘さです。私には分からないですが、この甘さが貴方の周りを惑わせているのかも知れませんか？」

「……は？」

分からないのはこっちだが、ブラックはそれだけいうと、ぐい私の手を「デートしましょう」と引いた。

「このところ図書館に籠りきりなのでしょう？　貴方はそれを窮屈に感じていたはずだ」

ブラックに凶星を衝かれて、一瞬「うっ」と声を詰めたが、私はここでカナイと待ち合わせをしている。勝手に離れるわけにもいかないし、何でブラックとデートしないといけないのかさっぱりだ。いーやーよっ！　と手を振り解く私にブラックは素直に眉を寄せ

る。
「マシロはどうして私には優しくないんですか？　私はこんなに貴方にだけ優しいのに」

捨てられた仔猫みたいな顔をするな！

尻尾下げるな！

耳をしゃげさせるな！

――…可愛すぎるから。思わずその愛らしさに負けそうになった。

「お前はどこからでも沸いて出てくるんだな？」

タイミング良く出てきたカナイに、用事は済んだのかと尋ねると頷いて私の肩に手を乗せた。

「マシロと私は繋がっていますからね。距離も場所も関係ありません」

「あ、そ。別に関係ない話だが、こいつを連れ出した以上、置いて帰るわけにも行かないんだ。今日は諦める」

いいたいことをいって、カナイはそのまま私を引いて、来た道を

歩き始める。

「というか、今、カナイが流した部分は流して良いのか？ 繋がってるってなんだよ。ストーカーの極みだよ……」。

ブラックは、面白くないという顔をしていたものの無理矢理私を引っ剥がすつもりもないようだ。そして、少しブラックから離れたところで、カナイは何か思い出したのか、ブラックを振り返る。

「こいつのことをお前なりに思ってるなら、あまり大きく動くな。人目につくようなことをするな。今はまだ、お前のものじゃないんだからな」

「いまいち私には内容が理解出来ないがいわれたブラックは、ずっと猫らしく瞳を細めて怪しい笑みを作ると「貴方も白い月に惹かれるんですね」と呟いて空を仰いだ。」

夜になれば白く輝く月も、青空の元では、そのなりを潜めていて見つけることも困難だ。

第三十話：籠の中の鳥は籠が必要だとは気付かない

帰りの道のりは行きほどのスピードはなく、私ものんびりとカナ
イの隣を歩くことが出来た。

行きはどうやら約束の時間があつたらしく、カナイ的には自分の
ペースを貫きたかったのだろう。それでも出来る限り私にも合わせ
てくれたわけだから、感謝しなくてはいけないとは思うのだけど、
どうにもこいつには感謝し難い。

「何変な顔してるんだ？ あ、ああ。そうか、クリムラにでも寄る
か？」

変な顔とは失礼だ。

本人を目の前にして、口にして良いことじゃないと思う。

益々眉間に皺が寄るのを感じつつも、カナイの提案に首を傾げる。
そういえば行きにそんなことをいつていた。カナイは律儀だ。

「いらないよ。みんなが私に餌付けするから、こっちだって体系維
持が大変なんだから」

これは本当。

エミルやアルファが出掛ける度に、何か買って帰るから、なんか
丸くなってくる気がする。

夢の中で食べ過ぎて太るのってどういうこと？

「お前でもそんなこと気にするんだな？ いつつもバクバク食べて
るから、気にしていないと……悪かった。悪かったから殴るな。俺
は打たれ強くない」

カナイの暴言に拳を握り締めた。それに気がついて慌てるカナイが面白い。

「取り合えず、さっきの礼もしたかったんだが……」
「礼？」

カナイに迷惑は掛けたが、感謝されるようなことをした覚えはない。意味が分からなくて首を傾げた私に、カナイは困ったような笑いを浮かべて小さく肩を竦める。

「モリスンを消させなかっただろ」

「……あんた見てたなら出てきなさいよ。私のガラスの心は崩壊寸前だったのよ」

「ガ、ガラスって……加工困難なレアメタル辺りの間違いだろ……それに、ほら俺が出て行くと何かややこしくなりそうだったから、な？」

な？ って、可愛らしく問い返されても、あんたは可愛くないからね。ぶすつとむくれた私の頭をぽんぽんと叩いたカナイに私は潰されそうだ。

「それにお前は自分が気に入らないくらいで、消したりしないだろ」
「当たり前でしょ。そんな後味悪い。私は他人の命を背負えるほど強くないし」

飲んだけど……他人の命を二つも飲んだけど。

このところ私はそれでよくうなされる。
こつんと足先に触れた小石を弾く。

仕方がなかった。

確かにそうなんだと思うから、口にはしないようにしているけど、でも、やっぱりちよつと重い。種なんて飲まなくても、きつと生きるってことは誰かや何かを犠牲にしているのだと思うけど、ここにこなければ私はそれをこんなにはつきりと実感しなかっただろう。

「でもさ……ってカナイ？」

人が真面目なことを考えている間にカナイは姿を消していた。きよろきよろと辺りを見回すと、ショーウィンドに張り付いている。取り合えず、ずかずか大股で歩み寄って一発殴る。

ワザとらしく痛みにしゃがみ込むカナイを無視して、何を見ているのかと思ったら、細工物だ。目をキラキラさせて見ていたのはなんだろう？ 多分、あの意味不明でごっちゃごっちゃしたカラクリだろう。

カナイは、それ自体に大した意味がなくても、細かい仕事が施されているものが好きだ。

アルファ曰く絶対に自分で出来ないからだといっていた。その言葉通りカナイは器用そうに見えてかなりの不器用さんだ。

「これ、何に使うの？」

「知らね。でも、すげーよなあ。細かいよなあ。あの辺なんて神業だぞ」

「まあ、カナイには絶対無理だよな」

絶対を強調し笑い飛ばしてやったら、ほっとけと不貞腐れた。そ

のまま、肘に膝を乗つけた先で、前髪を、ぐいっとかきあげて、短く唸り、ふうと嘆息。どうしたのかと思えば、硝子越しの私と目を合わせると口を開いた。

「お前さ、あんま気にするなよ。種のこと。元の世界に帰るなら尚更だ」

ゆっくりと、どこか優しげに聞こえる声に、とんっと心臓が跳ねる。カナイは時々こうして優しい。無関心なようできて、私になんて興味ないという風に見せているのに、ちゃんと見てくれているし、理解してくれようとしている。

「……うん。分かってる」

いわれる通り、建設的ではないことに頭を悩ませているほど、私は暇ではないはずだ。

「帰るんだろう？」

重ねたカナイは立ち上がると、もう一度名残惜しげにガラスケースの中を見てから「行こう」と私の背中を押した。

とぼとぼではあるものの、私の足が前に出ると、カナイの手は背中から離れた。大きな手のひらが完全に離れてしまうのは、どこか名残惜しい。

ちらりと隣を仰ぎ見れば「どうした？」という風に片眉を上げられた。私はそれになんでもないと首を降り、少しだけ足を速める。

「アルファは、お前に本気で帰って欲しくないみたいだし」「遊び相手が減るから？」

「ん？ ああ、まあ、俺がいうようなことじゃないだろ？」

「何それ？」

切れの悪い返答に眉を寄せる。けれど、カナイはそれ以上アルファの話しはすることなく続けた。

「まあ、万が一、帰らなくても、帰れなくても、じゃないぞ？ その場合、闇猫との契約が一番ネックになるだろうしな……まあ、手っ取り早いのは借金の返済だよな」

うーんっと空を仰ぎながら、零すカナイに私は肩を竦める。

「それが一番の問題でしょ？ 今なら分かるよ、あれは普通の職で返せる額じゃない」

「まあ、普通の職ならな？ 俺だったら、あのくらいの返済直ぐに何とかなるぞ。俺につき込む馬鹿は山ほど居るからな」

見えてきた図書館に胸を撫で下ろし、カナイが口にしたことを脳内で反芻する。そして、ふと私は首を傾げことになる。

「……カナイ？」

「ん？ なんだよ」

「カナイ、私の借金肩代わりしてくれるっていつてくれてるの？」

何とかなる。ってことは、何とかしてやるっていつてるわけじゃないんだろうか？ そう行き着いて問い掛けたのに、カナイは弾かれるように私から一歩飛びのいて声を裏返した。

「は？ 何で！ 何で俺がそんなことするんだよ！」

カナイがあまりにも真っ赤になって強調するものだからこっちま

で顔が熱くなる。

「こっちだってそんなことお願いしないよ！」

だって、何かそれって結婚しようっていわれているみたいだ。つてさっき結婚式見たからだけどっ！ 飛躍しすぎなのは分かっているけどっ！

赤くなった顔を覚ますように、深呼吸すれば、隣からカナイのぶつぶつが聞こえた。

「俺はもうちょっと可愛げがあって、しおらしいタイプが……」

バキ。

今度は加減なしでぶん殴った。

私の拳も痛い。可愛げもなくてしおらしくもなくて悪かったわね。それがあるような女の子は、手を上げたりしないよね。

打たれ弱いつていったら、加減しろよ。と、頬を押さえているカナイを無視して私は図書館まで全力疾走した。

追いかけてはこない。

カーティスさんに「今日も元気だねー」と声を掛けられて、愛想笑いを返してから私は館内に戻る。

怒り覚めやらぬまま、私がずかずかと廊下を歩いていると、移動する荷物に出くわした。

ぶつかっては危険そうだったので廊下の隅に避けると、ラウ先生が大量の荷物を運んでいる最中だったようだ。

前も見えない状態で、よく進めるな。と、感心しつつ手伝いましょうか？ と、声を掛けると喜んでもらえた。

「それじゃ、この腕に挟んでるのと一番上の箱を……持って貰えると助かります」

「良いですよ。どこまで運ぶんですか？」

「私のラボです」

本当に、器用に運んでいたな？ と、感心せざる得ない筒を両脇から抜き取って肩に掛けて抱える。そして、少し膝を落としてくれた先生の腕に積まれた箱の一番上を持ち上げて抱えると、陽の当たる廊下を並んで歩き始めた。

「マシロは、もうこちらには慣れましたか？」

「え？ はい、まあ」

慣れるしか仕方ない。

「頑張りすぎて倒れたと聞いたときには驚きましたけど、元氣そうで良かったです」

そんなこともあった。

「マシロの右ストレートは破壊力抜群らしいですね」

「え、ええっ?!」

誰だ、そんなこといいふらした奴は。

ついさっきもカナイを殴りつけてしまったところだから、否定もし難い。そんな私の内情を知ってか知らずか、ラウ先生は綺麗にふ

わふわと微笑む。

この人とは入学手続きのときに会って以降は、宣言したとおり時折授業に茶々入れに来るくらいで、あまり面識らしい面識もないはずだけど、底の知れない人だなと思う。

「私も色々と伝を持っていましたね？　そこから耳にしたんですよ。種屋の店主に手を挙げられるような人はまず居ません」

……シゼか？　そう思い付いたもののそうとも限らない。

シゼもそうだけど、エミルやアルファたちだって人の噂をするようなタイプには見えない。

「そのことを面白く思うものが大半ですが、そうではないものも居ますから、重々注意してくださいね」「え？」

「まあ、私がそんな釘をささなくても、貴方の傍についてくれているナイトたちはちゃんと気を配ってくれているようなので、心配はしていませんが……」

護られているお姫様が少し窮屈そうだったので、告げ口しようと思っただけです。うふふっと綺麗に微笑むラウ先生が、そういう終わるのとは同時に彼の研究室に到着した。

お行儀悪く彼は足先でこつこつと扉を叩く。

私はラウ先生に掛けられた言葉が心に引っかかる。

そして、やっと得心が行く。本当に私は、目の前しか見えていない駄目だ。

「シゼー、開けてくれませんか？」

ぱたぱたと中から可愛らしい足音が近づいてきて、がらがらと引き違い戸を開けてくれる。

大荷物 của 先生に驚いて荷物を受け取ろうとしたが、先生に私の荷物を受け取るようにいわれ斜め後ろに居た私に初めて気が付いたのか凄く驚いた顔をしたあと私の手の中から荷物を受け取ってくれる。

「珍しいですね？ お茶、でも飲んで行きますか？」

遠慮すると私が断る前に、ラウ先生があっさり断った。

「マシロは今から忙しいですからね。お茶はまたの機会にしましょう？ そうそう、良いものが手に入ったんだよ。シゼ、さっきの荷物を解いておいて」

にっこり、と、私を振り返ったラウ先生は「またおいで」と物凄く絶妙なバランスで片手を空けて、私の頭を撫でる。私はぺこりと頭を下げて、シゼにも「またね」と、手を振ってからパタパタと来た道を戻った。

第三十一話：ドラジェの正しい食べ方

いつもいつもいつも……ここに来てからずっと私は彼らに護られている。

分かってるつもりだったけど、それを窮屈に思うなんて贅沢だ。本当に、ただの『つもり』だったみたいだ。

確かに、人の目のあるところでブラックを殴ったのは拙かった。殆どの人にとっては面白い見世物で済んだだろうけど、蒼月教徒にとっては絶対に面白くは無いだろう。国だって恐れておいそれと手を出さない人たちなのに、その人たちの神経を逆撫でさせるのは得策じゃないことくらい私も分かれよ。

こういうとき、自分の行き当たりばったりな性格が嫌になってくる。

シゼにも釘をさされたというのに、あのときには気が付けなかった。そういえば、あのときくらいから図書館の外に出るときは誰かが一緒に付き合ってくれていたような気がする。

ギルドの仕事も、Eランク程度のものは請け負うなといわれたし、あの二人も私に小さな仕事は任せてくれなくなった。

カナイ辺りが手を回していたのだろう。

何というか今更お礼をいうのもなんだけど、今、凄く誰かの顔が見たい。

カナイも殴って悪かった。

あれは、あいつに非があるけど。

—— ……にしても広いな。

あまり研究室がある棟に来ることがなかったから見慣れない場所だ。

人影も疎らだし、学生というよりは研究員という雰囲気の人に見える。この場所はどこもそうだけど、隙間を見つければ、そこがどこだろうと本棚にしたいらしい。廊下の脇も本がずらずらと並んでいる。

私たちが普段目になっているものより、ずっと専門書っぽいタイトルが殆どだ。

これ以上迷っていては埒が明かない。今から最初に出会った人之道を聞こう！ そう心に決めて小走りに進む。

すると、渡り廊下に出たところで人の声がした。

—— ……この声っ

私は漏れてきた聞き覚えのある声に喜色を浮かべて、どこから声がしているのか探した。廊下から裏庭に出ると、探し人は直ぐに見つかった。見間違えるハズはない。すらりと高い長身に、空と同じ色をした綺麗な髪。離れているからその表情まではうかがい知ることは出来ないけれど、いろんな人が居る図書館でも、エミルは、ひとときわ目を惹く立ち姿だと私は思う。

私は声を掛けようと手を上げて直ぐに下げる。

完全にそんな雰囲気じゃない。

ここからでは話し相手は後姿しか見えないが、エミルが誰かと話し込んでいる。今日の天気の話とかではなさそうで、どちらかとい

えば険悪。

「―― ……何度来ても同じだし、もう聞きたくない」

「ですが、王子。母上様も望んでいらっしやいますよ」

「へえ、あの人が自分でそういったのかな？」

それは是非聞きたかったと口角を上げたエミルはいつもとは別人のように意地悪だ。

話し相手の女性は、竹のようにすつと背が高く美しい後姿から察するに、きつと美人だ。彼女は困惑したような声でいい淀みそれでも食い下がる。

「せめて、祭事にだけでも出席してはいただけませんか？」

「嫌だよ。これ以上話すことはないし、君はこんなくだらな話に夢中になり過ぎなんじゃない？」

にこりとそういったエミルの言葉に彼女は「え」と声を漏らすと「何者だっ！」と勢いよくこちらを振り返り手を上げた。反射的に一歩後退ったが何か来る気配は無い。

びくびくと身体を強張らせていた私の耳に毅然とした声が届いた。

「ここは図書館。そして、彼女はここの生徒だ。こんな危険なものを振り回して良いわけない」

分かるよね？ と、いつものように穏やかに口にしたエミルは、彼女の振り上げた手首を捕まえていた。その先に握られていたものが、傾き始めた陽光を受けて冷たく煌く。短剣だ。

「それに、彼女は僕の大切な人だから、怖がらせないであげてくれるかな？」

ずっと掴んでいた手を離すと、呆然としていた女性の横を通り過ぎて、エミルは「どうしたの？こんなところに」と歩み寄ってくる。

「え・あ、あの、ラウ先生のラボに荷物運びを手伝っていて……」

「そか、お疲れ様。じゃあ、次は僕の手伝いをしてくれる？」

時間があればだけど。と、重ねたけど、さっさと私の手を取って歩き始めてしまうエミルを、私が拒否することなんて出来ない。

あの人は放っておいて良いのか？ と、エミルに腕を引っ張られながらも、ちらりと振り返る。私の予想通り綺麗な彼女は複雑そうな表情で私たちを見送っていた。

「こんなところまで初めて来た」

「マシロはまだまだ来たばかりだから、この図書館の中だけでも知らないところが多いと思うよ。もっとたくさん案内してあげたいんだけど、時間も限られるし仕方ないよね」

どのくらい上がったか分からないけど、結構な階段を上がってきた。

突き当たった扉の横にあるパネルに、エミルが学生証をかざすと、中から開錠されたガコンっという音が聞こえ鈍い音とともに扉が開いた。

暫らく誰も使っていないような湿った空気が流れ出てくる。

「何か埃臭いねえ。気にならなければ良いけど」

日常的に臙物を弄くっている人に、埃くらいで顔をしかめるデリケートな部分があると思っっているのだろうか。

すたすたと中に入っっていくエミルに私も続いた。

室内は明り取り用の窓はあるようだけど、今はそのどれも締め切られていて、ようやく視界が確保出来るだけの薄闇だ。

エミルは「確かこの辺に……」と呟きながら、ぺちぺちと壁を叩いて何かを探している。

そしてようやく発見したのか、エミルが何かを引っ張ると、明り取り用の窓に掛かっていた遮光カーテンが一気に開いて室内が明るくなる。

「うわぁ……」

首が痛くなるほど見上げて先が見えない……本棚だ。

本自体も、見上げて先も見えない本棚も、ここでは珍しくないが、何かというかこのは別の意味で圧巻だ。部屋の中央にある広い机以外は本棚しかない。

ここは？ と、問い掛けた私に、エミルは目的のものを探するためだろう、迷いなくその一角に向かい本棚を仰いでいた。

「ここは、王家の者しか入れない部屋なんだ。要するに王家の歴史みたいなものばかり集めてある場所だよ」

そ、そんなところに私が入っても良いのだろうか？ さらりと口にしたエミルの台詞に尻込みする。

「ああ、マシロは気にしなくて良いよ。僕が連れて入ったんだから気にすることないよ」

そんな私の心中を察してそういったエミルは、傍にあった梯子を

引き寄せてよいしょと昇っていく。

「マシロ、これ受け取ってそっち持っていったらいいよ」

うんしょと腕を伸ばして取り上げた本を私の方へ突き出してくる。私は、わたわたとエミルに歩み寄ると精一杯背伸びをして、それを受け取り広い机に置いた。

「重いものもあるから、慌てなくて良いよ。ゆっくりね？」

「ん、平気」

たかが本運びをしているだけの私に掛けてくれる言葉も優しい。エミルは最初からだけど、私を女の子として扱ってくれる。スマートな心配りが嬉しい。出自は隠せない。という感じだ。

また、新しく受け取って「ありがとう」と交わされる言葉に、胸が温かくなる。

その作業を幾度か続けて、一段楽しめたのか降りてきたエミルは「さて」と机に向かう。

「今日はどこか出掛けていたの？」

「うん、カナイと大聖堂に行ったよ」

ぱらぱらと本棚から取り出した本を捲りながら問い掛けてきたエミルに、私はさっきまでの話を口にする。エミルは、時折相槌を打ちながら、文字を目で追っているようだ。

私、もしかなくてもめっちゃ邪魔をしている気がする。

「ええっと、私、邪魔じゃない？　邪魔だったら、その、先に寮に戻るよ？」

「どうして？ 邪魔じゃないよ。ここに居て。あ……ごめん。もしかして本を捲っていたから気に障ったかな？」

「いや、私は別になんとも思わないし、それが当初の目的なんだから、続けてもらって全然大丈夫なんだけどね」

いいながら「よいしょ」と座り直すと、手に何かが当たった。ポケットに手をつっ込んで中身を引っ張り出すと結婚式で貰ったドラジェだ。

「あ、これ結婚式で貰ったんだよ。すごい綺麗な花嫁さんでね」

結局私は喋っている。エミルって凄く聞き上手だと思う。なんとなく、聞きたいと思ってくれているような気がして、つい、エミルには何でも話したくなるのだ。

食べる？ と、リボンに手を掛けたところで、私はここがどこか思い出し反射的に謝った。館内での飲食は普通に考えても禁止だろう。

「良いよ。どうせ僕らだけだし、誰か来ることもない。食べよう」

止まってしまった私の手から、エミルは包みごと取り上げると、するするとリボンを解きベールを開いた。そしてピンクの粒を摘み上げると、はい。と、私に差し出す。

これは、ええっと位置的に確実に口を開けろといわれているような気がする。

「あーん」

やっぱりか！

予想通りで私は顔がぱあっと赤くなるのが分かる。

「じ、自分で食べるよ。うん」

「駄目。ほら、早く」

押し問答したがエミルには敵う気がしない。

私は諦めて、なるべくエミルの顔を見ないようにして、ぱくりと口に入れた。エミルは楽しそうにくすすと笑っている。

口元を覆って、かりっと噛み砕く。優しくて甘い味がする。美味しい。花嫁さんの心を形に、お菓子にしたみたいで、幸せな気持ちになれる。

包みには、まだ残ってる。

きつと逆にエミルに「あーん」って私がやっても、しれっと食べちゃうんだろ。うな。そう思っている、やり返さないというのは個人的に許されない。

「じゃあ、次はエミルがあーん」

「……え」

「え？　じゃなくてあーん」

私は白い粒を摘み上げて、エミルがやったのと同じように彼の顔の前に突き出した。

エミルは何度も私とドラジェの間に視線を泳がせて、声を詰まらせている。ちょっとらしくないなと思って首を傾げると、今度は真っ赤になってしまった。

エミルが真っ赤に……何で？

ちらりと背後の振り仰ぐと、高い窓から夕日の残りが差し込んで

いる。そのせいで、赤く見えるのかな？ 小首を傾げて、もう一度向き合って問い掛ける。

「食べないなら私が食べるけど……」

「駄目」

諦めて自分の口へ運ぼうと思ったら、両手で手首を掴れた。そして、そのままぱくりと口に入れドラジェを奪っていく。

エミルの柔らかい唇が私の指先に軽く当たる。

とくんつと心臓が跳ねた。

くすぐったいのと、同時にこの間のキスが脳裏に蘇って、ぱああと私の顔まで赤くなってしまった。

——……がたっ！

「あ、明かりが足りなくなったね。どこかにランプがあったと思うんだ」

エミルが同じことを感じたのかどうかは、分からないけれど、口をもぐもぐとしながら慌てた様子で席を立ち、ランプを探す。

暫らく、どたばたと探し物をしていたエミルは、本棚の奥からランプ片手に戻ってきて、さっきと同じ場所に腰を下ろすと、はあと嘆息した。

その頃にはもう、さっきまでの動揺は見取れなくなった。私はまだ、ときどきしている……。

そのままお互い黙って作業を続行していたが、不意に手を止めたエミルは、んーつと身体を伸ばしたあと、こちらへと身体を向けた。何？ と首を傾げた私に、うん。と、一人頷いて話し始めた。

「さっきの続きだけどさ。やっぱりマシロも女の子だし、花嫁さんとかになるの憧れだったりするの？」

「んー……？　　どうかな？　　やっぱり綺麗だなとは思っし、良いな
ー。とも、思わなくはないけど、私だからねえ」

いって苦笑すれば、エミルは「どうして？」という風に可愛らしく首を傾げる。

「郁にもいーつつもいわれてたよ。おねえを嫁に貰うような奇特的な奴居たら俺は拝むって、酷いよね。世の中一人じゃ出来ないことって少なくなってきたけど、結婚だけは相手が必要だもんね。エリスさんみたいな完璧な女の人なら引く手数多だと思うけど……」

そういえば、どうしてエリスさんって結婚してないんだろう？
はっ！　申し込みが多すぎて？　私も数回彼女に会ったが噂に違
いなく綺麗で優しくて、理想の女性像を具現化したような人だ。

「マシロって、自分を過小評価しすぎじゃないかな？」

自分の考えに逃避していた私を引き戻すには十分な一言だった。
私が私を過小評価している？　そんなの買いかぶりすぎだ。私は、
誰かに評価される人間じゃない。だから、友達にも悪態を吐かれ大
好きだった人にも裏切られる。

「マシロは良くやってると思うよ。だから、きっと元の世界でも良
くやっていたと思う」

エミルは褒め上手だ。

そんな風に思ってくれるのは、きっとエミルだけだと思う。元の
世界の私なんて、友達と、好きな人と、ぶつかって嫌われてしまう

のが恐くて、いつだって回れ右して逃げ出してしまうような子だ。
ここは、異世界だから。私のことを知らない人ばかりだから……
いつか、離れる世界だから……何もいえない私にエミルは、柔らかく微笑んで話を続けてくれる。

「――……元の、元の世界に帰っちゃうんだよね？」

開いた本の上に突っ伏して、そういったエミルに、私はこの間のことを思い出す。『帰らないんで欲しいんだ』本心ではなかったにしろ、甘く囁かれた声が鮮明に蘇り意識しなくても頬が熱持ってくる。

「マシロの居た世界って、どんな世界なんだろう。君を見ていたら、きつと素敵なところなんだろうなと思うよ」

「そ、それはどうかな？　あまり変わらないよ。大体、世界を図る基準が私では荷が重い」

「ふふ、だから、マシロは過小評価しすぎだよ。マシロはとても優しく暖かくて、可愛くて、前向きで、凜としてる。僕なんかから見ると、凄く色鮮やかで綺麗……それに、何より人の心をとて大切に思ってくれている。だから少し人に踏み込むのに臆病になる」

あまりの過大評価にくらぐらしそうだ。褒め殺しだ。エミルは私を褒め殺しにするつもりだ。

大体、色鮮やかなのはエミルの方だし、この世界の人全てで！
私は、単調で詰まらない奴だ。そんな風にしてくれるのは、世界広しといえどエミルくらいだ。

そして、さっきの話も気になってるんでしょ？　と、続けられ私は曖昧に微笑んで「あー…」と唸って、ちよっと……と続けた。

「マシロに聞かれて困る話なんてないよ。気になったなら、聞いてくれれば良いのに」

エミルはそういつて笑ってくれたけど、それはそれで……私は余所者で深く介入出来ないからバレても問題ないといわれているように疎外感を感じる。自分で帰ると決めたんだ。それなのに勝手にそんなこと感じるなんて……

—— ……私、いつからこんなに根暗になったんだ。

第三十二話：昼ドラ系ドロドロ王室

「マシロ？」

自分の思考に暗くなってしまった私を気遣うように声を掛けられ、私は慌てて顔をあげた。

「なんでもないよ、ごめん」

じゃあ、遠慮なく聞いちゃおうかな？ とワザと軽い調子で口にすれば、エミルも、どうぞどうぞと微笑んでくれる。それにまた、ほっとする自分が居る。完全に甘えているとしか思えない。でも、それがとても居心地が良いから私からは告げない。

「さっきの女の人図書館の人、じゃないよね？」

あんな美人が居たら噂になる。

エミルは、うん。と頷いて「王宮の遣いだよ」と答えてくれる。

「もしかして、エミルお城に帰っちゃうの？」

「え？ あ、ううん。違うよ。帰らない……その時期じゃないし、僕は……」

あとの言葉が続かないエミルに、踏み込みすぎたかと慌てる。

「お祭りっ！」

「え？」

「お祭りあるの知ってる？」

若干無理に話題を変えた節があるけれど、きつと気にしない。エミルはにこりと微笑んで「知ってるよ」と頷いてくれた。

「カナイに聞いたらさ、祭りがあってパレードがあるだけ、それも、自分たちには関係ないから興味持たなくて良い。だって」

思い出したらあまりのそっけなさに自然と眉が寄ってしまう。

エミルは「カナイらしいな」と、笑っているけど、わくわくと聞いたこちらとしては正直、愛想なしにもほどがある。

「さっきの話に戻るけど、そのパレードって王族がこぞって出て来るんだよ。それでさっきの遣いも、僕にも参加しろって、前からうるさくて……ずっと会わないようにしてたのに、今日は偶然捕まっちゃって」

なるほど。私には分からないけど、エミルはそういうの好きそうじゃないもんね。私の浅学では、ニュースでみた、英国王室のパレードくらいしか想像つかない。そこに参加するエミルは……個人的には、嵌り役だと思う。思うけど、本人が否定的なものも中身がある程度知っていれば理解出来る。

「えっと、その、じゃあ、エミルのお母さんがどうのといったのは？」

聞けということなので勇気を出して聞いてみた。

あの時、お母さんの話が出たらエミルの様子が変わったのが凄く印象的だった。いつも温厚なエミルなのに、絶対零度くらいまで凍てついてしまった感じがして……見てしまったこっちが凍えそうだった。

「そんなところから聞かれてたっけ？」

苦笑したエミルに私が謝ると、良いよ。と、微笑んでくれる。

—— ……こんなに穏やかな人なのに……。

「立ち聞きしよう！　　と思っただけじゃないのは分かってるしね」
「え？」

「だってマシロ、僕を見つけたとき凄く嬉しそうな顔して手を上げようとしてくれたよね。それを相手が居たから遠慮して引っ込めた」

最初っから見られてたんだ。私は居心地悪くて「ごめんね」と重ねる。

「この国の王にはね、一人の妃と四人の寵姫が居るんだ……あ、寵姫っていうのは」

「いい、良いよ！　　分かるから」

懇切丁寧に説明してくれようとするエミルに、ストップを掛けて私は頷き続きを促した。

寵姫っていうのはつまり愛人だ。王様には奥さんが居るのに他に四人もの愛人が居るということだ。

「僕の母は、その中でも一番身分の低い寵姫で……あぁと、何でそんなに困ってるかという」と

やっぱりエミルは説明が下手だ。私は苦笑しながらも頷いた。

「今の王はそれでも少ない方だと思うよ。片手で収まるから。この世界では王にも素養が必要なんだよ。そしてそれは、王家の血筋に

のみ稀に現れるんだ。だから多くの子どもが必要で、多くの子どもを残すには多くの女性が必要なんだ」

何となく分かるけど何となく複雑だ。

その気持ちがそのまま顔に出てしまった私に、エミルはほんの少し悲しそうに微笑んだ。そして私の頭をゆっくり優しく撫でてくれた。

「僕の母は、人形みたいな人だよ。造形はもちろん、その心まで。今日来ていた人は母の傍仕えをしている人で、護衛も兼ねてる人なんだけどね。その人にいわせると、王族に召抱えられた頃はそうでもなかったみたいなんだ。セルシスの一件があってから、かな？ええっと、セルシスって話したことあったっけ？」

「うん。確かアルファの護衛対象でブラックが消してしまった王子……だよね」

「そう、それは僕の唯一、同じ母を持つ兄だったんだけど……んー、あ、でもそんなに知らないんだよ。凄く歳も離れていたし、一緒に生活した記憶もなくて、だからそんな顔しなくても大丈夫。僕は辛くないよ」

困ったように微笑んだエミルは、私の手を両手で包み込むとぽんぽんっと叩いた。

そんな顔。私は一体どんな表情かおをしているんだろう。表情は自分では見えないから分からない。心は向かい合った相手にだって見えないものなのに、エミルはそれも見えるように、優しく私を宥めてくれる。

辛いのは、エミル。だよね……？

「母のところへ、王は足しげく通ったらしいから、他からは酷く扱われることもあったらしくて、でも、出来たのは僕らだけで……早

くに家を出てたセルシスは、母に良く尽くしてくれていたらしいから、その彼が亡くなったのが一番辛かったのか、王の足が遠のいたのが辛かったのか……結局のところ、僕には分からないけど、口さがない人たちの間ではセルシスと母は、我が子以上の関係だったという人も居て母は益々心を失くしていったと思うよ」

泥沼だ。そこら辺の昼メロよりもドロドロだ。本当に私が聞いて良かったのか？

「マシロ、大丈夫？　もしかして傷付けてしまった？　くだらない王室のゴシップだよ。でも、あれ？　何の話でこんな話題になったんだっけ？」

エミル……ほんっとーに説明したり話したりが得意じゃないんだね。

可愛らしく首を傾げたエミルに私は苦笑する。エミルはその反応に胸を撫で下ろしたように、にっこりと微笑んだ。

「僕、王室は嫌いなんだ。闇猫がいうように逃げてる。逃げたい。でもやっぱり彼のいうように逃げられない」

素養さえなければ良いのに……と、呟いたエミルに、私は何とも答えてあげられなかった。

エミルには間違いなく王になる素養があるのだ。

それは素養を見ることが出来ない私でも、短い間しか知らない私でも、感じることに。長く一緒に居るのだろう、カナイやアルファはもっと強く感じているだろう。

エミルは上に立つことが出来る、数少ない人なのだと思う。

「王になる素養なんて、あまり早いうちにその芽が出ると、摘まれ

ちゃうしね」

「……セルシス？」

「うん、彼は強い素養を持っていた。だから早くに城に入り1相応しい教育を受けていた。そのこともあったから、気まぐれなのか誰かからの依頼だったのか気になっていったんだ。闇猫が、王家の問題に関与したのはあの一件だけなんだ。前の代の種屋は割と頻繁に絡んできていたようだけど、闇猫は、なんというか、そういうのにより興味を示さない。ちまちま消すくらいなら邪魔になったときに一掃してしまえば良い。くらいに考えていると思うし……」

そ、そうなのかな？

「まあ、上手くはぐらかされてしまったし。毒まで添えてくれたけどね」

ははっと乾いた笑みを零したエミルに私は切なくなった。

刹那、降りた沈黙を破ったのは、エミルの謝罪だった。私はどうしてエミルが謝るのか分からずに目を瞬かせる。

「いらないと思っている素養なのに、捨てられない。捨てられないから君を直ぐに闇猫との契約から解放して上げられない」

ようやく机から身体を起こしたエミルは、そっと私の頬に手を伸ばし、真っ直ぐに私の瞳を覗き込んで言葉を繋いだ。

とくんっ、とくん……っ、と鼓動が早くなり、じわりと上がる体温が心地よい。

エミルの申し訳なさそうな瞳に私が映る。

「良いよ。これは私の不始末だから。カナイにも前にいわれたよ？ 私自身の責任だって」

分からないものに容易にサインしてしまうということは、確かに危機感がなく思慮が足りない行為だったと今なら思う。

だから、別に私は自分の心に嘘も偽りも述べていないのに、エミルは悲しげに瞳を細めた。

「カナイがいうことは正論だけに反発しづらいよね」

「うん、確かにね」

ふっと笑い合うと、エミルの手は私の頬を滑り降た。

エミルの手が完全に私から離れてしまうと、どこか寂しいと、名残惜しく感じてしまったことをエミルは気がついたかな？

そして、ランプの明かりが頼りになってきたのを見計らって、エミルは、とんとんと卓上の本を片付けながら話を続ける。

「僕は、このままここで最上級階位まで取ったら、そのあとはラボで研究者になろうと思っハイマスタークラスているんだ。でもね、最近。君がもしもここに残ってくれるなら、街で店を出すのも良いなと思うんだよね。普通の調剤はそんなに良い金額にならないけど、この間のようにぎりぎりの物になってくるとかなり値も張るし、あの程度ならそう長くない期間で稼げると思うんだ」

そういつてやんわりと微笑んでくれるエミルに心が痛くなる。

エミルの語る未来は決して叶えることの出来ない未来だ。

彼には自分の好きなように生ききるだけの身勝手さはない。

誰よりも優しく、誰よりもみんなのことを考えるから、彼は自分の持つ素養を否定しきれないし、本当に求められたら、エミルはそれを受け入れるだろう。そう思うと、じわりと私の胸は熱くなり視界が揺らぐ。

私はなんだか泣きそうになった。

本当に泣いて良いのはエミル本人で、私ではないからそんな顔見られたくなくて私は足を踏み出す。

「え？」

—— ……どんっ

そのままの勢いで、私がいきなり抱きついてしまったから、エミルは抱えていた本を、ぼさりと床に落としてしまった。

ああ、きつと貴重な資料だと思うのに、ごめんね。心の中で短く詫びる。私はエミルの胸に額を押し付けたままゆっくり深呼吸一つして

「エミリオ」

彼の名前を呼ぶ。

きちんと呼ぶのは最初以来だから少し久しぶりで呼ばれた方も驚いたみたいだ。

「あ、はい」

「私、いつまでここに居られるか分からないけど、貴方を護るわ。心配しないで、きつと護るから」

ぎゅーつとエミルの胸に回した腕に力を込めて宣言する。

叶わない夢だけど、夢なのだから見るくらいは個人の自由だ。だから私は、少しでも長い間エミルにその夢を見てもらいたい。

きつと、きつと……カナイやアルファも同じ気持ちなのだろう。

そんな私にエミルは僅かに躊躇したようだけど、ふ……と笑って私の身体を抱きこむと掠れる声で「ありがとう」といつてくれた。

「本当、マシロには敵わないな」

私の背に回した腕に力を込めてエミルは肩口でくすくすと笑う。

「僕は君を護ってあげたいのに、君にそうやって甘やかされると護られたいと思ってしまう。僕にとっては、闇猫の誘惑よりも、マシロの言葉の方が甘い毒のようで……きつとそれに名を与えるなら『美しいとき』と思うのだと思う。ずっと、ずっと溺れていたいよ」

エミルはそう紡ぐと、腕に力を込めなおして、頬を摺り寄せる。時折首筋に触れる唇が、肌を吸う。吐息が纏わりつく。頭の奥が、じんと熱を持ち、ぼやんとする。アルク草の香りに巻かれたときのような。

本当に、私がエミルを守って上げられたら良いのに。

本当に、私がエミルを助けて上げられたら良いのに。

本当に、私が…… ——

はたと、自分で脳裏に過ぎった台詞と、自分の行動が恥ずかしくなる。好きとか嫌いとか、そんな感情以上の、何か特別な思いを告げているようだ。

エミルが優しいのを良いことに、私どれだけずうずうしいこと口に出しているだろう。否定しないで居てくれるエミルは、やっぱり良い人だと、私は思う。

そして、どんな顔をして良いか分からなくて、エミルから離れら

れないで居ると可愛らしい声が聞こえた。

『エミル殿。エミル殿。マシロ殿の姿が見えないと、主人が探しております。お心当たりありませんか?』

振り返ると机上でひよこひよこ跳ねているのは、小さな犬のおまわりさんだ。エミルはそっと私を離すと「カナイの傀儡だね?」と微笑む。

「カナイに伝えて。マシロは僕と一緒にだから心配要らないよって、片付けたら食堂に下りるからそこで会おうって」

落ちた本を拾いながらそういったエミルに、犬のおまわりさんはキビキビと小さな手で敬礼して『承知仕った』と姿を消した。……口調に一貫性が無いのはカナイの趣味だろうか?

「カナイって、可愛いもの好きだよね」

「本人はバレてないと思っているから、内緒にしてあげてね。カナイ初級階位るときはしょっちゅう凹んでたよ。小動物を犠牲にするのに耐え切れなくて、医務室に引き籠もることも多かったし」

泣いてたんじゃないかなあ? と、内緒ごとを駄々漏れにするエミルに私は笑ってしまった。それに小動物を傷つけたと涙するカナイにも会ってみたかった。

最後の一冊を私が拾い上げて、エミルの腕の中に積んであげる。見上げた先の瞳と視線が絡み、ふっと笑いあった。

第三十三話：好きとか嫌いとか近くて遠い

私こそ、毎回当初の目的を忘れている気がする。

エミルに説明が下手だといえた義理じゃない。気に掛けてくれて、護ってくれていて、ありがとう。と、いうつもりだったのだ。だから私は、みんなを探していたというのに、すっかりエミルと話し込んで最終的には自分が護ると豪語してしまった。

「何やってんだろ、私」

カナイのところから持ってきた本を、ぱらりと捲りつつぼやく。

それに『美しいとき』ってなんだろう？

確か二つ月の童話で、出てきたんだよね。白い月に満たされた時間それが美しいときだ。

手元にある本にも、そんな話の一端が記載されている。

私はもともと中の上程度の学習能力しかないから、知識を理解するのにも時間が掛かる。だから、読んで分かることも僅かだ。でも、この世界には大筋はこの二つ月の童話だけれど、それをいろんな方面から見たり語ったりした話が多い。

白い月の少女を世界の落し物だと語っているものもあって、多分カナイが私に最初に話したのはこのことだろう。世界の落し物はその世界の不純物で、世界から弾かれ堕ちて来る。それを拾うのは変化の兆しだそう。変化ってなんだ？　そして……

「あんたは何を見てるの？」

ぱふつと本を閉じた私は、ベッドに腰掛けて、こちらをじー……
つと見ていたブラックに声を掛ける。声を掛けられたブラックは、
やっと終わったのかと、にこにこ私に歩み寄ってくる。

「マシロを見ていたんです」

「意味ないでしょ」

「そんなこと無いですよ。何かに集中しているマシロはとても綺麗
です」

恥ずかしげも無くそんなことをいって、にっこり微笑まれるとこ
っちが言葉に詰まる。そんな私を楽しそうに見詰めて、ブラックは
それにと話を続ける。

「私も考え事をしていました」

「……一応聞くけど、何？」

「マシロをどうやってこの世界に留めておこうかと、その方法を思
案していたんです」

そんなことだと思った。百パーくだらないことだと。

私は予想の範疇のブラックの答えに、呆れたように溜息を零す。

「方法はいくらでもあるんですよ？ 例えば、協力者を消すとか、
マシロの記憶を改ざんしてしまうとか、一番手っ取り早いのはマシ
ロを監禁してしまえば機を逃すと思いますし……」

うきうきと話をするブラックを、ほう？ と睨み付けると、ブラ
ックはほんの少し慌てたように手を振って「まだ何もやってないじ
ゃないですか」と弁解する。でも、どこまでも“まだ”やっていな
いだけでやろうと思っているということに変わりはないだろう。

「最近、マシロは良く本を読んでいますね？」

拙いと思ったのか話を体よく逸らしたブラックに私も頷いた。

「良い傾向だと思います。マシロがこの世界に興味を持って、この世界に執着してこの世界を捨てられなくなれば、きっと帰るなんていいませんよね？」

そのブラックの理屈で行けば、私はもう十分に元の世界には帰れない状態だと思う。

でも、私はやはり帰る道を探している。帰る場所があるのだから、そう考えるのは間違っていないと思う。思うけれど……。少しだけ、その自信を失くしそうだ。

はあ、と嘆息した私の腕を、ブラックはぐいっと引いて立ち上がらせる。不満そうな顔をする私とは対照的に、ブラックはにっこりと笑みを深め、がたんつと窓を開け放った。

頬を撫でていく風が心地良い。

私が夜風に瞳を細めるのを、ブラックは暫らく眺めていたが、そっと私の頬に手を伸ばし、つつと触れると振り仰いだ私の瞳を見つめて問い掛ける。

「マシロは、どうして戻りたいんですか？ 戻った先に何があるんです？ 元の生活とここでの生活。どう違うんですか？」

「違うよ、違う……きつと、違う」

私はブラックの瞳から逃げるように、視線を逸らしてそう呟く。元の世界には、今での私の軌跡がある。これまでがある。だから当然これからだってそこで過ごすはずだった。

「家族や知人にそれほど執着がありますか？ この世界は美しい、特に寄り添う二つ月はとても優麗なものだと思います」

そう思いませんか？ と聞かれれば素直に頷くしかない。本当に美しい。でも、それと同時にあの月を見上げると、私は帰郷を急かされているような気になる。

帰らなければ、戻らなければ……早く、早く……そう思えて仕方がないのに、どうして帰ってきて欲しいと思ってくれている人の姿は直ぐに思い描けなくて、ここで帰らないで欲しいといってくれる人の姿ばかりが脳裏に蘇るのだろう。

元の世界に、元の世界のこれからに、私をこんなに必要としてくれる人が居るのだろうか？

「家族とはいずれ離れなくてはいけないものです、その時期が少しくらい早くなろうと問題ないでしょう？ 知人なんて、こちらで幾らでも増やすことが出来る。誰も貴方を傷つけたりはしない」

私はその言葉にぎゅっと胸元を掴む。

貴方に何が分かるのかとブラックを睨み付けると、ほんの少し寂しそうに微笑んで「何も分かりません」と呟き、頬に触れていた指先が、つっと滑り降りると、そっと私の手に手を重ねる。

「貴方の気持ちを分かろうと、いくら希^{こいねが}つても私には到底計り知れないものです」

「分かろうとしてくれてるんだ？」

今思えば私が傷ついたことなんて、ここでのことを思えば大した

ことじゃない。ただそれだけの関係しか築けていなかった自分に非があることだ。そんな思いに苦さを感じブラックの言葉に苦笑する。

ブラックは時折子どものようだと思う。

子どものように無垢で純粹。そして残酷。彼は気持ちも力も持て余してしまっている。

「ここはきつと夢の世界だから、ちょっぴり私に甘く出来てるんだと思う。私自身がその甘さが心地良くて、だから覚めないために、みんなが帰らないでと引き止めてくれる。でも、やっぱり夢は覚めなきゃ。帰る方法があれば帰らなきゃいけない。私の世界はここじゃないくて、きつと別で」

「ですが、貴方を求めているのはこの世界です。私は貴方を帰したりしない。落し物が自分から持ち主のところに帰りたいなんて馬鹿げてます。嫌です、絶対に帰しません」

貴方は私のものでしょう？　ブラックの黒曜石のような瞳が不安に揺れる。ずっとそいい続けてきていたのにここに来て初めて私に問い掛ける。

「私は……」

答える前に、遮るように、影は降ってきた。

少し迷ったように軽く唇が触れ合い、突き放せなかった私に安堵したような吐息とともに、再び重ねられる。

そして、睫毛の本数まで数えられるような距離で、瞳を彷徨わせ、でも、結局私の中に戻ってきて告げる。

「私はきつと貴方しか愛せません」

きつと、とか、多分、とかそんな言葉を添えてしか、愛がどうのといえないブラックは、本当に誰かを好きになったことがないのだろう。

自分以外誰も寄せ付けず孤独で……私は時折そんなこいつのことが……。

「んう……っ！ 調子に乗りすぎ！」

重ねられる口付けの海で、頭の中が真っ白になりかけて、はたと我に返る。背に回っていたブラックの腕がするすると下へと滑り降りてきた感触に慌てて突き放す。

いつも余裕で飄々としているのに、その奥に不安の色をちらつかせる。

今もそうだ。

残念です。と笑いつつも、ほんの少しのショックを隠しきれないでいるから、私の中に小さな罪悪感が芽生える。間違っていないし、女の子がそうやすやすと身体を許さないのは当然だとも思う。思うけど、私の中にあるこの感情は何だろう？ 私は自分の胸に手を当てて首を傾げる。ブラックが傍に居ると、いつもどこか、そわそわとして落ち着かない。私まで、不安定になってしまったような気がする。

エミルと居るときはもっと安定していて落ち着いていられる。どきどきするけど、胸の痛むようなものじゃない。もっと優しくて柔らかなものだ。

カナイというのはもっと気が楽で、なんでも簡単に口に出来る。あまり深く考えなくても良い。アルファといると、一番いろんな意味でどきどきするけど、友達とちよっとだけ悪い遊びをするときの

ような高揚感で、嫌なものじゃないし、不安じゃない……。

でも、ブラックと居ると、不安だ。……本当に、良く分からないな。

もうとつても遅いです。泊まって良いですか？ と、思考の海に沈んでいた私に確信犯的な発言をするブラックに、猫の姿なら良いと、承諾し、うーんっと唸る。

どうしたんですか？ と不思議そうに聞いてくるブラックに、私は顔を上げると問い掛けていた。

「ブラックは、私が帰ったら泣く？」

刹那沈黙が落ちたあと、今度はブラックが唸って首を振った。

「分かりません。泣いた記憶はないので、どうなれば涙なんて出るんでしょう？」

……聞いた私が馬鹿でした。

きよとつと答えるブラックに脱力し、もう良いから寝ようと私は部屋の明かりを消して窓を閉めるとベッドに入った。

すると黒い塊がベッドの中にもぐりこんできて、私の前で丸くなる。そつと手を伸ばして撫でると気持ち良さそうに目を閉じた。

第三十四話：やってきましたSランク！

次の日私は寝坊して朝ごはんを食べ損ねた。

誰も呼びに来てくれなかったのは凄く珍しい。

ぼんやりと教室に向かっていると、直ぐにみんなが追いかけてきて足を止めた。

「ごめんね？　今朝は少しばたばたしていて……」

そういったエミルに、ばたばたしてて、忘れられてしまってたんだね。と、子どもっぽいことを思ったが飲み込んだ。

エミルは、謝罪を重ねつつ「寝癖が付いているよ」と髪を撫でてくれる。

あふうと欠伸を噛み殺し、目じりに浮かんだ涙を拭っているとカナイと目が合ったが、カナイはぷいっと目を逸らしてしまう。

別にカナイが無愛想なのはいつものことだから、変わったことではないけど、私は何だか妙な違和感を覚えた。でもそれが何なのかはつきりしないから、問い詰めることも出来ず、午後まで私はもやもやとした気持ちを引きずっていた。

「お腹空いて死にそう」

「ですよー、僕もお腹ぺこぺこですー」

「いや、お前は朝からがつつり食ってただろ」

何だか定位置になった食堂の窓際の一角に腰を下ろしつつ、今日のランチを囲む。

本当は、今日なんで起こしてくれなかったのか？　という不満を

ぶちまけたいところだけど、寝坊は自己責任だ。怒るのは筋違い。というのもちろんと理解しているから話題に出来ない。

それにしても、今日はやけに静かな食事だ。

周りはいつも通り騒がしいのに、カナイは考え事をしているのだろう、トレイの中身をいじめているようにしか見えない。手元も見ずにぼんやりとぶすぶす刺している。

エミルもどこかの空でぶつぶつと何か計算中のようなだ。

アルファは普段から食事が終わるまで、基本的に食べるのに熱中するタイプだから、いつも通りといえばそうだけど……。

暫らくは、それも我慢して私も空腹を満たしていたのだけど、我慢の限界。

「今日は変だよ、どうしたの？」

口を開いた私にカナイは「あー」と空返事。考え事をしているときは大抵そうだ。

エミルは、ふと我に返って「そんなことないよ」と微笑んでくれるけど、何か微妙にいつもと違う気がする。

むーっと眉を寄せた私の耳に、皆さんこんなところにいらしたんですね。とシゼの声が届いた。シゼに会うのは久しぶりかも。

顔を上げて、こっちだと手招きすると小走りで駆け寄ってくる。

シゼにしては珍しく頬を上気させて嬉しそうだ。

「Sランクの依頼が入ったって本当ですか？」

え？ という私の声と、三人ががちゃんっ！ と、食器を鳴らして身体を強張らせたのがほぼ同時だった。

＊＊＊

「いーよ、いーよ。どーせ私は蚊帳の外。何のお役にも立ちませんからね？　知らなくても問題ありませんものね！」

盛大にいじけた。

いじけるよ。

いじけるさ。

いじけるでしようよっ！

いじけるの三段活用。思わず中庭のところ構わず草むしりとかしてしまおう。

「あ、あの、すみません。僕、マシロさんに秘密だなんて知らなくて、その」

「とんだ伏兵が居たもんだけど。別に良いよ、シゼ。別に僕も、隠す必要なんてないと思ってたし、きっかけが出来て良かったんじゃない？」

ベンチで食後のデザートを呑気に頬張る――まだ食べるのかとは、もう誰も突っ込まない――アルファと、焦りまくっているシゼの会話も耳に届くが割って入る気にもならない。

「いや、だから、聞けって」

「きーきーたーくなーいっ！」

「マシロ、その辺は芝だから、庭師のおじさんが泣くよ。その辺にしといてあげないと」

ぶちぶちぶちぶち……芝を千切っていると隣に小山が出来ていた。エミルにそっと窘められ手を止める。青々と芝が茂っている一角に

禿が出来てしまった。ごめん。

「マシロ、ごめんね？ 別に仲間外れにしたわけじゃないんだよ」
「良いよ。どうせ、カナイの発案でしょ。どーせ、私が邪魔でくだらない口出ししかないから」

間違えていなかったのかエミルが黙した。はあと重たい溜息が零れる。

「ちょ、っと待て。俺が一番悪者かよ」
「だって本当のことじゃないですか」

やっぱり本当なんだ。

完全に臍の曲がった私は、すつくと立ち上がり踵を返した。そのまま、不貞腐れて気晴らしに散歩でもと思ったのに、がっちりとカナイに腕を掴まれた。

どれだけインドア派でも、カナイの腕を振り解くのは本人に離す気がないのだから困難だ。眉を寄せて振り返ると睨み付けた。

ちよっぴりカナイが後ろに引いた。かなり天パってる。

面白い。

私は噴出しそうなのをぐっと堪えた。

「ちょっと待てよ。ちゃんと聞けって、一応理由もなくもないというか、その、あれだ……えーっと」

「サプライズだよ。カナイはマシロを喜ばせたかったんだよね」

にこにこ隣に立つエミルを見上げると「は？ え、そうなのか？」と混乱しているカナイをエミルは笑顔で黙らせた。怖い。

「それに、Sランクっていつでもそんなに僕らは危険じゃないし」
「僕とカナイさんが危険なだけですよー。別に僕は殺さない程度が難しいだけですけど」

やや離れたところかアルファの茶々が入る。

私とエミルには危険ではなくて、カナイやアルファが危険ってことは……なんだか、とても危ないことのように思えて胸の奥がざわつく。

「依頼って何？」

「王宮の奥の聖域にある湖の調査」

私の質問に、エミルが簡潔に答えてくれる。それを補足するようにカナイが付け加える。

「湖の中に水竜が住んでいるんだが、それが最近、様子がおかしく凶暴化しつつあるらしい。このままでは、いつ聖域の封印を解いて暴れ始めるか分からないから、それを治めて欲しい。つてもので、水竜は聖獣だから、決して殺すことなく、沈静化させることというのが条件」

「え、ええええ？ それって簡単なの？ 竜って、シゼくらいの大きさじゃないよね」

そのくらいなら、ぎりぎり可愛いで済みそうだ。それに聖域に水竜って、何か凄いファンタジックな単語が並んでるんですけど。

「水竜の推定全長は八十フィート。重さは二トンくらいじゃないかといわれてるけど、最近では確認されていないから想像付かないな」

うーんつと唸ってカナイはそのまま空を仰ぐ。

「見上げるくらいじゃね？」

「聞かないでよ。それにやっぱり凄く危険じゃないっ！」

見たことも聞いたこともないうえに、メートル法しか知らないよ。フィートなんてゴルフで使うくらいじゃないの？　という知識しかない。

「Sランクの依頼に、危険度の低いものは無いですよ。マシロちゃん。大丈夫。それに水竜は小型だし平気ですって。それよりも、注目すべきはー、何といっても今回、国が依頼主だから報奨金もかなり高額だし払いも良い」

「うん。街を破壊される危険を考えれば、無駄な出費ではないし、そういうところに出し惜しみするようなトップなら、取り替えるべきだね」

にこやかに怖いこといってると、エミルは気が付いているのかな？

「これでマシロちゃんの借金も全額返済可能だし、それに元の世界にも帰れるし万々歳です」

「どういうこと？」

アルファの言葉に瞳を瞬かせた私の隣でカナイが唸った。そして盛大な溜息を吐いて、仕方ないなという風に話し始める。

「昨日、大聖堂で月ばかり見上げている奴に確認を取ってきた。天文台は、ここから離れた山奥にあるんだが、そこに引き籠もっているのが珍しく下りてきたんだ。そいつの話だから、信憑性も高い。」

もし二つ月が重なる現象が起きるとすれば、五日後の夜だそうだ。水竜が過剰に反応しているのもその影響だと思われる」

「そして、もし、異界への扉が開くとしたら月にあがるのは無理だから、その代わりに、水面に映し出すことを考えたんだ。魔法石、この場合は液だけど、それを流し込んで月に起こる現象と同じものを引き起こす。適当な場所として聖域が選ばれていたんだ。僕も何とか正式な手続きを踏んで、聖域に入れるようにしたかったんだけど、凄く手間取っちゃって……」

「だから、どっちにしても聖域に忍び込むつもりだったんです」

シゼが驚きによるめいたのが視界の隅で確認出来た。

分かるよ。

この人たちやってることも、いつてることも無謀だよ。

「そんな、無茶な」

「無茶でもやるよ。マシロは帰ることを望んでいるし、僕は、君の望みが叶うように手を貸すと約束した」

約束を破るのは自分を裏切ると同じだよ。と、締めてエミルは私の頭を撫でた。

「それに、五日後は、ちょうど祭りの日で王宮内も手薄。誰もそこを越えて、わざわざそんな聖域に入る奴が居るとは思わないだろうからそんなに難しくない」

「僕も手を貸してくれそうな兵には、声を掛けるつもりだったし……」

「成らないことをするわけじゃなかったんだよ。だから、マシロは何も心配しなくて良いんだ。だから、最後まで内緒にしておいて、吃驚させてあげようと思っていたんだよ」

失敗しちゃったけど、とくすくす笑うエミルに、シゼが申し訳なさそうな顔をする。でも、別に最初から誰もシゼを責めたりはしていなかった。

「それに、お前帰る日とかはつきりしたら種屋にいいそうだったし」

ぼそつと口にしたカナイを私は「え？」と見上げた。いったら駄目なのかな？

「お前。本当にいうつもりだったろ？　ほんっとーに馬鹿？　馬鹿だな。馬鹿だ」

私の両肩に手を載せて、ぼしぼし！　と叩くと、はー……と深く息を吐いて頭を沈める。そんな大仰な態度とらなくても。

「俺たちで何とか出来ないのは、闇猫くらいだ。そのあいつが、唯一執着しているのはお前だろ。借金返済に契約破棄はしてやる。だからそれまで黙ってろ」

「何で？」

「だーかーら、邪魔をしに来られたらお前を元の世界に帰す好機を逃すかもしれないといってるんだよ」

苦虫を噛んだような顔でそういったカナイに私は「ああ」と納得した。

カナイがいうことは、これまでのブラックのことを考えれば納得だ。納得だけど、私はこれだけは確信を持っていた。

「大丈夫だよ」

「は？」

「大丈夫。ブラックは私が帰ると決めたなら、その邪魔はしないよ。そう決めるまでの邪魔はどんな手を使ってでもするかもしれない。だけど、私が帰ると決めたらそれを止めたりしない」

監禁するとか、記憶を改ざんするとか、怖いことをいっていただけ、そのどれもいつものような真実味も不安を撒くような要素もなく、ただここに居てと懇願しているだけのようだった。だから、ブラックは私の意志を尊重してくれると思う。

私の言葉に三人、いやシゼも含めて四人とも、心底呆れたという風だったが、否定はしないでいてくれた。

第三十五話：ホントに術師なんだね。

それからアルファは軽い運動といいつつ、王宮に足を運ぶようになった。カナイは、一時的に弱らせた水竜を閉じ込めておく柵の術式を考えるといい、いつも以上に館内をうろうろしている。

ようするに、ギルド依頼の担当はアルファとカナイでこなすらしい。

そして残ったエミルは魔法石の液体化？　だか、なんだかを試行錯誤する。ということだ。

暇なのは相変わらず一番の当事者である私だ。でもその気持ちを察してか、みんな外出するときには私も積極的に誘ってくれていると思う。

ほら、今だって

「おい、これから工房に行くけど、お前も行くか？」

エミルと一緒に持ち出していた本の返却作業から戻ってくると、寮の廊下でカナイに呼び止められる。ちらとエミルを見ると、にっこりと微笑まれて「行っておいで」と背を押される。

「工房って何の？」

「ん、魔法石だよ。エミルに頼まれてたからな、良質の物を探して欲しいって、それが手に入ったって連絡があったんだ」

「オレンジ耳の人？」

私の狭い交友関係で魔法石に関係しているのは彼だけだ。

カナイは私の問い掛けに頷いた。

今日は時間を気にしていないのか、カナイにしたら凄くゆっくり歩いてくれていると思う。私でも周りを見る余裕が出来るくらいのスピードだ。

初めてここに来たときは、市の賑わいに驚いたが……あれは時間的なものが関係していたのだろう。今日は同じ通りとは思えないほど落ち着いている。

「ぼさつとしてたら、逸れるぞ」

ぐいっとカナイに腕を引かれて私は裏路地に入った。

細い道を手を引かれて通り抜けると、突き当たりに小さな入り口があった。看板には『ミア工房』と書いてある。

彼の名前なのかと問うと、ミアというのは昔の言葉で『宝』とか『宝石』という意味があるらしい——因みに彼の名前はティンタルレというらしく、みんなティンと呼んでいると補足説明を加えてくれた。——

扉を潜ると、むせ返るような熱気に迎えられる。奥の釜からだろう少し息苦しい。

ちらとその様子を見たカナイが、私を振り返って腰を屈めると私の目の前に持ってきた指先でくると小さな円を描いた。

するとキラキラと小さな粒が集まって飴玉くらいの形になる。

カナイはそれを摘むと、ぽかんと開いていた私の口に放り込み、ハンカチで私の口を塞いだ。ふがっと文句をいそうな私にそのハンカチを握らせて、口元を押さえるようにジェスチャーする。

「冷たい……」

口に放り込まれたのは氷の粒のようだ。

ころころと口の中で転がすとひやりと口内を冷やしてくれる。

お陰で宛がったハンカチ越しに呼吸すると、さっきよりずっと楽になった。お礼を口にしようとしたところで奥から見たことのある姿が、にこにこ陽気な笑みを浮かべて歩み寄ってきた。

「いらっしやい。どう？ 見学していく？ オレしかないけどさ」

「悪い。あまり時間が無いんだ。頼んでいた物が見たい」

そっか、残念。といいつつオレンジ猫耳のティンは踵を返してこっちこっちと手招きする。

「全く、加工屋に加工前の物を出せなんて鬼だな、カナイ。こんなの、どうするのさ？ 結構大きなものと不純物の少ないものを選んだけど、何とか集めてコレだけだ」

所々焼けた跡のある机の上にごろごろといびつな石が転がされる。角度によって室内の明かりを反射し、キラキラとラメが入っているようだ。カナイはそれを一つずつ手にとって真剣に選別しているようだ。

その間、時間を持て余したティンは私に顔を向けてにこにこ話しかけてくれる。

「あ、それ。気に入ってくれた？」

そういえば、私の髪留めも彼が作ってくれたものだ。

「うん。他のも大切にに使わせてもらってます」

「そっかー良かった。オレにとったら可愛い子どもみたいなものだからさ、良い人に嫁いで行くと嬉しい。あんた、可愛いし。他にも

何か作ってやるさ。何か記念日とかないの？ カナイに買わせるから」

これまた人懐っこく商売上手な猫さんだ。苦笑した私に、ねえねえとせつつく彼の頭を「調子に乗るな」とカナイが小突く。

「この五つを貰う。幾らだ？」

「あー……八百っていいところだけど六百五十で良いよ」

「じゃあ、六百でも問題ないな？」

カナイって……鬼だ。

まけてくれたのにそれ以上に値切るなんて。ぴこぴこと愛らしい耳を動かしてやや思案したようだが、ティンは、ちらと私を見たあと「まあ、良いか」と手を打ってくれた。

「これからもご贔屓に」

と手を振ってくれたティンに申し訳ない。

私には、もうここでこれから……なんていうのはないと思う。私は工房から出ると口を抑えていたハンカチをポケットに押し込み、ぼんやりとカナイの後ろに付いて歩いた。

「あいつ、お前にまた会いたいっていったから、連れて行って正解だったな？ 経費は抑えた方が良いだろ？ それにあいつは大口の取引はしていない割りに良い鉾脈を知ってるみたいだから」

おい聞いているのか？ と頭を叩かれて、私は、はっと我に返った。ごめんなさい、全然聞いていませんでした。

「お前な。別に俺の話は聞いてなくても良いが、転んだり変な奴に捕まったりするなよ？」

「うん、分かってる」

こくんつと私が頷くと、なら良いけどとカナイは再び足を進める。

分かってるよ。

分かってるんだけど、帰る日時が決定してから、私は少しセンチメンタルだ。

帰りたい、帰らないといけない。

そう思っているのに、ここでの思い出も捨てがたくなってしまっている。この世界に執着してくれば良い、ブラックの思惑通りに私の心は揺れている。

みんな、私が帰るために頑張ってくれているのに、私がこんなことではいけないな。と、ぎゅっと拳を握り締め気持ちを新たに顔を上げると、先に通りを抜けたカナイが振り返り私に声を掛けようとして目を見開いた。どうしたのかと首を傾けると背後から

「天誅！」

という声が聞こえ私の目の前が真っ暗になった。

私と襲い掛かってきた人物との間にすばやく割って入ったのはカナイだ。

カナイが私を背に庇い、ぱちんつと指を鳴らすような音を出すと刃物を振り上げていた男は悲鳴を上げその場でのた打ち回る。

呆然としていた私の腕を、カナイが引いて人が集まってくるからと走り出した。

＊＊＊

……はあ、はあ……

殆どカナイに引きずられるように走って、喉から鉄分の味がする頃カナイは足を緩めた。

「い、今の、何？」

「蒼月教徒だろ？ 天誅って叫んでたしな」

久しぶりに全力疾走したーと、笑ったカナイの腕から、ぽちりと何かが滴り落ち足元のレンガを見ると赤く染まっている。

慌てて顔を上げるとカナイの左側の袖が切れていて血が滲んでいた。

「ちょ、カナイ！ 怪我っ！」

「へ？ ああ、大丈夫、大したことない。さて、と、お前の息が整うまで小休止したら帰るか」

あーあ。制服新調しないとな。とか、明後日なことを口にしながら、カナイは道の両脇にレンガを積み上げて作られている花壇に腰掛けた。

「カナイ、ちょっと上着脱いで止血だけでもしよう。私血止めとか持ってるよ」

「……何で持ってるんだよ。それにもしかなくてもお前が作ったのか？」

「え、えっと、それは、その。実習で多めに作って、その、エリスさんのところに持っていくと買い取ってくれるから」

「お前、すげー所帯染みてるな」

苦笑するカナイの額には汗が浮かんでいる。走ったせいもあるかもしれないけど、きつと傷の痛みのせいだと思う。

「信用してよ。私だって薬師の卵なんだよ。種まで飲んでるんだから、カナイよりずっと優秀な薬師になるんだからね！」

ずかずかと歩み寄って、カナイの上着に手を掛けると勝手に脱がせる。

最初は良いといていたのに行動に出ると、それ以上は止めなかった。

上着はそうでもなかったけれどシャツは切れた部分から下は真っ赤に染まって、まだ完全には止まっていないようだ。

ハンカチで上腕をぎゅっと締めて簡単に止血する。

「ただの刃物傷かな？ 傷口はそんなに深くなさそうだけど、血が止まらない」

「ん？ ああ、痛ってー：優しくしろよ。体質みたいなものじゃねえの？ ほら、それ塗ったら戻ろうぜ」

何とか平気そうに言葉を繋ぐカナイに、私は泣きそうになるのを堪えて頷くと薬を塗ってもう一枚、これはカナイのハンカチだけどそれで傷口を縛ったあと止血分を解いて肩から上着を掛けた。

「絶対、アルファに馬鹿笑いされる」

げんなりとそういつつ立ち上がったカナイに手を貸すと「大丈夫だ」と断られた。

余計に泣きそうになった私に気が付いたのか、本当に大丈夫だからと頭を撫でられた。

「あ、あの。さっきの人は大丈夫？」

歩き始めると放置してきた人が気になった。そんな私にカナイは多少呆れたようだが「大丈夫だろ」と笑った。

「別に命を奪うようなことしてねえし」

「でも凄いのた打ち回ってた」

「幻術を掛けたからだよ。火達磨になってる夢を見せただけだ。頭に直接叩き込んだから多少原因不明の火傷とか負うかも知れないが、命までは削らない」

ぽやんとカナイの説明を聞いていたからか苦笑して「俺は凄い術師なの」と私の背中を叩いた。

— 1 —
(前書き)

メルマガにて先行配信されていた番外編です。本編とは関係ありませんのでお時間あればどうぞ、お急ぎの場合スルーしていただいても問題ありません。

「今からなんて無理だよ」

「そう、無理ー」

「そこをなんとかしてくれるのがギルドでしょう？ 困った人の味方じゃないの！」

依頼申し込みの用紙をカウンターに叩きつけて怒鳴る女性に、テラとテトは顔を見合わせて溜息を零す。しかし何度怒鳴られても二人の答えは変わらない。

もう日は沈みかけている。普通の家なら、夕食時だ。

そんな時間から依頼を受けに来るメンバーの中に彼女が望むような人材があるとは到底思えない。

「明日からなら探すよ」

「今夜からなんて無理」

—— …… カランカラン

対峙した女性に睨みつけられたまま、動くことなかったが扉に付いた

木製のウェルカムベルが発てた可愛らしい音に顔を向けた。

ただいまと事務所に戻った私にテラもテトもぴんっと耳を立てて喜色を示すと「お帰りっ」と声を揃えてくれる。それはいつも通りの光景だ。

「報告に戻ったんだけど、お客さんならあとに」

「気にしなくて良いよ、マシロ」

「もうお客じゃないから」

二人の若干失礼な物言いに、私は眉を寄せて首を傾げる。

しかし、店主の二人がそういうのだからそうなのだろう。私は、手に持っていた報告書をカウンターに数枚並べた。

どれもEランク。簡単なものだ。

用紙を受け取ったテラは、ぺったんぺったんと終了印を押し、テトは報酬を小さな袋に入れてくれた。ありがとう。と、それを受け取った私は先程から一身に浴びていた視線に限界を感じて、隣に立っていた女性に向き合った。

「あの、私に何か？」

「テラ、テト。この子、ギルドメンバーなんでしょ？　この子で良いわ」

私に問い掛けられた女性は、私の問いを完全に無視して私を指差すと、テラとテトにそういつて手を取った。全く意味の分からない話に私は困惑する。

「駄目だよ！　マシロは駄目っ！」

「そう、駄目だよっ！」

「マシロは寮生なの！」

「もう、帰る時間！」

「働いてる学生だって多いわ。気にすることないわよ」

真っ赤に彩られた口元を引き上げてそう告げた女性は、今度こそ私を真っ直ぐに見つめる。そして、にっこりと艶やかで妖艶な笑みを浮かべた。

「貴方もたまには寮則くらい破るでしょう？ 同じEランクでも、短時間で報償額が全然違うのよ。受けてくれるわよね？」

「え？ あ、いえ。私はもう帰らないと、みんなが心配するから……」

「そうだよっ！」

「あとで怒られるのは僕らなんだよ！」

必死で引き止めている風なテラとテトを無視して、私の手を掴んだまま——どこにそんな力があるのだろう——凄い勢いで引きずるように事務所を出て行ってしまった。

そのまま、ぽつぽつと街灯が灯り始めた大通りを突っ切って裏通りに入っていく。

私は、嫌な予感を拭いきれずに恐る恐る手を引いている女性に声を掛けた。

「依頼ってなんですか？」

「大丈夫。そんなに怪しい店じゃないから。私の名前はルージュ。その店の店主よ。今日突然欠勤が出ちゃってどうしても働き手が足りないのよ。今夜だけで良いから」

怪しい店じゃないと自負するところが一番怪しいと、警戒を強めたが手を離してくれそうにもない。私は、がっくりと肩を落とした。抵抗しなくなった私に気がついたのか、掴んでいた手が少しだけ緩む。そして、程なくして見えてきた店に裏口から引き込まれた。

座って座って、と鏡の前に座らされ、普段はあまり縁のない化粧まで施される。髪を綺麗に結い上げられた私の双肩に手を乗せて、背後から鏡を覗き込みルージュさんは満足そうに頷いた。

「うん。私の目に狂いはなかったわ。貴方とても化粧栄えるわよ。次はこれに着替えて」

本当に急いでいるのか、慌てた様子で着替えをソファの上にぽんぽんっと乗せていく。私がそれを渋々と手にとっていると、軽いノックの音が響いて店主の了承を得て入ってきた露出度の高い服を着た女性がそっと耳打ちしていく。

店主さんがそれに渋い表情をしたことよりも、もしかしてあれと同じのがこれなのかというショックのほうが大きい。

私は衣装を片手に唸った。

「悩んでないで早く着ちゃって。お願いだから。大丈夫よ、確かにお酒を扱ってるお店だけど色を扱ってる店じゃないの」

色といいますと、いや、まあ、違うといってるのだし、良いか……。

私は、はあと嘆息してパーティションで簡単に仕切られた奥へ入った。

ベアトップだから肩口が心許ない。

服の丈は長いのに、際どい位置まで入ったスリットも落ち着かない。恥ずかしいなあ……普段身体のラインがはっきり出るような服を着ないから、余計だ。

「ルージュさん。背中止めてください」

私の声に「失礼するわね」と入ってきたルージュさんは、私の背のホックを留めつつ、鏡を見て眉を寄せる。

何か着方が可笑しかっただろうか？

—— ……ぐいっ！

「いっ！」

どきどきと緊張している私とは関係なく、ルージュさんは、おもむろに左胸辺りをギリギリまでずり下げた。止める暇もない。露わになった刻印に困ったように溜息を吐く。

「それ、種屋の徽章ね。貴方、闇猫と何かしら契約を交わしているの？」

えっと、その……と、答えを濁した私にルージュさんは深く追求することなく「今日に限ってついてないわ」と、零しながら自分が肩から羽織っていたショールを私の肩にふわりと羽織らせた。甘い香りが鼻腔をくすぐる。

「二階へは上がらないように気をつけなさいね」

それだけ念を押すと店へと案内してくれた。

きっと多分、普通の酒場だと思う。カウンターの傍にあるオルガンが、軽快な音楽を奏で思っていたよりは明るい雰囲気だ。

そして、ルージュさんのいうとおり、確かに急がしそうだ。みんな紹介された私への挨拶もそこそこに動き回っている。

それじゃ、お願いね、頑張っ！ と、肩を叩かれてからその戦

場へと放り込まれた。

料理とか、お酒とか、いわれた席に運んで……少しお酌をして離れるので特に問題は無いようで、慣れない格好に戸惑いつつも、私はなんとか仕事をこなせていると思う。

うん。上出来。

大分仕事慣れてきて周りを見る余裕も出てきた。

ルージュさんは、二階には上がらないように。といていたけど、思い出して部屋の隅にある階段の上を見上げる。中二階辺りにも席がいくつかあるようだ。

「――……っ！」

かしゃん。

思わず驚きに手元のグラスを鳴らしてしまった。私は、わたわたと二階から見えない位置まで引っ込んでくると、深呼吸。

……なんでこんなところにブラックが居るんだ。どうか見付かっていせんように。

なんだか無駄なお願いのような気がしたけど、一応どこかの何かの神様に祈った。

時計に目を走らせると、結構遅くなってしまっている。

テラとテトが、エミルたちに連絡してくれてたら良いけどきつと心配しているだろうな。

ふうと嘆息したところで「これ、お願いね」と、またお酒とグラスを持たされる。色々考えたって仕方ない。始めてしまったわけだから、今日だけとはいえちゃんとやらないとルージュさんに申し訳

ない。

注文のあったテーブルに、瓶とグラスを置くと「初めて見る顔だねえ」とか「ちよっとお酌してよ」という有体の言葉に掴って、私は席に着かざるを得なくなった。

結構、酔ってそうな雰囲気だったから、あまり長居はしたくないのにそれは許されないらしい。

「飲みなよ」

飲めないと何度断っただろう。

誰かお酒に強い人でも代わってくれば良いのに、と思うのに誰も来てくれそうになくて、渋々グラスに口を付けた。

苦い。

飲み下した液体が通ったところがはっきり分かるように、かっと熱くなる。

「良い酒なんだぜ？　もっと美味そうに飲みなよ」

ほらほらと折角減ったグラスがまた満たされる。

仕方なく、ぐっと飲み干して「ご馳走様です」と笑ったつもりだ。これできっと解放されると思ったら視界が、ぐらりと揺れ椅子からバランスを崩した。

――…落ちるっ?!

私は痛みに構えて身体を硬くした。

「大丈夫？ ごめんなさいね？ この子、今日が初めてでお酒に本当に慣れてないんですよ」

予想していた痛みは柔らかかった。心地良い弾力。良い香り、この香りはさっき嗅いだばかりだ。

そう、受け止めてくれたのはルージュさんだった。

「そうかい？ 悪かったな」

ルージュさんの言葉は、すんなり入るのか素直に謝罪してくれるお客に私は「すみません」と謝って、ルージュさんと一緒に席を離れ、裏口から外の空気を吸いに出た。

「悪かったわね。大丈夫？」

頷くことしか出来なくて、こくこくと頷いた。

胃の辺りが、かっかして身体中が脈打っているようで痛い感じがする。はぁと吐いた息が熱い。

「少し休んだら、また、入ってくれと助かるけど、無理なようなら帰っても構わないわ。報酬は明日にでも事務所に取りに行ってね」

それだけ告げると、ルージュさんは忙しそうに店の中へと入っていった。

向いてない。

確実に私には、こういう仕事は向いていないと思う。

建物の壁に背を預けてずるずるとしゃがみ込む。頭の中が掻き混ぜられているように、ぐるぐるとする。もう全てが回っている。

ぐるぐるぐるぐる……。

帰って良いといわれたけれど、正直自力で寮まで戻る自信がない。誰か迎えに来てくれないかな。胸の奥が、ずきずきどくどく……迎えが欲しいとか、頭に浮かんでしまったら、今一人で居ることが凄く寂しく、悲しいことのように思えてきた。

泣きそう、だ。なんでだろう。そんなつもり、ない、のに。

わじわじと視界がゆがみ、私は膝に顔を埋める。

——……ひと。

すんつと、鼻をすすり何度目かの溜息とあと頬に冷たいものが押し付けられる。

「水です。飲んで」

そう掛かった声に納得して、私はそれを受け取ると喉の奥へと流し込んだ。

すうつと身体に染み込み、熱を奪っていく。凄く冷たい。

——……美味しい……。

「ありがとう」

ほう、と一息吐いて、やっと頭の中のぐるぐるが落ち着いてきた。ひと心地つくのに一役も二役もかってくれたお水に感謝しつつ、

グラスを返そうと顔を上げて、私は地面にグラスを落とした。

「何をやっているのか聞いても良いですか？」

私は、よろりと立ち上がると、まだ足に力が入らなくて再びしゃがみ込みそうになる。それを捕まえたブラックに支えられて私は壁に背を預けたまま、ようやく立った。

「もう、寮は閉まってしまう時間ではありませんか？」

「ブラックこそ……」

「私が夜、酒を飲みに出るのは不思議ですか？」

確かに私がこんなところでバイトしているよりは、不思議ないだろう。

「まあ、尤も仕事でもない限り、こんなところに来ることはありませんけどね」

いい訳のようにそう続けたブラックは、再び話題を戻して「それで？」と問い返してくる。居心地悪くて顔を逸らすと、まだ揺れる。答え損ねている私の唇をブラックは乱暴に指で拭いた。

「あまり派手な化粧は似合うとは思えません。この香りも誘っているようにしか思えませんね」

「ち、違っ」

「違います。酒を扱うこういう店が、健全なわけないでしょう。無知にも程がある」

普段、ブラックからは、あまり感情の起伏を感じられないのに、今ははっきりと怒りを感じることが出来る。

明らかにブラックは今怒っている。

「どうして、怒るの？」

我ながら間の抜けた問い掛けだ。ブラックは眉一つ動かさず、真っ直ぐに私を見据えたまま、はっきりと答える。

「貴方は私のものだからです」

そんな、勝手な……と、口にしようとしたら、ぐいっと顎を持ち上げられ簡単に唇を奪われる。

突然口付けられてなのか、アルコールが身体中に巡っているせいなのか、私は強く拒絶が出来ない。

それよりも、よく分からない熱に浮かされ、きゅっと瞳を閉じると目尻に涙が溜まってしまっているのが分かる。

離して欲しいのに、胸に当てた手のひらで押し返えせば良いのに。頭の中が真っ白で私は何も抵抗出来ない。

「っん。んう」

呼吸の仕方が分からなくなり、くらくらする。膝に力が入らない。でも、それで崩れ落ちそうになるのも許されず、腰に回された腕が私の身体を簡単に抱き寄せる。

熱くて、苦しくて、何がなんだか分からなくなり、息だけが上がつてくる。

「ふ……う、んっ……！」

かちんっ！ と、齒列がぶつかって痛みに眉を寄せると、やっと
少しだけ解放される。あんなに深く貪っておきながら、私を見る目
はどこか冷たい。そして、酷薄な瞳の色を変えることなく、辛辣な
台詞を吐いた。

「貴方は誰にこのくらいのことされても平気なんですか？」
「っ」

呆けている頭でも分かる。

酷いっ！ そんなわけないっ。私だって……私、だって……。

そんなことない、と、違う、と否定したい。

でも、じゃあ、どうして私は今、ブラックを突き放さなかったの
だろう？ 浮かんだ自身の疑問の答えがどうしても見付からなくて
私は押し黙る。

そんな私を抱き締めたブラックは、肩口に顔を埋めて「すみませ
ん」と謝罪する。

「大体の見当は付きます。店主の強引さにでも負けて、一晩だけと
かいわれて引っ張り込まれたくらいのことでしょう……。マシロは
押しに弱いですね」

ふふっと笑われたはずなのに、私はどういいうわけか胸が苦しくて
目尻に溜まっていた涙が、つうと流れ落ちた。

「ブラック……」

何か言葉と思ったのにあとが続かない。

私は、きゅっと目を閉じてゆっくりと深呼吸を一つしたあと「ご

めんなさい」と謝罪していた。

何に對しての謝罪なのか私にも分からないし、いわれたブラックも、分からないというように私を解放して、首を傾げたが他の言葉が思いつかなかった。

沈黙していた、私たちの間を、ふわりと抜けた風が吹いてきたほうへ顔を向けると「遅すぎですね」とブラックは眉をひそめた。そして、確信を持ったように告げる。

「迎えが来ますから、ちゃんと帰ってくださいね？」

え……と、自分でも驚くくらい不安そうな声を零してしまった。そんな私に、ブラックは先ほどまでの冷たい怒りを含んだ雰囲気を感じ、いつものように微笑んだ。

—— ……良かった。

思わずその笑みに安堵した自分が居る。

どうして、ブラックに許されて安堵するのか。こんなやつにどう思われようと構わない。もともと働かなくてはいけない原因を作ったのは、この猫で……だから、だから私はっ！ 私は……嫌いなはずだ。

困惑する私の心うちを知ることなく、ブラックは私の頬を包むと軽く一度だけ口付けた。

「大丈夫。もうアルコールも抜けています。歩けますよ」

不安そうな原因はそこだと、勝手に判断したのか、そう告げたあ

と「仕事があるので」と、その場を立ち去った。その姿が闇の中へ溶けるように消えてなくなるのを見送ると、私は自分の格好を改めて見て嘆息し着替えに戻った。

「遅い」

「っ！」

不愉快だった。

非常に不愉快でそんな自分にも嫌悪感を覚えていた。

わけが分からない。

自分のものに傷を付けられるように、面白くなかったのは確かだ。しかし、それ以上の不快感が気分を害していた。

走ってきていた姿を見つけて呼び止めるより先に手が出ていた。本来なら消してしまいそうな勢いだったのに寸止め出来たことにも少し驚いた。

「女性一人護れないのですか？」

がっとう首を掴んだまま、腕を振り下ろし壁に叩きつけて手を離れた。げほっ！ と、激しく咳き込んでいる姿を見ても感情は動かない。

当然、それはいつものことだ。

いつもと違って消してしまわないのは、今ここで消してしまったら……またマシロの迎えが遅くなる。だから消さないだけだ。

「無能ならばくだらない柵しがらみと一緒に消しましょうか」

「冗、談……。今、殺されたらマシロを迎えに行けなくなるよ。悪い、けど、お断り」

げほっと、もう一度だけ大きく咳き込んで立ち上がる。見た目より、遥かに偉丈夫らしい。

「闇猫でも、そんなに傷付いた顔をするんだね？」

「っ」

ここに鏡がなくて残念だと口角を引き上げた王子に苛々したが、それ以上引き止めることは面倒なだけだ。

「生かされているということ、忘れないで下さい」

「そうだね。今夜だけはそのことに感謝するよ」

急ぐから、と、そのまま走り出した後姿を苦々しく見送る。

生かしている……。何故、今更そんなことを口走ったのか良く分からない。

マシロに告げるならまだしも、この世界の住人ならば種屋のことは嫌というほど身に染みているという。わざわざ告げるような事柄ではない。

意味が分からない。

胸が痛い。得体のしれない痛みが、恐怖を生む。

種屋が、恐怖するなんて有り得ない。しかし、こんな痛みを持ったことは、歴代の種屋も一度もない。

—— ……病にでも冒されたのかもしれない。

そんな恐怖だった。

「……怒ってる、よね？」

ごめんなさい、と続けた私に、エミルは何事もなかったように、にっこりと微笑んでくれた。

店に迎えに来てくれたときも、困ったような切羽詰ったような顔をしていた。でも、ブラツクのようにはつきりとした怒りはなさそうだ。ほっとしたのと同時に、申し訳なさでいっぱいになる。

「首、痛いのか？」

とぼとぼと帰り道を歩きながら、問い掛ける。

午前中はそんな素振りはなかったような気がするのに、なんだか首辺りを気にしているように見えた。でも、エミルは「ううん」と首を振る。

「それに、怒ってるよ。怒ってるけど……別にマシロに怒ってるわけじゃないから、マシロが気にしなくて良いよ。自分が不甲斐ないなどと思って……もっと早くマシロを迎えにいったら、マダムルージュに掴むこともなかったのにな？」

苦い笑いを零したエミルに私は謝罪を重ねた。

「マダムルージュの店はそんなに疚しくはないと思うけれど、やっぱりお酒を扱う店だから、酔っ払いに絡まれると大変だし、マシロ自身が酔っ払いになることもあるから……お勧めは出来ないな。テラとテトから聞いたときは凄く吃驚したよ」

仰るとおりです。

現に絡まれて酔っ払いになっていたことも本当なので、私は何もいえない。

ブラックの言葉どおり、あれから私の足元はしっかりしていたし、今だって普通に歩けるけど、なんともいえない罪悪感はなく拭えない。

今日は最悪だ。

寮に戻ってからはエミルと二人、寮監さんに懇々とお説教をされ、部屋に戻ろうと思ったたらカナイに掴ってここでもまたお説教をされた。

「え、こんなに貰えないよ」

「良いよ、気にしなくて」

「そうそう良いよ」

「マダムルージュの気持ちだって」

「あんなに血相変えて迎えに来る相手が居る子には申し訳ない仕事だったって」

私は数時間しか居られなかったのに、マダムルージュが払ってくれたのは金貨五枚だった。夜の仕事の相場は分からないけど、私が

一ヶ月根をつめて働いても稼げないくらいだ。
それをたったアレだけの時間で……。

「そんなに、エミルさん血相変えてたの？」

私が驚いている間に、買出し組みとして付いてきていたアルファは、カウンターに肘を寄せ、その上に顎を預けて身を乗り出すと片方の足をぶらぶらさせて楽しそうに聞いている。

「あー、うん」

「ねえ？」

二人揃って顔を見合わせたあと、ちらりと私を見て、相槌を打つ。
意味が分からない。

まあ、良いや。と、割り切った私は「行こう」とアルファの腕を引っ張って外へ出た。

―― ……そしてその頃カナイの部屋にてエミルは……

「んー、顎のうしろ辺り……」

「ここか？ 少し腫れてるな」

「い、ったた、カナイ、ちょっと痛い」

ブラックに絞められた辺りに違和感を覚えていた。

校医に見せることを勧めたものの、エミルが首を縦に振らないので、少しでも炎症を抑えてやろうとカナイが首筋に触れると両方の耳の下辺りが少し腫れているようだ。

「お前さ、闇猫と一人で対峙するようなことするなよな。お前の声は届くようになってるだろ？ 何のための護衛だよ」

ぶつぶつと零すカナイにエミルはふふつと笑みを浮かべ、そつと耳のカフスに触れる。特別な魔法石が埋め込まれているカナイの特注品だ。

「闇猫相手じゃ、どうせ誰も敵わないよ」

「は？ それでもお前だけじゃ瞬殺だろ。俺が居たら秒殺くらいになるかも知れないじゃないか。アルファもいれば分殺くらいには……っていつて空しくなる」

ぶすりと不機嫌そうに、そう答えたカナイにエミルは「ありがとう」と尚笑う。

「でも、どうしてこの程度なんだ？」

「んー？ それは、まあ、マシロを迎えに行く人が居なくなるからじゃないかな？ 時間が惜しかったんだと思うよ」

「あの闇猫がか？」

「あの闇猫がだよ」

思わず二人して顔を見合わせると、くつと喉の奥で笑いを殺す。

「それでさ、噛み合わせとかおかしくないかな？」

「んー、どうだろうなー。腫れが引かないとなんとも……」

―― ……カチャ（お約束）

「だから、カナイ痛いって、もうちょっと優しくやって……」

「―― ……何やってるんですか？ 二人とも」

「だ、駄目だよ、アルファ。こういうときは見て見ぬフリだよ。ほ、ほら、食堂でおやつでも食べて済むまで待ってようよ」

扉をあけたら私の知らない世界が広がっていた。というわけで、ここは退散。

「待て、待て待て待て！ 何が済むまでなんだ。何を見て見ぬフリなんだ」

「わ、私の口からはとても……大丈夫、お似合いだと思うよ」

半分冗談半分本気で、アルファの腕を引き部屋を出ようとした私の手は、カナイにがつつりと掴れてしまう。

「何がお似合いなんだよ」

「大丈夫っ！ 他言しないから！」

慌てるカナイが面白すぎて直視出来ない。

私の意図を察したのかアルファが便乗してくる。

「えー、僕なんか嫌だー……マシロちゃんの部屋に引越しするーっ」

「お前さっきから大丈夫しかいってないじゃないか、今のはただ」

「ちょ、駄目だよ！ 内緒だっていったのに！」

カナイのいい訳も聞いてみたかったけど、エミルの一言に追い討ちを掛けられた……え、っと……もしかして、冗談じゃ、ない、のかな？ 私の気持ち的には笑いが引いてちよっと寒くなってきた。

「え？」と声を揃えた私とアルファからエミルは顔を逸らした。

怪しい。かなり怪しい。

「エミル、変なほうに誤解されるから、もう色々いうの止めてくれ」
「変なほうってどんなほう？　よく分からないけど兎に角駄目だよ」

いいつつエミルは耳の後ろ辺りを押さえて軽く捻ると「ちよつと
温室行ってくる」と部屋を出る。擦れ違いざまに「一緒に行こう」
と腕を取られて私もついて出た。残された二人はどんな空気なんだろう。
想像するとちよつと面白い。

「やっぱり首が痛いの？」

「うーん、寝違えたのかも知れない。我慢出来ないってほどじゃないんだけど……」

「筋が張ってるの？　ちよつと見せて」

私は温室に行く前に、廊下の所々に設けてある長椅子にエミルを座らせると正面からそつと触れた。エミルは、目のやり場に困ったのか軽く瞼を落として、じつとされるままになってくれる。頬の上に落ちた長い睫毛とか、つい、見惚れるほど綺麗な目鼻立ちで肌理の細かい肌だな。とか余計なことを思ってしまう。

——……ん？

ああ、もしかしくなくても、今、私カナイと同じことやってるんだろうなと行き着いて、少しだけくすりと笑ってしまった。

でも、エミルの眉が少し動いたのと指先に触れた腫れに行き着いて、私はその範囲を確認するようにそつと指先を這わせる。左側よ

りも右側のほうが広範囲で腫れている。
寝違えたとかそんな問題じゃない。

「少し髪を上げるよ？」

私は断ってからエミルの首筋に掛かっていた髪をそつと上げた。
そして直ぐに、その手を離すとエミルの手首を取って行こうと引く。

え？ と立ち上がったエミルの腕をぐいぐい引きながら私は短く答える。

「医務室行こう」

「え、大丈夫だよ」

「大丈夫じゃないっ。寝違えたとかじゃないよ。髪で隠れてたから気にならなかったけど、赤黒くなってるよ」

考えたくはないけど、私だって薬師の端くれだから原因の見当くらい付く。ほぼ間違いなく人為的な何かだと思う。

私は振り返ることなく謝罪する。

「もし、私のせいならごめん……」

意図せずエミルを掴んだ腕に力が籠る。

そんな私に、エミルはくすくすと笑うとあいていた手を、掴んでいた手に重ねてぽんぽんと叩く。そして、私の手を解いていつものように繋いでしまうと私に並んだ。

「そんなこといってると、世界の全ての事象がマシロのせいみたいだよ？ どうなってるのか正直あまりちゃんと見てないんだけど、

きつと大したことじゃないよ」

葉草にでも被れたんじゃないかな？ と笑って済ませてしまう。

「エルリオン先生ならきつと原因を教えてくださいから、そうすればマシロは安心するかな？」

そう続けたエミルは、私の手を引いて前を歩き出してしまった。そして、そんなはずはないと思うのだけど、エルリオン先生はいつもの穏やかな調子で内皮の炎症だと診断してしまった。

「ほら、大したことなかった」

「心配しなくても数日で完治すると思いますよ」

とそれぞれに重ねられては、私はそれ以上いえなくて、頷いて良かったと答えるしかなかった。

第三十六話：痛い痛い痛い飛んでいけ

裏路地で息も絶え絶えにもがき苦しむ男の前に、ずっと黒い人影が姿を現す。

その姿を視界に認めると男は縋るように手を伸ばす。

「ルイン・イシル様……」

——：ガウンっ

そして聞こえたのは一発の銃声。男の手は何も掴むことなく塵と消え風に巻かれてしまった。

「貴方たちがどう集団化しようと勝手です。ですが、私のものに手を出すような真似をするのならば消えた方が、マシ、ですよね？」

夜の闇に浮かぶ月のように冷え冷えとした抑揚の無い声でそう口にして、蔑み嫌悪する瞳で唯一、残った種を睨み付ける。

そして整って美しい顔の造形一つ変えることなく、種を踏み躪り男はすっと角へと視線を泳がせると、慌てて走り去る姿が消えていく。

やれやれ、と、溜息を零して傍に落ちていた刃物を足で弾き手に取ると、やや眺めたあと興味失せて、ぽいっと捨て去った。

図書館に戻ると、カナイの予想通りアルファが盛大に笑った。

「痛った、痛って、ちょ、もう、もう良いって」

「カナイ君は相変わらず堪え性がありませんねー、少し我慢しなさい」

大丈夫！ と、主張するカナイをエミルに手伝ってもらって、医務室まで連れて来た。本当に打たれ弱いのか目じりに涙が浮かんでいる。

「ごめんね、カナイ。大丈夫？」

「え？ ああ、お前居たのかよ。って、痛った……くない。痛くないから、お前はそこで馬鹿笑っているアルファ連れて俺の着替えでも持って来いよ」

謝罪する私にカナイはしっし、と、手を振った。

カナイの言葉に「そうですねー」とベッドに腰掛けて笑っていたアルファは、ひよい！ と下りると「行きましよう」と私の腕を引く。

ここに居ても私に出来ることはないし、素直にアルファに引かれるまま廊下へと出た。

「大丈夫ですよ。マシロちゃんが怪我するよりずっとましです。マシロちゃんと二人で出掛けてるから浮かれてたんじゃないですか？ 自業自得です」

けらけらと笑いながらそういつてくれるのは、きっと私を慰めてくれているんだよね？ 私は頷きつつも暗い気持ちが晴れない。

「全く自分が注意しろって一番にいつておきながら、本当、浮かれすぎ」

マシロちゃんも汚れてるからついでに着替えておいでよとにこに

こ繋いでくれる。

「どこ行くの？ カナイ！」

用事が済んだらさっさと退室していくカナイの袖を掴む。

カナイは面倒臭そうに首だけこちらに振り返ると「ちょっと出掛けるだけだ」と告げる。

「一緒に行くよ」

と、続ける私にあからさまに迷惑顔。

いつものカナイの反応ではあるけど、今はちょっと凹む。

掴んでいた手を離して「ごめん」と謝罪すると自然と俯いてしまった。カナイが困惑したのが空気で分かるけど、いつものように突っ掛かることも不貞腐れることも出来ない。そんな資格、今の私にはきつとない。

「連れて行ってあげれば良いじゃないですかー、カナイさんのケチどうせ大聖堂に行くんでしょ？」

そんな私を背後からぎゅっと抱き締めて抗議するアルファの腕に手を掛けて「良いって」と首を振るがアルファは聞いていないようだ。それはそうだがと渋るカナイに言葉を重ねる。

「大丈夫ですって、カナイさんは十分に格好悪いところ見られてますから、今更恥ずかしがらなくても」

「誰がだっ！」

「カナイさんが」

「ちょ、ちよつとアルファ」

何だか火に油を注いでいるようなアルファの暴言に私は慌てたが、本人は全く気に止めていないようではん言葉を重ねていく。

口の上手くないカナイでは到底応戦出来るわけもなく、どんどんいい包められているのは目にも明らかだ。そして、最終的にはやっぱり。

「ほら、行きたいなら来いよ」

こうなる。

アルファは得意げに私に微笑んだけど、私はその分凹んだ気がする。でも、折角だしカナイの腕も気になるし、私はアルファにお礼をいってカナイのあとにばたばたと続いた。

アルファのいった通りカナイの外出先は大聖堂だったらしい。そこまでの道のり会話らしい会話もなく、とことこ後ろを追いかける。

この間より、ずっと遠くに感じた大聖堂を見上げていると早く来いと怒られた。前は連れて入ってもらえなかったから、今回も外で待機だと思っていたから吃驚だ。私は、早く！ とカナイに急かされて、わたわたとあとに続いた。

中に入ったのは初めてだ。

図書館とはまた違った雰囲気でどこともなく良い香りがする。

カナイの登場で微妙に館内が浮き足立って感じるのは、私の気のせいではないだろう。

時折「カナイ様だわ」「お怪我をされているみたいお可哀想」「

お連れの方はどなたかしら？」などという声が小鳥の囁りのような声が聞こえる。

ここは図書館に比べて女生徒の率が高い。半分以上が女の子だとアルファに聞いた。良い香りもそのせいな気がする。

カナイは、いつものことなのかそんな声に耳を傾けることもなく、すたすたと足早に堂内を進んでいく。ステンドグラスが美しい礼拝堂をあとにすると、図書館と同じように管理人が居るのだろう。小さな小窓付きの部屋をノックする。

「悪いがまた演習室を解放して欲しいんだ。学生は入れないで欲しい」

そして、ちらりと、私を見てから、あー……と唸り「クルニアも呼んでくれ」と付け加えた。

管理人の女性は「関係者以外を申請なく急に連れてこられても困ります」と眉をひそめたが、カナイに次はちゃんと申請するからすまない。と、謝られると、ほんわりと頬を染めたあと小さく咳払いしてご注意ください。と、鍵を渡してくれた。

カナイって侮れない。

「クルニアって誰？」

「この研究員だ。ほら、もう先に到着している」

いって廊下の先を指差すと、こちらに向かって手を振る人影があった。

歩み寄ると聖職者らしい修道着っぽい服の上から白衣を羽織った男性だ。そして、その格好で手にしているタバコと無精ひげがミ

スマッチだ。年の頃は……三十代前半くらいに見えるんだけど、違ったらいけないから口には出さない。きっとこの風体で実年齢より上に見えていそうだ。

「カナイが女の子連れとは珍しいな。しかも部外者、図書館の生徒だね？ 可愛い子だねえ」

「障るな。汚れる」

「酷いなカナイ。人を汚れみたいというなよ。ったく……用事があるって呼んだんだろ？ こっちだって暇じゃないんだ、毎回お前の気まぐれな呼び出しに応じてやれるほど……お前腕どうしたんだ？」

口の端っこで支えていたタバコを、いじめるように噛み締めながらそういつていたクルニアさんは、ふとカナイの腕に目を止めた。

大仰な物はいらないと、断固！ 腕を吊ることを拒否したが、無理矢理吊ったのだ。目に付かないはずがない。

でもカナイはクルニアさんの質問は華麗に無視して自分の用件を先に告げた。

「お前にはこいつの面倒を見て欲しいんだ。連れまわすなよ。演習室に入るんだ、お前も」

がこんつと、他のところとは違い嚴重に鍵の掛かった部屋の扉を開くと中はがらんつとしていた。だだっ広い石畳の部屋で、上を見上げるとドーム状の吹き抜け……天井はガラス張りで陽光が良く差し込んでくるようになっていた。

私とクルニアさんが部屋に入るとカナイは扉を閉めて鍵を掛けた。

第三十七話：稀代の天才魔術師

「高等魔術の演習はここじゃないと周りに被害が出たらいけないから、図書館にはこういう部屋はないだろう？」

きよろきよろと物珍しそうに見ていた私の耳元でクルニアさんが囁き、慌てて避けるとカラカラと笑っていた。

確かに、図書館にはこういうのはない。

あるのは物凄く大きな貯蔵庫とか温室とかだ。温室は先が見えないほど広い。圧巻だ。

「クルニア、くだらないこと話してないで、お前はタイムキーパーもしている。これ、邪魔だから持つといて」

クルニアさんに時計を渡し、私には腕を吊っていた三角巾を持たせた。そして、さっさと中央へと歩み出て行くカナイについて行くとして、クルニアさんに止められる。

え？ と見上げると「俺たちはここ」と壁際に寄せられる。

「わざわざ俺を呼ぶってことは、あんたに被害が行かないように……結界でも張っとけてことだと思っしさ、あー、ところで名前は？」

「あ、ごめんなさい。マシロです」

私が名を告げるとクルニアさんは一瞬時間を止めたあと、堪えきれないというように、ぶふっ！ と噴出した。きよとんつとする私に、いや、悪い。なんでもない。というけれど何でもない相手を前にそんなに笑うとは……ちよつと失礼だ。

「モリスン女史がカナイに凄い叱責を受けてた時に出てた、名前だなーと思って」

「え」

「いや、ここは女の子が多いからねー。なーんでカナイがモテるのか俺にはさっぱりだけどさ、色々騒ぎがあっても大抵我関せずなのにあの時だけは……」

「クルニアっ！　ちゃんと図れよっ！」

中央まで出て行ったカナイが怒鳴る。多分聞こえていたのだろう、真っ赤だ。

そんなカナイに益々クルニアさんは笑い「わーってるって」と手を振ってちらと時計を確認した。

カナイは暫らく中央で考え事をしているようだったが、ふっと空を仰ぐと僅かな間目を閉じた。

ぴんっと辺りの空気が張り詰めて緊張が走る。

す……っと怪我をしている左手を動かすと、次の瞬間には杖が握られていた。先には大きな魔法石が付いている。

赤い球体は陽光を浴びて光を乱反射させて輝いている。

『我天を制すもの、右に宿りし青き月。左に宿りし白き月。天支える太陽……』

カナイの詠唱が始まると、部屋全体の空気の密度が一気に濃くなり息苦しく感じ、カナイを中心に濃密な空気の渦が壁のように競り上がってくる。

「やっぱり片手じゃ詠唱破棄は出来ないんだな」

「え？」

「ん？　ああ、普段あいつ杖なんて持たないだろ？　あれを左手の

変わりにしてるんだ、んでもって傷に毒か……もしくは他の何かの影響で体内を循環している魔力が、あっち側に流れてないから、詠唱でサポートしてる。まあ、普通は高等術式を詠唱無しで使うなんて馬鹿なこと出来るのは、この国でも数えるほどしか居ないけど……俺でも高等術式じゃ破棄出来ないし。足りないとはいえ略式詠唱で凌げるってのがすげーよなあ。天才は違うよ」

そっか、私のせいでカナイはいつも通りのことが出来ないんだ。毒もいろんな種類があるから、私では見ただけでその種類を特定することは出来ない。エルリオン先生はきっと気がついていたと思うのに、きつと、私に気を使って教えてはくれなかったのだろう。

「あ、あれ？　もしかして、あいつの怪我マシロが絡んでる？」

意図せず俯いてしまった私に慌てたクルニアさんは、そういつてわたわたと取り成すように話を続ける。

「あ、あー……ええつと、悪い。ごめん。本当、すんません。でも気にすることないってあいつはあれでも十分凄いいし、それにあれだ、うん。あいつはああ見えてもAプランしか用意してない奴じゃない、B・Cプランくらいまでは確実に用意してことに挑む奴だから、あんまり気にするなよ？」

『……炎を礎とした匣を現出させよ』

クルニアさんと話し込んでしまっている間に、ごうつと低く唸るような音が聞こえて巨大な風の渦が巻き上がった。凄い勢いで室内に広がってくる竜巻に、私は身構えたが、風は私の頬を撫でただけだ。

半歩前に出ていたクルニアさんを、ちらと見上げれば、相変わら

ず口の端の煙草を揺らしながら、にやりと笑った。彼のお陰、なのだろう。

その風と共に、カナイが、こつと杖を地面へと下ろした瞬間、それは出現した。巨大な赤い柵の檻だと思う。

「おい、どのくらい掛かった？」

「三周半だ」

クルニアさんの返答にカナイは舌打ちし、もう一度こつと地面を叩くと檻はぱっと塵と化した。

――…：魔術って、凄い。綺麗だ。

私は思わずその美しさに見惚れて、感嘆の息を漏らした。

薬師の地味さを思うとこちらが女の子に絶大な人気を誇るのも、分かるような気がする。

カナイは僅かな間だけそこに立っていたが、ふうっと息を吐ききると、まあ良いか。と呟いて「帰るぞ」とこちらに歩いてきた。

もう帰るのか？ というクルニアさんの言葉にカナイは怖い顔をして「お前のお喋りに付き合うのは酷だろ？」と釘を刺す。

バツが悪そうなクルニアさんに「気にすることないよ」と微笑んだつもりだけど、自分自身でどんな顔をしているか良く分からなかった。

カナイは、そんな私の腕の中から三角巾を抜き取るとよいしょと首に引っ掛けて結ぼうとしたが

「不器用なあんたに出来るわけないでしょ」

あまりにもたついているので突っ込まずにはいられなかった。
私の毒舌にカナイは、うっと息を呑み「そう思うんならさっさとやれよ」と腰を折った。

「あの上にある『高等魔術の術式解説と応用術』を取れ。んで、そのあと『古代聖獣の生態』も探しといて」
「……うん」

カナイは大聖堂から戻ると、そのまま人が殆ど出入りしない古臭い本が並んでいる一角を陣取った。

私は申し訳なくてカナイにくつついて小間使いをしている。

そしてそんな私の気持ちを知ってか知らずか、遠慮なくこき使ってくる。

こんな上の段の本が私に取れるわけない。

きよろきよろと見回すと一番遠いところに梯子が掛かっている。

私は肩を落としてそれを取りに行ってからカナイご指名の本を抜き取り、既に山になっている本の上に重ねた。

「他には？」

「別に無い」

図書館に戻るまでは腕を吊っていたのに、カナイはあっさりそれを邪魔だと外してしまった。

私は、机の上に放りっぱなしになっている三角巾を手元に手繰り寄せ丁寧に畳む。

「殊勝な態度も取れるんだな？　いつもそうだと静かなのに」

カナイの嫌味に突っかかる気力も無いしそういわれても仕方ない。すっかり気落ちして無口な私を、カナイは暫らく無視して本のページを捲っていたが、耐えかねたのか「気にするなっというてるだろ」と逆ギレした。

でも……と眉を寄せると、いつものように嘆息して困ったように微笑んでいる。

「俺はこのくらい平気。クルニアもいってただろ？　俺はA案しか考えていないような奴じゃないの。一応C案くらいまではある。それに、大体お前に怪我させてた方が大問題だし、もし盛大に転んで頭の魔法石が傷ついてみろ、騒ぎが大きくなるぞ」

「……は？」

「その魔法石は傷が入ったら爆発するからな」

何だと！　そんな危険物を私に後生大事に身につけさせていたのかっ！

今更のカナイの言葉に思わず眉を寄せた私にカナイは、いつてなかったっけ？　と首を傾げる。

聞いてないよ全然。

「まあ、小規模な爆発だし、持ち主に傷を負わせるようなものじゃないから心配は要らない、け、ど……お、怒るなよ？　いや、一応保険だよ。目の届かないところで何かあったら直ぐ気が付けるように……な？　俺の力も内包させておいたから、壊れたら俺には場所特定も出来るし、べん、り、で……痛い、痛い、痛いから押さえる

な！」

「平気なんじゃ・な・かった・ん・です・か！」

ワザとらしく傷口を押さえる。

鬼の所業なのは分かってるけど、今更な話に気分が悪い。私までも
し落としたり、着替えるときとかお風呂とかで外したときに傷でも
入ってしまったらどうするつもりだったんだ。

「へい、き。平気だ、こ、こんなもん、平気に決まってるだろう？
はは……」

「脂汗浮かんでますけど？」

「これは部屋が暑いんだろ。うん」

誰の目にも明らかなやせ我慢に切なくなる。

第三十八話…もう貴方しか見えない

仕方ないのでひとしきりカナイの様子を堪能したあと、私もカナイの隣に腰掛けた。カナイはまだぶつぶついつてたけど気にしない。

「あるとき、カナイ何考えてたの？ アルファもいつも通りならカナイが出遅れることは無いっていつてたよ」

まだ、ワザとらしく腕を擦っていたカナイにそう問い掛けると、カナイはバツが悪そうに「あー……」と唸ってぼつぼつと話してくれる。

「別に大したことじゃない。ちよつと考え事をしていたんだ」
「ふーん」

「魔法石も無事に手に入ったし、あれだけ良質の物なら期待通りか、それ以上の物をエミルなら生成する。計画も無事に成功するだろう。そうすればお前は元の世界に帰り、お前の居ないいつも通りの生活が戻る」

はー、と長く息を吐きながら顔に当てていた眼鏡を外し机の上に置くと、カナイは、ぎつと椅子を傾けて天井を仰ぐ。

「俺、何やってたかなー？ と思ってさ。お前が来てからは、こうやって今まで特に興味もなかった神話とか逸話の裏付けとか情報収集とかやってた。別にそんなに長い時間じゃないはずなのに、その前はどうかだったかと思うとぴんつと来ないんだ」

そんな詰まんねーことで出遅れたんだよ。だから、これは俺の責任。と、笑うカナイに私は複雑な気分になった。

まだここに来て私は数週間だ。
だから知らないことも山ほどあるけど、知ってしまったこともある。

だけど私には、それらをどうしてあげることもない。分かっているけど、それともどかしく感じるのに私はこの世界をあとにして私の世界に戻ろうとしている。

最近ふと思う。

私は、どうして戻らないといけないと思うんだろう。

家族には愛されていると思うし、居なくなったら心配するだろう。でも、ブラックがいうように、いつかは離れてしまう関係だ。遠くに行ってしまうは会うことも少なくなってくるだろう。

居た、居るという事実だけが私の中にあればそれでしっくりと落ち着いてくれる。学校だって友達だって、私が居なくては駄目だと
縋る人は居ないだろう。

でもここには……

—— ……ぼすっ

「痛い」

思考に埋もれていたらカナイに頭を抑えられた。

「何難しい顔してるんだ？ 貧相な顔がより一層貧しく見えるぞ」
「貧相な顔で悪かったわね」

どうせ私はエリスさんやアリシア、モリスンみたいに美人で花のあるタイプじゃないわよ。

エミルやアルファ、シゼにだって敵う気はしないわ。

仕方ないじゃないっ。一般人レベルなのよ！ 私の顔は！

カナイの暴言に不機嫌面全開で顔をしかめた私に、カナイは「変な顔」と重ねる。

何だと！ と噛み付きそうな私にカナイは、ふっと表情を緩めて「でも」と繋ぐ。

「そんな顔でも見なくなると寂しいな」

あんな顔するなんてズルイ。

今夜は月が見えない。

私の部屋からは、木々が邪魔をしてあまり綺麗に月は見えないのだけど、僅かでも覗く月は美しかったのに……。

ふうと息を吐いて肩を落とす。そして改めて

「あんた何してるの？」

「マシロを抱きしめています。ぎゅっとしています。隙を見てキスしようと思っています」

「今すぐ離れろ。変質者」

人が窓辺で干渉に浸っているところに現れて、背後からくっ付いて離れないブラックに呆れる。

こいつはこいつで、何で私にこんなに執着してくれるんだろう。ああ、借金回収の目的かな？　だったら、もう直ぐそれだって解決する。

詳しい金額は聞いていないけど、ここにある分と今回の報酬で全額返済しても多少残るといつていた。

そんなことを考えていると、ぱくりと耳を噛まれて身体を強張らせる。

「ちょ、やめてよ」

「突き放してくれて構いませんよ。殴っていただいても結構です。もう、こんな夜でないと貴方を独り占め出来ないんです。彼らも貴方に残って欲しくて堪らない。だから貴方を決して一人にしないでしょう？」

ブラックのやきもちも取れる台詞に私は苦笑しながら答える。

「そういうのじゃないよ。みんな、私のために忙しいから、だから私がみんなにくっついて邪魔かも知れないけど手伝っているつもりで居るだけ」

「それを許しているんですから同じことです」

時折、耳に掛かる吐息が暖かくてすぐったくて、身体がほんわりと熱を帯びてくる。

何か嫌だな……私までこいつのことが好きみたいな気になる。

恋愛なんて暫らくは御免だと思ってる。友達以上なんて思ってしまったら、またきつと些細なことで傷ついて、些細なことで怒って、

泣いて……私は嫌な奴になって、最終的には裏切られる。

—— ……もう、そういうのは嫌だ。

でも、マシロ。マシロ……と何度も名を囁かれると心地良い。名前って不思議だな。

結局ブラックに大した抵抗もしないまま、物思いに耽っていた私をブラックがきつく抱き締めるから現実は無理矢理引き戻される。

どうしたの？ と声を掛けると、帰らないで下さい。と、掠れた音が紡ぐ。

このところいつもいつも「どうして帰るのか？」「帰さない」そんなことばかり口に行っているブラックだけど、お願いされたことはなかった気がする。

どうしたの？ と、重ねて身体を捻り背後のブラックを仰ぎ見る。

僅かな月明かりに映るブラックの顔はとても綺麗で、女の私が見ても見惚れてしまう。ブラックは伏せていた瞳を私に向けると、刹那迷うように逡巡したあと

「好きです」

と口にした。

「貴方が居なくなると思うと胸が苦しくなります。どこかを痛めているわけでもないのに、身体が悲鳴を上げているような気になります。こんな気持ちは初めてで、この感情の名前すら分かりません」

本当に苦しそうに紡がれる言葉に胸が締め付けられる。

私はその感情を知っている。

その思いの名を知っている。

恋だ。

ブラックは恋をしているんだと思う。

その思いが自分に向けられているのは信じられないけれど。

「マシロが好きです」

「え？」

「マシロが好きです。そう口にするのと荒立った心が風ぎいてきます。木漏れ日の下で転寝をしているときののように、穏やかな気持ちになります。空っぽな私に意味があるような気になります。だから離れるのは嫌です。帰らないで、下さい」

重ねられる言葉に心臓が……どくん、どくん……っと、五月蠅く高鳴る。

全身が熱くなりわけも分からず瞳が潤む。一瞬息が詰まって言葉が出なかった。

嫌だ！ 嫌。私は分からない。認めない。受け入れない。私は振り回されているだけだ。この瞳に、この言葉に、この……きつと、耳とか、尻尾とか……そう、有り得ないに惑わされているだけ。

「ば、馬鹿なこと、いわないで。私は帰るんだよ。私は私の世界に戻るの。普通に学校に行って友達と遊んで……きつとそこでまたいつかは恋をする。ここじゃない……私の居場所はここじゃない」

「ここでの生活とどう違うんですか？」

「違うよっ！ 全然違うっ！」

どん……っと、ブラックを突き放すと、ブラックは簡単に私から数歩離れた。

「では貴方の幸せはそこにあるんですね？」

そうだ、と、直ぐに私は答えられなかった。

だって、そういつて笑ったブラックは泣きそうな顔をしていた。

泣いたことなんてない。

涙がどうすれば出るのか分からない。

そんなことをいつていたのに、ブラックは今私の目の前で酷く辛そうな笑みで、もう一押ししてしまえば泣いてしまいそうだ。

「このまま……、このまま。連れ去ってしまえば良いのだと思うんですけど、やめておきます。無理に押し留めることを、私自身も望んでいないようですし」

「ブラック？」

「帰ります。そして、どうか元気で……」

「ブラック、どうして帰るの？」

当たり前のことをブラックはいつているのに、私は酔狂な問いを投じている。そんな私に歩み寄りブラックはそっと手を伸ばして頬に触れ腰を折る。

「いつか離れるのなら、ここで終わりにします。貴方を消すことは私には出来ない。だから私がここから消えます」

—— ……さようなら。

そう、締めくくってブラックは消えた。

刹那、微かに触れ合った唇が酷く熱く感じる。

私はまだドキドキしていた。

いつも心の籠っていない、感情が伴っていない、ブラックの言葉は今日に限って心があった。それが私を苦しくさせた。

―― ……どうして私は苦しいんだろう？

「……もう、どうして良いか、分からないよ……」

瞬きも忘れてしまっていた私の瞳から、はらり……と涙が溢れた。

第三十九話：盲目的に一途な思い（1）

翌日部屋に引き籠もっていた私は、殆ど無理矢理アルファに連れ出された。

王宮に引っぱり込まれ一般的に騎士塔と呼ばれるところが終点らしい。演習の見学なんて遠慮したかったのに、アルファはそれを許さなかった。

「あれー？ アルファさん今日は彼女連れですか？」

「うん、そう。可愛いからって手を出さないでね？ 死にたいなら良いけど」

私に否定する隙はない。

可愛い笑顔で口に行っていることは悪夢だ。

にこにこ私たちに声を掛けてきてくれた生徒は「遠慮します」と笑っていたが口元は引きつっていた。アルファの雰囲気は、冗談をいっている風ではない。

「それじゃ、今日もお手柔らかに頼みます」

と、手を振って離れていく生徒を見送って、アルファは背にしていた私をいつもの笑みで振り返る。

「この辺りで見ててください。王宮は広いですから、迷子になったら見つけるのが大変なので……あー……良かったら参加しますか？」
「遠慮します」

私に騎士を目指すような人たちの運動量をこなせるとは思えない。一秒も考えるそぶりもなく断った私にアルファはそうですね。と、苦笑した。

そして演習場の中央から呼ばれる声に応えるように手を振って「じゃあ、行きますね？」と私を壁際のベンチに座らせるとアルファは十五人程度の生徒が集まる場所へ走り去った。

私はそれを見送る。

演習場は並んで建つ二つの塔の間にあった。周りを綺麗な芝で整備した運動場だ。

私は武の素養を持つ人たちの学校は王宮と呼ばれているから、城の中にあるのだと思っていたがお城は遥か彼方だ。

王宮の外門を越えてこちらは全て『王宮』と呼ばれることになるらしい。

許可のない民間人が立ち入ることが許されない場所であるから、そのせいかここは他の二つの学校よりも閉鎖的な環境にあると聞いた。

ぼやん……っと、していたら刃物を打ち合う音で現実に戻された。

練習が始まったようだ。

簡単な防具だけを身につけ、アルファからは刃が削ってあるものを使うから大丈夫だと聞いたけど剣を打ち合う姿は、正直私には向かない。

でも、響いてくる音は鈴の音のように玲瓏と辺りに響き身が引き締まる気がする。私はそんな音の中、空を仰ぐ。

秋のように高い青空に、子どもの落書きのような雲が浮かぶ。
時折、飛んでいく大きな鳥は鳶だろうか？　ぐーんっと旋回して
いく姿が綺麗だ。

「……好き……か」

ブラックの言葉の意味を考える。

私は、彼と同じだけの好意を彼に抱いているだろうか？

「……ません、すみません」

「え？　ああ」

くんくんっと、背後から袖を引かれて私は声のする方を振り返る。

こそこそと私に近づいて来ていたのは、この間エミルにパレード
への参加を強要していた女性だ。

アルファに見つかりたくないのか、ちら……とだけ、アルファの
位置を確認して「少しお話させてください」と顎で奥を指す。

私がこの人から聞くような話はないと思うけど、拒絶するのも面
倒になっていた。私は軽く頷いて腰を上げ演習場から抜けた。

途中ちよつと振り返るとアルファと目が合った。

やはり私が席を外すのを、アルファが見逃すはずはない。一緒に
居る人が見えるように、少し立ち位置を変えるとアルファは戸惑い
気味に頷いた。

「わあ……」

連れて来られたのは庭園だった。

図書館の庭も綺麗に整備されていて居心地の良い場所には違いがないが、このそれは桁違いだ。何かのテレビ番組で見たイングリッシュガーデンのようだ。

白い石で造られた遊歩道の両脇は腰の高さで綺麗に整えられた植木が、白く小さな花を咲かせている。ちらほらと人影もあるし、少しだけ胸を撫で下ろした。

ついて来たものの、安全とはいいい難いし軽率だったかな？　とも思っていたところだったから。

そう思って安堵したのも束の間、庭園内から出てはいないが彼女が足を止めたのは人影のない一角だった。背の高い植木が他の場所から死角になっている。

振り返った彼女に警戒した私を、彼女はにこりと微笑んで向かった。

「命を取るようなことは致しません。ただ、お話しを誰かに聞かれるのは避けたかったのです」

ご理解ください。と、頭を下げた彼女に私はいぶかしみつつも頷いた。

「ケレブターリ様にお仕えするキリアと申します。先日は失礼致しました。お話の内容はご想像の通りだと思います。エミリオ様に祭事へご出席していただきたいのです」

「……それは、この間本人が断っていたと思いますけど」

「ですが、マシロ様はエミリオ様がご自身で仰っていらしたように特別な方。そのような方に口添え頂ければエミリオ様のお気持ちも変わるのではありませんか？」

やっぱりな展開に私は、溜息を落とす。

「私はそんなことをエミルにいうつもりもないですし、私がいったところでエミルの気持ちが変わることはないと思います」

話がそれだけなら失礼します。と、締めくくって踵を返すと引き止められる。

私にはこれ以上話すこともないし、キリアさんに拘束されるのは嫌だ。

だから無視して戻ろうと思ったのに、ぎゅっと掴れた手首が悲鳴を上げる。

眉を寄せた私にキリアさんは「これはエミル様のためでもあるのです」と続ける。

私は乱暴に手を振って彼女の手を振り解くと「聞くだけですからっ!」といい放って掴れていた手首を擦る。

痣になりそうな気がする。

嫌だな、これじゃあ、何かあったことを隠せないよ。

「祭事やパレードは年に一度民衆への次代王の顔見せの場でもあります」

そりゃ、嫌がるだろうなあ。エミル。

真剣な面持ちのキリアさんから僅かに視線を逸らして、私は乾いた笑みを浮かべる。

「高がパレードですが、行く行く王位決定の場では民衆への知名度・信頼度などにも必要になってくるのです。私はセルシス様亡きあとエ

ミル様こそ次代王を引き継ぐべき逸材だと思っております。いえ、そうではなくてはなりません。深くお心を病んでおられるケレブ様のためにも」

……先に出たケレブⅡターリという人は、エミルの母親なのだろう。

エミルの話を聞く限り、エミル思いの母親とはいい難い。

私には苦い思いが浮かんでくるのに、キリアさんは気が付くことはない。この人はきつと、そのケレブさんという人に陶醉しているのだ。

ケレブさんのためになれば、継ぐのがセルシスさんだろうと、エミルだろうと、関係ない。

エミル個人なんてこの人には関係ないんだ。

心の中が酷く寒くなる。

「で、でも、王様を決めるにしてもエミルは継承権から遠いと聞いたし、それに継承順といっても素養が必要になるんでしょう？　だとしたら」

「仰るとおり今はまだエミル様は継承順位が遠く、素養もなりを潜めております。しかし、王子はあのセルシス様の弟君。王になる素養をお持ちでないはずはありません。王宮を出る際には封じられておりましたが、素養自体を消し去ることなど出来るわけがないのです」

ぐっと拳に力を込めるキリアさんに私は何ともいえない。

キリアさんの一人舞台に水も注せず私は溜息を吐く。そんな私に気が付いているのかどうか知らないが、キリアさんは「それに……」と続けて怪しく微笑むと

「無ければ種を飲めば良いのです」

「は？」

「幸いにも、貴方は闇猫とも懇意にされているようですし、貴方にはまだまだ利用できる価値がある。貴方は王家に必要な方です」

背筋がすうっと冷えた。

第四十話：盲目的に一途な思い（2）

—— ……この人オカシイ。

キリアさんの狂気に触れた気がして、私は数歩下がった。浮かんでくる恐怖に胸が苦しくなり鼓動が早くなる。種、種を飲めば良いって……。

「ば、馬鹿なことをいわないで、種って、種を飲むということは命を飲むのよ？ それに王の種となると、エミルに血の繋がった人の種を命を飲めというの？ ブラックに王家の人を手を掛けろというの？」

そのどちらも私は嫌だ。

本人が望んだのならまだしも、彼らはそれを望んでいない。

恐怖に震える私とは対照的に、キリアさんは私がどうしてそんなことをいうのか不思議だ、とでもいう風に瞬きする。

「先天的に存在しない素養ならば、種により得れば良い。というのは極当たり前のことです。それが国のために必要だというのなら尚のこと？ マシロ様は何を仰っていらっしゃるのですか？」

その様子に、私は恐怖が怒りに変わった。

エミルやブラックの気持ちを蔑ろにした発言を続けるキリアさんに、私は思わず手を振り上げた。

「酷いことをいわないで！」

と、振り下ろしたのにその手は簡単に止められて、今度は反対に手首を捻られる。鈍い痛みと悔しさに涙が浮かびそうで、私は、きゅっと口を引き結んだ。

「貴方にご理解いただけてなくても構いません。詰まらぬ話には仕舞いをつけまして、私の頼み聞いてくださいますか？」

「……っい、やよ！」

歯噛みしながら口にした私に、キリアさんは冷たく瞳を細める。

もともとが美人だから凄みがある。

もう直ぐ私はこの世界を去る身だけど、だからってこんな頼み聞きたくない。

反抗的にキリアさんを睨み付けた丁度そのとき、私の傍の植木ががさりっと音を立て揺れると、その間からアルファが「やっと見つけたー」と顔を覗かせた。

私は、ほうっと胸を撫で下ろし膝が下がる。

アルファは、一切不穏な空気などなかったことにするように、ずるりと私とキリアさんの間に入り私の肩を支えて「大丈夫？」と顔を覗き込んでくる。

大丈夫だと、微笑んだつもりだけど本当に掴れていた腕は痛むし、顔色だって多分良くないだろう。

「どこの使用人がマシロちゃんに用があるのかと思ったら、ターリ様付きじゃないですか？ その顔はどこかで見たことあるな？」

私に自分の腕を掴ませて、ゆっくりとキリアさんと対峙したアルファの言葉に、キリアさんは明らかに焦りを見せている。

「いえ、私はお嬢様がお迷いだったようですので」

白々しい嘘だ。

アルファはそんなキリアさんの台詞に「ふーん」と相槌を打ったあと、別にどうでも良いけど口にして空いた手を腰に掛ける。

「消えて？　消えてくれないなら僕が消してあげるけど？」

キリアさんの喉がぐくりとなったような気がする。

私には分からないが、キリアさんには、どちらが圧倒的に不利なのか分かるのだろう。キリアさんは失礼致しました。と、腰を折ってその場をあとにしてくれた。

全身から力が抜けてぐっとアルファの腕を掴んだ。

アルファは苦笑して私を支えてくれる。

そんな私をアルファは少し座りましょう。と、人気のあるところまで連れて出てくれた。

そして、庭園内にあるポーチの隅を陣取った。

はあ、とひと心地ついた気分だ。

それと同時にアルファはごめんなさい。と、謝罪した。

何に謝っているのか分からなくて首を傾げる私に、アルファは無事で良かった。と、微笑む。

「最初遠くて良く見えなくて、僕結構目は良いんですけど……。使用人の制服なのは分かったから、お茶にでも誘われたのかと思って許したんですけど、あの人ケレブ様付きですね」

いってアルファは眉をひそめる。

「あのケレブ様のことしか頭がないから、酷いことされちゃいましたよね？」

アルファの目から庇うように手首を隠していたのに、お見通しのようだ。

「戻ったらエル先生のところへ行きましょう？　僕はマシロちゃんに怪我をさせてばかりだ……僕に護れるものなんてないのかな？」

誰にいうでもなく、ポツリと続けたアルファの言葉は聞き取りづらく、私は問い返したけどアルファは重ねてはくれなかった。

アルファが思案気味に、ころころと指先で弄んでいた赤い石には見覚えがある。

「僕は今の生活に不満はないので、そう思うことは少ないですけど、今日みたいなことがあると種が欲しくなります」

「え？」

「僕には術師の素養も、薬師の素養もありませんからね。今日マシロちゃんを探すのに手間取ってしまったのは、ご丁寧にこの結界石が君たちの傍にあったから……だから気配が探れなかった……しらみつぶしに探して回るしかなくて」

悔しいです。と、少し赤黒くなってしまっている私の手首を擦ってくれるアルファにも切なくなる。

何かフォローをと思ったのに、大した言葉は浮かんでこなくて、次の言葉を搜している私にアルファはにこにこっと笑みを取り戻して立ち上がる。

「ま、僕は闇猫に頼みに行くくらいなら剣一本で十分ですけどね」

差し出してくれるアルファの手を掴んで私も立ち上がると、それにねと話を続けてくれる。

「僕に出来るかどうかは分からないけど……何も持たないマシロちゃんでも、エミルさんの気持ちは護ってあげられた。素養が全てのこの世界で、マシロちゃんはそれだけじゃないと声高にいつてるみたいです」

にこにこにこと笑顔を崩さないアルファに今度は私が眉を寄せる。褒められているのか、貶されているのか微妙すぎる台詞にも突っ込みたいが、何よりも。

「どこから聞いてたの？」

「んー、少しです。種を飲めば良いといった辺りから」

それならもっと早くに出てきてくれれば良いのに！ と、素直に不満を漏らした私にアルファは今度は声を上げて笑った。

「そうですねえ、訓練を積んでいるターリ様付き相手に手を上げるんですから。あはは、当たるわけない」

僕、吃驚しちゃいましたー。と、目じりに浮かぶ涙を拭いながら笑い続けるアルファを小突いた。こつんと脇腹に当たる。

もう一度小突く……ちゃんと当たる。

「くす、くすぐったいですから、やめてください」

じっと手を見る。
拳を作ってみる。
振り下ろしてみる。

がつんっ！

「いった！ 痛いですよっ！」

「当たった。あ、ごめん。でも、アルファだって凄い剣士なのにどうして？」

「はい？ どうしたんですか？」

あいたた……と、ワザとらしく小突いた頭を抑えたアルファは不思議そうに首を傾げる。前に同じようなことがあったとき、私の拳は当たらなかった。

「え？ ううん、なんでもない。帰ろうか」

私はもう一度だけ自分の手を見て、ふふっと笑いを零した。

なんの理由もなく手を上げてしまったのは悪かったから、もう一度だけ謝ったけど、心はほんわりと暖かい。

アルファに私はちゃんと歩み寄れている。

こんな小さなことが嬉しいのに……私はこの世界をあとにする。

第四十一話：幸せのある場所

「暇で仕方ないならコレでも磨いてろよ」

魔法石を持ち帰ったあと、エミルが本格的な作業に入るからとラウ先生の研究室を借りた。

生徒が自由に出来る研究室も幾つかあるらしいが、そこは信用出来ないし設備も整っていないからという話だった。当の持ち主のラウ先生もお願ひしたら特に行う内容を聞きもしないで「良いですよー」と鍵を渡してくれた。

ラウ先生は普段何の研究をしているのか知らないが、雑然としていた職員室とは対照的にきちんと整理整頓が出来ていて整然としていた。

その理由は直ぐに分かった。

「あちらなら外とは完全に隔離されていますから、今回の作業には適していると思われます」

ラウ先生の研究室にはもれなくシゼがついてきたのだ。多分、ここをこの状態に保っているのはシゼだろう。

エミルは直ぐに魔法石の加工に入り、アルファは退屈だからと素直に明言して外に出掛けた。カナイは研究室の一角を陣取って何か細かいことをやっている。

その様子を眺めていたので、その内の一つを渡され布を握らされた。

「……何コレ？」

「結界石」

「いや、それは分かるけど……何を彫ってるの？　ア……ノー、ル……シル・ガレン？」

軽く布で石を擦るとカナイがコツコツと彫っていた内容が浮かび上がる。

はつきりと読めないが文字のようで、私がたどたどしく読み上げるとカナイが「読めるのか？」と驚いたように手を止めた。

読めるけど意味が分からない。と、首を傾げた私を暫らく見詰めたカナイは勝手に納得したようで、そうだなと頷いた。

「それは古い文字だ。古い文字は術を施すのに良く用いられるんだ。それを結界石に直接掘り込んで術者が居なくても使えるようにしている。いくつもの術式を同時に発動させるのは疲れるからな、今は時間があるしこのくらい準備しといて損はない」

……にしても、この間まで二つ月の原書すら読めなかったのにな。と、締めくくると、

カナイにしては珍しくきちんと説明してくれた。

最後の呟きは少し悲しげに響く。

深い意味はないと思うけど、私の中の種が私本来の能力よりも強い力を発揮してくれているのだろう。そのあとは二人とも黙って作業を続行した。

綺麗に磨き上げられた石は室内の明かりを反射して煌く。

――…結局、昨夜は来なかった。

私は王宮であんな話を聞いたあとだったし、少しブラックの顔が見たかったのに珍しく顔を見せなかった。

まさか、一昨日の“さよなら”が本当だとは思いたくなくて、偶然……昨夜は来なかっただけだと思うことにしたのに。今夜も来なかったらどうしようか、と、言葉に表せない気持ちが渦巻き溜息となって外に吐き出される。

「……五回目」

「え？」

「疲れたのなら休憩を取ってはとうですか？」

ことり、と、机の上に湯気が昇るカップを載せてくれたのはシゼだ。

同じようにシゼの置いたカップを受け取ったカナイは、ちらりと私を見て軽く眉を寄せた。疲れるようなことはさせていないというアピールだったら嫌だな、と思ったがそうではないようだ。

「余りに、マシロさんの溜息が多いから、カナイさんの手が止まっていますよ？ 作業効率が悪すぎます」

「は？ ああ！ 違うだろ」

「違いますよ。さっきから、ずー……っと！ マシロさんのことばかり見てるじゃないですか。気になるなら聞けば良いのに」

では、僕は忙しいので。と、爆弾の導火線にだけ火をつけて、シゼはさっさとエミルが作業しているだろう部屋の奥へと消えていった。

いやーな沈黙が流れる。

ごほんつとカナイがわざとらしい咳払いのあと切り出した。

「昨日、会ったんだって？ キリアに」

どうして知っているのかと首を傾げた私にカナイは苦笑した。

「あのな、俺とアルファは同室なんだぞ？ お前の手首も気になったし、話くらい聞くだろう？」

いわれて反射的に私は手首を擦った。

昨日はエルリオン先生に包帯を巻かれてしまったが、今日はもう巻いていないし、その時だって分からないように制服の袖で隠していたのに。

うぬうつと、唸って眉を寄せた私に、カナイは呆れたように、でも柔らかく微笑んだ。

カナイは、最近そういう顔をするようになったなとしみじみ思う。最初なんて人を小馬鹿にした笑い方しか出来なかったくせに。

「ターリ様付きは妄信的な奴が多いから、執りあう必要ない」

「ターリ様ってエミルのお母さんだよね？ 本当にそんな風に考えてるのかな？」

ふうとまた溜息を落とした私にカナイは、んーつと唸った。

「これは予備知識だけだな？ ターリってのは、今の王室に五人居る。王が囲っている女性の地位に対する固有名詞みたいなものだ。ケレブルターリというのが、エミルの母親に当たる女性の名前だ。彼女ら全員が考えを同じくしているとは思わないが、ターリ様付き

つてのは基本的に付いているターリ様に忠実だ。考えを同じくしているか、もしくは暴走気味、かも知れない。でも、まあ……基本的にはターリ様の為にとって根っこは変わらないんだろうけどな？」

私の知識不足を補うように説明してくれたカナイは、そこまで話すとカップの中身に口をつけ一息吐く。

私もカップの中を覗き込み口付けた。

反射的にうっと息を呑む。

甘い。

ロシアンティーくらい甘い。シゼって甘党なんだな？

「兎に角、だ。王宮になんか係わる必要はない。常人に理解できる世界じゃないし、忘れろ」

「……忘れろって、忘れられないよ。この世界にはああいう考えの人も多いうってことだと思うし、それがきつと主流なんだよね。だからブラックは繁盛してるんだろうし」

「だとしてもお前には関係ないだろう？ この世界ではそれが普通だ。変える必要も変わる必要もない」

はつきりと拒絶され私は凹んだ。

カナイのいうことは最もだ。

私は明後日には元の世界に帰る。だからここでのことは私にはもう関係ない。関係する必要もない。ぎゅっとカップを握り締め俯いた私に、カナイが苛立たしげな声を上げた。

吃驚して顔を上げると盛大に溜息を吐く。

「そうじゃない！ 凹むな。お前は凹まなくて良い。くそっ。どこら辺が拙かったんだ？」

「カーナイさんはあ、マシロちゃんのことか心配なんですよねー。悩んで欲しくなくてー、元の世界で幸せになって欲しいだけですよねえ」

物凄く難しい顔をしていたカナイの頭に押し掛かって軽口を叩くのはアルファだ。

アルファはカナイの頭に押し掛かったまま「おやつ買って来ましたよ」とクリムラの箱を私の前で揺すった。

どけよっ！ と、乱暴に起き上がったカナイを軽く避けてアルファはころころと楽しそうに笑ってから机の上に箱を置く。

その様子に私も思わず笑いが零れた。笑いながら

—— …… 貴方の幸せはそこにあるんですね。

そんなブラックの台詞が脳裏を横切った。

第四十二話：最初で最後の超モテ期？！

お祭りを明日に控えて、授業は休み。

本日も同じくラウ先生の研究室を借り切っている。

そこで、カナイは昨日の作業を終了させ、次は小難しい構築式を書き連ね、アルファは退屈そうに剣の手入れをしていた。

「マシロ？　大丈夫？」

それ引っくり返すと大変だよ。と、私の手の中からエミルがビーカーを抜き取り机の上に載せると、両手にしていた分厚い皮手袋を外して隣に腰掛けた。

エミルとシゼは無菌室から出てこなかったのだけど、今やっと出てきたのだろう。

「休憩？　お茶淹れようか」

「あ。良いですよ。僕淹れます」

席を立った私に、アルファが声掛けて私は再び椅子に腰掛ける。

私もアルファ同様手持ち無沙汰なのだ。

昨夜も結局ブラックは姿を見せなかった。

毎日のように現れていたし、きつとあんなことをいつていても何事もなかったようにひょっこりと姿を見せると思っていた。だから、本当にもうあれが最後で会えないなんて思いもしなかった。

勝手にさよならして、勝手に終わったつもりなのだろうか？　私は、無意識のうちに紋章の刻まれている左胸をぐっと抑えていた。

終わってなんていない。

何も終わってなんていないのに、あいつはいつも勝手だ。

「マシロ、何か悩みがあればのるよ？ 直ぐに解決出来るものでないにしても、誰かに話をするだけでも違うかもしれないし」

「え？ あ、ああ。うん。有難う」

気遣わしげに声を掛けてくれるエミルに大丈夫だよ、と、答えて小さく溜息を落とす。

暇があるといあいつのことを考えてしまう。

私はもう帰ると決めたのだから、これで良いはずなのに、今更何を悩むことがあるのか正直自分のことなのに良く分からない。気分は果てしなく曇天だ。

「もう、明日だね？ 帰る日が近くなるから感傷的になってるだけだろうって、カナイといってたんだけど、少し違う？」

アルファが運んできてくれたカップを受け取りながらそういったエミルに、私は「え？」と顔を上げて少し離れていたカナイを見ると目が合ってぷいっと逸らされた。

あんな憎まれ口を叩いておきながら結局、心配、してくれてるんだ。そう思うと酷く申し訳ない気になる。

「……ごめん。私、またみんなに心配掛けてるんだね。う、うーん。感傷的……多分、それもあるんだと思うんだけど。何だろう、なんというか分からないんだけど。ブラックが、顔を見せないんだよ。ここ二日くらい、殆ど毎日のように来てたのに」

改めて口にすると何だか少し凹む。しかし、みんなの空気が驚いているような気がしたから私は慌てて付け加える。

「あ、でも最後に会ったときには、さよならっていったから、それで終わりのかも知れないんだけど。えと、その、多分、だから来ないんだと思うんだけど、これで良いんだと思うんだけど、変だよね」

あははと笑った私が両手で包み込んだカップの中身が揺れている。少し震えているみたいだ。
何か情けないな。

苦笑して一口カップに口をつけるとアルファに肩を掴まれた。

「気にすること無いですよ！ 闇猫のことなんてほっとけば良いんです。もう、借金の返済も目前だし、取り立てなくても回収出来るからきつと、もう……だ、だから、マシロちゃんは、ね。あんな奴のこと忘れて、そう、忘れてください。ああ、でも僕のこととは忘れないで下さい」

何かを必死に否定するように、アルファは言葉を繋ぎ、彼にしては珍しく作り物の笑顔を見せた。

「忘れないよ。アルファのこともエミルのこともカナイのこともシゼのこともブラックのことも、ここであつた全部のこと忘れないから大丈夫だよ？」

苦笑しつつそう繋いだ私に、アルファは泣きそうな顔になって「大丈夫じゃないよ」と零す。

「マシロちゃん、忘れて。闇猫のことは忘れた方が良く。だって、マシロちゃん、それじゃ、まるで……」

一生懸命何か伝えようと口を開いたが、アルファは最後まで口にすることなくエミルに遮られた。

エミルはいつもとあまり変わらない調子でお茶を口に運んで一息つくど、改めて、にっこりと私の名前を呼ぶ。私がエミルと目を合わせるとエミルは席を立て、ちよつと待つように私にいうと傍に居たシゼを振り返る。

「少し出るから、溶液の温度を保っていてくれるかな？ シゼなら大丈夫だよね？」

「は、はい！ 出来ます！」

私には分からないが、多分重要なことを任されたのだろう。

シゼは嬉しそうに頷いて、さっき出てきたばかりの無菌室へと戻っていった。ぱたんっとな扉が閉まるのを見送ってエミルはアルファとカナイにも作業を続けるようにいうと私の腕を引いて研究室を出た。

「エミル？」

そのまま付いて出たのは良いけれど、エミルの意図が良く分からない。呼び掛けると、繋いでいた手にきゅつと力が籠った。

「マシロは、名前の通り真っ白でこの世界では何も持たないから、

全てを持っているといわれる闇猫に惹かれるのかな？」

「え？」

「アルファの言葉を借りるなら……マシロは恋をしているみたいだ」

エミルの言葉に体温がかつと上がった気がした。

私が恋を……ブラックと同じような気持ちを自分の中で持て余している？ そんなことないと口に仕掛けて、それが声になって出る前に「分かるよ。分かるんだ」とエミルに遮られる。

エミルは私の少し前を歩きながら、こちらを見ることなく話を続ける。

「僕は君を見ていたから。僕だけじゃなくてカナイもアルファも、みんな、君を見ていたから、あの二人なんて君が来るまで他人に興味なんて全くなかったんだよ、それなのに不思議だよね」

なんだかエミルの様子がおかしいような気がして、私はその顔を覗き込もうと声を掛けたが足を止める様子はなかった。

仕方なく私は少し足を速めた。

そして殆ど無理矢理顔を覗き込んだ私に気が付いたエミルは、ちらりと私を見てにこりと微笑む。そのとき、ちくり……と、心が痛んだような気がしたのは何故だろう。

「マシロは僕が帰らないで欲しいといったときのこと覚えてる」

その言葉にぼつと頬が高潮したのが分かる。

気が付いたエミルはくすりと微笑む。忘れるわけない。薬の影響とはいえあんなに近くで語りかけられキスをされたのだ。なるべく

考えないようにしているけど、でも、改めて問われると今でもドキドキする。

「わ、私は、覚えているけど、エミルはあまり覚えていないんだよね？ その、媚薬系の薬のせいで」

おどおどと問い掛けた私にエミルはふふっと悪戯っぽい笑いを零す。

「ううん。覚えているよ。だってあれは僕の本音だから。帰って欲しくないと思っているのも、君にキスをしたと思ったのも」

全部本当のこと。と重ねてやっと足を止めると私を見詰めた。

「本当に、自分の意思とは関係なく言葉を紡がせてしまうような強い薬はルール違反だよ。だからあれはギリギリ。自分の気持ちに蓋が出来なくなる薬イングリーマ、心の端という意味だけど真実薬といわれることもある。だから本当」

足を止めた場所は寮の裏口だった。

外気に触れたせいかな、ほんの少しエミルの頬が朱を帯びているように見える。

こうして見るとやっぱりエミルは綺麗だな。

刹那、彼に見惚れているとエミルは困ったように微笑んで、いつものように私の頭を撫でる。

「そんな風に見詰められると、嬉しくて誤解しそうになるよ。でも、僕は君が好きだから、マシロの気持ちには敏感に気がついてしまうんだ。本当は気がつかない振りをして、そのまま全て有耶無耶で夢

のような曖昧さのままで、居れば良いと思ったんだけど、マシロがとても苦しそうだからもう目は逸らしていられないよね」

あの二人も同じようなものだと思うけど、と、くすくす笑うエミルは普段と変わらないような気もしたし、少し緊張しているようにも感じた。

多分、きっと私は間違いなく告白されているのだと思うけど、私には何か答えた方が良いのだろうか？　どうして良いか分からなくて、エミルの瞳から逃げることも出来なくて、ただ赤い顔でおろおろしてしまう。

そのとき、偶然か必然か裏通りだというのに入ってきた馬車をエミルは片手で止めた。

馬車は厩舎に戻るところだったらしい、エミルの言葉に驚いた御者が声を裏返しているがエミルは変わらず穏やかな調子で「彼女は大丈夫ですからお願いします」と重ねていた。

首を傾げた私に戻ってきたエミルは馬車の扉を開けた。

「明日、午後のパレードのあと僕らはここを出るつもり。そして夜のパレードが始まる頃合いにギルドの依頼を遂行するよ。それまでに、君が望むなら帰っておいで」

きょとんと、する私にエミルは私の手を引いてステップに足を掛けさせると話を続ける。

「機を逃しても構わない。でも、逃さなくても構わない。君が望むようにすると良い」

遅疑逡巡する私にエミルは微笑むと「僕一人がこんなことをいう

のはちよつとズルイと思うけど」そう前置いて、エミルより少し高い位置になっていた私の腕をぐいっと引く。

「大好きだよ、マシロ」

鼻先が触れる距離で囁いて唇が重なる。

それは直ぐに、ちゅつと可愛らしい音を立てて離れたけれど、私は驚きに目の前がちかちかしたような気がする。

真っ赤になって口元を覆う私に、エミルもほんの少しだけ頬を赤らめて「僕はズルイから」と肩を竦める。

「じゃあ、お願いします」

何もいえない私に早く乗るように勧めて扉を閉めた。

ゆっくりと動き始める景色からエミルの姿は直ぐに消えてしまった。私が馬車の中でお行儀悪く膝を抱えると御者のおじさんが「本当に良いのかい？」と心配してくれる。

「辺境の町なんて行っても、種屋くらいしかないよ。お嬢さん」

「……はい。私はその種屋に用があるんです」

お願いします。と、締めくくって私は膝に額を擦り付けてほんの少しだけ涙を流した。

第四十三話：涙が女の武器って古い？

辺境の町に着くともうお日様はその姿を消していて、名残のように空を赤く染めているだけだった。

そういえば、ここには初めて落ちてきたとき以来来ていなかった。ブラックはどうしてこんな所に居を構えているんだろう？ 店をするならやはり王都に開く方が、利用するものにも便利だと思うし手間がない。

ここだと往復するだけで一日仕事だ。

そんなことをぼんやりと考えながら歩いていたら、懐かしくも感じる種屋に到着した。

門の鍵は開いていたし、扉をノックしても返事はなかったが静かに開いた。

薄暗いホールに足を踏み入れると初めて来たときと同じように、ふっと明るくなる。

屋敷に拒絶されては居ないようで胸を撫で下ろす。

中央階段に足を掛ければ左右のランプも灯るし、屋敷の中が柔らかな明かりに包まれていく様子は緊張していた私の心も暖めてくれた。

ここで私は自分が泊まった客室と、ブラックの書斎しか知らない。だからまず扉を叩くのはここしかなかった。

——：コンコン

ブラックの書斎……ゆっくりと深呼吸をしてからドアを叩いた。
返事はない。

でも勇気を出してノブに手を掛けると鍵は掛かっていなかった。
ドアを開けると薄暗い室内はあの日と全く変わっていないかった。

さわさわと頬を撫でていく風に瞳を細めて、後ろ手にドアを閉めると、ふっと風は吹き抜けなくなる。

開けっ放しの窓辺に背中を預けて緩く腕を組み、ぼんやりと外を眺めていた姿はこちらを振り返ることもなく私の呼びかけに答える。

「こんな辺境までどうしたんです。忘れ物ですか？」

こつこつと私が傍まで歩み寄ってもこちらを見ようとしなない態度に、心がきゅ……っと苦しくなる。

—— ……忘れ物……か、そうなのかな？

ブラックの隣に立って彼が見ていた空を見上げる。

ここからは月が良く見える。

ちらと隣を見ても視線が絡むことはない。

それがあまりにも苦しくて私は、ブラックに向き合うと腕を伸ばし無理矢理自分の方へと首を捻った。

「あいたた……ちょ、マシロ、そんな無理矢理」

「ブラックが勝手に黄昏て格好つけてるからでしょ！」

思わず逆ギレ。

ピコピコと動く愛らしい耳につい目を奪われ和みそうになる。そ

れを何とか我慢して、私は、こほんっと咳払いして堪えた。

「ああ、忘れ物、でしたよね。着ていた物ならそのまま客室に保管してありますから」

「え？ ああ、そうか……」

いわれた言葉に思わず納得して私は、ブラックから手を離すと自分の服を見下ろした。そういえば物凄く馴染んでしまっていて気にしていなかったけど、これは図書館の制服だ。

私の学校の制服じゃない。

「……て、そうじゃないの！」

「ええ、違うんですか？」

どうしてこう、私にはシリアス感が足りないのだろう。

馬車の中でいろんなことを山ほど考えていたというのに全部吹っ飛んだ。ブラックは困ったように眉を寄せて耳と尻尾を項垂れている。

—— ……きつと、これだ。これが私の緊張感を削ぐんだ。

思わず直ぐに手の届く尻尾を掴んだ私にブラックは心底困ったような顔をして「本当に何をしに来たんですか？」と零す。

ホントにねえ……私何してんだろう？

するりと手の中から尻尾が抜けていくとちよっぴり名残惜しい。

「ブラックが勝手にさよならして、勝手に会いに来なくなるから、

私から来たんでしょ」

「……あ、ああ。すみません。契約の証を取り除いて差し上げるのを忘れていましたね。そのうち消えるものですが、やはり目の前で消えた方が貴方も安心ですよね」

借金の返済への目処はたったといっても、まだ返済が完了したわけではない。私は無意識に左胸を押さえていた。え？ と間の抜けた声を溢していた。

そんな私にブラックは緩く笑みを溢すと「構いませんよ」と口にする。

「証があれば私は貴方を感じていられたので、そうしてただけです。世界が変わればそれともなくなるでしょう」

……私を感じていたって……やっぱり変質者……。

そう思わなくもない。思わなくもないけれど……きっと私もどこかで同じことを思っていた部分があるのかもしれない。ブラックを攻める気にはならない。それよりも、

「どうして、構わないのにそんなに悲しそうな顔をするの？」

私の質問にブラックは刹那不思議そうな瞳をしたが、直ぐにそれは翳って自嘲的な笑みに変わった。そして私がこの部屋を訪れたときと同じように、煌々と照り始めた月を見上げる。

「きっとマシロがそう思うのなら、私はそういう顔をしているんでしょうね」

「――……」

「それは、それは、きっと何もないからですよ。この世界で全てを持つといわれる私は、実は愛した女性一人留めておくことも出来な

い無能です。全てを持つということは何も持っていないに等しく、何も持たずにこの世界に落ちてきた貴方の方が多くを手にしている。酔狂な話ですがそれが事実です」

私は凄く優柔不断なんだろうなと思う。

帰ると宣言しておきながら、こうして月を焦がれるように見詰めているブラックを見ると、その決意すら揺らいでしまう。

でも私は捨てられない。

これからよりもこれまでが捨てられない。

—— ……だから私はここに残れない……。

「ブラック……」

私はもう一度、同じように彼の首に手を掛けると今度は抵抗することなくブラックは私を見た。

美しい瞳の色が月光に揺らいでキラキラとしている。とても秀麗だと、そう思う。

私はそのまま彼を引き寄せつま先で立つと、そっと唇を重ねた。

「好きだよ。私も貴方が好きだと思う」

囁いてもう一度重ねる。

無理な体勢でよろけそうになる私の身体を支えてくれたブラックは、少し震えていた。先ほどまで私を捕らえて離さなかった瞳は不安げに揺れている。

ごくりとブラックの喉が上下して熱い吐息とともに言葉を吐き出す。

「ズルイです。貴方はズルイ……そうやって私を捕らえて離さないくせに、貴方は帰るのでしょうか？ 決してここに残るとはいってくれない」

本当にズルイ人です。と、重ねたブラックの言葉は私の腸を抉るように苦しめる。

心が痛くて身体中が軋むようで……苦しい。

ぽちっと手の上に雫が落ちて、私は泣いてしまっているのかと慌てて顔を拭ったけど、それは私じゃなくて……。

「あ……」

私から片手を離して不思議そうに顔を拭っているブラックだ。彼がぱちぱちと瞬きをする度に、はらはらと瞳から雫が溢れて落ちる。

「すみません。えっと、大丈夫ですよ」

ごしごしと顔を拭う姿は猫っぽい。思わず、ふふっと笑みが零れてしまった。

「わ、笑わないで下さい。つく、おかしいな、止まらない」
「ブラック」

酷い奴だと思ったし、意地悪で、変質者で、絶対に私から歩み寄ることはないと思っていた。

でも、不思議と……今は、子どもっぽいところのある人だと思う。可愛げのある人だと思う。

人一倍寂しがりで、人恋しいと思っていて、でも臆病で……。

今ならはっきりと分かる、私はこの人が好きだ。

「大好き」

涙に戸惑っているブラックをぐいっと引き寄せて口付ける。

彼の首に腕を回して角度を変えて何度も……上手く出来ているか分からないけど、他に伝える手段が思いつかなくて……だから、何度も……。

「…っ、マシ、ロ……」

驚きにも似た声で私を呼ぶと、ブラックは私の腰を強く引き……拙い私の口付けに応えるように唇を重ね舌が口内に割り入ってくる。最初に感じたざらりとした感触が、拒む気持ちがないとより強く官能的に身体に響く。

噛み付くような強い口付けに私の頭は真っ白になり何も考えられなくなる。

「あ…っう……」

膝に力が入らなくなっって自分の力で立っているというよりは、ブラックに縋り付いているような感じた。

ぐっと押されてしまうとバランスを崩し倒れてしまいそうになる。それを何とか我慢していたのに、ブラックは刹那私と視線を絡め、ふっと笑みを零すと私を抱き締めたまま私の足を弾いた。

くっとな襲ってくるだろう床との直撃を覚悟して目を閉じると、身

体はふわりと柔らかいものに包まれる。

「え？」

ここはどこだろうと目を瞬かせる。

窓はさっきと同じ位置にあるし、月の明かりが部屋の中を照らしている。

でも、見える月の位置が……私が倒れたせいかもしれない。少しずれてしまっている気がする。

「私は次に月に妬かなくていいませんか？　ねえ、マシロ、今一時だけは私を、私だけを見てくれませんか？」

そつと頬に掛かっていた私の髪を綺麗な指先で梳いて、覗いた項に舌を這わせる。

んつと声を殺した私にブラックは誰も聞き咎めませんよ？　と苦笑して尚も口付けを繰り返す。

「……ん、ねえ、ここ……」

「ここは私の寝室です。私以外の人が入るのは初めてですよ」

ちゅつと可愛らしく口付けて微笑むと、帰ってきた答えにドキドキする。

寝室ということは、ここはベッドの上で、ということはやっぱり……急に襲ってきた現実に私はちよっぴりパニックになる。

—— ……怖くない怖くない怖くない

ドキドキを抑えるためのおまじないのように頭の中で繰り返す。

「怖い、ですか？」

「ふへっ？　そ、そんなこと、ない、よ？」

声が裏返った。

完全に肯定している。

私は恥ずかしさと、情けなさに、これ以上赤くなれないだろうというほど真っ赤になった。ブラックはそんな私に柔らかく瞳を細めて、私の上に覆い被さったまま頬を撫でる。

「大丈夫、なんていったら嘘になるので、私はいいませんが」

いって、お願いだから。

大丈夫だとか痛くないとか怖くないとかいって。

私の心の突っ込みはスルーなのか、ブラックはにこにことして私の頬にキスをしたり頬を摺り寄せたりする。

その所作はとても愛らしい感じだけど、今対峙しているのは明らかに獣だ。

でも、私が好きになった獣で、その彼が望むならと思わなくもないけど

「優しくすることもきつと出来ないと思います」

そんなことをいわれると逃げ出したくなる。

じたばたと暴れた私にブラックは耳元でふふっと笑いを零すと、耳殻をつうつと舐め上げそのまま熱い吐息とともに耳の中へ舌を差

し入れる。

「ひっ」

ぞくぞくつと身体が震え逃げ出そうとする私の身体を、ブラックは絶対に離さない！　というようにぎゅっと抱き締めて執拗に口付ける。

「や、やめ……っ、あ……」

心臓がバクバクと五月蠅く鳴って身体の奥がじんつと熱を持つ。

「駄目、です。やめてあげません。だって、貴方は私に既に浮気宣言をしているんですよ？　元の世界に戻ったら、私の知らない誰かと恋をするんですよね？　私はそれを拒むすべもやめさせるすべもないんです。だとしたら、今を絶対に忘れられないように貴方に刻むしかないでしょう？　人は良い思い出よりも嫌な思い出の方が記憶により強く残るんですよ」

しゅるり……と胸のリボンが解かれて、ぷちぷちと慣れた手つきでボタンが外される。

するり、と、肌蹴た肌に触れた手が私の体温より冷たくてひやりと身体が緊張する。

「好きです。愛しています。貴方に傷を付けたら私を嫌いますか？」

こめかみ辺りに擦り寄ってきてそんなことを、そんな不安そうに囁かれたらノーとはいえない。

嫌わない、嫌えない。

きっと彼以上に私を必要としてくれる人なんてこの先居ないと思うから……。

私の答えを待つように覗き込んでくる瞳に映る私は自然と微笑んでいた。

「好きだよ。大好き……」

きっとこの世界のどこを探しても、この人がこんなに可愛らしくて優しい表情が出来ると知るのは私だけだろう。

私の全てが彼のものであるように……彼の全てが私のものだ。

「忘れられない夜にして差し上げます」

重なる口付けに身を委ね、私はとても満たされていた。

第四十三話：涙が女の武器って古い？（後書き）

※この続きは裏（R指定）になります。

[http://www1.plala.or.jp/ssha
ppy/been/0001.html](http://www1.plala.or.jp/ssha
ppy/been/0001.html)

（個人サイトHappyrecipe＊に飛びます）

○○○の部分はパスワードに置き換えてアクセスしてください。

※パス請求にしましてはこちらを参考ください。

拍手お礼ブログ；ちよこつと広場：[http://syouse
tunaru.seesaa.net/article/184
610087.html](http://syouse
tunaru.seesaa.net/article/184
610087.html)

第四十四話：二人を繋いでいた証

お日様が天辺を通り過ぎた頃、私はベッドから抜け出しブラックに勧められるままお湯を借りた。

ぽちゃん……っと天井から雫が落ちてきて乳白色のお湯を弾く。
寮にはシャワーしかないから、ちゃんとしたお風呂に入ったのは
凄く久しぶりで、凄く気持ち良い。日本人だもん。お風呂は好きだ
よね。ゆったりと足を伸ばし長く息を吐く。

「……あったかい」

何だか頭がぼんやりとする。

甘かった。

私の考えは甘かった。

確かに優しくするとはいわれなかったけど、傷付けるって最初から
明言されていたけど。

悪い思い出にはなりようがないけれど、確かに忘れられない夜に
はなっただと思ひ、ます。はい。

脳裏に蘇った記憶に勝手に赤面して私が大きく頭を振ったところ
で「マシロ、入りますよ」ともう手の届く距離でブラックが告げる。
私は、入ってからいわないでよ。と、眉を寄せたけれど、何の意
味もないだろう。

口ではすみません、と、微笑むが悪いなんて微塵も思っていないな
いだろう。ブラックのこういうところは最初からだ。

傍で、ずっと膝を折って私の濡れた髪を掬って口付けるとにっこりと微笑む。

なんだろうこの甘い感じ。

私は凄く恥ずかしくなっていくと身体を沈める。

「そういえば、聞き忘れていたのですが、どなたがここに行くようにマシロに勧めたのですか？」

私のくるとまとめてあげていた髪をといて、湯船に潜らせていたブラックは、不意にそう口を開く。私は沈めていた顔を上げて首を傾げる。

「マシロのことですから、分かりますよ。恐らく自分の意思でここまで来て頂けるとは、幾ら常春な私の頭でも考えません。誰かが行くように勧めたのでしょうか？」

「……む……そう、いわれれば、確かに……エミルだけだ」

凶星を付かれて何だか面白くない。

面白くなく思った私の気持ちを知ってか知らずかブラックは、やっぱりという顔で苦笑した。

「マシロは、人を疑ったり利用したりということを考えない人だから、分からないかもしれないけど、明らかに私はダシに使われていますよね。この場合責められたものではありませんけど……」

きょとんつとした顔をしていたのだろう。ブラックは困ったように微笑んで話を続ける。

「無駄に終わったと思いますが、可能性はゼロではなかった」

「え？」

「王子は、私が貴方を引き止められるのではないかと、思ったのだと思いますよ。貴方がこの世界に残りさえしてくれれば、時間は幾らでもあるし機会は幾らでもある」

人の心は移ろうものですからね。と、締めくくったブラックの言葉に私は急に別れ際のエミルを思い出し顔が熱くなった。

顔が赤いですよ？ と、指摘したブラックに、それはお風呂のせいにして口先だけで誤魔化した。そんなものが通用しない相手だということくらい分かっていたけれど。

ブラックは案の定、訳知り顔で苦笑して「なるほど」と頷く。

「のぼせてはあとが辛いですよね、上がったほうが良いですよ」

と、続けて濡れるのも気にせずに湯船に両腕を突っ込む。そして、有無をいわずに私を引き上げ抱き締める。

「ちよっ！ 何やってんの！ 濡れちゃうよ？」

「本当は私も一緒に入りたいくらいですけど、自制心がありませんからね。服くらい濡れても何の問題ありませんよ」

それに貴方が何も着ていないのは都合良いです。と微笑まれ、心臓がどくりと波打ち、顔が益々赤くなりくらくなる。

「害はありませんが一応約束です」

そっと囁き私の首筋にキスをして、頬を摺り寄せてくる。くすぐったくも気持ち良くて瞼を落とせば、ブラックの右手の指がすると肩から滑り降り契約の証で止まった。

「これは種屋の徽章なんです。終わりのない蔦だなんて安直だと思いませんか？」

顔を上げて空いた手で私の頬を包むと、穏やかにそう紡いで……私の答えなど必要ないように唇を塞いでしまう。

僅かに開いた唇からするりと舌を滑り込ませ、遠慮なく口内を犯していく。

蕩けるような口付けに、私の頭は直ぐに何も考えられなくなる。背伸びをしてふらつく身体を彼で支えて必死に応える。同じように軽く吸って、軽く食む。互いを味わうように繰り返される口付けは、それだけで身体中に熱を孕ませ、やっと落ち着いたはずのお腹の奥あたりを疼かせる。

暫らく、やわやわと口付けにあわせて私の身体を愛撫していた手のひらは、するすると私のわき腹を撫で元の徽章の位置に戻ると、こちんつと弾く。それに微かに、ちくり……と、刺すような痛みを受け、私は反射的に身体を強張らせた。

「大丈夫です。契約途中なので、多少、異物感はあるかもしれませんが、もう痛くないですから……」

唇が触れる距離で囁かれ、私は了承するように再び瞼を落とすとブラックに口付ける。

「少し、少しだけ嫌な感じがすると思いますが、我慢してくださいね」

大丈夫、痛くはないです。と続けられ、身構えた。すると、その衝撃は直ぐにやってきて

「……ふ、あ…あぁっ！」

ブラックは、ずるっと私の身体から徽章を軽く摘み引き出すと、四肢の先まで行き渡っていた根を一息に引き抜かれるような感覚が全身を貫いて……私は悲鳴のような、それとはもっと違うような声を上げ、ブラックにしがみ付いた。

はたはたとする心臓を押さえるように、大きく呼吸をして瞳を開くと、彼の右手には緑色の種が乗っていた。

そして、次の瞬間一枚の紙に戻ると、今度はぼっと青い炎を上げて塵になった。

「これでおしまい」

私たちを形で繋ぐものは何一つなくなりました。と、微笑むブラックはとても切なそうな顔をしていた。

また泣いてしまうのではないかと頬を撫でると、困ったように微笑んで、心配しなくてもいつも通りですよ。と、告げる。そして、頬に触れていた私の手に手を重ねて、引き下ろしてくると、ぺろり……と、私の手のひらを舐める。

「支度を整えましょうか」

ふわり、と、どこから出したのか、柔らかなタオルを肩から羽織らせて私を包み込んだ。

まだよたよたしている私をそっと抱き上げると、ブラックは私が初めてここで泊まった客室へと運んでくれる。

第四十五話…かぐや姫は迷わない

清潔そうで品のある客室はあの日と変わらない。

天蓋付きのベッドのカーテンの奥に、私が着ていた制服がおろしたてのように皺一つなく並べられている。

その傍で私を下ろすと、肩に掛かっていたタオルで丁寧に水滴を拭ってくれる。

時折、口付けられたり撫でられたりするとくすぐったくて身を竦めてしまう。物凄く羞恥を感じて身体が火照るのに嫌だと拒絶は出来ない。

—— ……これが、最後だから。

私は今夜帰る。

元の世界に……。

きつと、とても心配している家族の下に……。

友達はずいぶんおりの生活に戻っているだろうけど、私が戻ってもお座なりな態度で心配し迎え入れてくれるだろう。

「ねえ、マシロ」

するりと襟にリボンを通し上手に結んでくれながら声を掛けられ、私は思考の海から上がった。

「以前私は二つ月の話は悲恋だといったマシロの见解を、短絡的だと言いましたよね」

「え……うん。覚えてるよ。少年の望みは叶ったから別に不幸では

ないし悲恋とはいえないって、確か、ブラックがいったんだよね」

私の言葉にブラックはこくと頷き、きゅっとリボンの形を整えてくれると、化粧台の前に促して腰掛けさせる。

鏡に映る私はあの頃と変わらない。

友達と毎日通った学校の制服姿。

特に代わり映えない毎日に抵抗すら感じなくなっていた平凡な私。

ブラックが濡れた髪を丁寧に拭いてくれると不思議と直ぐに乾いてしまう。便利だ。

「やはりあれは悲恋ですね。青い月の少年は、確かに少女を見詰めているだけで、満たされていたでしょうけれど……それすら取り上げられ永遠に沿うことも叶わない。傍にあるのに手が届かない、唯、その手の届かない世界で、少女が罰を受けていることだけは知っている。自分にはどうすることも出来ない、白い月の少女が与えてくれた、淡く、優しい恋心だけでは、到底……その事実を上塗りできるほど少年も自分本位ではいられないでしょう」

それこそ、長く永遠に感じる苦痛だったでしょうね。と、締めくくったブラックの表情は鏡でも確認出来なくて分からなかったが、以前のブラックからは絶対に聞くことの出来ない思いだと思う。

他人の不幸を思い、自分が苦しくなることがあるだなんて、考えることもなかったはずだ。

ブラックはとても柔らかくなったと思う。だから褒めてあげたいような、嬉しい気持ちになったというのに

「これ、壊しても良いですか」
「やめて」

カナイから貰った魔法石の髪留めを片手にそういったブラックを
即座に止める。

前言撤回。
相変わらずだ。

「では、やめます。面白くないですが、貴方にとっても良く似合うと
思いますから」

少々不貞腐れた顔をしているものの、梳かしつけてくれていた髪
にそっと戻して鏡越しの私にそういつて頭に口付ける。くすぐった
くて肩を竦めた私をブラックは後ろからぎゅっと抱き締めた。

「もう、一度だけ、聞かせてください」

少し声が震えている。
ブラックにそうさせているのは私だ。
それだけで私の心は重く沈み冷たく凍りそうになる。

「マシロ……白い月へ帰ってしまうのですか？」

前で組まれたブラックの腕に手を掛けてそっと撫でる。

—— ……綺麗な手。

人を傷付けたり平気でしているようにも武や術、智、その全てに
秀でているとは正直想像出来ないくらい……私にとって愛らしい存

在だ。

「私が帰るのは、月じゃないよ」

苦笑する私にブラックは首を振る。

「私を青い月の者だと語るものが居る以上、貴方は白い月の少女です。私に美しいときを見せ、そして去っていく……貴方に何の咎もなければ良い。そう、思いますが……ここに残っていただければもっと良いと思います。ここのなら、私は貴方の望みの全て叶えて差し上げられます」

なんとかブラックの顔を見ようと身体を振ると、ブラックは顔を上げて腕をほんの少し緩めると私と目を合わせてくれる。

また、泣きそうな顔をしている。

だから、きっと私はこんなに落ち着いているのだろう。そつと手を伸ばして頭を撫でると心地良さそうに耳が垂れる。

「ごめんね……ブラック」

「……謝るくらいならここに居てください」

そういったブラックに私は言葉が続かない。

もう私に残されたブラックが喜ぶ台詞は一つだけだけど、私はそれをいうことは出来ない。

私は帰らないと……。

困り果ててじわりと目頭が熱くなってくると、ブラックは、すっ

と身体を引いて顔を上げ「すみません」と短く詫びて私の手を引くと立ち上がらせる。

「私は王都の入り口までしか送りませんが、構いませんよね？」
「え……うん」

瞳を瞬かせて頷いた私にブラックはにこやかに「良かった」と続ける。ズキンっと胸が痛む。

「ギリギリまで貴方を見送るなんて拷問、私には耐えられませんから」

行きましょう。と、手を引く。

引かれた腕が痛む。

胸がズキンっとまた軋む。

痛い。苦しい。

別れが苦しくなるのくらい分かった。
でも、コレは想像以上に凄く、苦しい。

強がる彼の背が愛しい。

直ぐにでも抱きついてここに残るといつてあげたい。

そうすればきっと彼は、また嬉しくて、泣いてくれるかもしれない。
い。

顔を伏せぎゅぎゅぎゅっと目を固く瞑る。

駄目だ。駄目だ、駄目だ

……私は帰る……帰らなくちゃいけない。

私の世界はここじゃない……ここではない、全く違う別の世界分かってる、分かってるのに、

……苦し、い。

足を進められない私にブラックが振り返る。

「苦しい、よ」

ぎゅうううっと胸元を握り締めて口にする私の顔を覗き込み、大丈夫ですか？ と、心配そうに眉を寄せる。

落ち着いているつもりだった、泣かないつもりだった、だって置いていくのは私で置いていかれるのはブラックで、そして、そう決めたのは私だから、私が泣くことは許されないと思っていたから。

「身体、まだ辛いですか？ 何か薬を用意しましょうか？」

私の痛みの理由なんて、私の勝手だから分かるはずもない。

—— ……でも、涙が止まらない。

「好きだよ。大好きだよ。でも、私、これからの方が長いことくらい分かるのに、どうしてもこれまでが捨てられない。私が馬鹿なのは分かっている。でも、捨てられない。貴方のことも、みんなのことも、とてもとても大切なのに……どうして、残るといえないんだろう。残ると決められないんだろう」

息を詰めながら紡ぐ私の言葉をブラックは黙って聞いてくれた。た。

そして、そっと私を抱き寄せると片手で涙を拭い目じりに口付け

る。

「以前の私なら……こんなに苦しむ貴方を見るくらいなら消して差し上げたと思います。もう、苦しむことのないように。思い悩むことのないように……ですが」

すみません。と、続けて、鼻の頭に頬に唇に順番に口付けて優しく瞳を細める。

「私は弱くなったのか、貴方だけはやはり消せないと思うんです。そして、無理に貴方をこちらに閉じ込めておくことも出来ない……不甲斐なくて申し訳ありません」

ブラックは何も悪くない。

悪くないのに、優しく私を宥めるように謝罪する。

私が悪いのは明らかなのに、それを考えなくて良いように悪役を務めてくれる。

「マシロ……私の本当の名はルインシルⅡミアといいます。青い月の玉という意味で私には過ぎた名だと思い使ったことはありません」
「――……」

ふと話を始めたブラックに、何をいうのだろうと、きょとんと不思議そうな目を向けた。涙がまだ瞳には掛かっていて、ゆらりとブラックの輪郭が揺れる。

そんな私の頬を撫で「ねえ、マシロ」と甘く呼びかける。

「使われない名もあってないようなもの。この世界も貴方にとって唯の夢幻。貴方が何度も重ねたようにこれは夢、とても長い夢を貴方は見ていて今それから覚めようとしているんです。明日、目を覚

ました先が現実」

「でも」

「貴方が苦しむことはない。大丈夫……ちゃんと、目が覚めます」

ちゅつと目元に寄せられた唇が、目尻に溜まった涙を吸い取っていく。

そして、私にとって有り得ない塊でしかなかった猫は私に囁く。

—— ……そう、これは夢。とてもとても長い夢です……

第四十六話：お祭りのあとは

王都は凄い賑わいだった。

街全体が湧き上がり息づいている。

あとにしたときと同じように裏口に回ると、三人がぼんやりと待ち呆けていた。

ただいま！ と駆け寄ると、三人は驚いて顔を見合わせたあと、みんながみんなして仕方ないという顔で「お帰り」と迎えてくれた。

行われるパレードに後ろ髪引かれたけれど、きつとエミルは見たくないだろうし、そんな余裕もない。私たちはいつも図書館で居るときと同じように、わいわいと話をしながら……出来る限りの裏道を通り王宮へ出た。

門前にも大道芸人が持ち前の腕を披露していたり、露天が並んでいたりと賑わっている。

「あ、マシロちゃん。綿飴買って来ます。食べますよね」

ひよい、と、人ごみに飛び込んだアルファを止める暇はない。

顔を見合わせて、直ぐ追いつくだろう。と、足を進めると驚くほど早く戻ってきた。

「はい、マシロちゃん」

「お前、普通人数分買って来るだろ！」

「嫌ですよー。カナイさん基本的にぶつぶついうじゃないですかー」

出来立てなのかほんわり温かくふわふわな綿飴を一つ握らせてく

れて、アルファの手にも一つ。それに食いついたカナイとアルファはかなり揉めている。

ここに来てまで食べ物で揉めなくても、と思い、私の分を上げるからと声掛けしようとしたら、ひよい、と、横から食べられた。

「マシロのは僕が半分貰うよ。あれはほっといたら良いよ。仲良いんだから」

ぱくりと一口頬張ったあと、一つまみ千切って口に放り込んだエミルは先に走っていった二人を見送る。

なんかこの状態で二人きりは、変に意識しちゃうから嫌だったんだけど仕方ない。

「マシロ、もうちょっとこっちに寄って」

小さく嘆息したところで、ぐいっと肩を引き寄せられ心臓が跳ねる。

えっ！ と、顔を赤くして見上げると綿飴を持った手ごと、顔の位置まで持ち上げるとエミルは顔を寄せてきた。

恥ずかしすぎて暴れそうになる私に、しー……と小さく促して小声で話す。

「今日は、一部王城も一般公開されているんだ。だから表から堂々と入れる。でも、僕は顔が知れてるから、こうして誤魔化しておいて貰えると余計な言及を受けなくて済むんだけどな？」

僕を助けると思って、と、付け加えられると私にノーといえるわけもなく、こくこくと頷いた。

でも、近すぎる距離に、落ち着かなくて小さくごによごによと「もう少しだけ離れて」と、呟くとエミルはくすくすと笑って「ごめ

んね」と、手を離してくれた。

「本当、マシロって可愛いよね？」

握られていた手も解放してもらった私は、ぱくりと綿飴を頬張って、のんびりそう口にするエミルに、ぴっと空いた手で人差し指を立てると「あのね、エミル」と物申す。

「私、最初からいおうと思ってたんだけど、そのエミルの美的感覚？　ていうの？　それちょっとずれてると思うよ。そりゃもー、私は分かりやすい外見のみでいくと並み。カナイがいうほど貧相だとは思いたくはないけどさ、そう思うのが普通じゃないかな？」

ぶすりとそういつて頬を膨らませれば、エミルは楽しそうに笑った。

「カナイは好きな子はいじめたいタイプなんだよ。マシロの容姿を貧相と表現するのは間違ってると思うし、僕は別に特別じゃないと思うけど？」

そういつて伸ばされた手が私の髪を撫でていく。綺麗な指先が耳に触れて、ふわあつと顔が赤くなるのを隠すこそも出来ず慌てる。

「いや、いえ、いやいやいや……違うよ？　うん、違う！　可愛いというのは、ええっと……アリシアみたいな、ってエミル、アリシア知らないんだよね？　あの所作一つで花が舞ってるような子。んじゃあ、エリスさんとかさ、彼女なんて完璧じゃない」

「あー、エリスさんね。彼女は、まあ、確かに美人だよ。でも、彼女酒乱なんだよ。下戸なんだけどお酒が大好きで直ぐに泥酔。毎年このシーズンはどこかでとぐろを巻いてるんだ……僕も一度だけ

出くわしたことがあるよ」

「へ、へえ……人は見かけによらないんだねえ……」

「よらないんだよ」

苦し紛れにそんなことを話しつつ、私たちは、城門を潜りあっさり王宮へと入った。

入ると直ぐにカナイとアルファが合流してくれる。

アルファの勝利だったのだろう。とても満足気だ。

この間もちよつと思つたが、あの時は素通りしただけだったし、表門からは入らなかったから今日ほど感じなかったが、流石、王宮というだけあって城門から……城が遠い。

なんだこれ、徒歩で辿り付かせる気ゼロを感じる。

「折角だから、マシロちゃんの記念に城抜けるルート通ります？
そこで馬車が往復してるみたいだけど」

そんな大っぴらに動いて良いのかと口にするより前に、エミルが「そうだね」と相槌を打つ。

ん？ にこにこにこ……の笑顔が怖いんですけど……。

そのとき、私はやつと思ひ出した。

これはギルドの依頼なんだし依頼主は王宮側なんだから、こそこそする必要なかったんじゃないか！ たとえエミルが言及を受けたとしても、依頼書を見ればすんなり通れたはずだ。あんなにびったり寄り添うことなかったのに。

つい、その前に、忍び込むとかいう話の方が私の頭には印象に残っていて……エミルの態度にすっかり騙された。

何だかエミルに遊ばれた気がする。

こっちこっちとアルファに手を引かれ、シンデレラが乗っていたんじゃないかと思うような真っ白でキラキラな馬車に乘せられた。

コレが似合うのは……エミルとアルファくらいだ。

カナイと私は場違いな気がするし、何か恥ずかしい。同じことを思ったのだろう、カナイと目があって情けなく笑いあった。

まあ、いつか……これが最後だし。

そう思えばこそ、私は全てのことに寛容になっていた。

「マシロちゃん、見て見て。ほらあんなに騎士塔が遠いですよ」

アルファが腕を伸ばし、窓の外を指差した先を見ると、遙か遠くに塔の影が見える。

頷いた私にアルファは「あんなでっかい壁で囲むから閉鎖的なんですよ」背後にして来た城壁を恨めしげに睨み付けて続けた。

そして中腰を上げていたのを、どさり、と、下ろして頭の後ろで手を組むと「あーあ」とワザとらしく嘆息する。無造作に投げ出された足を、カナイが邪魔だと蹴るがアルファが気にする素振りはない。

「聖域も王宮の中にありますし管轄だけどそんなに近くないんですよねえ」

その一言で、最後にして、とても長い道のりを歩くんだろかな？
という予想も出来た。

＊＊＊

――…コツコツコツ

「すごい、全面大理石だ。ちょー豪華」
「豪華じゃない王城なんてないだろう？」

四体の女神像が彫刻された重厚な扉を開くと別世界だった。
公開されているのは入って直ぐのホールだけらしいから、ここは
人が溢れている。私の語彙少ない感想にカナイは呆れていたが、エ
ミルは久しぶりだなあ。と、見上げていた。

別に懐かしそうにも感じない。
感慨深いというわけではないようだ。

柱一本をとっても細かな細工が施され見る角度によってその表情
を変える。

品がないとはいわないが多少華美だ。

ふへーっと上ばかり見て歩いていた私の腕を「逸れるなよ」とカ
ナイが引き、こっちこっちとアルファが招く。

明らかに関係者以外立ち入り禁止だ。

奥に続く扉の前に立っていた衛兵が手にしていた槍で扉を遮り「
一般入場はお控えください」と機械的な声を上げた。

「悪いけど僕は関係者。君、新人だよな？ お祭りだから借り出さ
れた口だ。今度、僕の演習に参加しなよ。僕の足を止めた罪どのく
らい重いかその身体にしっかり教えてあげるから」

アルファの顔は笑顔だ。

天使だ。

でも口から出たのは呪いだ。

肝を冷やした私にカナイが苦笑してアルファを止めてくれる。

「俺たちはギルドの依頼で聖域領調査に来たんだ。ほら、依頼書もあるし依頼人も確認したら良い」

ひらりと、衛兵の顔の前へ羊皮紙を突き出したカナイが説明している間に、こっちこっちとアルファは扉を開けて奥にはいった。

カナイは大丈夫なのか、と振り返るとカナイは説明や交渉ごとに向いてるよね。と、エミルも微笑む。

—— …… 良いんだ、置いてけぼりで……

置いていかれた本人は待てよ！ と、扉のところで怒っているけど、無視らしい。やっぱり今日は全員普通に装いっつも妙にテンションが高い。

第四十七話：白の木、岩の牢

王城内をエミルが普通に散歩してて良いのか？　とか、気になることは多々あったが、カナイの説明によると王族は今日殆ど出払っているし、城内は先ほどのような新人が殆どになっているらしい。

研修とかそういう感じで……。

だから、実際エミルを見とめる者も居なくて城をあとに出来、裏には兵士が馬を持って待機してくれていたからそれに乗って聖域領へと入った。

因みに、私は乗馬なんて出来ないからアルファに乗せて貰った。

白馬に王子様は魅力的だけど、私には多分刺激が強すぎることになると思うし、カナイはまだ左腕が本調子ではないから……もしも落馬でもしたとき私を支えられないと断られた。

聖域は自然の音以外は静かだ。

踏み入れた先は森だから人影があるわけでもなく、人の入ってはいけない領域だから音がないのは仕方ない。

でも、夕暮れ時の森は、少し不気味だと感じてしまう。

木々が深くなってきたところで馬を降りた私たちは、さっきまでの陽気さも口数とともに減っていき、気が付いたときには無言だった。

何となく居心地が悪いものの、それを解消すべき会話も思い当たらない。私は今日この世界から去ってしまうものなのだから仕方の

ないことだ。

小一時間くらい獣道に毛が生えた程度の道を歩いていると、不意に頬を撫でる風が変わったような気がした。

「ふわぁーああ！ やーっと付いた」

一足先に茂みから抜け出したアルファは大きく伸びをした。それにくるくると出て行くと、ひーいらい湖がお日様の名残を映して湖面を赤黒く染めて風いでいた。美しく情緒的な光景ではあるが、私はその湖面よりもっと存在感のある大木に釘付けられた。

白い木だ。

遠目だというのに、幹も、枝も、葉も、その全てが白く瑞々しく輝いているのが分かる。

葉を揺らす音が、玲瓏と大気を伝って響いてくる。

荘厳で……ただそこに在るというだけで、全てが癒されるような清浄さだ。

もっと間近でその姿を見ることが出来ないのが非常に残念だ。真剣に魅入っていると「お前口開いてるぞ？」と、カナイから茶々が入った。

慌てて口元を押さえたが別に開いてない。

「あれはシル・メシアの木だ。この依頼で傷付けてはいけない物の一つ。もう一つはあの反対側の岩牢。月の牢だ」

いわれてカナイが指差した方を見ると、そこだけ剥き出しになった岸壁が牢のようになってる。

「シル・メシアの木が聖女……というか有り体にいえば“白い月の少女”が眠っていた場所だ。彼女が背を預けた大樹が彼女の色に染まったといわれている。そして、あの牢が“少年”を封じていたといわれているものだけだ」

「え？ 童話じゃないの？」

史実だとは聞いていない。二つ月の話はこの世界で一番有名な童話だと、最初にカナイ自身がいつてたと思う。

私の当然な反応にカナイは肩を竦めた。

「童話だ。童話だけど、ゼロから生み出されたものじゃないってことだろうか？ どこまでが本当でどこからが寓話なのか散々調べたが俺にもその境界線は分からなかった。エミルに、王室の蔵書まで調べさせたのになあ」

納得がいけないという風に頭を掻きながらそういったカナイに、ふーんと頷き、ちらとエミルを見ると目が合った。

にっこりと微笑んだエミルは

「ねえ、マシロ。ここに何か思うことない？」

と、問い掛けてくる。

良く分からないがその質問の答えをカナイも気になるらしく私を見ている。

「んー、何か？ 青い月の少年は物凄い視力を持ってたんだなーと思うくらいかな？ あの牢から大樹まで相当あるよねえ、それでも見止めていられるなんて凄いよ、十キロ先のシマウマの模様だって分かるよね！ きっと」

あはは……と、笑った私にエミルは優しいから「そうだね」と、微笑んでくれたけど、カナイはあからさまに馬鹿馬鹿しい、と、肩を竦め歩き始める。

目的地はここのはずだしどこへ行くのかと聞いたら「一応、大樹と牢の両方に壁を作ってくんの」と片手を振られた。

「マシロちゃん、この辺で天体観測しましょう。ほら月が出てきた。もう直ぐ欠け始めます」

ぐいぐいと私の手を引くアルファに頷いて、柔らかな草の上に腰を下ろした。その隣にエミルも腰を下ろし空を仰ぐ。

一番星がキラリと煌いた。

直ぐに夜の帳は下りるだろう。

私がこの世界に居るのも、もうあと僅かだろうなと思う。

膝を抱えた私は、さっきのエミルの問いを考えていた。

本当はこの場所であの木を見た瞬間、心というか魂が震えたような気がした。記憶にあるとか覚えているとか、そんなことを口にするつもりはない。

でも、唯の大木ではなくて、唯の牢ではなくて……良く分からず、涙腺が緩みそうだった。

青い月の少年に少女との距離なんて関係ないのだ、ということは感覚的に分かった。

目で見るとか、肌で感じるとか、そういう直接的なもので少年は少女を見ていたのではなくて……上手くは表現出来ないもどかしさが残るものの、心に、その存在自体に、恋をしていたのだ。

「マシロちゃん？」

ぎゅっと膝を抱えたまま地面を見詰めていた私の顔をアルファが覗き込んで首を傾げる。

「どうかした？ お腹すきました？ んー、ちょっと今日は火が焚けないから」

「違うよ、なんでもない。心配しないで」

ほっとくと何か始めそうだったので、取り合えずストップを掛けた。止めた私をアルファは「んー？」と見詰めてぽんっと手を打つ。

「感傷的になってるんですね。それをいうなら僕だってそうですよー。エミルさんとカナイさんがマシロちゃんが戻ったら、引き止めちゃ駄目だっていうから我慢してましたけど」

アルファ、いわれたならいいって良いの？ 私の隣にエミルは居るよ。黒王子になっちゃうよ？ エミルのいいつけは守ったほうが良いんじゃないかな？

「やっぱり我慢出来るわけじゃないじゃないですか。マシロちゃんと今夜限り会えなくなるなんて、嫌で、す」

抱きついてきそうな勢いでそういていたアルファだったのに、話し始めと終わりでは包む雰囲気ガラリと変わっていた。それに気がついた私をアルファは見えていない。

ずっと、片方の膝を立て、何の前置きもなく腰の剣を迷わず引き抜いた。

遠慮なしな大剣だ。

物騒なので目の前で抜刀しないでください。と、私が口にするより先に、エミルが私をぐっと引き寄せ立ち上がらせた。

ざわっと木々が葉を揺らし、一呼吸する間もなく辺りの空気が変わったのが私にも分かった。

続けて、アルファはいつも通りの笑顔を私たちに向けてから、ずっと私たちの前に立った。さわさわ、ざぶんと、徐々に荒く波立ち始めた湖面を睨み付けた。

空を仰ぐと月がもう半分ほど欠けている。

月同士の月食なんて私たちの世界では有り得ない。

「あんまり時間はなさそうだな」

月に気を取られている間にカナイが戻ってきていた。

左手には、以前見た杖が握られている。やはりまだ本調子ではないようだ。

「西側に水竜を追い込むから、エミルは予定通りこいつを送り返してやれ」

カナイの言葉にエミルは冷静に頷く。

私の鼓動は刻一刻と近づく別れのためか、湖から姿を現すであろう竜の姿に怯えてか、どんどん早くなっているというのに、みんな

はとても落ち着いていて余計に苦しい。

「別れを惜しんでやる暇はないんだ。悪いな」

そんな私の心境を察したのか、カナイがそういつて、いつもと同じように私の頭に乱暴に手を置く。いつもなら、そのまま頭を沈められるのだけど今日は撫でられた。

大きな手が不器用そうに私の頭を撫で、髪を梳いて降りていく。

「決心が鈍らなくて正直残念だ。でもお前のそういうところは嫌じゃない」

ぐいっと引いて額に口付ける。

まさかのカナイの行動にわたわたした私にカナイは困ったように笑ったあと「じゃあな」と締めくくってその場から消えた。

「逃げたね」

「逃げましたね」

エミルとアルファの声に、多分「うるせー」と既に湖の反対側に到着したカナイが怒鳴っているのが見えた。恐らく続けて、アルファもさっさと来い、と、いつてるのだろう。

ぶんぶん、元気に杖を振り回してるけどカナイ、左腕痛くないのかな？

アルファがその様子に「あはは、カナイさんかーわいい」と笑ったのと同時に湖がわっと盛り上がり巨大な竜の頭が姿を現した。

太く長く大きな鎌首を持ち上げて、大きく左右に揺らすと劈くような雄たけびを上げる。

びりびりと空気が痺れるように反響し、暗くざわついた。

隣に立ったエミルに引き寄せられ、反射的にその身体にしがみ付く。

恐いとか驚いたとか、そんなものを感じる余裕は心になくて、ただそれを見つめるだけだ。

第四十八話…夢の終わり

「じゃあ、僕もあっち側行ってアレ鎮めてきます。マシロちゃん。僕もマシロちゃんの頑固のところも強がりなところも大好きです」

お姫様の護衛は王子様に任せますね。と、エミルににこりと微笑んだアルファは、湖から姿を現したクビナガリュウに翼を付けたようなファンタジックな水竜に動じることなく一瞥した。

そして、もう一度振り返ると、騎士らしく膝を折り、私の手を取るとその指先に唇を寄せた。何もいえない私に「さようなら」と、にっこり微笑んで地面を蹴ると、水面から姿を見せた竜の胴体をステップにして反対側へと移動してしまった。

じわりと熱を持つ指先を胸元で包み込んでその姿を見送る。

「大丈夫、二人ともこの世界でも随一だから」

いつもの王子様スマイルでエミルはそういつてくれるけど……水竜、あっち側の木ぼこぼこ倒してますけど……出てくるなり大暴れです。

まだ湖から半分身体を出しただけで。

それに見上げる程度には違いはないけど、見上げてたら首が痛くなるくらいは大きいよね？ これも想定内？ 私は想定外だけど。

「んー、この湖の周りにはね、花の頃は圧巻なんだよ。全部の木が薄紅色の小さな花を大量につけてね。すごく綺麗で、まるで桃源郷のようになるんだ。僕は、小さいときよくこっそり館を抜け出して来てただけど……以前会ったときは大人しくて、もうちょっと小さかったんだけど、栄養状態が良かったんだね？」

「エミル―？」

呑気なエミルに声を裏返すとエミルは、ふふっと笑って「大丈夫だよ」と重ねる。そして、本当に水竜のことは全く気にしていないのか、ふと空を仰ぐ。

「今夜は月が暗くなるのに星があまり見えないね。本当に不思議な夜だ」

水竜が上がったら湖に近寄るよ。と、エミルに確認され、私はこくと頷いた。

それとほぼ同時に湖は実は海だったんじゃないかという波を起し、水竜は水から上がり鎌首をもたげて地面ごと決る。

地面が揺れた気がして私はエミルにしがみ付いた。

エミルはその肩を引き寄せ、私の耳元に頬を寄せて「大丈夫だよ」と重ねてくれたけど、その瞳は直ぐに夜空を仰ぎ注意深く凝視する。

私は少しだけ、その視線の先を追いかけたけれど、それよりやはり、カナイやアルファが心配だ。

びゅっと風を切るような音が聞こえると、竜の四肢から鮮血が散り赤い光の縄が暴走していた鎌首を押さえ自らが切り倒した場所へと引きずり込まれようとしている。

血に驚いた瞬間、私の腕に力が入りエミルが空から顔を戻すと「心配いらない」と、重ねて「行こう」と足を踏み出した。

竜が暴れて大きく両翼を広げ空を仰ぐから……辺りには絶え間なく強風が吹き荒れ木々を揺らしているというのに、私たちの周りには

静寂に包まれているようだ。

エミルは、水辺に膝を着くと持ってきた薬瓶を取り出し、一度だけ月を確認する。そして、きゅぽんっと可愛らしい音を立てて蓋を取ると透明な液体を湖に流した。

魔法液は湖面を這うように広がり七色に輝いたあと元の色に戻った。

「もう直ぐだね。マシロ……マシロ？」

エミルの手元を見守っていたものの、どうしても水竜が気になって私はまだ納まっていけない騒ぎに気を取られていた。

エミルに何度か呼ばれていたのだろう、肩にそっと触れられて初めて気が付くとエミルはこんなときまで他人の心配？ と苦笑していた。

「他人？ 確かに他人だけど、友達だよ。心配するよ。それにカナイの怪我は私の責任だし……どうしよう、二人に何かあったら」

水面も気になる、二人も気になる。その両方を案じてきよろきよろする私にエミルは短く嘆息した。

「そんなにマシロに心配してもらえるなら、僕もあっちに加われれば良かったな。ギリギリまで一緒に居られるから役得だと思ったのに」

「え！ 駄目だよ。私、エミルに護ってあげるって約束したのに、ああ、でも全然実行出来ていないけど」

「ご、ごめんね？ と重ねて振り返るとエミルは「十分だよ」と笑っていた。

「僕は、マシロにたくさん救われてると思うよ。キリアからだって僕のことを護ってくれたよね？」

アルファ……心配するからエミルには内緒だといったのは貴方じゃなかったかなあ？ うぬう、と難しい顔をした私に、エミルはくすくすと笑いを零し「アルファが僕の誘導尋問を交わせるわけないよ。だから責めないであげてね」と繋いだあと、ふわふわと私の頭を撫でる。

確かに、エミルに笑顔で問われたらかわせない気がする。妙に私が納得してしまったのに気が付いたのか、エミルはふふっと楽しそうに口元を緩める。

「だからもう、十分だよ。それから、あっちの二人も大丈夫。確かにカナイが本調子ならもっと騒ぎにならないまでに終わってたと思うけど、でも、助っ人が来るから」

「助っ人？」

「うん。来るといったからきつとくるよ。マシロが今ここに居るから信じられる」

直ぐに、きつと……と呟いたエミルの声が風に流されていくのと同時に赤い光の縄がぶつんと切れ、その反動に、ずんつと水竜が身体を横たえた。

「ほら、ね」

それらの攻防は、私たちからとても離れたところで行われているというのに、その姿は私にははっきりと分かった。

「ブラック?!」

夜の闇の中でも、月が殆ど隠れ明かりが乏しくても、私とその姿を見間違えるはずはない。

ブラックはちらとだけこちらを見た気がする。

気がするだけなのに、私の胸はぎゅっとしまり息苦しさを覚える。

自分から離れた手を、後悔なんてしない。そう、思っているのに……彼の姿に心が震える。

そんな気持ちは私の一方通行なのか、ブラックは、真っ直ぐにたち、顔を伏せることをしない。

いつでも、ブラックは真っ直ぐだ。

そしていつものように、こつん……と地面を杖で弾くと、ごんっと重たい音と共に以前大聖堂で見せられた赤い檻を出現させた。

しんっと辺りに静寂が戻ってくる。

「時間だよ……。マシロ、急いで」

その声と湖面から湧き上がった光に、私は湖に引き寄せられた。空を仰ぐと青い月が全て飲み込まれ、白い月の淵のみが丸く残っている。

しかし、闇に覆われることはない。

背にしてきた方角では、七色の明かりがキラキラと明滅と大きな音を響かせる。きっとパレードの終わりを告げる花火だろう。

「赤くなるのはこっちだったんだ……」

湖は赤く染まって煌いていた。

カナイのいつていた“血のように赤い”というのとはちょっと違う、宝石のように赤く澄んでいてとても美しい。

行って、と、エミルに背を押され、それよりも湖面からお呼びが掛かっているのが分かる。

行かなくては。

じりつと水辺へと足を進める。

私が踏みしめている土はアスファルトに変わり、道を行きかうのは馬ではなく車になる。

私には普通の現実が戻ってきて、いつもの毎日が繰り返される。

それが普通で、それが私の世界。私が居るべき場所だ。

―― ……間違えてはいけない

……これは、夢……なのだから。

きゅつと、唇を噛み締め両手で作った拳に力を込めた。

小刻みに震えてしまうのを何とか我慢する。

私が躊躇しているのを、迷ってしまったているのを悟られるわけにはいかない。

私は、帰るのだ。

何かを選ぶということは……選ばなかったもう一つの道に囚われ

てはいけない。と、そう、思う。思わなくてはいけない……私はシル・メシアを選ばなかった。

私はこの世界を、彼らを捨てて、帰る…… —

「二人に有難うって伝えて。シゼにも迷惑掛けてごめんって……エミルも、有難う」

私、帰るね。と、なんとか微笑んだつもりだ。

今一步、踏み出した私に思わず腕を伸ばしかけてくれたエミル。同じように迷ってくれていることが嬉しかった。

だから、苦し紛れに「じゃあ、また」なんていつてしまった私に、エミルも微笑んでくれていたと思う。

最後に一度だけ、

もう一度だけ、

ブラックの方を見た……

けれ、ど、目を合わせることが出来たかどうか……

私の視界は濡れていて、良く、分からなかった。

足先の触れた湖面は、膜を張ったような弾力があり足元から上がる小さな赤い飛沫が私の軌跡を消していく。

陸地から十分に離れたところで、私が足を止めるとそれを待っていたように、足元から水がざあああっとなんと競りあがり、あ、という間もなく私を飲み込んだ。

私は、また、落ちる。

たった一つの願いを残して…… —

――
……さよならといえなかった、私を許して……
――

第四十九話…ただいま！（1）

「お嬢ちゃん、お譲ちゃん。大丈夫かい？ ずぶ濡れじゃないか！」

見上げていた空には月が一つしか浮かんでいなかった。

今日は満月みたいだ。

いつもの帰り道の土手で、ぼんやりと寝転がっていた私の顔を無遠慮に覗き込んできたのは、巡回中のお巡りさんだった。

「真白ちゃん！」

悲鳴のようなお母さんの声に耳がなり、死にそうなほど抱き締められた。

こういうときは普通、居なくなった時間と場所に戻ってくるのが小説などでは定説なのに、私の夢はそんなに都合良く出来ていなくて、私の世界の時間はちゃんと動いていた。

搜索願が出されていた私は、警察に保護され迎えに来た家族に圧死させられそうになる。

そして、何よりそれからが大変だった。

どうやら私は帰宅途中に行方不明。

誘拐や拉致監禁なども想定され搜索されていたらしく……事件になっ

病院での検査などと終え、暫らくは自宅療養。ということだったけれど、みんなが心配するようなことは何もなかったわけだから、私はそんなに家に引き籠もっては居られない。

二週間ほどで学校に復帰し、普通の生活に戻るかと思ったたら大騒ぎ。

根掘り葉掘り居なくなっていた間のことを聞いてくる無神経な人たちを、大抵は郁斗が、郁斗の目が届かないところではサチとユキが追い払ってくれる。

この二人も普通どおり何事もなく、だ。
本当に何もなかったのかも知れない。

そんな瑣末なことをずっと私だけが気に病んでいたのかと思うと、情けなくて笑ってしまう。別に私の腹が黒かろうと、白かろうと、彼女たちには関係ないことなのだ。

そしてあちらの世界の名残か、私は苦手だった理数系がかなり得意になってしまっていて、宇宙人誘拐説が有力視された。そのときにインプランティングされた影響ではないかとも囁かれ私は珍獣扱いだ。

「真白、早く乗って」

暫らくの間、心配性の家族が毎日送り迎えまでしてくれた。

私は居なくなっていた二ヶ月弱くらいの記憶は曖昧で何も分らないということ徹底したが、夢が夢でないことの証明のように、ブラックが口付けた名残が病院では犯人に暴行を受けたのではと疑われた。

否定したけど、多分無駄だろう。

私はすっかり被害者だ。

「ねえ、臣兄。どうして月って一つなんだろうねえ？ 私、二つ月のある世界を知ってる」

私の馬鹿な話でも臣兄は嘲ることなく優しく微笑んで、よしよし。と、頭を撫でてくれる。

信じてくれていないことは分かっている。

でも優しいお兄ちゃんは否定もしない。

私が時々意味不明なことを話しても、必ず最後まで耳を傾けてくれた。でも流星に異世界ネタは拙いだろう。

病院送りにならないうちに控えなくてはと思うのに……呆けているとつい口走っている。

私は流れていく景色を見送りながら深く長く溜息を吐いた。

補習、補講の嵐で私の帰りはいつも遅くなった。

負担にならないようにと学校側とも掛け合ってくれたようだけど、一応私もこちらで過ごすなら留年も退学も避けたいから、別に足りない単位を補うためなら特に問題ないし、これが白い月の少女風にいえば咎なのかも知れない。

あれ以来、私は夜になれば月ばかり見上げている。

月を恋うかぐや姫の気持ち分かる気がする。

……でも、そうすると私のホームグラウンドはどちらなのだろう？

そんな私の生活も、徐々にいつも通りの平穏に満ち溢れてきた。いたって普通だ。

物珍しさも慣れてくると、みんな私のことを特別に気に掛けたりはしなくなったし、私はちゃんと進級も出来た。

季節が巡って……もう直ぐ梅雨時だと曇った空を見上げた。

そういえば、シル・メシアにも雨期があるといっていた。

そんな季節アルファはどうやって乗り越えているんだろう？ ま

あ、私が出会うまでも、その季節はあったのだから今までと変わりにく……なんだろうな。

私は小さく溜息を吐いて帰り道を急いだ。

「真白、ぼさっと歩いてると馬鹿みたいに見えるぞ」

ぼすっと背後から頭を押さえつけられて、私はぐえっと可愛らしくもない声を出した。

こんな馬鹿なことをするのは郁斗くらいなものだ。私が恨めしげに背後を見上げるとやはり背丈ばかりずるずると延びてしまって、いつの間にか可愛らしさから遠ざかってしまった我が弟だ。

「別にどう見られても良いよ」

どうせ私は宇宙人誘拐説濃厚な人間だ。今更誰にどう見られても怖いものなどない。

「何か、卑屈になってねえ？」

「もともと卑屈なんだよ。郁も暇なら買い物に付き合ってよ」

並んで歩いていた郁斗にそう声を掛けるとあからさまに「げっ」と眉を寄せられた。

「もしかしくなくても真白が夕食当番？ 臣は何してんの？」

「お姉ちゃんっ！ お姉ちゃんっていいなさいっていつてるでしょ。それから、臣じゃなくてお兄ちゃんっ！ あーあ、郁がこんなに小さかったころは「おねーちゃん、おねーちゃん」っていつつも追い掛けてきていたのに。あの可愛らしかった頃の郁はどこへ行ってしまったんだろ」

腰辺りでこのくらいと手を振ってワザとらしく溜息を重ねると、郁斗は益々苦い顔をする。

両親が殆ど家に居なかったから、本当にお姉ちゃんっ子だったのだ。

私はお兄ちゃんにべったりだったのだけど、郁斗が私にべったりになってから、私もなんでも頑張るようになっていたと思う。そのお陰でお兄ちゃん離れが少しは出来た。

まあ、そうはいつでも、頑張ったって上達するものではないものがあるわけで……。

「はー……俺カレーとかスパゲティで良い」

「郁それ好きだね？ お子様ランチみたいだよ」

「真白がそれくらいしかまともに作れないんだろっ！ あーあ、臣が居たら美味しい飯が食えるのに」

「……郁、夕食抜きね」

あんまり食欲らしい食欲も浮かばない。

特に自分が当番のときは作ってまでは食べる気力がない。
私だって作りたくはないのだ。早く家に帰りたい。

はあ、と溜息を吐いて、とぼとぼと足を進めると夕食抜きに不満なのか「おねえ」とマジ声で郁斗に呼ばれて隣を見上げる。

「あんま下ばっか向いて歩くな。背中はやんとしてろ」

ばしばしと痛いくらい人の背中を叩きにやりと笑う。

その笑いの意味は私たちだけには分かる。

昔引っ込み思案だった郁斗にいつもいつていた言葉だ。顔を上げろ、前を向いて歩きなさい！ と私もいつも口にして郁斗の背を叩いた。私は何とか微笑んで、弟のクセに生意気だと小突いた。

それから二人で買い物をして二人で夕飯を作った。

でもまあ、お兄ちゃんのお陰か私たちは二人揃って料理の腕はいまいちだから、そこそこだ。

かろうじて食べられるものに仕上がって良かった。お互い曖昧な表情で食事を取って味に関しては触れないことにした。

これが私の毎日だ。

普通に流れる時間だ。

それなのに、私の心はいつもこれで良かったのかと不安に揺れる。黒猫を見掛けるとついあとを追いつけてみたり一人きりになると思いうのはシル・メシアのことばかりだ。

郁斗が部屋へ上がってしまうと広いリビングが寂しくて、私も自室へと戻った。明日のための準備をして、メールのチェックをして、ネットして……ぼーっとして時間は流れていく。

時計の短針が一番高いところを通り過ぎた頃、部屋の明かりは消したが眠る気になれなくて締め切っていたカーテンを開く。

日中は曇っていたのに、今夜は特に月が明るい。

机に腰掛けると何をするでもなくぼんやりとする。

ころんっと机の上に転がした魔法石の髪飾り。私があちらから持って帰ってしまったものはこれだけだ。

何度かこれを壊したら誰かが駆けつけてくれるのではないかと、思ったが、多分爆発とか起きたら駆けつけるのはうちの家族くらいだ。

それにたった一つの品だ。

失ってしまうことの方が惜しくて、私は実行出来なかった。

第五十話..ただいま！（2）

はぁ、と一つ溜息を重ね「そういえば……」とこの間の臣兄の言葉を思い出した。

あの日の臣兄は少し違っていた、私と同じようにどこか思い詰めたような顔をして……。

どういうわけか、シル・メシアから戻った私はモテる。

異世界から戻った私がどう変わったのか私には分からないし、正直……遊ばれているようにしか思えない。

興味本位で近づいてこられても、傷心中の私にとって邪魔なだけだ。

あの日も勇気ある告白を貰ったけれど、もちろん却下だ。

「なんか大変そうだね」

「きっと物珍しいんだよ……」

行方不明になる前と同じように、ユキとサチは接してくれるからその日も一緒に帰路についていた。きっと、そういう距離感が丁度良いのだろうと思うことにした。

「でも、真白綺麗になった感じがする。い、いや、ごめんね？ 大変だったんだと思うんだけど、なんというか……」

やっぱりごめん。と、重ねたユキに苦笑する。

私は居なかった間のことは覚えていない。ということに徹した。

話したところで信じてもらえとも思えないし、奇人変人ランキングなんか上がりたくはない。地味に目立たないように平凡に……時間さえ過ぎてくれれば良い。

「一生に一度の恋に出会った、とか？」

サチの台詞に、どきんっと心臓が跳ねた。

—— ……一生に一度の恋。

そんなもの泡と消えた。

自分で消した。

私にはもう何も残っていない。

私は、ここに戻って本当に何がやりたかったんだろう……？

どこに居ても優柔不断な私は、ないものを強請る子どものように我侘だ。リアルに戻ればシル・メシアが恋しくなりシル・メシアに居ればリアルを求める。

そして最終的に行き着いた結果に、落ち込んでいる。

どうしようもない。

「恋なんてしない」

「真白のそれは口癖みたいだね？」

「う……確かにそうだけど、今度は違うよ。本当に出来そうにない」

私の身体はここにある。

でも私の心はシル・メシアに置いてきてしまった。
だから、心が必要な恋はもう出来ない。

はあ、と溜息を吐いても隣を歩いていた二人はもう全く別の話題になっていた。切り替えが早い。特にユキはそうだ。私も見習いたい。とぼとぼと帰り道を歩いていると途中でお兄ちゃんの車に拾ってもらった。

一緒に送ろうか？ といった臣兄の誘いを、寄り道するからと断った二人に別れを告げて、私は車に乗り込む。

もう取材の人とか野次馬とか少なくなったから一人で大丈夫だけど、臣兄は心配してくれて時間さえあれば送り迎えをしてくれる。

「少し遠回りして帰ろうか？」

そういった臣兄に「良いよ」と頷いて流れていく街並みを見つめた。

「真白、前にさ、いったよね？」

「何を？」

「二つ月がある世界の話」

突然口にした臣兄に驚いて私はその横顔を見た。

その動きに気がついたのか、ちらとだけ、私のほうを見た臣兄は口角を軽く引き上げて「どう？」と重ねる。

私はおずおずと頷き「いったね」と同意した。

「その世界はどんな世界なの？」

臣兄の質問の意図は分からない、分からないけど臣兄は私の話を冷やかしたり馬鹿にしたりするようなタイプじゃない。

だから、私は久しぶりにシル・メシアのことを思い出しながら、まるでファンタジー小説の話をするように語った。

臣兄は時々相槌を打ったり、興味を持ったところは質問してくれたりと真面目に聞いてくれる。凄く懐かしくて、楽しくて、幸せで、慌しい時間が濃密に詰まった場所だ。今だって目を閉じれば、鮮明に思い出すことが出来る。

ああ、懐かしいシル・メシア。望郷の念を強く感じて切なくなる。

「真白はその世界が好きなの？」

一頻り話し終え、そう思ったのと同時にそう問い掛けてきた臣兄ひとしきりに、私の心臓はどきりとはなったけれど、私は結局、分からないと首を振った。

「変な世界なんだよ。素養が全てでそれを持っていないと駄目なの。命だってとても軽くて、自分が持っていない素養を手に入れるためなら簡単に殺しちゃうし……普通に暗殺業とか成り立っちゃうし、そんなの駄目だっていったら、どうして駄目なのか誰も分からないんだよ？ どうして分からないのか私には分からないよ」

ほう……と息を吐いた私に、臣兄は静かに「そうだね」と同意してくれる。

「でも、でもね……常識なんてその世界に住んでいる人が勝手に決めてしまうものだから、それとは違うものが入ってくればそれは非常識で……きっと理解するのにとても時間が掛かっちゃうよね？」

やんわりとそういった臣兄に私はこくんと頷く。

「……でも、だからって命は大切だと思う……。簡単に奪って良いものじゃないと思うの。だから、それを分かって欲しい人が居たのに……。絶対に無理なのは分かっているし百パーセントの理解なんて得られないと思うんだけど、でも、分かって欲しかった。その人も分かるうとしてくれたのに、結局私は何も残せなかった」

「―― ……大切だったんだね？」

お兄ちゃんが一体どこまで信じて私の話なんて聞いてくれているのか分からない。

でも、私はお兄ちゃんの言葉に素直に頷いた。

大切だった……。ううん。

きっと過去形ではなくて今現在も私は彼を大切に思っている。

離れているしもう二度と会うことも叶わないだろうけれど、それでも大切に思っている。

「真白」

「うん？」

「家族ってさ、もどかしいね？ 真白のことをこんなに大切に思っているのに、結局僕らは真白を縛ってしまっていたのかもしれない、真白は常に自由であるべきだったのに、僕らはとてもとても真白が大切に、どうしても離れられなかった。諦められなかった……。本当は、真白が笑顔で過ごせる場所に居させてあげなくちゃいけなかったのかもしれない。今の真白を見ていれば、みんな、そう、思ってるよ。父さんも、母さんも……。郁斗も……。もちろん、僕も。僕らは……。みんな何かを間違ってしまったって」

ぽつ、ぽつ……と臣兄はそう綴って、最後に、ごめんねと締め括って、きゅっと下唇を噛み締めた。

泣くのを我慢しているようなその表情に、私のほうが泣きそうになって、私はそつと臣兄の腕に触れて「大丈夫だよ」と繰り返し返していた。

少なくとも私は家族に愛されている。

私はその家族の傍にいて、彼らを愛していかないといけないと思う……でも、それはいつまで？　いつまで、私はそうしていられるんだろう。

きっと私の存在が、立ち止まったままの私が、今度はみんなの足を引っ張ることになるかもしれない。

私は……真っ暗な部屋の中でぽつりと思う。

「間違えてしまったのかもしれない」

自分の気持ちがこれほどまでに止まってしまうとは思わなかった。そして、そのことがまた家族を縛る。

大抵のことはやり直せる。

もう一度……も可能かもしれない、でも、私の場合取り返しはつかない。あるとき私は、ここに私の幸せはあると選択した。

「真白に、本当の笑顔が戻るように願ってる。寂しくてもそう願うべきなんだよね」

ぽつぽつと繰り返した臣兄の言葉に答えた「私はもう元気だよ」という台詞がとても、とても、頼りなくて、どうしようもなく、自分でも笑ってしまった。

—— ……人は間違える生き物だというのなら、

神様お願い……もう一度だけ私に選択する機会を与えてください
——

そう、願うことを、みんな許してくれるのだろうか……。

第五十一話…ただいま！（3）

ぼんやりと物思いに耽っていると、ドアを締め切っていなかったのだろう。

そこから、ひょっこりと顔を覗かせた郁斗がこちらの様子を窺うように「真白？」と声を掛けてくる。

「まだ寝てないんなら、電気くらい点けろよ」

「んー……。点けなくて良いよ。どうせ何もしてないから」

「何もしてないなら、寝ろよ」

「分かってるー。郁斗は本当に小姑みたいだよねえ。うるさーい」

ほっとけ！ と、怒りつつドアを閉めようとする郁斗に「ありがとね」と付け足すと、やや沈黙したあと「おう」と返事して今度こそドアを閉めた。

その何だか微笑ましくも可愛らしい姿に、私はふふっと笑いを零してまた机に突っ伏す。

図書館の寮と同じように机の奥にある窓から月の明かりだけが、柔らかく差し込んでくる。

—— ……この時間が好きだ。

私はこうやって平穏に毎日を繰り返す。

ブラックにいったように知らない誰かと恋をする日も来るかもしれない。でも、ずっとずっと、遙か先のことだと思う。私は確実に行き遅れる気満載だ。

大体ブラックがインパク値が高すぎるから、他なんて考えられるはずもない。

ぐったりと、机に突っ伏すとじわりと机上が濡れた。

私、また泣いてたんだ……。

自分で選んだのに、本当に情けない。

みんな、私の幸せを願ってくれたのに。

私はここで幸せにならないといけないと思うのに、心はここになくてやっぱり、有り得ない世界のみんなのことを思う。

今だって目を閉じれば、図書館での生活が鮮明に思い起こされる。

アルファとカナイは喧嘩していないかな？　きっとしているだろうな……日常茶飯事だもんね。とか、カナイも相手にしなきゃ良いのに、一々真に受けるから揉めるんだよね。

それが分からないほど馬鹿じゃないのに、あれが二人の丁度良い距離なのかな？　エミルは、また変な薬を作ってカナイを困らせているかも知れないな。

そういえば結局、エミルの部屋を見ることが出来なかったな。

あのエミル大好きっ子のカナイがあれだけ引くし、最終的には魔窟といったんだから、一見の価値はあったと思う。残念だったな。

「ブラックは……」

ぼつりと名を口にしてじわりと目頭が熱くなる。

ぎゅっと胸が押しつぶされそうに苦しくなる。熟れたトマトや豆腐なら再生不能だ。乾いた笑いが零れるのに溢れ出てきそうな涙は止められない。

ブラックはまた独りなのかな？

また、木の上で昼寝なんてしてないよね。

もしかして泣いちゃったりとかしてない、かな？

してないよね、私じゃないんだし。

ごめんね、あんなにこちらの世界に戻ることを願ったのは私自身なのに、ここに戻って初めて私の幸せはここにはないかも知れない……なんて、思っちゃったよ。

『ねえ、マシロ？ もしもこの世界の月も貴方の世界のようにたったひとつであったなら、少年も少女も居なくて、私もたったひとりで満たされていたのでしょうか？ どうして、この世界に月が二つもあるんでしょうね。まるで常に己の半身を探しているように欠けていて満たされることがない』

ブラックの呟きが思い起こされ、自嘲的な笑みが漏れる。

本当に私は馬鹿だ。

失くしたものの大きさに気がつかない。

気がつけなかった。

それはきつと、私がこれまでそんなに大きなものを失くしたことがなかったからだと思う。

みんなに、会いたいな……

会いたい、会いたい、会いたい……

ここにだって家族が居るし友達が居る
でも

凄く……凄く寂しいよ……

心が穴だらけだ、風通しが凄く良い。

私はこんな気持ち味わったことがないから、どうやって乗り越えれば良いのか皆目見当もつかない。

格好悪くぐずって腕に額を擦り付ける。いつもこうだ。もうどのくらいこんな感じで、このまま泣き疲れて眠ってしまう。なんてことを繰り返しただろう。

「マシロ」

耳に心地よい声。

そう、夢の中ですら、滅多に聞くことの叶わない声。

「マシロ？」

私がこの世界を選んだのは仕方のないことだと、今でもちゃんとそう思うし間違ってるとは思わない。でも、やっぱり

「マシロ」

私を呼ぶ声が忘れられない。

「ねえ、マシロ？」

忘れ、られ……ない、けど、幻聴にしても、やけにダイレクトに聞こえる気がする。

がばりっと机から顔を上げて慌てて振り返る。きよろきよろと音がした先を探しもう一度「マシロ」と聞こえたところで、視線は釘付けになった。

やっと月の明かりが届く距離で足先しか見えない。

でも見間違えるはずはない。

「どう、して？」

声が、震える。

とくん、とくん……とくん。

心臓の鼓動が高鳴っていく。

凍えそうだった心と身体がじわじわと熱を帯びていく。

ここで、この場所で、この世界で、対峙することの有り得ない、

人物が、こつ……とゆっくりこちらに足を進める。

ゆらゆらと揺れる尻尾が見える。

尻尾なんて笑ってしまいうくらい有り得ない。

「愚問ですね」

飄々とした態度。

「私はやはり貴方無しでは生きられない」

嘘みtainな台詞を簡単に口にして、余裕のある笑みを見せる。頭の上にある猫耳なんて、夢で見るにしても限度があるし、私の正気を疑ってしまうくらい有り得ない。

でも、夢なら覚めないで。

幻覚ならもう少しだけ消えないで。

ぎゅつと苦しくなる胸に視界が揺らぐ。

「……答えになってない」

「そうですか？ 十分な理由だと思いますけど」

月の明かりに浮かび上がった姿は彼が使わないといった名に相應しい。

本当は嬉しくて仕方ないのに、口から出た憎まれ口。

そんな私は可愛くないと思う。思うけど、対峙した彼は柔らかな瞳を細めてゆらりゆらりと尻尾を揺らし口元を緩める。その笑みに誘われるように、がたりと椅子から立ち上がると少し膝が笑っていた。

「マシロ」

数え切れないほど何度も呼ばれた名前を、ゆっくりと確認するよう口にして、ずっと手を差し伸べる。この手を取ると、きつと私は引き返せなくなるような気がする。

私があのと選り取ったこの選択を、全て白紙に返し、周りにはより深い傷跡を残すことになるかも知れない。

そう思うと私は息苦しくなり、キシキシと身体が締め付けられるような痛みに襲われる。

駄目だと警告する自分も居る。私はここに居なくてはいけないのだと警笛を鳴らす。

でも、それは私の理性的な部分で、本能的な部分では、その手を受けてたくてたまらない。

今、直ぐにでも駆け寄って、抱きついて「もう離れたくない」と

叫びたい。

身体から自分の意思で手を伸ばすことに、激しい痛みを伴っている。

どうしよう……私は、どう、したら……良いんだろう。

頭の中がぐちゃぐちゃで、何も考えられない。まともな思考が分らない。どうすれば、良いのか、分からない、分から、な、い、

—— ……僕らは……みんな何かを間違えてしまっている。

「……あ」

臣兄の言葉が脳裏に蘇った。

僅かな間、私は瞑目し、深呼吸する。

そして、私は決断する。

もう、私は迷わない。

はっきりとした意思を持てれば、私の腕は素直に従ってくれた。まだ、僅かに緊張に震えてはいるけれど、もう、痛くはない。

—— ……ごめんなさい。

微かに指先が触れ合う瞬間、私の脳裏に浮かんた言葉。誰に向けられたものか自分でも分からない。

でも……きゅつと指を絡め取られ

—— ……ぐいつ！

と一息に腕を取られて身体を引き寄せられ、あっという間に目の前が真っ暗になった。

懐かしい香りと暖かさに包まれると、浮かんできた罪悪感はあると消え失せ私の思考は真っ白になる。

私の鼓動と同じか、それ以上の音だけが心地良く耳に届く。

苦しいくらい強く抱きしめられ、頬を寄せられ緊張に掠れる声で名を呼ばれる。

その声に返事を返したただけで彼の声が色を帯びるのが分かる。

「私は間違っていました。非常にらしくない」

「……？」

「貴方を愛しています。私には貴方が必要です」

言葉が紡がれる度に耳元に柔らかな唇が触れ、この世界にとって有り得ない塊が私を魅了する。誘惑する。そして「あまり時間がありません」と前置いて懇願する。

「どうか私に攫われてください」

ぎゅっと抱き締める腕は微塵も緩むことない。緩むことなく……

第五十二話：一生に一度の恋

—— …… 攫われてしまった。

ほぼ誘拐だ。

嫌だといっても恐らく解放されることはなかっただろう。

それがブラックのいう『彼らしさ』らしい。でも、そのお陰で私の決心は揺るがなくて済んだ。

たった一枚、三行半ほどの内容しか書き記せなかった書置き一つ残して、私はまたシル・メシアに落ちた。

夜空には懐かしくも感じる二つ月が仲良く並んでいる。

そして落ちた先は辺境の町ではなく、ここは、見覚えのある聖域だった。

—— …… ばきんっ！

と一枝。派手に折った。

確認するのも恐ろしいが折れた枝も散った葉も白い。

『シル・メシアの木、傷付けてはいけないものの一つだ』

カナイの台詞が蘇る。

あわわっ！ と焦って青くなる私とは対照的に、ブラックは普段通りで私のスカートの裾に付いていた白い葉を落としたあと、すつと、立ち居を正し、自分の肩にもものっていた葉を落とすときよろきよると辺りを見回した。

誰を探しているのかと思ったら、意外にもその場にはいつもの三

人が居て私の心は懐かしさに弾んだのにそれを堪能する間もなく「ただいま」と声を上げる暇もなく。

「本当に来ちゃったんですか！」とアルファには驚かれ。

「予定通り騒ぎになってるからお前たちはさっさと消えろ」とカナイには突き放され。ご丁寧に手でしっしと払われた。

「お帰り、マシロ。残念だけど、明日にでも図書館で会おう」とエミルには微笑まれた。

何がなんだか分からないが、確かに以前は聖域という名に相応しく静寂が支配していたのに少しざわついているような気がする。

どうして良いのか分からない私を無視して、ブラックは私の手を取ると「彼らなら大丈夫です」とさっさとその場から姿を消した。

エミルたちへの挨拶もそこそこに私は種屋に戻った。というか強制連行？ 私に選択権はない。

迷うこともないのだけど一応聞いてくれるくらい聞いても罰は当たらないと思う。けど聞かれない。

「ねえ、置いてきて本当に良かったの？」

「構いません。予測の範疇です」

「でも、捕まったり、罪に問われたり」

「王子とその側近がですか？ 大丈夫ですよ……滅多なことですんなことにはなりませんし、謝罪説明の際の逃げ道は用意してありますから」

本当に？ と不安気に溢せば、本当に。とにっこりと返ってくる。

その笑顔を見たら、大丈夫なんだろう、なんて気になって納得してしまう。

そして、この天井を見上げるのも久しぶりだ。そんなことを考えてぼんやりしていると頬を寄せていたブラックが顔を覗き込んで不満そうに眉を寄せた。

「マシロは今、私以外のことを考えてますね？」

「え、あ……、ああ、そんなことないよ」

私は本当に嘘が下手だと思う。

曖昧な台詞にブラックは益々気分を害したような顔をして不貞腐れると、私から腕を解いてぼすりとその隣に転がった。

急に適度な重さと暖かさを奪われて寂しく感じる。

私は片方の肘をついてブラックのほうへ身体を起こすと、その顔を覗き込んだ。物凄く臍を曲げてしまったのではないかと不安になったけれど、視線が絡むとブラックは、ふっと口角を引き上げて笑みを作った。

「怒ってないですよ。そんな不安そうな顔しないで下さい」

伸ばされた手が私の頬を優しく包み込む。

私はその手に誘われるように、ブラックに顔を寄せ「ごめん」とそっと口付けた。

上半身をブラックに預けて、寂しかったと、好きだよを添えて、瞼と、こめかみにそっとキスをする。そのまま、つっと舐めると視界の隅っこに映る耳がふにゃんと頭にくっ付いてしまうので、きつとブラックはそうされるのが好きなのだと思う。

本当に、可愛いというか、猫みたいだなというか……なんというか、好き過ぎる。

私はそのままぎゅっとブラックの首に腕を絡めて抱きつくと、僅かにブラックが息を詰めたのが分かった。しまったと思って少し腕の力を緩めると、ぐいっと腰を取られて引っ張られ完全にブラックの上に乗ってしまった。

「ブ、ブラック、ほら、重いから……」

「重くないです。というより私はこの重さがとても恋しかった」

丁度、鎖骨辺りにブラックの口元が来て、声を発するたびに温かな息が掛かりくすぐったいような心地良いような甘い気分になる。

「私はマシロのことしか考えられませんでした。貴方を手放したことをどれほど後悔したか……本当に、本当に、後悔しました。こうしてマシロに触れられないことが、あんなに辛いとは知らなくて、貴方の記憶を奪ってでも傍に置くべきだったと何度思ったことか」

いってそつと鎖骨を啄ばみ舌を這わせ、首筋を伝って耳元まで這い上がって、耳朶に唇が触れる距離で「ねえ、マシロは？ マシロはどうでしたか？」と問われる。

問われている意味も答えも分かっている、けれど……今はそれどころではなくて、私は五月蠅い心臓の音が邪魔をして上手く言葉が出てこない。

息を殺して、きゅつとしがみつけばそれを待っていたかのように、簡単に引っくり返されて、耳殻を舐められ舌先がその奥へと触れる。

「あ、や……」

「答えて、マシロ……」

こんな風に熱に浮かされて、まともに答えられるはずなんてないのに、ブラックは私に答えを強要する。声を出そうとすれば、熱を含んだ音とも声とも取れない吐息が漏れる。私はそれをぐっと押し留めて、搾り出す。

「わ、たし……頑張ったわ」

掠れる声で、頑張ったと繰り返した私にブラックは、ふと顔を挙げ朱に染まってしまったている私の顔を覗き込み首を傾げる。何を？と問いたいのだろう。

「だ、って。捨てたのは、わた、し……なんだよ。私から離れることを選んだのに……だから、私頑張った。頑張って、一人で居られるよう、に……」

自分で口にしていて目頭が熱くなってきた。

じわりと溢れてきた涙は、瞳の上になみなみと溜まってしまいブラックの表情が読めなくなった。呆れているのかな？ 私、とても馬鹿だったもの……。

すんつと鼻を吸って瞼を閉じれば、ころころと涙の粒がこめかみのほうへと転げて落ちる。

「迎えにいかけて良かった……」

ふわりと耳に届いた柔らかい声と同時に瞼に唇が触れ、目じりから零れる涙をつつと舐め取るとそのまま瞳に舌先が触れ、私は、ふつと息を漏らして身体を強張らせた。

その反応にブラックが微笑んだのが分かる。

—— …… ああ ……

機微まで分かる。

体温も伝え合える。

触れ合える。

その距離にやっと私は戻ってきた。

その事実が余りにも嬉しくて、ようやく実感出来た気がして……

私はブラックの背に両腕を回し強く抱きついて声を上げて泣いてしまった。子どもみたいに、馬鹿みたいに……。

そして、それを黙って受け止めるようにブラックが優しく抱いてくれるから、私は余計に泣いてしまったと思う。

「ブラックっ、ごめん、ごめんな、さい……」

「……マシロ」

「私、わたし、間違ってたの……元の、世界に、私の、家族の下に幸せはあると、思ってたの……それが当たり前で、それ以外には、有り得なくて……あっちゃいけないって、どこかで、思ってた……」

ぐしぐしと私が溢せば、綺麗な指先が額をなぞり髪を梳いていく。

「みんな居るのに、どこか一人で……ひと、りで……寂しかった、寂しかったの！」

ブラックっ！ 掠れる声で叫んで掻き抱いた。

「……き、好き、大好き」

—— ……好き。大好き。

何度も紡ぐ、言葉だけじゃちっとも足りなくて、お互いを何度も
何度も強く確かめあった。

きっと、私は……私は、今

—— ……一生に一度の恋をしている…… ——

第五十三話：再会は素直に喜ぼう

昨夜は夜空に浮かぶ二つ月を見てシル・メシアに戻ったことを実感した。

そして辺境の町、種屋の屋敷で迎えた朝。

「マシロ、マシロ？ 起きられますか？」

無理。

柔らかなベッドの暖かな誘惑は私を眠りから遠ざけることは出来ない。

気遣わしげに頬を撫で優しく問い掛けられるが、私は枕に額を押し付けて首を左右に振った。困ったように微笑まれたのは分かったけれど、私は疲れている。

ぎしりとベッドのスプリングが鳴ると、こめかみに一度だけ可愛い口付けが寄せられ離れた。

「マシロはもう少し休んでいてくださいね」

「ブラック？」

「私は来客が在るようですので書斎に居ます。客が途絶えたら戻りますから、それまで私の夢でも見ていてください」

そんな台詞が平然と口に出来る猫から、私は赤くなる顔を隠すように背を向けると、分かった。と、頷いた。

くすくすと楽しそうに笑う声と扉が閉まる音が消えると、私は暫らくベッドでぼんやりと天井を見上げた。

懐かしさを感じる天井。

私の部屋に入れてしまったら、その殆どを占領してしまいそうに

広いベッドにごろごろとしていたが、再び眠りに落ちることも出来ず諦めて起き上がった。

太陽は真上に来てしまっているようだ。

私は傍に置いてあったストールを羽織って窓辺に立つ。窓を開けると心地よい風が頬を撫でてくれ目を細める。

「……種屋って繁盛しているのかしら？」

ここからではあまり見えないが門前には馬車が止まっているようだ。しかも数台。

窓の棧に背を預けて、空を仰ぐ。陽光が眩しいが春の日差しのようで柔らかい。風も空気も暖かいかも知れない。

ブラックは私に迷う暇を与えなかった。時間がないからと急ぎ立て二度と扉を開くことは出来ないといったくせに家族への挨拶もさせてくれなかった。

『私を恨んでください。貴方を攫った私を。でも決して後悔させません』

強く握られた手の感触を思い出して私は頬が緩む。

あれから一年ほど経ったはずなのに、ブラックは変わらず私には優しく、自分を悪者にすることを忘れない。私が彼を責めることなんてあるはずなのに……でも、私がどんなに強く決心していたとしても、自分の選択を迷わないはずもなく……きっと二度と会えない家族を懐かしんでしまうこともあるだろう。

詳しい説明はカナイがしてくれるからとあまり聞かなかったけど……間違いなくブラックは事を成したから面倒になりはしよったの

だと思う。

いい加減な奴だ。

私は眉をひそめたけどそんな男を好きになってしまったのだから、諦めるしかない。

肌寒く感じ始めた窓を閉めて、私は身支度を整えようとブラックの寝室を出た。

出たとたん、私は慌てて廊下を走る。

広く静寂を常としている屋敷の中に一発の銃声が響いたのだ。

「ブラック！」

私の世界では日常的に有り得ない音だ。私は、ブラックの書斎をノックもなしに開いた。

「ああ、マシロ。起こしてしまいましたか？」

「今、銃声が聞こえたんだけど、怪我……あるわけないよね」

爽やかな笑顔で私を見るブラックは、足先で軽く何かを踏みつけて、ぱきんと潰した。もう一名の訪問者は、蒼白な顔で私とブラックを見たあと連れを消されたというのに丁寧に頭を垂れ「ルイン・イシル様、また改めて」と残して部屋を出て行った。

「起きたのでしたら食事にしますか？ それとも図書館に向かいますか？」

「……簡単に人を殺しちゃ駄目だっていつてるのに」

種屋は広い意味で命を扱う職だ。

だからこういうことが日常的に起きることも知っている。でも、

仕事以外で消す必要はないと思う。種も必要なかったようだし。

足先で踏みつけられた種を見詰めて零した私にブラックは「そうでしたね。次から気をつけます」と悪びれる風もない。

きつとまた繰り返すだろう。

私は、諦めて溜息を吐くと「図書館に行こう」とブラックの袖を引いた。

それから、身支度を整えてブラックと二人屋敷を出た。

普通なら王都の前に出てきて歩いて図書館に向かうのに、今日は直接図書館に出た。少しブラックは落ち着かない様子に見える。んーっと刹那考えるような素振りを見せたあと口を開く。

「今、館内に居るのはカナイだけです。あとは外出しているようです」

「どこに居るの？ 部屋かな？」

「中階層の二階奥です」

中階層以上は図書館関係者、および生徒しか入ることが出来ない。やや迷っていた私にブラックは気にしなくても良いと思いますよ。と、背を押してくれた。

「私は少し用事があるので、彼らと今後を決めておいてください。

私の屋敷に戻っていただいても、もちろん構いません。大歓迎です」

「嫌よ、あそこ不便だわ」

すっぱり切り捨てた私にブラックは恨みがましい視線を向ける。

「マシロは私を愛しているから、戻れないのを承知で攫われてくださったんですね？」

「そうよ。でも、それとこれは別」

「……女性の現実主義的な部分にはついていけません」

ブラックは肩を落として、誰の目にも明らかにがっかりしている――耳と尻尾が萎れているので――風ではあったけれど、それよりも用というのは、急ぎなのか、あまりあとを引くことなく「ではどこに所属するか決めておいてください」と、いい残し姿を消した。

私は暫らくその場に立ち尽くしていたが、そんなことでは拉致があかない。仕方ないのでブラックに教えてもらったカナイのところへ行くことにした。

久しぶりの図書館はとても懐かしい。

本の虫といわれてしまうカナイほど私は読書家ではないがこの空間は好きだ。

ぐるぐると螺旋状の通路を上って行き着いた先の大きな机の上で、今日も彼は本に埋もれていた。私は、傍まで歩み寄ってコツコツと机を叩く。

「やっと来たのか？」

「久しぶりに会ったんだから、もうちょつと可愛く迎えてくれても良いじゃない」

ぽふっと読んでいた本を閉じ、顔に宛がっていた淵の細い眼鏡を胸ポケットに仕舞い込み、私を見たカナイに眉を寄せる。そんな私にカナイは冗談だろ？ と、肩を竦めいつものように意地悪く口角を引き上げた。

「腕の調子はどう？」

「あんなの怪我のうちに入らないしもう完治した。元通り詠唱破棄も出来るし、お前が気に病む要素は微塵も残ってない」

その割には痛そうだった。

カナイの“打たれ弱い”を実感したのに。まあ、確かに一年前くらの話になるし本人が完治したというのだ、いい方は可愛くないけど気にしなくて良いといってるのだから従おう。

「マシロちゃん！ お帰りなさい！」

「がふっ！」

予想外だ。

予想外の勢いでアルファに抱きつかれ、私は蛙を潰したような声を出した。出掛けて居ないと聞いていたから心臓まで飛び出しそうだった。

「今来たところですか？ どこか怪我とかしてませんか？ ブラックに痛いこととかされませんでした？」

キラキラと、相変わらず天使のような容貌で、ぐいっと顔を近づけてくるアルファに私は、うっと息を詰めた。

「あんま答え難いようなこと聞いてやるなよ」

カナイの突っ込みの方が嫌だ。

赤くなる顔を隠せずに複雑な表情をする私に、アルファは首を傾げ「無事なら良いんです」とにこにこして腕を引いてくれる。

「お腹空いたし、ここじゃおやつに出来ませんから食堂行きましょ

う。ほら、カナイさんも一緒したかったらついて来ても良いですよ」

アルファも相変わらずだ。

アルファに腕を引かれるまま、食堂の一角を陣取ったところでエミルも戻ってきた。

「お帰りマシロ。白い月では咎を受けなかった？ 辛い思いをしなかったかな？」

開口一番から私の身を案じてくれるエミルにほっこり心が温くなる。……とはいえない。

「私は地球って星に住んでたけど月に住んでたわけじゃないよ」

百歩譲ったとしても地球は青い星というのだから、どちらかといえば青い月が地球だろう。

荒廃も進んでるみたいだし、争いにも溢れている。私自身はなんの力もない一般市民だけど力を持っている人は持っているとも思うし、まあ、剣とか魔法の力じゃないけど科学力だってシル・メシアに入れば凄い魔法になるだろう。

「でもやっぱり辛かったんじゃない？ 大丈夫？」

エミルは、ぼんやりと考え事をしていた私の隣に腰を下ろすと、

頭をそっと撫でて本当に心配そうに顔を覗き込んでくる。

近い……。

相変わらずといえはそうだけど、エミルは他人との距離が近い。

その上、相変わらず見目麗しい王子様だ。意図せず赤くなる顔を逸らすと「平気平気」と重ねて両手を振った。そして一度だけ心の中で深呼吸したあと

「ただいま」

と何とか笑って口にする、お帰りといつもの優しい笑みで答えてくれる。

ああ、これが私の中での“いつも”の光景だったんだ。とてもしっくりと馴染み、会えなかった、離れていた時間を感じることがない。

第五十四話：仲良いんだよ、ね？

アルファが、お茶とお菓子を持って席に着いたところで、カナイが二人に「どうだったんだ？」と話を振った。エミルはその問い掛けに頷いて、一口紅茶を飲んでから穏やかに答える。

「うん。こつてり絞られたよ。僕、あんなに怒られたの初めてだよ。それでもブラックに脅されて仕方なく……で通したからあとはないと思うよ」

エミルの口から出た名前に「え？」と驚いた。そんな私にカナイが説明してくれる。

「お前を呼び戻すのにちょっと無断で聖域に入って、ちょーっと大樹を傷付けたからな。説教くらいのお咎めで済んだのは、やっぱり謝罪に行ったのがエミルで、首謀者がブラックだったからだろうな」

因みに自分を首謀者に据えて置くようにいったのは本人だぞ？と、付け加える。確かにブラックは治外法権的なところがあるから都合が良かったのだろうけど。

「で、でも大樹を傷付けたのは私」

「真上に落ちてくるのは誰も想定してなかったからマシロのせいじゃないよ」

萎縮してしまう私にエミルが気にすることない。と、微笑んでくれるけど、ブラックのせいにはしたんだよね？ やっぱりなんとか責任を感じてしまう私を無視してアルファが口を開く。

「マリル教会も騒いでたよ？　聖女が光臨されたって賑わってた」

話が見えなくて、きょとんとしていた私に三人の視線が集まって、品定めをするように、じつくりと見つめてくる。

居心地が悪くて、もじもじしたら、まずカナイとアルファが噴出した。

「聖女って柄じゃないよな」

「ないない」

「そんな風にいうのはマシロに失礼だよ。カナイ、それからアルファも」

話が全く見えない時点で三人とも失礼だよ。益々眉を寄せた。

そんな私の心境を察したのかエミルが、ごめんね、と二人の変わりに謝罪をしアルファが話を続けてくれた。

「あのね、月の力を集めるために、ほんの少し、大掛かりなことしちゃったから世界中の人の目に白い月から欠片が落ちたように見えたんですよ。だからマリル教会、蒼月信仰と同じように白い月を信仰している教会なんだけど、聖女を探せって躍起になって」

「……つまり、私が探し人で白い月の少女だと？　その少女イコール聖女なわけね」

そうそうと頷くアルファに私は短く嘆息した。

「まあ、暫らくしたら落ち着くと思うから、それまでは外出しない方がよいよ。マシロは目立つから」

にっこり穏やかにそういったエミルに私は首を傾げる。

私、何か外見的にこの人と違うところがあるのだろうか？ 外に出ただけで私が異界人だって分かる何か？ そう思い首を傾げたのに気がついたのか、カナイが付け加えてくれる。

「見るものが見れば分かるんだ。お前の素養は偏りすぎていると思うし珍しい色をしているからな」

「色？」

「瞳だよ。マシロの瞳、黒くて凄く綺麗だよね。この世界で黒い瞳は少ないんだ。ゼロではないけど、今はブラックくらいじゃないかな？ 彼のは別に綺麗だなんて思わないけど」

「でも前は誰もそんなこと……」

「状況が違ったからな？ 今は月から欠片が流れてしまったから、唯珍しいってだけでは片付けてくれないだろうな。マリル教会の奴らに掴ったら、多分、聖女として祀り上げられると思うし……蒼月教徒とは仲が悪いからな。一悶着あるかもな。まあ、その辺はブラックが何とかするだろう？」

だから落ち着かない様子だったし直接図書館に来たのか。

みんなも相変わらずそうだけどブラックも当事者の私への説明がとても少なすぎる。

「これからどうするか、決めておけっていわれたんだけど……」

今更そんなことを追求したって彼らは口を揃えて私のためだ。と、いうに決まっているからもう良い。だからその辺の細かいことはみんなに任せるとしても、身の振り方は大切だ。

そう思って話を振った私に、アルファが「考えるまでもないですよね？」とエミルとカナイに同意を求めているようだ。エミルは「そうだね」と頷いたけどカナイはちらりと私を見た。

——…何がいいたいんだろう？

「図書館に戻るように、ラウ博士の上に掛け合ってもらえるように頼んであげるよ。もちろん同じように僕がマシロの面倒は見るし」

それで良いよね？ とエミルに笑顔で重ねられる。もちろん私としては願ったり叶ったりだけど……。

「カナイは不服そう」

「あ？ いや、俺は別にそれで問題ないけどな……その、良いのか？ ブラックと一緒に住まなくて」

「良いんですよ！ マシロちゃんは僕らと一緒に居た方が絶対楽しいです！」

カナイの返答に慌てて被せてくるアルファの姿が面白い。

それにしても、カナイはそんなことを気にしていたのか。なんとなくか……誰に対しても気い使いなのはもう治しようのない性格的な部分だろうな。とこっそり苦笑する。

「ブラックのところは広いし、住むには快適だけど、生活するには場所が物凄く不便だから断ったんだけど」

私の台詞にアルファは「ですよー」と、喜びに満ちた顔で頷き、エミルはくすくすと笑っていたがカナイだけが少し涙目で可哀想にとブラックに同情していた。

別に、好きかどうかと一緒に生活するかどうかは別問題だと思う。

「私に同情的なのはカナイだけなんですネ」

私の手の中からカップが抜き取られ、隣の空いていた椅子に腰掛けたブラックが、ほうと嘆息する。

「ブラック！ それはマシロちゃんの！ こっち飲めば良いだろ」

アルファの声にびくりとしたが、アルファはブラックの手から取り返した私のカップを下げて私とブラックにそれぞれ新しいカップを押し付けた。

抜刀しなかったのは私的には奇跡的な気がしたけれど、他二人は落ち着いているので、最近はそう不仲というわけではないのかもしれない。

「それじゃあ、マシロのことも決まったし僕はラウ博士に掛け合って上げるよ。マシロも一緒に行こう？」

私の手を取って立ち上がったエミルに少し戸惑う。

私のことだから私が一緒に行くのは当然だと思うけど……ブラックに「マシロ」と呼び止められる。止められるだろうとは思ったけど「何？」とブラックを見ると落ち着いて紅茶を一口飲んでから

「王都に住みたいというのなら、別に図書館でなくても大聖堂でも王宮でも、屋敷を買っても良いんですよ？ 無理に彼らに付き合う必要はないんです」

そういつて、私を見るとにっこり。

ま、まあ、そういわれればそうなんだけど、でも、どうせ王都に居るなら生活し慣れた場所が良いというのも正直な気持ちで……。ぐるぐるとそんなことを考えて答えあぐねていると、エミルが先に「それは、代案としても最悪じゃないかな？」と答えてしまう。

「マリル教会が直ぐに調べをつけて来るよ。星が降った時期と重なるように、女の子が一人入学してきた上に、君の口利きとあったら怪しさ倍増だね。ここなら、マシロは一年前まで居たわけだから復学したことにしてくれるし、それにそのことが漏洩したりはしないと思う。それが、最良の選択だと思うけど?」

私を、はさんでいることを忘れていいのか、既にブラックの視線はエミルを捉え、エミルの手は私を離していた。

そして、両サイドで声を荒げることはないものの雰囲気的にいい争いを始めてしまった二人から逃げるように、私は再び、そおつと腰を降ろし正面に座っていたカナイのほうへ身を乗り出しのんびりお茶を飲んでいたカナイの袖をくいくいと引いた。

カナイは「なんだよ?」と面倒臭そうに顔を寄せてくれる。

「なんか怖いんだけど」

小声で囁いた私にカナイは苦笑して同じように声を潜める。

「アルファとブラックより、エミルとブラックの方が鬼門だ。傍に居ると体感温度がかなり下がる」

殺し合いになったりはしないから放っておけ。と締めくくられ私は少し様子を見ることにした。

「別にマリル教会が騒ごうが騒がせておけば良いんです。掛かる火の粉は払いますから」

「そういう実力行使を、マシロは嫌うと思うけど?」

「それでもマシロは私が好きなので構わないんです」

「どうかな? 人の心は変わるものだから……」

二人ともとても真剣なのに

「ぷっ……ふ、はは、あははっ」

真剣すぎて、私は我慢出来なくなった。なんとなく感じていたんだけど、何というか……。

急に笑い出した私にみんながきょとんとしているのが益々可笑しい。

「仲良いね、みんな」

一斉に向けられる否定の視線がまた可笑しくて、私は目尻の涙を拭った。

「いや、うん。良いことだと思うよ。うん」

物凄く否定したいのに、否定する言葉が急に出てこないのだろう。昨日からブラックがみんなの名前を呼んでるのにも吃驚したし、エミルたちだって闇猫とか種屋って呼んでたのにブラックって呼んでるし。

仲良くなってる証拠だよな。

うんうん！ と、一人で納得する。

「さて、仲良しなのは良く分かったんだけど……とりあえず話を最初に戻して、どういう経緯で私はここに来られたの？ あんな短期間でまた月が重なったわけじゃないよね？ さっきから話が小出しでよく分かんない」

仲良しには否定的でも私の質問を無視することはない。

三人は刹那顔を見合わせちらとブラックを見る。

なるほどー、説明役にブラックが宛がわれていたわけか。そしてそのブラックが説明を放棄してしまったのだから、その肩代わりをするのはブラックの想定通りカナイになるのだろう。カナイは、あー…と唸ってから

「物凄く時間が掛かった。ような気がする。俺は休学までさせられて時空を開く鍵を探させられたし……」

恨みがましくブラックを見たカナイにブラックは首を傾げる。

「私は貴方を休学なんてさせていませんよ？ 仕事熱心な方だなどは思いましたけど」

「は？ いや、あんただろ？ 勝手に人を休学扱いにして……それで……」

カナイは自分で言葉を繋ぎつつ、ふと行き当たったのかカナイが説明をしてくれるならと座りなおして優雅にお茶を飲んでいたエミルを見た。エミルはカップから顔を上げると綺麗にっこり。

「その方が作業効率が良いよね」

エミルだ。

黒王子が本人の意思は関係なくカナイを勝手に休学させたんだ。

辺りの空気が三度くらいは下がった。そんな中何も感じないのは当人とブラックくらいで濡れ衣だったブラックは素直に不貞腐れている。よしよしと頭を撫でると、にゅーっと耳が垂れる。

やっぱりこれだけは癒される。

第五十五話…我慢できないんだもん

「まあ、カナイの休学は僕が手配したけど、カナイを図書館にほぼ軟禁状態にしていたのは、ブラックだよな？」

「……まあ、そうだな。ギルド依頼を遂行した直ぐあと捕まったしな」

カナイはエミルには甘い。
物凄く甘い。

甘いから盲目になっていてエミルの黒さを見ないようにしている節すらある。

「んで、方向性は割りと直ぐに決定したんだけどな、準備が難航して一年近く掛かったんだ。仕事が忙しいとかで発起人は殆ど手を貸さねーし、たまに來たかと思ったら『マシロに会いたくてどうにかなりそうです』って暴走しそうになるから」

「一応、僕がストレス発散には付き合ってあげましたよ。僕は毎回殺す気でしたけど」

なんでこんな人が馬鹿みたいに強いんでしょうねっ！ と頬を膨らませるアルファに私は乾いた笑いを零すしかなかった。

「最終的に、聖域で魔法石に二つ月の力を込め月を作ったんだ。そのときに、月から欠片が降ったように見えただろうな？　そして、擬似的にこの間と同じ状況を作った。俺の見た通りその現象は起きてくれて無事にお前は戻った……連れ込まれた？　攫われた？　……だろう？」

微妙に困惑しているカナイに「戻ったで良いよ」と笑うと「そうか」と口角を引き上げ強く頷く。

実験に成功した達成感だろう。カナイは満足気だ。

でもその理屈でいえば、何度でも行き来可能なのではないだろうか？ ふと浮かんだ私の疑問を感じ取ったのかカナイは短く嘆息して付け加える。

「二度は無理だ」

「なんで？」

「そうしてやりたいのは山々だけど、無理だな」

帰れないのは分かってる。

それも別に問題ないと思っている。

覚悟くらいしたんだから平気なはずだけど、もしなんとかなるなら……僅かな希望に縋るような私の言葉にカナイは本当に申し訳なさそうな顔をした。

そんな顔させたいわけじゃないのに、私は馬鹿だな。

「今、魔法石がないんだ。世界的に不足している。価格も高騰している。もちろん原因はブラックが買い占めたからだ。人工的に作るものには大きさに限界があるし、自然に出来上がるものにはそれなりの時間が掛かる。もう一度行うには資材が足りなさ過ぎるんだ」
「買い占めたって……」

流通単価が高騰してしまうほど買い尽くしたって、この計画……もしかしくても莫大な費用を投資しているんじゃないだろうか？
ブラックを見ると、ブラックは苦笑して頷いた。

「私の望みを叶える代金。大した額ではありませんよ」

ゆるりと私の頬を撫でそうだったブラックに、私は心の中だけで溜息を吐く。本当に私にそれだけの価値があれば良いけどね。

「マシロが気にするようなことじゃないよ。大体、あれはないよね。ブラックの浅はかさの代金だよ」

珍しく呆れたように口にしたエミルは、ブラックを見て溜息を吐く。

ブラックは、その内容は私に聞かれたくないのか「その話はやめましょう？」と珍しくストップを掛けた。そんなことしたら、この三人が口を塞ぐはずなのはブラックだって分かっているはずなのに、もしかして天パってる？

その様子に三人はにやりと顔を見合わせて、ぷつと吹き出した。

「十秒くらいは我慢したんじゃないか？」

「いや、五秒くらいですよ」

「一呼吸だよ」

みんな、なんの話をしているんだろう？ 私が首を傾げるとくつくつと笑いながらカナイが話を続ける。

「お前を迎えに行こう！ っていい出すまでの思考時間だよ。水竜に菓を飲ませて水に帰したところくらいまではもったよな？ ぼんやりしてるから、一応声掛けたら……」

『—— ……まません』

『は？』

『我慢出来ません！ マシロが居ない生活なんて耐えられません。カナイ、頭を貸してください』

……ってそのまま図書館まで俺連行された」

「秒殺だったよねえ」

エミルがしみじみと頷いた。

「あんなに大騒ぎするなら、最初から帰さない方向で強行すれば良いんですよ。下手に格好つけようとするから面倒になるんです」

アルファの攻撃にブラックが沈んだ。

ブラック？ と振り返るとブラックは赤い顔をして私から目を逸らすと、少しバツが悪そうに零した。

「仕方ないじゃないですか。魔法薬の効果がなくなったら、本当にマシロの気配がぷつぷり感じられなくなるし……我慢出来ると思っただですよ、思っただですよ……」

ブラックって可愛い。

特に……このしよげている耳が。

抱き締めたい衝動を堪えて、わしわしわしと限度無く撫でてしまふ。

そしてラウ先生に復学の手続きをしてもらうため、私とエミルは私にとって懐かしい図書館の廊下を仲良く歩いていた。

—— ……本当に仲良く。

「エミル？ 私いくら暫らくここを離れていたからって、迷子になつたりしないよ？」

きゅっと握られている手がなんだか少し恥ずかしくて、そういった私に、エミルはにっこりと微笑んで首を傾げた。

「分かつてるよ？ もちろん。どうしたの？」

いや、どうしたの？ じゃなくてね。

私はエミルの天然さに困った笑いが零れる。

仕方がないので「あの、手、なんだけど」と恐る恐る切り出してみれば、エミルは「あ」と声あげ今気が付いたという感じだ。きつと一種のクセのようなものなのだろう。私がそう納得すると

「このほうが良いよね」

と、指を絡めて繋ぎなおしてしまった。

私はあまり経験がないから分からないけど、確かサチが恋人繋ぎだといったた。

勝手に納得して歩みを止めることのないエミルをちらりと見上げる。鼻歌でも出そうなほど機嫌の良さが窺える雰囲気、私は苦言を呈することは出来なかった。

仕方がないな……。

恥ずかしいけど、まあ、良いか。と、私が諦めたことに気がついたのか、エミルは握っている手にきゅっと力を込めた。

大きくて綺麗な手だ。

長い指が私の手首辺りまで緩く届く気がする。
節の張り方とか私のそれとは全く違う。
男の人の手だ。

そんなことを考えるといつもと変わらないエミルの優しさにほっとすると同時に、ほんの少し気恥ずかしい気がしてくる。

エミルはこういうの自然だし、きっとなんでもないんだよね。

うん。と私が勝手に納得している間に職員室に程近い、人気の少ない踊り場でエミルは私に振り返り手をそっと手を離す。急に外気に晒される手のひらをほんの少し寂しく思う私は駄目だなと思った。エミルは変わらず穏やかな調子で、ラウ先生を呼んでくるから待っていて、と、私をベンチに座らせてその場を立ち去っていった。

窓から差し込んでくる陽光が優しい。

この角度からでも見える裏庭の木々も青々としていて生を満喫している。

その心地良さに瞼を落とし深呼吸。

私は帰ってきた。

帰る……そう思った自分自身に少し笑みが零れる。いつの間にかシル・メシアは私の帰る場所になっていた。

「マシロ、さん……」

私は掛かった声に目を開け振り返った。
その視線の先には懐かしい姿がある。ブラックは元より、エミル

もアルファもカナイもそんなに目立った変化はなかったけれど、目の前に信じられない……という色を隠すことも出来ないシゼは随分と変わっていた。

「……え、なんで？」

「帰ってきたよ」

にこりと笑って立ち上がったも、もうシゼを見下ろすことは出来なさそうだ。

怪訝な表情で首を傾げると肩口で切り揃えられていた、すみれ色の綺麗な髪がさらさらと零れ落ちてくる。それを邪魔臭そうに開いた手で耳に掛ける。

「帰って、って……本当に、マシロさん？ 月に変化は……え、でも……ああ、そういうば今朝方からラウ博士とエミル様が王宮に引っ張り出されていたのはこのせい？」

ぶつぶつとシゼの独り言とも取れる台詞に「多分」と、苦笑した私をシゼはまじまじと頭の先から足の先まで観察するように眺める。

「えっと、何？」

なんだか凄くむずがゆくて聞き返すとシゼは気難しそうに眉を寄せた。

「マシロさんに見えますけど」

「だから、本人だってば」

「そうかも知れないですけど、偽者かも」

私の偽者に一体どれだけの価値があるというんだろう？ シゼっ

てちょっと疑り深過ぎると思うのは私だけだろうか？

私は仕方ないな。と、シゼとの間合いを詰めて手を伸ばすとシゼの頬に触れた。

「ほら、幽霊とかじゃないでしょ？ 私だよ。私はちゃんとここに居るでしょ？」

「―― ……っ！」

にこりと笑った私にシゼは肩を強張らせて二歩は下がった。顔が真っ赤で、でかくなっただけ相変わらずシゼの反応は可愛い。

「べ、別に幽霊とか思っていないです！ ……ただ、カナイさんとかエミル様の悪戯か何かかと……」

悪戯……シゼは一体どんな目にあっていたのだろうか？ 私は想像出来るような出来ないようなその図に眉を寄せた。

「僕はそんな意地悪しないよ」

見計らったようにエミルがラウ先生を連れて戻ってきた。ラウ先生も殆ど変わらない。やっぱり見た目に時の経過を感じるのはシゼくらいものだ。

シゼはラウ先生を発見して「探しました」と告げる。

「嫌だな、それじゃ私が隠れてるみたいじゃないか。隠れても逃げてもいけませんよ。ちょっと始末書を書いていたんです」

以前と全く変わらない、穏やかな雰囲気で棘を噴出する侮れない人は、やはり変わらないようだ。私は反射的に「ごめんなさい」と口にした。

「本当だったんですね？　王宮でお説教貰ってるときは、まさか本当にやるとは思いませんでしたけど……若いて良いですねー。行動的で」

にっこりと微笑んでそう告げられても素直に喜べないのは何故だろう？　ラウ先生は、先にシゼに用事をいい付けて「お願いしますね」と先を急がせた。

立ち去り際に「またね」と声を掛けると、シゼは肩越しに仕方がないなというような笑みを浮かべて「そうですね」といって軽く腰を折った。

シゼ……やっぱり男前になったね……苦労が滲み出てるよ。いろんな意味で……。

「偽りではないので、ラウ博士……お願いしますね？」

「そうですね。本当にやってしまうとは思いませんでしたが、どうやら、種屋の肩入れも半端じゃないようですね」

くすくすと笑いを零すラウ先生に私はなんと答えいて良いかわからない。

「マシロは……マシロは前回と同じ処遇で構わないのですね？」

ゆるりとした動きで私に手を伸ばし、そっと髪を梳きながらそう問い掛けたラウ先生に、私は頬の熱を隠すように顔を逸らして「お願いします」と頷いた。

それから少しだけ雑談をして、ラウ先生は、仕事と手続きがあるからと職員室のほうへ戻っていった。先生の後姿が見えなくなるまで見送って私はぼつりと零した。

「相変わらずだね」

「ラウ博士？ あの人是不変わらないよ。最初から何も……」

エミルの答えになんだか妙な違和感を感じて問い返そうとしたら「庭にでも出てみる？」と誘われた。

最初にここへ来たときにも思った。この世界はとても色鮮やかだ。今、どの季節なのか分からないけれど心地良い風が吹きぬけている。湖面のようにさざめく木々は青々としているし日の光を反射して煌く。

多分、私の居たところもある程度にたようなものだと思うけれど、でもこんな風に見上げて実感するようなことは少なかったと思う。

「マシロ」

—— ……え？

ぽやんつと空とか見上げていたら突然視界が暗くなった。

直ぐにエミルの腕の中だと気が付くが暴れて拒絶する気になれなかったのは、エミルが少しだけ震えていたからだ。

私が、大丈夫？ と、口にするより早くエミルが息が漏れるように微かに「良かった」と漏らしまわした腕に力を込める。

「エミル？」

正直泣いているのかと思った。

私は、驚きに鼓動が早まるがエミルのそれはもっと早くて、切羽詰った感じがして、いつも穏やかなエミルからはあまり想像出来ない気がした。

「本当は、凄く怖かったんだ。自分たちが準備を整えたものが間違えているとは思わなかった。でも確証もなかった。僕はカナイを信じていたけれど、それでもやっぱり一発勝負は怖かった」

マシロ、だよね……と重ねて肩口に頬を摺り寄せられる。

「ブラックは何があっても生きて戻りそうだけど、マシロはそうじゃないから、もし、何かの手違いで何かを犠牲にしなくてはいけないかったり、五体満足ではなかったりしたらどうしようかと、本気で思った」

本当に、大丈夫だよね……？ と、重ねてエミルはそっと私から距離を置くと、頬を撫で、大きな手で包み込んで顔を覗き込む。

赤くなる顔を見られるのも恥ずかしくて……ドキドキして……真っ直ぐ見つめるのはとても抵抗があったけれど、本気で心配してくれている人から逃げるのは駄目だと、私はエミルの瞳に映る自分を見た。

「平気だよ。どこも痛くないし、足りないところもない」

笑ったつもりだけど、笑えたかどうかちよっぴり自信がない。良かったと重ねエミルは綺麗に微笑んだ。その笑顔が私にはどうしても苦しくて、見ていられなくて、きゅっと目を閉じた。

エミルはそんな私の頬をもう一度そっと撫で、すっと腰を折ると唇に触れるギリギリの端に唇を寄せ、唇を親指でそっと辿る。

直接キスをされてしまうよりも、驚いて、思わず身体を強張らせてしまった私をエミルは抱き寄せ、ごめんと短く詫びる。

謝るところがどこなのか分からなくて黙った私に、もう一度だけ謝罪を重ねて離れると、今度は軽く額にちゅっと口付けてにこりと笑顔を見せてくれた。

私はなんだかそれにほっと胸を撫で下ろす。

「戻ってくれてありがとう」

急な札に私はきょとんとしてしまう。それが可笑しかったのかエミルはくすくすと笑って「もう一度いわせて」と続けた。

「お帰り。マシロ」

優しく迎え入れられるその言葉に私は自然と微笑み頷いていた。

「―― ……うん。ただいま」

第五十六話…黒猫専属薬師

何はともあれ！

カナイも無事に復学し、私も図書館で元の生活に戻ることを許された。

そういえばシゼは、凡人をほったらかしにして上級階位に上がっていた。

こちらに戻って来てから暫らく、マリル教会から隠れるように生活していたものの、最近は大っぴらに探し回っている白い月の少女、いわゆる聖女像があまりにも私から掛け離れているものになってくれていて私は自由を取り戻していた。

みんなの様子から、多分適当な情報操作を行ってくれたのだろうことは、明らかだけどそのことをこれまた直接私に話してくれる人は居ない。

相変わらず私の周りは私に気が付かないように私を守ることを徹底してくれているようだ。だから私はそういうのに自然と敏感になっていた。

「マシロちゃん、今日はもう良いよ」

今日、私は図書館から近いお菓子屋さんの手伝いをさせてもらっていた。

愛想も気も良い店主に挨拶して、店を出ると足元に黒猫が擦り寄ってくる。

「迎えに来たの？」

よっぽど暇なんだね、と、悪態吐きつつ私はブラックを抱き上げる。

ブラックは知っている人は知っているし、知らない人は知らないというくらいの民間認知度のようだった。けれど、王都には蒼月教徒もマリル教会の者も混在しているから、出来る限り接触はしないように、と、エミルに釘をさされ妥協案としてブラックは私が町に出ているときは猫の姿で私の傍に居ることが多くなった。

「わざわざギルドを続けなくても、マシロの三十人や四十人養うくらいの甲斐性あります」

ブラックは未だに私がギルド依頼を受けて生活費の工面をすることに否定的だ。とはいえ、私が三十人も四十人も居たら……それこそ始末に終えない気がする。というか、私はゴキブリか。

「好きでやってるんだから良いでしょ」

「そうはいいますけど……つくしゅん」

猫の姿で不機嫌になられてもそんなに怖くない。可愛いだけ。うん、無条件で可愛いです。

まだまだ悪態を続けそうだったが自ら発したくしゃみで口を閉じた。今は四つ足の姿だからはっきりとは分からないけど、いつもより少し体温が高いような気がする。

「体調悪いの？」

私の問い掛けに、ブラックは首を振り猫らしく私の腕に額を擦り付ける。

——…可愛い…。

図書館に戻るとまずカナイを発見した。廊下にまで並べてある本を物色していたようで、踊り場には新しい本の山が出来上がっていた。

「お前ずーっとこの格好してれば良いのにな」

カナイは猫の姿をしているときのブラックにメロメロだ。そろそろ手を伸ばし撫でようとするが今まで達成されたことはない。

「ふわ、柔らかいな……」

「え？」

カナイの手が私の腕の中のブラックを撫でたことに驚いて顔を上げるとカナイも目を丸くしている。

でも手は離れない。

本当に触りたかったんだね。

気の毒すぎてほろりときそうだ。少し呆れた私にカナイは「わりい」と苦笑する。

「……何か身体が熱くないか？」

「私もそう思ってたんだ、け、ど、うわあっ」

急にブラックが猫から人型に戻って押し掛かってきたものだから、私はそのまま廊下に押し倒されてしまう。驚きにそのままになってしまふけれど、全体重を掛けているのか、物凄く……

「ちょ、お、重い」

「……み、ま、せん……」

息声で私に謝罪して身体を起こそうとしているようだけどそれも間々ならないらしい。

傍に居たカナイが、ブラックの腕を引いて身体を持ち上げること
で、やっと、離れるがブラックは直ぐに膝を折りカナイを巻き込ん
で廊下と仲良くなった。

「うわっ！ お前、凄い熱。っていうか、男に抱きつかれる趣味な
いから離れるよ、って無理なら、マシロ、ぼさっとしてないでアル
ファ呼んで来い！」

カナイに怒られて私はわたわたと寮まで戻った。

「……えー、僕ですか？」

エミルとアルファを連れて私が戻ってくると、一応二人は踊り場
のベンチまでは辿りついたらしい。

その様子にアルファは呆れていたものの、私の部屋までブラック
を運んで欲しい。と、お願いすると激しく嫌そうだ。

アルファの気持ちは良く分かる。

一応、直ぐに抜刀するという危険はなくなったとしても、アルフ
アはブラックが大嫌いだ。

アルファはぐったりとカナイの肩を借りて座り込んでいるブラッ
クを見下ろして嫌悪を露わにしたが、ちらと私を見たあと、盛大な

溜息を落として「仕方ないですねえ」とブラックの腕を取り「よしよ」と背負ってくれた。

細身とはいえ、自分の身体よりも大きなブラックを簡単に担いでしまうアルファは、やっぱり体育会系。私は声に出せない納得に頷いた。

ブラックは意識が朦朧としているのか微かに唸り声を上げたただけだ。

私はブラックを三人に任せて医務室に走った。

部外者だけど、多分、エルリオン先生なら診てくれると思うし、氷枕とか熱さましとか薬も必要だと思う。

医務室に駆け込むとエルリオン先生はいつもどおり麗しい笑顔で「どうかしましたか？」と迎えてくれた。そんな落ち着き払ったエルリオン先生の手を取って「取り合えず来てくださいと」半ば無理矢理医務室から連れて出た。

エルリオン先生は私のベッドに横になっていたのがブラックで、多少は驚いていたようだったけど「そういえばマシロさんの保証人は闇猫本人でしたねえ」と微笑んで直ぐにいつも通り診察してくれる。

「あの、大丈夫ですか？」

「んー、疲労からきているのだと思いますから薬を飲んで休めば治りますよ」

そういつて私に解熱剤ですよ。と、薬を握らせて部屋で見守ってくれていた三人と軽く言葉を交わすと部屋を出て行った。

一緒に居る時間が多いのは私なのに、ブラックがそんなに疲れていたなんて……全然気がつかなかった。時折、苦しそうに唸るブラ

ックを見て肩を落とす。はあと嘆息した私の肩越しにエミルが水の
入ったコップを渡してくれた。

「……ブラック？ 起きられるかな？ 薬飲んで」

それを受け取って軽くブラックに触れる。

「い……りません」

「ん？」

「必要、ありません。すみません……私は、た、にんが作った、く
すり、飲めない……」

熱い吐息を吐きながら途切れ途切れそう告げるブラックに、何を
子どもみたいなことをいつているんだと眉をひそめ「飲まないと良
くならないよ」と宥めるように口にして、ブラックの身体を起こそ
うと触れると「いけない！」と思い切り弾かれた。

「痛っ」

片手にしていたコップが床に落ち割れてしまう。

「マシロちゃん！ 大丈夫ですか？！」

慌てて私に寄り添ったアルファが心配そうに肩を支えてくれる。

私はブラックに弾かれた手を抱えて呆然としてしまった。

ブラックに拒絶されたのはこれが初めてだ。胸がきゅつと苦しく
なり眉をひそめそうになるが、私はなんとか微笑んだと思う。

「……ごめん。でも、本当に酷い熱なんだよ」

「ほん、とうに、飲めない、んです。すみません、屋敷に戻ります

から」

「戻るわけじゃないでしょう？ 力も使えないから猫の姿も保てなかったんだろうし」

私たちのやりとりを床に散らかったガラスを片付けつつ聞いているエミルが、仕方ないなという風に息を吐くと、よいしょと立ち上がる。

「僕が作ろうか。駄々を捏ねられていつまでもマシロの部屋を占領させておくわけにもいかないからね」
「嫌です」

エミルの優しい言葉にブラックは即答した。エミルの笑顔が一瞬凍りついたような気がしてこっちが慌てる。

「マシロが」

「うん？」

「マシロが作ってください。マシロが調剤してくれたなら多分飲みます」

……それでも多分なんだ？ っていうか、私は最近ようやく中級階位に上がったところだ。

内服薬なんて作ったことない。

私が調剤するより明らかにエミルが調剤するものの方が、安心安全だということは誰でも分かることなのに。

眉を寄せた私にエミルが「分かったよ」と頷いた。

「マシロに作ってもらおう。大丈夫、僕が教えてあげるし見てるから」

そういつてエミルは、行こう、と、続けて私の背中を押した。
部屋を出る前にブラックが逃げ出さないように見張っていて、と、
カナイとアルファに釘をさすとアルファがにっこりと「逃げたら切
って良い？」と聞いてきたので、普段なら絶対了承しないがちよつ
と腹が立っていた私は、良いよ。と、頷いた。

カナイが呆れたように笑ったのが余計癪に障る。

私とエミルは医務室を借りて作ることにした。

エルリオン先生に事情を説明したら苦笑していたが、仕方がない
ね。と、了承してくれた。

直ぐに飲むからと薬湯を作る。

薬草棚からエミルが必要な薬草を用意してくれる。乾燥させたも
のでは効果が薄いものは先生が温室まで取りにいつてくれた。

みんなに、迷惑を掛けている。

私はそのことが心苦しくブラックへの不満が募る。

「マシロ、もう少し細かく磨り潰した方が飲みやすいと思うよ」

「飲み難いくらい良いの！」

思わずエミルに八つ当たりしてしまった。

はたと気が付いて謝罪するとエミルは、くすくすといつも通りに
微笑んで許してくれる。傍でのんびりお茶を飲んでいた先生が「
…もしかしたら」とぼつと口を開いた。

「マシロさん、彼は本当に飲めないのかも知れないですよ？」

潔癖症とかそういうことだろうか？ 確かにブラックは猫だし綺

麗好きなのだろうとは思うけど、だからって薬まで手作りさせるなんて、私が薬師じゃなかったらどうするつもりだったんだ。

小首を傾げた私にエミルが意外にも「僕もそう思います」と頷き付け加える。

「きつと、本当に受け付けないんだと思うよ。僕もそれに近いから少し分かる」

鍋に磨り潰した薬草を加え、ぐるぐると掻き混ぜながら益々不思議そうな顔をしただろう私に、先生が話を続けてくれる。

「これは私の予想ですけどね？ 彼は過去、毒を盛られたことがあるんじゃないですかね？ そして、それで生死の境を彷徨った。そういう経験のあるものは大抵、他人の調剤した薬は口に出来ません。身体が受け付けないですよ」

貴方は信頼されているんですね。と、付け加えられて私は顔が赤くなるのを隠すように鍋の中身を見詰めた。

「……じゃあ、エミルも？」

「僕？ 僕は昔からそういうのには最大限の注意を払うように仕込まれているからね？ まだ飲んだことはないよ……でも、口にしなかったただけだ」

そういつて苦笑したエミルになんだか切なくなった。

要するに、二人とも誰かに命を狙われたことがあるということ、それはとても幸せなことだとは思えない。

第五十七話：良薬と毒薬紙一重

「……苦い、です」

なんとか私が頑張って作った薬湯は飲んでくれた。

「本当に大丈夫なのか？ 何で苦いんだ？ 確か、解熱作用のあるものは柑橘系の味が……」

「うーん。ずーっと傍に居て、ちゃんと見てたから間違っではないんだけど、どうして味が変わるのかなあ？ マシロマジックだよね」

背後でカナイとエミルが小声で話しているのが気に障るが気にしない。

ブラックにだって絶対聞こえているはずなのに、気にすることなく頑張って全部飲み干してくれた。うん。病人は素直で良い子にしているといけない。

ちゃんと薬を飲んだブラックの頭を良い子良い子と撫で——熱の影響だろうけど、くたっとなってる耳が可愛すぎるとか気にしてはいけない——その流れで額に手を当てるとまだまだ熱い。

エミルがベッドの傍に机の椅子を運んできてくれる。私がそれに腰を下ろすと、三人は、また何かあったら呼んでと部屋を出て行った。

ブラックは落ち着いたので直ぐに寝息を立て始めた。

仕事忙しかったのかな？ でもブラックの仕事が忙しいって嬉しくないことだよなあ。

私は一人曖昧な笑みを浮かべる。

それでも体調が悪いのにも直ぐに気が付いて上げられなくて、私
って駄目だな。正直、自己嫌悪だ。

それに何も知らないくせにブラックが薬が飲めないといったこと
に腹を立ててしまった。ごめんね、という気持ちも込めてそつと手
を握ると、夢の中のはずなのに軽く握り返してくれる。

他の人にどうだか分からないが、やっぱりブラックは私にとても
甘い。

エミルが部屋まで夕食を運んでくれたときもブラックは眠ってい
た。エミルはそれを見てくすりと笑いを零す。

「マシロの傍は、余程心地が良いんだろうね？ ああ種屋さんが、
あーんなに無防備な顔で寝てるんだから」

「熱があるからだよ」

「違うと思うけど、悔しいからそういうことにしておくよ」

エミルはふんわりといつものように微笑んで私の頭を撫でてくれ
る。

そして、私に無理をしないように念を押して、部屋を出て行った。

日付が変わる頃、小さなノック音と共にカナイが顔を出した。

うとうととしていた私の肩を叩き「変わってやるから、俺のベッ
ドを使え」と声を掛けてくれた。私はごしごしと目を擦りつつ、窓
の外を見ると今夜は特に月が明るいのか真夜中という感じはしない。

「どうせ、気になって眠れないから良いよ」

「横になるだけでも違うぞ？ 入れ替わりにお前が倒れたらどうす

るんだ」

カナイのいうことも良く分かる。

良く分かるけど、私にはもう一つ離れられない理由があった。真剣に心配してくれているカナイに、私は曖昧に微笑んでしつかり掴れてしまっている手を僅かに持ち上げた。

それを見たカナイは呆れたように肩を竦め「なるほど」と苦笑した。

「これが本当に世界が恐れる闇猫なのかねえ」

「誰だって病気のときは弱気になるし、寂しくなるよ」

どうしようもないなという雰囲気でカナイは苦笑する。そして着ていた上着を脱ぐと私の肩に羽織らせてくれた。

「夜は冷える、無理はするなよ」

と、ぶっきらぼうに添えて私の肩をぽんぽんと叩くと部屋を出て行った。

去り際にありがとうと声を掛けるとひらひらと片手を振った。

私が最初にこの世界に落ちてきた頃は、暑くもなく寒くもなくという季節だった。年中この世界はこんな感じなのかと思っていたら日本と同じように四季があるらしく、最近は日中は暖かいことが増えたが夜はカナイの言葉どおり冷える。

規則正しい寝息を聞いているといつの間にか私もうとうと夢に落ちていった。

カーテンを閉め忘れ入ってきた朝日に私は目を覚ます。

座ったまま同じ姿勢で眠っていたので身体が少し軋んだ。んーっ！と、背伸びをするとそれに驚いて窓際で羽を休めていた小さな鳥が逃げていく。

ブラックは、まだ寝ているみたいだけどそっと額に触れると昨日よりは下がっている。私の手がくすぐったかったのかブラックの耳がびるびると動き、ゆっくりと瞼を持ち上げた。

「おはようブラック。調子はどう？」

「……おはよう、ございます。あの……えーと？ 記憶が曖昧で、確か昨日はマシロをクリムラまで迎えにいった、そのあと……」

ぼんやりする頭をフル回転させているのか、眉間に深く皺を刻んで記憶を辿っている。そして行き着くともう一度だけ、ああと唸った。

「すみませんでした」

「良いよ。それから、こういうときはすみませんでした。じゃなくて、ありがとう。が嬉しいよ？」

それから、もう手離して良いかな？ と付け足すとブラックはいつもの余裕のある態度とは対照的に慌てて私から手を離れた。

「まだちゃんと熱が下がってないみたいだし、もう少し休んでいて？ 私、何か朝食と薬用意してくるから」

「マシロ。大丈夫です。もう一人で起きられますし、屋敷に戻ります」

「……病人が何をいつてるの？ 戻らせるわけないでしょ？ せめ

てちゃんと熱が下がるまではそこで寝てるの！」

良い？ 勝手に部屋を抜け出したら口利かないからね！ と、叱咤して私は部屋を出た。

朝食の調達はアルファに頼んで、私は医務室へと向かう。朝が早いからまだエルリオン先生は来ていないかも知れないけど居てくれると良いなと思いながら扉を開く。

その先にのんびりとハーブティーを傾けているエルリオン先生の姿を見つけて胸を撫で下ろした。私に気が付いた先生は「どうしましたか？」と朝からとても爽やかな笑顔で問い掛けてくれる。

「またお薬を作らせて貰おうと思うんですけど、熱も下がってきたみたいだし同じじゃない方が良いですよね？」

「そう、回復してきましたんですね。それは、うん、良かった。可愛い看護師さんのお陰ですね」

ふふっとお上品に微笑まれるとなんだか気恥ずかしい気持ちになる。

「そんなことないんですけど、あの、次はどうすれば良いですか？」

「んー、彼なら熱さえ下がれば大丈夫だと思いますけど、マシロさんは何かして差し上げたいんですね？」

先生に指摘されて私の心臓がどきんと跳ねる。

確かにこんな事態早々起きないだろうと思っていたのは本当だし否定出来ない。私がブラックのために何か出来るということが少なからず嬉しくもあった。先生は顔を赤くした私にくすくすと微笑むと昨日と同じように薬湯を作る準備をしてくれた。

「……そういえば、先生はブラックのことどう思っているんですか

？」

「嫌いですよ。ええ、嫌いです。」

分かるよ、分かってます。

ブラックはとつても嫌われものですよね？

でもいつも温厚で柔らかい物腰の先生にそうはつきりといい切られると心臓に悪いです。

あはは……と、乾いた笑いを浮かべた私に先生も緩やかに微笑んで、そつと口元に指を添えると秘め事を囁くように話を続けた。

「ですが、彼を嫌っていては貴方の笑顔が曇るので理解出来るよう善処しますよ」

その先生の毒のない笑顔に、私は胸を撫で下ろして「ありがとうございます」と微笑んだ。

―― ……どんっ

私は短い悲鳴を上げた。

出来上がった薬湯が冷めてしまわないように、急いで廊下を歩いていかせいであまり前が見えていなかったから誰かとぶつかってしまった。怪我也痛みもないものの残念ながら薬湯は全滅だ。

「マシロ、ごめん」

呆然と床に転がったマグカップを見下ろしていた私に掛かった声は聞き慣れたものだった。顔を上げると申し訳なさそうに眉を寄せ

て、怪我はないかと顔を覗き込んでくれるエミルの姿があった。
私が大丈夫だと笑うと、エミルは眉を寄せたまま口元を緩めて本
当にごめんねと謝罪する。

「エミルこそ急いでたみたいだけど大丈夫？」

私は落ちてしまったカップを拾い上げ、廊下の隅に立てかけてあ
った掃除道具で、濡れた床を簡単に拭き取った。

「マシロを探してたんだよ。先に食堂かと思ったらアルファから医
務室に一人で向かったって聞いたから、先生が来てなかったら困っ
てるだろうと思って」

「そっか、有難う。先生も居たから一応作ってはみたんだけど」

手の中のマグカップを二人揃って覗き込む。

もう何度目かの謝罪を申し訳なさそうにしてきたエミルに、私は
首を振った。

今回の薬湯は昨日ほど重要なものじゃなかったから気にしてもら
うほどのものじゃない。作り直すなら付き合うよといってくれたエ
ミルに私は気にしないでと答えて部屋に戻ることにした。

黒猫と種屋（前書き）

※ エミルサイド ※

黒猫と種屋

「どういふつもりですか？」

始業前の医務室。

真白と別れて真っ直ぐにそこを訪れてエミリオは開口一番から怒りを露わにしていた。

手には真白から返却を頼まれたマグカップが握られている。それをちらりと見たエルリオンは短く嘆息して「ああ」と頷いた。

「運が良ければ口にしてもらえるかと思ったのですが、無駄になってしまったんですね？」

「マシロにこんなものを作らせて、彼女は何も知らない！ 何も知らないマシロにブラックを殺させるつもりですか！」

普段温厚な分だけ、その声には凄みがあり、聞いたのがカナイたちであつてもぎくりとしただろう。けれど、エルリオンは眉一つ動かすことなく、唯一、細く長い息を吐いただけで、座っていた椅子を、キィと揺らした。

「でも飲まなかった。結果は伴っていないわけですから良いじゃないですか。闇猫は悪運だけは強いようですね」

エミリオはエルリオンの傍に歩み寄ると、机の上に空になったマグカップを湧き上がる怒りとは、対照的にそっと置いた。

「しかし、流石ですね。よく分かりましたね？」

机上に置かれたカップを見詰めて、くつくつとエルリオンは笑い

を零した。エミリオは些か呆れたというような溜息を吐き話を続ける。

「これがそうだとは思いませんでしたが、昨日解熱剤だとマシロに渡した薬を拾ったときにおかしいと思いました」

「ふふ。あれも素直に飲んでくれれば良いのに……本当に、悪運の強いことです」

「ブラックに関して、貴方は信用ならないと判断した。だから昨日は僕がついて作らせた……今日もそのつもりだったけど出遅れたから、もしもの危険のあるものを口にさせるわけにはいかないでしょう？　少々乱暴な手段だったかと思いますが……」

ぽつぽつと口にするエミリオの言葉を最後まで聞いてエルリオンは口角を引き上げた。

「種屋なんてなければ良い。貴方だってそう思うでしょう？」

くすくすと普段の笑みとは掛け離れた伶俐な笑いを零し、そう紡ぐエルリオンを恐らく真白が目にしたら悲しそうな顔をするだろう。そう思うと、怒りよりも切なさがじわじわと心から染み出してきて、エミリオは眉をひそめ、短く嘆息した。

「種屋は無くなりません。ブラックがもし死んでも種屋は無くならない。だから彼の死に意味はない」

違いますか？　と重ねられ、エルリオンはのんびりと「そうですねえ」と相槌を打ち、ぼそぼそと「意味はない、か……」と零した。エミリオ自身。そんな言葉を吐いた自分もよく分からない。命にそう大した意味はない。それは自分たちもちろん、種屋も例外ではない。この世界のものならば、皆、そう思っているはずだ。例えば、

明日自分の命が尽きても何も感じだないだろう。それが普通だ。

今自分が口になっていることの方が“普通”じゃない。けれど、真白を見ていると、それが普通じゃない自分の感情の方が尊いもののように感じられて、どこか心地が良かった。

だから、エミリオは話を続ける。

「それに、あんな男でもマシロは愛してます。僕は彼女を悲しませたくはない。もう、馬鹿なことを考えないで下さい。彼の命を狙うのは自由。貴方以外にも多くそう考えている者は居るでしょうから。ですが、彼女を利用することは許さない。自らの手は汚さず、人が唯一信頼している者を利用するなんて種屋にも劣る」

きっぱりとしたものいいでいい放ったエミリオに、エルリオンは自虐的な笑みを浮かべて「種屋にも、劣る……ね」と口内で繰り返して呟いた。

エミリオには、エルリオンと種屋との間にどんな因縁があるのか分からない。

因縁などなくても、種屋というだけで恨みに思うものも多いだろう。常に種屋は世界の暗い部分と共にあり、人々の闇を背負っている。

それだけで、十二分に恨まれる価値があるというものだ。

「僕、少しでも考えを変えたんですよ……」

「王族である貴方が、種屋との共存とかいい出しませんか？」

「まさか。そんなもの、争いの火種にしかない。種屋はどこにも属するべきじゃない。その結果が招いたことはこれまでの歴史でハッキリしている。それなのに人は繰り返すでしょう？」

そう、このまま彼はどこにも属するべきじゃない。

寄り添うものが必要ならば、それは天が示すのと同じように、白月の傍らであるべきだ。

「世界が忌むべきは種屋のあるべき姿、彼個人ではないのだと」

まあ、個人的な恨みはあるので、僕はブラックが好きじゃないですけどね？ と笑ったエミリオにエルリオンは暫らく呆氣にとられたものの、ふと我に返れば「なるほど」と重ねて堪えきれないという風に笑いを零した。

第五十八話…たまには倒れてみるもんだ

部屋の前ではアルファがトレイを持ってうろうろしている。一人で入るのは嫌だったんだろう。私の姿を見つけてぱっと笑顔になった。アルファからトレイを受け取るときよろきよろきよろとしているアルファにどうしたの？ と問い掛ける。

「え？ ああ、うん。エミルさんと一緒じゃないのかと思って」「エミルなら医務室だよ。先生にちよっとっていった…」

そのときのエミルの表情を思い出して私は少し不安になった。どうしたんですか？ と可愛らしく私の顔を覗き込んでくるアルファに「ちよっと……」と言葉を濁して

「エミル怒ってたような気がする」

いってから「まさかね」と曖昧な笑みを零すと、アルファはふーんと少し何か考えつつも結局その内容は私に告げられることなくいつもの笑顔に戻った。

「マシロちゃんは、今日授業休んじゃうんですか？ そうだったらカナイさんにいつときますよ？」

私はちらりと自室の扉を見たあと「そうだね。お願い」とアルファに答えて部屋へ入った。もしかしたら、居なくなってしまうているんじゃないかと思ったけれどブラックは私が出て行ったときと同じようにベッドに横になってまた眠っていたようだ。

私が入ってきたのに気が付いて、枕を背に上体を起こした。

「遅かったですね？」

「うん、別に何かってわけじゃないんだけど時間が掛かっちゃった。少しは食べられるかな？」

「マシロが食べさせてくれるなら」

いつもなら自分で食べなさいと押し付けるところだけど、私も病人にそこまで非情ではない。だから良いよと頷くとブラックの方が驚いていた。

「はい、あーん」

ベッドの傍に置きっぱなしになっていた椅子に腰掛けて、膝にトレイを載せてリゾットを一口掬ってぱくり。美味しい。この食堂の料理って美味しいよね。……って私が続けて食べていてもいけないので――因みに一口目は毒見です。猫さん警戒心が強いので一応――改めて掬って差し出すのに

「あの、手しびれるんですけど？」

「えっ！ あ、ああ、すみません……」

いっても口が一向に開かないのはなぜですか？

私とその手元を交互に見て、柄にもなく頬を染めてしまう。恥ずかしいのか？ 私はもっと恥ずかしいよっ！

「自分でいいだしたことでしょう？ 心配ならもうひと口毒見しましょうか？」

意地悪く告げれば「いえ、結構です」とぱくり。

お上品に口元を覆って咀嚼する姿が愛らしい。恥ずかしいんだろーな、耳がペしゃんってなって微妙に揺れてるもんなー……。思

わず凝視。

「美味しい？」

「……分かりません」

ん？ 熱のせいで舌がおかしくなっているのかな？

「あの、味も分らないくらい恥ずかしいので、やはり自分で」

「全部、私が食べさせてあげる」

即答した。

だって、ぶふっ。あのブラックがそんなに恥ずかしいなんてっ。嗜虐心をくすぐる。全ては猫耳が悪い。愛らしい猫耳が……。

その姿に私も少しだけ元気になった。

「はい、あーん」

「――……はい」

ぱくり。

ふふ……可愛い……。

私の嫌がらせともいえるお食事タイムを終えて、空いたトレイを机の上に載せ、ブラックにお茶を淹れた。ああ、楽しかった。

それを片手に傍に寄ると、カップを持った私の手をそっと掴まえ、顔を寄せる。

そして、人の指先ばかり気にするので、どうしたのかと首を傾げ

るとブラックはにっこりと微笑んで「いえ」と首を振った。

解放された手と入れ替えるようにカップを握らせると、やんわりと湯気をあげるジャスミンの香りにブラックは口角を引き上げた。

「また凄く苦い薬湯を飲まされるのかと思いました」

「……う、でも今日のは苦くないと思ったんだけど、ごめん。廊下で引っくり返しちゃって……」

折角作ったのに、という気持ちもなかったわけではないので、心持ち私は肩を落としてしまった。

そんな私にブラックは普段と変わらない笑みを浮かべる。

「今日はどなたに指導してもらったんですか？」

「ん？ エルリオン先生だよ。いつも医務室に居る先生。エミルには会えなくて先に医務室に行ったら先生が居たから、今日は体力回復に良いっていうのを教えてもらって作ったの」

ゆっくりとお茶を飲むブラックを眺めながら説明すると、顔を上げたブラックは「飲めなくて残念です」と微笑んで、もう一度私の手を取るとそっと指先に口付ける。

「マシロは授業があるのではないですか？」

続けて掛けられた問い掛けに、私は「休む」と告げるとブラックはそんなに重病人ではないですよ。と、苦笑した。

それは分かっているけれど、見た目によらずブラックは休むということをしない人だと思う。

正直なところ、ブラックが仕事以外何をやっているのか私は全く

知らない。と、いうかブラックに関して私は知らないことばかりだ。

だから余計に見張っておかないと、どこかに行ってしまいそうで私は傍に居たかった。

「ちゃんとここに居ますから、授業を受けてきてください。午後は屋敷に戻りたいと思いますが、許していただけますか？」

冗談みたいな口ぶりのブラックに私は眉を寄せた。

私の許しなど関係なくブラックは屋敷に戻るだろう。私もいい加減勝手だけどブラックだって勝手だ。

私なんかが彼の動きを止めることなんてきつと出来ない。

それでも確認を取ってくれるのは、やはり大切に思ってくれているからだと言いたい。

「そんな泣きそうな顔をしないでください。私も出来ることならのんびりと貴方と共に過ごしていきたいと思います」

「泣きそうになんて……でも、本調子になるまで休めないの？ 休まないと危ないよ。もしも」

ブラックは自分が日常茶飯事的に命を狙われたりするって分かってるのかな？ 意図せず、ぎゅーっとブラックの服を掴んでいた私に、ブラックは益々笑みを深め「たまには倒れてみるものですね」と縁起でもないことを口にする。

その台詞に眉を寄せて馬鹿なことをいわないで、と、怒ったがブラックから笑みは消えない。

「マシロがとても優しいです」

「……失礼だな。いつも冷たくなんでないでしょ」

不貞腐れた私にブラックは「そうですか？」とワザとらしく首を傾げ「そうですね」と続けてやっぱり微笑んだ。

今更なのにその笑顔にも私は弱い。

ほわりと熱を持つ顔を隠すようにそっぽを向いて私は「勝手にしたら良いよ!」と立ち上がり扉へ向かった。

「いってらっしゃい」

というブラックの言葉に見送られ、私はばたんつと乱暴に扉を閉める。

そして自分で閉めた扉に背を預け深く溜息を吐いた。戻ったら……きつとブラックは居ない。

私には止められない。

そんなこと今更なのに私はこんなにも苦しくなる。ぐつと苦しくなる胸を押さえて俯くと唇を引き結ぶ。そして、ぶんぶんつと頭を振ると顔を上げた。

元気出せ私!

こんなことくらいでへこんだら自分が切り捨てて来たものに申し訳ない。私は指を折ったくらいじゃ足りないくらい、沢山のものを捨てて今ここに居るのだから!

ぱんっ! と、両頬を叩いて、かつんつと踵を鳴らし廊下を走った。

いつもより少し遅い所為で廊下には咎める人も居ない。

このまま教室まで猛ダッシュ。

黒猫と王子（前書き）

※ブラック・エミルサイド※

黒猫と王子

「……さて、と」

真白が部屋を出て辺りに静寂が戻る。主の居ない室内は殺風景にも感じる。それだけ、彼女がこの場所に馴染み溶け込んでいるということだろう。

ブラックは、ふうと長嘆息したあとベッドから抜け出し、緩めていた襟元を直し上着を羽織った。

そして、感触を確かめるように、じつと手を見詰めて何度か握り愛用の杖を出現させたり、消したりを繰り返し頷いた。

「ああ、もう元気そうだね？」

ノックもなく、かちやりと部屋に入ってきていたのはエミリオだった。

ブラックは首だけで振り返り「お陰様で」と口角を引き上げる。

「それで、どこへ行くつもりだったの？　きっとマシロはまだ寝てるように釘をさしたんじゃないかな？」

「それと貴方の不躰な訪問に何か関係があるのですか？」

「あるよ。君の用向きによっては……だけど、間違いないかと思う」

「私は少し野暮用が出来たので片付けてくるだけです。まだ本調子ではありませんが、不穏分子くらい摘み取るのに支障はきたしません」

もう一度出現させた杖をくるりと回して意味ありげに微笑んだブラックに、エミリオは短く嘆息する。

「それ、見逃してくれないかな？　きちんと彼には釘をさしてきた。ちよつとした気の迷いだよ。この世界で君を恨んでいるものなら誰にだって有り得る話だと、君だって分かっているはずだ。それを一々消していたら埒が明かない」

エミリオの願いに、ブラックはほんの少し驚いたような表情を見せたものの、直ぐにいつもの伶俐な笑みを浮かべた。

「私の琴線はそんなことで鳴ったりしません」

「分かっているよ。マシロに生成させたことに腹を立ててるんだよね」「直ぐにそこへ行き着くということは、貴方も同じだということでしょう？　なぜ止めるんですか？　前々から変わっていると思っていましたが変な人ですね。まさかマシロと同じようなことをいうほど安穩としている、とも思えませんか？」

ブラックに変な人呼ばわりされてエミリオは曖昧な笑みを浮かべた。

物凄く心外な台詞ではあるが、真白の感覚にあわせるとすれば自分も十分に変わっているだろう。

「マシロはあの人に懐いている。急に居なくなったら心病むと思うし悲しむと思う。彼はもうマシロを利用するようなことをしないと誓った。だから……」

エミリオの言葉を聞いていたブラックが「私が」と割り込む。

表情は笑みに違いないが冷笑だ。

凍るような冷たい表情。

以前のブラックなら常に見せていた表情だが、エミリオは久しぶりだと思い心の中だけで笑った。

「私が、マシロの名前を出せばいつでも刃を納めると思ったらそれは間違っていますよ?」

「そうかな? 君は納めるよ。だって君は落ち込み悲しみに暮れるマシロを立ち直らせる術が思い浮かばない。だから、極力最初から傷付けないように振舞っている。決して深い傷を作らないように浅く傷付けて様子を伺ってる。君はマシロに対して臆病だよ」

不遜とした態度のエミリオを、ブラックは暫らく見詰めていたが、ふっと瞳を伏せると首を振り肩を竦め、手にしていた杖を消した。

「気が逸れました。もう結構です」

貴方も出て行ったらどうです? 出て行かないのならお茶でも淹れてください。と、続けてやれやれと嘆息したあとブラックは椅子を引き寄せて腰を下ろす。

「僕が淹れたのを飲むんだ?」

「は? 私に淹れるというんですか? 私は病人です。マシロにならともかくどうして私が貴方に?」

エミリオはブラックの過剰な反応にくすくすと笑いつつ、さっきまで人一人殺めに行こうとしていた人がよくいうよと思いながらも「仕方がないな」とお茶の用意を始める。

ちらりとブラックを盗み見るとぼんやりと外を眺めていた。

変な感じだ。

以前なら絶対に有り得ない。

自分が闇猫のためにお茶を淹れ、そのお茶を何の疑いもなく闇猫が口にする。

マシロのせいで自分たちは驚くような関係の変化を起こしている。そのことにブラック本人はあまり捕らわれず気にしていないようだが自分はどうかだろうか？

「人の本質は善である」

思案していたエミリオの耳に届いた言葉に驚いて顔を上げる。相変わらずブラックは外を見たままだ。

どこか遠く、捕らえどころがない。

彼が何を思い見詰めているのか、そんなもの分かる人間はこのシル・メシアには一人も居なかった。

そして唯一彼の孤独に気が付いたのは異界人である真白だけだ。

「私はそうは思えませんし、そんな馬鹿なことを考える人間には虫唾が走ります。殺してしまいたいくらい、嫌なものです。でも私は憎まれ口を叩きながらも、根っこの部分ではそう信じているのだから彼女がそう思うことを守ろうとしてしまっている」

私は何をやっているんでしょうね。そう、ぽつぽつと紡ぐブラックの傍にそっとカップを置く。ブラックはその音に机上へと視線を落としその強い香りに眉を寄せる。

「唯のハーブティだよ。生ハーブを使ったから少々香りは強いけど効果が高い。ゆっくり休めると思うけど？」

エミリオの言葉にブラックは「分かっています」と素っ気なく答え眉を寄せたまま、カップを取り口をつける。エミリオはそれをほんの少しの驚きを含めて見詰めていたが、そんな自分に気がつくとき苦笑し、ほっと息を吐いた。

「僕も人間の本質が善だなんて絶対に思えないね。思えないし違うと思う。……でもまあ、世界の中にたった一人くらい、そんな馬鹿なことを真実だと思ってる人が居ても良いかなと思う。自分に対してもそう思ってくれている人が、一人でも居ると思えばそれを全力で守りたい。それが唯一の救いで、変わることをなかった世界での変化なのかも知れない」

彼女はほんの少し捻くれた聖女だね。とエミリオが締めくくるとブラックは苦虫を噛んだような顔をした。

「どうしてそんな顔するの？ 君はルイン・イシル。マシロはシル・マリル……違わないよね？」

「……私は唯の獣族で種屋です。そんなくだらないことをいうのは蒼月教徒の方々だけにしてください。マシロを白い月の少女だと思うのは私も同意見ですけど……大体そんなことをいうなんて、貴方はアノールだと言いたいんですか？」

「僕が太陽？ まさかそんな大それたものじゃないよ。僕は唯の王位継承権から程遠い王子だよ」

こんな世界なんていない。
ぽつと零してエミリオは自分の分のお茶を飲み干した。

彼らが既に回り始めた歯車に囚われていることに気が付くのは、
もつとずつと後の話だ。

第五十九話…踏み込めない距離

午前中の授業が終わってから、私は片付けの順番で寮に戻るのが遅くなった。

カナイが替わってくれろといってくれたけど、それでは申し訳ないし、でも時間も掛かりそうだったから間を取って手伝わせた。

カナイはらしいなと笑っていたが、何がらしいんだか私にはさっぱりだ。

今から戻っても、きっと部屋にブラックは居ない。そう自ら予告していたのだから、それを違うことはないだろうなと思うとちょっと切ない。

夜になったら多分ひょっこり戻ってくると思うんだけど。

ドアノブを握って私は重たく溜息を吐いた。まあ、考えても仕方がないことに頭を悩ませるタイプではない私は「ま、いっか」と自分にいい聞かせ自室の扉を開けた。

「あれ？」

—— …… 予想外だ。

私の予想外にブラックは私の机で転寝していた。

刹那その予想外に驚いて時間を止めてしまったが、我に返った私は胸を撫で下ろして傍にあったストールをブラックの肩に掛けた。

無用心に開いた窓から吹き込んでくる風がブラックの前髪を揺らしている。

風は暖かいけど身体を冷やすには十分だろう。

私はカタンと窓を閉めてから、ぼんやりとブラックの顔を見下ろした。

――…綺麗な顔。

人形のように整って美しい目鼻立ち。だから余計にその中の感情が読み取り難い。

『毒を盛られたことがあるのかも』

仕事柄彼を恨む人は多い。

だから、それも分からなくもない。

でも、ブラックだってそのくらいの想定は出来るはずだから、それでも口にしたということはそれだけ近い人に裏切られたんだと思う。

きつと辛い記憶だよね。

「泣きそうな顔をしていますよ？」

「え……？」

私の顔に何かついていきますか？ と、重ねられて私は慌ててブラツクから顔を逸らした。

ぱああつと耳まで熱くなるのが分かる。

物思いに耽り過ぎて、相手が目を覚ましていることにも気が付かなかった。ブラックは肩に掛かっていたストールを手繰り寄せ畳むと椅子の背に掛け話を続ける。

「何か辛いことがありましたか？ 私で良ければ話を聞きますよ？」

「嫌よ。ブラックに相談したら直ぐに元を断とうとするでしょ？」

「一番手っ取り早く確実だと思えますけど」

私の嫌味にくすくすと笑いながらブラックは答える。

でも本気じゃないのは分かる。

だから今日は許す。

「それにブラックが居るなら辛いことなんてないよ」

そういつて笑った私にブラックは、刹那、きょとんとしたあと物凄く珍しく頬を赤くした。そしてその理由に気がついた私も顔が熱くなった。

考えていたことが考えていたことだけに、生きているって素晴らしい！とか、変な方向に考えが飛んでいたから、ついぼろっと出た。

私は、なんて恥ずかしいことを口走っているんだ。

そんな私の様子にブラックのほうが先に平静を取り戻し、椅子から立ち上がる。いつもの余裕のある態度で頬を撫で慌てる私の顔を楽しそうに見ている。

だから益々私の頭に血が上って天パってくる。

「いや、その、だからね！ 本調子じゃないのに、出てって誰かに襲われたりしたら、とか、その、あの……色々と」

「心配してくれたのですね？」

間違っていないので、否定出来なくて……私は苦し紛れに咳払いをして話題を変えた。

「と、取り合えず、居るなら休んだらどう？　こんなところで転寝してるくらいならベッドに横になったほうが良いって」

「え、ちよっとマシロ、危ない」

ブラックの両腕に手を掛けて無理矢理ベッドに座らせようとすると、バランスを崩して私がブラックをベッドに押し倒す形になってしまった。

きゅっと反射的に瞑った目を開けると間近にあるブラックの瞳が心配そうに揺れている。

その瞳に映る私は真っ赤だ。

慌てて離れようと暴れると上手くいかなくて、落ち着いてください。と、抱き込まれてしまった。

「今起こして差し上げますから、じっとしててくださいね？」

やんわりと告げられて私は、顔を真っ赤にしたままコクンと頷いた。雰囲気からブラックが優しく微笑んだのが分かる。

ブラックはそのままお腹に力を入れて、私を抱き締めたまま簡単に起き上がってしまった。

と……っと、床に足が着くと胸を撫で下ろす。

するりと背中から滑り降りたブラックの両手がそっと私の手を取り、私をじっと見上げてくる。私の心うちを覗くように見上げてくる漆黒の瞳が綺麗だ。

そこに映る私は今度はとても不安そうな顔をしている。

「私に話があるのですか？ 貴方のお話ならちゃんとお聞きしますよ。それがどんなものであってもちゃんと受け止めます」

ちゃんと、と呪文のように繰り返し双眸を伏せると、掴んだ私の両手を引き寄せて唇を寄せる。

ほんの少し不安そうなその態度に私は、聞くことを戸惑うけど、このまま「何もない」といつてしまうと余計に不安にさせてしまうよね。

私は一度深呼吸し意を決して尋ねようと口を開いたら、私が音を発するより先に「あ」とブラックが声を漏らした。

その様子に「何？」と目で問うとブラックは「すみません」と口早に詫びて腰を上げた。

「来客です。屋敷に戻らないと……」

「え？ 今日くらい休みにしたら？」

「そうしたいのも、無視したいのも、山々ですが溜めると面倒で……こういうとき独占企業は辛いですね。替えがない」

そしてブラックは私が止めるのも聞かず、というか耳に入っていないようで、とっとと消えてしまった。だから私は苛々しながら遅めの昼食を取っていた。

「もう、食べながら本読むのやめてよ！」

「お前も人に当たるのやめろよ」

開いた本から顔を上げることもなくカナイにそう軽く突っ込まれ、私はぐっと息を呑んだ。エミルは昼食を済ませて用事があるとかで外出してしまっていた。アルファはカナイの隣で大量のおやつを頬張っている。

時々これが美味しいからと、私のトレイにもおすそ分けが流れてきて、そろそろトレイからはみ出しそうだ。アルファと同じ感覚でおやつを取っていたら、確実に、転がったほうが移動が早くなるだろう。

「まあ、人が死なない日ってないだろうから忙しいですよねえ。でも大抵、種は持ち込みのほうが多いと思うけど」

それがルールですから。と口をもごもごとさせながら繋ぐアルファの話に、私は肩を落とす。そんな私をちらと見たあとカナイがページを捲る手を休めて提案した。

「気になるなら辺境の町まで飛ばしてやろうか？」

「へ？」

「だから、目の前でそんな顔されるくらいなら居ないほうがマシ。俺が飛ばしてやるよ。種屋の中はちょっと記憶に薄いから無理だけど、まあ、辺境の町くらいまでなら大丈夫だ。馬車で行くよりは早いだろ」

カナイのにこにこ顔と、隣りのアルファが拙そうな顔をしているのを見比べて私は眉を寄せた。

「やったことあるの？」

「ない」

＊＊＊

—— ……ガタゴトガタゴト……

私は王都の外で掴まえた辻馬車に乗った。

自分で移動するのはよくあっても他人を単身で移動させたことない、というカナイの初めての術実験に付き合うのは嫌だ。

何か怖い。

そしてじっとしておくことも出来ない性分だ。ということを出し自力で何とかすることにしたのだ。術に頼れば一瞬でこの距離を移動出来るというのに、片道数時間。

でも術素養を持たない一般人は基本この手段しかないわけだから、これが普通なんだよね。

乗り合わせたのは膝の上に小さな箱を大事そうに抱えているお爺さんと、その肩にもたれ掛かって眠る女の子。

あとは夜のお仕事をされているっぽい雰囲気のお姉さんだ。

私は流れていくのどかな景色を眺めながら、ほうっと一息吐く。

暖かな風に混じって甘い香りがする。

花の季節なのかな？

街道沿いに咲いている花は疎らだけど他の季節よりも薫り高い花が多いのかもしれない。

「あふう」

出てきたあくびを噛み殺し目じりの涙を拭うと、向かい合わせになつていた女の子が、偶然瞼を持ち上げてふわりと微笑んだ。

私はなんだか気恥ずかしくて照れ隠しに曖昧な笑みを零す。

あくびは途中で止めたけど、昨夜は寝不足だしこの暖かさに馬車の揺れ。

どうぞ眠ってくださいと誘われているようなものだ。私は、じわじわと重たくなってくる瞼を持ち上げる力を失った。

第六十話：種屋のお仕事（1）

「―― ……いつ、大丈夫かい？ お嬢さん」

目を開けるとお爺さんの皺の深い顔が、心配そうに覗き込んでいた。

飛び跳ねるように目を覚ますと、お爺さんは胸を撫で下ろしているようだ。その傍でお爺さんの服の裾を掴んでいた女の子が泣きそうな顔で私を見ていた。

前方からは「終点まで着いてるよ」と声を掛けられる。

「あ、その。大丈夫です。降ります」

お爺さんにお礼をいって御者にも告げ腰を上げる。

お姉さんはもう既に降りてしまっているようだ。

二人が降りるのを待って私も馬車から降りると、女の子がちらりとだけ私を振り返ってお爺さんに小声で告げるのが聞こえる。

「あのおねーちゃん目が黒いね。マリルさまみたい」

私は苦い笑いを零して聞かないふりをする。ここに住んでいる人でなければきつと向かう先は一緒だ。私が相変わらずメルヘンタッチな町並みを眺めながら歩いているとお爺さんに声を掛けられる。

「悪い夢を見ておったようじゃが、もしかして種屋に用向きかい？」

顔に沢山の皺があつて老齡を感じさせるが、その殆どは笑い皺のようで、とても優しくそんな笑顔を向けられ私は曖昧な返事を返した。

夢？ 見ていたつもりはないけど確かに気持ちの良い眠りではなかった。

「種を買うならおよしなさい。分不相応なものを持っても救われるとは限らんよ？」

「……え、っと。はい。心配していただいて有難うございます。でも私は種を買うわけではなくて、その……店主に用があるだけですから」

自分のことをどう説明して良いか分からなくて、私が遠巻きに説明をするとお爺さんは皺に隠れて余り見えなくなっていた目を見開いた。

「やめなさい！ 何があったかは知らんが、そんな形で私怨を晴らすもんじゃない！」

「え！ あ、ち、違います！ 私は別に誰も恨んでませんし、そんな怖いことをお願いに行くんじゃないくて……その、ええっと」

顔の前で両手をぶんぶん振って否定した私に、お爺さんはどこか寂しげな顔をしたあと「それなら良いんじゃない」と後生大事に抱えている小さな箱を見詰めた。

そして感慨深げに細く長い息を吐く。

「闇猫は心を持ってはおらん。冷酷で残忍な男じゃ。お嬢さんのような娘さんはあれに囚われるのかも知れんがの……気をつけなされ」

ぽつぽつと続けられたお爺さんの言葉が私を苦しくさせる。でも、それがブラツクの世間一般の評価だ。

「……お、お爺さんは種屋に用事ですか？」

「ユイナはね、おばあちゃんを届けにいくの！ それからユイナの
そようもみてもらうの」

お爺さんの服の裾を掴んで並んでいた小さな女の子がどこか楽し
げに口を開いた。その楽しげな表情に私の心はぎゅっと苦しくなる。
そんな私に気が付いたのかお爺さんは「良いんじゃないよ」と優しい
声で私に告げてから、穏やかな笑みを湛えてそっとユイナちゃんの
頭を撫で「そうじゃな」と頷いた。

門前からどちらが先に入るかで譲り合ったあと、少しでも長く手
元に種を置きたいのだろうお爺さんの気持ちを汲んで私が扉を開い
た。

いつも通り重々しい音がしてゆっくりと扉が開かれ……。

「マシロっ！」

私の視界は衝撃と共に真っ暗だ。

「遅かったですね？ 馬車が到着してから何をしていたのですか？
カナイから傀儡で連絡が来たときには驚きましたが、私に会いた
くて仕方なくて遠路はるばる来てくださったのですね」

「……げ、元気、そうね？」

べったりと、私にくっついてしまったブラックを引き離して呼吸
を整えながら口になると「ええ」と頷き満面の笑みを見せてくれる。
ちよつとは驚かせようと思ったのに、先にカナイから連絡が入っ
ていたのは残念だ。

でも、すれ違う可能性のほうが高かったのだから、やはりカナイ
はそれなりに気が利くわけだ。

「薬も飲みましたし大丈夫ですよ。今夜はこちらで休めますよね？今日の来客はあとお一人だと思いますので少しお待ちいただければ」

「そのお一人様と一緒に来てただけ？」

私がつくりと肩を落として後ろが見えるように立ち位置を変えるとブラックは「おや？」と可愛らしく驚いて「いらっしやいませ」と微笑んだ。

二人に入るように促してちょっと面食らっていた二人が、ゆつくりと屋敷に踏み入ると扉はぱたんっと静かに閉まる。

ユイナちゃんがほんの少し怯えたように扉を見たので、小声で「大丈夫だよ」と告げると無言でこくと頷いた。お爺さんは手にしていた小さな箱の蓋を一撫でして、そっとブラックに差し出した。ブラックはそれを受け取ると箱の蓋を開け中身を確認し軽く頷いた。

「お疲れ様でした。確かに受け取りましたが代金のこともありますし、折角ですから白化もご覧になりますか？」

私には、ブラックが何をいつているのかさっぱりだが、お爺さんには驚きだったようだ。肩を僅かに強張らせて恐る恐るといった風にブラックの顔を見詰めたあと仰々しく頷いた。

「では書斎のほうへ参りましょう。マシロは私の私室か自室で休んでいてください」

足を進めたみんなのあとに自然と続いていたが、ブラックにそういわれて、はたと気が付いた。

仕事に勝手についていくわけにはいかないよね。

苦笑して、そうだね。と頷くと足を止めた私の手をユイナちゃん

が掴んだ。

「おねーちゃんもいっしょにいこう」

きゅつと小さな手に力が籠る。

幼いときの郁斗がお姉ちゃんっ子でいつもこうやって小さな手で私を掴んで放さなかった。困った私にお爺さんが「同席しても構わんよ」と微笑んでくれそれに続く形で「ご本人たちが構わないなら私は歓迎します」とブラックからも了承を得、書斎に入った。

アンティーク調の応接セットに座るように促され腰を下ろしたけど、こんなものいつからこの部屋にあったのだろう？ 私が小さく首を傾げるとそれに気が付いたのかブラックが「最近置いたんですよ」と微笑む。

「さて、と……」

みんなが座ったところで、ブラックは手にしていた箱の蓋を開けた。

ふわふわの真綿に大切そうに埋もれていた種。

その扱いだけでも、お婆さんがとても幸せなときを過ごしていたのだろうと想像出来た。

ブラックはその種を丁寧に取り出すと、左手で受け右の人差し指で、コンコンと二度叩くとその指先で種から何かを取り出すように大きく弧を描いた。

「……ふわぁ……」

思わず感嘆の声が漏れた。

お爺さんも同じ反応で「おお……」と声を漏らす。

種からは

—— …… パラパラパラ……

という音と共に映画のフィルムのようなものが溢れ出る。

ブラックはどんどん溢れてくるフィルムを器用に右手の上で纏めて巻き取っていく。種からフィルムが尽きるとブラックの手の上で丸まったものが、静かに柔らかな光を放っていた。

「はい、これでお仕舞いです。今夜一晩も持ちはしらないと思いますが、翁にこれは必要ですか？」

ブラックは、ずっとお爺さんのほうへ腰を折って手の中のものを差し出した。

お爺さんはまたも驚きに肩を強張らせたようだけど、両手でブラックからそれを受け取る。

うつすらとお爺さんの目には涙が溜まっているようだ。

その表情にブラックは困ったような顔をしたあと、続けてずしりと重たそうな布袋をお爺さんの前に置いた。お爺さんは、手の中のものをじっと見詰めていたがその音に顔を上げると「金はいらん」と首を振ったが、同じようにブラックも首を振った。

「これは種の代金です。私が種に対して代金を支払うのもルールです。そして翁は受け取るのがルール。これは以前にもお話しましたよね？」

「では、これで孫娘の素養を見てやってくれんか？」

「私がお孫さんの素養を……ですか？」

その言葉にブラックは首を傾げつつも「構いませんよ」と頷いた。そっと床に膝を着いたブラックはユイナちゃんを、こちらへと手招きした。

まだびくびくしていたユイナちゃんの背中を押してあげると、私まで引つ張り出される。「マシロはレディに触れないで下さいね？」と念を押されて私は頷くと傍に立った。

やや沈黙が流れたあとブラックはふふっと笑いを零した。

「レディ、私を見てください。耳ではなくて」

ユイナちゃんは、猫耳に釘付けだった。

―― ……分かる！

分かるよ。ユイナちゃん。気になるよね。緊迫を削ぐよね？

私は噴出しそうなのを堪えて口元を押さえる。

ユイナちゃんは顔を真っ赤にさせて、消えそうな声で謝罪すると、今度は真っ直ぐブラックを見詰めた。この小さな少女にはブラックの闇の色を模した瞳はどう映っているのだろうか？

そんなに長い時間ではないが私は呼吸を忘れてその様子を見守っていたようだ。

ブラックがすっと立ち上がると、どこかほっと力が抜けた。ユイナちゃんは直ぐに私のところに寄ってきて袖を引く。

「癒し系の素養があるようですね」

ブラックの言葉にお爺さんは「おお」と微笑み、その笑顔にブラックは少し考えるような素振りを見せたあと「そういえばお嬢さん

もそうでしたね」と続けた。

そのことが意外だったのか、お爺さんはまたも驚きに目を見開くと頷いた。それからやや思案したとお爺さんは決心を固めたように、きゅっと光を持つ手に力をこめて口を開いた。

「孫はどこかに所属させたほうが宜しいですかの？」

「そうですねえ……もし、可能ならば大聖堂で学ぶことをお勧めしますよ」

そのあとお爺さんとブラックは暫らく言葉を交わし、お爺さんはユイナちゃんを招き寄せると深々とブラックに頭を下げて書斎のドアを開いた。

二人が廊下へ出るのに私が扉を抑えていると、お爺さんは私のほうを見て「すまんかったな」と頭を下げた。なんのことか分からずに首を傾げると、お爺さんは小さな声で私に告げる。

「ワシは見誤っておったようじゃ」

その一言に私の心は、ほわり……と暖かくなって嬉しくなった。

思わず顔を綻ばせてしまった私に、お爺さんありがとう。と重ねて小さな手を引き廊下を歩いていく。玄関まで見送るといったのに遠慮されてしまったから、廊下で二人を見送っていると階段のところで姿が見えなくなった。

ブラックに「戻りませんか？」と促され部屋へ戻ろうとすると、可愛らしい小さな足音が階段を駆け上がってくるようで顔を上げる。

ユイナちゃんだ。

忘れ物でもしたのかと思ったら

「おにーちゃん、おねーちゃん、ありがとう！　ばいばーい」

と、いう忘れ物だったようだ。

離れたところでぶんぶんっと手を振ったユイナちゃんに私は手を振り返した。

しかし、ブラックには複雑だったのか「……おにーちゃん？」とぶつぶつ繰り返して書斎に戻っていく。私はほんの少し誇らしい気持ちでその背を追い掛けた。

第六十一話：種屋のお仕事（2）

ブラックは部屋に戻ると、私が初めてこの世界で目にしたときと同じように、隠し棚を出し瓶をひとつ取り上げた。

きゅっと蓋を取り除いて、さっき受け取った種を、ころんと中へ容れ再びきゅっと蓋をする。

私は窓から屋敷をあとにする二人を見送ったあと、ブラックを振り返った。

ブラックはまだ、まじまじと瓶に大人しく納まっている種を見詰めていたが、私が呼ぶと直ぐにいつも通りの笑顔で振り返ってくれた。

そして本棚を元に戻すと私の傍に歩み寄り、開けた窓からの風に乱れた髪を整えてくれる。

「ねえ、ブラック。白化って何？」

私の素朴疑問にブラックは穏やかな調子で私の髪を梳きながら話してくれる。

「白化というのは種屋の仕事の一つなのです。種から記憶を抜き出すことを指します。種は最初命を持っていたときの記憶を抱えているんです。でもそのままだと売り物にはなりませんから、記憶を抜き素養そのものにするんです。その作業が『白化』といわれます」

ブラックの説明に、ふーん々と曖昧に頷けば、ブラックはくすりと笑みを零し、私の髪にキスをして、もう少しだけ待っていてくださいいね。と続けて机に戻った。そして、ばさりと束になった紙を取り出して仕事を再開するようだ。

インク瓶の蓋を片手で器用に開けペン先を浸し話しの続きをしてくれる。

「抜き出された記憶は、大抵の場合直ぐに消えてしまいます。だから、そんなものに価値などないと思っていたので、この部屋はいつもあの光で溢れていました」

「え？ でもさっきは」

「ええ、最近は望むなら記憶は持ち帰っていただくことにしています。相変わらず、価値があるとは思えませんが、どうせ放っておいても消えてしまうものですから。でも正直いうとそのせいで時間と手間が以前の倍くらい掛かってマシロに心配を掛けてしまうことになってしまいました」

アルファが人が死なない日はない。とっていたのを思い出して私は納得した。

「もしかしてこういうのを本末転倒というのでしょうか？」ふと手を休めて呟いたブラックに、私はそんなことないよと答えた。

そのきっぱりとした私の返答に「貴方がそういうならそうなのでしょう」と微笑み、止まってしまっていた作業を再開した。

ブラックの使う羽ペンの羽が揺れているのをぼんやりと見ながら私はそっとその隣に立つ。

「そういえばあのお爺さん、娘さんも亡くしているの？」

「ええ、七年近く前の話ですよ」

じゃあ、ユイナちゃんが出来ると直ぐに亡くなってしまったんだな。

そう思うとなんだか切なくなった。

私はその気持ちを払拭するために勤めて明るく話を続ける。

「ブラックは記憶力も良いんだね？ 七年も前の話私なら覚えてないよ」

にこりとそう告げたところで、ブラックは手を止めて紙の束をとんとんと重ねる。終わったのかな？ と、思ってお茶でも淹れるよと部屋に置いてあったティーセットの載ったワゴンまで歩み寄り手を掛ける。

「私は……いえ、種屋は、忘却を許されないのです」
「え？」

カップにお湯を注ぎ暖めていると、ブラックの愁いを帯びた声が耳に届いて私は慌てて顔を上げた。

ブラックは、椅子に深く腰を掛けてもう闇が支配し始めた空を見ている。

「種屋の種は白化されずに受け継がれます。この素養が全ての世界で、種屋だけはその素養がないんです。強いていうなら全ての素養を持ち全ての素養が均等であることが種屋の素養かもしれませんけどね？ だから、実質種屋が代替わりするときには前店主の種を飲むんです」

私が始めて手を掛けたのは、先代の種屋店主です。そう続けたブラックに、私は手を止めて傍に寄った。

そっと手を伸ばすと空を仰いでいた瞳は私に向けられる。

苦悶に満ちたその表情は私の知っているブラックのどれでもない。初めて見る顔かも知れない。

「あのときのことは、鮮明に覚えています。彼は年老いて種の売買

以外の仕事が出来なくなっていた。だから代替わりを余儀なくされていたのを、本人も悟っていたのでしよう。何の抵抗もされなかったのもとても簡単でした。たった一突き。一瞬でした。それで彼は消えた。種屋の種はずっと白化されることがないからか、血のように赤かった。私はその場でその種を飲み下した」

苦しそうに言葉を繋ぐブラックに絶えかねて、私は彼の首に両腕を回しぎゅっと抱き付いた。ブラックはそんな私の身体をそっと柔らかに抱き留めて、自分の膝へと腰を下ろさせてくれる。

丁度、耳元に胸がくると、とくん・とくんっと、彼の規則正しい心音が聞こえ、顔を上げるとやんわりと微笑まれた。

そして眉を寄せるとブラックは謝罪する。

「優しい貴方には酷な話をしてしまいましたね？ すみません。折角マシロが傍に居てくれるのにこんな話はやめましょう」

前に流れた私の髪をそっと後ろへ流し、優しく頬に口付けてそういつてくれたブラックに……私は首を振った。

「続けて良いよ。ちゃんと聞くから、ブラックのことがもっと知りたいから」

お願い話を続けて。と口にした私にブラックは少し戸惑ったようだけど、ふうと長い息を吐ききって再び軽く吸い込むと話を続けてくれた。

「服用した瞬間膨大な量の記憶が、どっと流れ込んできました。気が振れそうなほど暗く陰湿で、孤独……悪意と欲に満ちたものばかりでした。種屋は世界の混沌とした闇の部分には必ずといって良い

ほど関与しています。私はこの世界の黒歴史の生き字引ですね」

自虐的な笑みを零したブラックに、ぎゅっと胸が締め付けられ私は堪らず抱き付いた。そんな私を柔らかく抱きとめてくれるブラックの抱える闇は私には想像も付かない。

「先代の種を服用してから私は何も感じなくなりました。人を殺めることも、裏切ることも騙すことも私の心は動かない。私には最初から心なんてなかったのかも知れない。マシロが月から落ちてくるまでは退屈で無意味な時間が多く流れました」

そういつて私に顔を寄せるとこめかみや瞼に軽く唇を寄せる。そして顎を少し上げた私と唇を重ねようとして、ふと思いつ出したように問い掛けてきた。

「そういえば私に話があったのではなかったですか？」

「な、ないよ？」

これだけの黒歴史を聞いて、その上に「誰かに毒を盛られて飲んだことがありますか？」なんて聞けるはずない。

咄嗟に首を振った私にブラックは不思議そうな顔をする。

「私のことですか？ それともマシロのことですか？ はっ！ もしかして浮気ですか！ 本気だったりしないですよね」

だからなんでそんな流れになるんだ。昨日、過労で倒れた人とは思えない元気さだ。

私が呆れて次の言葉を出せないでいると、ブラックは短く息を吐いて「冗談ですよ」と繋いだ。ブラックの冗談は本当に分かり辛い。

「それはないとしても、マシロはとても辛そうでしたよ？ 私では荷が重いということでしょうか？」

ブラックは聞きだし上手だ。そんな風にいわれたら私は口を開くしかない。

それに咄嗟に嘘話が出来るほど私が口が上手くないことも分かっていて、だからやはりブラックには敵わない。渋々、口を開いた私にブラックは瞳を細めた。

「薬のことなんだけど……」

「あ……弾いてしまつてすみませんでした。大人気なかったと思います」

私の手に指を絡めて、本当に申し訳なさそうに眉を寄せ謝罪するブラックに、それは良いんだけど。と続ける。確かに心が痛んだけど、裏事情があるのなら仕方ないことだとも思うし。

「もしかしたら毒を飲んだ経験があるんじゃないかな……つて」

ごによごによと続ける私にブラックは、どうしてそんなに聞き辛そうに口にするのか分からないというふうにはあと曖昧に頷き「ありますよ」と簡単に肯定する。

あるの?! と、驚いた私にブラックは「ええ」と頷く。

「私がまだ幼い頃です。確か蒼月教徒の本部で生活し始めて暫らく経った頃ですね。実母に盛られました。いわれてみれば、飲めなくなったのはそのあとからかも知れませんか」

やっぱり……と、眉をひそめ落ち込んでいる間にも、話を続けてくれたブラックには聞き捨てならない台詞が数箇所あった。

はたつと顔を上げてブラックの瞳を覗き込む。

特に動揺した様子も悲しんでいる様子もない。でもブラックは凄
いことをさらっと口にした。

「実母に盛られたって」

私なんて口にするだけで少し声が上ずった。ブラックはそんな私
にくすくすと笑いながら「私にも親くらいは居ますよ？ 木になっ
ていたわけではないですからね？」と、的外れなことをいう。

「いや、そこじゃなくて。どうして、お母さんがそんなこと」

「知りません。種屋に選ばれてしまった息子に幻滅したのかも知れ
ないですし、自己保身のためだったのかも知れない。他に何か深い
理由が彼女にあったのかも知れない。ですが、それを今マシロのた
めに言及したいと思いましたが、もう尋ねることも出来ません。彼
女は、その件で蒼月教徒に消されましたから」

消さ、れた……ということとはつまり殺されてしまったということ
だ。

口の中でブラックの言葉を反復させる。

顔色が優れませんね？ 大丈夫ですか？ と私の顔を覗き込んで
くるブラックの表情からは動揺は見取れない。

そんな事件よりも私の顔色の方が気に掛かっている感じた。

「どうして……？ どうしてブラックはそんなこと平気で口にする
の？」

「はい？ 別に大したことでは……あ、えっと、す、すみません。
その……あー……大したことなんですよね。ええ、ええ。そうです
ね。吃驚です」

私の反応に慌てて取り成すが、百パーどこが吃驚なのか自分でも分かっていないのだろう。

目が泳いでいる。

はー……と思い切り私が嘆息すると、肩を落としたブラックがすみません。と、詫びてくる。別にみんながみんな同じ感情を共有出来るとは思わない。思わないけど普通なら凄い事件だと思う。

ブラックに心がないなんて思わない、でもまだまだきっと欠けているのだろうかと感じてしまう。

最終話…黒猫と私と異世界生活

「それに蒼月教徒に居たって」

話が逸れたことにほっとしたのか、ブラックは「はい」と頷いて話を続けてくれる。

「種屋を継ぐまで、蒼月教徒の本部。蒼月財団で生活していました。そこで持てる素養の全ての技術を身につけます。本来なら、各学園に通い身につけるものですが、私にはそれほど時間も掛からないことですし、それにそういうルールなんです。獣族の中で、存在する全ての素養を持つものが見出されたら蒼月財団が保護し育てる。私が親元を離れたのは、じきに四つになる頃です」

「え……七つのときじゃないの？」

この世界の人は、みんな七つのときに素養を見出されるって聞いていた私からしたら早すぎる。そんな私の気持ちを察したのか、ブラックは苦笑して「私は普通ではなかったの」と付け加える。

「教団で一番初めに教え込まれるのは、死なない方法です。それは毒の知識であったり、呪の知識であったり、その他、まあ、マシロに聞かせられるようなお話ではないものばかりですが……」

背に回した腕の先で私の髪を弄びながら、空いたもう片方の手は私の手を撫で、時折指を絡めている。そんなブラックは、とても落ち着いて見える。でも、その口から紡ぎだされる言葉はとても暗いものだと思う。

「幼い頃から私は、特に感情を表に出すタイプではない方だった、

とは思いますが…閉鎖的な教団の中で時折面会に来てくれる母のことは心待ちにしていたような気がします」

そりゃ三つや四つの子どもの話だ。当然のことだろう。

「その日も、母は、いつもと同じようにシフォンケーキを持ってきたくて…いつもより少し不恰好なシフォンケーキを母は失敗したといっていました、材料以外のものが混じっていたから膨らみきらなかったのを、実は、気が付いていました。ですが母は、普通にお茶を淹れ普通に私に用意してくれた。そして何度も私に謝っていた…」

『ルインシル。ごめんなさい』

『どうして?』

『貴方にはあの月のように強い子であって欲しいとは願ったけれど、強すぎるお願いごとは欲張りね』

「……ごめんね。と、私はそのあとのことは覚えていません。唯、器官が焼けるように熱くて、身体の内側から燃えるような痛みが迸った感覚だけがやけに鮮明に記憶に残っています。本に載っていたあの毒は、こういう風に効くんだな。と、どこか遠いところで考えたりして……本当、子どもらしくはなかったですね。数日、生死を彷徨って……次に目が覚めたときには、母は亡くなったと聞かされました」

ブラックの表情は揺るがない。

とても自分の話しをしているとは思えないほど抑揚がない。

私は、それが悲しくてブラックの肩に擦り寄った。

そんな私をブラックは優しく受け止めてくれるのに「それにしても、どうして私はあるとき、毒だと分かっているものを口にしてしまったのでしょうか？　子どもの考えることは良く分かりません」なんて、本当に不思議そうに口にしてしまうこの人は、自分に対する感情が特に薄い。

「あるとき私が死んでいたら……そう思わないこともなかったですが、自ら命を絶つのはルール違反です。それからの私に、面会に来るものは誰一人居ませんでした。だから、時間ばかり持て余していたせいもあるかも知れない、知識を吸収することのみに集中しました。何かに集中しているときは何も考えなくても構いませんし、何よりその行為自体が楽しかった」

「蒼月教徒と種屋って繋がっているの？」

私はどうしても居た堪れなくて、少し質問を変えた。ブラックは私の問い掛けに、うーん……と、唸ってから

「そうともいえるし、そうでないともいえます。まあ、私の代は繋がっていません。単に幼少の頃過ごしていた場所に過ぎない。私は種屋の店主になってからは、教団本部に足を踏み入れてはいないですし……彼らの願いに耳を傾けたことはない」

「前の店主は？」

「先代の種屋は王族に深く関与していました。種屋に就くものは、大抵、蒼月教徒か王族に係わってきています。私は……どちらも興味ありませんから」

エミルも同じようなことはいつていた。

ブラックが、王族間のことで手を出したのはエミルの兄、セルシスのときだけだと……。

「私の興味は今貴方だけです」

不意にそんな恥ずかしいことを口にするブラックに、一言物申そうと顔を上げたら、ふっと影が降ってきて今度は本当に私の口は塞がれた。

優しく重なった唇にはちゃんと体温があって暖かい。交わる吐息も心地良い。

「ブラック」

唇を重ねたまま「はい」と返事が注がれる。好きだよ。と、重ねると本当に嬉しそうに猫なのに犬みたいに擦り寄ってくる。

「マシロ……」

落ちていた影が離れると、少し肌寒いような気がした。

そんな私の肩を支えて、ブラックはゆっくりと椅子を回し背もたれに背を預け夜を仰ぐ。月明かりに照らされるブラックの肌は白く透き通る。

そっと手を伸ばして撫でると、ふと口元が緩む。

「白化されない種……」

「うん」

「もしも白化されるのなら、私も貴方との記憶を貴方のその手に抱いて欲しいと思います。ですがやはり種屋である私には叶わぬ願いです。それなのに、今、愚かしく願うことは、次の店主が私の種を飲んだとき……その記憶に残るものが、闇ばかりでなければ良いなと思います。今の私には貴方が居る。貴方が落ちてきてくれてから、私の毎日は変わりました。貴方は私にいつも驚きと変化を与えてく

れる。私を色鮮やかにしてくれます」

ブラックが私に紡ぐ言葉は優しく甘い。

以前はもっと甘い毒を含んでいたような気がするけど今は違う。

こんな風に自分のことを話してくれる。思っていることを、隠すことなく伝えようとしてくれる。感覚がほんの少しずれていて、すれ違うこともあるけど、私たちは別々の人なのだから、そういうのはきつと仕方ないことなんだと思う。

そういうのも何となく分かるから、彼の話を聞きたくないとは思わない。聞くんじゃなかったとも思わない。私は話してくれたブラックの気持ち嬉しい。

嬉しくて仕方がないから、私はブラックに体重を預けその胸に頬を寄せる。規則正しい鼓動が耳に届く距離に居られるのがとても幸せだと思う。

ふっとブラックが笑ったのが伝わってくる。

彼が持て余した力の代償は大きかったのかも知れないけど、ブラックだってちゃんと変われる。変わる事が出来るものを否定することは、やはり出来ないと思う。

私は親ではないから、ブラックのお母さんの考えまでは分からない。い。

何を嘆いて、何に病んで、暴挙に至ったのかそんなこと分かるはずもない。でも、きつとブラックのためだと思ったはずできつと

「ブラックのせいじゃないと思う」

そしてブラックが優しいから、ちゃんとそのことに気がついて気持ちを含んで……だから毒だと気がついてでもそれを口にしたのだと、私は勝手に思う。

突然そう紡いで頷いた私の言葉に、ブラックは不思議そうな顔をした。

「少なくとも、私はブラックが居てくれて良かったと思う。大丈夫。私はずっとここに居るし貴方の傍に居るから」

彼の長い指に指を絡めて、きゅっと握ると同じだけの強さで握り返してくれる。

傍に居るから。と、繰り返し、空いた手を肘掛に突っ張って身体を伸ばすとそっと頬に触れる。ブラックはそんな私に酷く小さな声で「はい」と頷く。

私はブラックの腕の中に身体を預け、開け放った窓から月夜を仰ぐ。

白い月、青い月、二つ月

今夜も変わらず二つ並んで夜空に浮かび、柔らかな光で世界を静寂で包んでいる。

「ねえ、ブラック。覚えてる？ どうしてこの世界には月が二つあるのかなんてばやいてたこと」

「……ええ、覚えていますよ」

「私はね……私は、この世界には月が二つで良かったなと思うの。たった一人きりで、完璧で、たった一つきりで満たされるなんて、やっぱりちょっと寂しい。ああやって寄り添って、こうやって触れ合って満たされるときが、やっぱりこの世界でいう『美しいとき』」

なのだと思う」

馬鹿みたいな私の台詞にブラックは素直に頷いて、とても柔らかな声で「貴方が居てくれて良かった」と、こんな私を、とても愛しい。と、何度も何度も重ねてくれる。

私は捨ててしまった自分の世界を思わない日はないし、忘れる日もないと思う。どうしても比べてしまうことだってあるだろう。でも、私はこの手を取ったことはきつと後悔しない。

夜空に二つの月が浮かぶ世界。

こんな有り得ないだらけの世界も、今はもう私の現実なのだから

たった一つしか月の浮かばない世界。

誰も使うことのなくなった部屋。

ほんの少し開いた窓から吹き込んでくる少しだけ暖かさを感じるようになった風に、机上の紙がパタパタとはためき、それに合わせて赤い蝶が羽根を揺らす。

『大好きなみんなへ

行ってきます、と、さよならを同時に告げることを許してください。

でも私は今度こそ間違えていないと自信を持っています。

月のある夜。私を思ってください。あの場所に居るのだと……私
はきっと月のように欠けることなくいつも満たされています』

＊＊あとかき＊＊

長い間お付き合いありがとうございます。

今更あとかきなんてどうかな？ とは思いましたものの、ちよつとくらいひと言書き添えさせていただいても構わないかなーと我俣をやってみました。

因みにサイトの方と、こちらの投稿とではラスト一文が違います。これまでもちよいちよい変えてるところもあったのですが、最後までどうしても納得いなくて考えた末、こっちにしてみました。

―― ネタバレありますので、読了後目を通していただけると嬉しいです ――

そんなわけでこの紅譚、400字詰め原稿用紙に換算しますとなんと！ 600ページを超えます！

ブログにて今度は異世界トリップものを書いてみたーい！ と騒いだのがきっかけで書きはじめた物ですが意外と私自身嵌ってしまい、超楽しく手がけさせていただきました。

最初は、二通りのストーリーを用意していました。

ブログも読んでたよっ！ なんて奇特な方は、ご承知かもしれません。せんが……闇猫ルートのほか王子ルートもありました。

書いてる間に王子ルートは消えてしまったんですけれど、そっちもあったらあったで楽しかったかなーと思います。

そして、存在しなかった王子ルートの断片が次回作の銀狼譚で触れていたりします。

くっつく相手がブラックではなくエミルであつたならきつとマシロは一度も元の世界に戻ることはなかったでしょう。

ああ見えて、ブラックは包容力のある奴です。なので自分の意思とは関係なくマシロが望むなら、自分の我を押し通すような無茶はしませんし、マシロにも求めません。

エミルは王子様育ちということもあり、優しい本質のほかには我侭なところもある奴です。

だから自分の大切なものは傍に置きたいし、離したくない。マシロが如何に元の世界に戻らなくてはいけないと思つていても、気がつけばそのまま居座ってしまったという展開を起こしてしまうミラクルな人です。

他の二人。

カナイとアルファですが彼らにも一応恋愛ルートのものを考えていました。彼らはそれぞれ過去に重いものを持っています。（外伝にてそつと触れてます）だからそれを掘り下げていくルートを考えていました。

ですが、マシロが出会った時点の彼らはエミルの虜！

なのでそんな大切なエミルを差し置いてまで自分の恋心を目覚めさせたり押し通したりは決してしないだろうという流れになつてしまいました。私としてもちょっと惜しかったですね！特にツンとデレのあり方を弁えたカナイさんとのルートは、個人的に楽しい流れになつていたはずっ！

長く書いているとやはりキャラ一人ひとりにとっても愛着が沸いてきます。

文学的などという表現をするのはおこがましい感じがするし小説というのも、間違いではないけれどちょっと敷居が高い。だからライ

トノベルという表現が私には丁度良くて、私はそんな曖昧が丁度良い世界で生きています。

しかし伝えたいこともちゃんとあり、読み手の皆様にとっても何か得るものがあれば良いと思います。私の力不足で至らないこと多多ですが。

感想など寄せていただけるともんのすごく喜びます。お時間あれば是非構ってやってくださいませ。

ではでは、まだもう少し続きます。種シリーズ。良かったら引き続きお付き合いください。

＊＊あとかき＊＊（後書き）

＊＊ あとかきのあとかきって……失礼します。宣伝です。

外伝はこちら↓ <http://ncode.syosetu.com/n5907m/>

第二弾…銀狼譚はこちら↓ <http://ncode.syosetu.com/n8550m/>（完結済み）

第三弾…種想譚はこちら↓ <http://ncode.syosetu.com/n6671p/>（完結済み）

お時間あればぜひよろしくお願いしますv

—前編—

私がこの世界を選んでからどのくらい経っただろう？ 季節は巡って今は花の咲く。暖かくて柔らかな季節だ。

「あれって桜？」

休日は大抵、辺境の町で過ごすようにしていた。

王都をブラックとふらふらすることもあるけど、やはりブラックはいろんな意味で目立つ。

だからのんびり過ごすには都を離れたほうが良いし、何より来客があることが多いから都合が良いのだ。

私はブラックの書斎の窓を開け放ち、風に書類の束があらわれているのも気にすることなく、遠くに見えるピンクに色づいた木を指差す。

ブラックは特に怒ることもなく、机上の書類を手で押さえ首だけこちらに向けると「ああ」と頷いた。

「あれは夢見草といいますよ。丁度、今は夢見月の終わりですから夢見草が満開です」

「夢見草。綺麗な名前。あれ、図書館の庭にもたくさんあるけど桜だと思うよ」

「そうなんですか？ 私は花には詳しくありませんがサクラですか？ 美しい響きですね。ではそう呼ぶことにしましょう」

風が静まると腰を上げて私の背後から静かに窓を閉め、私の顔を覗き込んでにっこりと微笑む。

この世界の人は名前に拘りがない。
自分の名前だって気分が変わればあっさりと改名してしまう。

生れ落ちたときに受けた名を一生使わない。なんて人も今日の前に居る。私は赤くなる顔を逸らしてワザとらしく咳払いすると、ずるりとブラックの腕から逃げてさっきまでブラックが座っていた椅子に腰掛け、キィキィと揺らす。

「今度お花見しよう。桜が咲いたらお花見。これ常識だから」

こっちの常識は知らないけど、こんなに良い天気で、こんなにたくさん花で溢れているのに部屋に引き籠もっているのは良くない。

「……花見？ 花を見に行くことですか？ 今の季節ならどこからでも見られますよ？ ここは田舎ですからね。そこかしこに大量に」「ちっがーう！ 全然違うのっ！ 花見っていうのはね！ いうのは……ええっと……」

がたん！ と、立ち上がり力説しようと思ったが私はやめた。

急な行動にブラックの耳がぴんつと立ち表情は可愛らしくきょんとしてゐる。

—— ……可愛い。可愛い可愛いっ！ 猫耳万歳。

思わず伸ばした手に合わせるようにブラックは仕方ないな、と、腰を折ってくれる。ブラックの細くて柔らかい髪にふわりと暖かな猫耳。これ以上の癒し効果はない。

「次の休日の前はお花見しよう。どうせブラックは夜になるでしよう？ エミルたちとどこか見繕っておくよ。私を探してきて？」
「良く分かりませんが、楽しいことなんですね？ マシロが嬉しそうですねので私は賛成です」

二人きりでないのは残念ですが……と微笑むブラックに私は大勢の方が楽しいんだよと締めくくった。

「……と、いうわけでお花見をしたいと思います」
「一応聞くが、何がというわけなんだ？」

図書館に戻り平日をいつも通りに過ごしていた三人を捕まえて、提案した私にエミルは優しく良く分からないけどマシロがやりたいことなら、と微笑んでくれ、アルファはごろごろりんと中庭の芝の上に転がって話半分。

やっぱり突っ込んでくるのはカナイくらいだ。

「お花見っていうのはね」

私の思うお花見を力説したらカナイはふんふんと頷きながらちゃんと聞いてくれ、そして最終的に

「ようするにだ、花の下で酒盛りするわけか？」

「ピクニックみたいなもの？」

「あ、じゃあ、おやつもたくさん持っていきましょうね！」

あってるのかどうか微妙な結果に終わった。

「お酒はまだ駄目でしょう？」

呆れたように口にした私に、エミルとカナイはどうして？　という風に首を傾げる。

アルファも寝転がっていたのにぴょんっと器用に跳ねるように起き上がって「どうして？」と可愛らしく首を傾げた。

「え？　だって、私たちまだ未成年でしょう？　子どもはお酒飲んじゃ駄目だろうし」

「……女性に年齢を聞くのはどうかなと思うから聞かなかったけど」

口にしつつやっぱり聞き難いのかエミルはカナイの脇腹を小突いた。カナイはいやいやながらも言葉を繋ぐ。

「お前いくつだよ？」

「は？　私は、ええっと……こっちでは良く分からないけど向こうでは十七歳の誕生日まではいて、季節が巡れば十八になると思うんだけど……」

適当に指折り答えたらカナイは「なら問題ないな」と頷きエミルが口を開く。

「カナイは十九だし僕ももうそろそろそれに追いつくしアルファも十七になる……」

「なったんですよー！　エミルさんっ」

エミルの話を遮って口を挟んだアルファにエミルはくすくすと笑って話を続ける。

「……らしいから。シル・メシアでは十七で成人だよ。標準的には七歳で道が決まってそこから十年。だからね。早い人も遅い人もいるけど大抵は十七を超えたら大人」

私のほうこそ今まで機会がなかったから聞かなかったけど、そうだったんだ。てことは、ブラックは幾つなんだろう？

「種屋の個人情報には殆ど流出しないからな。本人ぐらいしか知らないと思うぞ？ 知りたい奴がいることもないだろうしな」

「もしかして、顔に出てた？」

人の心を読んだように口にしたカナイに眉を寄せ、問い掛けるとカナイは呆れたような笑みを零して「駄々漏れ」と肩を竦めた。

準備をしている間に噂が広がって……

「これは何の祭り？」

という賑わいになってしまった。火をつけたのは確実にラウ先生だ。

「……花見なんだから、花祭りだろ？ 俺に振るなよ」

呆れたように、それでもやっぱり人が良いのできっちり答えてくれるカナイになるほどー。と、ラウ先生風に頷く。

私の物まねが微妙だったのか、カナイが苦い顔をするが気にしない。

『なるほどー、花見ですか。良いですねー。酒盛り』

『いや、だから、花見です。酒盛りじゃなくて』

『そういうのは人数が多いほうがきつと楽しいですね。仕方ありませんねー、私が声を掛けておきましょう』

「あの人って本当に人の話を聞いてないよね。というか頭から聞く気ゼロだよね？」

私は勝手に盛り上がったラウ先生の様子を思い出して、深い溜息を一つ吐き肩を落とした。

週末。

午前中の授業が終わってから準備をして夕食時の集合だったが、優に二、三十人くらいは集まっている。

場所は王都から出て直ぐの桜並木を陣取った。

カナイが少し広めに場所を取り結界を張ってくれたので、夜になっても何かが襲ってくることはない。アルファの話ではこんな王都の近くで何かが出るようなことはないよ。と、笑っていたけど、私が怯えるから念の為と施してくれたのだ。

そういう面倒を惜しまないでくれるのはありがたいなと正直思う。口にしないけど。

「ラウさんは自由人だからなあ」

一番大きな桜の木下を陣取って腰を下ろしていた私は、準備完了と同時に自分の用事は終わったとばかりに手酌酒を始めていたカナイと雑談する。

集まったメンバーは半分は知っているが、半分くらいは知らない顔だ。

アリシアを中心に囲んでいるところからアリシアの友人……で良

いのかはわからないがその関係だろう。そ

して全く面識がないし興味もないと言い切ったエミルはアリシア親衛隊？に掴まった。

きつと今あの輪の中心で絡まれているのだろう。

お気の毒様だ。

アルファは嫌々ながらも出てきたシゼにあからさまに絡んでいる。あつちはそのうち助け舟が必要な気がする。

「そういえば、皆ラウ先生には一目置いてるよね。何者なのあの人」
「んー？何者っていうか王宮からエミルを出した人だよ。あの人はかなり高位の貴族で親は今の王の執政をしてるんだ。ラウさん自身もかなりの素養を持った人だから王子王女との教育係を一手に担っていたらしいぞ？俺あんまりあの人に詳しくないけど、クセのある人だよなあ」

「嫌ですねえ。こんなところで噂話ですかー？」

にゅつと突然背後から伸びてきた腕に捕まえられたカナイは、素直に含んでいた酒を噴出した。

ごほつごほつと咽ているカナイには悪いが私はすすつと二人から距離を取る。巻き込まれたくない。それなのに「マシロさん」と呼び止められ、そつと両手でグラスを握らされる。

「私のことが気になるんですか？ 貴方がもう少し大人になったら、教えてあげますよ」

にっこりと妖艶な笑みを浮かべる。意図せずほわりと頬が熱持ってしまう。

本当に綺麗な人だ。

桜の木の下にいる所為か、先生の萌黄色の髪が葉桜の頃を思い起こさせる。思わず先生に見惚れている間に空のグラスにとくとくと黄金色の液体が注がれる。

細かな気泡が浮かびとても綺麗だ。

「あまりお酒に慣れていないと聞きましたから。シャンパーニュです。甘口ですから美味しいですし、飲みやすいですよ」

「あ、ありがとうございます」

どうぞどうぞ。と、勧められ、私はそつと口をつける。

先生のいうとおり飲み口が甘くてジュースの延長線上のようだ。でもしっかりアルコールが入っているのか喉元を通り過ぎ胃の中に落ちると身体がじわりと熱を持った。

「私はマシロさんの話を聞きたいですねえ。異世界ネタには興味があります。んー……ああ、それは秘密でしたね。秘密の多い女性は魅力的ですよ」

ふふふつと笑って綺麗に整えられた指先でこつんと口元を弾かれる。

この人……もしかしくなくても酔ってる？ 私の疑問に答えを出したのは傍で傍観していたカナイではなくて私の背後から伸びてきた腕だった。だからどうして皆、人の背後から出てくるのか私には分からない。驚きに肩を跳ね上げるとグラスの中の液体が揺れる。零れなくて良かった。

「絡み酒は良くないですよ。ラウ。貴方は生徒が騒ぎを起こさない

ように監督しておく役目でしょうに、マシロさんも迷惑していますよ」

「エル……私は別に絡んでない。マシロが、私を離れたがらないだけ、で……」

「酔ってますっ！ 先生は酔ってます！ 私は何も」

人の両肩に腕を乗せようとしたラウ先生の首根っこを、エルリオン先生は簡単に捕まえて「お邪魔しましたね」と爽やかに去っていった。どっと疲れる。

「……エルリオン先生ってラウ先生の扱いに慣れてるよね」

「そうだな」

「ていうか助けてよ」

「お前も助けなかっただろ？」

「……………」

「カナイはいつも正論だ。」

—中編—

そんなわけで、わいわいと皆で騒いで日も暮れて……何でこんなことになったんだろう？ と、思ったけど結果的には皆楽しそうだし良かったのかもしれない。

でもこんなにたくさんの人で賑わってしまっただけで、確実にブラツクは姿を見せないだろうな。

私は曖昧な笑みを浮かべてふうと一息ついた。

アルコールで少し火照った頬に風が当たるととても心地良い。

お腹いっぱいに戻ってきたアルファは私の膝で寝てしまった。私が着ていた上着をアルファに掛けて上げようとしたらエミルが傍にあった誰かのひざ掛けを乗せた。

「ありがとう」

「良いよ。温かくはなったけど夜は少し冷えるからね。アルファの為にマシロが体調を崩したなんて駄目だよ」

「でも、アルファってお酒が弱いのか？ ああ、私と一緒にこれが初めてか」

日の光を紡いだような金糸を撫でるとふわふわと指に絡み滑り落ちていく。

綺麗な髪だ。お日様の香りがする。アルコールの香りもね。

そんな私の隣に腰を下ろしたエミルはまさかと笑った。

「アルファは王宮勤めをしていたからね。ああ、今もそうだけど。飲む機会はかなりあったと思うよ。その所為で物凄く強いよ。樽酒

飲み干したあとでも一戦交えられるくらいにはね？」

「……樽……」

人は見かけによらない。この愛らしい天使のようなアルファが酒豪。

「綺麗だね」

そういったエミルはほんのり朱に染まった顔で夜空を仰いだ。

見上げた視界には一面の桜。その間を縫う空には変わらず二つの月が仲良く並んでいる。遠くではそこいら辺で寝てしまっている人をエルリオン先生が回収している。

「片づけが終わっても少しだけ残ろう？」

見上げていた首が痛くなって顔を戻すとエミルにそう声を掛けられる。

私はエミルの誘いに過剰反応をしてしまい挙動不審気味に「え、い、いや、夜も遅いし」と慌ててしまった。その様子が可笑しかったのかエミルはくすくすと笑って違うよと口にする。

「確かにマシロと二人で抜け出したいのは山々だし魅力的な話だけど、そうじゃなくてブラックがまだ来ていないの気にしてるみたいだから」

綿飴みたいにふんわり柔らかな笑みを浮かべてそういつてくれるエミルに、真っ赤になってしまった顔が収まるはずもなく「あ、あぁ……有難う」と返して、こほんっと小さく咳払いして視線をすやすやと無防備に膝で眠るアルファに戻して呟く。

「来ないだろうな。とは思ってたから平気だよ。あとで謝っとくし」

もっと少人数でしっとりやるつもりだったんだけど……と本当に小さな声で繋いだつもりだけどエミルにはばっちり聞こえていたように、困ったような微笑を浮かべた。

「別にこれはマシロの所為じゃないよ。マシロの人徳？ 直ぐにコレだけの人間が集まるんだから凄いことだと思うよ」

「うん。有難う。でも、やっぱりブラックも楽しみにしてるっていつてくれてたから、悪いことしちゃった」

つい、気が緩んで零した愚痴のような台詞に溜息。

普通なら眉を寄せてくれても良いのに、エミルは何もいわずによしよし、と、私の頭を撫でてくれた。その優しさに胸がきゅっと苦しくなる。

エミルって絶対モテると思うんだけどな。

カナイがモテるのよりずっと頷ける。王宮では籠の鳥だったのかな？ 出てきても図書館じゃ同性しかいないし縁がないってこういうのをいうのかも知れない。

「どうしたの？ 急に静かになって、僕のことでも考えていてくれた？」

「え？ あ……！ ああ、うん」

突然掛かった声に肩を跳ね上げて、驚きつつもつい流れるに頷いてしまった私に、エミルも少し驚いたようだ私の頭に触れていた手

を離して首を傾げている。

「い、いや、大したことじゃないよ？ エミルって絶対モテると思うんだけどなーって考えてたんだよ」

わたわたと口にした私にエミルはああと頷いて、ふふっと笑いを零す。

「有難う。じゃあ、僕はマシロには好印象に映ってるんだね？」

嬉しいなと続けて瞳を細められると、かーっと体中の体温が上昇してしまう。熱い。私って薄々そうじゃないかとは思っていたけど、面食いだよね。

「わ、私だけじゃなくて、皆そう思ってるよ。エミルの方こそ人望があるというか人徳があるんだと思うし」

「そうかな？ 僕はマシロだけに興味持ってもらえれば十分なんだけど」

にっこり笑顔で伸びてきた手に、びっくりと、肩を強張らせると膝の上のアルファが寝苦しいというように唸ってしがみついていた。

反射的に謝るとエミルの控えめな笑い声が聞こえる。

からかわれたのだと気がついて一言物申そうと思ったら私の視界にエミルが入らなくなった。

「私の恋人をとことろ構わず口説こうとするのやめてくれませんか？」

私から表情は窺えないがほんとうに不機嫌そうな声でそういったのは待ち人のブラックだ。私とエミルの間に無理矢理割り込んだ。

「僕は常に自分に正直なだけだよ。大体、君が居なかった方が悪いんだしね？」

「マシロもマシロです。そんな可愛い顔してたら誰に何をいわれても文句はいえませんよ」

……それは私にどうしろというんだろう？ 大体そんな馬鹿な風に見えるのは、ブラックの目がオカシイからだ。

私の方へ振り返ってそういったブラックに私は眉を寄せた。

そんな私の不機嫌顔は全く気にならないのか、ブラックの標的は私の膝の上のアルファに移ったらしい。

瞬間的にブラックは顔から穏やかな表情を消し去り雰囲気を変えると、殆ど同時に私の膝が軽くなった。

——…キ……ン……。

目の前で鋼が鈴のような音を出す。
つうつと冷たい汗が頬を伝う。

ブラックの殺気に反射的に反応したアルファが抜いた刀身が、私の目の前で月の光を浴びて鈍く光を放つ。

その剣戟を杖の柄で簡単に受け止めていたブラックは、それをぽいっと軽く弾いてアルファを睨みつける。アルファはさっきまで寝ていた人とは思えない好戦的な笑みを浮かべている。

「無駄に殺気を出さないでくれない？ 折角気持ちよく寝てたのに」
「寝る場所を選んでいただけますかねえ？ 貴方も犬死はしたくないでしょう」

「へえ、やるんだ？」

「やりますか？」

改めて剣を構えたアルファとブラックを前に迷っている暇はない。直ぐに殺し合いを始めてしまう。

「ストップ、ストップ、ストップ！！」

勢い良く立ち上がると、膝が痺れていた。よろつと体制を崩しそうになると慌ててブラックが支えてくれる。

「二人とも落ち着いて、今日はそんな日じゃないでしょう」

「そうだぞー、そんな日じゃないぞ。お前らは片付けをサボった上に騒動を起こす気か」

私が皆までいわないうちに台詞はゆらりと現れたカナイに取られた。カナイにいわれて改めて周りを見ると皆もう捌けてしまっていた。

だからブラックが出てきたんだと怒るカナイを他所にそんなことを考えていた。

「あ、相変わらず、カナイさんは片付けの手際は良いですねえ。

普段の不器用さはどこへ行ったのか惚れ惚れします」

アルファ、一言多いよ。

「惚れ惚れしなくて良いんだよ、ぐーすか寝こけてんじゃなくて手と足を動かしやがれ！」

カナイの怒鳴り声と同時にどんっ！ と、稲妻が落ちてきて地面

を焦がす。

アルファは反射的に避けたが「逃げんなよ」というカナイの低い声と同時に、どんどんっ！と連続で雷が落ちてくる。

カナイとアルファの追いかっつこが始まってしまった。

「カナイ酔ってるね？」

「うん、多分。機嫌良く飲んだからね」

私の眩きに答えてくれるのはエミルだ。エミルだって同じだけサボっていたと思うけどカナイの目にはエミルのサボりは映らないらしい。

「マシロも飲んでますね。シャンパーニュですか？ 良い香りです。キスして良いですか？」

纏わりついてきたブラックを取り合えず、殴った。

閃光のような剣戟を簡単に受け止められるブラックも、私の攻撃は相変わらず適当に受けてくれる。酷いです。と、頬を擦ったブラックにエミルがずいっと空いたグラスを差し出した。

「飲むと良いよ。気が済むまで。マシロが飲んでいたのはもう僕が空けちゃったから新しく開けるしかないけどね？」

「み、皆で飲んだんだよ」

「良いですよ。貴方も飲み足りないようですし、それとも王子様はもうお休みの時間ですか？」

「いいよ、飲もうか？ ここにケースであるからね」

……こいつら、私の話を全く聞いてない。

エミルはエミルでどこからそのケース持ってきたんだ。

——…二人ともアルコール中毒で倒れてしまえ。

私をそっちのけで飲み比べを始めてしまったブラックとエミルを横目に私は再び桜の木の根元に腰を下ろす。

見上げるといつもは降ってきそうな星空が広がっているのに今私の視界に広がるのは花の海だ。

ほんのりピンク色の花卉は月の光を浴びて白銀に煌いている。

こんなに綺麗なのに、それも見ないで飲み比べしている二人は馬鹿だ。

「ほら」

一足先に戻ってきたカナイがグラスを渡して隣に腰を下ろし同じように空を仰ぐ。

私は受け取ったグラスの中身に口をつけるとお茶だった。

すっきりした飲み口がすうっと身体の熱を冷やしてくれる。グラスに浮かぶ花びらが凄く綺麗だ。

「これ、何？」

「花茶。夢見草の花を塩漬けたものだ。お前花に拘ってたから、あったほうが良いのかと思って」

わざわざ用意してくれたんだ？ と意地悪く突っ込んだ私にカナイはついでだと眉を寄せた。カナイは素直じゃないけどこういう心遣いは嬉しい。私はふふっと笑いを零してごくんともう一口花びらと一緒に飲み下し一息ついた。

「アルファは？」

「そのうち戻ってくるだろう？　飲んで暴れたからそこらへんで潰れた」

「カナイは？」

「俺？　俺は術連発したからすっきりした。まだ飲んでも良いけど、あの様子じゃエミルが潰れるだろう？」

顎で飲み比べしている二人を指してそういったカナイに私は乾いた笑いを零した。あまり飲んでる姿を見たことはないけどブラツクがお酒に弱いとはとても思えない。

―後編―

「術師系の素養を持っている奴は基本的に下戸か上戸だ。他の素養と比べて目に見えないものの影響を受けやすいからな。自己防衛みたいなものでもそうなるっていわれてるけど。どう見てもブラックは上戸の方だろう？」

いつて肩を竦めたカナイに乗っかる形で頷いたのに……下戸だった。

「マシロー。マシロー、まーしーろー」

しかも絡み酒。鬱陶しい。

グラス二杯目を飲み干すことなくブラックは体調を崩した。本人曰く「酔ってない」らしいが酔っているという酔っ払いはいないとアルファに見下された。アルファは復活が早い。

流石、酒豪。

「そうかぁ……ブラックの弱点はアルコールなんだな。正直物凄く意外だ」

「だから酔ってなんていません！」

「動くな、その結界から出るな」

「酷いです。か弱い猫をこんなところに閉じ込めるなんて、でも、マシローが一緒だから良いです。もう少しなら我慢します」

暴走特急のブラックは、ところ構わず破壊しようとするので、カナイが作った結界に閉じ込められた。

人身御供のごとく私まで一緒だ。

私の膝に擦り寄ってうとうとする姿は猫だし可愛らしいと思わなくもないが、頭上で時折ばちんとかぼんとか破壊音がする。カナイ曰くブラックの抑えきれない力が暴走して弾けているらしい。ほんっとーに迷惑な話だ。

そして、今、エミルが気付薬の材料を取りに戻っている。多分、私が作らないと飲まないだろうから……ほんっとーに手間の掛かる奴だ。

「もう二度と飲んじゃ駄目だよ！ てか、今までそんな機会なかったの？」

「んー？ ありますよお。でも、飲めるかどうか分からないのでグラスに入った時点でアルコールが抜けるようにしました。今日は、飲み比べですからあ、そうするのはフェアじゃないでしょう？ 飲めると思ったんですけどねえ。あんまりお酒って美味しくないですねえ……」

うつらうつらしながら繋ぐ言葉に私もカナイもアルファも呆れる。

「でもま、一応。不正をしなかったことは褒めてあげよう」

よしよし、と、ブラックの頭を撫でた私にカナイが「お前、甘くないか？」と冷たく口にするが好きな相手に甘くなるのは仕方ないことだと思う。

「あ。そういえば、ブラックっていくつ？」

「んー？ どうしたんですかあ。いくつって年齢のことですか？

私は二十八ですけど」

二十八っ！？ と、三人が三人驚いたことにブラックは、ぴんつと耳と尻尾を立てて驚いたように起き上がると目をぱちりとしている。

「年上だとは思ってたけど」

「いや、そうだよな。良く考えたら俺がガキのときに会ってんだから……それなりに年は食ってるよな」

「何ですか？ 皆さんで……はっ！ もしかして恋に年齢が関係あるんですかっ！？ マシロは年上は嫌ですか？ 嫌いますか？ 分かりました！ 何とかします。何とかしますから嫌わないで下さい！」

すつくと立ち上がりその反動でよろよろとしながらもそういったブラックの両腕を私はがっちり抑える。

「なんとかならないからっ！ 何ともしなくて良いからっ！！ 好きだから！ 大丈夫、二十代後半だろうと三十代だろうとそれ以上でも、年齢なんていくつでも良いから！」

暴走特急は放っておいたら何をしでかすか分からない。

「……生告白」

「そこ黙ってろ！」

カナイの茶々に目くじらを立てる。てか誰だよ！ ブラックに飲ませたの？ って自分だよっブラック自身が自分で撒いた種だよ。だとしたらやっぱり私が回収しないと駄目だよねえ。

「と、兎に角。大丈夫だから落ち着いて？ 年齢くらいのことで私がブラックを嫌いになったりはしないよ」

自分でも何いってんだかと呆れるような恥ずかしい台詞に、私はブラックの顔を見ることがはつきりと呆れているカナイたちを見ることも出来ず空を仰いだ。

私もきつと少し酔ってるんだと思う。

「そうですよね。私もマシロを愛してます」

ふわりと抱き込まれ私が現実に戻されるよりも早く

「カナイ、これ破壊しますよ」

突然素のテンションでそういったブラックにカナイが答える隙もなく、パリンっと何かが壊れ落ちる音がした。

えっ？ と、ブラックを見ると機嫌良く口笛とか吹いている。お前……と頬を引きつらせているカナイを他所にブラックはいつも通りの飄々とした様子でくると片手にした杖を回す。

「マシロ、屋敷に戻りましょう？」

「え？ でも」

「もう酔いは覚めました。もともとそんなに飲んでいませんし、カナイの結界に魔力吸われ続けたら、アルコールも飛んじやったみたいですよ」

「その結界を片手間みたいに壊しやがって……お前ほんっとーっ嫌な奴だな。つか、お前それ分かっててエミルを図書館まで走らせたな？」

「嫌ですね。カナイのその疑り深い性格治したほうが良くないです

か？　ね？　マシロ」

私にフルな。

疑り深いというか、もうこうなったらそうとしか取れないだろう。

ブラックは意図的にエミルを使いっ走りにしたわけだ。そしてそれが露見するまでに帰ろうと？　休み明けにすぐ顔を合わせる私の身にもなって欲しい。はあ、と嘆息した私に

「マシロちゃん！　伏せてっ！」

アルファの怒声が響く。

反射的に腰を折ると頭上を閃光が走った。

だだだだだからっ！　私が近くに居るときに抜刀するのはやめてってあれほどいってるのにっ！

殺気の籠った一閃だがブラックに届くはずもなく、ブラックは私のお腹に腕を回すとそのまま、とんとと地面を蹴った。両足が所在無さげに空を搔くと、すっと身軽に夢見草の木の枝に着地する。ちよっと！　と私が怒り出す前にブラックは眼下に映る二人に

「マシロは貰っていきますね」

と爽やかにいい残してもう一度足を弾いたら次の瞬間には辺境の町近辺まで移動していた。

そっと地面に私の足を降ろしたブラックはすみません、と、短く謝罪した。こちらが怒る前に謝られたら何もいえなくなってしまう。休み明けカナイに嫌味をいわれるのも黒王子がチラ出することにも

覚悟しておこう。

「お花見、楽しめましたか？」

その台詞が、ほんの少しの寂しさを含んでいるような気がして私は答えられずに話題を逸らした。

「これ書斎から見える桜？」

ブラックが私を連れてきたのは少し小高い丘になっている場所にある大きな桜の木の下だった。

そっと太い幹に手を触れて見上げると、瑞々しい枝が視界一面に広がっていて多くの花を咲かせている。

月も夜も全て覆ってしまいうくらい見事な桜だ。

もしかしなくてもきつとこれは私が最初に落ちてきたときに引っかけた巨木だろう。

あのときは葉の頃で一目では私には桜だとは分からなかった。そんな余裕もなかったし。思い出すと少し懐かしい。

「マシロ」

名を呼んでブラックは後ろから私を包み込んでしまう。

幹に掛けた腕すら逃すのが惜しいように、大きな手で包み込んで抱き込み私の首筋に頬を摺り寄せる。そんなブラックの仕草に私の身体はアルコールの熱が戻ってきたように火照ってくる。

「紛らわせることは出来ましたか？」

か細く掛けられる言葉に私は疑問を感じる。

「何を？」

浮かんだ疑問をそのまま問い掛けるとブラックは少しだけ逡巡したあと言葉を繋ぐ。

「寂しさです」

「……私別に寂しくなんてないよ？」

「誤魔化さなくて良いですよ。私は貴方から世界を奪ってしまいましたが……貴方がそれを寂しく思わないはずはないんです。現に『お花見』も」

「違うよ！ 違う違うっ！」

私は「違う」を連発して暴れるとブラックの腕を解いて彼を振り返った。

ブラックは困ったように眉を寄せ私をじっと見詰めている。

「お花見は、ブラックの気分転換になればと思ったただだよ。私はまだこっちの季節の楽しみ方なんて知らないから、だから結果的にこんな話になってしまって、物珍しさに人まで集まってしまって、結局ブラックの為にはならなかったかもしれないけど」

決して自分の寂しさを紛らわせる為とか、そんな理由じゃない、と、強く力説した私にブラックは驚いたように瞳を瞬かせた。

「そりゃね、忘れないし、気にならないわけじゃない。でも私はあのまま元の世界に居たらきっと腐ったと思う。ブラックが迎えに来てくれたとき、凄く嬉しかったし、ほっとしたの」

そういつて真っ直ぐにブラックを見上げると、ブラックの瞳は泳いでいた。刹那、言葉に詰まったあとブラックは、はあと脱力したように嘆息して私に軽く寄り掛かる。

「まだ酔ってるのかな……幻聴が」

「幻聴じゃないから」

―― ……どこから否定しているんだ。

眉を寄せた私にブラックはふふつと笑う。

「マシロは不思議な人ですね。私の心が見えるんですか？ 私の欲しい言葉を直ぐに探し当ててしまう」

そんな魔法使いみたいなこと出来ないよ。

私は腹の中で笑ったが、そう思ってもらえるなら恥ずかしいのを我慢して口にした甲斐もあったものだ。ほんのり暖かくなる心に嬉しくて顔を綻ばせるとブラックが顔を上げていた。とてつもなく優しくくて柔らかい目で私を見る。

「マシロは、私が貴方を迎えに行ったときどれだけ怯えていたか分かりますか？」

「そうなの？」

「そうなんですよ。何かに怯えたり怖いと思ったりそんなこと感じることはないと思っていたのに、あのときは酷く恐ろしかった」

ゆつくりと言葉を紡ぎだすブラックを見上げていると、綺麗な指先が私の頬を撫でていく。

「もし、マシロが私のことを忘れてしまっていたら、もし、マシロ

が他の誰かを愛していたら……もし、マシロが私の手を取ってくれなかったらと」

「ば、馬鹿みたい」

そんなことあるはずなのに。ていうかあれだけ自信満々で、さも当たり前というように私の手を引いたくせに……本当に馬鹿だ。

「……ええ、本当に馬鹿ですね？　そうだとしても私は奪い囲うつもりもあつたのに」

いってそつと私の唇に触れる。啄ばむように口付けたあと「何より」と前置いて凄い至近距離で私の目を覗き込むとふっと瞳を細める。

「マシロはこんなに私に溺れているのに」

「自惚れてる？」

「はい。もちろん」

私ですから、と続けて私の上唇をつつと舌で撫でるとそのまま僅かに開いていた唇を押し開いて口内に割り入ってくる。

ざらりとした感触が上顎を撫で口内を犯していく。

強い口付けに頭の中が真っ白になり身体に力が入らなくて縋りつく。

「……っん……あめ」

くぐもった声の中に意味のありそうなものを感じたのか、少しだけ私を解放して「あめ？」と問い返したブラックに私は腕を突っ張った。

息が上がって心臓がばくばくいってるし膝に力が入らなくてふら

ふらなんだけど……。

「だ、めだって、いつてるのっ！　ここ、どこだと思ってるのよ！」
「夢見草の下ですね？　ロマンチックじゃないですか？　マシロは甘美的なのは嫌？」

「……外なのが問題でしょっ！　誰かに見られたらどうするの？」
「見せ付ければ良いじゃないですか？　誰も咎めませんよ」

ぎゅっと拳を握った私にブラックは慌てて取り成す。

「そうですね！　外は拙い。可愛いマシロが乱れる姿は」

バキッ！

酔っ払いは口を慎め。

私の怒りの鉄拳にワザとらしくしゃがみ込んだブラックを無視し
てずかずかと丘を下っていく。

ここからなら屋敷までそう遠くないのは分かっている。迷子にも
ならないだろう。ちらとだけ後にしてきた桜を見て足を止めたが直
ぐに一歩踏み出す頃には隣に何事もなかったようにブラックが並ん
でいた。

「たまには歩いて帰りましょうか？」

「……そうだね。帰ろうか」

どちらからともなく指を絡めて繋いだ手にきゅっと力を込める。

遠くにあると思うもの……きっとそれが故郷というもの。
そして今私の居場所はどこにある。

それにしても、あのときのブラックが怯えていたなんて微塵も感じなかった。流石というか何というか……可愛いよね。

—— ……ああ、やっぱり私も終わっている。

—前編—

「マシロが不愉快ならお帰りいただくか消えていただきましようか？」

「い、いい、いや、良い大丈夫っ！」

思わぬ訪問者に眉を寄せた私に掛かるブラックの言葉は極めて穏やかだ。「今日は良い天気ですねえ」といつてるときと変わらないが内容は穏やかではない。

訪問者もろとも慌てる。

「そうですか？　あまり好ましい方に見えませんが」

ま、ここに足を運ぶ度胸は認めますけどね？　ぶつぶつといいながらブラックは机に戻ると腰掛けて当初の作業に戻った。

私は一応別室の方が良いか訪ねたがブラックも移動を許さなかったし彼女も構わないということだったからそのまま中央に置かれている応接セットに腰掛ける。

「それで？　私に用ではなくて、マシロに用とはどういうことですか？　わ・た・し・は貴方を消したくて堪りません。貴方はマシロの柔肌に痣をつけてくださったそうですし、ねえ？」

—— ……怒ってる。

ブラックが口に出して怒っているのは珍しい。ちょっと楽しいけど、対峙したキリアさんの顔色が蒼白になってきている。結構前の話だし、ブラックが知ってとは思わなかった。多分、アルファが面白半分で喋けたのだろう。

「ブラックは黙ってて」

「……はい」

物凄い不服そうな返事だ。耳がしょげてる。可愛い。撫でたい。
でも、我慢我慢。

「んーっと、次はなんですか？ ケレブ様のことがどうとかいうのなら、もう間に合ってます。私の考えは変わりません」

「い、いえ、今回はケレブ様の件ではなく……その、エミル様個人に関するようお願いがありました……」

「……で、何で植物園？ しかも俺とエミルとそのどこかのご令嬢とお前？」

カナイは基本的に図書館の奥深くで籠っていてることが多くて助かる。探すのは大変だけど内緒話をするには打って付けな感じだ。エミルは部屋で怪しげな煙を出していたから部屋に居ると思うし。アルファはこの時間ロードワーク中だ。

「私にも良く分からないんだけど……何というか私あの人に弱いんだよね。何か人の話全く聞かないし、勝手に話し纏めるし」

キリアさんのお願いはお年頃のエミルが、幾つか来ている縁談の一つも興味を示さないから誰か一人でも会ってもらえないかというものだった。本当に個人の問題だから私もキリアさんも係わるべきではないのと思ったけど、エミルは王族だ。そういう方たちにはそれなりの何かあるのかもしれない。いつまでも自由に行かない

というのはエミル自身も分かっているようだったし私に協力出来るようなことなら少しくらいなら手を貸してもいいかと思ったわけだ。

「ブラックは許したのか？」

そうなのだ、こんなメンバーでお出かけなんて許さないだろうと思ったけれど、提案したのはブラックだった。

『私も一緒にしたいですが、私が行くと警戒されるでしょう？ エミルに』

といって自分には行かないけど私は行っても良いことになった。

「うん。ただ……植物は平気かどうか聞かれたけど」

「で、平気なのか？」

「別に普通だよ。薬草とか薬になるものくらいしか詳しくないけど。ていうか平気かどうかって何？ 好きか嫌いとか興味の有無ならまだしも」

やれやれと肩を竦めた私にカナイは、お前が良いなら良いけどエミルにはお前から話せよと念を押された。

キリアさんの手回しによりアルファは騎士団入団試験の試験官にひっぱり出され、こちらに参加できなくなった。アルファはすごく残念そうだったけど、またの機会ということで納得してくれた。

「この子がナムルイシュヴァ。え、ええっと、友達で……その」

「ルイと呼んでください」

中央広場で待ち合わせた。私は二人より一足先に出てナムルイシユヴァと話をしようと思ったのに、お嬢様は時間ピッタリだった。打ち合わせも何もない。でもキリアさんの話では、私と彼女が友達という設定らしいのでそれに便乗する。

流石、エミルのお嫁さん候補。見目麗しいお嬢様で育ちの良さが滲み出ている。有体な自己紹介を済ませると

「どう見てもお前の友達じゃ無理があるんじゃない？」

訳知り顔のカナイが私に耳打ちする。今日は楽しもうねーと笑顔を見せつつカナイの足を思い切り踏みつけて捻っておいた。

痛みに唸るカナイを無視して私はルイの手を取ると彼女を真ん中にして歩き始めた。地図では確かこっちであつた。

「でも、植物園なんてマシロの提案？」

「え？ いや、うん。うん！ そう。良いよね！ 植物園」

チケットも全てキリアさんから受け取ったものだ。

「ルイさんは、僕らなんかと出掛けて大丈夫なのかな？」

「はい。ルイはエミル様と出掛けられるならどちらでも……」

もじもじと口にしたルイにエミルは小首を傾げて「面識があつたかな？」と不思議そうだ。

「ほ！ ほら、私と一緒に居るところを見かけたんだよねっ！ ねっ！ ルイっ」

「え、はい、はい、そうです」

はぁ…疲れる。何で私がこんなグルーブ交際みたいなことしないといけないんだ。ブラックが駄目だと切り捨ててくれればこんな面倒に巻き込まれなかったのに……そう思うと何だかブラックが恨めしく思う。

「なあ、遠回りしたいのかもしれないけど、そっちじゃいつまで経っても到着しないんじゃないか？」

ぐいっとカナイに手を引かれ、手に持っていたチケットと地図を奪われる。

「エミルも場所知ってるだろう？ 軌道修正してやれよ」

「ふふ。今日はマシロ主催だから、任せようと思って」

……方向音痴健在なのね。町にも慣れたつもりだったけど私の行動範囲なんてまだまだ高が知れているようだ。

こっちだとカナイに背中を押されて、はいはいと足を進める。

「ふわー……っ。図書館の温室も凄いけど、流石植物園だねー……でもちよっと物々しい？」

カナイに先に歩いてもらえば直ぐに到着した。私の頭で考えていた道順とはかなり違っていたから任せて正解だったようだ。

二本の巨木の間に掛けられた看板で確認しアーチを潜るとただっ広い温室に足を踏み入れる。入場口から既に室内だ。

植物園なんだから家族連れとか多そうだと思っていたけど、やた

らカップルが多い気がする。

「ほら、これ半券と案内状。二人ずつ入場だから」

「え？ 何で！」

思わず声を上げた私を三人ともきょとんと見詰める。私は間違ったことをいった？ いやいつてない。反語。植物園なんだから皆でわいわいでしょう？

「僕も来るのは初めてだけど、そういうルールなんだよね？ 確か……だから仕方ないけど手の表と裏で組み分けしようか？」

私の動揺をやんわりと収めつつエミルが提案してくれる。でも、それじゃあ、男女の組にならないことも有り得る。

「ちょ！ 待って！ エミルとカナイが裏表して。私とルイが裏表するから。うん、それでペアになろう！」

何とか頭を切り替えて提案した。良いよとエミルがにつこりと頷いてくれたことに胸を撫で下ろす。

私の意図をすんなり汲んでくれたのか、唯の幸運か、私は予定通りカナイとペアになった。

先頭切って入場すると次ペアは少し時間を開けて入るらしい。

「……なんていうか、お化け屋敷みたいなシステムだね」

よく分からなくて呟いた私にカナイは「お前本当に大丈夫なのか

？」と眉を寄せた。

「何を心配するの？ 植物園なんだから、普通に花とか木とかそういうのを堪能すれば良いんでしょ。ほら、あそこにある花なんて凄く大きくて立派で毒々しい色をしていて……」

すたすたと歩きながら指差した先の花。五枚の巨大な花卉。色も血のように真っ赤で目に痛い……

—— ……ぎゃあっ

「いや、もうちょっと可愛らしい声出せよ。ぎゃあって……おい？」

「カナイっ！ 花っ！ 花がっ！ 花がっ！ 何か食べてる！ 食虫とかそういうレベルじゃなくって何か食べてるーっ！！」

「丁度食事時に出くわしたんだろ？ 仕方ないじゃないか」

あわわっとしゃがみ込んだ私に呆れたような溜息とともに吐き出される台詞。何？ 何が仕方ないのっ？ 植物だよ！ 花だよ！ 何でヤギぐらいの動物食べるのっ！ 足暴れてるっ！ えぐいーっ！ リアルスプラッタっ？！

じわじわーっと地表へ赤い液体が流れ出て土の中へ染み込んでいく。

「おーい？ 大丈夫か？ 入って早々だけど、リタイアするか？

多分、非常口があると思うから、外でエミルたちを待ってれば……」

「良い！ 行っ！ 行けば良いんでしょっ」

「何で俺が怒られるんだ……理不尽すぎるだろ」

「行ったら行くの！ カナイ腕貸して、目瞑って歩く」

「いや、貸すのは良いが目は開けろ。直視して歩けとまではいわないが足元くらいは見ろな」

仕方ないと呆れられ伸ばされた腕に私はしがみつく。

別に室内が暗いわけじゃない。狭いわけじゃない。でもそれが余計に怖い。食虫植物っぽい類は普通に動植物を捕食してるし、二足歩行している巨大植物もあったし、遠慮無しにこちらを捕食しようとする蔦とか……かなり危険だと思う。

—中編—

—— ……ぼっ

「……あ、ありがとう」

「別に良いけどな？ お前、平気で解剖とかするのにこの辺の何が駄目なわけ？ 俺、歩きづらいことこの上ないんだけど」

私の足首を絡め取った蔦を容赦なく燃やして撤退させてくれたことには感謝するが、いちいち五月蠅い。

「解剖だって好きでやってるわけじゃないよ……それに、予想外。心構えが出来てない。大体、普通植物歩いたり攻撃してきたり動いてるもの食べたりしないでしょ」

こんなところだって分かってたからブラックも大丈夫か聞いたんだ。

「……？ そんなのもなくてお前の居たところでは植物園で何を見るんだ？」

「植物ですっ！」

「なら同じだろ？ 植物の生態」

……聞いた私が悪かった。

でもちよつと納得。こんな場所だからお化け屋敷感覚でカップルが目付いたんだ。

「エミル大丈夫かな？」

「大丈夫だろう？ エミルは紳士だから、ルイに迷惑掛けられても嫌な顔見せたりしないだろうしな。それに、バレてそうなものだけどお前の友達ってことになってるんだ。嫌な態度は取らない」

きっぱりそういわれて何だか不思議な気持ちになった。私はその名前のない感情に首を傾げつつ、止まった足を踏み出した。残り半分くらいらしい。

「あまりこういうことにマシロを巻き込まないで欲しいです」
「……え？」

順路を辿り奥へと消えていく後姿を見送ったあとぽつりと零したエミリオの言葉にナムルイシュヴァは肩を跳ね上げた。

エミリオは穏やかな調子のまま言葉を繋ぐ。

「キリア辺りが仕組んだのでしょうか？ 私はまだ王宮に戻るつもりはありません。それに貴方も私のような末の王子がお相手では分が合わないお家柄のはずです、キリアに何を吹き込まれたのか分かりませんが私では行く末は明るくはありませんよ？」

にっこりとそう告げられナムルイシュヴァは萎縮したが園員のどろどろという言葉に背を押され園内に足を踏み入れた。

「手をどうぞ？」

さっきまでの様子では突き放されてしまっていたのに自分に差し出されているエミリオの手に驚き逡巡した。

「貴方のような方が楽しまれる場所ではないと思いますが、抜けてはいけません。もう暫く私に付き合ってください」

とにっこりと微笑まれ、ナムルイシュヴァはおずおずとその手に重ねた。想像よりもずっと大きな手に包まれて胸が跳ねるのと同時にいい知れない寂しさに包まれる。

「……それは、マシロの為、ですか？」

ぽつりと零したナムルイシュヴァの言葉にエミリオはその姿を振り返ることなく「すみません」とだけ告げて足を進めた。

「ルイっ！ 大丈夫だった?!」

園を抜けたところでベンチを陣取ってぐったりしていたものの、ルイとエミルが出てくるのを見つけて駆け寄った。お嬢様にはさぞかし辛い道のりだっただろう。

「ごめんね、私、植物園がこんなに危険なところだと知らなくて……」

「大丈夫ですよ。エミル様と一緒にでしたし……マシロの悲鳴が後ろまで聞こえました」

「え？ 嘘っ！」

「冗談です」

ふふつと悪戯な笑みを浮かべるルイに私はそりゃないよと肩を落とす。

「あー、お疲れさん？」

「カナイも付き合いが良いよね。最初から加担してたならお仕置きが必要かな？」

私はカナイがそんな呪いを掛けられているとも知らずに、ひとしきりルイの安否を確かめたあとエミルの傍にも寄った。エミルはこりと微笑んでお疲れ様といつもと変わりなく頭を撫でた。

「これから甘いものでも食べに行かない？ 本当は間食用に思っ
て作ってきてただけけど途中で取られちゃったから」

居た堪れなくてエミルの手をそつと降ろしてそういった私にエミルは相変わらぬ笑顔で良いよと頷いてくれる。

作ったのはサンドイッチとマフィンだったのに。奪われるままにしておいたカナイに意図的なものを感じて怒りたいのは山々だったけど今回はカナイに救われたので一応我慢した。

それから皆で夕時まで時間を潰し、私はカフェの前でルイを送るからと二人と別れた。アルファへのお土産に意図的に冷たいものを選び、早く届けてあげて欲しいと押し付けて帰したのだけど大丈夫だったかな？

「ええっと、少しは仲良くなれた、かな？」

正直見ず知らずに近いルイと二人きりになると言葉に詰まるのだが、四人で居たときに比べれば肩の荷が下りた気分だ。ルイはお上品に微笑むと「そう、ですね」と頷いてくれた。

「ルイはエミルと面識があったの？」

「はい。パレードのあとに行われる夜会でお目に掛かったことがあります。エミル様は覚えていらっしゃるなかったようで、良かったのか悪かったのか……でも、改めてお会いできて良かったです」

そういつて夕焼け色に頬を染めて極上の笑みを零すルイに、胸を撫で下ろす。夜会ね。私には永遠に縁がない感じだけどそういうのが彼らの世界なのだろう。

エミルに隠し事は悪かったと思うけど、ルイがこんなに喜んでくれたなら良かった。

「エミル様はとても優しい方ですね」

「え？ ああ、うん。そうだね。エミルは優しいよ。図書館に入っただばかりで右も左も分からなかった私のことも助けてくれたし、皆に慕われているし……シゼなんて、ああ、シゼっていうのは十四歳くらいの図書館生の男の子なんだけど、エミル教徒って勢いで大好きなんだよ。私はもちろんだけど、アルファやカナイまで目の敵にしちゃってエミルを独り占めしたいーっ！ てのが見えてね？ 逆に凄い可愛いのに」

あははっと笑ってしまっただけが喋っていることに、はたと気が付く。慌てて謝罪するがルイが特に気分を害した風でもなくてよかった。

「マシロも皆さんに慕われているんですね？ エミル様には特別に……」

ふ……っと瞳を伏せてそういったルイに私は焦る。

「そ！ そんなことないよっ！ エミルは皆に優しいんだよ！」

「ですが、エミル様は貴方をお慕いしていると」
「そういう話がなかったわけじゃないけど、わ、私には恋人も居るし」

女友達ってなると私はこういう口論をするのが定番なのだろうか。誰に非があるのか混乱して私はきゅっと唇を噛み締めた。そんな私に気が付くでもなく、ルイは私の言葉を口内で復唱し問い返してくる。

「恋人？ 今日ご一緒してくださいました、カナイ様ですか？」

「え、ああ、いや、違うよ。カナイは友達。カナイと恋人だなんて有り得ない。ずーっと喧嘩してないといけない気がする」

ちょっと黙して考えてみるが、私とカナイが恋人同士なんてどうやったら見えるんだろう？

「えと、私の恋人は……多分、近くに来てるんじゃないかな？ 大抵こういうときは仕事さえケリが付いたら傍に居るんだけど……」

居なくて当然なのだけど一部の望みを掛けてきよろきよろと見回してみる。特に足元。その様子にルイは「小さな方なんですか？」と可愛らしい問いを掛けてくれる。

「いや、小さいっていうか……私の為にあんまり表立って出てこないというか……あ、居た」

まさか、本当に居ると思わなかったよ。私は苦笑しつつものことこと歩み寄ってきた黒猫を抱きかかえる。そして顔を上げるとルイが怪訝な顔で見ていた。

「ルイをからかうのはやめてください。確かに綺麗な猫ですが、恋人というには冗談が過ぎます」

そういつてルイが私の腕の中へ手を伸ばす。女の子に爪を立てるなんてしないと思うけど……冷や冷やと見守っていると、ルイの指先がブラックの額に届く寸前。ひやっとルイの可愛らしい悲鳴が聞こえ、私の腕の中かが軽くなった。

「触らないで下さい。私はマシロ以外に触れるのは不愉快です」

ルイに大丈夫かと尋ね抗議の目で振り仰げば、当然ブラックだ。ルイは驚いていたようだけど、手の甲も僅かに赤くなってる程度で直ぐに治りそうだ。ほっと胸を撫で下ろす。それにしてもこういう時に元の姿に戻るのは珍しい。さっきまでの話題の所為でルイのことへの怒りよりも、姿を戻してくれたことへの喜びのほうが大きい。私は身勝手だ。

「ブラック……良いの？」

私は余ほど情けない顔をしていたのだろう。ブラックは困ったように微笑んで私の頬を撫で目じりを拭う。別に泣いては居ないと思うけど。

「貴方、は……」

「種屋のブラックです。闇猫とも呼ばれますね。名前くらいはご存知でしょう？ 世の上層部とは割りと懇意ですから」

にっこりと営業スマイルのブラックは薄ら寒い。ルイは視線を彷徨

徨わせどう応えて良いのか分からない様子で一步引いた。

「貴方が王子を射止めてくださればと思ったのですけどね？ 私にとってはとても邪魔なのですが、マシロがお友達を消すと怒るので」

ブラックのいつもの冗談で、ルイが息を呑んだのが分かった。ブラックの冗談も分かり難い。……冗談、だよな？

私は乾いた笑みを零した。

「と、兎に角。ブラックの冗談は良いんだよ。うん」

「え？ あ、はい。冗談ですよ」

冗談ではないといいそうだったブラックを小突いて黙らせルイととりあえず笑いあう。そして、迎えの馬車を発見してルイとは別れた。別れ際、何だかルイがまた私と会いたいといってくれたのが凄く嬉しかった。正直散々な気がしたけどルイ本人は多分そんなに悪い子じゃない。

―後編―

「でも、珍しいよね？ ブラックが出てくるなんて」

「ああ、はい。少し雲行きが怪しかったので釘を刺して置こうかと……」

「……？ まだ雨季でもないし今日は降らないと思うよ？」

茜色の空を見上げるとうつすら色付いた雲が流れていくだけだ。この調子なら明日も間違いなく晴れると思う。私の疑問に「マシロは本当に呑気ですよねぇ」と呆れたように口にしたがブラックがそれ以上そのことに応えることはなかった。

「それで？ さっきの話がくわーしくお聞きしたいのですが？」

「さっきの話？」

首を傾げた私にブラックは少し拗ねたような表情を見せた。それに何の話か頷けた私はやや迷ったがこうなったらいわないと解放されないだろうと説明した。

「詳しくも何も、エミルに告白されてそれを受けられなかったただだよ。それに、その時はブラックと恋人？ 関係じゃなかったし、問題ないでしょ？」

「どうして、恋人のあとに疑問符が付くんですか。なんだか凹んできました、だから今夜は帰しません。屋敷に戻りましょう！」

どういう展開なのか道端で人をがつつり抱き締めたブラックに赤くなる顔を隠して暴れる。明日は普通に授業があるし、このまま寮に戻らなかったらエミルとカナイが私を探しに出る可能性だってある。今日の予定に種屋に戻るのは入ってない。ケータイとかの通信

手段がないのはちよっぴり不便だ。

そのあと、ブラックを何とか説得し、納得したかどうかは分からないけど私は寮に戻ることが出来た。とりあえず戻ったことをカナイたちの部屋へ伝えに行くとアルファへのお土産を口に入れられた。それでもまあ今日が無事に終わったことに胸を撫で下ろし、夜は普通にベッドに入ったのに、想像以上に疲れていたのかもしれない。

翌朝盛大に寝坊した。

扉をノックする音と、少し心配そうなエミルの声で目が覚めた。私は本当に跳ねるように起き出して慌てて戸口に立つ。ほんの少し扉を開けて寝坊したことを告げた。いつもならそれで終わるのに珍しくエミルは扉に手を掛けて開くと短く謝罪してからするりと部屋に入ってきた。パジャマなのと髪に少し寝癖が付いているだろうくらいだから問題はないけど、どうしたんだろうと首を傾げながらも皆が遅刻してはいけないから先に行っておいて欲しいと告げるともうカナイとアルファは教室に向かったらしい。

「エミルも先に行ってて良いよ」

「うん、でももう少しだけ……」

「そう？　じゃ、じゃあ、私急いで準備するから」

身支度の為に浴室へと駆け込もうとしたら、ぐいっと手を引かれた。どうしたのかと問う隙もなくエミルに抱き込まれる。え？　ええ？　っと動揺して暴れるとエミルの手に力が籠って完全に逃げられなくなった。

「急いでるのは分かってるんだけど、少しだけ……」

「え？ あ、うん……」

耳元で紡がれる声に肩を強張らせ、そこに集中しちゃ駄目だときゅつと瞳を閉じる。

「昨日みたいなのは、もう、やめて欲しいんだ」

ほんの少し掠れたような声で続けられ、私は「え？」と間拔けな声を出した。

「キリアに何を吹き込まれたのかは分からないけど、大抵想像付くよ。でも、マシロも酷いよ……僕が君に誘われてどれだけ嬉しかったか分かる？ 何かあるだろうとは思ったけど、でも、素直に嬉しかったんだよ」

ぽつぽつと零れてくるエミルの声で完全に身体の緊張は解け、変わりに申し訳なさで胸がぎゅうつと苦しくなる。私は、エミルの気持ちを軽く見てしまつて……

「だから、正直傷付いた。気持ちが切り替えられない僕が悪いんだけど……僕自身の問題なんだけど……ごめんね、マシロ。僕はまだ君が好きなんだ」

私はエミルを傷つけた。

「……エミル」

「駄目。駄目だよ。いわなくて良いよ、分かってるから……だから、ごめん。ちゃんと割り切ってるつもりなんだ、でも、もう少しこのままで……時間が欲しいだけなんだ……」

そんなに泣きそうな声で謝罪を重ねられたら、私は頷くことしか出来ない。

エミルは、ふふっとほんの少し寂しげな笑みを零し、もう一度腕に力を込めると「ありがとう」と告げた。

何もいえない私の身体に回した腕の力をゆっくりと解くとエミルは離れ際こめかみに軽く口付けて「本当に遅刻するから急いで」といつものように木漏れ日のように優しく微笑んで私の頭を撫でると部屋を出た。

私は暫くエミルの唇が触れたこめかみを押さえて、閉まってしまった扉を見詰める。

もしも私がエミルの立場だったら……そう思うと胸が苦しくて堪らなかった。じわじわと沸いて出てくる涙が止まらなくて私はごしごしと乱暴にパジャマの袖で何度も拭い遠ざかった足音に何度も詫びた。

「――…灸にしては据えすぎじゃないか？」

「盗み聞きは良くないよね。まあ、確かにちよっぴりマシロには可哀想だけど暫くは猛省してくれる。何？　それともカナイは夕べよりも一ときつついことされたんだ？」

「……あーっ、いや、うん。ハンセイシテマス」

エミルは陽の当たる廊下をのんびりと歩きながら隣に並んだカナイに軽口を叩き肩を疎める。そしてやや沈黙したあと、窓から差し込んでくる陽光に瞳を細めてぼつりと呟く……。

「それに、本当のことだから……」

「あ？　なんて？」

「……何でもないよ」

にこりと次の言葉を遮るようにそう締め括ったエミルにカナイは曖昧に返事をして、あとは黙した。

今日も一日穏やかな天気恵まれるだろう。

(1) (前書き)

お久しぶりです。

お気に入り登録数が三桁突入して感激のあまり特別番外編を書きました。

六日間連続、夜十時投稿になっています。

良かったらお楽しみいただけると嬉しいです。

(1)

—— 大好きで大切に……貴方のことだけ考えて
何が一番貴方の為になるのか

どうすれば貴方はいつでも微笑んでいられるのか
月を見上げる貴方を見ると心が痛む

手放す気はないけれど

僅かな夢の雫くらいあっても良いと願っている ——

辺境の町にある一際大きな屋敷。

今夜も二つ月の光を浴びて、静かな夜に溶け込むように佇んでいた。

—— ……どんっ！

突如そんな静寂を破る音が響き白煙を上げた。

「だからさー、何か読みながらご飯食べるのやめなよ、カナイ！」

私は身を乗り出して人の正面の席で新聞を広げていたカナイの新聞を叩いた。カナイは物凄く迷惑そうな顔をしたあと、ぱんつと新聞を整えて、四つに折ると私のほうへ差し出した。

「お前も新聞くらい読め」

いらないと突き返そうとしたら差し出された記事に目が留まった。そんなに大きな記事ではないけれど建物の一部が崩壊した写真に見える。

「ちょ、これ、何？」

「んー……これどこ？ ……ええっと何々、辺境の町で爆発騒ぎ……爆発元は種屋と思われる。原因も爆発元も詳細は不明。調査困難……負傷者不明……って、これ記事の意味ないですねえ。種屋に居るのなんてブラックくらいでしょ。他の建物に影響ないなら、負傷者も居ないと思うけどな」

横から覗き込んでそういったアルファにエミルもふーんと相槌を打った。カナイは遅れていた食事を続けている。

「って、なんで皆落ち着いてるのっ！ ブラック何かあったかも知れないじゃないっ！ 怪我したとかもしかしたら、し」

いい掛けて声を詰めた私にアルファが笑う。

「死にません死にません。絶対ないです。たかが家が爆発したくらいで死ぬような柄じゃないです」

「いや、普通に生活してて家が爆発することなんて滅多にないし、それだけじゃないでしょ！ ……って、いってても仕方ない、私、見てくるっ！」

がたつと立ち上がると、待ってとエミルに制される。私は、一秒でも早くここを出たいのに取り合えずエミルを見た。エミルは優雅にティーカップを傾けていたのを机に下ろすと一息。落ち着いてますね？ 王子。

「今からいったって夕方になっちゃうよ？　ほら、カナイ、見てきてあげなよ」

カナイの肩を叩きつつそういったエミルにカナイは素直に面倒臭そうな顔をする。

「大丈夫だって。その記事しかないだろ？　種屋が代替わりしたとか、んなこと書いてないじゃん。無傷でびんぴんしてるって」
「ついでに家が壊れたままなら直してきてよ」

ありがとうエミル。やっぱりエミルは優しいよねっ！　と感動した。

カナイは「あいつに恩を売っても無駄だと思うぞ」とまだまだ面倒臭そうだったけど、恩ってなんだ。むっと眉を寄せるとエミルが「分からないよ。何かの役に立つかもしれないし」と答える。
そっか、素直に救済なんて考えないんだね。皆。その寂しさについて肩を落とすと同時にカナイは深く溜息を落として「仕方ねーな」と立ち上がった。

「まあ、確かに撮られるほどそのままってのはオカシイよな」

ぶつぶつとそんなことをいいながらカナイは食堂を出て行く。アルファはまだ食べていたし私は暫くそこに我慢していたが落ち着かない。そわそわしているとエミルが苦笑した。

「部屋で待ってるの良いよ。直ぐ帰ってくると思うし、ひよっこり本人が来るかもしれないよ？」

いわれて私はそうだね！　ともう一度立ち上がりそうするよ！
と部屋に戻った。廊下を走るように戻って部屋の鍵を開ける。

がちやりと慣れた音で扉を開くと正面奥にある机に腰掛けている人影と目が合った。

「あ、ごめんなさい」

ぱたんつと扉を閉めて、やや黙す。そして、きよろきよろ。角部屋だし、私の部屋だよな？　そうそう、鍵だって開けたんだから私の部屋だよ。え？　鍵掛かってたよね？　じゃあ、あれは何？　なんで私の部屋でふっつーに座ってたの？

だんだん混乱してきた私は、すーはーと一度深呼吸して改めて扉を開く。

―― …… やっぱり居た。

「ええっと、私の部屋だと思うんだけど、君は、誰？」

恐る恐る入ると少年は椅子から降りて無遠慮に私に近づいてきて顔を覗き込む。私の鼻先くらいに頭の天辺がくる。猫耳に尻尾。獣族の男の子だ。綺麗な子だ。というか、見覚えがある。私は、まさか――… と思いつつもぽつりと口にした。

「ブラック……？」

私の呟きに少年は首を傾げた。やっぱり外れたのかな？

「僕の名は……いや、名は何でも良い。君は誰だ？　僕と何の関係がある？」

私より小さいくせに物凄く大仰な態度だ。というか……私がこの子を知っている前提みたいだけど、私の知り合いの獣族に子どもと

いうかこのくらいの子は居ない。黒耳に尻尾はやっぱりブラックくらいしか知らない。

「私はマシロっていうんだけど、君のことは知らないな？　君はどうやってここに来てここに入ってきたの？」

普通の魔術とかではここへの入室は難しいらしいし、普通に入るにも許可が要る。軍艦さん、じゃなくて寮監さんに止められること必至だ。

「マシロの居るところに來ただけだ。マシロがここに居るから僕はここに來た」

……ん？　禪問答か何かか？

私は混乱して首を傾げる。丁度そのときノックが聞こえカナイが声を掛けてくる。早いな。

「おい、マシロ。居るか？」

私は居るよと真後ろのドアを開けた。

「屋敷は元通りになってたけどブラックの姿はなかったぞ？　そんなことよりお前の部屋に誰かが……そいつ誰だ？」

首を傾げたカナイに私も首を傾げる。

「私は種屋を継ぐものだ」

とりあえず少年は私たちの時間を刹那止めてくれた。

(2)

「ふーん。つまり話を纏めると、爆発に巻き込まれて気が付いたら種屋らしき、というかあそこは種屋だけだね？　に居たんだね。それで建物に残っていた像にマシロの姿がブラックに次いで多かったから、それを追ってここまで来たわけか」

「爆発の痕跡が残ってたのは半地下だったから、あそこはなんだ？」

「作業場みたいなものだよ。私が調剤とかに良く使ってたの。ブラックも何か小難しいことをするときにはあそこに籠ってたみたいだけど」

アルファが淹れてくれたお茶を注意深く見ていたから私はカナイの質問に答えつつ彼のカップをちよつとだけ取り上げて一口飲んでから渡してあげた。彼は私とカップを交互に見たあと、そつと口をつける。尻尾の先がぴこぴこしてるから多分美味しかったんだろう。

「それじゃあ、その小難しいことで爆破が起こったんだろうな？」

「ふーん。それでブラックが縮んじやったんですね？」

「ぼ……私はブラックという名じゃない」

今僕っていい掛けたよね。ブラックにも僕っていった時期があったんだ。可愛いかも！　カナイとエミルの見解ではあっさり少年はブラックだと決定付けられた。最大の特徴である容姿を決定打にしたのだけどそれで良かったのかな？

「じゃあ、今の君はなんて呼ばれてるの？」

エミルがやんわりと問い掛ける。その問い掛けにブラックは、逡巡したあと、俯いて小さな声で答える。

「ミアと呼んで構わない」

三人が随分可愛らしい名前だと笑っていたけど私は、ふと思い出してブラックの耳に口を寄せる。

「ルインシルじゃなくて良いの？」

こそりといったらカシャン！ と派手に驚いていた。どうして知っているのかというように赤面し、挙動不審だ。年相応に可愛い。

「そ、それは、す、捨てたものだ」
「ふーん」

ルインシルⅡミアは彼の本名だ。誰も知らないといっていたからこの頃からもう使っていないのだろう。蒼月教徒の人たちはブラックのことをルイン・イシル様と呼んでいる。それとどのくらい違うのか私には分からないけど、青い月を称してルイン・イシル。白い月を称してシル・マリルと呼ぶのだからそこから察するに、超有名人とほぼ同姓同名！ みたいな感覚で恥ずかしいのかもしれない。そう思うとブラックってちょっと可愛い。

「じゃあ、ミア。君は今いくつ？」

「十三だ」

「……十三か……丁度、種屋が代替わりをする時期だな。俺の記憶から憶測すると多分十四もしくは五くらいでブラックは種屋になったはずだ。あー、ミア。お前、種屋になる予定なんだよな？」

カナイの質問にミアは頷く。

「周りは五月蠅いが、ぼ……いや、私はまだ時期尚早だと思う。だから、彼らの声は聞かない。それに……蒼月教徒の本部にも行ってみた。私の部屋にはもう長い間誰も入っていないようだった」

僕は一体誰なんだ……ぼつりと零したひと言に私は胸が苦しくなった。

「ま、要するにだ。爆発のときの煙の影響だろ。何の薬を作ったのか知らないが、身体に沈着した成分を取り除ければ良いわけだ」

……俺の領分じゃないかと締め括る。そんな後生なと眉を寄せるとエミルが笑った。

「僕の領分ではあるけど……僕では多分無理。残念ながら力不足だよ」

「じゃ、じゃあ、エルリオン先生かな？」

困りきってそう呟くとエミルは首を振った。

「ラウ博士とシゼに相談しよう。事実を知るものは身内だけにしたい。彼らなら何とかしてくれると思うよ」

エミルの言葉に、そう、だよ。と私は頷きほんの少しだけ胸を撫で下ろした。しかし、ミアは「その必要はない」と拒否した。

「私は状況を確認したかっただけで、そうと分かったならあとは自分で」

そういつて立ち上がり、出て行こうとする雰囲気ミアをカナイが「お前はやることがある」と止める。その言葉にぴこんと耳が

跳ねてカナイをじっと見上げる。

「良いか？ お前は今もう既に種屋の主なんだ。屋敷に残っていた像。獣族の方だ。あれが今のお前の姿だ。それを、はつきり掴めるか？」

「……ああ」

「じゃあ、それを傀儡にしろ。そして留守番させてお前が種屋の仕事をやれ。誰にも見付かるなよ。姿を晒すのはその傀儡だけだ。上手く立ち回れ。お前なら出来るだろう？」

カナイの言葉にミアは不本意だという風だったけれど分かったと頷いた。私は子どもになんてことをさせる気なのかと止めそうになったのに、エミルにゆっくりと遮られる。

「ブラックを無事に元に戻したいならそれしかないよ。種屋に何かあったなんてことが表沙汰になったら、標的になる。今のブラック……ミアには其れ相応の力はあると思うけれど、経験値が圧倒的に足りない。大丈夫、薬は何とかするよ。マシロが悲しむようなことはしない」

しゅんとしてしまった私の頭をそっと撫でながらそういつてくれるエミルに頷いた。大丈夫かな？ とミアを見ると目が合ったのに派手に逸らされる。もしかして、私は一瞬にして嫌われた？ 結構子どもには好かれる自信があったのにショックだ。ああ、でもあの年代は微妙なのかも。シゼにも嫌われたし。うん。

とりあえずラウ先生やシゼに相談……ラウ先生は物凄い笑いを堪えるのに必死という風だった。「そ、それは大変ですねえ」という

声が少し震えててちよつと涙目だった……して夕食をとったあと部屋に戻ってくるとミアは私の部屋の中にある物置のドアを見詰めていた。

「どうしたの？」

「この奥は何？ マシロ使ってるのか？」

重ねられた質問に私は一応と答えたが「ミアに何か考えがあるなら良いよ」と了承した。ミアは頷くと、ひょいと杖を出す。この頃から愛用品なんだ。少しだけ微笑ましい気分になった。

エミルやカナイは部屋の中央にあるテーブルに必要な材料が書かれている紙を広げて入手方法を検討している。

ミアはそのまま物置のドアを眺めていたが、ずっと杖を上げドアの左上をこつんと叩いた。その瞬間、ふわっと魔方阵が広がり淡く光る。続けて同じように右上もこつんと叩くと同じように魔方阵が浮かび、下の左右も同じようにこつんこつんと叩いた。その度に浮かぶ魔方阵が放つ淡い光が部屋の中を包む。そして最後に自分の足元をこつんと弾くと一番大きな魔方阵が浮かび上がった。

カナイが傍で「すっげ……」と感嘆の声を漏らす。

続けてミアは聞き取れないくらい小さな声で何事か呟くと叩いた順番に魔方阵が扉に吸い込まれるように消えていった。足元の魔方阵が消えてしまうとミアはふうと嘆息しドアを開けた。

「……って、ええっ?! 何これっ! 何したの? ブラック!

……あ、いや、ミア」

「別に。不便だから種屋とここを繋いだけ」

うわぁ。どこでもドア? 未来の猫型ロボットだったの? ああ、猫だけに? 私はさっさと私の部屋と直通になった種屋の書斎へ消

えていくミアの後姿を見送って、何度か部屋を行ったり来たりした。私はちよつと感心していたのに、やれやれといううなため息が聞こえて振り返るとエミルがちよつとだけ呆れていた。カナイはまだ少し感激しているようだ。アルファは……またおやつ中？

「今回のことが終わったらちゃんと閉じてもらうんだよ？」

「え？ ああ、うん。でもこれって便利じゃない？」

「駄目だよ。いろんな意味で問題あり」

「ああ、物置つかえないもんね」

そりゃそうだと納得した私にエミルは苦笑した。どうも違ったらしい。首を傾げた私に声が掛かり声のしたほうを振り返るとブラツクが居た。

「マシロ。声はこのくらい？」

その脇からひよいと顔を出してきたミアに問われて、ああと納得する。さっきいった傀儡かあ。凄いなーいわば人形でしょう？こんな精巧に出来るなんて……感心していると少し急かすように傀儡が口を開く。

「マシロ、早く決めてくれ」

「え？ あ、ああ。そう、だな。もう少しだけ低いかな？ それで、うーんっと、もう少し艶っぽい声だよ」

艶ってなんだよと横からカナイの茶々が入る。

「それから、人を小馬鹿にしたような敬語を使います」

「それはお前もだろ？」

「僕は敬意を表してない敬語を使うんです。カナイさんにはっ！」

「どういう意味だよ、ああ？」

「言葉のままですーっ！」

ぎゃんぎゃんといつものように騒ぎ始めた二人にやれやれと肩を落とすとぽんぽんっと肩を叩かれた。

「マシロ、これで構いませんか？」

「え……あ、ああ。うん」

本人かと思った。いや、本人だけど……あれ？ 本人じゃないのか？ なんだか混乱してきた。

「マシロ、顔が赤い」

ぼやっとしてたら目の前に居るのはミアになってて私の顔をまじまじと覗き込んでいた。わたたと何でもないよと取り繕っているとエミルがカナイを呼び簡単に最終確認を終えると椅子から立ち上がりそっと私の肩に手を乗せた。

「今日は色々疲れただろうからゆっくり休んでね？」

にっこりといわれて素直に頷く。続けてミアに視線を送ると念を押すように口を開く。

「ミアはちゃんと種屋に戻って休むんだよ？ マシロも、可愛いからって甘くしちゃ駄目だからね？」

と重ねられ、苦笑して分かったよと頷くと「うん」とエミルも頷いて私の頭をふわふわと撫でたあと皆と一緒に部屋を出て行った。

(3)

シャワーも勧めただけで狭いからとあっさり却下され、ミアは種屋に戻った。私はエミルがいった通り少し疲れていて、欠伸をかみ殺しながらシャワーを浴びた。一息ついて、髪を拭きながら部屋に戻るとミアがぼんやりと机の椅子に腰掛けて僅かにしか覗いていない月を見上げていた。

私の気配に気が付いたのか、ふっと瞼を落としたあと私のほうへ顔を向けまじまじと見詰める。私は傍のベッドに腰掛けると「どうしたの?」と問い掛けた。ミアは少し迷ったようだけど穴が開きそうなほど私を見たあと口を開いた。

「マシロの瞳は僕と同じ色だ。凄く変わってる。獣族でもないし……」

凄く考えながらそう口にして、まるで、白い月の少女のようだと締め括った。結局何も覚えていなくても私の容姿からそういう結果に辿り着くのだなと思うと私は少し笑ってしまう。

「別に私は白い月の少女ではないけど、でも、そう呼ぶ人は少ないよ」

ほんの少しだけ苦味を含んだ笑みを零してそういった私にミアは少し困惑している。そしてゆっくりと確認するように言葉を繋ぎ問い掛けてくる。

「何故、私に手を貸す? 私は、一人で出来る。現状さえ確認出来れば傀儡を操りながら時を戻す薬を精製するくらい大丈夫だ」

「一人でやるより早いかもしれないし、楽でしょ。それに楽しいし」

「ぼ……私は、一人で出来る。そうしなくてはいけないんだ。私は種屋を継ぐものなのだから」

まだ時々「僕」と出てしまうミアに私は「僕で統一したら？」と笑ったら物凄く赤くなって「私で良い！」と突っぱねた。なんだろう。物凄く、子どもらしい。ブラックも種を飲むまでは年相応の少年だったのかな。

「ブラック……んー、ミアはもう種屋だよ。貴方の中には種がある。もう種屋の素養は貴方のものなんだよ。でも彼も一人で何もかもやってたわけじゃないよ。確かに沢山のことを一人でこなしてはいたけれど、それでもブラックは人を使うことを厭わない……助けてもらってるなんてことは思っていないと思うけどね？」

ミアは私の言葉にそっと自分の胸に触れる。そして眉を寄せ溜息一つ。

「……僕は素養を見る目を持っているけれど、その目は自分のことだけは見せてくれない」

「ミアのことは私が見てるから大丈夫だよ」

「マシロは見る目を持っているのか？」

「ううん。ちっとも。それはミアが一番良く分かるんじゃない？」

ふふっと笑いを零すとミアは暫らく私を眺めたあと、困惑したように表情を曇らせ首を振った。私は少しだけ腰を上げて腕を伸ばすとそんなミアの頭を撫でた。ミアは一瞬ぎよっとしたような顔をしたものの、振り払ったりはせず「子どもじゃないからやめろ」と眉を寄せた。

「マシロは分かるとしても……大体どういう関係？」

「なんで私は分かるのかというのも気になるけど、ブラックと皆の関係は友達だよ」

にこりと答えたのにミアは噴出した。有り得ないとお腹を抱えて大笑い。笑っている内容はいただけないけれど、思っていたよりずっとミアは表情豊かな子だと思う。

「それで？ マシロと彼らは」

「私も友達だよ。あと学友だったりもするし、カナイとは階位も一緒だよ」

「……カナイはあの背の高い奴だな。マシロと同じ階級で階位って……彼は図書館と関係ないはず。僕の目が狂っているのだから、魔術系の素養がずば抜けていて、類稀なといわれてもおかしくない。金髪に小さいのだって図書館とは関係ないはずで……関係あるのは」「エミルとかシゼくらいだね。あー、その辺話すと長くなるけど、まあ、色々あって皆図書館の学生なの」

私ははしょったがミアはふーんと頷き、質問の核心に触れるように真っ直ぐに私を見るとゆっくりと続ける。

「最後に……マシロは僕の何？」

「お互いに大切な人だよ」

私は一時もミアから目を逸らすことなく答えた。ミアは暫く私の真意を窺うようにじっと見詰めていたが、不意に顔を伏せると「有り得ない」と首を振った。

「種屋が家族や友人を持つなんてこともないだろうけれど、ましてや、恋人なんて有り得ない。絶対にない」

全否定だ。

私は、ミアの全力の否定に乾いた笑いが零れた。

「マシロも分かっているはずだ。種屋が世界でどんな目で見られていてどんな位置にあるか……それを恐ろしく思わない人間はここには居ない」

「ここに居るよ」

「は？」

「だから、ここに居る」

にこりとそう告げるとミアは目を丸くする。

「私は元々この世界の住民ではないというのもあるけど、ブラックを怖いと思わないよ。ブラックは私にとっても良くしてくれるし、あ

……あー、あ」

「あ？」

「愛してくれてると思う」

恥ずかしいっ！ 自分で口火を切っておきながら、あまりの恥ずかしさにいい捨ててぼふっとベッドに突っ伏す。呆れているっぽいミアにこっち見るなど手でジェスチャーして、うーっと唸る。

その様子にやっぱり呆れていたのかミアははあと嘆息して立ち上がる。「帰る」と物置へ向かった。反射的にちよつと待って！ と止めた私にミアは振り返り首を傾げる。ミアの顔も少し赤い気がする。

「わ、私が異界人ってそこには突っ込まないの？」

私の問い掛けに、ミアは眉を寄せ溜息一つ「……突っ込んで欲しい？」反射的に首を振った。

「僕はまだ会ったことないけど、別にそれだけで完全否定出来る要素とは思えない。だから、マシロを否定するのも……違う気がする。それにそんなことは重要じゃない。今は僕の何らかの実験で今現在この世界に種屋の知識を持ちえるものが不在ということだ。兎に角早く事態の收拾をしないと」

もう用事はないとばかりにドアを開けたミアをもう一度呼び止める。まだ何かあるのか？　というように眉を寄せたミアに私は微笑んだ。

「一人で頑張らなくて良いからね」

そしておやすみと手を振った。ミアは何も答えなかったけれど「おやすみ」とだけぱつりと返してくれた。

翌日からエミルとアルファは材料調達に王都の外に出てくれている。カナイと私は市場で手に入りそうなものと他に必要なものをラウ先生に教えてもらってその買出し班だ。

「薬草関係はラウ先生が温室担当責任の先生に直接掛け合ってくれてるっていったから、生ものの系の入手だね。これって簡単なの？」
「簡単じゃねーよ。市にあるかどうか分からない。でもまあ、裏で取引されてないか聞いて……って、なんで、ミアがここに居るんだ？」

「問題ないだろ」

「いや、問題はないが、人手は足りてる。お前、傀儡に任せ切りで大丈夫なのか？　問題が生じたときに傍にいたほうが……」

「私の傀儡はそんなに柔じゃない。直ぐに崩れたりしないし、王都から種屋までそれほど距離もない。平気だ」

自分も行くといいだしたミアは引かず結局一緒に出掛けることにした。ミアのいい分に距離はあるだとカナイは呆れ気味だがそれ以上駄目だともいわなかった。簡単に手に入るものは揃ってから連絡を貰うようにした。入手困難な品に関してはカナイが交渉してくるからと一人で出掛け、私とミアは広場のベンチで一休み。

ラウ先生の話では材料さえ揃えばそれほど難しい薬じゃないといってくれた。先生曰く、裏技的な薬だから、今のミアには思いつかないだろうと笑っていた。あんにブラックなら直ぐに用意してしまうようなものだといってるようだった。

どうせ自分たちの用意したものでは飲めないだろうから準備とレシピのみ整えておくからと微笑まれた。

「いー天気だねえ」

ひょいと広場に出ている露天で買ってきたジュースを差し出すとミアは少し驚いていた。そしてそれを受け取るとすんなり口をつける。

「毒見しなくて良いの？」

隣に腰掛けつつそう訪ねるとミアは緩く笑った。う、美少年だ。

「一般的に出回る毒性のものは特有の香りがするから直ぐに分かる。それに店先で中毒者が出ては、あの店は今後商売が出来なくなる。そんなリスクわざわざ犯さない。図書館はそういったものが多いから、あそこでは無味無臭の毒も生成可能だし躊躇してしまったけど……」

少年が考えるような思考回路じゃない。でも、蒼月教徒で教わるのはまず死なない方法だといっていた、こういう思考が習慣的になっているのだろう。私はそっかと頷いて自分の分を飲む。絞りたてのオレンジは濃厚でとても甘い。

「マシロは人徳があるんだな」

「え？ ああ、皆が助けてくれるから？」

ミアの言葉に苦笑しながらそう聞き返すと、こくんと頷いた。

「んー。どうなんだろう？ 私のというよりは皆が優しいからじゃない？ 私はこの通りお守りくらいしか出来ないし」

「僕は別に面倒を見て欲しいなんて！」

がたんっ！ と勢い良く立ち上がったミアに笑った。可愛いぞ。

「ミアはさ……種屋をどう思ってるの？」

なりたい職業ランキングに上がるとはとも思えない。ミアは私の質問にいきり立って立ち上がった腰をもう一度ベンチに戻して不思議そうに「どう？」と繰り返す。

「うん。将来何になりたいとか色々あるじゃない？ 将来の夢。その中に種屋なんて入ってるのかなって？」

「そんなことを考える必要ない。僕は獣族の中で一番全ての素養が秀でていた。だから、蒼月教徒の手に預けられ、受け入れる限りの知識と教養を身につけた。まあ、確かに”もしも”に備えて候補生という形で最初は数人居たけどな。夢？ そんなもの持っている人間がこの世界に居るとは思えない。マシロは変だ。僕は生まれたその

瞬間から種屋になるだろうことが決まっていた。種屋を引き継ぎ、独りで世界のルールを護る。種は世界の秩序だ」

僕にしか出来ないことだ。ぼつりと零して締め括りミアはジュースを喉の奥へ流し込んだ。私はそんな様子をただ見ていた。もう、ブラックは既に長い間種屋をやっている。だから今更それを覆すことは無理だと思う。カナイの話では種らしきものは転がっていなかったというし、種屋の種はミアの中だ。だから、ミアは種屋に戻らないといけない。残念ながら私も其れを願う。まだブラックを失いたくはないから。

でも、もしも私が種屋になる前のブラックに出会っていたら……きっと私はブラックを迷わせて苦しめるだろう。

「マシロ？」

思わず呆けているとミアは私の膝に手を乗せ顔を覗き込んでいた。予想以上の近さに私は思わずびくりと肩を跳ね上げジュースを引っくり返す。しまった！　と思っただけで冷たい感触に襲われることなく其れは宙に止まった。手の中にカップが戻ると同時にミアにありがとうと告げると「僕じゃない」と首を振られた。

「お前がお守りされてるみたいだな」

カナイのお帰りだった。

(4)

材料の手はずはかなり簡単に揃うことが出来たけれど薬師階級の私でも「？」と思うものが多かったから直ぐに揃える予定が立ったのは私の周りの優秀さだろう。毎度のことながら私は役に立ってない。

夜はいつものように勉強会をした。

普段はカナイの部屋でやるのだけど机が手狭になったから図書館の一角を陣取った。カナイは部屋に残り、アルファはロードワークに出掛けた。私の右隣にエミルが座って私のペン先を追っている。左隣ではミアがラウ先生から預かった調剤法を黙々と読み耽り何かを書き出していた。既に私の領域外。仕方ないから私はいつも通りその日の復習に宿題を片付けていた。

「マシロ、そこはその引用じゃなくて……」

でんっ！

エミルがミアの作業の邪魔にならないように、そっと私に顔を寄せて口添えしてくれているときに目の前に本が置かれる。驚いた私たちが本が来たほうに顔を向けるとミアがぶすっとしたまま口を開く。

「その本の、二二三頁の第四項が参考になる」

私とエミルは顔を見合わせたあとといわれたとおりに本を開いた。ミアの指定したページは正にビンゴ。エミルも教えたかった内容だったらしく「うん、これだよ」と苦笑する。そのあと次々とエミルの先回りをし口を挟む姿にエミルは小さく嘆息した。思わず「ごめんね」と私が謝罪してしまった。それにミアは不機嫌そうに眉を

寄せエミルはふふっと笑いを零す。

「ミアはやきもち焼き屋さんだね？」

「っ！ そうじゃない。私のほうが理解しているだけだ」

まあ、次期種屋店主になる人ほど優秀な人物はそうそう居ないだろう。まあ、そうだねと目くじらを立てないエミルに申し訳なくなくて私はついミアにお説教を始めてしまった。

「ミアは今ここに来ているのは、調剤時間短縮の方法を計算しているんでしょう？ エミルは私の勉強を見てくれるために時間を割いてくれているの。だから、ミアは私のことは気にしなくて良いから今すべきことを」

「こんなの直ぐに出来る！ 理解しているものが口を挟んで何が悪い」

もういい！ と業を煮やして、ミアは席を立つと怒ってその場を立ち去ってしまった。その後姿を見送ってしまった私にエミルが追いかけたほうが良いんじゃないかな？ とやりわり声を掛けてくれるものだから、余計に私が悪いことをしてしまったような気になる。私は、ふうっと嘆息して深く腰を降ろす。

「あとで良いよ」

それより続きを、と机に向かうが当然集中出来ない。

「マシロ」

「うん」

「マシロが僕のことを心配してくれたのは分かるよ」

にっこりとそういつてエミルはいつものように優しく頭を撫で話を続ける。

「今出来ることは先にやったほうが良いよ。明日も多分変わらない時間が流れると思うけどその保障はないんだからね？ それに集中出来ないんじゃないや時間勿体無いよ」

エミルのいうことは分かる、分かるけど、でも同じように時間を割いてくれていたエミルにも申し訳ないような気がして私はどうしても立ち上がれなかった。

エミルはそんな私の心境も酌んでか、ふわりと笑みを深めると頭を撫でていた手をするりと滑らせて一束髪を掬い上げるとそつと唇を寄せた。

「僕への謝罪はコレで十分。ほら、行ってあげて。今のミアはブラツクじゃない。子どもだよ」

私は結局エミルの笑顔に押されて立ち上がり、図書館をあとにした。

道すがらミアを探してみたけれど見付からない。部屋に居るかもしれないと思ったけど居なくて……私は戸惑いがちに物置を開いた。自分の部屋の物置が別の部屋に繋がっているのは妙な感じだ。

私は一步踏み込めば馴染んだ屋敷に足を進める。書斎には居なかった。変わりにブラツクの傀儡が居て聞いて見たけど「分かりません」と首を振られた。でもまあ、ミアの行き先なんて寝室か、私の部屋か浴室。そんなところだろう。部屋数は多いけれど実際ブラツクが使っている部屋なんて限られているしそう多くはない。

そう思ったのにどこにも居なくて私は少し不安になった。

「つかしいなあ……」

一階フロアに下りて当てもなく廊下を歩いた。もう月が真上に来ている。あまり使われていないところでも私が暗いと騒いだから他の場所と同じように踏み入れれば明かりが灯るようになっていた。今夜は月明かりだけでも十分そうではあったけど……と思いつつ、月見がてら窓によると、ようやく探し人を見つけることが出来た。

「―― ……こんなところに居たの？ 探したよ……」

さっきはごめんね？ と続けた私を振り返ることなくミアは庭に据えてあるベンチや椅子を使うこともなく芝生の上にごろんとしていた。私は了解を得ることもなくその隣に腰を降ろしたが拒否はされなかった。

「あんなことするつもりなかった」

「え？」

「だから、あんなことするつもりなかったんだ。別にマシロが誰に教えを請うていても僕には関係ない。マシロがいうように僕は自分に必要なことをただ淡々とこなせば良かっただけなのに……」

はあ……と子どもらしくない細く長い溜息を吐いてミアはぼんやりと月を仰いでいた。

「マシロは僕を大切な人だといった。多分、十五年後の僕もそんなんだろうなと思う。屋敷に残る像を追うと分かる。僕の記憶する種屋とは雰囲気随分変わっている。知っている種屋はこんな辺鄙なところにはなかったと思う。都の中心にあったのに癒されることのない哀しみが蓄積されていた……でもそれが種屋だ」

「ミアは種屋の店主に会ったことがあるの？」

ぽつと訪ねた私を見ることなくミアはこくんと頷いた。

「一度だけ。たった、一度だけど会ったことがある。彼はふらりと蒼月教徒の僕らが暮らす屋敷にやってきて、多くのものが『ルイン・イシル様』と傳いたのにそれすら目に入らないというように、真っ直ぐに僕のところへやってきた」

白い月青い月今ミアが見上げているのはどちらだろう。

「ひと言……君が次代の種屋です……そう、告げた……とても深く暗い海の底の色をした瞳で見詰めて……僕が七つのときだった」

私は何もいえなくて、ただそこに座ったままだった。

「それから全て変わった。幾人か居た候補生はそのまま教団に残るか家に帰った。僕だけが残されてより多くありとあらゆる知識を詰め込まれた。それしかすることがなかったから、特に何かを思うことはなかったけれど……種屋は孤独なのだと知った」

そこまでぽつぽつと殆ど独り言のように零したミアは、私を見てふつと瞳を細めた。私が良く知るブラックがよく見せる表情だ。

「だから、やっぱり信じられないな。マシロが嘘を吐くとは思わないし嘘を見破るのは得意なんだけど……僕が誰かを傍に置くんなんて……種屋は、世界に必要とされ……それなのに世界から、あらゆる生命から疎まれ忌まれる存在なんだ。だから孤独でなくてはならない、僕が知っている店主のように」

そんなことないよと口に仕掛けて、そっと押し留められる。

「忌まれる存在を増やす必要はない」

—— …… ああ ……。

種を飲む前のブラックはとても情が深くて暖かい子どもだったんだと実感した。ミアだって好きで種屋になったわけじゃない。どれほどルール違反であっても、嫌なら逃げただろうしその命を絶っただろう。ミアはきつとそういう手段が合ってもそれは選ばない。自分が逃げればきつと他の誰かが変わることになるのは分かっていたから。他の誰かが孤独になることをきつと誰よりも知っていたから。

「私はブラックが大好きだよ。疎んじたりしないし、異質さからいえば私も十分に異質だけど、孤独じゃないよ。ブラックが助けてくれたから。ブラックが皆と出会わせてくれたから……ブラックが何も持たない私に全てを与えてくれたんだよ」

搾取するだけがブラックじゃない。私はそつと手を伸ばしてミアを抱き寄せた。僅かに身体を強張らせたミアは抱き返すことはしなかったけど、突き放すこともなかった。

(5)

翌々日、早いうちから材料は図書館の研究室に届けられた。ラウ先生は一つ一つそれを確認した上で、様子を見に来ていた私たちに渡してくれる。因みに週末だから授業はお休みでサボったわけじゃない。

「カナイさん、仲介業でもやっていけるんじゃないですか？」

瓶に入って居るものの毒々しい色を出し続けている貝をまじまじと見詰めてシゼが呟く。カナイはそれを見て「ああ、それな」と訳知り顔で頷いて「半端ない値段がついてるぞ」と笑った。

「もちろん、あとでブラックが払うんだ」

そうだよねえー……。

「因みにこっちのもいい値がしますね。想定内ですが、すんごく材料費の掛かる薬になりますね。まあ、あのブラックの失敗の尻拭いですから。このくらいなんてことないでしょう」

ラウ先生の悪戯な笑みが私の頬を引きつらせる。ちらりとミアを見ると特に気にした風もなくさっさと材料の仕込みに掛かっていた。案の定ブラックの薬嫌い（他人が調剤したもの限定）は健在で、一人で作業を進めるというミアの申し出にラウ先生はいつも通りあっさりと研究室の一角を提供してくれ、エミルやアルファたちは部屋を出た。

私はというと、特に用事はないけれど手伝えることも有るかも知れないと傍にいる。ミアは十三歳なんて年齢を感じさせないほどで

きぱきと作業をこなし手が足りないのではと思われるようなこともあつさり一人でこなしていく。そのお陰でいろんなものが宙に浮いていて要注意だ。

「ねえ、ミア。私も一応薬師の卵なんだけど、何か手伝えない？」

「ない」

「……そう、そうだよ、ね」

うん。見ても分かるよ、私が手を出すようなところないよね。シゼがしょんぼりしていた私のところへ紅茶を運んでくれた。今日も今日とてめっちゃあまーい！ お茶なのだろう。もう慣れたけど。

シゼはちらりとミアを見たあと、ふうと短く嘆息して私を振り返るとにこりと微笑んで声を掛けてきた。

「丁度手が足りないんです。暇なら僕らを手伝ってもらえませんか？」

「え？ あ、ああ、うん。良いよ。もちろん」

やっぱり甘かった紅茶を喉の奥に流し込んで私は立ち上がった。私に断る理由もないし本当に暇だったから。邪魔にならないかな？ とか簡単な会話をしながら立ち去ろうとしたら

「マシロ」

ミアに呼び止められた。振り返ると相変わらず作業続行中だったけど不機嫌そうに話を続ける。

「こっち手伝って」

「え？ でも手は足りてるって」

「今足りなくなっただけ」

嫌なら良いと眉を寄せてこちらを見ることなく口にするミアに首を傾げる。くいくいとシゼに袖を引かれて「あ」と振り返ると

「良かったですね」

小さな声で囁いて軽く胸元で抱えていたトレイを振ると部屋の奥へと戻っていった。もしかしくなくても、シゼ、分かってやったんだね。シゼってやっぱり侮れない。私はふふっと笑ってミアの隣に並んだ。

「それで私は何をしたら良いの？」

「そっちの鍋を同じ速さでゆっくり混ぜて」

「ん、了解」

そして黙々と続けても出来上がったのは真夜中だった。煮込んだりするのにかなり時間が掛かるわけで……私はなんだかぐったりだったけど、ミアは始める前とあまり変わらない。きっと体力値も並とは掛け離れてるんだろう。あれだけ大量多種に渡る材料があったというのに出来上がったのは凄く少量。小瓶に半分くらいのエメラルドグリーンの液体だ。分からないけど色の感じから察する味はメロンソーダ。

夕方私たちに簡単な食事を運んでくれていた皆はそのまま居座っていた。エミルの話では、ちらとレシピを見た感じだと半日で完成させるのは時間的に無理かと思ってたんだけどということだったから、これでもかなり速いスピードで完成することが出来ている

んだろう。

後片付けを終了し、小瓶の中を満足そうに眺めたミアは「出来ましたかー？」と合流してきたラウとシゼに頷くと軽く咳払いした。

「ラウとシゼも手間を掛けて悪かった。なんかワザと雑に書き込まれているところが目に付いたけど、助かった、と、思う」

もしかしくなくてもブラックがお礼をいってる。私はいわれることあるけど、他の人はどうだろう。いや、顔を見れば分かる。ないよね。いうことないよね。感謝することようなことないだろうしね。うん。本人も物凄く照れくさいのか耳が舟を漕いでいる。可愛い。続けてその様子を見ていた三人に顔を向けると短く唸った。そして、物凄く迷ったようだけど、じわりと口を開いた。

「えー……っと、その、今回は一応助かった。材料も多種に渡っていたし、その、普通なら入手困難なものも在ったと思う……その、あ、ありがとう」

最後のほうは殆ど消えそうな声だったのに三人の時間を止めるには十分な効果があったようだ。ミアはもう耐え切れない！ というように「じゃあ、さっさと戻るから」と慌てて研究室を出て行く。私もそのあとを追うようにドアに手を掛けて三人を振り返り「ありがとね！」と重ねると、一番に我に返ったエミルが「うん、気をつけて」と手を振ってくれた。

すっと閉じた扉越しに

「ちょー！ 今の聞きましたっ？！ ブラックが、僕らにありがとうですって！ 天変地異の前触れじゃないですかっ！？」

「俺、寿命が減ったような気がする」

「確かにちよっと呪われたような気になるね」

酷いいわれようだった。

屋敷に戻ってもミアの姿が見えなくて昨日と同じように庭にでも居るのかと出てみたけどどその姿を確認することは出来なかった。

「ミアー！ ミアー！」

とりあえず、呼んでみる。なんか迷い猫を探しているようだ。間違いないけど。

「そんなに何度も呼ばなくても聞こえる」

丁度書斎に戻って窓を開けて呼んだところで上からその声は降ってきた。んー？ と上を仰ぐとひよいと身軽に窓から飛び込んでくる。屋根の上に居たのかな？ 猫だな本当に。

「良かったまだ飲んでなかったんだね？」

にこりと迎え入れるとミアは頷いたあと部屋に居た傀儡をぽんつと消してしまった。机の上には処理出来ない種が瓶に放り込まれている。瓶の中で擦っている想いがその中で溢れているようでないだか苦しい。

私の表情が僅かに曇ったのを見逃さなかったミアは、私の顔を覗き込み平気かと訪ねる。平気だと頭を撫でると物凄く嫌そうな顔をされた。あれ？ ブラックは結構喜ぶんだけどな？ 私は首を傾げたがミアはそのことに触れることなく、ポケットから無造作に取り出した小瓶を月に掲げて瞳を細める。

「マシロも私が種屋に戻ることを望むのか？」

「も？」

「……分からない。何かに急きたてられているような気がする。種がざわめいている。私はアレをなんとかしないといけない」

ちらりと机の上に置いてある瓶に視線を送ったが直ぐに月を見上げる。ブラックは昔から月を仰ぐのが好きらしい。未だに時折こうやって何かあると直ぐ月を恋う。

「私は今のミアも十五年後のブラックも大切だよ。大丈夫、私は貴方を孤独にはしないから、怖がらなくても良いよ。月を仰ぐ青い月のミアが孤独だというのなら、白い月の私も孤独。でも一緒なら寂しくないでしょ？」

いって笑った私にミアは刹那きよんとして、そのあとほんの少しだけ呆れたような顔。

そのあとミアがどんな顔をしていたか分からない。私はミアを抱き締めて柔らかな髪に顔を埋めたから……。

昨夜は決して抱き返されることはなかったけど、今夜は恐る恐るといった風にミアの手が私の背に回った。ぎゅっと力を入れ顎を私の肩に乗せて「やっぱりもう少し大きくないと格好がつかないな」と笑う。

「確かに、マシロを護れるくらいには今すぐ大きくなりたい。待ってる時間が惜しい……」

飲むよ。と締め括ってミアは、ずっと私から離れた。

ミアは手の中の小瓶の蓋をきゅぽんっと開けた。ちらりと私を見て微笑むミアの額に私はそっとキスをした。ミアは少し驚いたよう

だっただけど直ぐに愛らしい笑みに戻って、瓶の中身を飲み干した――

(6)

「――…あー、物凄い長い夢を見ていたような気がします」

「だ、大丈夫？」

液体を飲み下したあと、苦しげに蹲ったミアから立ち上った白い煙はあっという間にその身体を包み込んでしまった。

煙が晴ればブラックは元通り。何事もなかったようにけろりと立ち上がって身体を伸ばし机の上の瓶を見て「……怠慢」と零した。

「平気、なの？　　というか覚えてない？」

「内緒です」

覚えてるのね。きっと……。でも、触れられたくないところもあったのだろう。というかこれから触れて欲しくないことがあるからきっとそういうことにして欲しいんだと思う。特に……エミルたちにな？　私は一人納得して苦笑した。

「マシロ」

良かったと胸を撫で下ろしていた私をブラックはいつものように引き寄せて抱き締める。今日は少しだけ強くてちよっと苦しいくらいだ。

「私はやはりこうして抱き締めるほうが好きです」

「私はミアも可愛かったよ？　時間って凄いな。あのミアがこんなに大きくなるなんて」

ブラックの腕の中でそう笑った私にブラックは不満そうな声を漏

らす。

「マシロを護れないような私に価値はないです。そんなこというと自分に妬きます」

「意味ないよ」

「なくても良いんです」

うん。でもやっぱり私も今のブラックのほうが好きかも。いwana
いけどね。ぎゅっと抱き返したあと、問質す。

「それで、何をしていてあんな事態になったわけ？」

新聞にも載ってたんだよ！ とぶう垂れると私をそっと離れたブラックは「あー」と逡巡し「今夜も月が綺麗ですね」と馬鹿みたいな話題の逸らし方をする。私が無言で眉を寄せたのをちらりと見て、ブラックは諦めたように肩を落とし嘆息する。

「実はですね――」

「でも、まあ、無事に戻って良かったね」

「それでブラック何してるんですか？」

翌日の朝。私は皆で朝食を囲みながら経過報告をしていた。とても不機嫌顔で。

「アレは、数日で溜まった仕事の処理。終わったら顔を出すってたからそのうち来ると思うけど」

私の不機嫌は皆にも伝わっているんだろう極力触れないようにしてくれているのが分かる。ごめんね、迷惑掛けてと思うものものどうしても腹が立つ。私たちがどれだけ心配してどれだけ方々回ったか……まあ私はお守りしてただけだけど。

「私との年齢差を埋める為にアンチエイジング効果を狙って、あれだけの騒ぎの原因がそれ？ 有り得ないよね。うん。ない。ない、絶対ない」

「あははは……流石というかなんというか、発想が凄いいよね？ 確かに時間を戻せば若返るよ、うん」

私の怒りにどう対応して良いのか分からないのだろうエミルがなんとか取り繕ってくれる。その様子に私は心を落ち着けるように一度だけ深呼吸して「兎に角」と切り出した。

「ここ数日本当に迷惑掛けてごめんね。助けてくれてありがとう」

ぐんつとテーブルに頭をぶつけるくらいの勢いで頭を下げた私に皆気にするなといってくれる。本当に私は人に恵まれていると思う。あとで、ラウ先生やシゼにもお礼をいいに行かなくちゃと考えていると、授業に遅れるよとエミルが席を立った。

エミルとアルファのあとを追って食堂を出ようとしたら、ぐいつとカナイに腕を引かれた。何？ と見上げるとカナイは少しだけ逡巡したあと、あのなと切り出す。

「さっきのブラックの話だけど……」

「本当、ごめんね。もう馬鹿な猫なんだよ」

重ねた私にカナイはそうじゃなくてと首を振る。同時に首を傾げた私の背を押しゆつくりと歩き出しながら少しだけ声を潜めて話を

続けてくれた。

「俺、あのあと直ぐ一度種屋に行っただろ？」

その言葉に頷く。

「あのとき、爆発があったはずの半地下の様子を見たんだ。そこに
少しだけ資料が残ってた。ざっと見ただけだったからあまりはつき
りとは分らないし、俺がいうのは違う気がするけど確かに時に影
響を与えるものには違いないけど、人一人にどうというもののじゃな
かった。その程度のものならあいつは失敗なんてしない……」

「どういうこと？」と首を捻った私にカナイは歩みを止めることな
く、うーんと唸ったあと考えながらといった風に話を続ける。

「もっとずっと規模の大きなものだ。俺が思うに……ブラックは月
齢を動かそうとしたんだと思う」

「は？」

「二つ月の時を戻そうとしたか、その手段を模索してたんだと思う」

カナイの本当に規模の大きな話に私は当然のように「なんでそん
なこと」と眉を寄せる。元々何を考えているかつかみどころがない
ところはあったけど、そこまで意味不明なことを考えるなんて……。

そんな私にカナイは分かった風に話を続ける。

「マシロの為だよ」

「は？」

裏返る声にカナイは苦笑する。

「ブラックが仕事以外で何かを成そうとするときは大抵お前絡みだろ？　今回だってそうだ。月の時を戻すことが人為的に出来ればどうなるか分かるか？」

そんな小難しいこと私に判るわけがない。素直に首を振った私にカナイはふっと優しい笑みを浮かべた。

「マシロの世界との行き来が可能になるだろ？　次にいつ重なるか分からない現象を待ち望むよりは余ほど堅実的かもしれないけど、普通に考えたら現実的ではないよな？」

笑うカナイに私は頷いたけど、もし、もしもブラックがそんなことをこっそりと考えていたのなら、私はとても悪いことをしてしまった。

「まあ、本人が隠したがったことだし、失敗もしたことだ。お前に変に期待させたら悪いと思って話さなかったんだろうから、聞かなかったことにしてやれよ」

ぽすぽすとカナイは足を止めてしまった私の頭を叩いて先を歩く。

「カナイ。私、今日の授業遅れるから先生とエミルに伝えて」

「はいはい」

そういい捨てた私にカナイはひらひらと「いってらっしゃーい」とばかりに手を振る。私はその姿をあっさり追い越して部屋まで走った。

まだ物置が繋がっていて良かった。

勢い余って開けたら、来客中だったので、すごすごと閉じた。私、何やってるんだろう？ ノブを握ったまま反省中。ややして「どうかしましたか？」と扉が開いた。

「もう、誰も居ない？」

「ええ、居ませんよ。居ても別に構いませんよ。マシロが気にしなくてはいけない来客なんて存在しませんから」

にこりとそういつてドアを開ききつて私を書斎へと招き入れる。

「こんな朝早くからお客さんなんて在るんだ？」

「そうですね。余裕のある方は早朝や夜間を避けますが、そうとばかりはいえませんかね。ここに私が居ればいつでも開店しているようなものですよ」

私に説明してくれつつ展開したままになっていた本棚を元に戻した。買いに来た人だったんだと受け取って私はそのことに納得し、それはそれとしてブラックを背後から抱き締めた。ブラックはそんなに驚いた様子もなく、そっと私の腕に手を掛けて解くと「どうかしましたか？」と振り返って私の頬を撫で顔を覗き込む。

「ごめん」

ぽつんと謝罪してまたブラックの視線から逃げるように抱き付いた私にブラックは少し困ったようだ。「どうかしましたか？」と優しく重ねられる。でも、私はこの気持ちをどう言葉にしているのか分からなくてやっぱり首を振った。

「ただ、なんとなく、ごめんね」

「――……」

謝罪を重ねた私にブラックはそれ以上問質しはしなかった。ただ優しく長い指で髪を梳き、頭にそつと唇を寄せる。

ブラックの吐く嘘は優しい。言葉の表面しか感じ取れない私はまだまだ子どもでブラックの優しさに気がつけないことが多い。私自身、もっと大人にもっと沢山のことを感じられるくらい、もっと沢山の大切な人のことが判ってあげられるくらいに早く年を重ねたい。

「んー……カナイ、ですね？ マシロに口添えしたのは……」

「え？」

「いいえ、こちらの話です」

見上げて見詰めた私に穏やかで優しい笑みを向けてくれるがその腹の底が今は分かる。

「怒っちゃ駄目だよ」

「分かっていますよ。子どもの私は詰が甘い。悟られるようなものをそのままにしていたほうが悪いです。それに……それでも少しは感謝しています」

笑い合ったあと、どちらからともなくそつと唇を重ねる。数回軽い口付けを交わして、勝手に満足し私は授業が在るんだったと図書館に戻った。

図書館側へ戻り際、ブラックがその扉を閉じることを告げた。来客中に無遠慮に開けたことは悪いと思うけど結構便利だったのになと思う。それを察してかブラックは少しだけ笑って扉に手を掛ける。

「こんなもの不要です。私はいつでもマシロの傍に居ますから……それに、エミル辺りはこれを良しとしなかったでしょう？」

問われて私は頷いた。今だけだとエミルは念を押していた。

「エミルはアレでいてとても用心深いですからね。こういう不安要素は取り除いておくに限ると思います。子どもというのは怖いもの知らずです。こんな扉一枚で空間を捻じ曲げ繋いでしまっ
ては、この先に私の宝物があるといっているようなものです」

ですから、私の我がままのようなものですが私を信じて、そして許してください。といって頬を寄せちゅっと口付ける。

—— …… あんな顔されたら、納得しないわけにはいかないじゃない。

やれやれと零した溜息を先生に拾われてレポートの枚数が増えた。
因みにカナイも連帯責任。

「俺、関係ねーじゃん」

今日も貧乏くじ担当のカナイの溜息が哀しく落ちる。

そのあと暫くアルファとブラックがどこかの猫とネズミのよう
にいがみ合ったのはいうまでもない……。

(6) (後書き)

お付き合いありがとうございました。楽しんでいただけたでしょうか？

というか思った以上にシリアス路線になってしまいましたが、ちょこつとでもくすりっと思ってもらえるところがあれば、私的にはグッジョブ！です。

感想など寄せていただけると、誰も想像できないくらいテンション上がりますので良かったら声掛けてやってくださいませ。

次は、第二弾。白蒼月銀狼譚でお会いしましょうっ！

(1)

「幽霊屋敷？」

私は久しぶりにギルドから請け負ってきた依頼書を食堂の一角でいつものようにお茶していたみんなに見せた。

「そう！ 幽霊屋敷っ！ 楽しそうじゃない？」

にこにこそう告げた私に、エミルはにっこりと依頼書を受け取り目を通してくれる。

ランクがBなのでみんなに協力してもらえないとこなせない仕事なのだ。

—— ……勝手に受けてきたのは悪いと思うけど……。

暑くはない季節だけど幽霊屋敷の調査なんて肝試しっぽくて楽しいと思う。

「マシロはなんでこれがBランクか聞いた？」

ぴんつと依頼書の端っこを弾いてそういったエミルに、私はううんと首を振る。

幽霊なんて普通の人じゃどうにも出来ないからランクが高いのかと思っただけだったけど？ 続けて首を傾げるとカナイの呆れたような溜め息が聞こえた。

「お前さ、幽霊の正体見たり魔物かなって知ってる？」

「……枯れ尾花なら知ってるよ。怖い怖いと思ってるって枯れ尾花でも幽霊に見えるってやつでしょ？」

少し臍を曲げて答えるとアルファは明るく笑って違いますよー。と、否定した。

「幽霊イコール魔物って話です。要するに魔物だと思われるけど、その正体がハッキリしないから幽霊って感じですね。良いですよ。僕マシロちゃんに付き合います。面白そうだし」

最初に依頼を聞いたときの私と同じようににこにこことエミルの手の中から依頼書を取ってひらひらしたアルファに、今度はエミルがお小言だ。

「アルファ。依頼を受けるのは良いけど、マシロがいく必要はないよね？」

「ええ、私も幽霊の正体みたい」

思わず挟んだ声にエミルは子どもに話をするようにやんわりと私に口を開く。

「あのね、マシロ。一応Bランクってなってるけど、正体がわからない以上、Aランク級の魔物かも知れないし……まあ、それ以下とということもないわけじゃないけど……」

「じゃあ、幽霊かも知れないじゃん」

にこりと口にした私に間髪居れずにカナイのチョップが入った。

反射的に、痛いっ！ と、頭を押さえた私にカナイは気難しそうに眉を寄せる。

「有り得ない。お前、知ってるだろ？　この人間が死んだらどうなるかくらい？」

「……知ってるよ。種になるんだよね」

「そう。それが魂の塊ともいわれてるんだ。だからその行き先だってお前はよく知ってるだろ？」

「う……ブラックのところですよ」

「なら、幽霊なんて有り得ないだろ？」

カナイのいつもながらの正論に、私はうーっと唸った。折角面白い依頼だと思ったのに。

確かに、ここでは人は死ねば種になるし、それは種屋が回収してしまう。墓はあっても形だけのものでそこに手を合わせるものも話しかけるものも殆ど存在しないだろう。

残念と肩を落としたところで

「そうとも限りませんよ」

「ひっ！」

幽霊の話とかしていたから思わず突然現われたブラックに小さな悲鳴を上げてしまった。それに素直にしょんぼりするブラックに謝罪する。

「それはそうと限らないってどういうこと？」

空いていた私の隣に腰を降ろしたブラックにそう問い掛けると「ああ」と話を始めてくれる。

「何を持って幽霊なんて表現するのかは分かりませんが、私が種を白化した際出来る光の球体は大抵時間と共に消えますが、時々消えないものがあります。面倒なのでそのままにしておくのと消えたというよりは居なくなってるものがあるので……もしかしたら」

「それが幽霊？」

興味津々でそう問い返した私にブラックはにっこりと「もしかすると、ですね？」と頷いた。

「てことはさあ、ブラックの所為ならブラックが片付けてきなよ。この依頼」

ぶっすーつとさつきまでノリノリだったアルファがブラックの登場に不貞腐れて依頼書を机の上に、ぱんつ、と、置き私たちのほうへ滑らせた。

ブラックはそれをひよいと受け取るとにっこりと微笑む。

「構いませんよ。マシロも勿論いきますよね？ 正体、見たいんでしょう？ 幽霊の。この依頼書にも夜間出沒すると書いてありますし、夜のデートをしましょう。二人きりで」

(2)

……で、結局みんな来た。

喉^{けしか}けたブラックは来ない。そういう奴だ。というか仕事片付けてからいきますと、にこりと去っていったけど……うん。きっと種回収だよ。うん。きっとそう。ああ、もしくは販売！　そうそう。

というわけで、到着したのは王都から少し離れた海沿いにある洋館だった。

夜中月明かりの下で見る洋館というのは……正直それだけで雰囲気が出ていると思うのだけど、思わずびくびくしてエミルの後ろにちょっと隠れた。

そんな私にエミルは微笑んでからカナイに「それでこれ誰の持ち物なの？」と、問い掛けつつ、不動産屋から預かった鍵で門を開けてくれたアルファに続いて敷地内へと入っていく。

「元は王宮騎士のバルトの持ち物だったらしいが随分前に手放して、何人かオーナーが代わったらしいけど、結局みんな手放し、今、現在この依頼主の不動産屋の手の中だ」

ふんふーん。と、鼻歌交じりで玄関の扉の鍵を開けていたアルファがその台詞にぴたりと手を止めて扉を開きながらカナイを振り返る。

「騎士バルトっていったらうちの曾祖父ですよ？　僕直接会ったことはないですけど、話では今の騎士塔にいるムスカールシルレと同じ

タイプで、豪胆な人物だったと聞いていますが、そんな人が幽霊騒動くらいで屋敷を手放しますかねえ？」

よいしょつと扉を開ききったアルファにカナイは、さあな、と、肩を竦めた。

「バルト氏が屋敷を手放した理由と、幽霊との因果関係は知らないけどな。テラとテトにもらったこの資料には、そう書いてあった……ってただけだ」

屋敷の中から埃臭い、生暖かい風が地面を張って流れ出てきて思わず避ける。

見えないけど、気持ちだけ。

そんなこと全く気にならないのかアルファとカナイはあーだこーだいいながらずかずか屋敷の中に入っていった。

「マシロ怖い？」

「え？ ああ、あの二人ほど平気じゃないけど、平気」

なんとかそう答えた私に、エミルはくすくすと笑ってそれは良かったと締め括ると僕らも入ろうと手を引いてくれた。

玄関ポーチに足を踏み入れる瞬間、私は二階の窓に光るものが動いたような気がしたがそれに騒ぐ暇がなかった。

「流石に、魔法灯は使えないよなあ」

「そうですねえ、ただの石になってますね。はい、こっちも明かり下さい」

正面の階段脇にあった燭台を突き出されカナイは自分の手に持ったものとそれに明かりを灯した。

柔らかくて丸いオレンジ色の光が屋敷の中を照らし出す……。

後ろに長く伸びた自分たちの影がゆらりと揺れて妙な胸騒ぎがするけど、これはきつと、幽霊屋敷前提だからだと思う。昼間見れば素敵なお屋敷に違いない。

内装だってここではそんなに珍しくないけど豪勢にロココ調だ。お貴族様が好みそうな感じだ。って、アルファのひいおじいちゃんの家だったんだよね。そんなこといっちゃ駄目だよね。

「どこから探しましょうか？　ねえ、マシロちゃん、幽霊ならどこに居ますか？」

「へ？　そ、そんなこと私に聞かれても」

「あ、地下牢とかないですかね？　なんかありそー。探しにいきましようか？」

アルファはすっかり遠足気分だ。

私の返答なんて待つことなく正面階段の裏にあたる場所に在った扉に手を掛けてさっさと開いた。

「普通の家に地下牢なんてないよねえ。お屋敷っていつてもさ」
「うーん。別荘に使ってたんだと思うし、牢はないかなあ？　拷問部屋とかあったりね？」

くすくすと笑ったエミルに私はえっ！　と息を呑む。笑顔でいうことじゃないしエミルがいうと冗談に聞こえないよお。

「ほら、ここでアルファ待つのか？　行くんだろ、行けよ」

カナイにぽふぽふ背中を押されて私は地下へ続く階段を下りた。背後でばたんつと扉が閉まる音がして慌てて振り返ったら「俺が閉めたんだよ」とカナイに呆れられる。ちょっと過敏になり過ぎだよね私。

落ち着かないと……と、すーはー深呼吸。

―― ……ひやり……

「ちょ、ちょっとカナイ。触らないでよ！」

「は？　触ってねーよ」

「だって、今私の首筋を……」

はあ？　と、眉を寄せるカナイに私は口を閉じた。

気の所為だ。

私は髪を降ろしてるんだから地肌に何か感じるなんて……こっそり出来る話じゃないし……。私はなんでもないと勝手に切り上げてエミルを追い越し階段を駆け下りた。

「アルファー、どこいったの？」

地下はレンガ造りになっていてひやりと肌寒い。外気温に影響を受けにくく常に低温であるのは分かるけどなんとなく、雰囲気が出

るよね。

物置きとして使用されていたのか雑然としている。

その中を見渡しながらアルファを呼んで進むと、どんっ！と背中を押されて悲鳴を飲み込んだ。

絶対アルファの悪戯だ。

「冗談はやめてよっ！」

「あ、マシロちゃん。こっちこっち」

—— ……え？

後ろに向って怒ると前方からアルファが手招きしている。エミルたちは今降りてきたところだし……なんか、私だけ変じゃない？

「ほら、早く早く！ アイアンメイデンがありますよー」

「は？ 何それ」

「鉄の処女。拷問道具だね？」

—— ……あったんだ。

マトリョーシカと同じような形をした棺の蓋の内側には無数の鉄の針が窺える……。

「未使用だよね？」

「未使用も何も」

アルファは私の問いにににことその棺に入って蓋を閉めてしまった。

思わず悲鳴を上げそうになった私を見て「大丈夫」とエミルは私の肩を、ぽんと叩いてから前に出ると眉を寄せる。

「アルファ、つまらない冗談はやめなよ。マシロが怯える」

ほら出て！ と棺を開けた。もちろんアルファは無傷だ。何？ と混乱した私の背中を支えたカナイは「お前怖がりすぎじゃね？」と苦笑しつつ棺を指差す。

「暗がりでも良く見れば分かるだろう？ 偽者だよ。あれゴムで出来てる」

カナイの説明にあわせて、ほらね？ というようにアルファが針をくにと折って見せてくれた。私はほっと胸を撫で下ろしたあと眉を寄せる。

「もう、ここには何もないんじゃない？ とうか、変だよ。みんな、なんともないの？ さっきからさ、人の肩叩いたりさ……」

「なんともないけど？ お前こそ大丈夫か？」

カナイが少し腰を折って顔を覗き込んでくる。平気だよ！ と、答えたものの。眉を寄せたままエミルとアルファも見ただけど心配そうな顔をしてきているだけだ。

みんなは本当になんともないんだな。

「……本当に、平気。ごめん」

なんとなく申し訳ない気分になって、深呼吸一つ。湿った空気が体の中に入って暖かくなって出てくる。

「良いよ。ここには何もないようだし。上に上がろうか？」

「なんだったら、マシロちゃんとエミルさんは外に居ても良いですよ？　僕が幽霊退治しておきますから」

「お前さ、何気に俺を外してねえ？」

「だって、ひとりでうろうろするの詰まんないじゃないですかー」

正面フロアに戻る為に階段を上がりながら、そんな話をしていた二人に私は「一緒に探すよ」と告げた。

(3)

だって、気になる。

二階には変な光も飛んでたし。大体、皆と居れば大丈夫じゃないことの方が少ないはずだ。何より、いいだしっぺだし、私が依頼を持ち帰った。

一階フロアをくまなく探しても何も出てこなかった。

広い屋敷の中をぶらぶらしつつ何もなければ、だんだん気も緩んできて、怖いと思っていた気持ちも薄れてくる……。

「ねえねえ、これすっごくおっきー音が鳴ったらすごい五月蠅いよね」

「んー、大時計なんて珍しくないだろ。二階行こうぜ？」

どうせ壊れてる。と先上がったアルファを追いかけるように中央にあった階段を昇りながらそういったカナイに、私もそうかなあ？ と頷き壁際から階段のほうへと一歩踏み出した。

そして、私のことを待ってくれていたエミルを見ると、何かを見つけたようでこちらに向って足を踏み出し「こっちに早く」と手を伸ばしてくれた。

見ているのは私じゃない。

私じゃないってことは、エミルは何を見ているんだろう？
不思議に思っただけでエミルの視線を追うように私は振り返った。

―― ……っ！ 眩しっ！！

後ろを向くまでに光の玉が直撃した。眩しさに目を閉じたら、が

くりと膝から力が抜けた。

「大丈夫？」

慌てた声を掛けエミルが身体を支えてくれる。

—— うん。大丈夫。

「ええ」

あれ？ 私、今、大丈夫っていおうと思ったのに……口から出た台詞が違う気が。

—— ……気の所為、気の所為。

「本当に大丈夫？ 今のなんだったんだろ、怪我とかない？」
「ええ、平気、です」

—— ……！ 気の所為じゃないっ！ なんで、どうして？

私、もしかして、とりつかれたとか、いやいやいや、ないないない。
い。

私の心の動揺はこの暗闇の中では伝わらないだろう。明かりを持っていたアルファとカナイが完全に二階に消えてしまったのであたりは月明かりのみで保たれている。

「調子良くなさそうだね？ 魔物は居たらアルファたちが何とかするだろうから、外で待つ？」

心配そうに顔を覗き込んでくれるエミルに、なんとかこの異変を伝えたくてたまらないのにその手段が得られない。

「探さなくては」

「え？」

「見つけなくてはいけないの……」

私の意志に関係なく、ふらふらと覚束ない足取りで私は階段を登る。

エミルが慌てて身体を支えて「手伝うよ」といつてくれるけど、私じゃないこと、分かってくれてるかなあ？

二階に上がると先にアルファたちが上がっているはずなのに妙な静けさが支配していた。そんなことを気にしない私は、まるで自分の家のように、ある一室に真っ直ぐ入っていく。

エミルが続けて入って来たところで私は扉を閉めた。

因みに私は閉めてない。私だけど私じゃない。ややこしい。

「それで、探し物って何？　ここ初めてだよね」

エミルは部屋の中を見回して、特に気にすることなく窓辺まで歩み寄り、そっと外を見る。

—— ……居ない。居ない……。

え？　エミルの後姿を眺めていたら、急にそんな思いが流れ込んでくる。

居ない。

居ない。

一人にしないで、
永遠に一緒に居ようって約束したのに……

—— ……約束、したのに……

「—— ……え？」

思わず両手を伸ばしていた。この思いは自分のものではなくてただの幻。
分かっているのに……両腕を力の限り伸ばして、目の前の愛しい人に抱き付いた。

「どうしたの？ マシロ、何か怖いものでもあった？」

エミルはほんの少しだけ驚いたようにそういつて、私の腕を少しだけ緩めると、向かい合って微笑んだ。

月明かりに照らされるエミルはとても綺麗だ。若草色の瞳は、深い深い海のその色を映す。

その瞳に映る私は、私だけど、私ではなくて、私は……。

エミルの背に回した腕に力を込める。頭一個分以上ある背丈の差を埋めるように背伸びをして、近い距離を何とか確保して告げる。

「結婚してください」

—— ……ちょっと待て！ 私っ！！

自分に突っ込んだ。突っ込んだけど、私の意志は反映されない。
エミルは刹那驚いたように瞳を丸くしたあと、やんわりと細めた。

「良いよ」

—— ……エミルもちよつと待てーっ！

エミルさん。貴方は王族で、これから国を、世界を背負っていく
うかという一人なのですよ！ そんな簡単に！

私の焦りは全く反映されない。泣きそうだ。

「良いよ。マシロが望むなら問題ないよ。本当の、君が望むなら、
ね？」

含みのあるエミルの言葉に、私は、不安げに「え」と零す。

「マシロじゃ、ないよね？ 残念だけど、マシロはそんなこといっ
てくれないよ。やっぱりさっきの光が原因かな？ 君は唯の思念体。
誰かと婚姻を結ぶ予定でもあった？ でも、ごめんね。それは僕じ
ゃない」

「違う、貴方よ。貴方が、私の運命の人。月の縁が紡ぎ出した相手。
そう、いったのに」

愛しているよ。

君だけだ、二つ月が僕らを巡り合わせた

「困ったな……僕では手に負えない……」

はらはらと頬を伝ってしまった涙を困惑気味のエミルが指先ですと拭ってくれる。

私が泣いているわけじゃないから、私が本当に悲しいわけじゃないから平気なのだけど、エミルはとても辛そうだ。

「貴方は私を愛している。私は、私……」

エミルの手に頬を摺り寄せ、上目遣いで覗き込む。

やめて、私。恥ずかしいからそれ以上変なことしないで。頼むから勘弁してください。

勘弁しろといっているのに、私はこれ以上は伸び出来ないくらい足を伸ばし、エミルに顔を寄せる。

私を突き飛ばしても良いから、お願い離れてっ！　という私の望みは誰にも聞いてもらえない。

「僕が好きなのはマシロだよ。君じゃない」

それにマシロが好きなのは僕じゃない。そう重ねたエミルに、ちくりと心が痛くなる。これは私自身の痛みだ。

「可哀想……私が、愛してあげる。結婚して、命が尽きるまで傍にいて……」

互いの息が掛かる距離で紡がれる。

(4)

ゆっくりと瞼を落とした私——もう、どうとでもして下さい——
ぴくりとエミルの体が強張り、突然私の頭を抱え込むと自分の胸元に引き寄せた。

—— ……ガシャン!!

銃声が響き、窓が割れたのはそれとほぼ同時だった。

「危ないな……マシロに傷がついたらどうするの」
「貴方が死んでも守るでしょう?　　というか、私はマシロを傷つけません」

私にとって聞きなれた足音に、声だ。

そして廊下からもばたばたと足音が聞こえる。多分、音に驚いて
アルファたちが踵を返したのだろう。

私の背後でぴたりと止まった足音は、まだ、エミルの腕の中に居
た私の肩を掴まえて、多少強引にエミルから私を引き離し、自分と
向かい合わせる。

—— ……良かった。

予想通りそこにあったブラックの姿に、ブラックならなんとかし
てくれると私は安堵したのに、私の身体は強張った。

その機微にブラックが気がつかないはずはないけれど、ブラック
はそれを無視して、私の身体を片手で固定すると、こつこつと右手

の中指で私の胸元を突いた。

—— …… いやっ！

私の中で何かの聲がした気がする。

けれどそれは分からず、そのまま突いた指先を後ろに引いたブラックの指に絡みつくように、白化される種と同じように……ずるずるっと光が引き出される。

ぷつんっと全てが出て終わると、私は大きく深呼吸した。

「もう、残っていませんね？」

ブラックの言葉に私は頷いた。それは良かったと微笑んでブラックは軽く私の額に口付けてから矛先をエミルに向ける。

苦々しく睨みつけてくるブラックに、エミルは軽く肩を竦めた。

「君の不始末？」

にこりと告げたエミルにブラックは眉を寄せた。

「あ」

二人がいがみ合っている間に、ふわりと、また光の球体が逃げ出した。良いの？ とブラックの袖を引くとブラックは、ああ……と零し「すぐ消えるでしょう」と苦笑する。

「それで、どうしてあんな状況になるわけですか？」
「うーん。それは拒む理由がなかったからかなあ？」

室内の温度が三度は下がった。

まあ、ブラックによって窓が破壊されたのが原因だとは思うけど、二人は笑顔で体感温度を下げる天才だと思う。私は、はあと嘆息して、まだ熱い頬をぺちぺちと叩いた。

開いたままになっている扉から賑やかな音が聞こえた。それを覗こうと傍まで寄った私の目の前をばたばたとアルファとカナイが通り過ぎていく。

私たちを探していたのではないのだろうか？

「結婚してくださいっ！」

「つちよ、アルファ、待て、おま、色々問題が……!!！」

「どうして、愛してるっていったのにっ!!！」

逃げ出した思念体は今度はアルファに憑いたらしい。どうやら無差別だ。

「ブラック、放っておいて良いの？」

「強い思いと嫌な記憶はなかなか消えないので、残っていただけだと思います」

「あの人裏切られたのかなあ？ 物凄く辛くて哀しくて寂しくて……って気持ちばかりだったよ」

「例えそうだったとしても、もう、とても昔の話です。マシロが気に病むことじゃない」

「それで、幽霊はあれだけ？」

二人が消えてしまった廊下の先を見てそういったエミルにブラックは頷いた。

「あとは魔物が数体、住んでいましたが……アルファが片をつけました」

そのうちここも売りに出されるでしょう。と、続けたブラックは、ふと顔を挙げ何もないとところを見ると「出ましよう」と私の手を引いた。出るって行ってもそっちはブラックが壊した窓だけど。

「このくらいならいけますよね？」

「うん」

いや、無理。私が声を出す前にエミルが頷く。

—— ……え、いけるんだ？

「マシロは私にしがみ付いてくださいね」

にこりと、いわれて冗談じゃないのは分かった。私は慌ててブラックの首に腕を絡めるとひょいと抱きかかえられて、窓から飛び降りた。

エミルもひょいと身軽に降りて、着地には少しブラックが手を貸したようだ。

私たちが無事に屋敷から出た、その瞬間……

鈍い地響きがした。

「え？」

「あー……カナイ切れたね」

ぽろっと聞こえたエミルの台詞を問い返す暇もなく、

――…ずんっ

と足元がひずんだような感じがすると同時に、轟音が響き土煙が上がった。

煙を吸い込まないように配慮してか、ブラックが私を胸に引き寄せて片腕で抱き締める。

ちらりと顔を盗み見ると……凄く楽しそうだった……。

はぁ……。

次に視界が戻ったときには……屋敷は瓦礫の山となっていた。

「ちょーっ！ もう！ カナイさん危ないじゃないですかっ！ 何破壊してんですかっ！」

「それはこっちの台詞だっ！ きっしょいことすんなっ！！ 戻ったのか？！ 正気に戻ったのかっ！」

「僕だって好きでやってたわけじゃないです。気持ち悪いよおお！」

その中央で屋敷に残っていたと思われる二人は健在。

喧嘩真っ只中だった。元氣そうで何よりだ。

そのあと私たちは懇々と不動産屋に叱られた。

これから売りに出そうという屋敷を調べにいっただけなのに、跡形もなく破壊したのだから仕方ない。

カナイに、こっそり直せば？ といったのだけど、面倒臭いと断られた。

それに古いものだったから、復元するにも正確な資料が足りなかったとか何とか、まあ、面倒臭かったんだと思うけど、ね？

そして、ギルド管理者のテラとテトには盛大に爆笑された。いや、管理者としてその反応は間違ってる。間違ってると思うけど、まあ、良いや。

不動産屋は王宮に屋敷代の請求をしたらしく、その詳細がラウ先生を伝って私たちのところまで届いた——ラウ先生はどうして呼んでくれなかったのかととても残念そうだった——エミルが半分くらい出せば？ とブラックに渡すと、にっこりその場で燃やされた。

どうか不動産屋さんが潰れませんように。

私はこっそりお願いし、悲しみだけでこちらに残っていた光が無事に昇華されていることを願った……。

—— 余談 ——

「ねえ、ブラック」

「はい？」

「屋敷の中で私の肩を叩いたり、押したりしたの、ブラックの悪戯だよな？」

「—— ……？」 ↑身に覚えがない。

「……うん、なんでもない」 ↑これ以上追求したくない。

後日談

まだ私は未婚だから、本当のところは分からないけれど、結婚なんて人生の上でとても大きなイベントだと思うし、分岐点でもあると思う。

それを、先日のエミルのようにあっさり「良いよ」というのは何か違うと思う。

思うから私はみんなに聞いて回ることにした。

「ねえ、カナイ」

「んー？」

一人で今日も本の虫と化しているカナイを確保。私が傍に座っても、ちらと確認しただけで直ぐに視線は本へと落とされる。

「私が結婚してっていったらどうする？」

「別に構わないが、急にどうした？」

—— ……あれ？ あっさり？

「いや、そこは突っ込むところが違くない？」

私の重ねた言葉にカナイはようやく顔を上げて眼鏡を外しつつ、どこ？ と首を傾げる。

「だから、結婚なんて”して”、”良いよ”、って流れおかしいよね？」

「別に」

「じゃあ、私が本当にそういったらしてくれるの？ 私だよ？」

相手に不足ありすぎだろう。

「別に構わない。特に他に考えている相手が居るわけでもないし、家とも絶縁状態だ。俺の独断で決定しても、揉めることもないだろう」

駄目だ。こいつは本以外に興味がないんだろう。

私はくらくらと眩暈を起こしそうな返答にこめかみを押さえて、そ、そう。ありがとう。と、いい残して、次なる回答者を求めた。

「ねえ、アルファ」

「なんですか？」

屋上庭園で、寒さも気にならないのか、ご機嫌で剣の手入れをしていたアルファを掴まえた。

「私が結婚してっていったらどうする？」

「んー？ 僕、手続きとか良く分からないから上に聞かないと駄目ですけど、別に構いませんよ」

きらりと刀身を太陽に反射させ、その曇りのなさに大きく頷いたアルファは、ちんつと鞘に剣を収めてから「で、いつですか？」と振り返る。

わ、私はもしかしてからかわれているのか？

いや、私の質問もおちよくってるようにしか聞こえないと思うけど。

「いや、いつ、とか、あれじゃなくて」

「ああ、冗談ですか？ 残念」

にっこり天使の笑顔で添えられると、うっと息が詰まる。

「あの、さ。私だよ？ 他にいっぱい居るじゃん」

「居るかもしれないですけど、僕が知ってる女の子らしい女の子はマシロちゃんだけですよ？ だからそうなれば嬉しいと思います」

う、駄目だ。これ以上愛らしい笑顔は受け切れない。

私はアルファへの挨拶もそこそこにふらりと館内に戻った。エミルの反応は普通ではないという裏付けに聞いて廻ったのに……私はいきっぱぐれることはなさそうだ。

というか、この世界の結婚観がきつとおかしいのだろう。うん。

私は一人頷いて、館内で歩く本に出会い引きとめた。

足は止めてくれたけれど顔が見えないので、私は上から三分の一ほどと取り上げて抱えた。

「なんですか？」

素直に眉を寄せるシゼに「手伝うよ。ラウ先生のラボ？」と足を

勧めた。

大丈夫だと追いかけてくるシゼを無視し私は話しかけた。

「ねえねえ」

「なんですか？」

「シゼは、私が結婚してっていったらどうする？」

—— ……ばさばさばさ

想定範囲内でシゼは本を落とした。

私は廊下のわきの長椅子に持っていた本を置いて拾うのを手伝う。

「全く、急に何をいうんですか？ 種屋店主殿と何かあったんですか？」

「別に、フツ―。良好です」

最後の一冊を一番上に、ぽんっと載せてそうだった私にシゼは複雑そうな顔をして立ち上がる。

「もしもの話だよ。もしも、私がそうだったら」

「あのですね。マシロさんの世界がどうであったかは知りませんが、ここでは十七歳で大人です。まだ僕には二年残ってます。最低でもそれは待っていただかないと困ります」

—— ……あれ？

すたすたと歩くシゼに並んで続きを促す。

「そのあとだって、僕はまだ学生ですから、マシロさんを養っているだけのものがありません。どう急いでもそれからまた数年は待

っていたかかないと……」

「シ、シゼ？」

恐る恐る言葉を遮った私にシゼは視線だけで問い返す。

丁度、研究室の前に到着出来たところで良かった。私の方が荷物が少ないので、扉を開けてあげる。

「私と結婚してくれるの？」

「――……」

改めて問い直した私と目が合って、じわじわじわっとシゼの頬が朱を帯びてくる。というかもう真っ赤。思わずにまにましてしまう。シゼは可愛い。

「おやおやー？ どうしたんですか？ うちの可愛い助手が茹蛸になっっていますか？」

そこへラウ先生が沸いてきた。本当に神出鬼没だ。といってもここはラウ先生の研究室だからいても可笑しくない。

「なってません。この本、奥においておきますよっ！ マシロさんの本はその辺りに置いておいてください。あとで運びますから！」

ぷりぷりと去っていくシゼの姿を見送って、ラウ先生と顔を見合わせると肩を竦めた。

「それで、何の話だったんですか？」

「え？ あ、別に大した話ではないです」

っていつでも聞いてくるだろうなあ。案の定問質され私は渋々答

えた。

「―― ……なるほど、マシロはモテモテなんですね？」

「……そーですね。結婚観が違うだけだと思いますけど」

どうにも、この人は苦手でつい気のない返事になってしまう。

「でも、私は嫌ですよ。確かに魅力的なお話ですがマシロに言い募られても承諾しないと思います」

なのに、ここにきてようやくまともな意見が聞けた。でも、まともだと思っけど。あっさり嫌だといわれるのもどうだろう？ ちよつと失礼だ。

「マシロに限らず、私は誰とも婚姻関係を結ぶつもりがないので」「そうなんですか？ ラウ先生モテそうなのに」

意外な言葉に問い返した私に、ラウ先生は、素直にお礼をいったあと話を続けた。

「面倒臭いじゃないですか。それに幸も不幸も分かち合うものなのでしょう？ 世間一般的な感覚として。勿体無いですよ。幸も不幸も私自身が所有して私自身のものです。他人の幸も不幸も私には必要ないですから」

「―― ……はあ」

につこりと特に何かを意識して話したという風でもないラウ先生の言葉は、常に彼の中にある本当なのだろう。
らしいといえばらしい……。

「――……て、ことがあったんだけどね？」

「ほう？ 私をほったらかしにしてそんなことを……」

「いや、ちょ、ちょっと聞いてみただけで、私が好きなのはブラツクだよ？」

本当ですか？ と、恨みがましい視線を向けられて、私は力強く頷いた。若干表情は険しく作っているけれど、尻尾がぱたんぱたんとどこか嬉しそうだ。

――……可愛いやつ。

つい、上から目線になってしまう。

ブラツクの膝の上を陣取っていた私を、むぎゅっと抱き締めて頭頂部に顎を乗せ、一息。

そこは休む場所ではありません。

ま、良いけど……さ……。

「別に良いですけどね……他の方々がどれほどマシロを愛していても、私には到底敵いませんから」

「ん……そうだね」

もう、どうでも良いや。私はここが一番心地良いということに変わりはないから。

幽霊屋敷にいた彼女にだって、恋人と約束を交わすまでの間、うん。破られるまでの間にはこういう甘くて優しい時間が合ったのだと思う。

それなのに、記憶に刻まれ残っていたのは居なくなってしまった人への想いと、当初抱いていたわけではないだろう、募りすぎた想いが生んだ恨み。

私は、もしこの腕をなくしたらどうなるんだろう？ 同じように彼を怨むのだろうか？

それに……ブラックにも同じ質問をしたらどう答えてくれるんだろう？

—— ……興味はある。

でも私は恋とか愛とか、信頼とかに臆病だから、欲しい答えのある相手にはとても軽々しく質問したりは出来なかった。

ま、私はここに居れば白月効果で絶賛モテ期、真っ只中だ。

きっとそのときが来るまではこうして暖かなものを感じていられるだろう。

後日談（後書き）

メルマガにて先行配信させていただいていたものを、アップさせていただきました。

少しでも楽しんでいただけたら幸いです^^

感想など随時募集中ですので良かったら一言寄せていただけるととても嬉しいです。

(1) (前書き)

※ ※ 某ドラマCDのパロディとなっております。ご注意ください

(1)

なんとなく時間を持て余した私はギルドに足を運んでいた。いつも通り陽気なテラとテトが声を揃えて迎えてくれる。

「「いらっしやーい、マシロ」」

「う、うん。何かない？」

カウンターに歩み寄りながらそう口にした。その私の問いに、二人はニコニコと顔を見あわせたあと、テラがカウンターの上にひらりと一枚の羊皮紙を広げた。それに続く形でテトが鏡をことんと置く。三十センチほどの楕円形の鏡だ。

紙の形式からして、CランクもしくはBランクのお仕事だろう。

「これね、国宝級の魔法具なんだよ」

国宝知識にも魔法具知識にも乏しい私は、へえと相槌を打って続きを促した。そのあっさり態度が気に入らなかったのか、テトが「国宝級なんだけど」テトが「凄いものなんだよ」と重ねる。

「うん。分かった、それで？」

なおあっさりな私の返答に、もうっ！ と二人揃って頬を膨らませたが可愛いだけだと思うよ？

「本当はこういう依頼は大聖堂に持ってくんだけどさ。マシロに渡したほうが面白いかなと思って」

面白い面白くないかで依頼を紹介しないでもらいたい。

「いや、それは幽霊屋敷の一件で懲りたのでは？」

「えー面白かったよー」

「他のメンバーじゃ」

「「ああはならなかったよね」」

褒めてないっ！ 褒めてないよねっ！！

「いや、本当ごめん。それにまた同じようなことになったら……さ、ギルド管理

者として信頼とか失わない？」

本気で心配したのだけれど、テラとテトは顔を見合わせたあと私の方へ向き直りにこりっ

「「大丈夫！」」

「あんな物件扱おうって不動産屋」

「色々あって然りだから」

「「内緒にしてもらうもの簡単なの」」

―― ……つまり、後ろ暗いところをちらつかせて黙らせたのね。

可愛い顔と耳しやがって、なかなかアクドイ兎たちだ。

「話し戻すけどね、この魔法具」

「鏡だね？」

「うん。鏡。鏡だけど不用意に覗き込んだじゃ駄目だよ？」

カウンターに無造作に置いてあるそれに顔を覗かせそうになって慌てて引っ込める。

「真実を映す鏡なんだよ」

「聞いたことに答えるってものなんだけどさ」

私は意味が良く分からなくて、ふーんつと頷く。

「普通の状態なら、争いごととかがあるときに活躍するんだけど……これね……」

いかけたテトの話の続きを現すように、鏡は立ち上がった。細くて小さな手足がによきこと出てきたのだ。私はとりあえず一步下がった。立ち上がった鏡は私に向って鏡面を向けぺこりと頭を下げたように見える。

反射的に私も頭を下げた。根っからの日本人ですから。

『この方がなんとかしてくださるのですか？』

「うん。多分」

「壊されないように気をつけてね」

『ひいひい、痛いのは嫌ですよ』

—— ……喋ってる。普通に会話がなってる。

私は危険を感じて、暇つぶし程度の依頼ではないと直感して回れ右したら呼び止められた。三人に。

背筋に冷たいものを感じて私は無視して出入り口まで大股で向った。背後でテトが「ゴー！」と呪いの言葉を吐いた気がする。

『待ってくださいーっ』

「い、いやあああっ」

——……で。

私は例の鏡を胸に抱いて図書館に戻った。

自ら依頼書を持って走ってきたのだ。そして、私は捕獲されてしまった。声を震わせて『助けてください』と縋られたのでは、断りきれない。

がつくりと肩を落として、館内に足を踏み入れるとカーティスさんに「大丈夫かい？」と声を掛けられた。私が大丈夫だと答えるより早く。

『カーティス・ケリア。年齢三十七歳。ラウウィルと同年齢でもあるにも拘らず、そう見てもらえないことを実は気にしている。あと、最近頭部がさみし……ふががっ』

勝手に口を開いた鏡を胸に押し抱いて、きょとんとしたカーティスさんの前をごめんなさいっ！ と謝罪して走って逃げた。

この鏡……他人の真実を勝手に明かしてしまうらしいのだ……よしするにおしゃべりな鏡。

とりあえず、私は寮の自室に飛び込んで——鏡には申し訳ないけれど映った人の秘密を手当たり次第話そうとするので——布でぐるぐるつと包んだ。ふがふがいつてる。

でも、気にしない。

「あ……この子が持ってた依頼書まで一緒に丸めちゃったよ……」

がつくり。

でももう一人で開封する気にもならなかった為、その包みを小脇に抱えて私は隣の部屋へ。

「エーミルー、居る？」

ノックと共に掛けた声に返事がない。エミルに限って居るのに出ないということはないだろ。カナイならありえるけど。

仕方がないから廊下を挟んだ隣のカナイたちの部屋をノックした。こちらにもまた返事がない。でも先にも述べたようにカナイならありえる。居留守というわけではなくて、本当に気がついていないということが……。

完全に留守ならドアは閉まっているだろうとノブに手を掛けると、あっさり開いた。中を覗くとカナイが窓辺で読書中だった。

「カナイ」

気がつかない……。なんで気がつかないのかなー？　もう！　少しの苛立ちを覚えて、私は声を張った。

「カナイっ！！」

「っ！　あ、ああ……」

びくんつと肩を跳ね上げてからこちらを見たカナイは、あからさまに不機嫌そうな顔をした。

「何？　また変な依頼持って帰ったんじゃないだろうな？」

鋭い。鋭いけれど決め付けは良くないよ。うん。

「なんでそう思うの？」

私は勝手知ったる他人の部屋とばかりにさっさと入室して部屋の中央にあるテーブルの上に荷物を置いた。

「お前、暇だからギルド行ってくるーって出てっただろ？ それにその妙な形状の荷物……俺の第六感が告げる。確実に厄介ごとだ」

カナイは気難しそうにそういって、本を閉じると窓辺に置いて、こちらに歩み寄ってきた。そして苦々しく机に置かれた包みを睨みつける。もう鏡は大人しくなっていた。窒息死……とかしないよね？ もともと静物だし。

はあ、と嘆息してカナイは顔に当てたままになっていた眼鏡の位置を直して私に片手を突き出す。何？ と首を傾げれば「依・頼・書」と指先を振られた。私はちらりと包みに視線を送った。

「この、中なのか？」

こくんつと頷いた私にカナイは、はー……と、呆れたように長く息を吐いた。

「いや、ちょっと待って。カ、カナイは隠し事とか、秘密とか……ない？ 大丈夫？ その秘密は露見しても平気？」

包みに手を伸ばしたカナイの手を掴まえてそう重ねると、カナイは眉間に深い皺を刻んだ。いつも機嫌が良さそうというわけではな

いけれど、そんな顔を見ることも少ない。

「どういう意味だ？」

「あ、えっと、その……この中身、鏡なんだけど……それが、ちょっと暴走というか命を持ったらしくっておしゃべりなのよ」

私の曖昧な返答にカナイはやや黙したあと、ぽつりと「真実の鏡……か」と零した。知ってるの？ と驚きの視線を向けられ、口角を僅かに引き上げて「まあな」と、小さく肩を竦められた。

「あれー？ 二人して見つめ合ったりしてどうしたんですかー？

僕お邪魔？」

「っ！ あ、アルファお帰り」

私は反射的にカナイの手を掴んでいた手を離し、声のしたほうを振り返る。カナイが苦笑したのが分かる。

(2)

「丁度良い。アルファ、これ開けろよ」

カナイは机の上の国宝を！ 国宝を無造作に放り投げた。私が息を呑むより早くアルファはそれを「なんですか？ これ」と受け取る。

「真実の鏡だつてさ。なんか……」

『アルファアルファ・ルチル・シーザス 年齢十七歳 十年前騎士塔での師匠・ムスカの強い騎士道に不満を抱き、ムスカの寝台の中に毒蛇を七匹ひそませて、その罰として一昼夜蛇（毒なし）樽に放り込まれて以来、蛇が苦手』

カナイの説明を待たずにシュールな秘密が漏らされた。
アルファもアルファだけど師匠も豪快すぎる。

「うわっ！ 何これ！ 気持ち悪っ！」

つるりつとアルファの手の内から落とされた鏡は、うひゃあと間抜けな声を上げて、着地した震動に耐えかね、ばたんつと倒れると短い両手両足をぱたぱたとさせる。

「アルファ、駄目だよ。国宝だよ」

私は拾い上げて鏡の面を胸に向けて抱きかかえた。

「お前蛇が苦手なの？」

ぶふつとカナイに噴出されてアルファは眉を寄せる。

「カナイさんだって、蛇樽に放り込まれたらトラウマになりますよ、絶対」

うん。なると思うよ。私は心の中だけで頷いた。

「とりあえず鏡面に映らなければ大丈夫なのか？」

いいつつカナイは床に落ちた依頼書を拾い上げた。そして、ざつと黙読したあと

「―― …… 黙らせれば良いらしい」

「じゅあ、破壊しましょう。必要ないですよ、今、真実の鏡なんて『ひいひいっ、や、やめてくださいいい』」

「魔法具が、心を持ったのが間違いだったな。気の毒だとは思いつし、依頼書には傷をつけずに正常な状態に回帰させることとあるが……」
「うっかりってことで良いですよね？」

―― …… この二人も極端だった……。

真実の鏡は両手両足をばたばたと動かして私の腕の中で必死に助けを請う。ここまで懇願しているのだから助ける術があるなら助けるべきだと思う。

「可哀想だよ」

「えー、マシロちゃん。その味方なんですか？ 僕なんてマシロちゃんたちの前だから良いけど、フルネームに苦手なものまで暴露されたんですよ」

「ああ、俺は心に書きとめた。一生忘れない」

にやにやとそういったカナイにアルファは永遠に思い出せないようにしてあげます。と、腰の刀に手を掛けそうになったから一応止めた。長くなるから二人でもめるのはやめろ。

「とりあえず」

私の声じゃない。

揉み合いそうになる二人を無視して扉のほうを見るとエミルが立っていた。賑やかだったから気がついてもらえなかったんだよ、と苦笑しつつ部屋へ入ってくる。そして私の手の中から鏡を取り上げる。私は思わず「あ」と声を漏らした。

『エミリ——』

「黙って」

にっこり。

変なオーラ出てます。王子。とりあえず全員黙った。

「うん、良い子だね。質問以外には答えない。分かった？」

反射的に私は頷いてしまった。なんだろう、このエミルの有無をいわせない感じ。

「分かったかな？」

『わ、分かりましたー』

おお……一瞬にして魔鏡を掌握してしまった。流石エミル。滅多にやらないだけあってその強引さは絶大だ。鏡の返答に微笑んで頷くと、エミルは鏡をテーブルの上に載せた。上手に足を伸ばしてバ

ランスを取り座っている。

—— ちよつとだけ可愛い……。

カナイも同じことを思ったのか、目があつたら気まずそうに逸らされた。

「大体、聞いていたと思うんだけど……つまり、宝物庫でも黙ってくれてれば良いんだよね？」

『いい、いい、嫌ですー。あそこは暗くて静かで寂しすぎます。もう、気が遠くなるほどあの場所で待たされました』

「カナイ。こういう場合大聖堂でならどうするの？」

魔鏡の嫌々と首？ いや身体を振る姿にエミルは小さく嘆息。私に座るように椅子を引いてくれ、促されるまま座ると自分も腰を降ろした。

「大抵は破壊する。ときどき魔法具が心を持つことがあるという話は聞いたことあるが、俺は初めて目にした」

「壊しちゃうなんて、可哀想じゃない！ お話出来るのは便利だよ、ね！」

思わず口を挟んだ私にカナイは仕方ないなという顔をする。

「あのな、魔法具は道具で、心は必要ない。今だって、こいつの勝手な意思で幾つかの秘密が明らかになってしまったわけだろう？ それは使用者の意思とは異なってる。もうそれじゃ、道具としての価値は無いんだよ」

カナイのいい分も分かる。分かるから私は不満顔を隠すことはな

かったが口を閉じた。

「……分かった。壊さなくて良いように、考えよう。それに国宝級の魔法具をそう簡単に破壊するわけにもいかないだろうし、依頼書にも破壊厳禁って書いてあるしね？」

といってエミルは不満顔の私の頭を撫でた。

「それで、どうします？」

「――……ようするに、使われない鬱憤がたまって心になったんだろう？ だから、勝手に暴露してまわってたわけだから……」

「んー……じゃあ、満足するくらい真実を明らかにしていけば……もとの鏡の姿に戻るかな？」

うーんと唸りながら、エミルは鏡にどう？ と訪ねる。鏡は『わかりませーん』と答え、でもー、と続ける。

『確かに私は使われない、満たされない思いを抱えていました。だから、それが満たされれば、昇天出来るのかも知れませーん』

「え、死んじゃうの？」

「死とは違うだろ？ 本人満たされるっていつてんだしさ」

「そんなもんかなー……」

この企画が全ての悪夢の始まりとなった（主にカナイにとって）

……

(3)

—— ……と、いうわけで

『さあ、いつでもどうぞっ！ なんでもこの私にお尋ねくださいっ！』

やる気満々の鏡を中央に、私たちは唸った……明かされる真実って……急にいわれても聞けない。何かない？ と私に振られても困るのだけど……知りたいこと、知りたいこと

「ぐん……いや、寮監さんの髭は本物？」

かなりどうでも良いことが口からついてでた。カナイがお前それ本当に知りたいのか？ という目を向けてきたが、沢山聞くんだから別に良いじゃん。

『図書館寮・寮監の髭の謎……本物です』

「本物なんだ！」

『今朝の髭は乱れに乱れてしまった。これでは生徒に示しがつかない。いや、しかし、大丈夫だ、この型にさえ押し込めば今日も完璧な美しき髭に整うはず……』

「待て、それなんだ？ その鏡に映ってる文字はなんだ」

—— ……ねえ、髭が型押しだというところには突っ込まなくて良いの？

『日記です。他人の秘密を明らかにするには日記を読むのが一番ですー』

「日記っ！ うわっ！ 悪趣味ーっ。でもマシロちゃんの日記が気になる出して出してっ！」

「ちょ、アルファっ！ わ、私は日記なんて書いてないし、だから読むのは」

『マシロ・ヤマナシの日記ー検索しますか？』

「しないっ！」

止めたのにアルファの「する！」の方が早かった。エミルも女の子の日記を読むなんて失礼だよといいながらも止めない。くうっ。

『八百件ヒットしました』

「めっちゃめっちゃ書いてるじゃないですか」

「書いてないってば」

『何を閲覧しますか？』

「マシロが、私の何を愛してくださっているか、で、お願いします」

突然輪の外から声がして、私は慌てて背後を振り仰ぐ。にこにことブラックが「面白そうなことをやっていますね？」と、私の両肩に手を置いて来て、肩口から鏡を覗き込む。

『一件ヒットー、閲覧しますか？』

「やめて」

「「します」」

なんか声が多かった。

『今日は週末だからブラックが遊びに来てくれた。嬉しい。猫の姿だったので超嬉しい。しなやかな手足に美しい毛並み。撫でれば光が泳いでいく。やや硬さのある肉球もそれにしか有り得ない弾力で応えてくれる。可愛すぎる。はぁ、このまま永遠に猫の姿だったら

良いのに…… ―― マシロ・ヤマナシ。獣フェチ』

真っ赤になる私とは対照的に、三人は一斉に吹き出した。そして頬を寄せていた人はがっくりと肩口に額を乗せて「獣族だから、獣族だからなんですか……」とぶつぶつ零している。

「あ、じゃあ、闇猫の日記とかどうですか、凄く黒そう」

「私は日記なんて形の残るもの作っていませんよ？」

だから私も書いてないってば、捏造だよ。いや、猫派に完全鞍替えしたのは事実だけど……。

『種屋店主の日記。検索しますか？』

「します」

あたりがぴんつと静まり返った。そして僅かな間のあと『ヒットしました』と返ってきて続けられる。

『貴方は二十五歳以上ですか？ イエス？ おあ、ノー？ 適正年

齢以下には不適切な発言・表現。など多数含まれて居ます』

「フィルタリングされてる」

「閲覧不可なようですね」

―― …… どんだけ黒いんだよ。

「さて、私の情報は非公開ということが確認できたので、次は何を聞きましょうか？」

みんな一つ溜息を落とした。

「あ、俺一つ良いか？」

珍しくカナイが前に出る。

『なんでもどーぞー』

「大聖堂の学長って幾つだ？」

「カナイー、女性の年齢を聞くのはどうかと思うよ？」

私はまだ大聖堂の学長の顔を知らない。というか、ここの学長だって面識がない。とりあえず女性なんだな。

窘めたエミルの台詞から情報を得る。

「いや、でも俺結構昔からあの人知ってるけど、外見的特長が一切変わらないんだぞ？」

「ああ、私もかなり昔から知っていますが、あの人は変わりませんねえ」

予想外にも話しに乗ったブラックに「だろ？」と同意を求め、どうなんだよと鏡を見る。鏡は既に検索済みのようでその画面には……。

『この頁を開くとウィルスに感染する恐れがあります』

—— …… 魔女怖え……。

「推して知るべしというところでしょうか？」

「えー、もう全然役に立たないじゃないですかーっ！」

『そ、そんなことはありませんっ！ 私はこれでも有能な魔法具。国宝級であり、かの時代ではそれはもう良い働きをしたのですよー！ もっと質問を考えてください』

なかなかいってくれる鏡だ。このちょっと間の抜けた声じゃなかったら、苛っとしてくる。

「んーじゃあ、昨日カナ伊さんがどこにいったか、教えてください。なんかこそそしてて気持ち悪かったの」

「そーいえば、見かけなかったよね？」

「べ、別に俺の行動なんてどうでも良いだろ！ 別のしろ」

ああ、焦っちゃったよ。カナ伊さん。そんなことしたら「早く出してっ！」アルファがせつつくのは分かりきってるのに……。

『昨日のカナ伊の秘密。一件ヒットしました』

やめろと、暴れるカナ伊をアルファががちりホールドして「表示して」と続けさせる。

『危うくアルファの面倒なロードワークに付き合わされるところだった。今日は多分これで足りるだろう。ああ、可愛い仔猫たん。一、二、三、四……あれ？ 五、増えてる。まあ良いか。可愛いから、あ、マシロがまた真っ黒になっている…… ——— カナ伊、隠れて仔猫を世話をしている。名前はマ……』

「やーめーてくれーっ!!」

カナ伊本人は真っ赤になってしまった。そして、完全にどこかに逃避した。ふらりとアルファから離れると部屋の隅っこで丸くなる。別段珍しい情報ではない。珍しい情報じゃないけど……気の毒に……。

「—— ……ええと、私は突っ込んで良いの？」

「放っておいてくれ」

「たん、はないですよね……その上、名前まで……カナイさん、気持ち悪い」

「なんとでもいえば良いさ。ああ、今すぐ俺を消してくれ……」

「今なら格安で消して差し上げますよ？ お望みなら無料でやりましょう。今すぐ実行させてください」

一歩、カナイのほうへ踏み出そうとしたブラックの尻尾を引っつかむ。

「やめて。ブラックのは冗談に聞こえないから」

「大丈夫です。本気ですから」

「なお悪いわっ!!」

反射的に殴ってしまった。

そんな揉め事は関係ないとばかりに、エミルはのんびりと口を開く。

「これ、もしかして研究棟の奥じゃない？ 最近野良猫の数が異常に増えてて夜が五月蠅いってシゼがいったよ？ それにあの辺で飼うのは宜しくないよ……実験台にされたらどうするの？ そのマシロちゃんだけでも確保しないと」

いやもう、エミルの基準も考え直して……。

カナイの顔が一瞬にして蒼白になった。エミルの悪い冗談だと思うけど、カナイの肝はかなり冷えたようだ。直ぐにでも飛び出しそうなのを押さえた。

「貰い手探すの今度手伝ってあげるよ」

そつと声を掛けるとカナイは膝の間に頭を埋めてしまった。

「カナイさんは暫らく復活出来ないと思うので、先に進めましょう」
「エミルが今作ってる薬」

次は何を聞こうかと、思案し始めたところで、ぼそりと消沈中のカナイが口を開いた。エミルが「え？」と僅かに動揺を見せたが、鏡はあっさり検索をかけてしまう。

『読み上げますー』

「ちょ、別に変なもの作ってないよ？」

『……あとは、テングマダラダケを入れて煮詰めれば完成する。アルファにはいつも逃げられてしまうから、今回もカナイが……』
「テングマダラダケって、猛毒キノコじゃなかった？」

思わず口を挟んでしまった。アルファ以外が、普通にこくんと頷く。いや、その反応はおかしくないですか？

『――……と、なるはずだけど少し、分量を変えてみたらきつと新しい反応が見られると思う。九割は失敗すると思うけれど一割の成功が残ってる。僕はそれにかける。楽しみだ。――……エミルの次の薬は効果は不明。そして失敗は意図的ー、以上です』

――……意図的。

「やだなー、意図的なんて酷い。そんなはずないよ。一割の成功が残ってるからね」

……十分意図的です。

『あのー、皆さん。もーっと国の機密事項とか知りたくないですかあ？』

あまりに内輪的な秘密に飽きたのか、そう提案してきた鏡に、返答は私以外、全員一致だった。

「知りたくない（です）ね」

『どーしてですかー？』

「私の知らないことなんて、マシロの心とくだらないこと以外、ありませんし」

「僕、興味ない」

「王宮に戻れば嫌でも触れることだから今は知りたくないよ」

『隅っこの術師さんはどーですかー？』

カナイは顔を挙げることもなく片手を振って拒否した。まあ、この人たちがそんなことをわざわざ知りたがると思えない。

(4)

『じゃー、他に知りたいことを聞いてくださーい』

「エミルは何も聞いてないんじゃない？」

ふと気がついてエミルに振ると、エミルは、そういえばと頷きうーん。と唸る。特にこれといって知りたいことなんて早々ない。根本的に他人の秘密を探るような真似あまり好ましいとはいえないのだから。

「あ。そうだ……君はどこまでなら見通せる？」

『この世界のことなら何でも可能でーす』

「もっと広範囲は無理なのかな？ やっぱり駄目だよね？」

とてつもなく残念そーに口にしたエミルにプライドを傷つけられたのか鏡はすっと立ち上がり小さな手で拳を作る。

『私に不可能はあーりませーん。なんなりとお尋ねくださーい！』

「そう？ ありがとう」

……王子……

本気で敵に回さないほうが良いのはエミルだと思う。私が心の中で嘆息したことは誰にもばれていなくて良かった。そしてエミルは続ける。

「マシロの元彼ってどんな人？」

「えっ！！」

吃驚しすぎて声が裏返った。

『うっ！ まさかの異世界ネタですね…… ー』

いって鏡は黙した。

「そんなの全然知らなくて良い情報じゃない？」

国家機密よりも知りたいこととかじゃないと思う。価値なんてもつとない……。それなのに満場一致で知りたいらしい。こいつら……。

ま。異世界まで対応してないだろうし。高を括っていたら『一件、ヒットしましたー表示しますかー？』と聞こえてきた。表示するなっ！ と叫びかけたらブラックにあっさり片手で口を塞がれた。ふがふがと情けなく息が漏れる。

『トオヤ・オオサキ。こちらが画像になりマース』

うわあ……二度と見たくない顔を表示してくれちゃったよ……本当にこの忌々しい鏡めっ。手足と声がなかったらその場で割ってやるのにつ。

「なんか、フツーですね」

「想像と違うね」

「俺がいうのもなんだけど、地味だな？」

「ー……」

確かに、私も久しぶりに見て、地味だと思ったよ。なんであんなに好きだったんだろうと思ったよ。つか、現状が濃すぎるメンバーに囲まれているせいだとも思うよっ！ つか、カナイは隅っこでいじけてなよっ！ こんなときだけ戻ってきてさっ！

「何一つ負ける気がしませんね」

馬鹿にしているというよりは、どこかほっとしたようにそう口にしたブラックを振り仰ぐと、目が合つてにこりと微笑まれた。

——…う

じわじわじわーと頬が熱持ち、私は慌てて顔を伏せると膝を見つめた。

そんな私の頭を撫でつつ、ブラックは「さて、」と切り出す。

「他にないようなら、もう終わらせてはどうですか？」

『まだですー、まだまだ満足出来ませーん。何か聞いてくださいー』

「——…っていつてるし、まだ駄目なんじゃないかな？」

かくんつと首を傾げた私にブラックはくすくすと笑い「付き合ってたら、シル・メシア創世記時代までの秘密とかまで聞かないといけなくなりますよ？」と口にする。流石にそこまでお付き合い出来ない。

「心があるということは、それを抜けば済む話でしょう？ この間の幽霊屋敷の一件があるので破壊するという選択肢は、マシロの為に避けたほうが良いと思うので…」

「——…あ、もしかして、白化？」

私の行き着いた答えにブラックはにこりと微笑んだ。

というか最初から解決方法が分かっていて、この状況を楽しんでたのだと思うと非常に憎らしいっ！ 憎らしいけど、ぴくんつとそばだつ猫耳に怒る気は失せる。どうせ、獣フェチですからね。ふ

んっ。

「と、いうわけでこの鏡は私預かりで構いませんね？」

別に断る理由もない。他に解決方法も知らなければならぬ真実もないわけだから、みんな勝手にすれば？　という感じだった。些か私を感じたことと同じことを感じたのだろうカナイの不機嫌指数が上がっているが、あえて気がつかない。

「では、そういうことでお暇しましょう。マシロはこれをギルドに届けないと駄目ですよ。一緒にしてください」

ひょいと、真実の鏡をテーブルの上から取り上げて、カナイから依頼書を受け取ったブラックはさっさと部屋を出て行った。その後姿を追う形で私も皆にあとでね。と挨拶したあと、部屋を出た。

図書館を出るなら、廊下の突き当りが非常口兼私の出入り口になっている。それなのに、ブラックはそちらに背を向けて歩いていく。とことこと追いついた私を、ブラックはちらりと見て「少し人の居ないところへ行きましょう」と告げた。私は不審に思いつつも断る理由もない。

ブラックは中庭に出たところで、隅のベンチを私に勧めて座らせるとその隣に腰掛けた。

「どうしたの？」

素直な問いだと思う。

なのにブラックは私の質問になんともいい難い、曖昧な表情を取って、片手に抱えていた真実の鏡を膝に置いた。もう終わったのかとぐったりしている、魔鏡はちよっぴり可哀想な気もした。

「やる気出してください。最後に知りたいことがあるのです」

こつこつと鏡の縁を叩きそうだったブラックに鏡は喜色を示し『なんですかー?』と起き上がった。ブラックが皆を避けて鏡に聞きたいことってなんだろう?

興味有り気でブラックに寄り添い鏡を覗いた私をブラックはもう一度だけ見た。何? と問い返してもブラックは軽く首を振った。そして、鏡に問い掛ける。

「マシロのご家族の今を、見せてください」

―― ……え?

とくん……つと心臓が高鳴った。

『また異世界との交信ですかあ? なかなか難しい質問ですー……』
「出来ませんか?」

責める口調ではないことが不思議なくらい、落ち着いた声だ。どこか愁いを帯びている。どうしてブラックがそこまで……

「無理しなくて良いよ」

「先程は出来たのですから無理ではないでしょう? 私では手の届かない場所なのです。貴方もただの魔法具に戻ってしまっっては、もう二度と異世界と繋がることはないでしょう。無理をおしてください

い」

鏡は暫らく唸っていた。鏡面も明滅を繰り返し、辛そうにも見える。情報を引き出すのと動画では容量の差でもあるのだろうか……。

『――…、一件取得出来ました。ただ、音声は確保出来ませんでしたご了承ください』

その言葉に、私とブラックが頷くと『では、再生します』と僅かに揺らいだ鏡面が、懐かしい顔を映し出した……。――。

私は思わずブラックの腕を強く掴んでいた。

「すごい」

「壊さなかったんだー」

無事に普通の魔法具へと戻った鏡をギルドに届けた私は、管理者にあるまじき発言に迎えられた。明らかに壊すと思われていた。国宝級の魔法具を……。

「兎に角、これで依頼は終了だよね」

ほら早く手続きしてと促して、さくさくと完了手続きをしてもらう。そして、謝礼も受け取った私は事務所を出た。

出てきた私の足元に黒猫が擦り寄ってくる。私はそれを慣れた手つきで抱き上げて、ぎゅっと抱き締める。猫は耳を後ろへと下げ額を摺り寄せてくる。

私は通いなれた……といえるレンガ道へと踏み出した……。

「―― ……みんな、大丈夫そうだった」

軽く双眸を伏せて眩き、ぎゅうぎゅうと擦り寄ってくる猫の額を感じて、持ち上げる。不安そうに見上げてきた猫に私は微笑んだ。

「笑っててくれて、良かった…… ――」

鏡が映し出してくれたのが真実かどうかなんて確かめる術はない。だけれど、私が目にした一場面だけでも……お父さんも、お母さんも……臣兄も、郁斗も……なんとか笑えていた。時を止めては居なかった。そのことに私は救われた。

「ねえ。ブラック……」

ふわふわと頭から背に掛けて撫で付けながら、ぽつりと声を掛ける。

「私ね、ブラックが獣族じゃなくても、

今と変わらないくらい好きだよ…… ――」

(1)

今日は久しぶりのデートだ。

それが世界のルールだからといいながら、ブラックは割りと真面目に仕事をしている。いや、あれが仕事をしているってことは……正直良いことか悪いことなのかは私には分からない。寧ろ分かりたくない？

本当に猫のように気まぐれだから、いつ会いに来てくれるのかも分からない。分からないから——会えるときはとても嬉しい——

「マシロ」

「何？」

「私は猫なので、猫舌なのです」

「うん。知ってるよ。ざりざりしてるよね？」

「いや、そちらではなくて……ええと、熱いのはちょっと、というかホットチョコは苛めだと思うのです」

そうだねえ。しかもブラックは猫の姿だし、銀のスプーンであーんしたら熱いよねえ。私にSっ気はないと思ってたけど、ブラックが困る姿はとても可愛い。不安げに揺れてる尻尾とか心細そうに見上げてくる瞳とか。最高に可愛い。

苛めたくてむずむずする。

「ありがとうございます」

中途半端な時間に来るものだから、一緒にランチというわけにも行かなくてカフェでお茶になったわけだけど……一応、忠告を真摯に護って、明るいうちは猫の姿で居るのだから行動範囲を限られるしね。ペット同伴可はこのカフェのうりだ。

「支払いが私にするのに……」

「猫が？」

「う」

「私この間ギルドランクを上げてもらったの。それでね、この間割りの良い仕事があつて、ちよつとあつたかいんだ」

リアル私の悪いところ。あつたら使いたい。いや、ちゃんと悪いと思つて貯めてるのは貯めてるんだけど、実際どのくらいの額ブラツクにお世話になってるのか分からなくなった。――聞いても本人は答えないし、王子様と騎士は金銭感覚狂っちゃってる系で、細かいこと気にしないし。一般人に見える術師さんは逆に細かすぎて最終的に沢山。と答えられるし。あれつてつまり説明が面倒になつたつてことだよな。明らかに――

そのあと消耗品の買い足しで、エリスさんのところへいったらおまけにクッキーを貰った。

エリスさんが焼いたらしい。本当に何でもこなす美人さんで頭が上がる。

「えーっと、他に足りないものなかったかなー？」

広場のベンチを陣取つて、頂いたクッキーをぱくりとしながら本日のお買い物リストを確認。今日は細かいものばかりだから、大した荷物にもならなかった。最初は渋ったけど私が食べたので仕方なくブラツクもクッキーを食す。

膝に猫を抱えてのんびりなんてどこかのご隠居みたいだけど、そんなに悪いものでもないと思う。

手持ち無沙汰だった私はクッキーの袋を縛っていた赤いリボンをブラックの尻尾に結んだ。やめてくださいとはいわれるけど、ブラックは私に爪を立てたり噛み付いたりはしないので――猫じゃなくて本来人だから当たり前だけど――続行する。

黒い尻尾に真っ赤なりボン。なかなか愛らしいと思う。

「それにしても、この季節って良く分からないな――」

「気まぐれですからね。そういえば今年は寒くなるのが遅いような気がします」

気まぐれな季節ってなんだよ。

思わず突っ込みたくなるけどそれがこの世界だ。四季はあるにはある（らしい）が期間がまちまちなのだそうだ。そして、今年はなかなか寒くならない。なり始めたらあつという間というのも聞いたけど……。

「ついでだし、市も見えていこうか？」

「女性は総じて買い物が好きですね」

む。誰と比べているんだ？ 面白くない。別にこうなるまでの女性遍歴がどうであっても私は問わないけど、誰かと並べられるのは正直気分良くない。

「行く」

ブラックを降ろすことなく、すつくと立ち上がる。膝から無残にも落とされたブラックは猫らしく、すどどと軽やかに着地する。そのくらい分かってるから確認もせずに私は歩き出した。

そういえば、もしあのまま私が元の世界に居たら、もう寒い時期だろうしクリスマスシーズンとかかもしれない。

いつもお世話になってるし、何かみんなにプレゼントでも買って帰ってあげようかな？

市はいつも通り買い物客で賑わっていた。夕時が近いので食料品関係の店が盛況だ。だから、私が見ていた日用品とか雑貨とかのお店はそんなにごった返しているというふうではない。

「これカナイが好きそう」

用途は不明だが、ちまちまこちよこちよした細工物だ。露天の店主が私が目に止めたものに気がついて説明してくれる。

「凄いでしょー。細かいでしょー？　これね、底にネジがついていて回すとね……」

いいながらネジを巻いてくれる。平らなところに置けば、不細工な音を奏で始めた。オルゴールの出来損ないみたいだ。でも、中々くるくる廻ってる小さな飾りとか、このどこかガラクタ染みているところは絶対気に入ると思う。

普通に売れないだろうその一品を買い取って、私は次の店に。アルファとエミルへのお土産、違う、プレゼントを物色。

う。女の子はやっぱり買い物が好きなのだ。認めたくはなかったけど、ブラックのいうとおり。曲げた臍が散財していく内に治ってしまった。

「ねえ、ブラックにも、何、か……あれ？」

……逸れた。

一回も振り返らなかったから全然気がつかなかった。きよろきよろと辺りを見回すけど、人ごみの中で猫一匹探すのは困難だ。

まあ、ブラックのことだしひょっこり出てくるかな？

「マシロ？ それ買うの？ どうするの？」

丁度私が居たのはティンの露天の前だった。ティンの店は基本的に金属・魔法石加工がメインだけど、それだけは違っていたから目に付いた。

話によれば、それはティンの作品ではなく委託販売というやつらしい。

「貰う」

「んじゃ、マシロ用ならサイズ調節してやるさ。腕出しなよ」

「良いよ、このままで」

私はティンに簡単に包装してもらって店を離れる。足元に注意を払ってはいたけどブラックの姿がやっぱりない。折角きてくれたのに勝手に臍を曲げたのが悪かった。とは思うけど、居なくなる必要はないと思うしそれならそれでひと声掛けてくれても良いと思う。

八つ当たりなのはわかってるけど、ちょっと酷い。

市の外れまで出てきて、ブラックを探す。最悪一人で帰っておい
たほうが良いのかなあ？

(2)

「はっけーんっ！」

——ぐえっ！

どうしようかと迷っていると背後から抱きつかれた。この高さは、ブラックじゃない……。

「アルファ……」

「そうですよ。どうしたんですか？ ブラックと出て行っただってエミルさんに聞いたんですけど、一人？」

ひょいと私から離れて顔を覗き込んでくるアルファに私は眉を寄せる。お説教モードだ。

「あのね、アルファ、背後からいきなり抱きついてくるのはやめなさいっていつてるよね」

「え、でも、女の子に声を掛けるときはそうするのが普通だって教えてもらったんですよ」

「……因みに誰情報？」

「ラウさんです」

——……あの似非教師め。

私の眉間の皺は深まる一方だ。だけどそんなことは微塵も気にしないのがアルファの良いところだ。

「僕、お遣い頼まれてこっちまできたんですけど、一人なら一緒に

帰りますか？ そろそろ市も閉まっちゃうし、マシロちゃんの一人歩きは危険ですよ」

何気に私限定にするのはどういう意味だろう。アルファのことだから、戦えるかどうかというのが基準だとは思うけど、ちよつと失礼だ。

「多分、もうすぐブラックが来るから遠慮するよ。そうだ、良かったらこれ持って帰って預かっておいてくれる？ 戻ったら、取りに行くから」

買い物袋をアルファに軽く持ち上げてお願いすると、良いですよ、とにこりと天使の笑みで受け取ってくれる。

「マシロちゃん居ないとつまないですから、早く戻ってくださいね？」

ぶんぶんっと手を振ってそういつてくれたアルファに私も分かったと手を振り返す。さて、断ったのは良いけど待ち人は来ず。かなあ？ 日が暮れるとこんな季節でも冷えるし、帰ったほうが良いのかも、というか、良いんだよね。

アルファのいった通りこの辺、市が閉まった後はあまり治安が良いとはいえないし。ぼちぼちと市が閉まっていくのを見て私は頷く。

「あ、買い物終わっちゃいましたか？」

「……遅い」

私が一步帰路に踏み出すと声は掛かった。足元を見ても猫は居ない。隣に並んだ姿をちらと見上げる。待ち人だったのだけど、何の

気なしに出てきたのが癪に障った。

「すみません。少し野暮用に巻き込まれちゃって、えーと、その、楽しそうにしてらしたので、ちよつと抜けてすぐ合流するつもりだったんですけど、えーと……時間が掛かっちゃって……怒ってます？」

「別に良いよ。帰るところだったから」

「あ、えっと、送ります」

「――……そうして」

思わず拒絶しそうになったけど、今日はデートだったということ思い出した。なんとか怒りを押さえ込んで頷いた。でも気分が悪いから手を取ってくれようとしたブラックを交わして、つかつかと足早に帰っていく。

視界の隅でブラックがしょぼんとしたのが見えてしまった。

う……。罪悪感。

「ねえ、マシロ。食事をして帰りませんか？」

「いい、寮で食べる」

「ええと、じゃあ……ええと……本当に帰っちゃうんですか？」

誰のせいだと思っているんだっ。誰の！

なんだか私が悪者になったような気がする。私、悪くないよね？
悪いのかな？ 心狭いかな？ ブラックに常識を求めるのが間違ってるのかな？

いやいやいや……。ここで甘やかしては駄目だ。うん。今後のためにならない。

うん。……うん。

「―― ……遠回りして帰ろうか？」

はー……負けた。負けるよね？

だって、気がついてるのかついてないのか知らないけど……リボン残ってます。噴出すのを我慢するだけで精一杯です。どうしよう、これ、計算だったら。

そんなことを思いつつも恐る恐る手を伸ばしたブラックの手を腕ごと取った。

「―― ……というのがあってね」

「なるほど。凄い篤志家の方がいらっしゃるんですね」

いうと思った。いうと思ったよ。剣と魔法の世界のクセになんてロマンのない世界なんだ。私は道々ブラックにクリスマスの話をしていた。大抵、無知識の人に伝えればそういう話になるだろうけど。

「マシロも貰っていたんですか？ そのサンタクロースから？」

「貰ってたよ。でも私はいつもはお父さんが、都合がつかないときはお兄ちゃんが私の枕元に置いてくれてたのを知ってたんだけどね。なんとなくこそっそりしてるところが可笑しくて、突っ込む気にはならなかったな。だから結構長い間騙されていたと思うよ」

私の話に益々疑問符ばかりが浮かんだのか、ブラックは可愛らし

く首を傾げる。

「子どもには夢を与える話なんだよ。本当はね？　まあ、私くらいになって信じてる人は居ないけど、でも變わりに大切な人と過ごせる日なんだよ。感謝とか愛とか？　を込めてプレゼントを贈ったり、プレゼント」

そうだった、すっかり忘れるところだった。私はアルファに預けた荷物から抜いておいたものをポケットから抜き出した。

「ブラックって右利きだよな？」

「使おうと思えば両方使えますけど？　急にどうしたんですか？」

「両方か、じゃあ、左手で良いや」

掴まえていた腕を持ち上げえてそつとティンのお店で買ったスレットを宛ててくると撒くと、止め具でかちりと固定した。

(3)

「掴まえた」

「え？」

「ふふー、これね。この小さなピンがないと外れないの」

素材は皮だけど、コーティングしてあるから水も大丈夫っていった。鍵はちっちゃなヘアピンのような形状のものでこれを一旦抜いちやうと同じものでないと外れないらしい。

「なるほど」

いいつつも私の巻いたブレスレットを眺めながら、ちよっぴり不思議そうだ。

「拘束具」

「違うからっ！ そんないい方すると怪しいからっ！ プレゼントだっていつてるじゃんっ！」

ぼそっと呟いたブラックの台詞に全力否定した。真っ赤になってしまった自覚はある。いや、私の発言も拙かったのだと思う。思うけどいうにことかいて拘束具はないっ！ もうっ！ と怒った私にブラックはふわりと瞳を細める。

う、これは確実にからかわれた。

私がそれに気がついてたじろぐとブラックは艶っぽく溜息を吐く。何？ 何かまだ問題があるの？ 首を傾げて見上げた私に瞳を細めたあと、心底困ったという風に改めて嘆息する。

「困りました。私には今お返しがありません。ないので、ここは身体で奉仕させて」

「しなくて良いからっ！ しなくて良いからねっ！」

全力否定したのに、そんなつれないこといわないでください。と私の手を取り、唇を寄せる。そのまま、つつつと唇を滑らせ指先を口内に入れぺろりと舌を這わせる。

ひうっ！

ぞくぞくと、背筋に熱が走り、私は煽られる羞恥心に顔を伏せる。

「ブブブラック！ 道端！ まだ、明るいーっ！」

「路上でなければ良いのですか？ 暗くなれば良いのですか？ 誰も私たちを気に留めたりしませんよ。誰にも私たちは見えません」

ブラックが声を発するたびに、吐息が指先に絡んでいく。

誘いこむように、堕とすように指先に舌を滑らせ、指の間を舐められると、膝がかくんと折れそうになる。私が弱いのを知っていてやってる確信犯だからムカつく。

ムカつくけど……駄目だ。負けちゃう。

じわりと目尻に生理的な涙が浮かぶと、ぐいっとな腕を引かれて抱き留められる。そして可愛らしく耳元にちゅっとな口付けられ、腕を解かれる。

「すみません。嬉しすぎて、つい苛めてしまいました」

ほんの少しだけ頬を上気させてそう口にしたブラックに私は口を

ぱくつかせたが、文句もそれ以外も音にならなかった。

「続きは屋敷で……と、これも駄目、なんですよ？ 明日は授業があるんですよ？ 学生は勉強が本分なんですよ？」

駄目なんですよ？ と重ねて、ゆらりと尻尾を揺らす。尻尾が揺れる。リボンがなびく。ふっと口角が上がるのを我慢できない。間抜けすぎる。

そして、私はここで駄目だといわないといけない。明日は授業だし、アルファに荷物を預けっぱなしだし……でも……。

「ちゃんと、授業に間に合うように送ってよね」

―― ……負けてしまった。

私の返答にブラックの表情がぱあっと明るくなった気がした。

降参です。もう、可愛いよ、この人……。

「マシロさっきのピン貸してください」

「ん？ はい」

あ、取り上げとくつもりだったのに、あっさり渡してしまった。そう思ったことに気がついたのかブラックは、ふふっと楽しそうに笑って、ピンを両手で包む。次に手を開いたときには、鍵を開けることくらいしか出来そうになかったピンは通常仕様のヘアピンくらいの大きさになっていた。

「じっとしててくださいね」

そして、そっと私の髪にとめてしまう。
すると髪を撫でていく綺麗な指先……傾いた夕日に彼の腕の
ものがキラリと光った。

「ずっと掴まえていてください」

ずっと……と、反芻させ細めた瞳は少し寂しげだ。もうどっぷりと沈んで、掴るとか掴らないとか以前の問題になってしまっている
ということ、一体どうすれば伝えられるのだろうか？

「放さないから、覚悟してね……」

ちゅっと背伸びして軽く口付ける。私の精一杯の頑張りだ。それは
楽しみだと微笑んだブラックに笑って返す。

再び並んで歩き始めた。もちろん、手も繋いで、心もきつと繋が
っているはずだから。

「ねえ、絶対ワザとだよね？」

「何がですか？」

「尻尾のそれ」

「ああ……マシロが結んでくださったのですから、マシロに解いて
もらわないと駄目かと思ひまして」

「――……ふーん……じゃあ、そのまま」

「構いませんけど、マシロ笑いを我慢出来ますか？ 途中で噴出し
たらいくら私でも臍を曲げますよ？」

「ごめんなさい、外します」

するりと尻尾から取り除いたりボンを指に絡める。まるで赤い糸のようだとか思ってしまう辺り、やっぱり私の方が囚われていると思う。

【余談】

「ちょっとーっ！ マシロちゃんが帰ってこないんですけどっ！」
「あー。僕のところにわざわざ傀儡が来たよ。授業には間に合うってさ」

それからといって、預かっていたマシロの荷物を解き

「これはプレゼントだって言ってたよ？ サンタクロースとかいう篤志家からの」

「誰それ？」

「僕に聞かないでよ。メッセンジャーが言ってただけだから」

「マシロちゃんの友達ですかねえ」

謎はへんてこな方に深まっていた。

(3) (後書き)

※ メリークリスマス♪

クリスマスの季節だし真白からブラックへ何か贈り物をVという
リクを頂いて、もさもさと書かせていただきました。

少しでも楽しんでもらえれば嬉しいです。ご愛読ありがとうございました。

もし良かったら感想など寄せていただけるととっても嬉しいです。

(1)

「あ、アリシア。何作ってるの？」

私は偶然実習室の前を通ったときにアリシアを発見した。アリシアは、ぎくりと肩を強張らせたけれど、声の主が私だと分かった。「ああ」と頷いた。

「薬よ。薬師が作るのは薬でしょう？」

「いや、まあそうだけども……物凄い広くない、その答えて」

それに薬の割りに甘い臭いがしている。薬というよりは美味しそうな香りだ。

「チョコレート？」

鍋の横で、先に出来上がったのか、可愛らしい形をした茶色の形を取り上げる。アリシアはちらりとその様子を見て「別に食べても良いわよ」と告げた。

私はそうなんだ。と、喜んで一つぱくり。チョコレートというか……なんだろう、マカロンの生地みたいにふわふわ、かしかしだ。不味くはないけれど、これは美味っ！ という程ではない。アリシアが作るものとしては少し珍しいかもしれない。

ぺろりと、手についたパウダーを舐め取ると、目を丸くしているアリシアと目が合った。首を傾げれば「そう、そうよね」と勝手に納得している。

「それ、別に毒じゃないけど、薬といったでしょう？ 効能を聞く

こともなく口の中に入れるのはどうかと思うわ」

はあと嘆息しつつそういったアリシアに、私はやっと気がついて「えっと、何？」と聞き返す。

「何？　じゃないわ。貴方本当に無防備ね？　まあ、重ねるけど、毒じゃないし良いんだけど」

「ええっと、本当になんなの？」

「それ、酔いにくくするのよ。今度、パーティにお呼ばれしているのだけど、あたしあまりお酒は好きじゃないのよね。だから……」

ふーんっと頷きつつ私はもうひとつぱくりと口に入れた。美味しいとは思わなくてもなんとなくクセになる味だ。また手を伸ばしかけたら、アリシアに「もうっ！」と取り上げられた。

アリシアってちょっと可愛い。

「一応前にも作ったことのあるものだから効き目は確かだと思うわ。でーもっ！　そんなにパクパク食べるものでもないっ！　もう！　早く貴方はギルドの仕事でもやってらっしゃいっ！」

ぐるりとアリシアに身体を反転させられて、どんっと背中を押された。

私は、笑いながら数歩よろけたけど、分かった。と頷いて実習室を後にする。

普通に飲む機会なんて学校にいる間は殆どない。種屋に戻ったときに晩酌程度口にするくらいだ。だから別に良いと気にしなかった。

「―― ……これなに」

「樽」

「いや、それは見れば分かるよね？」

暇つぶしにと訪れた、カナイたちの部屋の中央に、でんと置かれた酒樽に眉を寄せた。エミルはその樽に寄りかかりつつ説明してくれる。

「去年の葡萄酒が美味しかったという話をこの間したら、届いちゃったんだよ。これ、今年の新物だって……」

「いや、普通一本二本じゃない？」

「フツーじゃねえんだろ？ 王宮の連中は」

「う、うーん……ほら、大は小をかねるっていうし、それじゃないかな？」

違うと思う。違うと思うけど、エミルを責める気にはどうしてもなれない。人徳だ。

「僕、食堂で何か作ってくれるようにお願いしてきますね。今夜は屋上庭園でも月見しましょう？」

「月見？」

「マシロちゃんの世界にはそういう風習があるって聞きました」

いったけどさ、アルファのはそれ飲むのが中心でしょ？ 酒盛りしたいだけだね。月見の季節でもないと思うし。

嬉々としてそういつて部屋を飛び出したアルファは止める隙もない。私とエミルは顔を見合わせて肩を竦めた。

ま、今日の私は酒豪だし。いっか。

シル・メシアの良いところは、天気が安定していることもあると思う。急に予定を立てても雨で中止。なんてことにはまずならない。今夜もばっちり晴天で、誰も居なくなった屋上庭園からは二つ月が綺麗に望める。

いつもの四人なのだけど、並んだ料理は何人前だろう？ 夕食だってちゃんと食べたのに……。石畳の地面に大きな敷物を広げて並べられる料理。大半はアルファが食べてしまうのだということは分かるけど。

「最後にメインも持ってきました」

「ひっ！」

その声に振り返れば、アルファが樽を軽々しく担いできていた。「マシロちゃん、ちよつとどいて」といわれてベンチにぼんやり腰掛けていた場所を譲ると、そこへ樽を据える。

「じゃあ、とりあえず乾杯しようか？」

エミルにそういわれてカナイはグラスを出すと、ワインを注いでいく。透明度の高いグラスに静かに注がれていく赤い液体はとても綺麗だと思う。

みんなにグラスが行き渡ったところで

「かんぱーい！」

ちんつと涼しげな音を鳴らした。

ちよつとグラスに口を添えれば、鼻先に葡萄酒特有の濃い香りが入ってくる。良い香り。と思えるくらいには大人になったと思う。そのまま傾けて、口に含んだらふわりと柔かな味わいが口内に広がる。

「美味しい」

素直に口にした私にエミルもにこりと微笑んだ。

なんでこんなことになってしまったのか。

「マシロちゃんと対決っ！ チキチキ飲み比べレースっ！」

わーい、ぱふぱふ……。

いまいちのりの悪い私の合いの手にアルファは不満そうな顔をしたものの、ま、いいや。で機嫌を直し、ギリギリまで注がれたグラスをはいっと渡してくる。

私はそれを睨みつけつつ。うーっと唸ったが引き返せない。どう考えても酒豪と誉れ高い、いや、誉ではないと思うけどアルファを相手に飲み比べなんて尋常な沙汰じゃない。

どうしてそれにカナイもエミルものつかったのか……どういうわけか、勝てば私が何か一つお願いを聞いてあげるということになってしまったのだ。

もう、ベタ過ぎてどうしようもない。でも私も素直に商品になる気もないので参戦する。

ここにもしブラックが居たら、彼は下戸だから不満を零しただろ

う。居て欲しかった。もういつそぶち壊す勢いで止めて欲しかった。はあと嘆息したのも束の間、カナイが審判代わりに作り出した、可愛い駒鳥さんの傀儡がスタート合図を出す。

ま、私は今日醉わないからね。勝つ自信があった。

「だ、大丈夫？ エミル。顔色が赤から青になってるけど」

カナイは早々に離脱。面倒になったらしい。そんなところだよな。

「大丈夫じゃ、ない」

頑張っていたのだと思うけど樽で飲めるといわれるアルファには足元にも及ばない。エミルは、すつくと立ち上がって、一言だけ詫びてその場から消えてしまった。

――…王子様離脱。

「マシロちゃん。なんだか今夜やけに飲みますね？」

「うん。美味しいよね」

一騎打ち。まあ、アルファが勝ったとしても無茶振りはしないと思うけど、勝負は負けるよりは勝ったほうが良いだろう。

月見のはずが誰一人月を仰がない。気の毒な限りだ。

私は、もう一杯注ぎ足してもらって、それに口をつけると夜空を仰いだ。頬に触れる風が気持ちいい。

「あ、あれえ？」

そして上がったアルファの声に視線を戻すと、アルファは樽についたコックを捻りつつ「なくなっちゃいました」と肩を竦めた。ということとは、終わり、で、良いんだよね。

「引き分けかな？」

「ですよねえ。でも、僕マシロちゃんがこんなペースで飲めるなんて知らなかったな」

にこにことそう口にしつつ、アルファはころりんっとその場に転がって丸くなる。こんなところで寝ると風邪を引くといいたかったのに、一足遅かった。

(2)

私は自分の防寒用にと持ち寄っていたブランケットをアルファのお腹に掛けてあげる。アルファの寝ている姿は子どもみたいだ。

「ん、もう、終わったのか？ 早かったな？」

庭園の木に寄りかかって転寝していたカナイが、のんびりと戻ってきて寝ているアルファを覗き込む。

「こいつの一人勝ち？」

「まさか、引き分けだよ」

にこりと告げれば、信じられないという風に目を見開いたけど傀儡が「そのとおりです」と囁いたので、へえと感心した。

「まあ、私はズルしたんだけど、ね？」

いって笑えば、きょとんと問い返す。別にこうなることを予測して口にしていたわけじゃないけど、一応、申し訳なさそうに口にするれば、カナイはぎよつとしたように目をむいた。

「どうしたの？」

「い、いや、どうしたのって……おま、お前、その効果いつ切れるんだよ。いつ飲んだんだ？」

「え、午後だけど聞いてなかった……。どのくらい、か、な……」

いうと同時に消灯の時間を知らせる鐘がどこか遠くで聞こえた。

「拙いな、お前本当に薬師かよ……」

心底呆れたというようなカナイの台詞に、気分を害する。勉強不足は自分でも多少は分かってるけど、それをそんな風に突くなんて酷いと思う。

「う、うわっ。泣くなよ？」

泣くわけないじゃん！　ごしつと顔を拭うと少し泣いてた。あれ？　私は首を傾げる。頭を動かすとぐらりと身体が大きく揺れた。なんとかカナイが支えてくれたから倒れなかったけど、地面が私と仲良くしたがつている。

目頭が熱い。頭に心臓があるみたいにとくどく強く脈打つ。もしかしくなくても、酔いが廻って、き、た。

「大丈夫か？　水とか、そうだな、うん。水でも」

いって慌ててカナイは空になったグラスに水を注いで持ってきてくれる。飲めるか？　と私の両手にグラスを握らせてくれるけど……なんかもう、ぼやんとしてて、飲み食いは無理。いらない、と首を振れば益々強い波に襲われる。

カナイは、仕方ねーな。と眉を寄せたものの、それ以上無理に飲ませようとはしなかった。ぐらぐらしている私を片腕で抱きとめてくれている。

ぶつぶついつてるけど、やっぱり優しい。

「カナイってさ」

「な、なんだよ」

「カナイって結構男前だよね？」

「は、はあ？」

私の目にフィルターでも掛かっているのか三割り増しに男前に見えると思う。

「うん。モテるのも今やっと分かったような気がするよ」

「おい、お前大丈夫か？」

「分かんない。でも気分は良いよ？　なんか凄くふわふわして、しあわせーな感じがする」

「完全に酔ってる。完全に酔っ払いだな？　よし、もうお前部屋に、いや、でも、酔っ払い放置するのは拙いか、というか、エミルはどこに消えたんだよ」

「むーっ。私が居るのに他の人の話？」

くいくいと袖を引くと、カナイは真っ赤になって叫んでいた。

「お前は誰だっ！」

どうやらカナイの方が随分と酔っ払っているらしい。

「私は、月見里真白です。よろしくお願いします」

「―― ……そういう意味じゃ、ねーだろ」

ごによごによと何かいいつつ、頭を抱えて、はあああつとふっかい溜息を吐いたカナイを見上げる。私は何か、彼を困らせるようなことをしてしまっただろうか？

「私、何か迷惑、掛けてる？　困ってる？」

恐る恐る手を伸ばしてそっと頬に触れれば、カナイは一瞬びくりと身体を強張らせたが諦めたのか、ゆっくりと首を振った。

「困ってない。別にもう、この際迷惑でもない」
「良かった」

ほっとして、息を吐くと熱い。さっきから地面がぐらぐらと揺れているし、よくそんなところでアルファは寝てるしカナイは普通に立ってられるものだ。

天才のつくりは常人とは異なるのだろうか？

「お前、大丈夫ならそこらへん座ってろよ。俺、医務室からなんか貰ってきてやるから」

くるりと私に背を向けてしまう、カナイを反射的に掴まえた。

「置いていかないで」

「いや、直ぐ戻るから。お前そのまま寝たら確実に明日に残るだろう？」

「置いていかないで」

「あんま動くと酔いが廻るから」

「置いていかないで」

「――……」

「置いてっちゃやだ」

「……ああ！ もう分かったよ分かったっ！」

良かった。そう思ったら自然と頬が緩んでいた。顔を逸らしたカナイの頬も赤い。きつとお酒のせいだろう。

ぐらぐらとする身体を支えるためにカナイの腕をがっしりと掴む。

無駄にデカイから大丈夫。これで私は倒れることはないだろう。ふうと一安心して、そのまま体重を預けた。

「お、おい？」

「動いちゃ駄目」

「っ」

「好きだよ、大切にするから動かないで」

「は？ あ、え？」

なんだか目がしょぼしょぼしてきた。地面が私を好きだといって離さない。

ずるりと膝から落ちそうになれば、ぐっと抱きとめてもらった。

「何やってるのカナイ？」

聞き覚えがある声だ。その声に反応して私の支えが硬直した。

「いや、これはだから、その、別に何も」

「離しちゃ駄目だよ」

両手を私から離してばたばたと振ったカナイに、ぎゅううっとしがみ付く。支えが動くとは何事だ。

「カナイ？ 酔ってるからって女の子に何しようとしてるの？」

「なんもしてねーよっ！」

「嘘っ！」

「ちょ、待て、マシロ！ 嘘ってなんだよ！ 俺何もしてないだろ」

「ふーん……なんか詳しく聞かなくちゃいけないことが出来たようだよね？」

エミルの笑顔が怖い。

「さて、それで？ 誰がマシロにこんなに飲ませたんですか？」

カナイがエミルにいい訳している間に私の大好きな声が聞こえた。反射的に振り返るとぐらりと足元が覚束ない。でも、地面と仲良くなることはなく、今度はいつも一番傍にある香りに包まれた。

「ブラックー」

私に尻尾があれば機嫌良くぶんぶん振っていただろう。

「ブラック、今日はね、王宮のワイナリーから葡萄酒が届いてね、もののすごく美味しくて、それから、料理も一杯作ってもらってすごい美味しくて、凄いい好きーっ」

好き、好きーっ。どんなにいてもいい足りない。重ねる度にふわふわと頭を撫でられて凄く気持ちが良い。夢見心地とはこのことか？

「マシロは、酔うと告白体質になるんですよ。きっと。先日はうちの柱時計に愛を語っていました……」

ブラックは、はあと溜息を零す。

「ブラック？」

見上げれば私は不安そうな顔をしていたのだろう。ブラックは目を合わせるとにこりといつもより優しいくらいの笑みを浮かべてくれる。

ほっと胸を撫で下ろしてもういちどしがみ付く。

「というわけですから、今のマシロに何かいわれていたとしても、真に受けなくてくださいね」

「―― ……受けてねーよっ！」

「カナイさん顔赤ーいっ。気持ち悪ーい」

「お前は寝てろ！」

「だって、ブラックの気配がしたんだもん。起きますよお」

なんか、みんなわちゃわちゃうるさい。 ……うるさいけど ……なんか楽しい ……なんか幸せ ……

「ふふ ……みんな、大好き …… ――」

そして、眠い……。私は一番安心安全な場所で瞼を落とした。

(3)

ぬっくぬく、ふわふわ……

「―― ……なんで？」

ふっと目を覚ますと目の前に黒猫が居た。いや、普通に黒猫で、理解できるのだけど……いつ来たんだろう？ ていうか、私部屋に戻ってる。あれ？ 月見はどうなったんだっけ？

「ブラック？」

丸くなっている身体を撫で付けて問い掛ければ、頭を持ち上げて硝子玉のような瞳が見上げてくる。

―― ……可愛い。

即座にハグしたくなるくらい可愛い。でも抑えろ私！ 頑張ったっ！ ……っというか

「あ、たまいたーい……」

「それはまあ、アルファと飲み比べすれば頭の一つも痛くなるでしょうね？」

苦々しくそう答えつつブラックは身体を起こして、人の形に戻りベッドの隅に腰掛ける。あー、なんとなく思い出した。アリシアに

貰った薬があるから酔わないと思って、がんがん飲んだら薬が切れて……わけが分からなくなった。

はあと嘆息した私の顔をブラックが覗き込む。

「私、変なことしてた？」

「可愛らしいことはいってましたけど……と、まあ、それは良いとして、女性が記憶をなくすまで飲むのはどうかと思いますよ？」

「……ごめんなさい」

「飲むなどまではいいませんが、せめて飲みすぎるなら私の居るときにして下さい」

ぴんつとおでこを弾かれて、私は肩を落とす。間違っていないし、ブラックのいうとおりなんだけど……。ぬー……。

「頭痛とか残っていませんか？ 気持ちが悪いか？」

「気持ちは悪くない……ちょっと、頭が痛い……自業自得？」

しょぼんとそう口にした私にブラックは、ふっと笑いを零して「そんなことありませんよ」といつてくれた。そんなことあると思うけどやっぱりブラックは甘い。

「顔上げてください」

いいながらブラックはそっと私の顎に手を添えて上を向かせる。そして、少し苦いですよ、と前置いてから何かを呷ると唇を重ねた。

「――……っん」

しっかりと口を塞がれて、ゆっくりと液体が流し込まれる。思わ

ず逃げそうになった私を掴まえて、拒むことは出来なくなる。流れてくるものは本当に苦い。両目をきゅっと閉じて眉間には深い皺を刻んでしまう。

—— ……ごくん……

息苦しさに耐えかねて飲み下すと、僅かに唇が離れて「直ぐに楽になりますよ」と紡がれる。そのまま解放してもらえるのかと思ったら、再びキスを重ねられた。

深く浅く何度も重ねられる口付けに浮かされて、アルコールが残っていて朦朧としてしまうのか、それともキスに当てられているのか分からなくなった。

「ふ……っ、う……」

ブラックの首に腕を絡ませてキスに応えれば、そのままベッドに押し倒される。熱い息を吐き、声を詰めたあと緩められた首元が冷たい外気に晒されて、ふと我に返る。

「っ！ ちょ、駄目っ」

「嫌やです」

「嫌やって、ちよっと、駄目だよ。ここ、寮っ！」

普段なら割とあっさり引いてくれるのに、嫌だと繰り返す私から自由を奪って、首筋に強く口付ける。

「……んう」

ちりつとした痛みが走る。きっと所有物のように赤い華が刻まれただろう。ブラックは滅多に見えそうなところにはそんなことしな

いのに……。

「ブラ……ック……」

なんとか頑張って呼びかければ、ぎゅぎゅーっと私を抱き締めたまま「なんですか？」とくぐもった声を出す。

「どうした、の？ 私、やっぱり何か……」

「別に大したことないです。大したことはないですけど……分かりません」

うん？ 私はもっと分からない。もっと分からないけど、とりあえず、離してもらいたい。多分不躰に入ってくる人は居ないと思うけど、いや、寧ろワザと入ってきそうな気がしないでもない。

恋人同士とはいえ、いや、だからこそ、組み敷かれて居る図は宜しくないだろう。

「えっと、その、そろそろ退いてもらえると、その、ほら、屋上片付けないと」

「カナイが罰ゲームで片付けました」

罰ゲームっ？！ 私の記憶がない間に何があったんだっ？！

「なんだか変なんです。胸の奥の辺りがきりきりするし、なんだか落ち着かなくて」

「――……ええと、風邪、かなあ？」

「分からないです。でも、マシロを抱き締めてると落ち着きます。だから、離れるのは嫌です」

「あー、じゃあ、猫の姿で」

「嫌です」

ああ、もう、そうだね。そういい出したら聞かないよね。梔子でも動かないよね。

「仕方ないな……今日だけだよ。でも、寝るだけだよ？」

子どもにいうようにそう口にすれば返事の代わりに腕に力を込められた。そっと抱き返せば頬を摺り寄せられる。ブラックって本当に猫みたいだ。

「私はマシロの一番ですか？」

「え？」

「マシロはみんな大好きだというので……」

ええと、それは詰まり、いった記憶はないけれども、

「もしかして、ブラック、寂しかったの？」

私の問い掛けにブラックはようやく顔を上げて、きょとんとした視線を投げてくる。寂しいとは何ぞや？ とでもいいかげだ。そ、そんな顔されたら、もう、

「ぷっ」

私は我慢出来なくなって噴出した。

自由になる両手でブラックの頭の耳をくにくにと触りながら、そっかそっかと一人で納得。益々頬が緩む。それに不満そうなブラックがたまらなく愛しい。

「みんな好きだけど、ブラックは同じ土俵じゃないでしょう」

「どひょう？」

「そう、好きの基準が違いすぎるよ。比べるほうがどうかしてる」

本当、どうかしてるよ。と重ねて笑う。ん？ あ、頭痛のほうも取れた気がする。頭を動かしても笑っても追いかけてくる痛みがなくなった。

「ブラックに対する好きはブラックに対してだけだよ。一番も二番もないよ。だって、ブラックしか居ないんだもん」

耳を触って遊んでいた手を解いて、そっとブラックの頬を包み込む。綺麗な肌。綺麗な目、綺麗な鼻……綺麗な唇、一つ一つ丁寧に、こうしてその全てに触れることが出来るのはきつと私だけだと優越感に浸る。

ブラックだって同じような優越感を持ってくれないのに、いや、寧ろ持ってると思ってた。

再び首に腕を絡めて引き寄せれば、素直に降りてきてキスをくれる。こんなに近い距離に他は入れない。いくら、私でも、きつと多分……？

「マシロ？」

私の頭に浮かんだ疑問符に気がついたのか、ブラックの瞳が不安そうに揺れる。可愛い。こんな巨大な猫見て可愛いと思う時点でアウトだと、どうして気がつかないのだろう？ 私はとっくに終わってる。

脳内麻薬に犯されてる。

「自分ではない別の人を一体どこまで好きになれるんだろうなーと

思って……」

「なんだか、難しい話ですね？」

「そうでもないよ。今実験中だから」

え？ と問い返しそうになったブラックをもう一度引き寄せて、
にこりと微笑む。

「答えはブラックが持ってるから」

今度は深く口付ける。

そして私は、繰り返される口付けと身体を撫でる心地良い大きな
手に

とりあえず、お酒は自粛することを誓った

……

(3) (後書き)

※ 拍手コメントよりリクエストいただいたものになります。

今度は是非酔っ払ったマシロをとのことだったので、こんな感じになりました。本当は脱ぐ癖・キス魔とかでも良いかと思ったのですが、命がけの話になりそうだったのでこっちに。笑。無機物にでもなんにでも手当たり次第話しかける人になってもらいました。(カナイ↑マシロビジョンで無機物判定w)

メルマガ先行配信させていただいていましたが、拍手コメントでいただきましたので、早めにこちらにもアップさせていただきました。年内更新はこれで最後となります。また来年も種シリーズ続きますので是非よろしくお願いいたします。

それでは皆さまよいお年を…… —

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3387/>

白蒼月紅譚～二つ月のある世界（種シリーズ?）

2011年10月5日22時23分発行